
2つ目の異世界

ヤマトメリベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つ目の異世界

【Nコード】

N1603U

【作者名】

ヤマトメリベ

【あらすじ】

一つのく召喚されし勇者の物語は、悲劇と喪失の内に終わりを告げた。

しかし、勇者であった少年は、再び新たな大地へと召喚される。

新たな世界、新たな出会い、そして新しい目的。少年は、新たな世界で幸せになれるのか……？

安心？の主人公最強、ハーレム系（予定）、されどヘタレる主人公が苦手な方はご容赦下さい。

プロローグ 一つの終わり

魔王城最上階、玉座の間

「はあ、はあ、はあ……ここまで、だな。魔王……」

普段ならば豪華な玉座と赤い絨毯に彩られ、静謐な雰囲気を漂わせるその部屋も今は夥しい血と肉片に塗りつぶされ、むせ返るような空気が充満している。

そんな中、剣で胸を貫かれ床に縫い付けられた魔王を踏みつけ、息も絶え絶えの勇者が語りかけた。

「流石の…、お前も……もう、動けないようだな……」

床に縫い付けられた巨大な魔王には、最早胴体と頭しか残って居ない。

かつて威厳に溢れていた6枚の翼も、数多の人間を打ち砕いた腕も、両足も、一瞬で人体が融解するような毒の棘を持った尾も、全てが切り落とされ芋虫のようになった無残な姿を晒している。

『…おのれ…勇者、め』

「はあ、はあ、…俺は…帰るんだ」

『帰……る……?』

魔王が血を吐き、むせる。

『フハ…！ハハハツ…！、貴様に、帰る、場所が…有るの…か!』

魔王が嘲笑する。肺の辺りを完全に貫いて居るので空気は抜け、血で喉が詰まっている筈なのだが、声を出している。

最早体もロクに動かないというのに、恐ろしい生命力だ。

「有るんだよ…もう俺にはそこしかないんだ、ティーナも、フィオナも、皆、皆！ここでの居場所は…お前が奪った!!」

勇者が叫ぶ、それは魔王軍によって奪われた勇者にとってのとても大切な、大切な人の名。

『だから…?もう、何も無いのに……来たと?これだけ、殺しつくして…復讐で…ないと?』

「そつだ、帰るんだ…だからお前の<魔導心臓>はいただく!!」

噛み付いた魔王の頭を力任せに引き剥がす。ボロボロと崩れ行く魔王の体から、その衝撃で首が千切れ、転がる。

転がった魔王の頭が崩れきる直前、一瞬だけ見えたその顔には何故か驚愕の色が浮かんでいた。

「何を……何をしたんだ！」

勇者の体が魔王の<魔導心臓>に吸い込まれていく。

「魔王

……!!!」

魔王の体が崩れ消え去ったと同時に、飛び散っていた魔王の残骸も、勇者も、玉座の間から消えた。

夥しい血痕も消え、ボロボロに破壊の限りを尽くされた部屋と、床に突き立った勇者の剣だけがそこに残されていた………

() フフフ…<次元落とし>とは、な。最期まで愚かな奴じや
ったのう…魔王よ)

() 貴様の自殺に付き合う気は無いので、妾は勇者と行かせ
て貰おう…フフフ)

何処とも知れぬ暗闇へと落ちて行く中、勇者の耳に誰かの独白が聞
こえた気がした。

プロローグ 一つの終わり（後書き）

初投稿になります。今までは一読者でしたが沢山の方の作品を読んでいて触発されてしまいました。

未熟者故の拙い所は多々ございますでしょうが、楽しんでいただければ幸いです。

1 - 1 < 召喚の儀式 >

静寂の中、ちゃぶり、と水音が響く

… ついに、この日が来た。

私は今、全身をく清めの泉>に満たされた聖水で清めている。

… チャンスは一度、失敗は許されない

これから、私はく召喚魔術>を行う。

この日の為に準備をしてきた。

まず決行日。予定より3年も早い。さらに私の誕生日である今日を選んだ。

今日の夜には王城で私の誕生パーティーが行われる。そしてその会にこの神殿の人達を呼んだ。

言い訳には「3年後のく召喚魔術>について今から色々話を聞きたい。」とっておいた。

その結果、位の高い神官達はこぞって出払い、神殿に残って居たのは下位の神官や下働きの者ばかり。

滑稽だった。どうせ誕生日パーティーと言った所で私は遠巻きに挨

撈をするだけ。

実際に参加していても、護衛がだれも近づけさせてくれなかったらう。

だがそのおかげでさしたる抵抗も無く全員を一所に呼び集め、催眠効果のある香であっさりと昏倒させる事に成功した。

だから今、このく召喚の神殿くはほぼ無人。と言って良い。

さらに思考を進める。

く召喚魔術くの為に必要な神殿の7つのく神聖魔晶石くに、必要最低限の魔力が溜まっていることは2年も前に承知している。

私の魔力不足を補うため、お爺様が用意してくださったくマナ結晶くは7つ。これは、過剰…とも言える量だ。

魔力面に対しては万全、と言えるだろう。お爺様に改めて感謝する。

召喚後の対策も用意してある。

召喚に成功しても言葉が通じないらしいので、会話用の魔道具を用意してある。

そして、召喚後2人で叔母の家族の治めるアーリントンまで逃げる為に、馬車を用意している。匣用もだ。

その馬車で騒ぎになる前に近くの街へと入り、後はワイバーンで空を行けば10日とかからずにたどり着けるだろう。

同伴した護衛騎士はわずから5人。家柄は決して良くは無いが、お義姉様の見出した確かな実力と信の置ける者達だ。

アーリントンまで命を賭して私達を送り届けてくれるだろう。

……後は、私次第だ。

ざばり、と清めの泉を出る、体を拭く必要は無い。

用意しておいた儀式用の薄絹を纏う。

殆ど1枚の布生地に、頭を通す為の穴が開いていて、脇と腰の4箇所、ヒモを縛るだけの簡易な衣装。

全体に召喚魔方陣の中心鍵になるための魔法系が丁寧に縫いこまれているが、

水に濡れて肌に張り付いたそれは完全に透けており、少し…いやかなり恥ずかしい。

それでもこれが召喚の儀式での最高の正装。

成功率を上げる最高の衣装。

ヒタ、ヒタ、と水を滴らせながら儀式の間へと向かう。

今日<召喚魔術>を行う事は、殆ど誰にも告げていない。お姉様にも、叔母様にもだ。

知っているのはここに居る護衛の5人だけ。今王都で私の身代わりをしているだろう影役のルーシアですら知らない。

「お忍びで1週間程出かけたの、お願い。」と言いくるめ王都を飛び出した。帰るまで7日と言っており。つまり後4日。騒ぎにはまだ、ならないはずだ。

そこまで徹底してやった。だから、だしぬけるはずだ。いや、だしぬいたはずだ。

今更こんな所で、邪魔をされる訳にはいかない。

儀式の間の扉の前に2人の護衛騎士が居る、清めを終えた私が扉に触れる訳にはいかない。

だから何も言わずとも彼らは扉を開き、私が入ると閉めてくれた。

儀式の間を見渡す。高い天井、丸い円形の部屋。今は正午を過ぎた程度の時間のはず。室内は差し込む陽光でかなり明るい。

さらに部屋の端ににぐるりと円形配置された7つの<神聖魔晶石>も、薄ぼんやりと光を放って部屋の明るさを増すのに一役買っている。

視線を正面に戻す。

中央には部屋の大半の面積を占める足首程度の浅い円形のプール。

今満たされているのは魔法で作られた水、<魔法水>だ。

足首程度の<魔法水>で満たされた泉の中央へ向かい、用意した<マナ結晶>を周囲に配置する。

慎重に配置を終え、中央で仰向けに寝転び、祈りをささげるように手を胸の上で組み、瞳を閉じる

私は鍵になる。世界の壁の扉を開け、<召喚魔術>を発動するのだ。

静寂が降りる、何の音もしない。

意識を広げ、魔力を解き放ち魔方陣を描く。途中配置した7つの<マナ結晶>を補助とし、儀式の間に満たされた<魔法水>の隅々に意識を通す。

魔方陣の形は完全に記憶している。この段階ではまだ方に一つの矢

敗すら有り得ない。

魔方阵が出来上がり光を放つ。さらに7つの<神聖魔晶石>が光を強め、煌き出す。

「 Zeow ie poru Ttim - se , TttaE
oad'unmitffetE esnein Oor da
na Maui 「mch」 teeulent MintT
」

まるで歌を歌うように唱える。

何年も何年も繰り返し記憶した呪文。

(開け扉よ。異界の門よ。時は、魔法は、満ちている。さあ、今こそ開け、時空の門よ)

呪文の意味を思考する。言葉として出ているのは専用の魔法言語だが、何度も何度も繰り返し学んだので意味もきちんと覚えている。

「 Thild f Ce monde de pouvoir
t nser
」

(この世界の、力を、譲りましょう)

「 Thild we oue mousVA , eneiilo
」

e P s e e d
r

(この世界の、一部を差し出しましょう)

7つの<神聖魔晶石>から放たれた7つの光が交錯し、儀式の間の
中空に真つ暗な扉が開く。その見た目は扉と言うよりは、穴と呼ん
で良い気がする。

r Th i l d a e l d y P r . . U n n e e s s e P
o u r u a o i r . . t v e
r

(この世界には、もう、力は、必要無いのです)

r T t i l d a n f u r r A c c m o n u t . . H a r
e a y . . Y o a y N o e . . .
r

(この世界には、もう、これ以上、無くて良いのです)

開いた扉に恐ろしい勢いでマナが吸い込まれていくのを感じる。こ
の二十余年でこの大陸に溜まった余剰マナが吸い出されていく。

物凄い速度だが、その量も物凄い。なかなか終わらない。この段階
が終わらないと、次の段階には行けない。

歴代の巫女の2/3程度しかない私の魔力が、減っていく。

「 Bearce iq' ils A eemak 」

（ だから、お願い ）

「 M moy . . 」 daaar 「 ineua ofe ols
ey oe innez - let 」

（ だから、代わりに、一つだけ、私に、与えて下さい ）

呪文が進み、ついにマナの奔流が緩む。ここだ。祈るように組んでいた両手を開き空中の門に向かって伸ばす。

7つのマナ結晶の補助を受け、私の両腕から魔力で出来た光の腕が伸び、扉に向かって伸びる。

「 L rsonners iI dfare 」

（ 私の、為の、ヒトを ）

光の腕が扉を抜けて進む、この扉が維持出来ている間に掴まないといけない。

その感覚は完全に未知、カンに頼って必死に手を伸ばして探る。

………何処に、居るの？

焦るな、私。必ず見つかると聞いている。

「 I a t t t o a a c h e n d 」

（ 祈りよ、届いて ）

呪文が完成する。私の魔力も限界に近い、あと少し維持するのが限界だ。

……やはり私の魔力では足りなかった？間に合わないの？

そう思い、心が弱気な方向へ流れかけた瞬間だった。私の周囲の時間が、停止した。

停止した時間の中、光の腕だけがすごい勢いで扉の向こうへと進んでいく。

今までの私の意志で探るような感じではない。何かを目指すかのように、真っ直ぐ。ひたすら伸びていく。

そして

ついに、腕が何かに触れた。

時間が、再び動き出す。

激しく室内が輝き、扉が消えて無くなる。〈神聖魔晶石〉が色を失い、魔方阵も霧散しく、召喚魔術〉が終わりを告げる。

ばっしやぁん、と

何か、突き出された私の両手の間に抱きとめられるようにして落ちた。

思わず、触れる。柔らかく、暖かい温もりを感じる。そして分かる。これは人だ。

ずっと閉じていた目を開く。私の目に映ったのは真っ黒の髪とこちらを見つめる真っ黒の瞳。〈召喚されし者〉についての文献どおりの外見。

少年…いや青年？歳は私とあまり変わらないように見える。17、8と言ったところだろうか？

…よかった

歓喜と、安堵の気持ち降る。やった。〈召喚魔術〉は成功したんだ。

だが、それと同時に自分の状態を再確認してしまう。

彼に組み敷かれて、薄絹もはだけてしまっているような…。

薄い貫頭衣のすそが捲れてしまつて、太もものあたりが空気に触れてスーッスーするような……

つい気になつて視線を落とす。

そして気づき、目撃する。

彼は全裸だつた

初めて、見る、男性の、アレが

頬が、いや、最早顔全体が物凄い勢いで赤くなつていくのを感じる。

「ッッ！！！」

私は咄嗟に声にならない悲鳴を上げ、彼に全力で平手打ちをした。

1・1＜召喚の儀式＞（後書き）

兎にも角にも1話目となります。ある程度書き溜めていたのでキリが良い所ぐらいまでは投稿の練習で出してみたいと思います。

1・2<召喚されて>

ついに召喚魔法に乗った！

と思った瞬間激しい光で目が眩み、一瞬で世界が切り替わっていた。

ばっしゃぁんと水音を立てて着地、いや着水する。

水に落ちた？ 湖？ 川？ 少し焦る。いや、大丈夫だ。浅い。手も足も底についていた。

それよりも、柔らかくて暖かい何かの上に乗っている…？

先ほどの光に眩み、閉じていた目を開くと…俺は少女を組み敷いていた。

…16、7ぐらいだろうか？

浅い水面に漂う、かなりの長さの黒髪、そして黄色人種っぽい色の肌。

一瞬日本人か？ と考える。だが、その考えは早々に否定する。衣装が独特だ。こんな服を着ている人は今まで見た事が無い。

それは白を基調とし、複雑で不思議な模様が縫いこまれているが、

いたって簡素な貫頭衣。

ただ、水に濡れて肌に張り付き、透けてしまっていて、色々マズい所も見えてしまっているのだが…

…ラッキーと思う気持ちは正直有るのだが、ちょっと困る。

目のやり場に困り、とりあえず瞳を閉じたままの顔をしげしげ見つめる。

瞳は開かれておらず、眠るように閉じられている。

…眠っている？

それにしても、召喚魔法の鍵が美少女なのは基本なのだろうか？

かつて自分を召喚した少女の姿が脳裏に浮かぶ。

今だ色あせず、はっきりと思い出せるその姿を、目の前の少女と比べてしまう。

目の前の少女は脳裏に浮かんだ活発な少女とは全然違うタイプの雰囲気を感じる。

なんというか、おしとやかなお嬢様タイプの見た目。だが、やはり美少女であることは確か。

と、不躰な思考をしていたら彼女の目がゆっくりと開かれた。

少し、以外だった。黒髪で日本人然とした顔立ちと肌色だったのに、そこにあっただのはやや青みの強い鮮やかなスミレ色の瞳。

と、しげしげと見つめていたせいで、ばつちりぶつかっていた彼女の視線が戸惑うように揺れはじめ、下へと下がり、ぼふつと言った感じに顔が真っ赤に染まった。

なんだ？ と釣られて俺の視線も下がって・・・気づいた。

俺、全裸だ。

「

ツツ!!!!」

彼女の全力と思われる平手打ちを食らい、俺は彼女の上からもんぞりうって転がり落ちた。

「イテテテ……」

叩かれた頬を何となくさすりつつ座る。何故か知らないが全裸なので股間を挟んで隠せる正座だ。俺に露出趣味は無いのだ。

先ほど組み強いてしまっていた少女がハツっとして起き上がり、こちらを気遣うような顔をして語りかけてくる。

「……………」
「……………」
「……………」

……これは困った。何を言っているのか分からない。

どうしたものか？ と首を捻っていると、バン！ と勢い良く扉が開き、中世の鎧のような服を着た男？ が2人突入してくる。

突入した2人は凄い勢いで彼女と俺の間に立ちふさがり、こちらに槍を突き付けて来た。

「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

いきなり槍とは物騒な…うん、こっちも何を言ってるのか分からない。

「えっと、すみません。言葉、分かりません。どうしましょう?」

とりあえず語りかけつつ敵意は無い事をアピールしてみる。

いわゆる一つのホールドアップ? というやつだ。

怪訝な顔をされた。やはり相手も言葉は分からないようだ。

「

」

彼女が騎士らしき二人に何かを言い、槍が下げられる。

騎士? が何かを彼女に手渡した。それを首に付ける。

…首飾り…か?

「…ん、あの、始めまして。これで言葉は通じると思っているのですが、どうでしょう?」

まさか、だった。少女が日本語で語りかけて来たのだ。

翻訳機なのか！？ あの首飾りは！？

魔法の力？ この世界ではこんなものが完成しているのか！？

驚き、感心する。

「えと、その…聞こえて、ます…よね？ 故障…？」

しまった、つい驚いて言葉が出なくなっていた。

「あ、す！ すみません！ 聞こえてます、聞こえてます！」

慌てて返事をする。

「良かった、ちゃんと起動してるんですね<意言の首輪>」

「<意言の首輪>…すごいです、翻訳機なんて初めて見ましたよ！」

「そ、そうなのですか？ それで、えっと、先ほどはごめんなさい…まさかそんな姿で召還されるなんて知りませんでしたので、驚いてしまつてつい…ご無事、でしょうか…？」

「あ、いえ、はい！ 大丈夫です！ その…俺の方こそ、なんかこ

んなカッコで抱きついてしまっ…」

お互い赤面して顔を逸らす。気まずい。

「ととと、とりあえずですね。自己紹介を。俺は『蒼鈴 勇斗』と
いいいます。」

とりあえず意思疎通が出切るならば最初は何よりも基本、自己紹介
だ。

「『アオスズ ユウト』様、『ユート』様、ですね。私は『ソフィ
ーリア』シルヴァ『シュトルーゼ』ベルム』と申します。『ソフィ
ー』とお呼び下さい。」

姓名を間違えなかった事に一瞬違和感を覚える。

だが間違っ…て無いなら構わないか。そんな事より名前が長い…一回
で覚えられそうに無い。

そして、今はそんな事よりも緊急を有する事がある。

「はい。ソフィーさんですね。それで、えっとその、」

「はい！何でしょうか？」

「その、何か着る物って有りませんかね？」

「……………!?」

ソフィーの視線がちらりと俺の隠された股間に向き、硬直する。思
い出してしまったのだろうか？ そのまま一気に真っ赤に茹で上が
った。

おおっ、と思う。何故ならそれは今まで親しくなった女性達にはな
かった、新鮮な反応だったから。

なんだろう、この娘。凄く可愛いかもしれない。

1・2<召喚されて>(後書き)

2話目。やっと主人公登場。チート主人公にチート武器を持たせたら手に負えないので持込は無し、さらにMPも切れかけでの登場です。

9/5「、！、？周りを修正しました。

1 - 3 < 状況確認 >

「で、で、出たところの部屋に用意されているはずですので!」と、ソフィーに促され、儀式の間から出て少し進んだ部屋に向かう。

「どうぞ、こちらにお着替えください」

途中泉のある部屋から出たところに居たさっきの2人とは別の騎士に衣服を渡された。

さっきの二人はソフィーと一緒に行ってしまった。やはりあの格好は儀式用か何かで、あちらも着替えるのだろう。

幾らなんでもあの格好が普段着という事は無いと信じたい。あれが普段着ならとんだ露出大国に召喚されてしまった事になる。

若干不安を感じながら、とりあえず渡された衣服を確認する。簡易な下着とシャツとズボン、ベルト、それと靴だ。

うむ。透けてもいなければあまり高級感も無い。なんだかここ数年慣れ親しんだ中世風味の地味な普段着で安心した。

剣は無いので腰まわりが寂しいだろうが、この際贅沢は言わない。パパッと着替えてしまおう。

そして着替えの最中にふと思う。

(あれ？兵士の人の言葉も普通に理解できてたな？凄いな翻訳首輪、
範囲効果も有るのか？)

『何を言っておる。妾が<意乗の言>を使ったのじゃ』

頭の中に相槌を打つように少女の声が響く。それはこの5年聞き続
けた相棒の声。

(マール！居たのか！良かった、姿が見えなかったから心配したよ。
って言うか何？<意乗の言>って。初めて聞くよ？)

『簡単に言つとじやの、「声に乗った魔法的翻訳が成された意思を
解読する事によって、大抵の種族と円滑な会話が出来るようにする
術」じゃ。魔族の連中も良く使ってたじゃろ？』

(…あいつらと普通に会話できてたのは全部その<意乗の言>のお
かげだったのか…？ハハハそんなの全然知らなかったよ！)

『フフフ…また一つ賢くなれたの。』

説明されても良く分からなかったがニュアンスは伝わった。あまり
役に立つ気がしない知識だが。

そんなことよりも、だ。

(ところでマール、お前体は?)

『フフ…なんじゃ?妾の肌が恋しい。とでも言うのかえ?』

(そ、そういう訳じゃないっ)

早々にからかわれた。心配したのに。

『くく、冗談、じゃ。なに、妾の義体ならさっきの召喚の時に吹き飛んでつてもうたわ。おんしの装備も恐らく同じじゃろつて。最も本体はもうおんしの<魔導心臓>に直結しておるからな。召喚ごときで消し飛びはせん。』

(なるほど、俺の体だけを召喚した訳か、だから俺全裸だったんだな)

前召喚された時はちゃんと服も着ていたと言うのに、今回は全裸だった疑問が解決した。

これまた大したことでもなかったが…

『ともあれ魔力が回復せんことには妾は顕現できぬ。暫く無理じゃろつ。まあここは狭間ほどマナが枯渇しておらぬようじゃし、簡易体でなら然程かからず実体化できるじゃろつて』

(そっか、良かったよ)

『なんじゃ？妾が消し飛んでおったら、とでも心配したかえ？』

(まあね)

『フフ…やはりおんしは愛いのう。心配せずともよい。じゃがその気持ちは嬉しい。そうじゃの…』

マールが何かを言おうとして、間を置く。

こういうときは大抵ロクな事を言わない…気がする。

『よし。顕現したならば妾の肢体をおんしの好きな用に思う存分情欲の赴くまま貪ってくれて良いぞ。しばらくお預けじゃしの？折角じゃ、妾も喜んで受け入れようぞ』

(……)

警戒はした。そしてからかわれているのも分かっているのについて色々想像してしまい、頬が上気する。

『おんしは何時までたってもウブじゃのう、そこが愛いのじゃが…
フフ』

(ぐぬぬぬぬ)

マールにやり込められて唸っていたら、ボタン！と勢い良く扉が開きソフィーが凄い勢いで飛び込んできた。

着替えを済ませたようで、今はさっきのスケスケの服ではなくあまり装飾の無い水色の簡素な長袖ワンピースのドレス…？

とりあえず上下は同じ色で同じ意匠。だが服の種類は俺には付かない。

しかし決して地味ではない。凝った裁縫が見て取れる。…結構な高級品に見える。

さらに視点を下げる。…靴は普通っぽく見える。そこだけ無骨な印象で違和感を感じる。はて？

「す、す、済みません！ユート様に＜意言の首輪＞を渡し忘れていました！」

なるほど、それで慌てて飛び込んで来たのか。

「その、彼らの言葉が分からなくて…困りましたよね？」

ソフィーに語りかけられてハツとする。いけない。じろじろ見るものではない。

「あー、実はね…」

八八八八

まさかあれだけ『凄い』と褒めて置きながら要らなくなったと説明せねばならないとは…

1・3 <状況確認> (後書き)

プロローグでちらっとだけ出た声の主も登場。そしてサービス衣装も終了です。

1・4<ソフィーはどっ、召喚目的は？>

<意乗の言>という術で会話が出来るようになったので必要の無い事を伝える。

「…そうでしたか。いや、でも良かったです。不便が無いようでしたら。文献では<召喚されし者>は総じて言葉が通じなくて、現状も分ならず混乱する。とあったものでして…」

ところで<意乗の言>って…なんでしょう？とソフィーがちょっと首かしげながら話す。

(おお…可愛らしい仕草がさまになってる…)

『うむ。』

(お、マールもそう思う？)

『妾は愛いモノには目が無いからの』

(…初めて聞くな)

『うむ。初めて話すの』

(…)

「えと、その、どうかしました？」

不安そうな顔をしてソフィーが語りかけてくる。

しまったマールと頭の中で会話していたので返事もせずダンマリになっっていた！

「え？あ、ご、ゴメン考え事をしてて、さ」

「考え事ですか？」

「うん、ココは何処？とか何で召還されたんだろ？とか、さ？」

とっさに思いついたことを口にし、言い訳をする。…一応嘘でもないし、いいよね、うん。

「あ、そうですね…気になりますよね、私が説明できる限りは説明しますね。」

「よろしく。」

「えーっとそうですね。まずここはですね、『ベルム王国のバルディ

力神殿、召喚の塔』になります…。と言っても分かりませんよね…
」？」

「…そうだねハハハ」

見事に全く分からない。前の世界でも聞いた覚えの無い国名だ。

しゅん、とうなだれがっかりするソフィー

(やばいな、これ。思わず「大丈夫だよ！」って抱き締めたくなる。
)

『うむ…妾も抱き締めたい、頬をすりすりしたい。』

(…マール、気が合うね)

珍しい事もあったもんだ。

「と、とりあえずそういうところは追々でいいや。それじゃもう一
つ方の、俺、何で召喚されたの？」

「そっそれは……」

一瞬目を見開いて、おろおろと目を逸らし困惑する。百面相だ。ホ
ント可愛い

「<勇者召喚>かな？魔王に困ってるのか・・・？」

「い、いえ…そのー」

「違うの？なら一体どういつく召喚魔法>だったの？」

「・・・」

ソフィーが俯く、どうしたんだろう？何か俯いた顔がどんどん赤く
なってるような・・・

「……………て、貰うためです。」

すごい小声でソフィーが呟く

「ごめん…小声過ぎて聞こえなかった…」

「…」

ソフィーが俯いて真っ赤になった顔を勢い良く上げて、「こちらをキ
ッと見つめ叩き付けるように言っ。

「私の、夫に、なつて貰うためです!!」

…えつと?今なんと言いましたか?夫?

1・4<1111はど1111召喚目的は?>(後書き)

ついに明かされる召喚された理由。ベタベタですが、それがいい。
と、筆者は思っています。

1・5〈召喚魔法と補足と〉

曰く、

この世界は記録されているおおよそ2000年程前からマナの濃度が上がり続け、飽和したマナの副作用で獣や人がモンスター化していったらしい。

そしてこのままでは不味い、とおおよそ300年前全ての人々が種族を超えて協力、研究し、ついにはこの国の初代王妃が〈異界の扉〉を開き、マナ濃度を下げる事に成功した。

だが、今でもおおよそ20〜30年周期で〈召喚魔術〉を使わないと、マナ濃度が危険域に達してしまうらしく、定期的に〈異界の扉〉を開き、マナを抜かなくてはならないらしい。

実際、マナを抜くための儀式魔法、〈召喚魔術〉を使用するこの大陸以外はマナ濃度がそれ程下がらず、今や完全にモンスターに支配されており、人が住める状態では無いそうだ。

さらに召喚魔法の鍵となる者はそれこそ物凄い魔力が必要で、その魔力量の人物を毎回用意するには、術者自身が開いた扉を使い、異世界人で潜在魔力の高い異性を捕まえて娶るのが確実なのでそうしてきたらしい。

そうして国家の管理で定期的に〈召喚魔術〉を行う事が可能になったここ200年程、この大陸のモンスターは比較的マナ濃度の濃いダンジョンや森などに発生する程度に収まり、随分平和になっているそうなの。

「すっごい魔法で消費すればいいんじゃないの？」

なんとなく思いついたことを聞いてみる

「そうしましてもマナ自体は大気に還元するだけですから、結局総量は減りませんので…」

「…あーそうか意味無いか」

『ホレあの時魔王がっこうたく狭間落としも同じ原理じゃぞ？』

(…そっぴやそっぴやだっか)

狭間に居た頃マールに説明された事を思い出す。

確かに、ヤツはあんな大それた魔法が使える余力は無かった。

戦闘で撒き散らし充滿していた俺とヤツの還元マナを再利用し次元の穴を空けたのだ。

まあそんな事は今更だ。今はそれよりも…

「大体の経緯は分かったよ。でもそれにしても今会ったばかりの相手と…その、夫婦になるって?…性急過ぎない?」

「私にとっては生まれた時からそう決まっていたので…それに今はさらに強くそう成りたい、と感じました。」

「それはまた、なんで…」

「えと、その…実は召還したその場でそのまま襲われてしまって契るく召喚の姫>って凄く多かったです。その…あんな格好ですから。勿論、私だって覚悟はして来ましたが、やっぱり怖かったです…初めてですし…」

モジモジしながら語る。その仕草、色々クるものがあるんだが…

「そ、その点ユート様は恥ずかしそうに私から目を逸らして、襲おうという素振りすらごさいませんでした。」

『その前にビンタではじき飛ばされておったしのう』

(…)

「ですからその、ああこの人は凄く優しいんだ、って…紳士的なんだな。って。…こうして話していても物腰もやわらかいですし、何だか凄く安心するんです。だから、えっと…うつつ…」

と、とにかくこう、心配で、怖かったんです。どんな人が現れるん

だろう、って。そしたら、その…予想よりずっと素敵で…

あうっつ…上手く、言えないんですけど、なんだかこう。胸がドキドキしてふわっとした気分になるんです！もっとユート様の事を知りたい。もっと私を知って欲しいって思うんです！」

なんだか凄く熱意を込めて次々と語るソフィー。

しかしますます俺の頭は混乱する。考えが纏まらない。

一目ぼれとでも言いたいのだろうか？あるのか？そんなこと？

この娘大丈夫？思い込み激しすぎじゃない？

いや、嬉しいんだけど、なんだか裏がありそうで不安な気が…

『プツクク…お、おんしのウブさが役に立つとはのっ』

(……つるさい！)

「やっぱり私ではダメですか…？それともやっぱり元の世界にお帰りにならりたい…ですか？」

だんまりになった俺を見つめる顔が一転して悲しそうな表情に変わる。

それにしても、元の世界…か。

もう随分と過去に感じる元の世界を思い浮かべる。

主観では既に以前に召喚されてから8年経っている。

時間が狂った狭間に居たせいで実際にはもう何年経ってるかも分からない。

(…今更、だよな。)

『…』

少し昔を思い出し浸ってしまった。とりあえずフォローしなくては。

「ああいや、そうじゃなくて、それは良いんだ。」

「色々あってね、今戻ったってもうダメなんだ…。だからむしろ今は安心して骨を埋められる所を求めている。それに君の事も…その、ダメ、なんて事は無いけど、色々まだ何も分からないし、決めかねるというか?。」

「でしたら！やはり私と一緒にしましょう、これから二人で、色々お互いの事も知って行けばいいではないですか。」

さっきまでの悲しそうな顔が一点ぱあつと顔全体に期待の色を浮か

べこちらを伺う。

「えっと…実はその、先約があ」妾は構わぬぞ？この娘も愛い。おんしと纏めて愛してやるまでよ」………あー………一つ確認してから決めて欲しい事があるんだ。それを見てからもう一度考えてもらっていいかな？」

「…？わかりました。大丈夫です。そうですね…急過ぎましたよね。はい。急ぎはしません。でもきつとこの気持ちは揺らぎはしませんので！」

と、ニツコリ笑って宣言する。本当に表情豊かな娘だ…

『妾のカンではこの娘は妾も受け入れると思うがな。おんしもまんざらでも無かるうにあーだこーだと言いついて、往生際がわるいのう。』

(……つるぞいよー…)

正直凶星だったことは、言うまでも無いだろう。

1・5〈召喚魔法と補足と〉(後書き)

予約掲載試してみました。

やっぱり長々とした説明文は書くのも見るのも辛いですね。なるべく、登場人物の口から話して行くようにしたいです。

1 - 6 <裏切り者と強襲と>

「ソフィーリア様、そろそろ」

扉の外で待機していた護衛の騎士らしい人が声をかけてきた。

「！そうですね、もう急いだ方が良いでしょうね」

(…急ぐ?)

「ユート様、実は諸事情がありまして、急いでここから離れたいのです。」

『ふむ、確かに殺気立った連中がこちらに向かってきておるな』

(なんで言わないんだ)

『目の前の連中も殺気立っておるしのお…?まあ麗しの姫君が何処の馬とも知れぬ男に寝とられそうになっておるのを、我慢して見守っておるしか出来ぬのなら、殺気が溢れるぐらい致し方あるまい。と思つての?』

(…馬の骨ですらなく馬扱いとは)

『なんじゃ?寝めておるのじゃぞ?妾は大好きじゃぞ、おんしの馬並みの所がの。』

(・・・)

わざとだとしても、その表現はコメントに困る…

「偽装の馬車は既に走らせております。こちらに」

そうこうしている間に護衛騎士が5人ともやってくる。

部屋を出、俺とソフィーを中心に前に2人、左右に2人、後ろに1人の配置で廊下を進む。

『なんともキナ臭い感じがするのう…』

(同感、偽装馬車まで用意して早急に退散とはね。それにこの神殿人の気配を感じ無いし。)

『あの娘の話に嘘は無さそうに見えたがのう…あれが演技じゃったら妾、ちよつとシヨックじゃ』

(…それは無いと信じたいけど確かに、ね)

7人で足早に長い廊下を進む。

途中で誰も出会わない。そしてやはり人の気配そのものが無い。

こんなに豪華な建物なのに、だ。ますますキナ臭い感じつつ先導されるままに進む。

廊下をつきあたりまで進み、そこにあった大きな扉を開けて屋外へ出た所で事は起こった。

唐突に、前を警戒していた護衛騎士2人が声もなく崩れ落ちた。

左右で警戒していたはずの護衛騎士2人が、手に持った槍で後ろから貫いていた。

位置はわきの下辺りから、刃は水平。恐らく、動脈を切断し肺を貫通。致命傷だ。

「うお…とつと…」

さらにそこへ後ろから突き飛ばされた俺がたたらを踏んで飛び出し、刺された二人にぶつかり突き倒す。

…何だ？何が起きた？何をされた？

状況が飲み込めず、混乱する。

「ラミレス、マック！？あなたたち何を！？」

ソフィーが驚いて叫ぶ、名前は分からないが、槍で突いた二人に言ったのだろつ。

「申し訳ございませんソフィーリア様、これも任務でし……て……」

「おい！何故肝心のヤツを殺していない！？」

「なんだ！？こいつ！？槍が刺さらなかったぞ！？」

どうやら俺も槍で後ろから突かれたらしい、無用心過ぎた。そして理解する。裏切り、か。

何故気づけなかった？襲われる可能性があるのに、護身の武器すら渡されてない時点でおかしいじゃないか。

それにしてもこんな重要な所まで連れてきた護衛が裏切りとは。相
当な信用が有ったはずだろつに。

それも、3人もとは。本当にキナ臭い。

とりあえず状況を整理する。狙ったのは既に事切れた護衛2人と俺
の3人。

護衛を一突きで始末した2人も、さらにソフィーを手をかけようと
する気配が無い。

ソフィーに関しては確保、いや拉致が狙いか？

彼女の立ち位置の面倒さを感じる。政治的な事でも絡んでいるのだろうか？

「クツ！ロバート！兎も角姫を連れて行け！こいつは引き受ける！
ジエイク！やるぞ！」

左右の二人が血の付いた槍を構えて俺に踊りかかり、後ろの一人がソフィーを後ろから横抱きに抱え、馬車に向かって走る。

「きゃっ」

…しまっ

つい余計な思考を巡らせて居たらソフィーが抱えられ連れ攫われた。

『あーこれはマズそうじゃのう。裏切りか？ともかく急いであの娘を救うのじゃ』

(…そうだな！)

マールの言つとおりだ。今はゴチャゴチャ考えている場合じゃない。

意識をただ戦闘モードへと切り替える。目的はソフィーの奪還と安全、ついでに敵の無力化だ！

「大人しく死ね！」「食らえ！」

2本の槍が左右斜め前から同時に突き出される、しかしそれは一気に地に伏せる事で危なげなくかわし、

事切れ倒れた護衛の腰にあった剣を掴み、体ごと大きく横へ移動ししつ抜き放つ。

そのままの動作で、槍を突いた姿勢で背を向けて居る右の男（多分ジエイクという名前だった）の横合いから肩口へと全力で切りつける！

普通に右側で構えた槍は二人以上で並ぶと左側からの攻撃に即応できない。隣の人間の体が邪魔になって槍の動きを阻害してしまうのだ。

その隙を突き、そのまま甲冑ごと剣で切り裂くつもりで全力で振り下ろす…！

パンツ！

と音を立て剣がジエイクに直撃する寸前で砕け散った。

…自壊した！？魔力に耐えられなかったのか！ちよつと魔力を通し

ただけでこのザマ？なんだこの剣は不良品か！？

予想外の事態に、慌ててそのままジーンを突き飛ばし、距離を開ける。

そして事切れ倒れ伏したもう一体の死体の剣を掴み、引き抜く。

勢いそのまま今度は魔力を込めずに、振り向き様先ほどほぼ同じ軌道で切り込む！

バキン！

「ぐっ？この剣ももろい！？」

鎧ごと左肩口から鳩尾付近まで切りつけたものの、切り抜けることが出来ず途中で剣がへし折れてしまった、

くそ、さっきの剣と言い、つい以前使っていた剣のつもりで振ってしまっていた。

仕方なく折れた剣の柄を手放し、まだ立っただままで事切れている、切り付けた相手の腰にある剣の柄を掴む。

そのまま体を蹴り飛ばし、その勢いで引き抜く。

「おのれ、よくもジエイクを！」

そこに左の男が背中目掛けて槍の一撃を放ってくる、読みも何も無い、必中の距離で外さない為のど真ん中狙いだ。

咄嗟に片足を引き半身になったの体移動。体を大きく開き、刃をかわそうとする。

刃先が腹を掠めたが、服が千切れるだけで俺の体は切れはしない。

そのまま体を捻じってやりすごし、柄を掴む。さらに踏みつけ、へし折る！

「ぐおっ」

両手で持った槍を踏み折られたせいで、たたらを踏む護衛騎士。その兜の目の部分の隙間に正面から剣をねじ込む。

バキン！

顔面串刺し、後頭部までしっかり貫通までさせたものの、また剣は根元から折れてしまった。想像以上にもろい。

『鉄剣： 鑄造かのおう？魔法による強化や付加も無く、鉄の質もあまり良くないようじゃな。鋼にすらなっておらぬか？』

(…何を言ってるのか良く分からないけど一人一本じゃ戦闘がままならないぞ！)

『とりあえず後1本をいただいて追うしか無かるって』

(…それもそうだな！)

素早くまだ剣がある先ほど死体になった騎士から剣をいただき、走る。

(……ソフィーを攫った騎士は！)

先ほどの護衛騎士(確かロバートと呼ばれていた)が走って行った先を見ると、

御者らしき男とロバートに二人がかりで馬車に押し込まれそうになっていたソフィーが、

ピンタで御者らしき男を派手に弾き飛ばしていた。

(……あれ、すごい衝撃なんだよな)

『………案外たくましいのう』

1・6＜裏切り者と強襲と＞（後書き）

やっぱり有りものから名前をそのまま借りてしまうのは色々と不味いと思いましたが、モブの人たちの改名を試してみました。

そろそろ主人公のチートっぷりが発揮されます！

1・7<撃退と魔力切れと逃避行>

全身の<強化魔法>を活性化させて走る。100メートルそこそこ程度なんて一瞬だ。

ロバートはソフィーを押し込むのに夢中でまだこちらに気づいて居ない。

「ユート様！」

ソフィーが叫ぶ、そこで初めてロバートが俺の接近に気づく。だがもう遅い。

減速することなく突き進み、振り向く最中のロバートの首元に体ごとぶつかるようにして剣を突き入れる。

バキン！と予想通りとは言えまた剣が根元から折れた。構わない、しっかり首に突き刺さった。致命傷だ。後1人！

ざっと最後の一人の居た方向に視線を回す。だが、その先には誰も居ない。

居ない？さっきソフィーを馬車に詰め込もうとした御者は！？

さらに視線を巡らせる。気配も感じない。何処に…そこまで考えた所で視界の端を何か掠め、それを追って足元を見た。

そこには何か全身をこれでもかと捻じって倒れる御者が居た。

『…少なくとも気絶は確実、じゃろうか？』

(…むしろ、死んでるような)

ビンタ、すげえ

とりあえず軽く揺らすようにケリを入れ、完全に意識が無いのは確認しておく。というかはんのうがない、…御者はもう放置だと決定。

腰の後ろの大振りなナイフはいただいて自分のベルトに刺しておく。

ついでにロバートの剣もつり紐を切って鞘ごといただいておいた。

そうして馬車の前で立ちすくみ、キョロキョロ死体と俺を見回し困惑しているソフィーに話しかける。

「ソフィー、大丈夫!？」

「はい、でも残っていた魔力を使い切ってしまいました…私はもう暫く魔法が使えるそうにありません」

『なるほどの、あのビンタは魔法入りじゃったか。納得の威力じゃ』

マールがからからと笑う。

(…どうりで俺が吹っ飛んだ訳だよ、やっぱり御者さん死んでるんじゃないか？まあこの際それでも構わないのか？)

チラリ、ともう一度見る。…言われてから見ると首が凄く長くなってる、ような……。

いやいや、それよりもだ

「ソフィー、どうする？何かトラブルが起こってるようだけど」

「そう、ですね。まさか彼らが裏切るだなんて……」

声に張りが無い。やはり信じ難い事態だったのだろう。

「やはり急ぎここから離れましょう。計画が知られていた可能性があります…そうなると、後詰の部隊が向かっている可能性が高いですし……」

『そうじゃな、それなりの数の敵意ある者が迫っておる』

ソフィーの懸念を、マールが断定する。

…敵意、か。少なくとも味方では無さそうだ。

「どの方角に行くんだ？」

「方角…ですか？えと、当初の計画通りですとこのまま北東の街道へ向かいます。」

途中旧道を使って隠れながら進み、最寄のアルモスへ逃げ込もうと思えます」

(マール、敵の居ない方角は？)

『全部敵、とするとほぼ真北ぐらいじゃな。特に北東、西、南東の3方向から、集団が向かって来ておる。この速度じゃと一番早い西の集団がおおよそここから2時間ぐらいか？その間を埋めるように少数の人間の気配もしおる。明らかに包囲して来ておるな。ここに無い馬車は集団に向かっておるようじゃし、街道でもあるんじゃないかの。』

(…そうか。)

一人で突破するだけならば、容易いだろう。だが魔力切れのソフィーを連れてというのは難しいと思われる。

しかも俺自身に魔力も武器も殆ど無い今、戦えば力任せに殺すしかなく、それは凄惨な事になる。

確実に凶悪な殺人鬼として名が売れてしまっただろう…正直、それは避けたい。

「ソフィー、街道は何本あるんだ？少なくとも北東、西、南東の3方向。その間も人を配置して何者かが包囲して迫って来ている」

「…！そんな！分かるのですか？距離は…？」

「ああ、分かる。既にかなり近くに来ている。恐らく後2時間ぐらいでたどり着く。」

「そんな…全部の街道をだなんて…それではどうすれば…」

ソフィーが困惑し、戸惑う。

「すべて敵、なのか？味方という可能性は？」

「恐らくありません。王都の兵は今日は皆警備で詰めていますし、姉達に来るならワイバーンに乗って少数で空から来るはずですよ。」

ワイバーン、空から、と言う単語に反応する。ついワクワクしてしまふ。いけない、そんな場合じゃないのに！

でも男の子の性なんだー！と心の中でいい訳をしておく。

思考が脱線した。戻そう

「北方向は行けないのか？街道は無いようだが徒歩でなら……」

「北は目の前にモンスターが生息している大きな森があるので。たとえ万全な状態でも二人でなんてとてもじゃありませんが無理です、危険なのです。あそこは最低でも討伐隊が小隊規模で向かうような所なんです！それに……魔力の切れた私では……やはりとてもじゃありませんが抜けられません。」

「だがどちらに向かってても八方塞がりでは北しか無い。」

「死に行くようなものです！」

「大丈夫、さっきの戦いを見たら？俺は、強い。」

「行こう？ソフィー。命に代えてなんて無謀な事は言わない。俺が守り抜いてみせるから。」

「ユート様……！」

『おーおーおー！カッコつけたのうー！』

マールがちゃかす。

ああそうさ、カッコつけ過ぎた自覚はある。恥ずかしくなるからかわらないで欲しい。

(…やるしかないならやるぞ。)

『フフ…おのこじゃのう。悪くはないぞ、むしろ好ましい程じゃ。よからう！妾も奮発してそのなまくらに魔法をかけようぞ』

(…できるのか?)

『魔力的にかなりギリギリじゃ。魔法を使こうた後は10日程の眠りに入る』

(…分かった。頼む。)

『うむ。頼まれた。おんしこそソフィー嬢を頼むぞ?』

(頼まれた。任せろ。)

「行こう、ソフィー。」

「はい、ユート様」

戦闘時の高揚でちょっと自分に酔った俺は気づいてなかったが、

この時のソフィーの目つきもかなり酔っていた。心酔、といった感じだ……

1・7<撃退と魔力切れと逃避行>(後書き)

∴地図でも描かないとダメな気がしてきました。
方角など後で修正するかもしれませんが。

1・8 < 戦利品の回収と付与魔法 >

時間が無いとはいえ着の身着のままでは逃げられるものも逃げられないのだ。

ということ、俺はさっきからソフィーが乗せられそうになった馬車を調べていた。

時間が無いのでパパッと調べたのだが…何も無い、せめて夜の防寒にかけ布ぐらいと思ったのだが、毛布どころか水や食料すら無い。どうなっている？

幾ら目的が本来の場所では無くこの近くだったのだとしても、何の備えも無い筈が無い。どう考えても水ぐらいはある筈なのに。

しかしやはり何も見つからない。

そのまま行くしかない。

そう判断しソフィーの元へ行く事にした。

「ソフィー、だめだ馬車には何も無い」

馬車から出て声をかける。

ソフィーは御者の体をまさぐっていて、その腰から小型のポーチっぽいモノを外しているところだった。

恐らく小物入れだろうか？そのまま外したポーチを開き、中を見ている。そしておもむろに何かを取り出した。

…鞘付きの大振りなナイフだ。見たところさつき御者からいただいたモノと大差ないサイズ・デザインのナイフをソフィーが持ち出していた。

そんなバカな。

ポーチよりかなり大きいサイズのナイフがその中から出てきたように見えた事に動揺する。

「ソフィー？そのナイフは…」

「はい、鞆の中にありました。他にも食料や水、薬類と…地図、コンパスもこの中のようですね…他にも色々ありますが、目ぼしいものは特に無いようです。」

食料？水？そんな小さなポーチに？

とりあえず思い当たる事は一つしかない。確認してみる。

「それも、魔道具なのかい…？」

「そうですね。そういえばこの鞆は魔道具といえは魔道具ですね。
<特殊領域内包式鞆>?とか言ったような覚えがありますが…普通に使われておりますので、すっかり失念しておりました。」

やはり魔道具のようだ。収納用か？前の世界でも見た事が無い。元の世界なんて論外だ。

<意言の首輪>といいこの世界は魔道具が発展しているのだろうか？

「こちらの方には…よいしょっ」

そんな思考をめぐらせて居たところ、ソフィーが今度は確かロバート？の死体からもポーチ、いや鞆を取り出し中を覗いている。

「あ、こちらの方が毛布や着替えを持って居てくれたようですね。」

…かなり大きなものも入るようだ。無茶苦茶だ。

『なかなか興味深い魔道具じゃのう。便利そうじゃし…一つ欲しい』

のじ』

(…2個有るし後でソフィーに貰お…う……)

マールの声に思い出す。向こうで死んでいる4人も持っているんじゃないか？

俺は慌てて数100メートル程先の死体の元へ走った。

死体を探る。4つポーチ、いや鞆か。を見つけた。内2つが血みどろだが…

とりあえず使い方が分からない、魔道具だし迂闊に弄らない方がいいだろう。

軽く表面の血を拭う。「中にたっぷり入り込んで居て開けたらどばあとなかったらどうしよう」と嫌な想像が浮かんだが頭を振り、振り払う。

ついでに折れたもの以外の槍3本も拾っておいた。

毛布や着替えが入るんだ。この槍も入るかもしれない。

とりあえずソフィーの所へ持っていこう。

ソフィーの元へ戻り鞆を渡す。

ソフィーは空馬車を走らせて来たようだ。手際が良い。

槍も問題なくポーチに収まる。ついでにロボットの持っていたのも入れ、槍は4本になった。

「とりあえず捨つものは捨つた。後は…」

『妾の出番じゃな。』

そつだ、この剣に魔法をかけるんだつた。

剣を鞘から取り出す。折れ散つた他の4本同様、装飾がある訳でもない。まるで支給品ですと言わんばかりの地味なデザインの鉄剣。

『うーむ見事な粗悪品じゃのう』

マールの感想もまた身もふたも無い。

抜いた剣を水平にし、空いた手で刃を掴む

(…よろしく)

『むー、とりあえずく硬固くでいいじゃろ。よつと』

『~~~~~』

剣が鈍く光る。魔法を定着させているのだ。

『~~~~~』

「ユート様？何を……」

ソフィーが驚いた顔で俺と剣を見ている。まだまだ、もう少しかかる。

『~~~~~』と完了じゃ。ふいー……』

剣の<硬固>の付加が終わる、軽く叩いて確認してみる。大丈夫だ。

『後はソフィー嬢の分じゃ』

ソフィーの分も考えていてくれたのか。マールの気遣いに感心する。

と、そのソフィーがじーっとこちらを見ている。…気になるよね。軽く説明しよう。

「剣に魔法をかけてたのさ、この剣もろいから。<硬固>を……」

「そんなことが可能なのですか？」

「ほんとは出来ないんだけどね……」

俺だつてマールに教えてもらつまでこんな事が出来るなんて知らなかった。

さらに幾度か試してみたが、結局自分では成功しなかった。

曰く、そもそもの魔力の使い方が根本的に違う。ということらしい。

「え？」

「いや！なんでもない。とりあえずこれでそうそう折れなくなった筈。後は……ソフィー、さっきのナイフかして？」

ソフィーからナイフを受け取り、腰の後ろからもう一本ナイフを取り出す。

見たところデザインは同じだが微妙にサイズが違う。

ここは小さい方を使おう。それでも小ぶりな短剣程度の大きさがあ
るのだが、ソフィーが持つなら小さいほうが良いだろう。
残った大きい方はソフィーに返し、ナイフを抜く。

「……あれ？こっちは鉄じゃない？」

鞘から引き抜いたナイフの刃はややくすんだ青白いものだった。何処と無く石っぽい。少なくとも金属光沢は見当たらない。

しげしげと確認した後、先ほどのように刃先と柄を握り、マールに声をかける

(…よろしく。)

『……………』

マールが返事をしない。

(…どうした?)

『……………こっちの方が硬度が高いではないか—————!!!!』

っ!?

マールが大きな声で怒声を上げる。思わずのけぞった。

なんだ?こっちの方が良い物だったのか?ではさっきの剣は?

『…まあ、よい。いや良くはないんじゃないが、仕方ない。ともあれコ

レに〈硬固〉は要らぬな。さっきの〈硬固〉を込めた剣と比べても
やや劣る程度には硬度がありおるわ。』

(〈硬固〉付き並だつて?どうなってるんだよ、さっきの粗悪な剣
は何だつたんだ?)

『妾は知らぬ。考えるのもイヤじゃ…〈硬固〉は疲れるのに…ブツ
ブツ』

マールがブツブツ恨み言を言う。

(と、とりあえずどうする?要らないならもう良いか?)

『いや、折角じゃから他の魔法を込めようぞ。そうじゃな、妾の得
意な所で〈予防〉と〈治癒〉をかけておくかの』

(俺には要らないが?)

『ソフィー嬢の為じゃよ。気づいておるか?さっきの兵士といいソ
フィー嬢といい〈強化魔法〉がかかっておらぬ』

(どうなってるんだこの世界は?)

『そもそも知らぬのか、必要でないか、まあ後で聞けば分かるうて
とりあえず森に行くのに〈強化魔法〉無しでは生傷だらけになるの
がオチじゃ。あの珠の様な肌が!それは見るに耐えぬ。』

(…そうだな、よろしく。)

『む。~~~~~』

ナイフが発光する。さっきより幾分か少ない時間で発光が終わる。

『完…了…じゃ。後の魔力はおんしに回そう。一気にここから離れるのに必要じゃろう。もう時間も無いだろうってな。』

(分かった、お疲れ。)

『それでは…また後での。』

(お休み、マール。ありがとう)

『お休み、我が主。愛しておるよ』

「・・・」

不意打ち。頬が熱くなるのを感じる…きっと赤面してしまっている。

俺の反応を確認し、けらけらと一通り笑ってマールは眠ったようだ。

それと同時に魔力が少し回復する。これなら1時間は走れそうだ。

「ソフィー、お待たせ。これを持っておいて。〈予防〉と〈治療〉がかかっている。これから森を行くなら有った方が良いでしょう。」

「〈予防〉と〈治療〉ですか？ 良く分かりませんが、…必要な物なので。ありがとうございます。」

不思議な顔をしていたが、素直に受けとって腰に付ける。

薄々そんな気はしていたが、どうやら〈予防〉も〈治療〉も知らないようだ。これはますます色々確認する事がありそうだ。

1 - 8 < 戦利品の回収と付与魔法 > (後書き)

逃避行開始！と見せかけて最低限準備はしなくては、と言っ回。
次回からついにモンスター入り混じる森へと進みます。

2 - 1 < 森へ >

マールが眠りについたので、自分で気配を探る。

遠いのでかなり分かり辛いがそれなりに近づいて来て居るのを感じる。

恐らくもう後30分とかからず先遣隊が来るだろう。

「それじゃ行こうか、もう時間が無いし。」

「そうですね、行きましよう。北の森に出るにはまずこの神殿の東側の門を出まして、外周壁の外へ行つてからになります。」

こちらです。と出口に向かおうとしたソフィーの肩を掴んで引き止める。

え？という小さな声を上げた彼女を横抱きにして、肩甲骨の下と二の腕辺りと膝の後ろに腕をまわし持ち上げる。

俗に言う、お姫様だっこの体制だ。

「あ、え、う、その、」

ソフィーが赤くなり言葉にならない抗議の声を上げる。俺にだって

その気持ちは分かる。恥ずかしいよね…

「ソフィー、今からかなり速く走るから。しっかりと捕まってるね。」

「え？は、はい……？」

返答をし、ソフィーが身を小さくした所で走り始める。数歩で加速し一気に北に向かう！

「え、えええ！？こっちは門じゃないですよ！！？」

「喋ってる舌を噛むよ！」

ソフィーが抗議の声を上げる。門は東でこっちじゃない。承知してる。

神殿の北側の外周壁の角の部分が見える。高さはおよそ10mぐらいだろうか？この高さなら、超えられる！

「~~~~~っ！！！」

減速することなく、飛び、壁に足をかけそのまま左右にステップしつつ乗り越える。

3歩で城壁の上に乗れ、城壁の向こうを見る。

…そこに見えたのはやはり堀だった。

一旦止まって正解だったな、と考えつつ今度は城壁の上を走り加速する。

堀の幅はおよそ20m、そのまま飛び越える！

「~~~~~つ!!!」

ソフィーが声にならない叫びを上げているがこの際だ、無視して着地。そのままの勢いで森へと突入する。

さあ、ここからが本番だ。

森の中を走り、飛び、跳ね、およそ1時間程進み減速する。魔力の限界が近い。

すこし開けた所に大木を見つけたので、その根元でソフィーを降ろす。ここまで来れば流石に大丈夫だろう。

マールのように遠距離は読めないが、大分突き進んだせいか人の気配はもうしない。

「……し、死んだ…と、思いました。」

ソフィーがぺたんとお尻をついて座り込む。

「ゴメン、やっぱり刺激が強すぎたかな？」

ジェットコースターに乗って森を突っ切ったようなモノだ。生きた心地はしなかつたろう。

「うっうっ…」

「少し休もう、ここまで来たら大丈夫だよ。追手も居ないみたいだし。」

「…あれについて来れたら人間じゃ無いです………」

「ハハハ…」

「………」

ソフィーの隣に座り、大木にもたれかかる。かなり青い顔をしていて、疲れているように見える。無理も無い。

マールがナイフに〈治癒〉をかけているから比較的体力の回復も速くなっているはずだ。

それでも、少し横になったほうが良いかもしれない…

「ねえソフィー、少し横になったほうが良いと思うよ？」

「すみません、こんな所で…」

「仕方ないよ、少し休んでから進もう。」

「はい…」

そう言つてソフィーも木にもたれかかる。と、思つたらそのまま俺の肩に頭を乗せて来た。

息が荒い。それに汗のにおいに女の子特有の甘い香りも混じる。…正直少し緊張してしまった。

だが、そのまま特に何事も無く2人でただ押し黙り続ける。聞こえるのは風と梢が奏でる音のみ。

穏やかな時間が流れる。

「とりあえず、北らしき方向に来たけど、合ってるのかな…」

ふと不安になりつぶやく。

「おおよそではありませんが、合っていると思います…。この大樹は地図に載っていますので。」

そう言つてソフィーが肩にもたれかかっていた頭を離す。

…少しホツとするが、涼しくなった肩にちよつと寂しい感じもする。

そうこう考えている内に、ソフィーが腰につけていたポーチを開き、中から地図とコンパスを取り出し広げる。

「…都合の良いことに、この大樹は以前から行われていた討伐で地図に記されています。目立ちますしね。っと、ですから現在地はここですね。…そしてこれが神殿。」

と、指を指す。…地図上ではそれほど神殿と離れていないように見える。

「目的地はここからずっと北北西に向かって行って…まずはこの森を抜けてすぐにある村落を目指そうかと思えます。」

…先ほど指した現在地と神殿の距離と比べて、ざっと見ても5〜6倍はある。

「暫くはさつきみたいには走れない。長い道中になりそうだね。」

「そうですね…。」

「不安？」

「当たり前です…モンスターが居るんですよ？」

モンスターかは分からないけど、道中ででっかいネズミやメタリックなイノシシは見かけていた。

かなりの速度で走っていたので追って来れなかったようだが。

そういえばモンスターがどういうものか知らない。念のため聞いておこう。

「モンスターってどんななの？」

「そうですね、説明しておいた方がいいですよね。」

「お願い。」

「そもそも、モンスターと言うのはですね……」

2・2<モンスター>

この世界でモンスターと呼ばれるものは、元は動物や植物や人間だったものが高濃度のマナに犯され変質し、全身を作り変えられたものであるらしい。

その行動原理は、まさに食欲のみといった所で、同族のモンスター以外と見るや、兎に角食おうとしてくるらしい。

繁殖するのか？と聞くと、かなりの量のマナを蓄え巨体になったものが、分裂して増えるらしい。

だから知らないが同族では共食いはしないそうだ。なるほどね。

疑問点は多々有るが、今は気にする事でもない。

モンスターが何なのかはおおよそ分かったので、さらにこの近辺に居るモンスターはどんなものか聞いてみる事にした。

「この森に居るモンスターって分かる？」

「そうですね、色々居ますが動物は概ね全てと考えた方が良いでしょう。鼠や狼などの獣、鳥、植物、虫、この森ではマナをその身に蓄積するものはおおよそ何でもモンスター化しています。」

「そっか、何か特徴とかはあるのかな？」

「大抵のものが異常に大きくなって、元のころより物凄く動きが速くなっています。他にも元々には無かった器官が存在するそうです。」

なるほど…：そういうえば道中見たネズミは50cmはあった気がする…

「小型のものでも50cmぐらいあります。さらにこの森で最大のものでは10m程にもなります。そしてこの森では目撃されて居ませんが、竜など巨大なものになると50mとかにもなるそうです。」

「そっか…侮れないな、…というか今、センチメートルとかメートルって言った？」

「はい。えっと、それが何か…？」

「いや、凄く慣れ親しんだ単位だったから…：さ？とりあえず聞きたいんだけど1メートルってこのぐらい？」

軽く腕を開いて1mぐらいにして止める。

「はい、大体そのぐらいかと」

「センチメートルってのは1mの百分の一？」

「そうですね。メートルの上の単位はキロメートルと言ってメートルの千倍になります。」

「とりあえず聞いて見たいんだけど、重さはグラム、キログラム？」

「そのとおりです。」

「…良く分かった。どうやら色々な単位が俺が元居た世界と同じよ
うだね。」

「かつての<召喚されし者>が決めたと聞きます。<召喚されし者
>の特徴は毎回変わらないので同じ国の人だった…とかでは無いで
しょうか？」

「その可能性はあるね……………」

なるほど、だから氏名も普通に理解できたと、そういうことだった
のか。

「ユート様も見た目は言い伝え通りなのですが、大分私の知ってい
る<召喚されし者>と違うようなのですが…例えば召喚された直後
の<召喚されし者>は魔力はあるのに魔法が全く使えない。と伝わ
っています。」

「そうだろうね。俺が召喚されるのは2回目だから」

「…どついでにどうでしょうか？」

「一度こことも元の世界とも違う世界に召喚された事があっただけで…何か来る」

何かがちらに接近してくる。既に後およそ500mぐらいの距離だ

「モンスターですか!？」

「そこそこ大きい、1mはある生き物がこちらに来てる。……1、いや2匹だ。」

「どうしましょう……」

ソフィーの声が震えている。さっきの説明通りなら野生動物よりも危ないのは確かで、やはり怖いのだろう。

「戦ってみる、付与のかかってないナイフ出してもらえないかな？」

ソフィーが不安そうな顔をしてナイフをポーチから取り出す。

モンスターとはそれ程に危険なのだろう。

「どうぞ」

「ありがとう」

これを投げて刺されれば剣でも切れるだろう、刺さらなければ剣に強化魔法を流して切るしかない。

マールが「硬固」をかけてくれている。多少の魔力なら砕けはしないだろう。

それで駄目なら……いやそんな事はそうそうないだろう。俺の「強化魔法」をこめた剣は魔王すら切り裂いた。切れるはずだ。

残り150m程、もうすぐ見えるはずだ。

ナイフを抜いて投擲の準備をする、

120…90…60…見えたっ！

茂みから何かが飛び出して来る。そこを狙ってナイフを投擲、同時に駆け、剣を抜き放つ。見えた敵は兎か？

ナイフが角らしき物の生えた兎の頭部を直撃する。

一気に頭部へ根元までナイフが刺さり、さらに柄ごとめり込み見えなくなる。角付き兎が車に轢かれた人形のように縦回転してはじけ飛んだ。

……え？

想像以上の状況に一瞬戸惑うも、そのまま2匹目に接近しすれ違い様に剣で首を切り落とす。

<強化魔法>をこめた訳でもないのに、あっさりと切れてしまった。絶命した巨大角突き兔の首と体が勢いそのまま10m程転がる。弾け飛んだ兔もドスリ、と地面に落ちた。

数秒ピクピクと動いていたが、完全に動きが停止する。と同時に兔の体が崩れていく。

…魔族の最期と似ている。

もう5年以上前になる激戦での事を思い出しつつ消える兔を眺める。

完全に消えた死体のあった場所には小さなく魔導心臓<らしきものと投擲したナイフ、

そして投げたナイフと同じような刃が転がっていた。

2・2<モンスター>(後書き)

モンスターの説明と実戦。ついでに単位の回でした。
主人公最強系の運命なのか…戦闘がつついあっさりになってしま
いがちです…

2・3 <強化魔法>

とりあえず倒した巨大角付き兎が残した物を拾ってソフィーの元へ戻る。

「……………」

「ただいまソフィー、これ、何か出た…アイテム？」

「<魔晶石>と<刺突兎^{ダガーラビット}>の角ですね…」

「見た目このナイフと変わらないけど、同じもの？」

「そうです…」

「えっと、ソフィー？ 大丈夫？」

「いえ、流石に、ちょっと私の中の常識が、悲鳴を…」

「……………」

どうしよう、返事はしてくれただけど完全に上の空だ。

仕方ないので周りを警戒しつつ、またソフィーの隣に座る。

そして剣とナイフを確かめる。

刃こぼれ無し、血も毛も何も無し、と。投擲したナイフも問題はなさそうだ。

「あのあの、こんな時に何だとは思っていますが、説明していただけませんかでしょうか？一体何が………」

「？ さっきの兎の事？ 一匹目にナイフを投げて、2匹目は剣で首を切り落としたんだけど……？」

「パンツと言う音がして見失った、と思ったら終わっていました………」

「結構全力で投げて走ったからね」

「走ったんですね？ 一瞬で、あれだけの距離を？」

ソフィーが俺が最初立っていた位置と兎の死体のあった場所を交互に指差す。

「うん」

「魔法か何かでしょうか？ でも、詠唱や媒体、魔道具の類は見られなかったのですが：無詠唱魔法、ですか？ それにしてもあんな動きが出来る魔法なんて……」

詠唱、媒体、無詠唱魔法、ソフィーの言葉を反証する。後は召喚魔

法での恐らく儀式魔法…やはりある程度の魔法系統は前居た世界と大差ないようだ。

「そういえば…ここまで私を抱いて走って来たのもかなり異常な速度でしたね…」

「確かにあの時も使ってた。＜強化魔法＞って言うんだけどね。」

「…＜強化魔法＞って何なのですか？」

やはり、＜強化魔法＞は無いようだ。

「落ち着いた…？」

「それなりに。」

「そうだね、説明しようか、＜強化魔法＞ってのは

一つ前に召喚された世界でのことだ。

そこは魔法技術がかなり進んでおり、研鑽された攻撃魔法により攻撃力が過多になってしまっていた。

何の対策もしていない生物など、赤子の手を捻る程の手間で痕跡一

つ残さず殺せてしまうような状態だったのだ。

そこで人は生まれた時から身体能力を強化する魔法の込められた魔方陣を体内に描いた。耐久力を上げることで死亡率を下げたのだ。

魔方陣を描いた後、その魔方陣の維持に使用して減った魔力を満たせるようになれば、さらに次の魔方陣を。

そのようにして、おおよそ10程の<強化魔法>の魔方陣を体内に維持する事が出来た上で、攻撃魔法などを学ぶのだ。

「…その時込められた魔法を維持する分の魔力は、完全に隔離されて、他の魔法を使って魔力が枯渇したとしても、魔方陣が消えないよう独立されてるんだ。」

「ここまでではいいかな？」

「理屈は分かります。そんな無茶な、とは思いますが。」

「この世界ではそんなだろうね。」

「兎も角、<強化魔法>つてのは最初に習うというか体に叩き込む魔法の基礎なんだ。人なんてほんともろいものだよ。この石一つ投げつけただけで死んでしまう。」

と言って石を拾う。人の頭ぐらいはあるそれなりに大きな石だ。そ

して、投げる。

速度はさっきのナイフ並で。轟音を上げて木が数本千切れ飛び、石は粉碎する。

ソフィーが息を呑む。それはそうだろう、普通ならこんな速度の石が当たったら即死以外に何も無いだろう。

「だから攻撃されても耐えられたり、弾いたり、酸や毒を中和したりとか色々自動で出来るようにしてあるのさ。」

「それが＜強化魔法＞なんですね？」

「うん、正確には＜常時発動型身体強化魔法群＞って言うんだけどめんどくさいから皆＜強化魔法＞って言った。かかってる魔法が個人個人で違うのも原因の一つだけだね」

…特に自分のは。

一瞬浮かんだ考えを霧散させる。変に陰鬱な空気を作りかねない。

「ちなみにさっきの石を投げたのや走るのを早くしたのは、基礎となる＜強化魔法＞からさらにもう一段進んだ＜強化魔法＞で、魔方阵を体内に常駐させることで詠唱や媒体や儀式などを省いて一瞬で使えるようにした＜強化魔法＞なんだ。そしてこれは使うと魔力を消費するから一定時間しか持たない。ただし、隔離されてないフリーな魔力を注ぐ事によって再使用や延長ができる、と」

「一段進んだ、ですか…とても信じられないお話でしたが、事実な
のですね。…私でも、使えますか？」

「基本的に誰でも。ソフィーは魔力が高いみたいだから使えなくは
無いだろうけど…」

「私も使いたいです。」

「うーん」

どう言ったものか

「難しいのですか？ 魔方陣を描く為に何か儀式的な物が必要とか
ですか？」

「えっと、いや特に何も使わないけど。魔法脈を調べて適した所に
描く必要があつて、その…」

「調べるのに時間がかかるのですね？」

「そういう事も無いんだけど、ちょっと」

「どう言う事なのですか？」

いつの間にか前かがみになり、何かどんどん迫って来ている。

…ソフィー？ 何かキャラ変わってきて無い？ こんなアグレッシブな娘だったっけ？

「教えてください。その＜強化魔法＞があれば、私も足手まといで無くなれるですよね？」

…気にしてたのか どうしよう、説明しないと納得してくれないだろうか？

「えーっと＜強化魔法＞は生まれた時から始めるって言ったよね？
そしてかける側は相手の全身を中も外も全て読み取って、魔法脈を確認して適切な位置に描く、だから大抵親がかかるんだけど…その」

「私の体を隅々まで調べる事になる。ということですね？」

「そう」

「それは確かに恥ずかしいですけど…。ユートさんにでしたら大丈夫です。お願い出来ませんか？」

「でも」

「……………ダメですか？」

「…」

「お願いです…」

上目遣い&涙目でソフィーがおねだりをしてくる。

破壊力がすごい。でも、ダメだ。ここで折れたらまたマールみたいな事に…

「……………調べてください。」

ソフィーがそう言っつてベルトを外し下から一気にワンピースをまくりあげる。下着とおへそが露になり、胸元が…

「う、わー!?!」

慌ててめくれ上がったワンピースの端を掴んで戻す。

「待つて、脱がなくても大丈夫だから、待つて。」

「待ちません。欲しいんです。かけてください。」

戻したのにさらに脱ごうとする。

だめだ、ソフィーは本気だ。後その言い方はちょっと誤解されそう

なんだけど。

「分かった！かけるから！でも今は待つて。魔法脈をく走査くして
魔方阵を描く程の魔力が無いんだ！」

ソフィーが止まる。

「回復するのにどのくらいかかりますか？」

「…」

「………嘘は言わないでください」

言っても見破る。そう言っているように聞こえる。

「…一晩は欲しい、それで1つぐらいならかけられるぐらい回復す
ると思っつ。」

結局素直に答える。

「…分かりました。一晩ですね。明日の朝になったらかけてくださ
いね。」

「はい」

有無を言わせない。完全に押し切られてしまった。

「うづうづ…やっぱりマールの言うとおり押しに弱いなあ…俺」

「？」

「そついえば、攻撃魔法も使えるのでしたよね？ どんな魔法が使えるのですか？ 過剰な威力と言うのも気になります。」

「攻撃魔法？ 得意なのは水属性で、良く使うのは<水環鋸>とか<水炎>とか？」

「全く聞いた事が有りません…水でしたら<水流飛刃>とか<氷柱飛針>などでは無いのですか？」
ウォーター・カッター
フリーズ

「なんだか響きの水を薄くして切ったり、氷柱飛ばしたりしそうな感じだけど？」

「その通りですね。」

「そんなの使うぐらいならナイフや石投げたほうが効くよ？」

「……………そうですね」

「…ち、ちなみに私は時空系が得意なんですよ？」

「流石召喚魔法の使い手。時間を止めたりも出来るの？」

「げ、限定空間内でしたら…。」

「限定空間…？」

「この鞆の中、とか…。」

「便利だね」

「……………お気遣いありがとうございます」

「気にしないで…。」

「はい…。」

威力についての話が流れたのは僥倖だったかもしれない。

2・3＜強化魔法＞（後書き）

魔法で火の玉や氷の塊を飛ばすよりも銃のほうが効くのでは？

ならそれに耐えられる体にしたら（するには）？

さらにそれを上回るためには？

という考えの下に掘り進めて生まれた設定の＜強化魔法＞と＜攻撃魔法＞の説明と、触りの回でした。これから段々とその真価を描いて行くつもりです

9 / 5 「、！、？周りを修正しました。

2 - 4 < 鞆と料理 >

ソフィーの体力がそこそこ戻ったので大樹の根元から離れる事にし、山道を進んでおよそ3時間が経っていた。

道中さらに< 刺殺兎 >を2匹と、< 双頭蛇 >を1匹、さらに< 狂乱鳥 >を2匹ナイフ投げで仕留め、そろそろ日が暮れそうなので野宿の準備をする事にした。

周囲のモンスターをあらかじめ片付け、ソフィーと二人で薪を集める。さらに石で簡単な竈を作り、火をつけた頃には既に太陽が西の空に沈む所だった。

パチ、パチと暗がりですべてが炎が爆ぜる。

既に日は完全に沈み、星の明かりもまばらな森の中。この拙い炎が無ければ完全な闇と言っても過言でない。

「野宿なんて、初めてです…」

ソフィーがぼつりと言う。自分が始めて野宿をした日はどうだったかな。と思いをはせるが、随分と昔の事過ぎて思い出せない。

「…フフッ」

つい自嘲の笑いが出てしまった。

「むっ…ユートさんは野宿は…？」

誤解をしちゃったのだろうか、ソフィーがむっとする。

「俺はむしろ野宿の方が長い生活してたよ。」

「そうなのですか？」

「色々あってね。」

「はあ…」

つついしんみりとしてしまった。会話も続かない。

これは悪い事をしてしまったな、と思い話題を変えようと口を開きかけた時だった。

くーきゅるるるる…

可愛らしいお腹の音が鳴った。

「……………」

ソフィーが赤面して俯く。

そういえばここまで何度か水は口にしていたようだが食べ物らしきものは何も食べては居なかった。

「何か食べようか、食料は有ったんだよね？」

「はい……………」

そう言っつて赤い顔をしたソフィーが鞆を漁る。

鍋が出てきた。中華鍋のような形状だが、小ぶりだ。むしろ握りのある浅めのボール…？

それが火にくべられる。さらに皮製の水筒らしきものを取り出して縛っている口を開き、水が注がれる。

そこまでの所でソフィーが固まった。

「どじしたの？」

「…私、料理をした事が無いのでどうすれば良いのかわかりません」

…そついうことが

「ちょっと見せて貰える？」

ソフィーと肩が触れ合うような距離まで近寄り、鞆を覗く。

ちよつと距離が近いと思うけれど、仕方ない。近づか無いと見れないのだ。

どれどれ、と見てみるのだが…

分からない。

「…これ、どじやって使うの？」

「……………え？…あ！す、済みません、説明してませんでしたね？」

鞆の口をあけて心ここにあらずと言った感じになっていたソフィーが慌てる。

…あえて触れないで置こう。暗がりでも分かるほど顔が赤くなっているし。

「とりあえず鞆を持って開けてみて下さい。」

手渡される。小さい鞆だ。形状のせいであまりポーチと言いたくない。いや、それにしても小さすぎるのだが…

とりあえず鞆の口を開け、覗き込む。すると中のものが見えた

「う、わ…」

奇妙な感覚だ、手元はとても小さな鞆なのに視界は何故か小さな部屋を少し離れた状態で上から覗いている感覚。

おおよそ3m x 4m程の空間を覗いている。その中に色々な物が入っていた。

「何を取るかを考えながら中に手を入れて見てください。」

とりあえず目星をつけた物を取ろうとする。狙いはそのジャガイモ？だ。

そう考えたとたんに視点がズームされる。なんだこのハイテクは？

さらに手を鞆に入れる。

…どうなってるんだ。

手が中のものを掴んでいるのが見える。感触もある。

だが、鞆に入れた手だけが体から離れ、鞆の中の空間から生えていくのだ。

例えるならばロケットパンチ状態。

そのまま引き出すと鞆の中にあつたジャガイモ？と掴んで居た手がずぶずぶと消える。

もちろん鞆から取り出されて、切れても無ければロケットパンチにもなっていない手の中だ。

「便利だ…一家に一つ欲しい」

素直な感想が漏れる。

「…7つもありますし後で整理してお渡ししましょうか？」

やったね。

と鞆に気をとられてないで食材を見なければ。何が有るんだ何が
漁る。

主に野菜らしいのだがどれもこれも微妙に何処か違っていて見覚え
が無い。

良く考えると、俺この世界の食材を知らない。

焦る。

「良く考えたら俺、この世界の食材知らない……」

結局どうにも成らなかったなのでそのまま声に出した。

「やっぱり私が作りましょうか？簡単なスープ程度でしたらきつと
作れますし……」

…任せてみよう。折角だ。それに女性の手料理は嬉しいものだ。
…怖くもあるのだが。

脳裏に浮かぶのは7年ほど前。全員が無闇に頑丈だったので料理は
ダメージを与えてなんぼ。というノリになっていたあの世界…。

「うまい食べ物ものは料理しなかった食べ物だ。」という格言まで
あった。

…どの道どんな料理が出来ても俺は死なないから、大丈夫か。

そう結論づけ、頷く。

「お願い」

「わかりました。」

鞆を手渡す。ソフィーが中を覗きゴソゴソと何かを取り出す。瓶だ。

「ふふふ、やっぱりありましたね。スープ種。これさえあれば誰でも美味しいスープが作れるんです！」

自身たつぷりに宣言し瓶を空け中の塊を3つほど鍋に入れる。

そんな便利なものが有ったのか。カレーのルーみたいなものだろうか？

鼻歌交じりに瓶を仕舞い、今度は野菜を数種類取り出し、

腰に挿したナイフを抜き皮を剥く…

「ちよっとまった。」

「……………何か？」

「皮を剥くの？」

「そうです。」

「…刃物使った事ないでしょ？俺がやるから野菜かして。」

手に持ったジャガイモ？を握り締め、短剣と言って良い大きさの刃物で、

ゴボウの「ささがき」よろしく削ろうとした所で止めた。

見てるだけで、怖い。

「……………分かりました。」

聞き分けがいい娘でよかった……………

渡された野菜の名前や味、どう切るのかを話し合いながら切る。

皮むきは任せられないが大きさを揃えるためのカットならソフィーでも問題は無かった。

そんなこんなで素材を全て鍋に入れ終え煮込むこと数分。スープが完成した。

最後にソフィーが鞆からパンを2つ取り出し一つを受け取る。

スープを皿にすくって食事を開始した頃には料理を始めて2時間以上が過ぎていた。

2・4 < 鞆と料理 > (後書き)

定番と言えば定番。料理の回でした。

< 強化魔法 > で頑丈になった人にダメージを与える為の料理…想像するだけで怖いです

2・5<塩と不寝番>

「塩や調味料が入ってない野菜だけのスープは何とも言えない味になる。」

完成したスープを一口食べて塩が入って居ない事は分かった。

いくつかの野菜とブイヨンだけを煮たような味なのだ。端的に言って、微妙だ。

幾ら壊滅的な食生活をしていたと言っても、その前はまともな食事をしていたのだ。そのぐらいの味覚はある。

… ちょっと嬉しかったのは秘密だ。

ちらつとソフィーを見ると、ソフィーも一口食べて怪訝な顔をして首をかしている。

「ねえソフィー？塩ってある？」

「ありましたよ？取ります？」

「お願い」

塩を受け取り自分のスープに少し入れる。うん。狙い通り。美味し
くなった。

相変わらず怪訝な顔をしてスープを口に運んでいるソフィーに塩入りスープを促す。

「食べてみて」

ソフィーが塩入りスープをすくって食べる。目を見開いた。

「塩が必要だったんですね…！」

こつこつ理解の早さは美点だと思う。

早速自分のスープと鍋に塩を入れて味見もきちんとする。

調味料を適当にプチ込んで大惨事を招いてこそ料理！とかやってた誰か達とは違う、その慎重さに感動すら覚える。

そうこうしている間に満足が行く味になったようで、そのまま二人でこれまでの食生活について談笑しつつ食事をした。

食事も終わり、空焚きした鍋と食器を軽く水で洗い、サツと布で拭いて収納。

代わりに毛布を2枚取り出した。

膝を抱え炎を見つめてうとうとし始めているソフィーに毛布を手渡し、声をかける

「ソフィー、寝てくれて良いよ。火とモンスターの警戒はしておくから。」

「…ユートさんは眠らないのですか？」

気になるよね、こういつ時って普通なら交代して眠るとかだもんね。

でも俺って普通じゃないからなあ…

「大丈夫。冗談に聞こえるかも知れないけど7日ぐらい飲まず食わず寝ずで戦えたりするから。」

「…それも強化魔法ですか。」

「その通り。」

「ホントにメチャクチャなんですね…」

「否定はしない。」

「うー…そういう事でしたらお言葉に甘えます…。無理をしている訳では、無いんですよね？」

「ああ。」

「分かりました。…それでは眠らせていただきます…お休みなさい。」

「お休み」

「…明日、約束忘れたりしないで下さいね。」

「…分かってるぞ」

それっきりソフィーが黙る。暫くして規則正しい寝息が聞こえて来た。

召喚魔術、逃避行、野宿…きっと疲労も限界だったのだろう。

「さて、と…」

火に薪をくべつつ気配をかなり広めに探る。眠り姫の邪魔をさせるつもりはない。

今夜はこちらから攻める。

そう決めると立ち上がり、最も近くの気配に向かって暗闇の中へ突入した。

2・5<塩と不寝番>(後書き)

もちろん塩を入れなくてもそれなりに美味しいです。

ですが筆者は適度に塩を入れた方が好きなのでこうなりました。

塩無しスープは何だか締りが無い感じがしますので…

3・1<2日目の朝>

「おはようございます…」

「おはようソフィー」

朝日が昇り少しして、ソフィーが目を覚ました。

「ソフィーは……」

「神殿の北の森、二人で逃避行の真っ最中。」

「そうですね…」

「…寝ぼけてる？」

「私は寝ぼけてないですよー？それにしても静かですね…？」

「まあ、森の中だしね？」

「…メリアお姉様は体調でも崩しておられるのですか？セバスチャン。」

「セバっ」

完全に寝ぼけている、さらにセバスチャンだって？

なにその執事の代名詞みたいな名前の人。ほんとに居たのか。しかも異世界にまで。

セバスチャンすげえ…世界を股にかける、いや異世界を股にかける執事…

いやいやいや、セバスチャンに驚いている場合でもないか。

「とりあえず顔、洗う？」

こくこくと頷くソフィーの前に、

水魔法を使って頭ぐらいのサイズの水弾を作り、浮かべる

おまけで軽く振動させて水温を上げ、ぬるま湯にしてみた。

「どござ

「ふあい

寝ぼけまなこのまま、パシャパシャと手ですくい顔を洗う。髪も洗うようだ。

暫くそうして洗顔をしていたソフィーががばつと顔を上げる

「お、おはようございます！ユート様」

「おはようソフィー、」さん『は止めたの？』

「え？ど、どついつ事でしょうか？」

「昨日途中から『ユートさん』になってたよ？」

「あ…あつあつ……」

水浸しの顔を赤らめ口をぱくぱくさせる。なんというか、これはこれで目の保養というか。

「今更だし、俺もソフィーを呼び捨てしちゃってるしソフィーも『ユート』でいいんだよ？」

「そ、それはそのう…えと………まだ、恥ずかしいですし……」

「？ごめん後半が聞こえなかった。なんて？」

「いえ！何でも無いんです！そうですね、では『ユートさん』と呼ぶ事にしますね！」

「うん」

「…あの、ところで昨夜…モンスターは…？」

「倒して置いた。近場に居たのを全て。」

「そうですか…」

「そうだ、戦利品。見て見て」

昨日一つ受け取っていた鞆を渡す。

槍4本とモンスターの素材だけを入れて置いた鞆だったが、今はモンスター素材が増えている。

「…＜刺突兎の角＞が5つ、＜双頭蛇の皮＞が3枚、＜狂乱鳥の羽＞が2枚、＜赤蝙蝠の牙＞が4セット。それからええと、＜闇夜狼の刃＞が5本、＜伐採鼠の歯＞が7本、＜女王螂の剣＞が2本。それにこれは……＜甲冑猪の牙＞ですか？」

昨晚遭遇しただろうモンスターの名前がちらちらと告げられる。

見た目でも思ったが、この世界の動物の名称は元居た世界と同じ物が多いようだ。

「他にもいくつか私には分からないものが入ってますし…すごいです、これで生活できますよ?」

「それはいいなあ…」

しみじみ思う。こんなことで生計が立てれるなら万々歳だ。魔族と戦うのに比べると片手間以下の朝飯前だ。

「はあ、なんだかもう驚き疲れてしまいましたよ…」

「朝から疲れさせちゃったか…ごめんごめん。おわびにこの一番の収穫っぽいものをあげるから、さ。」

と言って懐に入れていた手のひら大のものを渡す。

「これは…<夜光蝶の羽>ですね。4枚とも無傷で仕留めたのですか…」

あれ、あんまり反応が良くない。綺麗だったから喜んでもらえると思ったのに…

「綺麗だったから…ごめん。あまり良い物でも無かったんだね…」

「いえ、そんな事は無いんです、凄いものなんです。嬉しいんですよ？でも、ちょっとここまで来ると呆れが…」

しょぼーん

やっぱり張り切り過ぎたのだろうか。見たことの無い生物だらけで上手く倒すとアイテム落とす、

となるとコレクター魂というかなんとか、なんだか楽しくなつて徹底的に倒しまくつたのが良くなかつたようだ。

折角頑張つたのに…ちょっとシヨボくれながらとりあえず鞆に仕舞う事にした。

それからソフィーは「着替えをしますね。」と木の陰に回つて行った。

そういえば昨日はずっとあのワンピースだった、幾ら裾も袖も長いとは言え山歩きには適さなかつたろう。

「着替え、あつたんだなあ」

昨日の内に着替えておけば良かったのに…いや、そんな時間も無かつたのか。

など色々考えつつ焚き火の始末をつけた所でソフィーがやってきた。長袖長ズボンに頑丈そうなブーツ。髪も編み纏めてある。前よりは山歩き向きになった。

「不思議なんですけど、あんな格好でいたのに全然怪我をしてませんでした。」

「あー、それは<予防>と<治癒>のおかげだね。」

「この短剣ですか？」

ナイフを取り出す。

「そう、付与魔法で<予防>と<治癒>がかかっているから持っているだけでかすり傷程度ならサッと治ってたんだよ。」

「そうなのですか。でも<予防>というのは何でしょうか？<治癒>は傷を治すと見当が付くのですが。」

「<予防>は前もって病気になるないようにするって事かな。怪我したらバイキンが入って化膿したりするでしょ？それを防ぐと。他にも風邪にかからないとか色々有るみたいだけどね。」

「バイキン…？ともあれ物にかける<強化魔法>といった所でしよ
うか？」

「かなり違うものだけど、大体そんな感じの認識でいいかな。」

「そうですか…ところで約束の件ですが。そろそろ大丈夫ですか？」

「うっ」

「今更やっぱり止めた。とか言わないで欲しいです。男に二言は無
いと言いますよ?」

さっきまでのゲンナリした顔をすごくニッコリとさせてソフィーが
迫る。

なんで日本のことわざなんて知ってるんだ?…ともあれ、逃げ道は
見当たらないようだ。

3・1<2日目の朝>(後書き)

何の変哲も無い初めての寝起きでした。

今回はついにソフィーにも<強化魔法>が！

何故ユートが渋ったのか…その訳が明らかに。

指摘していただいた点の修正を全編に渡って加えました。ありがとうございました。うございました。

3・2＜強化魔法・付与＞

これも元勇者としての性だろうか、男に一言は無く、約束を守ることにする。

やると決めたら一気にやる。それが勇者の生きる道

…何を言ってるんだか、と自分でも思う。

念のためもう一度気配を広めに探る。昨日殲滅したせいか限界ギリギリ付近まで何もひっかからない。

安全、だな。

「…周りには何も居ない、始めるよ」

「お願いします。」

魔法で水を作る、さらに作る、作る、作る。そしてソフィーをその水で包んでいく。

現れた水の中に浮き上がり、水没して行く体に驚いたのかソフィーが戸惑う。

「大丈夫、溺れたりはないから。」

さらに水を増やしソフィーの全身が完全に沈む。

ここからだ。

意識を水に通す。魔法で生み出し魔力を行き渡らせた水は、今や全て自分の手であり目であり鼻であり舌であり耳でもある。

「んっっ……!？」

がぼっと息を吐き水中のソフィーが身悶え、声が漏れ出した。

ああやっぱり。

本来は体の小さな幼少期にやる魔法なのだ、これだけの大量の水で全身を包み込み、

体内にも慎重に浸透させていつている今、繊細過ぎる操作はどうしても完全には至れない。

必死に制御して抑えてはいるのだが、不意に体をよじられたり、操作が乱れる度に

水がソフィーの体を撫で、さすり、ともすれば舐めているような感覚を与えるのだ。勿論双方に。

「ひあ……」

さらに艶っぽい声がソフィーの口から溢れる。いけない、いやらしい事を考えてはいけない。

兎に角集中して<走査>を加速させる。

「くっ………やあ……あ、んっ」

もう少し……

「あっ………」

およそ30分程経つたろうか、<走査>が完了する。

よしっ、後は<記録>っ

<走査>で得た魔法脈マップの情報を書き込む。

次からは最初にこれを展開し、ガイドに沿って走らせるだけになるので早いのだ。

ばっしゃぁんとソフィーを包んでいた水球が崩れ去る。

支えを失い落ちるソフィーを抱きとめる。

「ソフィー、<走査>終わったよ。」

「はあ、はあ、あっ……………その、終わったの、ですか…………えっと
…凄かった、です……………」

何だか凄く顔がとろんとしている。

肌もほんのり桜色に染まっていて、粗い息遣いも相まって色っぽい
…。

いかん、そんな事を考えてはだめだ、心頭滅却、煩惱退散。

マールの轍は踏まない。マールの轍は踏まない。マールの轍は踏ま
ない。

「マールの轍は踏まない……………」

「?」

いけない、心の声が漏れた。

「そ、それじゃ次は<強化魔法>をかけるよ!?!?とりあえず一つ目

だから<生命強化>から」

「はい…おねがいます……」

「口あけて。」

今度は口腔内に魔法水を纏わせた指を差し入れる。

このまま喉を抜けて浸透させ、<魔導心臓>まで魔法水を進ませて魔法陣を描くのだ。

他にも方法はあるのだが、俺自身水魔法が得意なのでこれが一番効率がいい。

見た目は何か背德的だが…

ともあれ、魔法での重要器官は3つ、

動力源となる魔力を湧き出させ体に循環させる<魔導心臓>。

魔法の発動箇所である<放射口>。

そして詠唱し魔法を形作る為の<詠帯>である。

<魔導心臓>はおおよそ体の中心にあり、<放射口>は両手など、<詠帯>は喉にある。

と、言ってもどれも基本は魔法臓器であり、実際に摘出出来るのは
＜魔導心臓＞ぐらいなもののだが。

それはさておき、魔力を纏わせた水を体内に浸透させて、その＜魔
導心臓＞に触れる。

最初の魔方陣の中心位置はここ以外は無いだ。

＜生命強化＞を描き始める…時間はさほどかからないが、正確かつ
丁寧にソフィーに合わせてアレンジして描く。

…こちらは数分で完了した。

「ソフィー、終わったよ。大丈夫？」

「大丈夫じゃ、無いかもしれませんが…ちょっと、色々と刺激が強す
ぎ……で………」

…昨日森を歩いていた時よりも、息も絶え絶えになっていた。

3・2＜強化魔法・付与＞（後書き）

微工口回でした。

こつこつ回は書いてて楽しいのですが、なかなか表現が難しかったです。

まだまだ精進あるのみですね。

3・3<逃避行2日目>

「なんだか、特に体力が増えた感じも無く、魔力の総量が減っただけのような気がするんです…」

逃避行2日目の昼過ぎ、森を進みながらソフィーがボヤいていた。

「その感覚は間違ってるよ。<生命強化>は基本の基本、魔力を一部隔離して、増強を計ると同時に体の調子を整えて健康にする<強化魔法>だからね」

がーん。そう顔に書いてあるような顔をされた。

「速く走れるようになったり槍で突かれても傷つかなくなったりしないんですか…?」

「残念ながら。特に前者は昨日説明した通り基礎をかけ終わってから追加でかけるような<強化魔法>だしね」

「先にそつちをかけて欲しかったです…」

「それは出来ない。そんな事したら活性化させたたんソフィーの体が壊れちゃう。」

「基礎を済まさないダメなのですね…?」

「そう。」

「先は長いですね…この<生命強化>が定着しないと次の<強化魔法>はかけられないんですよね」

「そうなるね」

「先は長いです…」

「まだ始まったばかりだよ、焦らなくてもいいさ。俺が守るし。」

「うー……………」

脱、足手まといを考えていたのだ。前とあまり変わっていないと知ると物凄くしょんぼりしてしまった。

一応<生命強化>は生まれたばかりの赤ん坊が健康に育つ為には最適な魔法で、魔力の増強にも良いのだが…

ソフィーの感覚ではやはりイマイチのようだった。

さらに森を進む。1時間おき程度に休憩を挟みながらもモンスターが瞬殺な為か、道行は順調。

そしておよそ3時ぐらいが過ぎたころだった。

「…何だか納得行かないです」

ナイフを投げ、鹿のようなモンスターが弾き飛ばされた後でソフィーが言い出した。

「何が？」

「さつきから投げているらしい短剣が全く見えない事です。投げる、と思ったらパンツ！ って音がして、短剣が刺さったモンスターが吹き飛ばんです。実は時間魔法じゃないんですか？ 時を止めて。投げて、解除してドーンって。」

「そんな事はしてないんだけど…」

なんだかそんな特技を持った吸血鬼がいた気がする。

「じゃあどんな速度で投げたら見えなくなるんですか…」

「うーん体感だからおおよそだけど、大体700〜800m/sぐらいだと思う」

「想像出来ないのですが…1秒で700〜800mですか？ 瞬間移動みたいな速さじゃないですか…」

「少なくとも音速は軽く超えてるね」

「オンソク…?」

音速は知られて無いのか…

「気にしなくて良いよ、物凄く早いもの一つってこと」

「そうですか…?」

「そういえば俺も気になってた事があるんだけど、この鹿もただ何で<魔導心臓>しか落とさないのが居るんだろう?」

「<魔導心臓>? あ、確か<魔晶石>の事でしたね。多分倒した後残るはずの部分も破壊しているからじゃないですかね?」

「薄々そうじゃないかなあとは思ってたけど…やっぱりなのか。…ちなみにあの鹿は何を落とすの? あの見た目に凶悪な角じゃなかったの?」

「<雪毛鹿>は毛皮ですね。普通の鹿と違って蒼白くてキラキラしてるじゃないですか。」

「つまり毛皮を傷つけずに倒せ、と」

…毎回どてっ腹にナイフを突き刺して倒してた、それじゃダメだったのか。

「足と頭部だけでしたら切り落としても良いようですよ？吹っ飛んで全身ボロボロになるのが原因かと」

「難しい…」

「普通一人では倒すことすら困難なのがモンスターなのですがね…なんだか私の中のモンスター像が凄いい勢いで崩れて再起不能な感じですよ…」

「そこは諦めて欲しい」

「そうですね、いつまでもくよくよせず喜ぶべきですよね…『私』の旦那様はモンスターを虫けらのように扱う程強いんです』って」

なにそれ、俺、悪魔か暴君みたいな言われよう？

なんだか褒められている気がしないよ？

「『虫けらのように扱う』は何かイマイチですね…いい表現が思いつきませんね『ボロ雑巾』とも何か違いますし」

「なんだか表現に悪意を感じるんだけど…?」

「毒づかせてくれてもいいじゃないですか。今だけです。私、それこそ決死の覚悟を何度もして居たのに、なんだか拍子抜けちゃってるんです。無駄だったのかな、って。私の頑張り…今だって何も出来ませんし…」

そうか…足手まとい、まだ気にしていたのか

「そんなことはないよ。ソフィーは俺を助けてくれた。」

「？」

本心から、フォローをする。

そんなバカな、助けた覚えが無いと言いたそうな顔だ。

まあ無理も無い。だから、続ける。

「あの召喚魔法を俺は5年待ち続けてたんだ。」

「そうなのですか？」

「うん。体感でだけど5年間。＜狭間の世界＞ですつと待ってた。時間の観念が狂った世界で外に出ることも出来ず、誰かが扉を開けたのに割り込むのを狙ったりして待つしか無かった。結局割り込む必要は無かったけどね。」

昨日までの日々を思い出す。どこまで行っても何も無く、何もかもがメチャクチャな情景。

正直マールが居なかったらきつと正気ではいらなかったと思う。

「そして昨日、俺は救われた。だから感謝してもし足りないぐらいなんだよ。」

「そうだったのですか…面と向かって感謝されるとそれはそれでなんだか照れちゃいますよ?」

「はははは…」

「えへへへ…」

機嫌、直ったかな?

3・3<逃避行2日目>(後書き)

今回はうんちく話を。

コートの投擲ナイフの速度・700〜800m/sは、大体一部の高性能アサルトライフルの弾と同じぐらいの速度です。もっと早い弾を撃つ対物ライフルなどになると、1000m/sを上回るものも有るそうです。つまり、まだまだ非現実的なものではなかったりします。

ともあれ、次回からは大物戦になります！

9/5「、！、？周りを修正しました。

4 - 1 < 甲盾熊 1 >

あれからさらに2日、順調過ぎる道行に森もその3分の2程を終えた4日目の夜。

食事も野宿も4日目ともなると慣れたもので、2人で手分けしてテ
キパキとこなし、

また取りとめも無い会話を交わした。

そしてソフィーがそろそろ眠りにつこうか、という直前に事は起こ
った。

ギイインと耳障りな音を立て、最後のナイフが弾かれ闇に消える。

頭頂部から背の半ばと腕の外側全面を覆う甲殻のようなもののある
熊に似たモンスターが、

10mはあるだろう巨体を丸め、その甲殻の手甲部分で頭部に向け
て投擲されたナイフを弾いてた。

「やはり魔力を込めても投擲では貫けないか…！」

今投げているのは最初に使っていたナイフではない。途中でく刺突
兎くから手に入れた角そのままだ。

どうやら兎は角を研いで鋭くする習性があるらしく、柄の部分が加
工されて無いだけで刃の部分は全くナイフと遜色が無かったので、
スロージングナイフ代わりに使用していたのだ。

それを20数本、手甲で何本か弾かれたとは言え、かなりの数を体
に打ち込んでいるが、熊は衰える気配が無くむしろ猛り狂っている。
さらに失敗だったのは、ナイフが効かないならばと剣で切りかかっ
た際に、その太い首に突き立て、切り裂ききる前に猛然と暴れられ、
剣をへし折られてしまったのだ。

相手が巨体だったためにか致命傷も負わせられなかった。非情にま
ずい。

そう、もう武器が、無いのだ。

他のモンスターの素材は武器としては加工しなくては使えそうに無
く、

く硬固くのかかってない槍ではお話にもならない。

かといって素手でどうにかするには巨体過ぎる敵。

あまりにモンスターに歯ごたえがなかったから、油断していた事もある。

「まいった……………ね！」

「ゴアアアアアアアア！」

怒り狂った熊が両腕の爪を何度も何度も振り回し迫る、かわし、噛み付きを掻い潜り、その横っ面を殴る。

甲殻は無くとも毛と脂肪と筋肉。どれも分厚い。貫けない。これではどうにもならない。

ゲーム的に言えばHP10万の敵に1発1つつダメージを与えるが、10秒で1000回復されているようなものだろう。

千日手、だ

「…<攻撃魔法>を使うしかない、か？」

ソフィーに<生命強化>をかけてから2日半、消耗した<強化魔法>への供給に費やしていた為自由に出来る魔力はそれ程回復しておらず、攻撃魔法を使うのは躊躇われる。

失敗した、と思う。ついいつもの様に<強化魔法>を充実させる事に拘泥してしまっていた。今はそれを込めても砕けない剣も無いと

いっしょ。

…今の魔力残量だと使えて消費の軽いものを1〜2発。

詠唱途中に攻撃されても集中が途切れたりはしないだろうが、製造過程の魔法を壊されるとそれで魔力切れだ。

「それでも…ソフィーの所まで来られても、困るもん、な。」

熊の爪をかわしながら考える。

ソフィーの周りにはモンスターは居ない。この熊が恐ろしいのか、周辺には今他のモンスターが一切居ないのだ。

だから安全ではある。が、こいつを何とかしないとその限りでは無くなってしまう。

「やるしか、ないか」

本来の威力は出せないだろうが、今の魔力でやるなら恐らくコレが確実だ。

使用する魔法を決め、それを使うために下準備をしよう。と思ったとほぼ同時ぐらいだった。

突然動きが鈍った熊が空中の何かを鬱陶しそうに払い、違う方向に

注意を向けた。

何だ？何が、と思い熊と同じ方向に視線を送るとそこには

立ち止まり、両手を前に突き出した姿勢で熊を睨むソフィーが居た

4・1<甲盾熊1>(後書き)

ついに魔法を…と見せかけてまだお預け。と言う回でした。

4 - 2 < 甲盾熊 2 >

「何か、大きなのが来る。10mぐらいはある。」

夕食を終え談笑しつつ、そろそろ寝らせていただきますね。という時にユートさんが言いました。

大きなモンスター、10m、この森でそのサイズのモンスターは最大級。…確か<甲盾熊>だけ。

私の知る限り、一般の討伐隊がこの熊に遭遇した場合、命からがら逃げ出して逃げ切れた幸運な者意外に生存者は無く、<召喚されし者>を含むような精鋭メンバーによる討伐部隊が、比較的弱い時期に幾人かの犠牲を伴って倒すようなこの森最悪のモンスター…。

…この森最悪。

それでも、これまでのモンスターを危なげなく一撃で葬っていたユートさんなら、

きっとあっさり倒してしまうのでは。と楽観していました。

だけど、「行ってくる」と行って大きなモンスターに挑んだユートさんはなかなか帰ってこず、

木がベキベキと倒される激しい戦闘音と「ゴアアアア！」という

物凄い叫び声がだんだんと近づいて来ます。

私は血の気が引いて行くのを感じていました。

どんなモンスターでも一撃。

だから今回もきつと大丈夫。とっていました。

だけど、ずっと音が聞こえる。近づいて来ている。

震えが来ました。

何も出来ない。

私は足手まといでしかない。

私にはここで震えているしか出来ない。

…彼が、死んでしまう？

思考が悪い方向に流れ、弛緩し忘れかけていた気持ち、堰を切つて溢れ出す。

入念に下準備をし、〈召喚魔術〉を決行したあの時の気持ちが、

祖父の想いを、母の無念を、そして自分の幸せを掴もうとしたあの

時の気持ちだが、

悲劇を繰り返させないと、私が無念を晴らすとあの日母の墓前に誓った気持ちが。

……………行くぞ。

私が行っても倒すための手伝いは出来ないかもしれない。

それでも母譲りの時空魔法なら足止め位なら出来るはず。

そうだ、その隙に逃げられるかもしれない。

いや、ユートさんの足ならきつと振り切って逃げられる。

彼を、ユートを助けるのだ。

彼は、私の為の人。絶対に、死させたりは、しない。

させるもんか。

もう音はかなり近づいて来ている。

私は立ち上がり、薄ぼんやりとした月明かりの中、音のする方へと走り出していた。

4・3<甲盾熊3>

ソフィーの方を向いた熊が3mはあるう岩を持ち上げ、投げつける。

「危ない!!」

咄嗟に<強化魔法>を活性化させて駆け、間に割り込み盾になる。

思考が加速しているため、ゆっくりと岩が迫る。

だめだ、質量がありすぎる、このまま受け止めると俺の体重では押し切られてソフィーが潰されてしまう。

「…ならば、弾く!」

<強化魔法>をさらに活性化、両足で大地をしっかりと踏みしめ、

真っ直ぐ殴ると腕が突き刺さるだけだろう、と判断し

斜め下から決るように、岩の中心やや手前を殴り、弾く!!

「おおおおおおお!!」

ゴッ

と重いものがぶつかると音がして拳の突き刺さった岩が一部砕け散りながら、逸れる。

それを見届ける事無く殴った勢いのまま方向転換し、後ろへと跳躍。ソフィーを攫うように抱き上げ、熊へと視線を戻し、バックステップ。さらに下がる。

「ソフィー！何で来た！！」

熊から目を離す事無く抱きかかえたソフィーに向かって叫ぶ。

「私が時空魔法で足止めします！逃げましょう！」

俺を助けに来たのか、なんて無謀な。

熊が迫る。距離をとってその周りを死角へ、死角へと回り続ける。

「無理だ！アイツは足が速い、今の状態じゃ逃げ切れない！」

今は横へ、後ろへと回り込んで殆ど走らせ無いせいか、それ程速くない感じがするが、

熊と言うものは真つ直ぐ走らせると物凄く速い。

さらにこれはモンスターだ。体力も、筋力も、歩幅も規格外。恐らく今の残存魔力で逃げ切れるようなモノではない。

「私が全力で<緊縛>します！ですから！」

<緊縛>と聞いて考える。つまり「縛る」類の足止め、時間次第ではその隙に攻撃魔法を完成させて葬れば…

思考を巡らせる。どの道ソフィーを抱いたままでは逃げるにしても攻めるにしても手は殆ど無い。

「5秒でいい！止められるか!？」

「止めて見せます!!！」

熊の爪が何度も近くを通る。ソフィーに当たったら良くて重症、ま
ず即死だ。

「止めた瞬間に攻撃魔法を作る！頼む！」

「分かりました!!！」

「 Cahes 「 Miehmtsnd 「 MrM 「

呪文を唱える。僅か3小節の魔法。込められた意味はごくごく短的に「水よ、固まり、従え。」

俺の魔力から生まれた魔法水が細く巻き上がり、先ほど踏み砕いた石を攫う。

そのまま俺を中心にぐるりと輪になり、連結し固定。

そこから加速、加速、加速…

ヒューイイイイイイイイイ

風切り音が響く。水を鎖に、石の破片をチェーン刃にした擬似的鎖鋸チェーンソーがうなりを上げる。

熊が物凄い勢いで空から生えた鎖を千切って行く。

（ まだだ ）

さらに加速、加速、加速。：俺の周囲を回る水と石の輪が橙白色に輝いた。速度の限界だ。

水で一部コーティングされた石が大気の摩擦で発火し、周囲の空気

が断熱圧縮でプラズマ化しているのだ。

恐らく数千度になっているだろう。だが水は蒸発しない、魔法で固定しているので蒸発できない。遠心力で広がることも出来ない。

イイイイイイ

最早音でもなくただごく細かく、激しく空気が振動する。

こうなるとこれ以上の加速は望めない。それに後数10秒程度で燃え尽きてしまうだろう。

(∴6000m/sってところが、ほんとミスリル製の刃でやるんだがな、)

少し自嘲する。あのころの装備はもう無いのだ。

(速度が半分も出ていないが今回は緊急事態だ！いくぞっ！！)

熊がソフィーの魔法を引き千切りこちらに向かって踊りかかってくる。

(きっかり5秒、だ)

「ルト・アサシダー水環鋸>!!」

魔法名の唱和による発動指令を受け、<攻撃魔法>が完成する。

4 - 3 < 甲盾熊3 > (後書き)

うんちくシリーズ第二段。

6000m/sで周囲の空気が断熱圧縮でプラズマ化。ということですが、実はこれ、やや遅いですが概ねスペースシャトルが大気圏に突入する時の速度と現象です。ようするに今回の魔法は「スペースシャトルが折れないノコギリを持って大気圏突破してる最中に向かってくる装甲車に切りつける」といったイメージでしょうか？なかなか壮大です。ともあれ、その結果は次回。

4 - 4 < 甲盾熊 4 >

(こつのおつ

!!!)

必死に魔力を込めて<時鎖緊縛>を支えるのだが、凄まじい勢いで鎖が引き千切られる。

まさかこれほどとは。鎖が一瞬しか持たない。

先ほど不意打ちで縛った時は3本でも減速効果は見られた。…あつという間に千切られたが。

それが、今は一切停滞する事無く巨大な腕の一振りです数10本が砕かれ、散る。

<時鎖緊縛>は縛れば縛るほど相手の時間を遅くする。

魔力が2割程度しか残っていないが、全力を注ぎ込めば500本は出現させられるだろう。

だがそこまでせずとも全開で縛ったならば、瞬間的におよそ100本が出現する。

敵の時間は100倍近くなり、5秒と言わずかなりの時間を拘束する自身があった。

それなのに、全力で魔力を注ぎ鎖を増やし続けているのだが、効いている素振りを感じない。

これこそが、<甲盾熊>がこの森最悪と呼ばれた由縁。巨体による頑丈さだけで無く、魔法を殆ど受け付けけない事。

正直、甘かった。

…このままでは5秒も持たないかもしれない。

弱気な考えが浮かぶ。

5秒間、それだけ耐えたら攻撃魔法でユートが<甲盾熊>を倒してくれる、と言った。

だから、

信じる。

魔力が尽きても良い、効いて無くても良い、ただ意識をユートから逸らすだけ出来れば良い。

だからこの5秒で全て出しきっても構わない！！

ただ必死に<時鎖緊縛>に魔力を注ぎこむ。

足手まといでも知るものか。

「ルト・アサクター
<水環鋸>!!!」

5秒、と同時にユートの声が響いた。

聞き覚えのある魔法名、確か彼が「良く使う」と言っていた魔法。

そして、見る。直径5m程度の白っぽいオレンジ色に眩しく光る輪が<甲盾熊>に向かって飛んでいく。

それは見る限り、短剣を投げた時とは違って私でも目で追える程にゆっくりとしている様に見える。

あれでは、遅過ぎではないだろうか？かわされてしまうのでは？

ぼんやりとした思考で考える

<甲盾熊>が迫り来る発光する輪に異様さを感じたのか回避行動をとる。…これもゆっくり？

それに合わせて飛行する輪が横から縦に変え、軌道を変える。そうか、誘導できるんだ。魔法だから。

横向きから縦向きになった輪が<甲盾熊>を斜め袈裟切り気味に捉

える。

ギャン

と一瞬耳障りな音が鳴り、輪が<甲盾熊>を通過した。・・・
通過した？

そして感覚が戻ってくる。極度の集中で時間が経つのを遅く感じて居たらしい。

ゆっくりと突進して来ていた<甲盾熊>が一瞬で加速して地面へと倒れ伏し、

真つ二つに別れ、木を巻き込み転がる。

光の輪はさらに少し進んで森を通過した後、上空へ飛び上がり霧散した。

どちらも1秒に満たない一瞬。

メキメキメキメキ

輪が通過した所にあつた木が倒れる、

輪が通つた所を切り口に、切り倒され、その切り口が燃えている。

そして、<甲盾熊>が崩れ始める。

倒した。そう確信した私はそのまま意識を闇の中へと落としていった。

突進して来た熊が地面にくずおれ、2つに別れ転がる。

4足歩行で向かってきた所を袈裟切りにした。直径5m程しか無い
ルト・アサントイ
<水環鋸>だったが

上手く熊を真っ二つにすることは出来たようだ。

ビクン、ビクンと数秒痙攣していたが、程なくしてその巨体が崩れていく。

倒した。

「ふーーーーー」

思いつきり空へと息を吐く。今回ばかりは本当にギリギリだった。かなり緊張した。

腕の中のソフィーへと目を向ける、

…意識が無い。だが胸は上下し鼓動も感じる。気絶しているんだろう。

「全力で魔力を使ったのなら仕方ないか…」

一旦近くの木にもたれさせるように降ろし、

死体のあった所で<魔導心臓>とナイフ数本を回収する。

後は明日にしよう。

暗闇の中では全て探すのは困難だと判断し、再びソフィーを抱き上げた。

野宿をしていた拠点へと戻りソフィーを降ろす。

乱れた前髪を軽く払ってみたら穏やかな寝顔が伺えた。

そのまま横たえさせて、毛布をかける。

「…ソフィー、お疲れ様。驚いたけど、嬉しかった。助けに来てくれてありがとう。」

眠っていて聞こえないだろうソフィーに向かって語りかける。

多分ソフィーが来て居なくとも倒せていただろう。

だけどそういう問題じゃない。

助けに来てくれた事が嬉しかった。

「また助けられちゃったね…借りばかり増えちゃうな。」

苦笑する。

あの頃は誰かに助けて貰う事なんてそうそう無かった。

そんな中何も分からず死に掛けていた自分を必死に助けてくれた少女を思い出す。

「ティーナ…」

過ぎ去った過去へと、思いを馳せる…

4 - 4 < 甲盾熊 4 > (後書き)

裏話になりますが、この時の<時鎖緊縛>はきちんと効果が出ています。

上半身の甲殻部分で干切られはしましたが、その無い下半身にはしっかりと効果を発揮、その為全ての鎖を干切るまでその場を一步も動けませんでした。ソフィーは戦い方を知らなかった。という話。ソフィー、足手まといじゃないよ！

・・・それはさておき

次回はユートの回想回になります。短く端的に纏めました但那れなりに鬱話となりますのでご注意ください…

5 - 1 < 閑話過去 >

いつも自分は一人突出し、魔族を殲滅していた。

誰かの援護なんて貰う事はそうそう無かった。

自分は勇者で、規格外の存在で、並び立てる者など存在しなかった。

だからあの日も攻めてきた魔族の大軍団相手に一人突出し、かく乱し、殲滅し、勝利して戻った時に初めて聞かされた

終わってしまった事を。

地理的に人類側の領土の最深部にあり、何重もの大結界に守られていた筈の皇都が。

一番の安全地帯だった筈の首都が。自分の帰るべき場所が、滅ぼされていた。

奇襲、だった。結界の盲点を付き、地下五千mを掘り進み、結界の要の塔を地盤ごと崩落させ、破壊し、

溶岩すら物ともしない魔族たちが街の中心に躍り出たのだ。

最大の安全地帯は地獄と化し、あっという間に人々は殺しつくされ、散り散りになった。

そして、その中にはユートにとって大切な人も含まれていた。

第九皇女、メルティオーナ^{II}オル^{II}レナルグス

ティーナと呼ばれた^{II}召喚の姫[>]

かつて、一人の欲に狂った王に召喚された魔王によって9割の大地を奪われ、

滅亡寸前の人類が起死回生の希望を込めて行った^{II}勇者召喚[>]

それはかつて狂王が行った^{II}魔王召喚[>]を改造しただけの、人道にもとる魔法だった。

魔力の高い一人の姫を生贄の鍵とし、17人の術者の命と捕らえた10体の魔族を生贄に勇斗は召喚された。

まだ14歳の頃だった。

手段を選ばなかった皇帝は、言葉も分からず、混乱する勇斗に強引に^{II}強化魔法[>]を植え込み、生死の境を彷徨させた。

定着し、安定するまで勇斗の体は何度も砕け、再生を繰り返した。あまりの激痛に何度も正気を失いかけ、いつしか己の境遇を、こう

なった原因を、ただ憎むだけになっていった。

だが、そんな折に出会った。〈召喚の姫〉として生贄に使われ、自らの〈魔導心臓〉の9割を失うも生還したティーナと。

お互いの通じない言葉を超えて献身的に看病するティーナに、荒んだ心と傷付く体を癒される。

そして徐々に言葉を学び、心も取り戻し、…恋に落ちた。

かつて腹の底から湧き上がっていた憎しみは、恋の前では些細な事だった。

ティーナの為に魔族を倒し、大地と平和を取り戻す。

勇者となった勇斗は破竹の勢いで魔族を殲滅し、人の領地を広げていく。

そして召喚されて2年。3割程の大地を取り戻したころだった。

皇都が陥落した。

皇城に居た皇族は、皆その場で殺されるか、捕まり処刑された。

そしてその中に勇斗の妻となったティーナと生まれたばかりの二人

の娘、フィオナも居た。

全てが終わるまで勇斗は何も気づかず、ただ陽動として攻めてきた大軍団を殲滅していたのだ。

人類は最後の拠点と指導者を失って散り散りとなった。

軍隊は統制を失い、補給を失い、次々と殲滅され消えていった。

もはや残党狩り。人類は絶滅していく。

最後まで戦った仲間が戦死し、餓死し、絶望し、…自殺する。

召喚されて3年目、勇斗は最後の一人となり、数多の魔族を屠り、ついに魔王城へと単身乗り込んだ。

生前のティーナが教えてくれた元の世界に帰る手段を得る為に。

6 - 1 < 森を抜けて >

< 甲盾熊 > を倒し、2日。新世界生活6日目の太陽も昇りきった頃、ついに森を抜けた。

何故かは分からないが、< 甲盾熊 > を倒した後はモンスターの遭遇率がグンと

下がったので、思ったよりもかなり速く森を抜ける事が出来た。

あれからソフィーは激しく落ち込み、2日に渡りフォローをする事になった。

重い空気での道行は正直辛い。できれば楽しく進みたかった。

そんなソフィーも森を抜けて今、目の前に広がる景色を前にして元気を取り戻していた。

「これがここベルム王国最大の水源、ウルラス川です。」

えっへん。そんな感じの自慢げな顔だ。しかしそういう顔をしたくなるのも分かる。

なぜならばその川はとてつもなくでかいのだ。川幅が。

目測だが、多分2kmは有るんじゃないだろうか？

さらに不思議な事に水が綺麗なのだ。透き通ってキラキラしている。少なくとも今までみたどんな川でもこの川の壮大さには適わない。

最早不自然とも思えるほどの絶景だった。

「すごい」

ごくごく単純に感嘆を述べる。正直言葉にならなかった。

山の中の小さな源流のような美しさの川が、2kmを超える広さで流れているのだ。

水の底の小石も、流れに逆らって泳ぐ魚たちも丸見えだ。

「この川があるおかげでベルム王国は水資源に困る事は無く、安定した気候も相まって農作物の収穫にも恵まれているのです。」

そしてその恵みは国内に留まらず、比較的安価で大量の余剰食料を供給することで、諸国を飢饉から救い、不評を抑える事に成功しています。

さらに代々続く「召喚魔術」の安定した成功が、この国を暗黙の不可侵のものとして、平和を保障してくれているのです。

それでもやはり潜在的にこの国の豊かな国土が欲しい、と考えている国はあります。

ですがこの国を奪い、その恵みを独り占めしようとすれば周りの全ての国を敵に回してしまうので手を出せないのですよ。」

ソフィーが饒舌に語る。この国の平和と安定を。

まさに願っても無い環境だ。このままこの国に住む事が一番ではないだろうか？と思う。

そしてソフィーは俺にそう思わせたいのだ、とも思う。

「すごいね、夢のような環境だ。」

「はい。ですから…」

「言いたい事は分かってるよ。でもさ、もう少し浸らせてよ」

ソフィーの言葉を途中で遮る。言いたい事は見当がついていた。そしてその想像の通りだろう。

…この娘もあまり嘘を言えないタチなんだろうな。

ふふ、と苦笑する。別に悪い事ではない。好ましい事なのに、だ。

「ごめんなさい…」

「謝らなくてもいいさ、でも本当に綺麗だ…泳ぎたくなる。」

「私も水浴びがしたいです」

・・・意見が一致した？

6 - 2 <ウルラス川>

二人で水浸しになって水遊び、のようなられし恥ずかしいイベントを
起こす事も無く、

ソフィーはあちらで水浴びをして来ますね。と行ってしまった。

覗き、と考える下心は湧き上がったが、誰にも見咎められず、ソフ
イーにしても恐らく据え膳状態。

実際行つたが最後、その場で押し倒してしまいそうだったので自粛
した。

幸いにも目の前には楽しみがいの有りそうな綺麗な水辺が広がって
居たのも大きい。

流れに逆らい泳いだり、槍で魚を取ってみたり、この世界にも蟹が
居た事に驚いてみたりと、

一通り川を楽しみサツパリとした所でまだ残っていた新しい服に着
替える。

これもまた今まで着ていた服とそれほど変わらない。普通の服。

着替え終えた所で火を起こし、先ほど取った魚を串焼きにする。

時間的にも昼食に丁度良いし、水浴びから上がって来たソフィーも暖もとれるだろうし一石二鳥。

…問題はこの魚がソフィーが食べられる物かどうかぐらいだろう。

そうこうしている内にソフィーも水浴びを終え、着替えも済ませて帰ってきた。

二人並んで川原の岩に座り、他愛も無い会話を交わす。魚は食べても問題無いようだった。

頃合を見て串焼きを取り、二人でほおばる。

そして、泳いでいた時から気になっていた事を聞いてみる事にした。

「…確か、この川の向こうにある村に行くんだよね？」

「そうですね。」

「……橋とか船が見当たらなかったんだけど……どうやって渡るの？」

「泳いで。ですが……」

「……」

予想以上のワイルドな回答が得られた。

いやいやいやいや、そんなまさか。

「結構流れが速い気がしたんだけど、冗談だよな？」

「この川は特に危ない生き物は生息していませんし、何か浮かぶものを掴んで流れに逆らわないよう進めば渡れますよ？」

…本気で言ってる？

何km下流に流されるだろうかと思うとゾっとした。

「村は数km下流のようですよ。丁度いいかと思います。」

さらにそのタイミングで心を読んだかのようなことを言われる。

「…えと、もしかしてユートさん泳ぎの方が…ダメ、とかですか…」

失礼な。ちゃんと泳げる。…2km泳げるかは試した事は無いが。

…と、問題はそういう事でなくて。

「そういう事はないけど、流石に泳ぐのはどうかと思う。皆そっや

って泳いで渡ってるの？」

「どうでしょう？私も普段は渡し舟で渡った事しか有りませんが…」

…やったこと無いのに言ってたのか。危ないんじゃないだろうか？

「泳いで渡った事は無いんだね？」

「無いですね」

「ならやめておいて、船を使おうよ。」

と言ってく甲盾熊の盾を一つ鞆から取り出す。あの熊の両腕を肘から手首まで覆って居た盾だ。勿論2枚あるが、1枚で十分二人乗れる。

ちなみに今は傷一つ無い。あの戦闘中に猛烈な速度で修復されたようだ。実に凄い盾だ。

ガラン、と地面に置いてみる。少し湾曲してはいるが船としては浅い。だが、魔法で浮かべられるし川の波ならばこれでも十分な筈だ。

「コイツを水魔法で浮かべて走らせれば船になるよ。」

「……」

サッとソフィーの顔色が悪くなる。

「ダメかい？」

「その…」つだけ聞いて良いでしょうか？」

「何？」

「その、船ですが、私を抱えて走った時のような速度で進むのでしょうか？」

「…出来なくは無いけど、人が歩くぐらいの遅さにも出来るよ？」

「速くし過ぎないのでしたら、お願いします。」

「うん、分かった。それじゃそれで。」

どうやらトラウマになっていたらしい……

盾の船が進む。

あの後焼き魚だけの軽い昼食を済ました後、川を渡る事にして盾の船に乗り込んだ。

想像通り、水魔法で補強した船は浮かび、水が入ってくる事は無かった。

見渡す景色は絶景。下を眺めれば底まで見通せる水。優雅な旅だ。

最初は恐々と向かい合って座っていたソフィーも、幾らか落ち着いていたのかきよろきよろしていた瞳をこちらに向け、ぼそり、と口を開いた。

「私だって、泳いで渡りたかった訳じゃないんですよ？ユートさんが『私を抱えて水面を走ればいいよ』とか言い出しそうで怖かったです。」

なるほど、と思うと同時に感心する。ソフィーはソフィーなりに俺のムチャ振りに慣れ出しているのかもしれない。

何故かと言うとまあなんとというか、できたりするのだ。水面走り。ただ問題は…

「魔法で足の裏に当る水を固定すれば出来ない事も無いけど、結局は一瞬沈むのを止めるだけだし流石に全速力で走らないと無理だろ

うね。」

「やっぱり出来るんじゃないですか、ホントメチャクチャですね…」

「ははは」

とりあえず、笑ってごまかす。

「嫌ですよ？…ほんっっっつとつに怖かったです。」

実に実感の籠った言い方だった。うん、相当なトラウマになって居たようだ。

…悪い事をしたかな。少し、反省する。何も全力で走らなくてもよかったかなーと。

「間違いなく、死んだと思いました。生きてましたけど…」

「緊急事態だったんだから、ね？」

でもいい訳はしてみる。

「わかっていますよ…それでも、それでもです。怖かったんです！」

「ごめんごめん」

「謝らないで下さい。仕方ない事だったんですし。」

「じゃあどうすれば…」

「慰めてください。」

「…」

「分かりました。膝枕で妥協します。」

そうして有無を言わず俺の太腿の上へと倒れこむ。

狭い船上、逃げ道は無く成すがままだ。でも、それ程嫌という訳でもない。

機嫌が直るならこのままでも良いかな、と思う。

だがそんな思いを知る由も無い筈のソフィーは、逸らしていた顔をこちらに向けにっこりと微笑む。

その顔は満足げに、してやったり。と言わんばかりだ。

…そうか、ほんとはこれが狙いだったのか。

だけど、と思う。きっと怖かったと言うのも嘘では無いだろう。

だから今は拒む事無く無言でソフィーの頭に手を置き、なでる。

あ、と少し驚きを浮かべるも、すぐさま嬉しそうに目を細め、微笑み、やがて瞳が閉じられる。

お互い言葉は、無い。

船は魔法で進むから揺れは殆ど無い。

召喚されてから、初めてかもしれない本当にゆったりとした時間が流れる。

ソフィーの髪を手櫛でやんわりとすきながら、少し速度を落とし、暫くこの時間を楽しもうと思った。

6 - 2 <ウルラス川> (後書き)

第一章はここで中間の区切りとなります。

そして申し訳無いのですが、ストックも大分減って来ましたので、次回からは1日1回更新にして行こうかと思えます。拙い作品ですが楽しみにしていただいている読者の皆様、ごめんなさい。なんとか1日1回ペースを守るよう、頑張りたいと思いますので平にご容赦をorz

7・1<第一の村>

ウルラス川をゆっくりと下流に下りつつ、渡り終えた俺たちは、

船代わりに使ったく甲盾熊の盾を鞆に仕舞い、その先に有ると言う村落に向かって歩いていった。のだが…

「もうそろそろ村に入っではいるのですが、これは…」

ソフィーが周囲を見渡し、疑問のと不安の混じった声を出す。

もう村に入っているらしいのに誰にも出会わないのだ。

そしてなにより、

「野生動物に荒らされた…って感じだけど」

そう、眼前の畑は派手に荒らされて、その後何も手が加えられて居ない感じなのだ。

しかし野党や泥棒など人間に収穫物を獲られた感じではなく、田畑は乱暴に掘り起こされ、

そこかしこに野菜の切れ端らしきものなどが食い散らかされている。徹底的に。

さらに道中の小屋や家々が幾つも崩れ半壊していた。

そして、それらの惨状はごく最近出来たものに見えたのだ。

「人じゃないのは確かだけど、野生動物にしてもこれは…」

野生動物がここまで徹底的に畑や建物を破壊するなんて、今までど
の世界でも聞いた事が無い。

だからこの世界特有の現象、モンスター。という言葉が浮かぶ。

「モンスターがああ川を越えてくる事は無いはずなのですが…」

ソフィーも同じ事を考えているようだ。

確かにそれが一番納得が行くのだが、ありえないハズ、そんな感じ
だ。

「誰か居ないのかな、聞ければ早いのに。」

「そうですね、疑問は尽きませんが…」

想像では限界がありますもんね。と、荒れた畑と崩された建物の間

をててくと進む。

暫く進んだその先に丸太でできた粗末な柵が並んでいるのが見えた。

「この先に誰か居そうだね…」

「そうですね、あ、いえ、誰かこちらに来ますよ？」

ソフィーに言われ目を向けると、柵の間から走ってくる村人らしき人物が見えた。

こちらに向かってブンブン手を振っている。

「おお〜い、あんたら〜何処から来たんだあ〜？」

なんとなくまたトラブルに巻き込まれそうな予感がしていた

7・2<第一村人>

第一村人が現れた。どうしますか

「くはなす

ほおつておく

……

脳内で浮かんだゲーム的な想像を散らす。いやいや流石にこれは失礼だろう。

走ってきた第一村人は、まさに農村村人テンプレのようなボロツとした服を纏い、履物も草履のようなもの。

顔も薄汚れていて赤茶けた髪はボサボサの短髪30代。と言った出で立ちだった。

「こんにちは」「こんにちは」

とりあえず二人で挨拶をする。

「あ、あんたら…ハアハア…何処から…来ただ？」

帰ってきたのは質問。走ってきたせいで息が切れているが、はて、
そういえば何処だ？

日本？前の世界？狭間の世界？いや、そういう答えは求めていない
だろう。となると…

「神殿…からかな？」

「ユートさんっ」

しまった、つい口が滑った。ソフィーが慌てて俺から続く言葉を防
ぐ。

「神…殿…？アルモスの街からでないのか？」

「あ、いえ、そう。旅の途中神殿で巡礼をしまして、王都に向かっ
たのですが、その後ちよつと道に迷って森に入ってしまったので、
仕方なくウルラス川を下って来たのです。」

ソフィーがフォローをする。だが声が上がってしまっている。正直、
苦しい。

「森に？そりゃ災難だったなあ…ここはオサの村だ、旅人さんよ。
今はちつと立て込んでるが歓迎するよ。」

「あの柵ですか。」

「どうやらソフィーの機転は苦しいながらも成功したようだ。」

「村人の男性と3人で柵に向かって歩きながら話す。」

「んだ、実は1週間程前にな、モンスターが来たんだ。」

「そんな、ウルラス川を越えられないはずなのに…」

「んだ、今までも越えてきた事はなかったんだ、んだが何故か1匹だけ来た。」

「それであんな事に。」

「ああ、最初は1匹だったんだが、ヤツはここ数日で急に増えおつてな、昨日なんて3匹が畑を荒らし、それだけに飽き足らず家畜や家を襲ったんじゃない。」

「前にソフィーが言っていたモンスターの増え方を思い出す。」

「新しく来た訳でなく分裂をしたのかもしれない…?」

「討伐隊は…軍の詰め所かギルドに連絡はしなかったのですか?」

「こんな辺鄙な村には両方無いだ…」

「そんな、でしたら最寄の所は…」

「村からだ馬で5日ぐらいの距離のアルモスじゃ…」

軍は兎も角、ギルド？民間の対モンスター対策組合でもあるのだろうか？

ともあれ連絡して、討伐隊が準備をしてここに来るとしても最短で10日以上、ということだ。

そして1週間前に使いを出したとしても、最短であと3日。準備やら何やらで確実にもっとかかるだろう。

「それでは、このままでは…」

「だから柵を作つとるんじや。あいつらは食つばかりで壊すのは2の次じゃからな、柵向こうに食料が有ればわざわざよってはこねえ」

だが、それでも後何日持つか…

村人が消え入るように呟いた。

「……………」

「…いいのかい？」

ソフィーの言いたい事は声音と表情に分かりやすい程出ていた。

なんとかしてあげられませんか。と。

勿論出来る。しかし俺達は追われている身だ、目立つ行動を起こして良いのだろうか…？

「私には見て見ぬふりは出来ません…」

「フフ、そっか。じゃあ異存は無いよ。これでも元・勇者、人助けはライフワークだったからね。」

くすり、と笑って快諾する。

「ライフワーク…？」

「生きている限りやるべき仕事って意味。」

「生きている限り…すごいです…」

…マールが聞いてたら『カッコつけおっからにー！』とからかわれそうなモノだが、

ソフィーは純粹に感動したようで、尊敬の眼差しでこちらを見つめ

てくる。は、恥ずかしくなってきた。

思わず目を逸らし村人へと向き直る。

村人は会話の意味が分からなかったのだろう。「？」と言った感じの疑問符を浮かべている。

だから伝える。分かりやすく、端的に。

「俺がモンスターを退治しましょう。今夜にでも。」

「!？」

村人が驚愕する。

「で、でで、でできるだか!？」

「できます。」

「大丈夫ですよ、ユートさんにお任せ下さい。」

「ほ、ほほほ、ホントだか？モンスターだぞ？」

「何のモンスターか分かりますか？」

「<甲冑猪>だ、<甲冑猪>が3匹いるだ!。」

「<甲冑猪>ですね。問題ありません、コイツ……ですよね。」

鞆を開き、中から<甲冑猪の牙>を取り出す。

村人が目を見開き、そのどう見ても金属製っぽい2m近くある巨大な牙を見つめる

「あ、あんたら森に入ったって言ってたな？討伐隊だったんだか！？」

「そついうわけでも……」

「と、ととととにかく、そつだ、オサに、オサに連絡するだ！」

村人が転びそうな勢いで走っていった。

「…追いかける？」

「ええ、ゆつくり歩いて追いかけましょう。」

ソフィーが嬉しそうに微笑みながら、俺の腕に自分の腕を絡めて歩き出した。

7・2<第一村人>(後書き)

主人公、調子に乗るの巻。

ここからは暫く平和な話が続きます。

7・3<オサ1>

「す、すまねえ、オサのところ案内するだ、ついてきてくれ。」

ゆっくり歩いたらあっさり見失ったので、二人でと村を見学していたらさっきの村人が戻ってきた。

正直何を見ても目新しかったのだが、別段後ろ髪引かれる事でもない。

素直に案内され村長の家に向かう事にした。

「…でかい」

周囲の家の基本は1階建て、まれに店舗らしき建物が2階建て。

だというのに村長の家はさらに大きい3階建ての建物だった。

「…宿も兼ねているのでしよう、この辺りでは唯一の3階建てのようですし」

「村長の家が宿も兼ねるものなの？」

「それはたまたまだと思います。とりあえず村に一つは立派な宿泊施設はあるものなのです。身分の高い人が通りかかって休む時に必要になりますから。」

「へえー」

そういうものなのか。と納得し、開けられた引き戸のなかなか広い敷居をまたいで家に入る。

「オサー！オサー！討伐隊の人を案内してきたぞー！」

村人が中へ入り村長を呼ぶ。

「おー！食堂に通しときなあー！」

奥の方からドタバタバサバサと何かを持ち出し、散乱させて漁るような音と共に

村長？の音が聞こえる。

「…今の声は？」

「若い娘の声のようでしたね？」

村長の娘か何かかな？

とりあえず入ってすぐだった食堂に通されて二人で椅子に座る。

食堂というよりは町の酒場だな、と見渡して思う。

5〜6人がけぐらいのテーブルが4つにカウンター。

これで棚と酒瓶が並んでいたら完璧だ。まああまり酒は好きでは無いのだが。

「すまねえ、またせたな！」

そうこうしていると、先ほどの声が聞こえ少女がやってきた。

見たところ、10歳そこそこ。仕立ての良い感じの白と赤を基調とした衣服をまとい、

ほどけば腰どころか膝裏まではあるだろう見事な白髪を頭の左側で一つに纏めて垂らし、

鮮やかな黒と朱色の髪飾りで留め、軽く結び上げている。

そして印象的なのがやや目尻のつり上がった大きな赤い瞳。

幼いためキツイ印象は無く、元気な少女といった所か。

「遠路はるばるすまねえ、迅速な対応と到着、感謝するぜ。で、…
アンタらが討伐隊か？他の連中は？」

少女がこちらの顔を確認して怪訝な顔をする。だが、

「……」「……」

二人して黙り込んでしまう。どういうことだろう。そもそも何故、この少女は誰？

「あん？どうした？ハトが豆鉄砲食らったような顔して？」

また日本のことわざが出た。そもそもハトが居るのかこの世界？

思考が脱線してさらに混乱する。どうしよう、とりえあえずソフィ
ーに目配せする。

（誰、この娘）

（わかりません）

よし、だめだ。

「オサ、オサ、自覚してください。自分の見た目が子供だって事。」

「あー……っとおいヤス、オレは子供じゃねえ、つってんだろ！」

「ヒイ」

オサと呼ばれた少女が第一村人を睨む。そうか、ヤスっていうのかあの人。犯人はあの人だな。

そしてどうやらこの娘が村長で正解らしい。黙っていてもラチが開かない。とりあえず口を開く。

「えと、始めまして、^{オサ}長さん。俺は『蒼鈴 勇斗』。ユートです。」

「私はソフィーと言います。」

「ユートにソフィー、っと。うっす。始めましてだな。オレはオサ。オサ＝ルトス＝アルストラ。この村の村長やってる。こんなナリだ。が最長老だ。敬ってくれて構わない」

…そういうことらしい。言ってることは分かるが、内用が理解でき

ない。

あと「オサ」というのは村長の「長」で「オサ」と読むのでは無く彼女の名前だったようだ。

まあ村長でも有るらしいが。何かややこしくなってきた。

だがそれよりもさっきの言葉でもう一点、気になった事がある。

「…最長老？」

「おうよ、ホレ、見なこの耳。オレ、長寿族。」

そうやって自分の耳を左右に引つ張る。昔アニメや小説で見たエルフのような長耳では無いが、

明らかに普通の人のそれより大きく、尖った三角の耳。少なくとも今までこんな人間は見たことがない。

そして、長寿族？前の世界は人だけだったが、この世界は亜人も居るのか？

どうやら異世界強度はこちらの世界が上のようだ。

「ルトス…？どうしてこんな所に長寿族の方が…？」

どつやらソフィーにはそれなりに馴染みのある種族のようだ。

「只の家出娘だ。んなことは気にすんな。それよりアンタらが討伐隊かい？他の連中は？まだ着いてないのか？」

「いえ、我々は討伐隊でなく、えと、旅人でして」

「あん？どついうことだ？」

…色々と話に齟齬があるみたいだ。説明しないとダメだろうなあ

7・3<オサ1>(後書き)

ついに現れた亜人系。ファンタジー系のお約束の一つですね。今後
も色々な種族が登場する予定…です。まだ大分後になると思いますが…

7 - 4 <オサ2>

「なるほどねえ。王都に行く途中道に迷って森に入って、ちょっとモンスターを討伐して、ウルラス川を下って来たと。」

さっき第一村人ことヤスさんにざっと説明した話と同じ話をする。

「おおよそんな感じですよ。」

「ふむ。で、目的地はアルモスを越えて、アーリントンってところか？ソフィーリア⇨シルヴァ⇨シュトルーゼ⇨ベルム様よ？」

「！」

ソフィーが固まる。同時に俺は椅子を蹴ってソフィーを抱え背後に飛び下がり、間合いを取る。

相手は動いていない…過剰だったかもしれない。だがつい反射的にしてしまったのだ。しかたない。

「おいおいおい待って。別に何かする気はねーって。てかカマかけただけだったか当りかよ。何やってんだよ王女様よ？」

何故バレた？それに王女、だと？それなりに身分は高いだろうと思

ったが、まさかまた一国の姫様に召喚されていたとは…

兎も角俺には彼女の素性も知らないし、油断はならない。警戒を解かず語りかける。

「何故分かった」

「ハッ。黒目黒髪の男に、董色の瞳に黒髪の女。バカでも見当がつくぞ？<召喚の夫婦>だってな。」

…ソフィーが黒髪だったから気にして無かったが、黒髪は珍しいのか？

「流石は村長さんですね。王家の特徴だけで無く私の名前までご存知でしたか。」

俺の胸に抱きかかえられたソフィーが硬直を解き、話しかける。

「この国の姫様だしな。あとオレを呼ぶときは「オサ」でかまわねえ」

「分かりました、オサ。…ユートさん、大丈夫です。ばれないなんて思ってませんでしたから。ちょっと驚いただけです。」

「…追手とは関係無い、のか」

「追手、ねえ…こんな場所に居るのだから訳ありとは思ったが、キナ臭い話みてえだな。だがまあ安心しな、この村は見ての通りただの辺境の些末な村さ。貴族や王家のゴタゴタなんかには一切関係ねえ、強いて言えばモンスターに襲われて困ってる、程度だな。」

「……………」

冗談めかして言うてはいるが、その目は真剣だ。

確かにこの世界ではモンスターに襲われる事は死活問題に直結するのだろう。

必死さすら感じられた。

彼女の言葉に嘘はなく感じる、ただの直感でしかないが…信じられるのか？

ソフィーに視線を送る。…頷かれた。

ゆっくりと、抱きかかえていたソフィーを降ろし再び席につく。警戒は解かない。

「おいおい今代のく召喚されし者>は何モンなんだ…見たところく意言の首輪>もつけてねーし、てかその殺気やめてくれないかな。息が止まりそう。」

「コートさん」

ソフィーが首を振る、仕方ない、警戒を解こう。だがその前に警告はしておく事にする。

「…俺はこの国の人々の心情とか情勢は分からない。だがコレだけは言っておく。ソフィーを害するなら、許さない。」

「そんな気はねえさ、何もしねえよ、オレの祖先に誓っても良い。心配すんな。」

「…話を戻しましょう。私たちが討伐隊でない事は理解していただけたでしょうし。」

俺が警戒を解き、剣呑な空気が若干和らいだ所でソフィーが話題を戻す。

「この村は現在、3匹の<甲冑猪>に襲われていて、早馬でアルモスの詰め所に救助は求めたが、少なくとも討伐隊到着に後3日はかかる。そうですね?」

「概ねその通りだ。討伐隊が後3日で来る訳がねえと思うがな。…まあ、そのヤスが『討伐隊が来てくれた!』って転がり込んできた時は奇跡を信じかけたがな。」

ジロリ、と縮こまっているヤスさんをオサが睨む。見た目10歳程

度の少女に睨まれ縮こまる三十路の男性。シユールだ。

後ヤスさん、やっぱり話をちゃんと理解できてなかったのか…

「それで、わざわざオレントコに顔出した理由は？正体がバレるのも承知だったみてえだが？」

「私達には特に要求はありません。ただ今夜＜甲冑猪＞を討伐してアルモスに向かいます。」

「…えらく自信満々に言うんだな？モンスターだぞ？それに、要求もない？」

「私は王族、可能である限り民の生活を守る義務があります。それにそれだけの自信に足る理由もありますので。…私達は5日前に＜召喚魔術＞を行ったばかりです。そう言えば分かってもらえますよね？」

「確かに5日ぐらい前に急激にマナが薄れた感があった。でも、確か予定は3年後だったろ？それにあの森を5日で抜けてきたってか？2人で？」

「そうです。」

オサが猛烈に怪訝な顔をする。

「……………本当なのか？ありえないだろ？お宅の軍の精鋭部隊でも

「1月はかかってたる？」

「そうですね、ですがそれでも事実です。証拠を見せた方が良いでしょうか？」

「ああ、有るのなら是非、見たい。」

「ユートさん。鞆を見せてあげて下さい。」

鞆と聞いて腰を見下ろす。途中中身がかなり多くなったので2つ目を貰っていた。

その鞆を2つともベルトから外してオサに手渡す。

…ソフィーに呆れられた俺のコレクションだ。

思い出して、少し、悲しくなった。

手渡された鞆を怪訝そうな顔で一通り眺めてから、中を覗いてオサが固まった。

と、思ったらそのまま凄い勢いでまくし立てる。

「おいおいおいおい、なんだよこれ！？<狂乱鳥><双頭蛇><木人樹><犬狼樹><雪毛鹿><甲冑猪>に<晶眼蟲>！？…何でも有るぞ？それにこっちは…こいつは<甲盾熊>の盾じゃねえのか！？すっげえ！300年そこそこ生きて来たがこんなサイズは

初めて見るぞ！すっげえ！！」

…すごいテンションだ。そしてソフィーさん。何その顔、すごく自慢げですね？ドヤ顔？

「お、お、いいなあこれ、<伐採鼠の歯>、ぱっと見で30本近くあるし何本かくない？

コイツ使ったクワや斧はほんと性能よくなってさあ、欲しかったんだよ……………」

…さっきまでのシリアスな空気は何処に行ったのか、オサが眼をキラキラさせて上目遣いで俺に聞いてくる。

「な、な？こんなにあるんだ。話通りだとお前さんらにはチヨロかったんだろ？幾つか分けてくれよ。色々融通するからさあ……………」

ソフィーに目配せをする。どうしよう？

「ユートさんのお心のままに。私は構いません…どうせ私倒してないですし。ぷー……………」

むくれた。

「おお？これは！<闇夜狼の刃>！…これは鎌に使うのにピッタリなんだよなあ…ほしいなあ…」

なんだろう、欲しい、欲しいと欲目を言っているのだが、邪気というか汚いモノを感じない。

まるでオモチヤの山を前にした子供のようだ。まさに見た目の歳相応な感じ。

なんだか一気に毒気を抜かれてしまった。警戒してたのがバカみただい。

それに不遇だった俺のコレクションもこんなに大好評。なんだか気分も良くなってくる。悪くない。

クスリと笑って答える。

「良いですよ。ええと、歯と刃を幾つかですね。それじゃ代わりに宿と食事をお願いします。こんな状態ですが余剰がありましたら食料も頂けますか？まだ旅は先が長いようですので。」

「え？マジ？分けてくれんの？？こんなの1つあれば10日は宿とれるぜ？大丈夫か？？頭？」

何気に酷いことを言われたが、なんだかもう気にならない。

オサの事が大体分かった気がする。齒に絹着せない人なんだろう。それも全く。

「ええ、何せチヨロいものだったので。折角知り合っただんですから親交の証という事で、差し上げますよ。」

「うっひょー！お前いいヤツだったんだな！目つきわりいなコイツ、ムカツクし。とか思ってた悪かった！愛してるー！」

文字通りテーブルをピョンっと飛び越えたオサが首に抱きついてきて頬にキスをされた。

うーむ。300歳そこそこと言っていたが外見は10歳程度。飛びつかれても軽い軽い。

「そつと決まれば部屋とか用意するぜ、おいヤス！シズクとアンナ呼んで来い。晩飯作らせるぞー！」

「わ、わかりやしたー！」

首に巻いた腕を解き、ピョン。と軽い感じにオサが抱きついた俺の首から飛び降りヤスさんに指示をする。

「さつて、オレは部屋の用意をしてくるぜ。あんたらはこれからど

うつする？ヤツらは夜行性だからまだ当分こねえし、村でも見て回るとくかい？」

どうしようか？と思ってソフィーに確認しようとして視線を回し…止まる

凄くニコニコと満面の笑顔を浮かべこちらを見て、ピクリとも動かないソフィーがそこに居た。

何故だろう、笑顔が怖い。笑顔の後ろから黒々としたオーラが放たれているような…

「ソ、ソフィー？」

「はい、なんでしょう？ユートさん」

「これからどうしよう？夜まで時間が結構あるみたいんだけど？」

「どうしてくれましょうか？」

…何かおかしい言い方だったような

と、不穏な空気を放つソフィーに戦々恐々としていると、

俺から離れたオサがソフィーの傍へトテトテと歩いて行き、何かを耳打ちする。

なんだ？

「実はよ、……………なんてどうよ？……………だろ？」

「……………魅力的ですね」

「そうよ、どうせ朴念仁なんだろ？なら……………」

「なるほど、そんな方法で……………」

「あとほら……………すれば」

「いいですね……………」

「だろ？だから……………えないかなあ？」

「……………分かりました。説得してみせます。」

ナンダロウ。何力不吉ナ予感ガスル。

「ユートさん。食料を融通して貰えるそうです。あと服の洗濯等もして頂けるそうですので、今夜と明日の夜は宿泊させていただいて、明後日の朝にアルモスへ向かいますよ。」

オサと小声で何か話し合っていたソフィーが話を終え、こちらに語りかけて来た。

…さっきと違い黒々とした気配は無いのに、ものすごい不安になる
笑みだった。

7-4<オサ2> (後書き)

最近ストック消費量>書き溜め速度になっているので焦りが出てくるのか

ちよつと展開が強引だったかな…?と考える昨今。

先達の皆さんの文章力と構成力と胆力に感心し続ける毎日です。

7・5 <猪退治1>

ヤスさんは、ルヤース＝シクラという名前だった。

どうでもいい事では有ったが、少し意外だった。オサの命名で「ヤス」と呼ばれていたらしい。

アンナさんことアインス＝レジーナさんが洗濯物を手渡した時に教えてくれた。

オサの略称の決め方は変だ。と

俺もそう思う。

そして少し早めの夕食をオサと3人で囲んで、久しぶりの料理らしい料理に舌鼓を打った。

メニューは香草と穀物を詰めた鳥の蒸し焼きや、肉と野菜の炒め物。他にも旅の合間にお世話になったスープの進化版と言った物や、野菜のサラダとチーズ、そして齒ごたえのある丸いパン。

山間の村だというのに、塩味もしっかりとしていて美味しかった。塩は潤沢なのかもしれない。

だが、我々のために奮発してくれた可能性もあるので、感謝だけして触れないでおくことにした。

そして数時間後

日が暮れて然程の時間も経っていない今、ヤスさんと出会った柵の当りに俺は立っていた。

「で、どうしてここに居るんですか？」

残念ながら一人では無かった。

「えっと、その、ユートさんと離れたくありませんでしたので…」

と言ったのはソフィーだ。彼女は追われる身でもある、一人は心細いのもかもしれない。確かに仕方ない。

だが問題はもう一人。

「折角の機会だからな。〈召喚されし者〉の実力も見たかったしな
！」

元気一杯に返事したのは、さっき見たときと違い普通な感じの服に着替えたオサだった。

なかなか良い服だなー、とは思っていたが、あれは客を迎えるため

の礼服のようなものだったのだろう。

とはいえこの服もヤスさん達に比べると大分良い物に見える。…まあ似合っているならそれでいいか。

とまあ、そういうことで2人でもなく今ここに居るのは3人だった。改めて頭を抱える。

「そりゃ見られて困るものでも無いですけど、危ないかもしれませんよ?」

「わーってるって。でもさーあのく甲盾熊>を一人で蹴散らした猛者と聞いちゃさー」

ソフィーもく時鎖緊縛>で頑張ったんだどなー。と心の中で語り、チラリとそちらを見る。

夕食時、オサに身振り手振り付きの熱意のこもった解説を繰り広げた当の本人はうんうんと頷いている。

「それにく甲胄猪>なら一瞬で倒しちまうんだろ?なら安全そうだし、この目で見たくもなるってモンだろ?」

「はあ、まあ良いですけど…」

「にじしし、ケチケチすんな。女にカツコ良いトコ見せてくれよ、

色男。」

「…こんなちっこい子に言われても」

「あ？今オレを子供扱いしたな？これでもてめえよかかる〜〜く10倍以上生きてんだぞ！……そりゃまあ、性格は外見に引つ張られちまうんだけどよ……つきしょうもつと……さえあれば…」

「ご、ごめんごめん、悪かったって。あと最後の方聞こえなかったけど何て…？」

「うっせー気にすんな。ほっとけ。」

ブイツとそっぽを向くオサ。言葉のワリに別に怒っては居ないようだ。

大体わかった。この程度は言葉遊びのじゃれ合いか。

気を取り直して気配を探る。まだかなり離れているが、捉えられた。

「来たみたいだ。」

「…来たか」「来ましたか。」

一転、緊張が走る。ソフィーは見慣れていてもモンスターに対する常識がある。

そして俺の戦いを見たことの無いオサはことさらに緊張感を露にしていた。

「行こう。」

二人が頷く。暗闇を徒歩で進もうとしたら、オサが呪文を唱えた。

「 - L t o - D v a n c d n d t D a i r e l u v o i
r e s u l i n u i -
オウル・アイズ
< 梟の目 > 」

魔法名が聞こえると同時に視界が明るくなる。

「へえ、夜目の魔法か。便利だね」

「お前さんには要らないようだがオレは無いと見えないんでな。」

「私はありがたいです。ユートさんの顔も良く見えますね。」

別に急ぐ必要も無い。鞆から<刺突兎>の角を5本取り出しながらゆっくりと歩いて気配のする方向へと進んだ。

「いた。」

距離およそ200m。建物の残骸の陰から3mはあるく甲冑猪くを2匹、視認する。

畑に鼻っ面をつっこみ、その下あごの先端から伸びた巨大な一角の牙で掘り起こし、ブモブモと何かを食べている。

こちらには、まだ気づいていないようだ。

2人に目配せしておいて、飛び出し、一気に駆ける。

一瞬で残り50m付近まで近づき両手に持ったナイフを投擲、

それぞれ脇腹・背後にナイフの一撃を受けた2匹が地面を転がるように吹き飛ばす。

巨体と金属製のような体毛のせいか、ナイフは完全に体内深くまで突き刺さるのだが貫通には至らないのだ。

そのせいで、派手に吹っ飛んでいく。

まず2匹。

さらに突進の勢いそのままジャンプし、先ほどの2匹の奥に居た3匹目の頭上を飛び越えつつ3本目を投擲。

斜め上からナイフで背中を貫かれたく甲冑猪が地面でバウンドし、事切れた。

3。

向きを軽く調整して着地する。と、同時に残った2本を投擲する。距離5 m程の至近弾。

俺の着地点目掛け猛然と突撃していた2匹のく甲冑猪が頭から貫かれ、つんのめり、

少しだけ地面から浮き、バウンドし縦回転しながらこちらに転がってくる。

着地と同時に両手で投擲した為、とっさに横に行けない。ここは乗り越えよう。

とりあえず転がってくるく甲冑猪の片方を跳び箱よろしく片手を付いて飛び越える。

これで終わりっつと。

背後で最後に打ち抜いた2匹がぶつかり、動きを完全に停止したころにはもう体が崩れだしていた。

7・5<猪退治1>(後書き)

7/2 誤字修正しました。

7・6＜猪退治2＞

「話には聞いてたが…とんでもねえな」

しばらくぼかんとしていたオサが、ナイフと牙と＜魔晶石＞を拾い集めていたらポツリと呟いた。

「無理ありませんね…」

ソフィーがしみじみと言う。実体験に元づく言葉だけに重みがある。まあ、概ね予想の範疇の反応だ。

だが、そんな事よりも気になった事がある。

「5匹、いた。」

そう、気配を探った時に5匹の魔力反応を感じていたのだ。

「みたいだな、昨日は確実に3匹だった。一昨日は2匹、その前はずっと1だったんだが…」

「分裂…？それとも何処かからここへ来ている…のでしょうか？」

実際殲滅したのも5匹。どういう事なのか。昨日、今日で増えたとしても言うのか？

それとも新しくこの村にやってきた？

「分からない、だがとりあえず今はもう他に気配は無い。」

「＜召喚魔術＞後だからな、きつと一気に分裂したんだろうさ。前例がある。」

「そう…なのですか？」

オサが続ける

「そうだ。＜召喚魔術＞直前は固体の強さが一番高い、そして＜召喚魔術＞直後からマナが減少すると急速に分裂したして数が増えるが、固体は平均より小さく、弱くなる。理由は知らないが、オレの故郷の記録ではそう言われてた。」

だからお前さんのトコの討伐隊も召喚1年後に活動を開始してたんじゃねえのか？とオサが続ける。

「なるほど…長寿族の一族の方の記録でしたら間違いは無さそうですね。」

「…確かに、辻褄も合うね」

5匹とも魔力反応も弱く3m程度の小柄な体躯でしかなかった。

森で出会ったのは5〜6mはあったのだ。

「…何だか全然納得いってないように聞こえるんだが？」

オサが俺の言葉の調子に込められた意味を読み取り、心外だと言わんばかりの顔でこちらを睨む。

「念のため、だよ。他の可能性が無い訳でもない。そもそも川を越えてモンスターは来ないんだろ？」

「まーな。だがそれも確実じゃねえ。出来ない事はないがやらないっただけだ。実際この村を作ったころはここにもモンスターが居たしな。」

「どちらでも、辻褄が合うのですね…。」

「…。」

一つ、考える。だが、今許される事なのだろうか。そう思いついたらりとソフィーを見る。

「いいんですよユートさん。」

ニツコリ笑って頷いてくれた。やはり顔に出てしまっていたようだ。

…なら、遠慮はいらないか。

「オサ、もう2、3日泊まって行ってもいいか？これでモンスターが倒しきれたのか分からない以上、念を押しておきたい。」

「…いいの？いや、だがなんでそこまでしてくれるんだ？そこまでの義理もねえだろ。…まあ願っても無い話なんだがな。」

オサが戸惑う。内心嬉しいのだろうが、ここまで親身になって貰える理由が無い。何か裏でもあるのか？と言いたそうな感じだ。

だから理由を告げる。単純で、人によっては間抜けな理由だが。

「これでも元・勇者なんでね。」

「…クス、仕方ないですね。ライフワーク。ですものね？」

「その通り」

「ライフワーク??」

言葉の意味が理解できないのかオサがさらに疑問符を浮かべていた。

8 - 1 <風呂1>

「そつだ、風呂にでも入ったらどうだ？」

<甲冑猪>の討伐を終え、オサの家に帰り着いた所で唐突にオサが言い出した。

「風呂が、有るのか？どんな？」

「ジオの木製の風呂だ。でけえぞ？10人は浸かれる。」

「さつき出かける前にヤスに湯を張るように言っただけだ。お前らの貸切さ。」

「なあに一仕事してくれたんだ。ゆったり湯船に浸かって旅の疲れをほぐしてくれよ。な？」

浸かる、湯を張る、湯船、という単語に反応する。これはもしかや本当に「風呂」なのではないか？

そういえばこの国は水資源が豊富だと言っ話を思い出す。ならば王侯貴族の道楽でなく、

こんな一般庶民にすら入浴という文化が芽生えてもいいのではないか？

「男湯と女湯ってあるのか？」

「ねえよ？お前ら＜召喚の夫婦＞だろ？二人で入れよ。あ、多少なら粘っこのいで汚してもいいぜ？」

オサがうへへ、と下卑た笑いをこぼした。この見た目10歳、何て事を言うのか。何で汚すというのか。

ソフィーも想像したのか顔を赤くしてチラチラこちらを見ている。だが、そうはさせない。

「じゃ、ソフィー、先に入っててよ。俺はこの中身をオサに分けてくから。」

と、腰の鞆を指差す。何のことは無い、適当に言い訳をして分かれて風呂に入るのだ。そしてここはレディーファーストだろう。

「ああ？いや分けてくれるのは嬉しいが、おめえそれは……………」

オサが「うわ、ダメだコイツ。」といたげな目をする。うるさい、ほっとけ。

「では私もその後で入ります。一緒に入りましょう。」

「え？」

ソフィーが賛同してくれなかった。

「いやいや、一緒に入るとか、マズいでしょ？」

「そんな事はないです。」

「じゃ、じゃあ俺は疲れてないし今日はいいよ。ソフィーは入ってきなよ。」

「では私も遠慮させていただきます。戦ってないですし。」

ああ言えばこついつ。どうしよう。

「折角お前らの為に湯を張ったのに…風呂沸かすの大変なんだぞ。入ってくれよ？」

オサが追い討ちをかけてくる。だが、何故そのセリフでニヤニヤ笑っている？

「わ、分かったよ。俺が先に入る！ソフィーはオサに鞆の中身分けといてくれ。風呂はどっち？」

「ここを出て右に行つて突き当たりを左。そのまま真っ直ぐ行けば脱衣所だ。着替えはもう用意してある。使つてくれ。」

「なら、私も「それはダメ」むー」

ソフィーがむくれる。

「諦めろ、このヘタレはお前と入るのは嫌だそうだ。まあ今はその中身を分けてくれ、終わつたらオレと入ろうぜ。」

「それじゃ意味が…いえ、そうですね分かりました。ふう…仕方ありませんね。ユートさん、先に入っていてください。後でオサさんと行きますから。そうですね。ゆっくりと入っていてくださいね？」

オサの言葉に渋々ながら納得するソフィー。

オサ、いいぞ、ナイスフォロー！

心の中でサムズアップ。すぐさま鞆をソフィーに手渡し、「じゃ、いってくるから」と言い残して小走りに風呂に向かう。

パパッと入って軽く体を洗つて上げればいい。歯と刃を幾つかと言つても少しは欲目が出るだろう。そこそこ時間が稼げるはずだ。

上がる前に済ませて追う気なんだろうが、こちとら烏の行水覚悟だ。交渉が終わる前に上がってしまえばこの難局は越えられる！

右、左、まっすぐ。意気揚々と脱衣場に向かった。

「いったな」

「ですね」

「さて、追つか。アイツが風呂に入ったら即、行くぞ?」

「勿論です。」

「へへへ」

「ウフフ」

二人の笑い声が廊下に小さく響いていた。

8 - 1 < 風呂 1 > (後書き)

日本人には切っても切り離せないモノの一つだと思っんですよね、風呂。

その内書きたいと思っていました。

そのせいか何なのか案外サラッと書けたので、1日2回の12時間更新にここから4話程戻りたいと思います。

「あ、ユート様。お待ちしてました。これ、着替えと石鹸です。今着ているものは脱衣所のどれかの籠に入れておいてください。後ほど回収しておきますので。」

オサとソフィーと別れ、風呂へと向かった俺は脱衣所に突入する直前にシズクさんに呼び止められていた。

…まさかずっとここで待っていたのだろうか？

ちなみに彼女の名前はシズネ。フォーケルと言うらしい。確かに名前にシズクの文字はあるがその略し方は無い。シズネさんでいいと思う。…まあ今はそんな事を気にしている場合でもないか。

幾らなんでもそんなまさか、たまたまだろう。と思いつつもとりあえず受け取って脱衣所に入る事にした。

脱衣所の中はことのほか広く、壁際に置かれた棚には籠が並んでいた。

暖簾のれんは無かったのだが、まるで銭湯見たいだなあ…としげしげと眺める。流石に体重計は無い。

…いけない。時間が無いんだった。

悠長にしている場合じゃあない事を思い出し、そそくさと服を脱いであいた籠に仕舞う。

さつき貰った小指の先程の石鹸と、たたんで置いてあった手ぬぐいらしきものを取り、奥の扉を開いた。

「おお、風呂だ…」

思わず声がでてしまった。幾つかの照明で照らされた風呂場は、シヤワーや蛇口や鏡こそ無いもののまさに銭湯のような感じだった。

踏み出す。足の裏に当たる白い木の床はすべすべで、何かでコーティングされているように感じる。防水加工がされているのだろうか？

そのまま隅に積んである桶を1つ取って、湯船の傍にしゃがみお湯をすくうと共に温度を見る。少し熱めの気もするが、いい湯だ。

とりあえずかけ湯。全身を濡らし、石鹸を伸ばしタオルで擦る。あまり泡が出ないようだが、そういうものなのだろう。

全身にこすり付けて流す。後は軽く湯船に浸かればいい。

まだ大して時間は経ってないし、少しぐらい浸ってもいいか…と思いい湯船に足を踏み入れ、奥へと進み座り込んだ時だった。

ガラリ。と脱衣所に繋がる扉が開かれた。

コートを追ってすぐさま脱衣場に向かったソフィー達は、入り口の前に待っていたシズクさんから情報を聞き出していた。

「…シズク、コートは？」

「既に中に。まだ扉の開いた音は無いので今は脱衣中かと。」

オサとシズクさんが小声で状況を話す。

既にここまで計画済みだったのだろう。会話に無駄が無い。この人は…

感心すると同時に思う。困った人だと。

「少し待機だな。」

私もその言葉に依存はない。もっと逃げられない状況で突入するべきだと思っからだ。

そして提案と言うよりも確認をする。

「ええ、湯船に浸かったあたりを狙いましょう。」

「そうだな。とりあえず風呂場に入って閉じる音が聞こえたら行くか。」

確かに、私達が衣類を脱ぐ時間も必要だ。だが、少し気になった。

「わかりました。ですが、オサ？貴女も入るのですか？」

「勿論だ、こんな面白そうな事に参加しないなんて祖先だって許さねえ。」

「…そうですね。邪魔にはならないで下さいね。」

「わきまえてるさ。」

本当にわきまえて居るのか不安になるが、今回のお膳立てはオサだ。

先ほどユートさんを巧妙に誘導した時といい、彼女は最早協力者というよりも共犯者と言った感がある。

ある程度の事には目を瞑ろう。

ガラガラ、ピシヤ。

ユートさんが風呂場に入った。ここで脱衣所に…と思ったのだがオサが止める。何故！

私が止まった隙にシズクさんが突入する。そうか、まず斥候を送るのか。納得した。よく考えている。

中を確認したシズクさんが手招きをする。そこで初めて私とオサが突入する。

脱衣場の中は綺麗に清掃されていた。水場なので汚れやすい筈なのだが、行き届いている。

感心している間にポポーンとオサが服を脱ぎ、湯浴衣を取る。

その肩口に通し、開いた前を右、左と揃えて、付いていた紐を縛る。標準的な湯浴衣。

私も遅れては居られない。素早く服を脱ぎ、簡単に折り曲げて畳み、籠に入れる。

そして同じように湯浴衣を纏う。石鹸とタオルをとって、準備は出来た。

そろりと扉に近づき中を伺う。覗く事は出来ないので音で確認する。

どうやら鼻歌交じりに体を洗っているようだ。

いきなり入る事はせず、体を洗ってから湯船に浸かるのだろう。

お湯をなるべく汚さない為の配慮だろうか？

そうこう考えている内に向け湯を何度か行つ音がして、じゃばじゃばと湯船の中を進む音が聞こえた。

今だ。

「いきます。」

「楽しみだ。」

二人で扉を開き、風呂場へと突入した。

振り向けばそこは、桃源郷だった。

…何を思っているんだ俺は？いや、あながち間違っても…いやいや
そういう問題じゃないだろう？

どうやら混乱しているらしい。頭の中を整理しよう。

軽く体を洗い、まだ時間はあるだろうと湯船に入り、湯船の中を歩
いている最中に、背後でガラリと扉が開いた音がした。

うん。そうだ。

そして振り返ってみると、湯浴衣らしきものを纏った黒髪と白髪の
2人の少女が立っていた。

「……………」

一瞬の空白、そして相手が誰かを理解すると共に正常な思考が戻っ
てくる。

（ななな、何故だ！？幾らなんでも早すぎる！）

そう、予想ではまだもっとかかるはずだったのだ。

（どうする！？逃げる？隠れる？何処に？隠す？何を？ナニを！）

殆ど単語で思考する。自分が焦っているのが自覚できる。

即座に頭部のタオルをとり、しゃがみこむと同時に股間を隠すように沈める。湯船にタオルを！なんてマナーを言ってる場合じゃない。

「ななな、なんで!？」

「おうユート、きたぜ。」

「お待たせしましたユートさん。お背中、お流ししますか？」

そう言ってソフィーはこちらの居る湯船へとにじり寄り、オサが桶を二つ取り、一つ投げる。

受け取ったソフィーがそのままかけ湯をし、オサも続く。

湯で濡れた薄い湯浴衣が肌に張り付き、白い肌に一際目立つ桜色の部分が、薄く透ける。

(どうする、どうする、どうする?)

混乱し動けないで居るとあれよあれよと言う間に桶を置いた二人が湯船に入り、にじり寄って来る。

直視できない、目の置き場が無い、そして逃げ道がない。

それでもジリジリと往生際悪く横にずれて行ったのだが、ほどなく角に追い詰められてしまった。

「へへへ、往生際が悪いぜ？」

「一緒にゆっくり浸かりましょう？」

（何か、何か、何か、）

何も、思いつかない。

「か、体！体洗うから！！」

なんとか思いついた言い訳を叫び、二人の間を抜けて湯船から抜けようとする。

はっし

「でしたら、お背中お流ししますね。」

満面の笑顔を浮かべたソフィーに捕まった。

手を離してくれない上、そのまま体を押し付けるように擦り寄って来られてはひとたまりも無く。

俺は仕方なくすごくごと風呂場へ上がり、最後の抵抗と言わんばかりに壁に顔を向けた。

(煩惱退散、 煩惱退散、 煩惱退散)

ソフィーが俺の背中を石鹸をつけたタオルでゴシゴシと擦り始める。

… 先ほど網膜に焼きついた艶姿が浮かぶ。

(煩惱退散、 煩惱退散、 煩惱退散、 煩惱退散！)

慌ててその思考を乱し、消そうと試みる。

マールのニヤけた顔が浮かんだ。畜生、負けてなるものか。

そうやって俺が自制心を鼓舞しだした所に、

大人しく？湯船で泳いでいたオサが、すい〜っとこちらにやって来た。

(どうしてこうなった。 どうしてこうなった？)

答えの無い疑問。 兎に角脱走する方法を考えよう、とした時だった。

「ちよっつお前、何でも履いてねーんだ!？」

オサが唐突に叫んだ。

「え?」「え?」

二人の声がハモる。

「ゆ、湯浴衣あつたるーが!なんですっぽんぽんなんだよ!？」

すっぽんぽんとか久々に聞いた。うん、でもそれ所じゃないんだ。

オサが顔を真っ赤にして湯船から上がり、俺たちの背後を走り抜け脱衣所に顔をつっ込んで叫ぶ。

「シズク!ユートの湯浴衣とつて!」

そうか、男用の湯浴衣もあつたのか。というか走るの危ないぞ、などと考えていたら、

何時の間にかソフィーが俺の腰を巻くようにして股間を覆っていた

タオルを掴み、ハラリと引き解いた。

「!!!??」

ちよ、な、何をするんだこの娘は!?

咄嗟に手で露になった股間を隠しつつ、肩越しにソフィーを振り返る。

その犯人であるソフィーは「きゃー」とでも言いたそうな顔を両手で塞ぎ、指の間からバッチリ両目が覗いている。

…これいじょういけない。視界の端、ソフィーの足元に見えた俺の腰から外されたタオルに手を伸ばす。

と、同時にソフィーの手も伸びていた。手を伸ばした、ガードの開いた、俺の股間に。

「!!!??」

背中に、ぴったりと密着される。むにゅん。と、犯罪的な、柔らかい感触が二つ。当たっている。

さらに、伸ばされていたソフィーの指先が敏感な部分に触れる。

思わずタオルを掴もうとしていた全身が硬直する。

むに。むに。

触れた指が感触を確かめるように動く。

まずい、予想外の刺激を受けたことにソレが反応し出す。聞かん坊が目を覚ましかけている。

このままでは、危険。最早、一刻の猶予も無い。

がばつと立ち上がりソフィーを振りほどき脱衣所へ向かって走る。

オサが走っていたのを危ないな、とか思っていたがそれもどうでもいい。ここは、危険だ！！

急ぐ、意識が戦闘モードになりつつある股間に向きすぎて、当然く強化魔法くなんて発動しない。

それでもあつという間に誰も居ない脱衣場の扉の前にたどり着き、

ガラッ！と一気に扉を開いた。

やった、逃げ切っ……………た？

俺の目の前に男用の湯浴衣と思われる布を持ったオサが居た。

OK確認しよう。

俺の格好

全裸、タオル無し。

両手、扉を握り開いている。ノーガード。

聞かん坊改め聞かん棒、元気度水平越え+30度ほど。今だ上昇中。

オサ

外見、10代の小柄な少女。

ソフィーと同じく湯浴衣は濡れ、透けてしまつて色々丸見えである。

現在、俺の真正面で硬直している。

つまり、遮蔽物は一切無く、

身長差の関係でやや元気になつてしまつている聞かん棒はオサの顎先へと向かつて突き出され、

あたかも鎌首をもたげた蛇が如くであり、その距離僅か10数センチ

手。と言った所だった。

俺の顔を見上げる為やや上を見ていたオサの顎が引かれる。

視線が、そこにたどり着き、焦点が合わされる。

「ひっ」

オサの口から一瞬だけ吸い込むような悲鳴が漏れる。

「ふう~~~~~」

そのままパタリと仰向けに倒れた。

「ちょっと、おい、オサ！大丈夫か！？おい！？」

完全に気絶していた。

「うっ…ありえない…バケモノ…」

気絶したオサをシズクさんとソフィーが見ている。何か呻いていたが忘れよう。

今は、チャンスだ。

オサが持っていた湯浴衣で股間を隠し、そそくさと自分の着替えの入った籠に向かう。

<強化魔法>を一瞬発動。濡れた体から泡や水を切る。

普段は汗や血を弾いたり水場で戦う時に使う<強化魔法>をこんな事に使うことになるとは…

急いで着込んだ着替えの服は、あんまりしっかりした生地ではなかった。

何というか、柔らかい。パジャマ…だろうか？

ともあれ、そのまま3人を残し脱衣所から逃げ出す。行く先は分からない。

ふらふらと来た道を辿り、食堂にたどり着く。そのまま適当な椅子

に腰を落とし、頭を抱えた。

さ、触ってしまいました。

オサの声にはっとしてつい手ぬぐいを取ってしまったのですが、触るつもりまではありませんでした。

ただつい見えていたそれを塞ごうと、手を伸ばしてごく一部だけを視界から塞ごうとした時に、

ユートさんが振り向き、こちらに寄りかかって来てしまったための事故、でした。

私の前面とユートさんの背中がしっかりと密着し、私の左手は防ごうとした先のモノに触れていました。

その左手に触れたモノは柔らかくて、やや固い、不思議な感触でした。

思わず、むに。むに。と感触を確かめると、ユートさんがおもむろに立ち上がり、逃げ出しました。

ガラリと扉を開けドサツと誰かが倒れたような音がしましたが、私

はそんな事より左手の感触を思い出していました。

予定外の接触でした。効果もきつと予定外。吉と出るか、凶と出るかは分かりませんが。一歩進んだことは確かです。

とりあえず落ち着こう、と桶で湯をすくいかけ湯を。

…したところでシズクさんの「オサ！オサ！」という声が響きました。どうしたんだろう？

チラリと視線を送るとそこには仰向けに倒れたオサと、それを心配そうに診ているシズクさんがいました。

ユートさんが攻撃した訳は無いと思うのですが、少し心配でしたので私もオサの元に向かう事にしました。

今回のアタックは彼女の協力の賜物でしたし、共犯者ですしね。

暫く経ってオサが意識を取り戻しましたので、二人で体を拭い、着替える事にしました。

柔らかなパジャマ。

この豪華なお風呂といい、こんな辺鄙な村なのにこんなものがあるなんて…本当に意外でした。

オサの趣味で用意されているのでしょうか？つくづく長寿族は侮れ

ません。

そのオサは、着替えをしている間私を哀れむような目で見ていたのですが、理由は教えてくれませんでした。

哀れまれる覚えが無いのですが…ユートさんに逃げられた為でしょうか？

「痛いぞ、あれは、がんばれよ…」

意味が分かりませんでした。

脱衣所を出て、ユートさんを探す事にしました。

事の他あっさりと食堂で見つけたのですが、頭を抱えたユートさんは

「マールと同じ、マールと同じ、マールと同じ、騙されるな、畏だ、畏だ、」

とブツブツ呟いていました。

マール？

以前にもユートさんの口から何度か聞いたような気がします。

誰かの名前、でしょうか？ユートさんの口からは聞き覚えがない言葉がよく飛び出すので、物なのか人なのか魔法なのか、なかなか判別が難しいのですが、どうもこれは人の名前に感じます。

それも女性で、かなり親しい。

ちりり、と胸の奥で何かが焦げるような感じがしました。

今日はもうさっきのお風呂で十分、と思っていたのに。

昼間オサの話にあったもう一つの仕込みを強引にでも使わせて貰おう。と誓いました。

8 - 4 < 風呂4 > (後書き)

風呂回のラスト。妙にサクサク書き進められたので、書いて居て凄く楽しかったです。

次回からはまた1日1回更新に戻ります。

とは言いましても次回はこの12時間後ではありませんが。

8・5<一日の終わり>

「あー酷い目にあつたー」

風呂から上がったソフィーとオサと合流し、寝室に案内される道中、照明具を持って前を歩くオサが呟いた。

酷い目にあつたのは俺じゃないだろうか。いやだが、眼福、役得と思えば実は良い目に有つたのかも知れない。

何とも言えない複雑な気分だ。…素直に喜べる性格ならどれだけ気が楽だつたらう。

今は3人、縦に並んで歩いているので後ろのソフィーを意識する。

さっきの風呂でのしどけない姿、そして密着した時の柔らかな感触をつい思い出してしまふ。

いけない。今の自分はガードが下がっている感がある。これ以上は危険だ。

「ここだ」

目的の部屋に着いたのか、ガチャリとドアを開いてオサが先に入り、

俺たちを中へと促す。

ここはドアノブなんだな…

いままで引き戸だったのに何故かドアノブ付きの部屋だった事に疑問を抱く。

だがまあ不思議だが気にする事でもないだろう。そのまま部屋に入ることにする。

中に入り見渡す。部屋はあまり広くは無い。だが、問題はそこではなかった。

「オサ、ベッドが一つしか無い気がするんだが？」

言葉の通りだ。部屋には横幅の広い正方形に近いベッドが一つと棚が大小各2つ。そのぐらいしかない。

「見えるのかよ…もう魔法切れてるよな？」

そう言ってオサが入ってすぐの小さい棚の上にある照明具を点灯する。部屋がほんのり明るくなる。

あれも魔道具だろうか？そんな事よりベッドの方が問題だ。

「んだよ、お前ら<召喚の夫婦>だろ？ベッドが一つなのは当然じやねえか…」

「そんなこと言われても…」

「さっきの風呂といい…お前もいい加減諦めるよ。悪い話でもねえだろ？それとも何か？誰かに操でも立ててんのか？」

「そういつつもりでもないんだが…」

後ろめたい。ティーナの事もだが、マールの事もだ。

死んだ人間はもう何も語らない、語れない。

だからティーナには俺の幸せを祈ってくれと想う事で、ごまかして来た。

だがマールはどうか？

今彼女は俺とソフィーの為に限界まで力を使い、眠っている。

その間にソフィーとそんな関係になるなど、だまし討ちも同然ではないだろうか。

いくらマールが構わない。と言っていたとしてもだ。

「だめだ、俺はソフィーとはまだそんな関係にはなれない。」

二人の事を思い出し、気を引き締める。

「だがよお今更他の部屋を用意するのは…」

確かに、すでに時間は深夜で夜間照明がこの程度なのだ。厳しいだろう。

「なら俺は床で寝るからソフィーは…」

「端と端で寝れば大丈夫です。何だったら私が床で寝ても構いません」

厳しい口調でソフィーが俺の提案を切つて落とす。

「ソフィー？」

「ユートさんはもう5日も寝てないのでですから、きちんと眠るべきです。そして、眠るならベッドを使ってください。」

「いつ…か…？」

オサがまたマジかこいつ？と言った目で俺を見る。

ああ、そういえばもうそんなになっていたのか…

「でもソフィーだっつてずっと野宿で、地面で、熟睡なんてできなかつたろ？」

「私は毎日寝させてもらえました。お願いですから、これ以上引け目を感じたくないんです。」

ソフィーが懇願する。「このままでは本当に床で寝てしまうのではないだろうか？」

…ベッドの広さは十分ある。俺は………ソフィーの案を選んだ。

「分かったよ、それじゃ、端と端で。節度を持って。」

「はい」

「まとまったかー？それじゃオレは行くぞー？」

「ああ、お休みオサ」

「お休みなさい」

「おやすみー」

そう言い残してオサが出て行った。

眠る前にもう一度部屋を確認する。

ここは3階で窓は1つ。頑丈な作りだ。窓からの襲撃は無いだらう。

ドアは普通の木と金属製のノブ。はっきり言って簡単に蹴破れる。もしもの為に俺がドア側だな。

よし、と決めてベッドの真ん中あたりに座って物思いに耽っているソフィーに話しかける。

「俺はこっちで寝るよ。」

「そうですね、では、私はこちらで。」

ソフィーが真ん中から反対側へと離れる。妙に素直だ。

先ほどの風呂での積極性を思い出すと何か有るのではないかと疑ってしまふ。

とっているとソフィーはそのままベッドから離れ、こちら側へと回り込んでくる

どきり、とする。

だが、そのままこちらへ来る訳でなく、オサが点けて行った明かりの元へ向かう。

「明かり、消しますね。」

明かりを前にソフィーが言う。

俺が使えないだろうという配慮なのだろう。

「…あ、ああ」

若干声が上ずってしまったが、そう答えるとすぐに照明が消えた。

そしてソフィーが俺の側を迂回し、ベッドの反対側の定位置に入る。

…杞憂だったかな

俺もベッドの端に背を向けて寝転び、眠ることにした。

…久しぶりの柔らかい寝床の感触に落ち着かず、なかなか寝付けない。

ベッドについて暫く経ち、眠れはしていなかったが沈黙して居ると、背後のソフィーがこちらに擦り寄ってくる気配を感じた。

振り向く事無く小声で語りかける。

「…ねえ、ソフィー」

「…なんでしょう」

声はかなり近い。きっとその気になれば今すぐにでも俺の背中に抱きつけるだろう。

「今は、待って欲しい。」

だから、止める。

「…今は、と言つことは将来的には可能性がある、と信じていいのですか？」

「あぁ。」

「……………でしたら、待ちます。」

少し長めの沈黙の後、ソフィーがため息をつきながら答え、離れる気配を感じる。

「じめん」

「ですが、あまり長くは待てませんよ？」

ソフィーの声が聞こえる。元の位置で向こうを向いて話しているようだ。

「そんなに長くは待たせない…つもりだよ。答えは、出すぞ」

「…私の認める答えは一つしか無いですよ？」

「それも、わかってるぞ」

「なら、いいです。」

「ありがとう」

「どづいたしまして」

会話が終わり、再び静寂が降りる。

「それじゃ…寝るぞ」

「おやすみなさい、ユート」

「おやすみ、ソフィー」

緊張が解け、程なくして俺は5日ぶりの夢の世界へと落ちていった。

8・5<一日の終わり>(後書き)

指摘頂いた一部名前が間違っ
て居た部分を修正しました。(2回目)

7/6

9 - 1 < 俗に言う、修羅場? >

5日ぶりの眠りの明ける朝は、少し目覚めが遅くなった。

何かが腕の中でもぞもぞとしている。…動かないで欲しい。

抗議するようにちょっとだけぎゅーっと抱き締め、動きを押さえる。止まった。

ああ、暖かくて柔らかくて気持ちいい。このままずっと抱いて寝ていたい…

なんだろう、これは？

暖かく、柔らかく、なんだかいい香りがする。ティーナともマールとも少し違った優しい香り…

勝手なイメージだが、ソフィーあたりがこんな感じの香りがするんじゃないだろうか……

と、その可能性に思い至ったところで意識が急速に現実を引き戻される。

ガバツと薄いかけ布団を跳ね上げ起き上がる。

物凄く至近距離でソフィーが縮こまって赤くなっていた。

「お、おはよう、ソフィー？ な、なな…なんでこんな傍に？」

「おはようございます…」

消え入りそうな声だった。

「昨日、夜中にユートさんが私を引き寄せて抱きついて来たんです。」

あれほど自分で節度を、とかおっしゃられていたのに。と攻められる。

なんだかまんざらでも無いような感じなのは、どうなのか？

だが確かに、起きた時の位置は俺が昨日寝た廊下側でなく真ん中よりソフィー寄りだった。

確実に俺が動いたらしい、言い訳できない。

『おんし自分の抱き付き癖に気づいておらんたのか？』

「え？俺にそんな癖が？」

「誰ですか!？」

ルと同じ。

決定的に違うのは一つ、ミニマムなのだ。恐らく20センチそこそこ、3、5頭身かそこいらだろう。

上半身と、髪と同じ金色のさきっぱが膨らんだふさふさ尾っぱ程度しか見えていないが。

「…妖精？」

『妖精ではないのう』

ソフィーもマールを見つけたようだ。そしてその印象は分からないでもない。

今のミニマムなマールは実にそれっぽい。本物を見た事は無いのだが。

…そういえばこの世界は妖精も居るのか？

この分だとエルフとかドワーフとかもいつか出て来そうだ

っと今はそれよりも…

「魔族、だよ」

一応フォローをする。余り良い印象の無い、と言つより最低の印象しか無かつた種族。

だが、個人単位である以上、そこは切り離して考える。マールは特別だ。

「…聞いた事が有りません。それに、マール？ユートさんの口から何度か聞いた事がある気がします。貴女の事なのですか？」

ソフィーがナイフを抜いて構え、マールに問いかける。

『問われた以上は答えよう。その通り、じゃ。こやつの中から出て妾以外を指す事はまず無いじゃろっ』

「貴女は何者なのですか？」

『妾はユートと将来を誓い合つたモノじゃ』

ふふん。と得意げに笑つていきなり爆弾発言を投下する。

ソフィーがピキッと固まった。

「お前何を言つて!？」

『なんじゃ？相違あるまい？それともあの5年間に及ぶ蜜月は嘘じ

やったのか？』

「いやそんなことは、でも……」

確かに5年間、狭間の世界に二人きりで寂しさも相まって、

誘われるままにあんな事やこんな事を致してしまったのも事実。これまた言い逃れできない。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

うわっ

いつの間にかソフィーが固化から解けて構えていたナイフををこちらの眼前に突き付けている。

「どうということなんですか…説明、して、貰えますよね？…」

「よーおめーらー、起きたみてーだな。朝メシ出来てるぞー………
つて。」

ソフィーの目が剣呑な色を点したそんな時、ドアをぱーんと開けてオサがやってきた。

「ナニ？この状況」

『俗に言う、修羅場じゃの』

身も蓋も無かった。

9・1<俗に言う、修羅場?>(後書き)

26話ぐらいぶりにマール、復活(仮)! やつと賑やかになってきました。が、会話の兼ね合いが大変な事に。これからも主人公の周りには人がどんどんと増えていく予定ですので今から戦慄を隠しえません。(ノ、)

9 - 2 < マール 1 >

「うっわなんだこれ？おいどうなってんだ？< 召喚されし者 > の兄ちゃんよ？妖精？」

「ソフィー、落ち着いて、ナイフを下ろして、説明するから、説明させて。」

「・・・」

『あっはっはっはっは』

オサが加わってさらに場が混乱する。

まさにカオス。あとマール、笑うな、お前のせいだ。

「どうぞ。」

ナイフを下ろさず、そのまま説明を求めるソフィー。目が据わっている。

なにこれ？まさか、この娘あれか？ヤンデレとかいうやつ？

背中を冷たい物が流れる。もうずっと昔に漫画か何かで見かけた

「私に黙って浮気なんて許せない！貴方を殺して私だけのものにす

る!!」

みたいな想像が浮かぶ。まずい。

「……、こいつはマールって言って、」

『これこれ、妾の自己紹介を取るでないぞ。後は妾にまかせい。』

「だ、大丈夫なんだろうな!？」

『さあ、どーせ刺された所で平気じゃろうが。』

「そういう問題じゃないだろ!？」

「まだ、ですか？」

怖い。ソフィーが怖い。俺を見てるのに俺を見ていない。

瞳孔開いてない?何で目の焦点が合っていないの?

「おちつけ姫さんよ、相手はこんな妖精だ、アンタが心配してるよ
うな事は……」

『だから妖精ではないと言つた。』

オサがフォローしようとする。だが、状況は変わらない。

…このままではラチが開かない。

気合を入れ直して小さく深呼吸。眼前のナイフをグッと掴む。そして動かないようにする。

ソフィーが驚いた顔をする。だが据わった目は若干戻った。よし。

「ソフィー、聞いてくれ。ちゃんと説明するから。」

「…」

「…わかりました。」

俺の放つ真剣な空気にオサが黙る。空気を読んでくれてありがとう。

ソフィーも渋々、ナイフを手放した。

「ふー」

握ったナイフを半回転。一旦柄を掴んで、置く。

そして頭上に語りかける。

「マール、説明。ふざけないでくれよ」

『なーに心配するでない。では、仕切り直しじゃ』

『おほん。妾はマール。こやつのか魔導心臓>に同居してある。魔族じゃ。』

「<魔導心臓>…確か<魔晶石>の事でしたね」

「魔族？聞いた事ねえな…」

『魔族は魔族。<魔導心臓>を核とした種族の一つじゃ。そして<魔導心臓>と<魔晶石>なるものは別じゃ。前者は生体、後者は鉱物でしかない。…話が脱線したの。ともあれ妾はこの男とは切っても切れぬ腐れ縁、言わばこやつのお房。だが相棒とも言える仲じゃ。』

「！」「うえ？」

ソフィーがビクツツとして固まり、オサが素っ頓狂な声を出す。

『しかし誤解はしないで欲しい。妾はそなたがこの男の伴侶となる事に異存は無い。むしろ大賛成じゃ』

「！？」「へ？」

固まったソフィーが困惑し、ついでにオサも困惑する。

『何故なら妾はそなたも愛おしく思っておる。そなたとこやつ。二人ともを愛するの何ら躊躇いは無いぞ。』

マールが自分に酔うかのようにつらつらと語る。

おいおい、確かに前にも言っていたが、まさか本人にそのまま言つとは。

「あの、話がわからなくなったのですが…」

「オレもオレも。」

剣呑な気配は去ったが、混乱を生んだだけのようだ。マール…

「適当に質問すればいいよ、大概は答えてくれるから。」

『うむ。妾は質問に答えるのは得意じゃ。』

「そうですか…では……………」

ソフィーとオサによる寝堀葉堀の尋問？が始まった。

ソフィーとオサによるマールへの尋問？が一段落したのは昼もかなり過ぎた頃だった。

「なあ、そろそろメシにしようぜ？」

「…そうですね」

『妾も食べてみたいのう』

「そうだね…ってその姿で食事できたのか？」

オサの提案に皆で同意し、部屋を後にする。

オサは途中で俺たちと分かれて台所に消えていった。

誰か居たようだし、多分またシズクさんかアンナさんにも頼んで作って貰うのだろう。

…いやまてよ？

そこまで考えて思い至る。

確か朝飯が出来たとか言っただけで来ていたような…

時間は既に昼をかなりの勢いで過ぎていく。

…忘れよう。きっと無駄にはしない筈だ、うん。

そのまま食堂に付いて、座って待つことにする。

ソフィーは昨日のように俺の隣では無く、神妙な面持ちで正面の席に着いた。

これはあれか、次は俺、ということか。

さてと、どうしたものか。

「ユートさんにも質問があります。」

やっぱりね。

そう思いつつ、居住まいを正し、先を促す。

「何？」

「ユートさんが「待ってくれ」と言い続けたのはマールさんが理由ですか？」

「概ねは…」

それだけと言うことも無いのだが、一因ではある。間違っでは居ない。

「そうですね、彼女が眠っている間に他の女性と良い仲になるまいとした。と言った所なんですね」

「そう言った所です。」

肯定する。それも真実だ。

「では、もう大丈夫ですね？答えを下さいますか？」

やはり、こうなったか。

薄々この質問になるのは予想していた。オサが離れるまでは待つていたのだろうか？

だが、何はともあれ、マールとの邂逅も終えた今、答えなくてはならない。

「ソフィーはマールのこといいの？」

「…私は大丈夫です、ユートさんは真剣に考えてくださっているようですから。彼女の事も、私のことも。ですから大丈夫です。独り占めしようとしなければ問題ありません。彼女にもその気は無いよ

うですし。」

『やっぱり妾の見立て通りじゃったのう』

黙って聞いていたマールが頭の上でからからと笑う。

…どうやら一夫多妻は然程抵抗が無い事のようにだ。

「…分かったよ、受け入れる。でも」

「でも？」

『でも？』

「その、アレとかそういう事は…ちゃんとムードとか、場所とか、そういうし…」

「……」

へタレ、とでも何とでも思ってくれ。それでも、俺には大切な事なんだ。

『ぶあっつははははははは、何時まで、経っても、ククっ、ほんつとウブじゃの。おんしは、はははは』

耐え切れない、とマールが爆笑する。

笑うな、畜生。俺はこういう性格なんだ。知ってるだろう。

「仕方ないだろ……」

『……まあ、の』

ふー。っと一息ついたソフィーが居住まいを正し、こちらを真っ直ぐ見つめる。

気配がやっと普段のように柔らかくなる。落ち着いたようだ。

「では、これから改めてお願いします、ユート。私の旦那様」

「あ、ああ、改めてよろしく、ソフィー。」

この話はここでお仕舞い。そう宣言するように切り上げる。

後はオサが昼食を持って戻ってくるまで、マールが眠っていた間の経過などの他愛のない雑談を楽しんだ。

「ところでマール。お前10日は眠るって言ってなかったか？まだあれから5日だぞ？」

『みたいじゃの。んー、多分マナのやたら濃い所に行ったのでないか？吸収できるマナの量が多ければ早まる事は不思議ではないしのう』

「神殿の北の森のせいではないでしょうか？」

「そうか、あそこはマナ濃度が異常でモンスターが発生するって言うってたもんね」

『マナの濃度異常？それにモンスター、じゃと？』

「ああ、この世界はマナが多すぎて場所によっては生物が変質してモンスター化するらしい」

『ふうむ、モンスターは有り得るとして、怪しいのう…あのオサという小娘といい…』

「オサに、何かあるのですか？」

『ん？まあ気にする事は無い。誰にも隠し事はある、というところじゃ』

「はあ」

「…あの会話で何に気づけたってんだ？」

『秘密、じゃ。本人が隠しとるのに妾がそれを喋る道理はない』

「そうですね。」

「それもそうか。」

『まあおんしらが世話になったようじゃしあの小娘にもヒントをやるべきじゃな。』

「ヒント、ですか…:…?」

『うむ、真実に至る道しるべ、じゃ』

「大層だな。でも、いいんじゃないかな。」

「そうですね」

『うむ。』

朝食兼となった昼食は、昨日の夜食と違ってご飯、漬物、汁物、そして焼き魚と洗って切っただけの生野菜。という和食に近い物だった。

ご飯は白米ではなく玄米と雑穀のブレンド。意外な事に煮たのでは無くきちんと炊いているようだった。

浅漬けの野菜はキュウリっぱい味の瓜で、確かミョールという野菜切り方と色のせいで見た目はたくあんだが、もうキュウリでいいだろう。そう決めた。

流石に汁物は味噌汁でなくお吸い物、しかし魚できちんと出汁をとって塩で味付けをした、うしお汁といったモノだった。

そして言わずと知れた魚の塩焼き。

どれも塩味がしっかりとされていて美味い。そして懐かしい味だった。

思わず涙がこぼれる。

一言も発する事無く、おかわりし、思う存分味わった。

最初は涙する俺をマイルがからかおうとしたのだが、すぐに止めた。誰も、何も言わなかった。

この料理はきつとく召喚されし者>が伝えたのだろつ。後のく召喚されし者>の為に。

感謝する。およそ8年離れていても、故郷の味は鮮烈で、強烈だった。

そんな有意義な昼食を終え、お茶を飲みつつ一息入れて、今後の話をする事にした。

「とりあえず、マールが起きたからモンスターの搜索は今日だけで十分できる思つ。」

『そうじゃの』

「そりやまたなんでだ?」

『うむ。妾の索敵範囲はこやつと違い数十キロはいけるからの。』

「それはまた…すごいですね…」

「お前も規格外系なのかよ…」

ソフィーとオサが驚きを通り越して呆れる。ちなみに俺の気配や魔力を探る索敵範囲は殆ど人が居ない前提で1キロそこそこだ。

周囲に人が多いとさらに狭まる。人と魔族の優劣はここで着いたと言って過言でない差だ。

「だから今日は出発の為の準備をしようかと思うんだが、どうだろう?」

提案する。食料や各種消耗品、有るならば足代わりの馬みたいな物が欲しい所だ。

「オレは別にまだ当分居てくれてもいいがな。宿代だって貰ったく伐採鼠の歯>と<闇夜狼の刃>にコイツで十二分にお釣りができるし
シシシ」

そう言つてオサが手元で弄んでいたのは<晶眼蟲の瞳>だった。

大きさは3〜4センチ、色は真紅、見た目は完全に宝石っぽい。

あれを欲しい!と言われた時はオサも女の子なんだな、と感じた。だが実際は換金するらしい…

「道具として未練の無い物の方が換金しても後悔しないから」だそ

うだ。

流石村長、金銭面でもしっかりしている…と褒めておくべきなのだろうか？

ともあれ、そんな理由でほいほい物を渡すのはどうかと悩んだのだが、

ソフィーにまで「お世話になりましたので。私からもお願いします」と懇願して来られては折れるしかなかった。ほんと俺は押しに弱い。

「私はなるべく速くアーリントンに向かいたいです。召喚の後行方不明になって、表沙汰には成っていないでしょうが恐ろくかなりの騒ぎになっていると思いますので。」

「あー…そういえばそうか。じゃあ引き止めるのもなんだな…」

『すまんの』

「…いや気にすんな、てかお前が謝るのか？」

『気にするでない』

「あーうん、そうだな…」

微妙にマールが混ぜっ返す。それはさておき、確かに。ソフィーは王女らしいし、

完全包囲して迫っていた追手たちがたどり着いたら王女の姿は無く、護衛と御者の死体。

確実に失踪、いや誘拐も疑われるだろう。

アーリントンは親戚の領地らしいし、早く無事を報告したいと言うのは分からないでもない。

「そうだなー。なら今日明日と調べてモンスターがもう居ない、って分かったらアルモスに馬を走らせるつもりだったが…馬車を出すわ。こいつの換金に討伐報告、それから討伐隊が向かって来てたら謝罪と違約金も出さねえとなんねえしな…ついでに乗ってくといいい徒歩よりはマシだろうよ?」

「願っても無い事です。ありがとうございます。」

「それこそ気にすんな。代金は受け取ってる。」

『おんしは来るのかや?』

「行きたくねえなあ…アルモスは領主がうぜえ、正直大ッ嫌いだ。街の連中には子供扱いされるし…それに村の復旧も指揮しねえといけねえし。」

心底嫌そうな顔をしてオサが言う。領主は兎も角子供扱いは仕方ないと思う。見た目がそれなのだから。

「その言い方だと…行かないといけないのか？」

「ああ、コイツを見るよ。この大きさにメチャクチャ濃い真紅。最上級品だぜ？間違いないく換金するにはギルドのオークションに付けるしかねえ。そうなるとうちの村人じゃ足元見られるのがオチだ。長寿族の俺が出向いて保障しねえといけねえ…って訳さ。めんどくせえ」

『そのぐらいの苦労はあってもバチは当らんじやろつ。』

「まーな。こんなもんをタダで貰った時点でバチが当りそうなもんだもんな」

へへへ、とオサが楽しそうに笑う。

オークション、か。それはつまり<晶眼蟲の瞳>は普通の店では高額過ぎて買取不能ということなのだろうか？

一体あれは幾らになるんだろう？そして俺のコレクションを全部売ればどんな大金になってしまうのだろうか。

気になる。街に着いたら色々調べて見たいなあ、と期待がムクムク膨らむ。

「オークションかあ、俺も見てみたいなあ…。出来るなら幾つか出品とかもしてみたいし？」

「お、いいね。なんなら手伝おうか？手数料は売り上げの5%でいいぜ。」

『商売上手じゃの』

「…申し訳ありませんが、アルモスには寄れません。途中で私達は迂回します。」

だが、あっさりと駄目出しされてしまった。

「な、なんで？」『ぬ？』「へ？どうということだ？」

皆疑問符を発する。勿論俺も真っ先に疑問を述べた。説明して貰えないと未練がある、どうということなんだ？

「アルモスには間違いなく検問があります。私を見つけたら保護するよつに、と」

『ふむ。確かにそれは有ってしかり、じゃろつな。』

確かに、王女が行方不明なのだ、それぐらいは当然あるだろう。

「だろつな。だが、何で検問を避ける必要があるんだ？健在なのを教えてやれば良いんじゃないか？」

「アルモスなのが、問題なのです」

「つまり？」

「あの日私達を包囲した兵はあの街から派遣されたと見て間違いありません。」

ソフィーが断言する。

「あれだけ多方向から来ていたのに？」

「ええ、むしろ多方向からだったからです。あの地を治めるアルモス卿の許可無くして包囲するようには兵士が来れなかった筈です。首謀者、という事もないでしょうが、少なくとも協力者である事は確実です。となると捕まるわけには行きません。」

『なるほどのう』

「だからアルモスは危険、か。だがよ？アルモスを迂回しても何処かに検問はあるぜ？特にアーリントンとの境は一番張ってるんじゃないかねえか？」

「なるべく避けて、最後は強行突破するしか無いと思います。アーリントンにさえ入ってしまえばこちらのものですから。」

「変装する、とかはダメなのか？」

「難しいと思います。私とユートさんは目も髪も目立ちますから。被り物で隠していても恐らく見つかりますし、街中で見つかったら完全に包囲されてしまいます。偽装用の魔道具もありませんし…可能でしたらアルモスの街を抜けるのは一番の近道なのですが…」

「魔道具、ねえ…残念ながらオレも持ってねえぞ。」

勿論俺の使える魔法にも無い。

使っている人は居たのだが覚えはしなかった。魔族との戦闘には必要無かったからだ。

だがまさかこんな所でそれを後悔する日がこようとは。

…残念だ、でも仕方ないか。

『なんじゃ、目と髪を誤魔化せば何とでもなるのかや?』

諦めかけたその時、そんなことか。と言わんばかりの口調でマールが答える。

「何か方法があるのか?」

そうだ、俺はダメでもマールになら使えるかもしれない。

萎んだ期待が再び膨らむ。

『なあにそういうのじゃったら、ちょちょいっとこの色素に異常を及ぼすだけのモノを使役すれば…』

…何か不安な言葉を聞いたような？色素に異常？

『ホレできた。』

「え？」

「んなつ」

「な、何？」

マールが空中に何かを描いて俺の頭をぽふっと叩いたと思ったら、俺の髪が栗色になっていた。

9・4<これからのこと>(後書き)

和食の定番味噌と醤油を出そうか、とも考えたのですが…調べてみると作るのにかなり丁寧な温度管理と1年近い時間がかかる事を知りました。

これは流石に…ということと和食メニューはうしお汁に白羽の矢が私ももう数年単位で食べては居ないので、鯛のうしお汁とかとても美味しく大好きです。

9・5＜ソフイーの理由＞（前書き）

今回はまた重めの過去話が含まれます。苦手な方はご注意ください

…

9・5＜ソフィーの理由＞

一瞬で栗毛になってしまった自分の髪をいじる。これ、戻るんだろ
うか？

ちよつと不安になった。…だがまあこれでアルモスに行ける事には
なったから良しとしよう。

「長居はしない」という条件付きだが、そのぐらいは仕方ない。

そしてそうになると、今まで勤めて詮索はしなかったが…聞いて置か
なくてはならないだろう。

「ねえ、ソフィー。今まで聞かなかったけど、聞きたい。何故逃げ
なくてはならなかったんだ？あの追っ手は何だったんだ？心当たり、
あるんだよね？」

そう、あの時逃げる選択をせざるを得なかった訳をだ。

「…オレは席を外そうか？」

「いえ、大丈夫です。聞かれて困る事でもありません。それに長寿
族のオサさんでしたら何かご存知かも知れませんし。」

「そっか。まあオレは家を捨てた身だからあんま期待すんなよ、っ

と」

「わかりました。」

ソフィーがぼつ、ぼつと語り始める。

「それで、先ほども説明しましたが…あの日私とユートさんを狙ったのは、恐らくアルモス卿の私兵と、その協力者だと思えます。あの場に包囲するだけの人数を配置するには、少なくとも領主が手を貸して居ないと不可能です。」

他者の私兵の動きにはどの貴族も敏感ですから。と続ける。

「それに、私の護衛だった3人が、ユートさんを殺そうとしました…となると王家の失脚を望む貴族派しか有り得ません。」

貴族派、なんだか聞いただけで怪しい響きを感じる名前が出てきた。

『その貴族派が何故こやつを狙い、おんしを拉致しようとしたのじや？<召喚魔術>は国策なのじやろ？それに、王家の失脚、じゃと』？

「それは少し長い話になってしまうのですが…」

『かまわんさ、時間はあるのじゃろ?』

「まあ出発の準備はヤスとかに任せてもいいしな。夜までたっぷり
とある。」

「聞かせてくれ、俺にはこの国の情勢は分からない。ある程度は理
解していないとこれからの行動が難しくなる」

「……………わかりました。それでは」

事はソフィーの曾祖父の代の話に遡る。

純朴だった王は善政を敷き、

さらに異世界の知識で農工業に新たな技術をもたらし、発展させた。

それは同時にこれまでの消費と供給のバランスを崩すことになる。

国内と隣国の空腹をやっと満たせていた程度の収穫量は加速度的に
増え、

いつしか大陸全ての需要を満たせる程の農作物を得ることが出来るようになっていった。

飽食の時代の到来。

民は手放しに喜んだ。食に困らず、戦も起こらずその人足を発展に費やす。

急速に豊かさを増す国。

だがその影で国王に所領を預けられ、取り仕切って居た各地の貴族は腐り始める。

時代は移り、王も変わる。

ソフィーの祖父は壮年入りたてと言った年齢で召喚された、マメで真面目な王だった。

増長する貴族を抑えるために国内の仕組みをより細分化する。

だが、少子化の進む王家だけではそれは賄いきれる物では無かった。

先代の曾祖父王は3人、今代の祖父王は2人しか子が生まれなかったのだ。

だから、王下5大家と呼ばれた建国以前から王家の1の部下として使えていた一族の末裔にその任を与えた。

これまでも行政事務の一部を預けており、最も信用できる一族だった。

だがそれにより5大家ゆかりの貴族とその他の貴族間の差が深刻化し、

平和に慣れ金と権力を求め始めた地方貴族と王家の關係に亀裂が入る。

徐々に貴族の反発が表面化を始める。

さらに時代は移る。ソフィーの父となる筈だった男の時代。

召喚された王は、まだ歳若い少年だった。そのためか二人は中々閨を共にする事無く、1年が経ってしまった。

召喚後1年目は国策のモンスター討伐開始の時期でもある。魔法を学んだ次期王の少年も後方戦力として参加した。

そして悲劇は起こった。

初陣に錯乱した少年は兵士に切り掛かり数名を惨殺、そしてモンスターに背後を突かれ、自らも短い生を終えた。

前代未聞、これまで可能性としては示唆されるも起こらなかった、起こりえなかった事態が起こった。

まだ、次代の王女がお腹に宿っても居ないのに次期王が死んだ。

その事態は王国を震撼させる。祖父王は残された王女と共に貴族によって槍玉に上げられた。

何故なら召喚魔術を行える程の魔力を宿して生まれるのは長女のみだったから。

次女以降も高い魔力を宿すが、それは長女の半分にも満たない。

そして王家の娘の寿命は<召喚の呪い>と呼ばれるもののせいでおよそ40年前後。

次の召喚の次期に今代の王女は生きては居ないかもしれない。

よしんば生きていても呪いに蝕まれ<召喚魔術>が使える状態ではない。

どうするのか。

祖父王は苦肉の策として初代王妃の行った<異界の門>を開く魔法の研究を開発局に命じる。

だが貴族連中は、「それでは足りない。王女を魔力の高い男と結婚させ子を成させるのだ。」と迫る。

理屈は正しい。だがそれは、誰が見ても王家に己を組み込むための詭弁だった。

時代の王女であり、後にソフィーの母となる王女エレハイムは、信じなかった。

「あの人は錯乱して味方に切り掛かる人では無い。王家の権力を狙った貴族に殺されたのだ。」と。

そして、自らの寝室に籠り、伏せてしまった。

3年が過ぎ、籠り続けたエレハイムは衰え、やせ細り、24の若さで病を発症する。

それは歴代王妃と同じく召喚の呪いと呼ばれる死病。

これまで通りならば恐らく5年と持たないと確信したエレハイムは、王の寝室を訪れ、実の父に懇願する。

「この国で今最も魔力が高いのはお父様です…次代の召喚の姫を産む為私をお抱き下さい。」

「私はもう5年と持ちません、お願いします。夫を殺したあの物たちの慰み物にされるくらいなら、死を選びます」と。

勿論祖父王は渋った。だが、幾度も自殺未遂を起こした娘について折れ、閨を共にし、ソフィーが宿った。

だが、生まれてきたソフィーは歴代の王女の2/3程度しか魔力を宿していなかった。

そしてソフィーがまだ3歳の時、エレハイムはこの世を去った。28歳だった。

確実に召喚魔術を使えただろうエレハイムを28の若さで失い、肝心の次代の王女は魔力が低い。

まだ物心ついたばかりのソフィーまで貴族の槍玉に上げられる。

それを抑えるために幾つか貴族の要求を呑む。だが譲歩し、一旦収まっても再び鎌首を持ち上げてくる。

真面目な男故の悪循環。

貴族はさらに増長し腐って行く。

心労を重ねた祖父王は衰え、ついにこの世を去る。享年76歳。ソフィーは15歳だった。

最大の庇護者を失い直系の王族として最後の一人になったソフィーはさらに苦しい立場へと追い込まれる。

そしてある日事件は起こる。とある貴族の息子がソフィーを襲い、手籠めにしようとしたのだ。

その時は傍に居た2人の従姉妹の内の姉、メリアルーナがその息子を殴り倒し、事なきを得た。

だが、一度では済まず、さらには命を狙われる事態まで起こった。

一部の過激な貴族は最早王家を排除し、自分たちでの国の統治を議論ですらいる。

限界だった。

事は王宮内や叔母の嫁いだアーリントンの所領でも発生し、敵が何処から来るか分からない。

手口も巧妙化し、5大家の庇護下と言えど危険が伴う。

証拠は拳がらず怪しい貴族を取り締まる事も出来ない。

このまま予定通り<召喚魔術>を行い、成功したとしてどうなるだろうか。

儀式の間に入るのはソフィーだけ、<召喚魔術>を使えば魔力は尽きる。そして肝心の<召喚されし者>は無力。

たとえ全力で警護をしたとしても、今の状況ではあっさりと警備兵に潜り込まれるだろう。

過激派を特定し一掃する事も出来ない以上、それは火を見るよりも明らかだ。

つまり、やろうと思うものには、暗殺も、拉致も、容易い。

…出し抜くしか、ない。

今の王家の弱みは「<召喚魔術>が行える王女の血が途絶えそうな事。」

だから成功さえすれば、子を宿せば、その前提は崩れる。ここが肝だ。

<召喚魔術>を成功させ、過激派に嗅ぎ付けられる前にその足で最寄の5大家の一角アーリントンへと駆け込み、5大家庇護の下で体制を立て直すのだ。

晩年の祖父に託された7つのマナ結晶を握り、ソフィーは召喚魔術を強行する事に決めた。

16歳の半ばのころだった。

9 - 6 < 種族は? >

ソフィーから話を聞いた後、結局気分転換に、と日中に出発する為の準備を済ませる事にした。

ソフィーの話は思ったより重く、俺にはどうしたらいいのか正直分からなかった。

オサは「腐ってんなーとは思ってたが、そこまでだったとは知らなかったな…」と呆れ、

マールは妙に<召喚の呪い>に食いついていた。症状とか、色々。

…その姿が何故か楽しそうに見えたのは、きっと気のせいだろう。

ともかく、今の俺には貴族をどうこうする事は出来そうに無い。

今はソフィーを守り、アーリントンにたどり着く。それだけでいいだろう。

そんな事を考えながらも食料品の補充、衣類の調整などサクサクと準備は進む。

武具は…結局無加工の<刺突兎の角>そのままで行く事にした。

最初に使っていた柄の付いたナイフは幾度か投げた所で柄が完全に壊れ、刃だけになっている。

そのせいで逆に持ちにくくなっていた。

さらにこの村にある武具はくだんの鉄剣よりもお粗末な物で、それを使うぐらいならこの角の方がマシだった。

アルモスは大きな街らしく、かなりの規模の武器屋が有るらしいし、まあそこまでなら事足りるだろう。

そんなこんなで時間を潰し、日が暮れる頃になって俺たちは食堂に集まっていた。

「結局、あの5匹で終わりだったのでしょうか？」

『そうじゃの、この近辺にそのモンスターらしき魔力反応は無いし
のう。』

夕食を取りながらの雑談。

モンスターの有無は出向いて調べるまでも無く、マールが探っている。

「結局何処から来たんだろう?」

「沸いたのかもなあ、〈召喚魔術〉の余波で、たまたま。とかよ?」

『川を超えた可能性もあるんじゃない?どっかの暴れる誰かに驚いて必死に逃げた。とかかもしれない。』

「・・・誰の事かな」

『さあ。その誰かさんが森の主クラスを倒したせいとか、あの森のモンスターは覇権争いか知らぬが、かなり争っておるようじゃし』

「へえ…いや、ちょっとまってよ?そう言えばこの村にモンスターが来たのは一週間ちょっと前って話じゃなかったっけ?」

それは俺がここに来たく召喚魔術よりも前の話。つまり俺のせいじゃない。それは確かだ。

そして当然く召喚魔術のせいでも無いはず。つまり、オイ、オサ?いきなり間違った仮定を出したオサをジト目で見ろ。

「そついやそうか。まあ理由はともあれもう居ないならいいさ。しかしここから森が探知できるとはねえ…妖精がそんな事できたな

んて知らなかったわ。」

「そうですね」

『魔族じゃと言つておる所に…』

俺の視線はサラッとスルーされ、またマイルが妖精扱いをされる。

そこでふと、以前浮かべた疑問がわき上がった。どうせだし、聞いてみようか。

「ねえ、この世界にはどんな人種が居るの？エルフとか、ドワーフとか居るの？」

「エルフ…？それにドワーフですか？」

「聞いたことねえなあ…どんなのだ？」

「えっと、エルフは耳が長くてとんがってて、森の守護者みたいな？…いやオサの耳とは違う感じにこうながく」

オサが自分の耳を掴んでオレのこと？ってやってたので補足する。

「なんで森を守るんだ？林業でも営んでる一族か？」

「うーん、やっぱり記憶にありません…それに神殿の北の森程で無

いにしても、森はモンスターが発生し安い所ですので人は余り住んだりはしないかと…」

長耳・金髪・色白・美系ってだけなら普通にいるがな。とオサがまだ自分の耳を弄りつつ続ける。

つまり、「エルフ」と呼ばれては居ないが似たような外見の種族は居るのか…

「じゃ、ドワーフは？小柄で筋肉質な感じで、鍛冶とかが得意な種族なんだけど？」

エルフの例が有るので期待薄な気がするが、とりあえずこちらも聞いてみた。

「小柄で筋肉質といえば小型系獣人・亜人だが…別に皆揃って鍛冶は得意じゃねえよな？」

「ですね、そういうのは人それぞれではないでしょうか…一種族で揃って鍛冶が得意、という種族には聞き覚えが…」

…やはり、というかドワーフもドワーフとしては居ないようだ。

異世界強度が下がってしまった。…少しがっかりだ。

「じゃ、この世界にはどんな人種が…」

「そうですね…基本は一番人口に置ける割合の高い人と亜人、そして獣人ですね。」

「その亜人の一つがオレ達長寿族。特徴は寿命の長さで魔力の高さ。まあ希少種で引籠りだからそうそう遭遇しないだろうがな。」

ふふん。と得意げにオサが補足する。なるほど。でも長寿って言うても何歳ぐらい生きるんだらう？

300歳を過ぎている筈のオサが10歳前後の外見な事を思うと聞くのが怖い。

『さらに迷惑な事に今の妾そっくりな妖精がおる、と』

少し寒気を感じた所でマイルも口を挟む。心底忌々しげに。

…そこまで妖精が嫌いか。

「妖精は人とは違うがな。人の前には滅多に姿を現さないし。まあ稀にお前みたいに人に憑くのも居るみたいだが、オレでもそんなのは見たことがねえ。」

「おおよそそう言った所ですね。後は人や亜人系の方は大体一族で

外見的特徴が一定なのですが、獣人の方は全く一致しないと言いますか…」

「あいつらなんでもアリだもんな。まあでも人ではある。サイズは人並みやちよつと大きかったり小さかったりするが二足歩行で会話も出来て話を通じる。なんつーかこう、一部動物人間？」

耳だけとかも居れば、上半身全部とか色々。そう補足が続く。なるほど。

つまり獣人の幅が広過ぎて、その他〓獣人で括られているのかもされない。

「混血児とかは？」

そうなると思えてきそうな問題を聞いてみる。

「混血しても片親の特徴しか出ねえ。能力もそうなる。」

『つまり異種族交配は可能、さらに半端な子は生まれず混血児問題とは無縁。便利な世界じゃな。』

「兄弟姉妹で種族が違って問題になったりしますけれどね…」

「…人の兄貴に獣人の弟とかだとケンカで悲惨な感じになるからなあ」

誰か知り合いでも居るのか、オサが遠い目をする。

まがりなりにも村長だ。村人にそういう人が居るのかもれない。

「…いやまあいい。そついやお前はどうかんだよ？ユートは人間だろつが、魔族、だっけ？」

「そついえば気になりますね？貴女はどういう種族なのですか？」

『うん？妾の事か？』

「ああ、何か特徴とか…ああ、見た目か。」

『この姿は仮初めに過ぎぬ。魔力切れてエコモードなのじゃ。』

マールがくちをすぼめ、心外だ。と抗議する。

「魔力が切れると縮む生物とか聞いたことねえ…」

「そつですね…」

『別に魔族は縮みはせぬよ？まあこれは一種の特技じゃ。魔力を使った分身を作り出している。本体ではない。魔族は魔法に長け…というよりも魔法そのもので生きているような生物じゃからな。』

じゃから魔王に食われても平気じゃったわけじゃがなー、と笑って説明する。

うん、昔聞いたときも確かにそう言っていた。

魔王に食われて自我は保っていたものの、エネルギー源の一つ程度の扱いで何も出来なかった。

死に掛けになって統制が崩れたから体の制御を奪って俺の方へと引っ越した、と。

『そして各々魔法とは別に特技を持つ。妾の場合は病やちよつとした小手先の技術方面に強い事じゃの。』

「へー……………」

「変わってんなあ」

「この世界の生き物とは大分違うのですね……………」

三者三様の返事をする。…そうだったのか。

今更だが、かなりの数の魔族と戦って来たのに全く知らなかった。

魔法に強く、倒せばく魔導心臓くが残り、処置しなければ蘇る。そういう認識でしかなかった。

『おんしまで感心してどっにする。』

「いや、全然知らなかったなあ…って」

「お前…」

「コートさん…」

皆の目が冷たかった。…ゴメン。

「ご馳走様ーつと。ふいー食った食った。いやーお前らが居るとメシが豪勢でいいわぁ」

オサが食事を終え、立ち上がった。

そしてその台詞から察するに、やはり食事は奮発してくれていたのだらう。後で感謝しておこう。シズクさんとアンナさんに。

「さって、安全も確認されたしオレは早々に寝るとしようかね。お

前日も今日は早めに寝とけよ？明日は朝から出発だからな？」

「わかりました。」「ああ」「心得た」

「……………即答かよ……………お前ら本当に全然なのな……………」

オサが呆れた。という声を出す。ふふふ、その件については既に解決済みなのだ。

せめて<強化魔法>の基礎がある程度定着してから。と昼間買い物しながら説得したのだ。苦勞させられたが……………

今そうなったらきつと歯止めが利かなくなる。7日7晩耐えられるのなら……………と言ったのが決め手となった。

実際にはそんなにする前に止まるだろうが、体力的には可能。そして効果は抜群だった。

マールは俺の必死の言い訳に揚げ足を取る事もせず、笑って賛同してくれた。

『おんし閨ではケダモノじゃからな。』と

……………そう思われた方が面白いとでも思ったのだろうか。

ともあれ、説得は成功。<生命強化>も定着しかかっているようだし、道中で2つ目をかける事になるだろう。

兎も角。今夜は寝るだけ。何もおこらない。

そう思って安心した気持ちでソフィーをちらり、と確認した。

…目が、合った。

たまたまだろう。何か、悪寒がするが気のせいだ。

風呂も毎日入るような物ではないらしく、今日は無い。

つまり、もう何もイベントは無くこのまま眠るだけ。

「「ご馳走様です。」」

とソフィーと揃って言って立ち上がり、食器を運ぶ。

その後、二人で部屋に戻って昨日と同じように眠ったのだが、結局夢の世界に旅立つ寸前まで悪寒が収まる事は無かった。

9 - 6 <種族は？> (後書き)

異世界強度がダウンしました。理由は、あまり魔力の高い種族に居られては困ってしまう為です。

ちなみに一般人の平均的な魔力量を10とするとオサで100、ソフィーで3500ぐらいの魔力量です。ユートとマールについては秘密。

9・7<出発の朝>

「なんで俺のベッドでコイツが寝てたんだ？」

朝になり、馬車の前に集合した所で自分の頭上を指差してオサが言った。

そのコイツ、つまりマイルはぴょん。とオサの頭からソフィー、俺の頭の定位置へと移動する。

『なに。出歯亀は良くないのです。』

「・・・」 「??？」 「……………はづ。」

反応は三者三様。

俺は口をつぐみ、オサは首を傾げ、ソフィーが赤面した。

…まあ何が有ったのかというと。

昨日の朝方指摘されたばかりの自分の癖をすっかり忘れ眠った為に、夜中の内に昨日の朝と同じ事を繰り返したのだ。

無意識の内にぎゅーっと。

勿論待っていましたとばかりにソフィーに抱き付き返され、さらにそのまま上半身をあちこち吸われてしまった。

だがその痕跡は既に＜強化魔法＞の効果で消えている。分かりはしない。

ただ、幾度も触れる柔らかい感触と甘い香りに目覚めたら、息のかかる至近距離で赤面した美少女が何度もキスをして来て、さらに「ユートさんも…」と甘い声でせがんでまで来るのだ。

我慢なんて出来る訳が無い。

ものの数分で理性は白旗を揚げ、求められるまま、求めるままに唇を重ね、舌を差込み、絡ませ、唾液を交換し、後は本能の赴くまま衣服を…という所だったのだがそこで邪魔が入った。

とつくに日が昇り、出発する時間が目前だったためにオサに言われたシズクさんが呼びに来たのだ。

本当に、紙一重だった。もう少し遅ければ、ノックの音程度で頭は冷えなかっただろう。

…残念でないと言えは嘘になるが、流石に昨日の今日でそこまで進展するものだろうかと思う。

だから、これで良かったのだ………多分。

「まあ、いいか。進展があったなら良いことだ。この国にも、な。」

思い出してみただけで何も言わなかったのに……察せられた。

「オサー？準備できただよー？」

「おー！今行くー！」

打ちひしがれていると、ヤスさんにが馬車の御者台から顔を覗かせる。

ちらりとそちらを確認する。

屋根は無く、荷台には藁と布がクッション状に敷かれていて、既にシズクさんがそこに腰掛けて居る。

…荷馬車というのだけ？馬車には詳しくない。まあ多分合ってるだろう。うん。

他の荷物が見当たらないが、荷物は鞆に詰め込めるのでこれで十分なのだろう。

ともあれ準備は整ったようだ。後は俺たちが荷台に乗るだけ。

「んじゃ行くか。到着予定日は6日後の夜か7日後の朝ってとこだ。長旅になるが、よろしくな。」

「ああ。「こちら」そよるしく」「よるしくお願いします。」「』よるしくの」

気を取り直し答える。そうだ、旅は楽しく。だった。うん、忘れてはいけない。

「にしし、馬車の長旅つてのは暇になりがちでな、期待してるぜ？お前らの面白い話。」

「期待されても困るんだが…」

いや本当に困る。特に前の世界の話なんて殆どが凄惨な戦争で鬱どころの騒ぎじゃない…

むしろ人生経験豊富なオサの話と…と思ったところでソフィーが口を開いた。

「そうですね。私もティーナという女性についてく・わ・し・く聞きたいです。」

ドキリとした。

「なんで、その名前を？」

「昨日買い物途中でマールに聞いたのです。何でも奥さんだったらいいですね？」

「…」

いつの間に…俺も一緒に買い物をした筈なのに気づかなかった。

『妾が話したのはそこまでじゃ。後は自分で話すんじゃない、おんしは乗り越えねばならぬ。この世界で暮らすんじゃない？』

「…分かってるよ」

ソフィーに寄り添われ、馬車に向かって歩き始める。

晴れ渡った空を見上げ、記憶の中の今だ色あせない明るい彼女の笑顔を思い出す。

なるべくは、辛く暗い話にならないようにしよう。そう誓った。

9・7<出発の朝>(後書き)

ここで1章、「二人の逃避行編」は完結となります。ここまですみ下さりありがとうございました。

次回からは2章「合流編」になります。

序盤数話程は時々名前だけ出てきたあの人たちが主役を張ります。新しい登場人物達はユートに、ソフィーにどういう影響を与えることになるのか…

思いつきでどんどん広がる風呂敷に畳めるのか不安になってきた筆者はおいてけぼりに物語は進みます！

0 - 1 <メリア起つ>

私の髪は赤い。

父譲りの鮮やかな赤髪。そして私の好きな色でもある。

ちなみに髪質は母譲り。ぴょんぴょんと跳ねたくせつ毛だ。

大半を肩口より上で切りそろえているせいでもあるが、嫌いではない。

だが問題は後頭部から後ろだ。

ここだけは腰までの長さがあつて、編みである。その見た目はまるで頭から生やした尾っぽ。

どうしてこういう事になったかと言つと、世間一般では女の髪は長く有るべき。

というのが貴族流一般常識で、昔は私も膝裏にまで届く見事な長髪だったのだ。

だがはつきり言って邪魔で仕方が無かった。

だからある日訓練にかこつけて愛刀でばっさりと切り落としたのだ。

…物凄く怒られたが。

と、とにかくそういうことで妥協として後頭部あたりより後ろの部

分だけ伸ばしているのだ。

この程度であれば訓練でも邪魔にならないし、父も母も渋々ながら納得してくれた。

その髪が、せわしなく左右に揺られる。私は急いでいた。

「お嬢様、メリアお嬢様、お待ち下さい。」

つかつかと廊下を足早に進んでいると、背後から声がした。

セバスが私を止めようとしている。だが、私は止まらない。

ここ数日の強烈なマナ異常は〈召喚魔術〉によるもので間違い無かったらしい。

ソフィーは五月蠅い貴族派連中を出し抜いてついに決行したのだ。

従姉妹であり姉妹同然に育った私にも相談してくれなかったのは悲しいが、それは仕方ないだろう。

私はもう昔のようにソフィーと四六時中一緒に居られる立場にない。

父の城代としてこの地を治めないといけないのだ。

だが、成功したのなら何よりだ。

そう考えていた。しかし、それもつかの間だった。

ソフィーリア王女が行方不明。その報告を私が聞いたのは既に事件から6日も経ったころだった。

秘密裏に伝えられたその事件の一報と同時に、王都より父が帰ってきた。という報告を受け、

いてもたってもいられず、父の元へと廊下を足早に向かっている最中なのだ。

父は今、母の部屋だろう。帰ってくれば必ず母の元へ向かう。邪魔をするには忍びないが、緊急事態なのだ。

扉の前に立ち、立ち番の者に確認する。二人とも、そしてメルも居るようだ。

ノックをし、声をかける

「お父様、お母様、メリアルーナです。よろしいですか」

暫くして、「入れ」という声が帰ってくる。

扉を開き、中へと進む。薬香の匂いが鼻をつく。

「お父様、お帰りなさいませ。お母様、お加減はよろしいでしょうか…」

珍しく寝台で起き上がっている母と、その隣で椅子に座って居る父に話かける。

「私は大丈夫です、それよりもメリア、貴女のその剣幕…ソフィーリアの事ですね？」

「その通りです。私に神殿に向かう許可を下さい。」

「ならん。お前が向かう必要は無い。わしの城代としてここに居てもらわねば困る。」

父が否と言う。まあ予想通りだ。だが私はもう決めたのだ。

だからはっきりと告げる。

「嫌です。ソフィーの護衛は私の兵から選抜しました。私が確認するのが一番です。」

「素性確認に兵は向かわせておる、それこそ捜査局に任せればよい、お前が向かってなんとなる？」

「私のワイバーンの方が早い。馬車に揺られて向かう兵ではここから神殿まで10日以上かかるではありませんか」

「そんな理由では行かせられぬ」

「お父様、どうしても許可が得られないのでしたら私は勝手に行きます。」

「ならん、と言っている」

「嫌です。」

お父様の頑固ものめ、と自分を棚に上げて睨み合う。一步も譲るつもりは無い。

「…ならば条件を出そう。帰ってきたならば今度こそ結婚をする事。」

暫くにらみ合っていたが、父上が口を開き条件を突き付けて来た。

またこの話か、と溜息をつく。

父の持つてくる縁談の貴族連中の男供は皆おどおどなよなよとしていて、私は生理的に受け付けない。

アレの相手をするぐらいなら軍の部下達の方がまだマシというものだ。

もっとも、部下たちを相手にする気も全く無いのだが。

「以前より告げている通り、私は私より弱い男の枕頭に侍るつもりは御座いません。それでも良いのでしたらお受けします。」

「今の王国でお前より強い男など存在せぬではないか…」

その通り。お母様が引退された今、王国の兵として最も高い魔力量を持っているのは私だ。

勿論それだけで強さに結びつく訳でも無いが、それに釣りあう男でないと私は縁談を受ける気は無い。

「見つけてください。」

「ならん。いい加減お前もいい歳でないか、そろそろ夫を得、子を成さぬと…」

そう言っつて父が病床でやせ細り始めた母を見つめる。

母は去年から病床に臥せっている。…どんなに長くてもおよそ5年で死に至る、〈召喚の呪い〉。

…不治の病だ。

母は前王の2人目の娘だった。そして王家の血筋の女はく召喚魔術>を行った反動に呪いを受ける。と言われている。

まず生まれてくる子供だ。

理由は分からないのだが王家の直系の血が混じると、3代に渡り女しか生まれなくなってしまう。

私も、妹のメルディアも娘しか産む事はできないだろう。…少し寂しいが、それはまだいい。

問題はこの病だ。

同じように3代続く、およそ40歳前後で発症し長くても5年程で死に至る不治の病。

叔母も、祖母も、先祖代々この病を克服する事無く亡くなってきた。

いずれ私達にも降りかかるだろう。

そして今、母は37歳、ついに病が発症してしまったのだ。

父は以前にも増して熱心に、忙しい公務の合間を縫ってそれこそ必死に治療法を探している。

今年で22歳になった私に夫をとらせ、母に孫を抱かせたい。という気持ちも分かっている。だが

「あなた。」

母が首を横に振り父をたしなめる。

「私はあなたとの結婚を望んで勝ち取りました…この娘達にも自分の幸せを捕まえて欲しいのです。」

「だが、それでは…」

「大丈夫ですよ、メリアも年頃の娘なのです。そうかからずとも必ずこれと言った男性を見初めて来ます。」

「…」

「それとも、メルの方が先に捕まえるかしら？メルは私と趣味が同じですもの。」

「お、お母様…！」

ずっと黙っていたメルディアが話を振られて焦る。確かに母とメルの趣味は似ている。…年上好きなのだ。それもかなりの。

母に至っては14で30の父を射止めていた。しかもアプローチは一桁の年齢の時から始めていたらしい。筋金入りだ。

そしてメルディアは今16、有り得ないと言い切れない。

だが私にはその趣味は理解できない。私は年下が良い。私より強い

男ならなお良い。

「メリア、貴女は本当にお父様にそっくり。一度決めたら無鉄砲に進む所も。異性の趣味も。」

「…別に趣味では無くお前だからだよ？エーリカ？」

「あらあら、そう言って貰えますと年甲斐も無く心が躍りますわ。」
「のろけでした。」

「兎に角、私は行きます！止めても無駄です！」

「だからならぬと」

「セバスチャン、居ますね？」

「は、奥方様。ここに」

母が唐突にセバスを呼ぶ。開けっ放しだった扉の向こうに待機して居たセバスが返事をする

「貴方にメリアの護衛を命じます。この娘、考えなしの無鉄砲ですから。貴方が考える役を担いなさい。」

「お母様！私は馬鹿ではありません！」

「承りました」

「セバス！！」

「あなたも、それで許して貰えませんか？」

「うぬぬぬ…」

母の提案に父が唖る。

「……………2週間、いや半月、15日以内だ。それだけの間に何か掴め。それが出来なければ、諦める事。分かったか。」

「お父様！？」

許可が降りた。私だつてなるべく強引に行きたくは無いのだ。許して貰えるならこれ以上は無い。

「ありがとうございます！お父様、お母様、必ずソフィーの手がかりを見つけて来ます！」

「全く…わしも家を開けねばならんと言つに…だが、仕方ないか…頼んだぞ」

「行ってらっしゃい。メリア。」

「はい！メル、行って来る！」

「行ってらっしゃいませ、お姉さま。ソフィーお姉さまをよろしく
お願いしますわ。」

「分かってる！」

家族に宣言し、踵を返し部屋を出る。

気持ちがはやり、小走りになり、駆ける。竜舎まで。

最初に向かうはバルディカ神殿、ソフィーが行方を晦ませた場所だ
！！

0・1<メリア起つ>(後書き)

動き出した新章。数話ほどメリア視点での物語になります。

1 - 1 < 王女失踪事件を追え >

ワイバーン。飛行する事に長けたドラゴンであり、数少ない飼いな
らす事が可能な竜族の動物だ。

飼いならす事自体は然程難しい事ではない、卵から育てれば良いの
だ。問題は乗りこなす事。

人に慣れたワイバーンは大人しいもので、ただ乗るだけなら誰でも
出来る。問題は飛行した時に起こる。

ワイバーンが飛び上がり上昇すると、息苦しくなり、さらに一気に
寒くなるのだ。なので一般人では30分と持たない。

寒さと息苦しさにやられ、気を失い、落ちる。そして落ちれば死し
かない。

故にワイバーン乗りは風と炎の魔法を用い、空気が薄くならないよ
うしつつ暖を取れる者程適正があるとされる。

特に後者の魔法は、ワイバーン自体にも良い効果があるようで、飛
行距離も速度もぐっと上がるのだ。

そして私の得意魔法は炎と風。まさにワイバーンは私の為に有るよ
うな生き物だ。

飛び上がって上空から見る大地も面白い。雲の上を飛ぶのも気持ち
いい。そして全速力で飛ぶ時のスピード感は最高だ。

…ソフィーもメルも賛同はしてくれなかったが。

バルディカ神殿までは3日の道のりだった。

並みの乗り手なら5日はかかるだろう道のりを2日も短縮して踏破した達成感は…微妙だった。

振り切ってやるつもりだったセバスが付いて来ていたからだ。

…流石はセバスチャンと褒めるべきなのだろうか？その名は伊達では無いようだ。

何でもかんでも卒なくこなす姿は頼もしくもあるが、空恐ろしくもある。

自称、最速の竜騎士の自身がすこし揺らいだ。

…最も比べた事は無いので所詮自称だが。

ともあれワイバーンから降り、捜査を担当しているであろう捜査局

の兵を探す。

捜査局とは王家直下の5大家の一つ、フェルブルム卿の取りまとめる王国直属の特別な隊組織だ。

兵隊、と言っても戦いに出る事は余り無い。

むしろ裏切りや犯罪行為、重大な事件や事故に際しての調査や捜査を担当する。

その人員は種族や強さを問わず主に便利な能力を持つ物が集められ、一般兵には煙たがられて居るが、頼もしい。

獣人の登用が多いため、王家直轄の組織ではあるものの、五大家唯一の獣人種族のフェルブルム卿が統括している。

その権限は、国内では如何なる貴族の領地でもほぼ自由に行動する事が出来るほど、高い。

組織の標語が「我々は王の目であり耳であり手足である。」と云うだけはあるのだ。

ワイバーンの接近が見えていたのだろう。特課の制服を着込んだ犬のような耳を持った男が此方に向かって来た。

「メリアルーナ＝ルグス＝アーリントンだ。こっちは我が家のセバ

スチャン。こちらで王女の護衛の死体を保存していると聞いた。確認をしたい。」

アーリントン家の紋章の入ったタグを見せる。軍での身分証だ。身元を示すにはこれで十分だろう。

「ミハイル＝ケイロンです。始めまして、メリアルーナ様。失礼ですが、何故、遺体の確認を？」

ミハイルと名乗った男が疑問を挟む。遠目では分からなかったが、どうやら頭部は全て犬型…いや狼型のようだ。

と、しげしげと見つめるものではないな。答えなくては。

不躰な視線を送っていた事に気づき、改め、答える。

「殺された王女の護衛は私の兵だ。私が顔を見るのが一番早い。身元確認だ。」

「そうでしたか…、失礼しました。ええ、それはこちらとしても助かります。どうぞ。」

流石は捜査局の誇る特課兵、五大家の長女と言えど、理由が無ければ門前払いをするつもりだったのだろう。

……本当に頼もしい限りだ。

ミハイルに案内されて神殿の一室に通される。

そこには衣服を脱がされ、顔にだけ布を被せられた6つの男の遺体が安置されていた。

恐らく、いや間違いなく<保存>の魔法をかけられて居るのだろう。不快な匂いも無い。

「少々お待ちを」と言ってミハイルが何かの書類を用意する。

「お待たせしました、まずこちらの方からお願いします。」

顔に被せられた布が取り払われる。

ミハイルが書類を指差す、描かれているのは神殿の間取りの地図。描かれた×は恐らく死体のあった場所だろう。

「こちらが、恐らく最初に殺されたであろう2人になります。見覚えはございますでしょうか？」

「ああ、ジョツシユ、エドガー。二人とも優秀な兵士だった。…死因は？」

「槍で急所を一突き、背後からです。全く抵抗した痕跡がありま

せん。恐らく不意打ちで致命傷を負わされたのでしよう。」

「そうか…」

二人とも優秀な男だった。それは間違いではない。

あまり裕福でもない農家で生まれ、己の腕でのし上がると息巻いて軍へと志願した荒くれ者。

何処も手を焼き、巡り巡って私の部下になった。

過酷なしごきにも耐え、魔法の資質も人並みにあったのでメキメキと頭角を現した。

私の強さに心酔し、任務とあらば命すら投げ出すような男達だったので、危険に晒されていたソフィーの護衛に付けたのだ。

だがまさか二人揃って不意打ちに合うとは…

少し幻滅する。だが、彼らはソフィーの為に死んだのだ。心ばかりの謝罪と、感謝もする。

「そしてこちらがその次に死んだであろう人物です。」

「…見た事が無いな。死因はこの切り傷か…深いな」

「ええ、鎧ごと、正面から剣で袈裟切りにされたようです。剣は途中で折れ傷に刺さったままでした。」

「鎧ごと、だと?」

たとえ服の上からでも、これだけの切り傷を負わせるとかかなりの手練だな、と思ったのだが…鎧の上から切った、だと?

本当にそうであるなら尋常な膂力では無い。だが、この男がわざわざ嘘を付く意味も無い。

「はい、そして剣自体はこちらの、エドガーの物のようです。」

.....

わざわざ不意打ちで刺殺されたエドガーの剣を使い、この男を殺した、ということか?

何故?誰が?

…さらに話が分からなくなった。

「こちらがその次に亡くなった男になります。」

「こいつも知らないな。」

顔面に剣が突き立ったような穴が開いているが、見知らぬ顔だった。

「…死因は見ての通り、正面から一突きだったようです。それから折れた槍を持っており、刃には血が付着しております。」

「どづいつことだ?。」

「恐らく、こちらのジヨツシユさんを突き殺したのがこの男の槍だと思われます。」

「本当なのか?。」

「傷口が穂先と一致しております。エドガーさんの傷口とは合いませんでした。」

「どづいつことだ? ジヨツシユとエドガーが不意打ちで殺され、そのエドガーの剣で謎の男が一人殺された。」

「ええと、後はもう一人の謎の男がジヨツシユを殺して…」

「こちらの方の顔に刺さった剣はどなたの物でしょう?。」

「混乱しかけていた所でセバスが口を挟んだ。」

「ええと、こちらの不明の男の剣です。」

そうやって指したのは先ほどの肩口からバツサリとやられた死体。

「兜は、着けておりませんでしたか？」

「着けていました。兜ごと根元までの串刺しで、やはり剣が折れていました。」

「分かりました。」

「……何かしら分かっただらしい。後で説明させよう。」

「それから、先の4人と離れた場所で倒れていたのがこの2名になります。」

「見た事が無い、が…兵士ではないな？」

新たに指された男の片方は、見るからに鍛えられていない体つきだった。

「御者、と思われれます。この痣から見ますに強烈な平手による頸椎の損傷が死因のようです。」

「……………これはソフィーかもしれない。いや、間違いなくソフィーだ

ろう。

あの娘は無詠唱で〈時空魔法〉を使い、圧縮した空間を手の平の上に発生させて平手と同時に叩き込む事があった。

つい、で発動する普段ですら首がおかしくなるのだ、攻撃の意志を持って本気でやったなら首が折れても不思議は無い…

「手形は、どのぐらいの大きさですか？」

「小柄です。女性か、男性なら13、4歳といった所でしょう。」

…やはりソフィーだろう。

この段階ではまだここに居て抵抗をした。ではこの御者は賊で間違いない無いだろう。

「分かりました。」

「最後にこちらの方ですが、恐らく振り返り様に首に一撃。こちらも鎧ごと、使われた剣も同じく折れています。剣はこちらの不明の男の物でした。」

「こいつも見た事が無い…ラミレス、ディン、マーベリックは居なかったのか？」

「遺体はこれだけです。」

この男を殺した剣の所有者はその前に殺された折れた槍を持っていた男。

死体から剣を奪い別の男を殺し、さらにそいつから剣を奪い、次の男を、と殺していつている？

…わけがわからない。

「…死んだ順番は合っているのか？そもそも何故わかるんだ？」

「血痕です。最初に死んだ者は最初に倒れ、後に倒れた者が切られた際の血飛沫が遺体の上にかかっていたので。」

なるほど…そついつことか。

「偽装、という事は考えられないのでしょうか？」

セバスも口を挟む。

「ありえなくはありません。遺体は死後に物色され動かされていたようですし。」

「他に目立った外傷は一切無し…ですか。遺留品の確認がしたいの

ですが、良いですか？」

「問題ありません。こちらに。」

「どうということなんだ…襲撃されて、不意打ちで2人が殺され、残り3人で迎撃した？」

「だがこの切り口はなんだ、人とは思えない。モンスターが獣化した獣人でも無ければ無理ではないか？」

「しかし、そうだったとしてもどちらも力だけだ。こいつらの武器を奪って使う知性が無い。」

「<人型>ならあるいは…いや、それもどうだろう。誰一人として食われた痕跡が無い説明がつかない。」

「さらに残り3人の護衛とソフィーは何処へ？拉致されたとしても護衛の3人は不要な筈だ。」

「ますます分からない。セバスに視線を送る。」

「まだ、この段階では何とも言いかねます。もう少し調べましょう。」

「否は無かった。」

1 - 1 < 王女失踪事件を追え > (後書き)

海外ドラマのCSIとかNCISとかクリミナルマインドとかよく見ます。面白いです。

そのせいもあってかこういう事件の調査話もいつか書いてみたか思っています。お読み頂いた皆様は答えを知っておりますが、はたしてやや脳筋の気のあるメリアは真実にたどり着けるのでしょうか？

1 - 2 < 王女失踪事件を追え2 >

「こちらが遺留品になります。先ほど見ていただいた遺体のものを順に、左から並べてあります。」

ミハイルに案内され、別室で今度は遺留品を見る。

そこにあつたのは5着の似たしつらえの鎧、御者の物と思われる衣服、折れた剣と折れた槍だけだった。

「…こいつらの武器が無いぞ？」

見たところ壊れた武器しか残っていない。ジョツシュとエドガーの槍も無い。

他の4人の賊も丸腰で襲撃をするはずが無い。何か持っていた筈なのだ。折れた剣では数が足りない。

「発見された時にはもうありませんでした。」

「…鞆も全て持ち去られているようですね。」

セバスが目ざとく呟く…確かに、無い。

さらに分からない。まるで盗賊のような手口だ。何かの偽装？証拠隠滅？それとも只の物盗りとでも？

「こちらの破片は？」

「粉々でしたが、欠片を見たところ、剣の残骸ではないかと。」

「折れた剣に、粉々になった剣、か。」

折れたのは膂力で説明がつく、だが、砕けたとなると分からない。魔法だろうか…？

謎と仮定ばかり増える。思考が纏まらない。

「お嬢様、鎧は全てお嬢様の兵に支給されていた物のようです。」

「…確認する」

確かに、見た目はその通りだ。そして私の兵の物ならば、確実に自分の名を書いて居る筈だ。

私が書かせたのだから。

ヘルムを取り、裏返す、裏返す、裏返す、裏返す、裏返す、裏返す、

「ジョツシュ、エドガー、ラミレス、ディン、マーベリックのもの

……だ。」

遺体の無い3人のものが、含まれている。

どういうことだ、何故、ここにある？あの不明の3人が着ていた…
ということか？

見た所損傷が不明の三人の傷と一致している…間違いない。つまり…

「こちらは、魔道具ではないでしょうか？」

思考が良くない仮定を浮かべかけたその時、

不明の3人の遺留品に共通している指輪を指してセバスが聞いた。

「可能性はありますね。こちらの遺留品はまだ魔道具専門の者には
見て貰っていませんので…」

聞いたことが有る。たしかそういう専門の分析が出来る者は大抵王
都の本部に詰めているのだ。

ならばここで調べられていないのは仕方ない。

「私は多少感知が出来ます。恐らくこの指輪は<偽装>の類だと思
います。着けても構いませんか？」

「それは許可出来ません。ですが、危険は無いのでしょうか？」

「危険は有りません。そういう反応はして居ませんので。」

「では私が着けましょう。それでしたら問題には成りません。」

ありがたい。捜査局の人間はもっと頭の固い連中だと思っていたが、それでも無いようだ。

「では、」

ミハイルが指輪を着ける。一瞬ふわっとした光に包まれたと思ったら、デインがそこに居た。

「デイン………だ」

「やはり」

「<偽装>……いえ、<姿写し>のようですね。恐らく残り2つも同型ですし同じものかと。」

声も変化している。

確信した。3人が護衛に化けて不意打ちで二人を殺したのだ。

そして御者に扮したものと協力して、ソフィーを連れ攫おうとした。だが、その直後に異常な力の第三者に襲われ、こいつらは殺された。ソフィーはその第三者に連れて行かれた？
そこまで考えて思い出す。

「＜召喚されし者＞は？」

そう、第三者で、他人の武器を使う。それが武器を持っていなかったからとすれば？

異常な力の説明はできないが、もしかしたら、その可能性は有るのではないか？

「分かりません。ですが、＜意言の首輪＞は残されておりました。」

「残されて…つまり使われて居ないんですね？」

「持ち出したのは確実ですが、使われなかったようです。」

「何か、他にそれらしき痕跡はありましたか？」

「ありません。異世界の衣類も、それらしい足跡も特殊な匂いも残っていませんでした。」

「では、召喚には…」

「残念ですが…恐らくは」

セバスとミハイルの声のトーンが消え入るように下がる。

痕跡を確認した限り<召喚されし者>が居たという根拠が一つも無いのだ。

むしろ痕跡の限りでは居なかった。という方が証明されかねない。

そして彼らは能力を買われて特課兵となった者たち…見落としては、無いだろう。

…つまり、召喚に失敗した？

眩暈がする。私すら出し抜いてまで決行した<召喚魔術>が、失敗した？

では、ソフィーは…夢を叶えられなかった？叔母の無念も、祖父の悲願も、何も、かも。

目の前が暗くなる。3日に及ぶ強行軍で疲れていたのか、不覚にも私はそのまま意識を失った。

1 - 3 < 王女失踪事件を追え3 >

「おはようございます、メリアお嬢様」

目が、覚めた。セバスが私に話しかけている。見覚えが無い天井だ。何処だろう、ここは…

ぼんやりとした思考で軽く視線を巡らせ、気づく。

がばつと慌てて起き上がり、周囲を確認する。

思い出した、私は倒れたのだ。 < 召喚魔術 > が失敗した、と聞いて。

「セバス、今は？」

「お嬢様が倒れて約6時間、深夜の11時ごろで御座います。」

6時間も眠っていたのか。どうりで体が痛い。

衣服を緩めるぐらいしてくれていたら、こつはならなかったのだから、致し方ない。

これで私も嫁入り前の生娘なのだ。鎧を外してくれただけマシだったと思う事にしよう。

「何か、あれから分かった事はあるか。」

「はい、状況証拠ばかりでは有りますが。」

とりあえず現状推測されますあらまじと致しましては、ソフィーリア様はく時空の扉をを開く事に成功するも、召喚事態は成否不明。

その後神殿を後にしようとした所で護衛に化けた3人が不意打ちでジヨツシュとエドガーを殺害。直後に何者かによつて3人も殺害され、御者に扮した賊はソフィーリア様自ら撃退。恐らく馬車に無理矢理乗せられようとした際と思われれます。

そして、その後馬車はアルモス方面へ向かい、数時間後、発見された時はもぬけの空でした。」

「……数時間後？」

妙に、早い。

「はい、潜入していた草（諜報員）の報告です。〈召喚魔術〉の行使を疑ったアルモス卿が王都に居たキャメル卿に連絡し、協合して神殿に兵を向かわせたそうです。」

その際、街道を3つ共使い、完全に包囲して居たそうです。」

「あの大豚、カンだけは良かったんだな……」

5大家の一角の家長であり、王国財務の最高責任者であるキャメル卿の姿を思い浮かべる。

その分家のアルモス卿も隣接した地の領主なので面識はある、それを想像で隣に並べる。

有り体に言つて、両方とも見た目は豚だ。

兵士に混ぜて走りこみをさせてやりたい…いや今はあの連中はどうでもいい。思考を元に戻す。

「それから、城壁の外の堀と、森の入り口付近を探つても、やはり痕跡も死体も見当たらない、という事です」

つまり、完全に行方不明。ということか。

「せめてもの救いは、生きている可能性が有る事、か。」

「そうですね、とりあえず今現状で予想される可能性の高いものは、包囲したキャメル卿かアルモス卿による拉致、監禁。そして現場の偽装工作。

それから、何者かがアルモスへと向かった馬車を使い、王女を捕らえたまま途中で身を隠して兵をやりすごし、そのままアルモス方面へと抜けた、という可能性です。

こちらは特定の獣人の知覚能力と獣化時の膂力があれば可能になります。」

「なるほど、それならあの3人の偽者の死因も説明がつく、か。」

「はい。」

そうなるかと後者よりは前者の方が無理が無い。

獣化して意識を残せる者はごくごく一握りしか居ないからだ。

そもそも獣化できる者自体ごく一握りの獣人だけであり、

さらにそれ程の猛者ならこの国では間違いなくフェルブルム卿の配下。

父と親友でもある彼との面識は多い。勿論王家に対する忠誠は疑うまでも無い。

祖父王を「オヤジ」と呼んだのは父と彼ぐらいのものだ。

あの頃は私もまだ子供だった。なつかしいな…と思考がまた脱線した。

いけないいけない、ええと、とりあえずあの豚供が拉致した、とすると………

「希望的観測なのだが…召喚が成功していた場合<召喚されし者>

も一緒に。という可能性はあるのだろうか」

「有ります。召喚されたばかりの彼らはただ魔力が高いただけで魔法も使えず言葉も分からぬ者でございます。一緒に拉致されて居たとしましても労力に然程変わりは無いと思われます。」

…価値を見出してくれる相手でありましたら、ですが。」

その可能性も考慮してくれていたようだ。抜け目無いな…

「ならば明日は大豚を締め上げる事にするか。奴は今何処に？」

「王都です。緘口令が敷かれていますとは言え王家不在のままでは不味い、とルーシア様を影に据えたまま政務を行っているようです。」

「そうか」

ルーシアも苦勞をするな…いや、それも彼女の仕事の内か。

「キヤメル卿は5大家とは言え貴族派寄りのはずです。召喚失敗であれば都合が良い筈ですので、公表されない所を見ると召喚成功の可能性もあります。」

「そうか、それは吉報だな…よし、では明日は王都だ。お前も寝ておけ。」

「分かりました。お嬢様がお眠りに成られましたら眠らせて頂きます。」

「分かった。」

再び寝台へと倒れこみ瞳を閉じる。

細い希望だがまだ希望はある。必ず見つけ出して見せる。

1 - 4 < 王女失踪事件を追え4 >

「さあ吐け。ソフィーとく召喚されし者>を何処に隠した。お前の薄汚い顔ごと全て焼き払っても良いんだぞ。」

王都の王城の一角、政務室

朝一でワイバーンを駆り、翌日昼過ぎに王都に着いた私はその足で政務室へとなだれ込み、

そこに居たガブリエル「ミラ」キヤメル卿の襟首を掴み尋問を開始していた。

「お前…は、なんだ！？こんな事をして…許されるとでも思っているのか…！？」

「ああ、問題など無い。お前の護衛なら既に殴り倒して来た。なんだったら証拠など全て焼き払おう。私は、怒っている。吐け。さあ！」

私の周りで炎がポツ、ポツと発生し、揺らめく。魔力の高いものは時折こうやって感情の高ぶりだけで魔法が出てしまう。

そしてソフィーが<時空魔法>を暴発させるように、私は最も得意なく<火炎魔法>が発現する。

「その、炎、赤い髪、お前、メリアルーナ！アーリントン家のメリアルーナだな…！<狂乱の火炎使い>…！」

「ご明察、だ。そして、知っているなら分かるだろう？私は気が短いんだ…早く喋って貰えないと本当に喋れなくなるぞ？」

些か不名誉な通り名だが、この際どうでもいい。効果も有りそうだし認めておく。

「し、知らん！ワシは知らんだ…！ワシの兵がたどり着いた時にはもう…居なくなっておったのだ…！」

「本当、か？」

「嘘ではない…！」

「信用、しかねるなあ」

青い顔をした豚が必死に弁解する。

「本当なのだ…！確かに色々と腹積もりは有った。だが、たどり着いた時には護衛達の6つの死体を残して消えておったのだ！」

「では、<姿写し>の込められた魔道具で護衛に化けたのは貴方の手のもの、ですか？」

セバスも口を挟む

「…し、知らぬ！なんの事だ！」

「今、どもつたな、お前」

私の周りの炎が加速度的に勢いを増す。一部が時折豚をチリチリと焦がしている。

「ひいひい、知らぬ！ワシは知らぬのだ！！信じてくれ！！やめてくれ！！」

「おい、良く聞け。嘘だ、と分かった瞬間私の炎はお前を焼き尽くしてしまう。止められないんだ。」

実際は殺すまでは行かないだろう。だが、この際だから脅す。

「だから嘘をつくな。今のは、危なかったぞ？」

「ひいひい！！！！」

効果は靦面てきめんだったようで、大豚の顔がさらに青く染まる。

「ワシは知らぬ。だが、アルモス卿が何か手を打った。と言っただけだ、それやも、しれぬ。」

「嘘ではなさそうだな。」

「本当なんだ、信じてくれ、頼む」

…アルモス卿、ここでもまた聞くことになるとは。ではこの大豚はハズレだったのか？

分家が本家を無視して暴走している。とでも言うのか？

セバスに目配せをする。頷いた。セバスの見解も白、か。

大豚を、突き飛ばすように放す。同時に炎も鎮火する。

「どうやらお前では無いようだな。」

「げほっげほっ…やっと、信じたか？糞っ…」

「他に何か知っている事はあるか？」

「げほっ、糞、噂には聞いていたが、ふざけた娘だ。だが、いいだろう、ワシの知ってることぐらい、説明してやる。」

面識もあるはずなのだがな。

…だがまあこの際どうでもいい。続きを促す。

「ワシはアルモス卿と協力して包囲するように派兵して、まず馬車を3台捕まえた。だが、それらは全て御者だけの空馬車だった。最後に見つけた馬車は御者すら居ない無人だった。

そして…神殿にたどり着いた時には6つの死体が有った。完全に包囲していたのだ、逃げられる筈が、無い。ましてやソフィーリア様は、魔力切れを起こしていた筈だ。」

ミハイルの説明を思い出し、比べる。3台の偽装馬車を使った、というぐらいで…特に目新しい情報も無い。

「ワシだって、真相が知りたいぐらいなのだ。げほっ…ソフィーリア様は、何処へ行ってしまわれたのだ？<時空の扉>に取り込まれたのでは、ないのか？」

「その可能性は無いと思われませぬ。6人は<召喚魔術>の後に殺され、その中の御者に扮したものはソフィーリア様の手による物と思われませぬ。」

「では、何処に行ったというのだ…」

「分かりませぬ。兎に角我々はアルモスに向かおうと思えます。」

セバスがそう言った所で踵を返す。もうここに用は無い。

「おい、アーリントンの小娘。」

大豚が呼び止めてきた。無視だ。

「今回の事は、貸しにしておく。王女を見つけてくれ。この国には王女が、王家が、まだ必要なのだ。」

「…そうか、分かった。」

キヤメル卿が息を切らせて言う。貴族派と聞いていたが、気づいていたようだ。王家が失われればこの国は瓦解する、と。

そのまま振り返る事無く政務室を後にする。

次の目的地はアルモス。既にソフィーが失踪してから11日経っていた。

2-1 <商業都市アルモス>

ソフィー失踪から14日、家を飛び出して9日目の昼過ぎ。私はアルモスにたどり着いた。

上空から見下ろす。アーリントン程ではないが、相変わらず大きな街だ。

いや、以前よりも一段と大きくなったのだろう。

この街はおよそ30年程前に今のアルモス卿が治めるようになってから急速に拡大している。

それ以前は森の近く、という事もありそれほど大きくも無かった。

…もちろん何故大きくなったのかは知らない。

私も城代としてアーリントンを治める以上その秘訣は知っておいてもいい気はしたが……

以前城代としての職務で招待された時に見たアルモス卿を思い出す。

…記憶にある私をじろじろと見る視線が実に気に入らない。しまった、見るからに嫌悪感を催す男だった。

忘れよう。アーリントンにはアーリントンのやり方がある。うん。ここと違って海もあるし。

気を取り直し、ワイバーンで着地用地に降下する。

…着地した途端に兵士に囲まれた。

「申し訳御座いませんが、身分証か何かをお持ちでしょうか？現在アルモスでは非常事態宣言が出されておりまして、お持ちで無いようでしたら拘束させて頂かざるを得ません。」

非常事態宣言、とは穏やかでない。

ともあれ、例によってアーリントン家の紋章の入ったタグを見せる。

「メリアルーナ＝ルグス＝アーリントンだ。こっちは我が家のセバスチャン。アルモス卿に用があつて来た。」

「確かに、失礼しました。メリアルーナ様。アルモス卿ですか…数日前に神殿に向かわれて、只今帰路の途中だと思われます。今日か、明日ごろにはお戻りになられると思うのですが…」

「そうか、済まない。ありがとう。…仕方ない。この街で待たせてもらう事にする。」

今日明日戻ってくる男を今飛び出して捉えた所で意味は無いだらう。それならば別口で情報を探るべきだ。

この街にも草は居るし、ギルドと軍の詰め所もある。話を聞いておいて損はないだろう。

2匹のワイバーンを兵士に任せ、まずは遅い昼食にしよう、と考える。

そういえばここの所の食事は旅の粗末な物だった。ここは豪快な料理が良い。

豪快な料理と言えばギルドだ。あそこの受付は食堂も兼ねているので食事がてら情報も聞きだせる。一石二鳥だ。

そうと決めれば後は行くだけ。セバスを連れて街へと繰り出した。

…メリアが街に着く数時間前に時間は遡る。

馬車に揺られる事7日目の朝、ユート達もアルモスにたどり着いていた。

途中ギルドの討伐隊の人と合流し、狼の群れに襲われたりしながらだったが、

その危険度はモンスターには比べるまでも無く、概ね平和な旅だった。

アルモスの街の城門では、ソフィーの予想どおり検問が敷かれていた。

オサが代表して説明をし、「村人には身分証なんてねえぞ？」と言うと面通しで良い事になった。

全員、面通しをする。調子に乗ったマールが目立ったが、ソフィーも含め全員が通行許可を貰えた。

そう、今俺とソフィーは髪と目の色が変わっており、気づかなかったのだ。

マールの能力によって俺の髪は栗色になり、目は焦げ茶色。ソフィーは髪も目も見事な空色になっていた。

オサが「オレも！オレも！」と言ってねだったのだが、マールにやってもらっても変化が起こらなかった。

曰く

『おんしアルビノじゃろ？元々色素がダメじゃから異常を与えても

変わらんのじゃ』

という事らしい。オサがしょげていた。

それから、魔法の反応がしなかったので、好奇心から「これは魔法なのか？」と聞いたところ

『これは妾の能力じゃ、魔法ではないの。』と否定された。では、なんなのか？

『魚が素早く泳ぐ為に最適にヒレを動かす事が人間の体で想像できるかえ？それと同じじゃ。人には無い器官のようなもの。理解はできんよ。』

分かりやすく？例えて説明された。確かに腹ビレとか背ビレとかは全く想像できない。魔族もなかなか奥が深いものだ。

そんなこんなでアルモスに入り、馬車を預けて宿を取ったところには昼前になっていた。

ここからは分かれて行動しよう、という事になり俺とオサとマイルはギルドへ、

ソフィーはシズクさんとヤスさんと買い物に出かけた。

「ギルド職員の方なら私の顔を知っている可能性が有りますので…」
と、同行を諦め、村の畑がやられたので食料を買って帰ら無くてはならないらしい二人に付いて行った。

危険では無いだろうか？と思ったが何か必要な物があるらしく、譲らなかつた。

まあマールやオサと一緒に居たほうがかえって目立って危ない、という話だし…

確かにヤスさんとシズクさんと一緒に自立たないだろう。そういう訳で別行動だ。

そして今俺はギルドに居る。

居るのだが…猛然とケンカを始めた酔っ払いの剣と大食いのお姉さんの拳の間で仲裁をしていた。

どうしてこうなったのだろう…

2・1<商業都市アルモス>(後書き)

ついに帰って来た主人公。これからは視点が時々変化します。

昨日の更新で初投稿から一月が経つのですね。思えば早いような長いような、そんな一月でした。投稿当初数週間程は毎日ストックが減っていくのに書き進める事が出来なくなり、真剣に苦しみました。今は何とか書き溜めております。何となくで書き始め、折角これだけ書いたのだから投稿してみよう。と安易に始めた事ですが、沢山の方が見てくださり、楽しんでいただけているのでしたら感無量です。

物語はまだまだ序盤ですので、これからもユート達共々よろしくお願ひします。

2 - 2 <ギルド>

商業都市アルモス。

道端には露天が開かれ、人々の往来は絶える事が無い。

地理的にもこの国の各地に向かいやすく、さらに西方に半日の距離にモンスターの生息する森。

南に2日進めば同じくモンスターの生息する地下迷宮なるものがあるらしい。

その為賞金稼ぎやハンター、商人や旅人が集まり、活気に満ち溢れていた。

そんな街の往来を進んだ所にハンターズギルドがあった。

ハンターは何をしてるの？ と聞くと

モンスターを狩ったり、特殊な植物の採取をこなしたり、雑務だったり色々。ということらしい。

何処かのゲームそっくりな組織があるとは。

さすがは異世界。現実でも奇なりだなあ。と考えつつ扉を潜り建物内へと入る。

「いらつしゃい」

入ってすぐの所から見えるカウンターに居たにこにこ笑顔の糸目の女性が挨拶をする。

とりあえず挨拶を返すが、これからどうすれば良いか分からない。

キヨロキヨロと周りを見回して、

「オサ、俺はどうすれば？」

とりあえずオサに聞いてみる。

「あー？ そうか分からねえよな。そうだな、ならまずは登録だな。その姉さんだ、行くぜ。」

「いらつしゃい。あら、オサさんですか。お久しぶりです。今日は？」

「お、覚えててくれたか。嬉しいねえ。今日はコイツの登録と、依頼のキャンセル報告、それとちょっとしたモンスター素材を売りたいんだわ。」

「そうなんですか。オサさんの村からの依頼ですと…確か「<甲冑猪>に村が襲われた。至急、討伐隊を向かわせてくれ」でした

ね。あ、買取先にしちゃいます？ パパッと終わらせますよ？」

「あー、ちっと今回はモノがモノでな、出来れば奥で交渉したい。」

「おやおや？ オークションに出品するんですか？ それはなかなかどんなものか気になりますねー一応私からも確認させて貰えますか？」

「おつさ、こいつだ。」

そう言つて鞆で渡す。中身は俺が売却を頼んだそこそこの金になるらしいもの5つとく甲冑猪の牙とく晶眼蟲の瞳だ。

「コレは……」

間延びした喋りが急に止まり、低い声を出す受付のお姉さん。

後、さっきまで閉じていた糸目が開いている。思わずビクツとしてしまった。

「どうだい、たいしたもんだろ？」

「ちょっと…流石にこれはオークションでないと無理ですね。分かりました。後で支配人を呼びます。」

「うひひ、幾らになるか楽しみだ。」

「とりあえず、依頼の＜甲冑猪＞は自分で倒されてしまったのですね。それで、その＜甲冑猪の牙＞はこれですね。あ、＜魔晶石＞はありますか？ あれも買取ますよ？」

再び間延びした口調に戻るお姉さん。それキャラ作ってたんですね。怖いから突っ込まないようにしよう。

「…あーそうかそれもあつたか。いや、今回はいいや。持って来るの忘れてたわ」

「え？ 二つに…」

まで言ったところでオサが思いつきり足を踏みつけてくる。ゴメン、痛くない。

さらに首根っこを捕まれてしゃがまされる。そしてヒソヒソと小声で話す。

「テメーは黙ってる。混じっちゃまってどれか分からねえんだろ？ 違うの渡したら不味いんだよ。」

「そうだったのか…ゴメン」

「なんですか〜内緒話ですか〜私も混ぜてください〜い」

「あーすまねえ、とりあえずそのく甲冑猪くはコイツがトドメ刺したんだわ。だから後はオレの紹介があれば登録できるよな？」

「そうですね〜実績がある方でしたらそうなります〜」

「おし、じゃ、そういう事で。コイツの登録頼んでいいかな。オレは奥行つて待つとくからさ。」

「わかりました〜お任せください〜い」

「じゃ、行ってくるわ。後頑張れよ。…程々にな」

最後に小声で「程々に」と言ってオサは行ってしまった。程々……？

「それでは〜登録の手続きをしますね〜」

「お名前は〜？」

「『ユート』アオスズ』です」

「年齢は〜？」

「17です」

「推薦者はオサ』ルトス』アルストラさんと、種族は〜人間ですね〜？」

「そうです。」

「特記事項は…妖精憑きでいいかしら？」

『魔物憑きがいいのう』

「そうですか～ではそれで？」

しれっとマールが口を挟む。物珍しいのかずっとキョロキョロしっぱなしだったが、話自体は聞いているようだ。

「はい。後は会費と実地ですね。」

「会費と、実地ですか？」

「はい会費は初回ですので1000Gになります～後は年間500Gずつお願いします～」

1000G、確か街で見かけた露天売りのおおぶりな芋が1個～10G程度だった。

あの芋が1000円程度と考えると、およそ1万円程度、という事になる。

「案外安いんですね？」

そ、そうだ！ コレクションから安いっばいのを！ 一番多いしそこそこ小さなこの<魔晶石>で！

というものだった。

「す、済みません持ち合わせが無くて…これで何とかありませんか？」

「…<魔晶石>ですか。これはどうなされたのですか？」

「あ、はい。神殿の北の森に間違って入った時に倒して手に入れた物で…混ざってしまって何から手に入れたのかは分からないのです
が…」

「間違っって？ …一人、ですか？」

とっさにいつかのソフィーと同じ言い訳を使う。

だが、いつの間にかまたお姉さんの喋り方が変わっている。マズった！？

「いえ、一応、数人で…」

さらに誤魔化す。

「そうでしたか。とりあえずこれなら1つで12000Gぐらいになりますね。質もかなりの上級ですし、買い取りましようか？」

：1万2千Gということは、およそ12万！？　：もっと大きなのが大半でまだ300個近くあるんだぞ？

お、俺のコレクションは一体幾らになるんだ…？

何故か鞆がずしり。と重くなった感じがした。

「それでよろしくお願いします。それで、あの、好奇心から聞きたいのですが、さっきオサが見せた赤いモノは…幾らぐらいになるんでしょう？」

好奇心に背を押され、質問する。＜晶眼蟲の瞳＞以外でもかなりの種類の素材が全部でおよそ2〜300個詰まっているのだ。他のものの値段も気になるが、とりあえず参考に聞いてみたい。

チヨイチヨイとお姉さんが指で手招きをする。大声では言えないと言う事か、耳を寄せる。内緒話だ。

「アレはちょっと洒落にならないね。アタシの見立てだから確実にやないけど、あの色は多分最低でも2〜3千万G、最上級のモノだとすれば1億は行くと思う。」

衝撃の事実を聞いてしまった。そりゃあの森で3匹しか遭遇しなかった訳だ。熊の次に少なかった。となると、俺の鞆の中にはまだ4億から下手すれば20億程度のモノが？

ゾツとした。ちょっと額面が理解できない。5日で幾ら稼いでしまったんだ俺は…？

その顔を見てお姉さんが破顔する。

「だいじょくぶですよ。オサさんあれでも村長さんですし。私達には手に余ってもあの人にはそれほど困らない額ですよ。」

どうやら青ざめた訳を「小市民が理解不能な額を聞いてビビった」とでも思ってくれたようだ。

「では、こちらの〈魔晶石〉を12000Gで買い取らせて頂きます。そこから会費を千引きまして、はい。おつりの11000G。中銀貨1枚と小銀貨1枚になります。」

…中銀貨1枚で1万Gと小銀貨1枚で千Gという事か？ 少し試してみるか。

「できれば小さなお金が欲しいので小銀貨と銅貨でもらえませんか？」

「いいですよ〜それなら〜はい。小銀貨10枚と大銅貨10枚。それとももっと細かいものが必要ですか〜?」

…千G=10大銅貨…つまり大銅貨は1枚100G。千円札ぐらいなものか? ならこれでいいだろう。

「いえ、これで。どうもありがとうございます。」

「いえいえ〜サービスですよ〜」

「サービス…:そういうえばチップとかは必要なんでしょうか?」

なんとなく…:なのだが、お姉さんの顔を見ていると払わないとマズい気がしたので確認してみる。

「チップですか〜儲かった人が気分度置いてくれる程度ですね〜あ、催促はしませんけど、大歓迎ですよ〜?」

「では、売り値が予想外に良かったのでこの小銀貨を1枚差し上げます。」

「おや〜太っ腹ですね〜チップで1千Gもですか〜?」

「もっと安いと思ってましたので、良いんです。」

これも何となくだ。何となく、小額だと何か根掘り葉掘り色々追求されそうな気がしたのだ。

お姉さんの顔が色々追求したがっているように見えたのだ。だからこれは口止め料のつもり。

だが予想外に高かったのも事実、損だとは思わない事にした。

お姉さんの素敵な笑顔も見れたし。うん。

「そうですか、ありがとうございませう。貰える物は貰う主義ですの
で有りがたく頂きます。」

「ですが、お忘れのようですが、まだ実技がありますよ？」

「あ」

すっかり忘れていた。

2 - 2 <ギルド> (後書き)

9 / 5 誤字、！、？周りを修正しました。

2・3<ギルド2>

「それでは実技ですが、簡単です。その端っこに見える「ハンター君」に一撃を加えてください。鎧として、甲冑猪の牙を加工したものを着けていますので、そうそう壊れません。あれに歯が立たない程度では、困りますので。」

受付のお姉さんが指差したモノを見る。

…あれに突き刺すのか。なるほど程々に、とはこれの事か。

…派手に行かず無難に行こう。

てくてくとハンター君に近づき調べる。

床にがつちり固定された鎧を着た丸太だ。それ以上でもそれ以下でもない。

鎧の胸部分にでかでかと横文字で「ハンター君53世」と書かれている。

53世というのに興味をそそられたが、やはりそれ以上でもそれ以下でもない。

とりあえずコンコンと叩くと金属のような音がする。<甲冑猪の牙>製の鎧、なかなか硬そうな感じだ。

ともあれ、鞆からナイフを取り出しそのまま軽く表面を叩く。うん。傷がつくな。

『硬度はナイフの勝ちじゃのう。ならばザックリとやってやるがよい。』

マールに促され、そのままナイフをハンター君の「君」の字の上辺りに根元までザックリ突き立てる。うむ。これなら地味で大丈夫だ。

「これでいいですか？」

「…コメントに困る事してくれるわね…まあ合格だけ。」

また口調が変わった！？やらかした！？

「出来ない事は無いでしょうけど…どんな力の入れ方をしたらそんなスツと刺さるのよ…」

「それはその。グツと？」

「まあいいわ。オサさんの知り合いだし、珍しくまともかと思っただら貴方も奇人の一人と言う事ね。頭の上のその娘もかなり珍しいし…」

「はあ…申し訳ありません。」

『レアさには自信があるのう。』

「謝らなくて良いわ。はいこれ、ギルド員証と登録用カードにペン。ここここに署名」といっつか何でも良いから書いて。登録するから。」

見た目は大型のバッジのようなギルド員証と手のひら大のカード、ペンを受け取る。

金属製だがほのかに魔力も感じる。もしかしたらこれも魔道具なのかもしれない。

「えと、なんでもいいんですか？」

「ええ、貴方の魔法紋を記録するだけだから。そこに署名したら、以降他の人が持つと黒くなるの。防犯用ね。」

なるほど。他人が持つと一目瞭然ということか。とりあえず両方サインする。「蒼鈴」っと…

「変わった文字ね…魔法文字か何かかしら？」

「いえ、普通に自分の名前を書いただけです。」

「ふうん…まあサインしたがる人は多いしいいんだけどね。じゃ、

カードはこつちに頂戴？ああそれから後それ、身分証にもなるから無くさないでね。無くしたら500Gで再発行できるけど。」

「分かりました、ありがとうございます。」

「うん。じゃ、説明ね。とりあえずギルド員の出来る事だけど、まずはギルドの受付でのスムーズな素材や魔晶石の換金。」

これはその辺の商人に頼むより適正価格で即座に換金が出来る。っただけだから別に他の商人に売っても構わないんだけどね？

それから各種委任状の依頼の受注、オークションへの出品の許可、各地での地図、各種図鑑、モンスター情報の閲覧。」

他に得点的な事では仕事の委任状が通行手形として使える。等色々あるわ。おいおい覚えていけば良い事だけだね。」

なるほど、覚えきれない。後で冊子か何かが無いか聞いてみよう。

「さて、これで初心者登録はおしまい。良い時間だし何だったらお昼ご飯でも食べていかない？ここは食堂でもあるんだから食べて行かないと失礼よ？」

「良いですね。あちらの席で注文するんですか？」

同意して後ろの席を指す。4〜6人がけと思われるテーブルが8、10数人規模の大机が2つ。

そして10個程並んだカウンター席。

幾つかの席には既に人が居て飲み食いしているようだ。

「ええ、メニューはこれね。一つ一つが結構ボリュームあるから、頼む時は注意してね?」

「分かりました。所で、その、」

「何?」

「いえ、口調が…?」

「ああこれ?気にしないで。お客様用の喋りは疲れるからやめただけ。貴方はなんだかどっちでもよさそうだし?」

『むしろ今の方が聞きやすくもいいの。』

「そうでしょう?なんでこんな喋りしないといけないのか…ほんつと分かんないわ。」

支配人の趣味なのよ、この衣装も。まあ給料がいいから?我慢してるんだけど!などとつらつらと不満を述べたす。

「あははは……大変なんですね。」

まあ俺に言われても困るわけで。愛想笑いで返しておいた。

「ま、そんなとこよ。それじゃ行ってらっしゃい期待のルーキー君。」

「はい。ありがとうございます。」

促されて壁際の4人がけの席に向かう。オサが戻ってくるのを待つべきだろうか？

『ドリンクぐらいはよからうて。』

俺の心の声でも読んだかのごとくマールが相槌を打つ。

「そうだね…って前々から思ってたけどなんでたまにそういう横文字がサラっと出てくるんだこの世界」

『あー、＜意乗の言＞のせいじゃな。意識してしまうからの。』

「ことわざとかもそれで…？」

『その通りじゃな。』

「そんな理由だったのか…」

『たいした理由でなかったのう?』

「そつだね」

『ま、今はドリンクじゃ。ソルティードッグをロックで頼もうかの。』

「今のはわざとだよね?」

『さて?..どづかの?』

「メニューに無いじゃないか」

『バレてしもうたか。』

「しかしなんでそんな言葉を知ってたんだ...」

ソルティードッグとか、ロックとか、明らかに日本の頃にしかない。

マールが知る由も無い筈なのだ。

『意識のトリックじゃよ。おんしが知っている飲み物を思い浮かべるだろうモノを言葉に乗せたに過ぎぬ。』

「はあ、便利なのか、不便なのか、」

『軽いおちゃめじゃ。気にするでない。冗談はこのぐらいにして妾はこのアルモススペシャルミックスを頼もうかの』

「アルコール入ってないみたいだよ？」

『この体で飲んだら回り過ぎるのじゃ…』

「なるほど、ね。じゃあ俺はアルモステリシヤスミックスを頼もつ」

『おんしもなかなか冒険好きじゃの？』

「マールもね。」

『後で、味見させておくれよ？』

「俺にもね。」

『うむ』

「それじゃ」

「お姉さ～～～ん」

頼むものが決まったところでお姉さんと呼んだ。

2 - 4 <遭遇>

「うおおおおおおおおおおお！？」

どんがらがっしゃん。と

頭が火事になっている男が叫びながら突っ込んで来て、俺の座っていた席のテーブルがひっくり返った。

…意味が分からない。俺は何をしていたんだっけ？

ギルド員登録を終えて、受付のお姉さんに昼食をとってけと言われ、オサを待ちつつドリンクを頼んだ。うん、そうだ。

それから出てきた2つの極彩色な野菜ジュース（何故マーブルな感じなのか？）を飲み、全くと言って良いほどの甘みの無さっぷりとこれでもかというエグ味に辟易として、ぼけーとしながらちびちび二人で飲んでいたんだった。

そしたら頭が火事になったオッサンが突っ込んできてテーブルがひっくり返った。

…うん。ぼけーとし過ぎてたとか関係なくやっぱりさっぱり訳が分からない。

とりあえずオッサンが飛んできた方向を確認してみる。

『消火じゃ。』

視界の端でマールがそういつてオッサンの頭にスペシャルなドリ
クをかけ鎮火していた。

まだまだ2/3は残っていたから良い消火水になるだろう。色は酷
いが。

そしてオッサンの頭をこうしたであろう犯人は、また別の4人のオ
ッサンに囲まれながら食事をしていた。

「てんめえ！何いしいやーがんだ！」

「いつきなし火いなんか点けあがって！ふざっけんな！」

「聞いてんかーあ！？」「ナンとか言えやオラア！」

オッサン達が口々に文句を言う。

「構わないでもらえないか。私は食事中なんだ。」

このオッサンを焼いたであろう赤毛の人物が答える。声からして、
女性のような。

「大体、先に難癖つけて来たのはそっちだろう？」「ねーちゃん勺してくれよー。なんなら夜の方も頼むぜー」とか、下品な事を言っ
て肩を抱こうとして来たから自己防衛をしたまでだ。」

ふむ。言い分的には女性に理があるように聞こえる。

後良く見ると女性の前の机の上の料理が凄い。

あれ、一人で食うつもりなのか？連れとかは居ないのか…？

「ああ！？んだけの事で、あタマに火点けたんのか！？」

「ぎっけんじゃネーぞ！」「チョーシこいてんじゃーねえーぞ！」

「おっ高く止まりやがってよおー！」

どうやら完全に出来上がっているようだ。4人とも呂律が変だ。

「てめえ！！よくもやりやがったな！！」

マールに消火され極彩マーブルカラーに塗れた男が復活し、剣を抜いて4人の輪へと向かう。

「ああ、あれは、不味そうだな。」

『良いのか？ほっつておいて』

「あまり目立つ真似はするなって言われてるし、こつこつ所だし鎮
圧してくれる人とか居るんじゃないの？」

あくまで他人事。関わらない方が良い。

とりあえず倒れた机を戻し、再び座って遠目に観察を続けることに
した。

そうこうしている内に、極彩色オッサンが輪に加わり、女性に剣を
付き付け何かしらめく。

早口でまくし立てるためかよく聞き取れないが、罵倒しているのは
確かのようにだ。

あ、机をひっくり返した。女性の食べていた料理が吹っ飛ぶ。勿体
無い。

事ここに及んで受付のお姉さんが渦中のテーブル席へ向かう。あの
人が鎮圧するのか？

だが、囲んでいた4人の内の2人が壁になり、進路を塞いで進ませ
ない。

ゆらり、と女性が立ち上がり、細長い一房の編み髪が翻った。

と思ったら、極彩オッサンがまたしても飛んできた。

慌てて立ち上がり、避ける。先ほど元に戻したばかりのテーブルに、俺が座っていた椅子も巻き込み、再び極彩オッサンがもんぞり打って転がった。

おいおい、なんて威力だよ。

女性を見る。周囲に鬼火をぼっ、ぼっ、と点らせながら残り二人のオッサンを殴り、吹き飛ばしている。

…殴って吹き飛ばした？いや、よくよく考えれば<強化魔法>の使われてい無いこの世界。

どんなに威力はあれども拳では体に突き刺さったり、その場にくず折れることはあっても、こんな風に人は飛びはしない筈だ。

魔法で押し飛ばした、と考えるのが妥当だろうか？

とすると、派手に飛んでっただけでダメージは然程無いのかもしれない。

と思ったらやはりそうだったのか、瓦礫の山と化したテーブルと椅子の塊から極彩オッサンが起き上がり、「ぶっ殺してやる！」と怒りを露にした。

さらには剣を持って立ち上がるうとする極彩オッサンに向かって…

なのだろうが、剣呑な顔をして怒りを顕にした赤毛の女性がこちらにつかつかと歩いてくる。

怖い。自分には向けられて居ない筈なのに怖い。

極彩オッサンが立ち上がり、女性、ではなく俺の影に回ってくる。

どうして俺を挟む？

「どけ。」

はいはいどきますよ？

女性が鋭く言うので、道を開けようと一歩下がったところで極彩オッサンに突き飛ばされた。

ああ、そういうことですか。俺を牽制に使って本命の剣での一撃を……って流石にそれは不味いだろう！？

踏みとどまる。その場で90度反転し剣を振り下ろそうとしている極彩オッサンの拳を掴み、止める。

同時に物凄い寒気がしたので反射的に背後にも手を出して……女性の拳を受け止めていた。

何か同時に爆風のようなものを受けたが、踏みとどまる。

流石にここまで巻き込まれては傍観者ではいられない、と思ひ言葉を発する。

「あの、そろそろ止めて貰えませんか？危ないですよ？」

剣を、拳を止められた両者が驚いたかのように俺を見る。障害物扱いで眼中に無かったようだ。

そのまま極彩オッサンの拳を捻り剣を落とさせて、さらに手の届かないぐらいに蹴り飛ばす。

そうこうしている内に赤毛の女性に殴り飛ばされた2人を含む4人を拘束して、お姉さんがこちらに向かってきていた。

お姉さんも中々やるなあと思ひ、極彩オッサンを引き渡そうとした時、

「おい」

反対側から声がかかる。

拳を受け止められ、不思議な顔をして自分の拳を見ていた赤毛の女

性が話しかけてきた。

「なんでしよう……つか!？」

振り向き様に顔目掛けて再び飛んできた拳を受け止める。さっきよりも威力、いや、むしろ圧迫感がある。

「!？」

な、何を!？と思ったが相手の方が驚いた顔をしている。

「そんな…も、もう一回!!」

何が、もう一回何ですか!？と思ったらトトツと数歩ほど下がった女性がステップを踏んで拳を叩き込んで来た。

もう一回?受ける、と?

避ける事も出来たがもう一回、と言つ言葉に釣られてつい受け止める。

拳だけじゃない、何かしらの付加効果を感じる。強烈な熱風、いや

衝撃波に近い。だが、耐える事は出来た。

「な、なんで？」

そんなこと言われても、困る。

「お嬢様！！」

奥の方から燕尾服らしきものを着たくすんだ金髪の男性が飛び出してきた。

「お嬢様、何をなさってるんですか！？」

「お、おお、いい所に来た、セバス。ちょっと、」

そう言つて女性がセバス、と呼んだ「執事風の壮年期入りたて口髭ダンディ」といった風貌の男性に向き直り…あ、

セバスさん？が吹っ飛んでいった。

赤毛の女性が、止めるヒマも無く拳を振るっていた。

2・5＜遭遇2＞

「申し訳ございません、先ほどは主が失礼を…」

先ほどの騒動からおよそ30分。相変わらず戻ってこないオサを待っていたら、

お姉さんに連れられて行って絞られていたセバスさんと赤毛の女性
がやってきた。

『ほんとにじゃ。妾を埋めおつてからに…』

机の上で新しいジュース（今度はまともな白桃色、甘い）を飲んで
いたマールが愚痴る。

騒動中姿が見えないと思ったら、2回目に飛んできたオツサンが机
ごと吹き飛ばされたのに巻き込まれ、瓦礫に埋まってしまっていた
のだ。

「俺は気にしていません。お構いなく。」

「そう言っていただけるのは有りがたいのですが、その、」

「セバス、そこから先は私が語ろう。」

赤毛の女性が前にでる。

「まずは挨拶だな、私の名はメリアルーナ、先ほどは失礼した。こちらは我が家のセバスチャンだ。」

…ファーストネームだけか？ギルドでは家名を名乗ったりはしないのかな？と一瞬考える、が後に続いた名前で吹っ飛んだ。

「ゴフツ…せ、セバ、セバス…ゴホ、ゴフ、」

思わず、むせる。

似合いすぎにも限度があった。

「どうした…？何か面白い所が…？」

「いえ、…済みません。俺の名前はユート、です。家名は無くても？」

「ああ、構わない。ここでは語らないのが礼儀だ。」

「そうですか、それでその、実は聞き覚えがある名でしたので、その、セバスチャン。と言うのに。」

「まあ、そうだろうな。極少数とは言え、セバスチャンに成れた者はそれなりに居るはずだ。」

「成れた…？人名では、無いのですか？」

「…？セバスチャンは執事養成課修了生での最高の称号だろう？まあ確かにセバスチャンの称号を得たものは、以降自己紹介でセバスチャンを名乗って自分の名前を余り言わなくなる奴が多いと聞くが…」

お前の名前なんだっけ？とメリアルーナさんがセバスさんに確認する。

フランクです、お嬢様。とセバスさんが返す。

なんとセバスチャンとは最上級執事の事だったのか。それでソフィーも…

と、言うかこれは絶対く召喚されし者へのせいだな。と納得する。

「納得しました。済みません。てっきり人名なのかと勘違いを」

「知らない人には良くある事です。それに我々には名誉ある名ですので、問題はありません。」

セバスさんが爽やかに微笑みながら語る。サマになっている、

うわあ、セバスチャン。とかつい自然に思ってしまった。

「話が脱線してしまったな、本題に戻ろう。」

メリアルーナさんが話を戻す。

「ええと、何でしょうか？謝罪でしたら別に。俺も、マイルも幸い傷一つ負っていませんし？」

『埋まったかの』

「…根に持つね？」

『おんしが気づかなんだ事がさらに気に食わん。』

「何度も謝ったじゃないか…」

『まだまだ、じゃ。それよりまた話がそれたの。すまぬ。続けてくれ』

「随分と饒舌なのだな、妖精というのは…」

『魔族じゃがな。』

「はあ、いや、そうだな、改めて…ゴホン。」

「単刀直入に言う。ユート、お前が欲しい。」

「へ？」

何？この展開？

2・6＜遭遇＞

「単刀直入に言う。ユート、お前が欲しい。」

「へ？」

急な展開に思考が追いつかない。何を言ってるんだ？

「うむ。実は私はギルド員では無く軍人でな。我が隊にお前が欲しい。私の拳を受けきって見せたのだ、実力は十分だ。」

つまりはスカウトだ。そう言って何か書いてあるプレートが付いたネックレスを取り出し、ちらちらと振って見せる。ドツグタグみたいなものだろうか？

それにしても…またソフィーの時みたいに「私の旦那様に！」とか言われるのかと焦ってしまった。

…うん、自意識過剰だ。

「ええと、申し訳無いのですが旅の途中でして、一人旅でもないの
で、そういうお話を受ける訳には…」

「む、旅か。では目的を教えてください、私も手を貸そう。それを終え

「た後でならば良いだろう？」

「お嬢様、目的など言えない場合もございます。配慮して下さい。」

「ぬ、そういう事もあるか、済まん」

セバスさんが口を挟み、メリアルーナさんが納得して謝罪する。

中々セバスさんの発言力は高いようだ。主にサラッとカンゲン、諫言？でいいんだっけ？を述べるとは。

「あ、いえ確かに終わりは見えていませんが、今の目的自体はアーリントンに行く事です。」

うる覚えの単語を疑問符交じりに浮かべながら、返事をする。まあ隠すほどの事でも無い。

「おお！アーリントンか！それは実に都合が良い、私はアーリントンの者だ。何時出るのだ？着いたら是非歓迎したい。ついでに入隊してくれたなら万々歳だ。」

「ええと、とりあえずまだ何日かはアルモスに居るつもりです。色々買い出しを終えたら向かおうかと。」

「そうか、それならばまた明日にでも確認させてもらおう。通行証が必要なら私が用意しても良い。」

「それは願っても無い事です。ありがとうございます。」

やはり通行証が必要だったか。

身分証を得るついでに、ギルドの仕事でもアテにしようと考えていたのだが、思わぬ所でアテが出来た。

「では、また明日の昼ごろにここで。構わないか？」

「はい、色々ありがとうございます。よろしく願いしますメリアルーナさん。」

「メリアでいい。呼び難いだろう。」

「分かりました。では、メリアさん。また明日に。」

「ああ、また明日だ。」

そう言ってメリアさんとセバスさんが出て行く。彼女達は彼女達で色々用事があるらしい。

手元のジュースを飲み干す。少し緊張していたのか、喉が渴いていた。

く、く、く、と笑いが漏れる。

その場ではスカウト出来なかったが、なんだ、この展開は。彼の目的地はアーリントンだと？

なんと都合の良い事か！

恩も売れるし、着いたところで家に連れ込んでしまえば彼も残ると言うだろう。

なんせ5大家、その長女で、この国最強との誉れ高い私の直属の部下になれる。と言うのだから。

そして、私に彼を部下に留めるつもりは無い。

私の拳を軽く、片手で受け止めたのだ。国内最強の拳を。誰も、セバスすら吹っ飛ばすような拳をいとも簡単に！！

実力は十分？そんなレベルで有るはずが無い。

自分で打っておいてなんだが、私自身が食らっても耐えられそうに無い拳なのだ。

身震いする。いる、いた、いたじゃないか！私よりも強いかもしれ
ない男が！！

実際の実力の程は分からない。だが、十分過ぎる程の期待が持てる。さらには一見大人しそうだ、芯の通った感じの伺える容貌。

力に溺れ、粗野になることも無く、冷静さを保ったままの物腰と話し口調。

そして、どう見ても15、6と言った外見。

完全に、完璧なまでに、測ったかのように私の好みのだ真ん中。

神が私の為に用意してくれて居たのか？とにわかには信じなくなる

ああ、ソフィーの手がかりを得に来ているのに、浮かれてしまう。気がそちらに向かない。

さっさと彼の実力を測って見たい。だめだ、今はソフィーだ。期日も大分近づいている。

彼もアーリントンへは馬車で行く筈だろうし、そうなるとここからアーリントンへの道のりは4〜5日かかる。十分だ。

彼の方は時間がある。今はソフィー。ああ、ソフィーの事は物凄く心配なのに心が弾んでしまう。

済まない、ソフィー。済まない。

そう考えながら、私はセバスを連れて潜伏中の草との合流場所へ向かった。

『おんしを待っておったんじゃぞ。わざわざな。』

「そりゃ悪い事をしたな、もう決まってるのか？」

「ああ。」

『うむ。』

頷く。

「おっけ、お〜い姉ちゃん。」

「はいはい」

受付のお姉さん呼び、料理を頼む。

注文を受け取ったお姉さんはパタパタと裏の厨房に入って行った。

「あん？そついえばお前ら、文字も読めんの？」

「そついえば…読めたな。」

言われてみて始めて気づいた。そついえば読める。

『便利じゃろ?』

「言葉じゃないのに大丈夫なんだな…」

思い当たる節はいつかかけてもらったく意乗の言ゝしかない。だが、そこまでの汎用性が…?

『何で視覚情報と聴覚情報をおんしらは分けたがるのじゃ? 受ける器官は違えど結局はどちらも同じ波でしかないぞ?』

「すまん。何言ってるのか分かんねえ。」

「言ってることは分かるが、それとこれとは違うような…。光波と音波…? 納得し難いな…」

「…お前分かるのかよ? 意外と学あつたんだな…」

『意外と、とはまた、ククク、確かに意外じゃな、ハハハ』

「…心外だ。」

確かに習った事ではない。たまたま見た程度の、それもつる覚えの知識だ。

だが、そのたまたま見る知識は現代日本では膨大だったのだ。

少し興味が湧けばインターネットで検索すればそれなりに詳しい情報
報が得られる。

最も、無駄知識、と言われればそれまでだが。

「それで、どうだったんだ？オークションはいつに？」

話題を変える。

「ああ、オレの分は来月だ。大物が出るときは各所に通知して買い
手を募るからな。

お前の分はオークションに出すまでも無いってんで換金してもらっ
たぜ。まあちよつと割安になったろうが、オークションにかけても
手数料で大差ないしな。」

路銀にするんだろ？手持ちで有った方が良いと思つてな。そう言っ
てオサが俺に鞆から取り出した重そうな袋を寄越す。

覗いてみると、金、銀、銅、ほい3色の大小様々な硬貨が入っていた。

「占めて176万1840G。手数料の5%は88092だが細かい
イトコは切り捨てて88000でいいや。で、それを引いた167
万3840Gだ。」

「この辺の並みの家が3件は買えるぜ。路銀としては十分以上だな。

「

「さすがに暗算できないんだが…せめて紙とエンピツが欲しい…」

『妾もそついうのは苦手じゃ…』

「ま、そうだろうな。だが安心しろ。これだけ儲けさせて貰ってるのに不義理はしねえさ。祖先にかけて、な。」

確かに、そついうならそつなのだろう。決め台詞も出たし信頼しよう。

「わかった、でもこれ混ぜてていいのか？金貨、銀貨って柔らかかそうなんだが…」

「あん？貨幣がなんで柔らかなんだ？」

『案ずるでない。こついうものは純金・純銀でなく混ぜ物がして有つての、硬くなっておるんじゃ。ようするに合金というやつじゃな。平気じゃよ。』

「なるほど…そついう理由も有ったんだな混ぜ物をするのに」

てつきり純度を下げて水増しする為だと思つてた。

「オレには何を言ってるのかさっぱり分からねえ…」

オサは言ってる言葉すら理解できないと言いたげな顔で俺たちを見る。

「あんなたちなぐんか難しい話してるね？意外。あんな学あったんだね」

そう言いながらお姉さんが料理を運んできた。

パエリアっぽいもの。豪快な肉の塊。サラダっぽいもの。他にも色々、どれもボリューム満点でうまさうだ。匂いだけで唾液が溢れ出す。

「ほんとなあ？意外だったわ。ユートもマイルもなんでそんな学あんだ？って気分だ。長寿族のオレの面目丸つぶれ。」

「うーん、ちょっと説明しかねるね。」

「妾は大抵の場合知っておるのでなく知れるだけじゃしな。全部とは言わんが。」

「知れる？」

「そうじゃ、質問に答えるのは得意じゃと言ったる？答えを知れるからじゃよ。」

「はー、それは便利そうだな…いまいち分からんが」

「なんだかすごいですね〜それじゃ試しに聞いてみたいんですが、
王女様は今何処にいますか〜？」

お姉さんが出し抜けに質問をしてきた。そしてその内容に内心ドキ
リとする。

『残念ながら答えられぬ。』

「え〜でもなんだかその言い方だと生きているのは確かっぽいです
ね〜？」

『ああ、生きて、この世界に居る。命に別状も無く、自由を侵害さ
れてもおらぬ。そこまでじゃな。答えは分かってもそれを聞けるか
は聞く本人の資質次第じゃ。諦めよ』

「本当なんですか〜？十分です〜ありがとうございます〜」

「王女様に何か？」

動揺を隠し、質問する。ソフィーが失踪している事は機密扱いされ
ているはず。と言っていた。

カマをかけられているとしたら、俺の事も見当が付いているのかも
しれない。

「あ、しまった。秘密だった…」

「おいおい、どういう事だよ？」

「ごめんなさい。忘れてくれなしかしら？」

『今更、じゃの。何、この国の姫は知られる限りで12日前に神殿で<召喚魔術>を使用してから行方不明で生死不明なだけじゃ。ついでに<召喚魔術>も成否不明という事になっておるようじゃの。』

オサとマールも合わせる。上手い。

そして次々とマールが語る事実の欠片にお姉さんが驚愕する。

「貴女本当に何でも分かるのね…ギルドの情報網で掴んでいる事にそれ以上の事まであっさりだなんて…」

『何でもという訳では無いのじゃがの』

「妖精さん情報網…？いえ、それでも十分凄いわ…スカウトしたいぐらい。」

『妾は主の下を離れぬし、主に害を成すモノには容赦せぬ。後、魔族じゃ。』

「肝に命じて置くわ。それから、情報ありがとう。助かったわ。すごく、すごくね。」

『何よりじゃ』

そう言ってお姉さんが踵を返した奥へと、かなり急いで引っ込んで行った。

とりあえずおかしな空気になってしまったが箸を進めることにした。と言っても箸は無いが。

「けど、なんだってあんな感謝されてたんだろっ？」

『情報が一切無いんじゃよ。失踪したか死んだかも分からん状態じゃったのじゃ』

「…………お前のせいだな。この規格外男…………」

オサが半眼で俺をねめつける。…ジト目だ。

「言い訳できないね…………」

『ともあれ、これでギルドは王女の生存を知った。動きも変わるじやろ』

「…………どういふことだ？」

『みなまでは言えぬよ。だが、妾は平和な国の方が好きじゃ』

「は、なるほど王家が途絶えてたら内乱の可能性があったのか。」

『流石に聡いの、概ね、正解と言っておこうかの。』

「そうかい。」

「俺も平和な国が良いな、これから住む事になるんだし。」

「勿論オレだってその方がいいさ。」

会話を切り上げ3人で料理に舌鼓を打つ。スペシャルとかデリシャスとか付いていない料理は予想よりも相当に美味しかった。

「なあ、後で良いんだが、実はオレも一つ聞きたい事があるんだ。」

食事もあらかた済ませたところで、オサが深刻な声色でぽつり、と呟いた

『答えよう。じゃが、その質問に答えるためにはおんしに一つ答え

て貰わねば成らぬ事がある。』

「お前が質問するのか？分かるんじゃないのか？」

『妾の分からぬ領分、という事じゃよ。』

「……………今は、まだ良い」

『そうじゃろう、な。』

…何か分からないが、その深刻な雰囲気には俺は口を挟む事ができなかった。

2・8 <貨幣と武器屋>

「あん？貨幣が何Gなのかって？……お前なんか常識の枠だと知らない事多いな」

今更何言い出したんだ、コイツ。といった言い方だった。

ギルドの会館でかなり遅くなった昼食を済ませ、次の目的地は武器屋だ。とオサと話しながら歩いていった。

熊にへし折られた剣の代わりの剣を、粗悪品じゃないまともな剣！を買いに行くのだ。

その際に、どうせだからついでにと、さっき困ったので確認したのだ。

「仕方無いだろ……」

実際この世界の常識はさっぱりなのだ。

他所の世界の知識が有るので「学があるな」と言われたに過ぎない。

「まあそうか。じゃ、そうだな。下から行こう。お前が持っているのは全てこの国の共通硬貨。ベルム硬貨だな。で、」

「まず小銅貨は1G、中銅貨は10G、大銅貨は100G。
んで小銀貨は1000G、中銀貨は1万G。
そしてその上が小金貨で10万G、さらに中金貨で1000万G。
その上はもう金塊だな。1億を越えるとでっかい金塊にどーんと
発行国の紋が打刻されたのになる。」

「圧巻ではあるんだが、重くてロクでもねえ。貯めたいヤツ用だな。」
「さつきも思ったがやはり長さ・距離と同じの10進法。さらに一、
十、百、千、万、10万、100万、1000万、まで硬貨とは。」

「当然ながら紙幣は無いようだ。」

「銅貨だけ大があるんだね」

「とりあえず聞いて思った疑問をそのまま口にする。」

「希少性の問題だな。銀と金は少ないから大が無い。つまりそういうことだ。」

「なるほど、そういうことか。」

そうこう話している間に武器屋に付いた。大きな街だけあって店もかなりのものだ。

中に入り、飾つてある武器を眺める。

分かりやすいところで剣、槍、斧、ナイフ、片刃の剣や鈍器、弓、
…手裏剣にこれは靴べら??他にも色々、良く分からないもの。

『ふーむ。良い物はモンスター素材の物が主流で、ただの金属製の物はロクな物が無いの。』

「ミスリル製とか他のでも良いけど魔法金属で出来た武器はないのかな?」

キヨロキヨロと見渡す。

ミスリルやオリハルコン、アダマス鋼ルト・アサンダーと言った類の魔法精錬されたものぐらいの耐久度でないと、<水環鋸>に耐えられない。

耐えられる物がなく多連層水環鋸も使えない。それは不便だ。

『ない、の。硬度のみで言えばモンスター素材のものがそれに近いの。じゃが、耐久度はお話にならないの』

残念だ。最悪自分でなんとかするしかないのか？

俺でも加工できるような素材があれば良いのだが。

やり方は知らないけど…

とりあえず一通り目を通す。値段にもだ。

見る限り同じようなサイズの剣でも安いものと高いもので、数10倍から軽く100倍以上も値段に差がある。

傾向として金属製の武器は安かるう、悪いかるう。なようだ。

「どうだい？お眼鏡に適う武器はあったか？」

オサが一回りして見飽きたのか、こちらに話しかけてきた。

『うーむ。おんしにはこの<女王螂の剣>あたりが良いのではないか？素材はそこそこ、サイズはぴったりなのようじゃが』

マールが指したのは<女王螂の剣>を加工して柄が付けられた両刃の剣だった。サイズは柄まで合わせて1mと少し程度。

<女王螂>森で対峙した相手を思い出す。…確か向かい合って頭の

高さが2m半そこそこあった蠅螂のようなモンスターだ。

4本の後ろ足で素早く異様な機動をし、鎌でなく大剣のようになった全刃状の両腕でなます切りにしようとして来る。

他には女王の名の所以と思われる上半身部分の胸やウエストと言った趣の、無機質であるが女性的なラインが印象的。ただしその上の頭は人では無かったが。

記憶にあるそいつに比べると、加工されて細く短くなっている分も含め半分強程度の小ぶりな刃だが、確かに俺にはぴったりの大きさに思えた。

「よし、これにするか。」

<女王螂の剣>で出来た剣を取る。お金に余裕があるので予備にもう一本同じサイズのものを取る。

<女王螂>は両手が剣だった。この2本は恐らくその両手だろう。

柄の周りは基本的に同じ意匠だが、微妙に対になるようアレンジがされている。なかなか洒落たものだ。

剣を持って店番のおばさんの下へ向かう。

1本21万G。2本で42万G。オサが交渉して2本で40万Gになった。良い買い物だ。

「…その剣で家が建つぞ」

オサが勿体無いと言いたいのだろう、恨めしい感じの声を出す。だが仕方ない。命を預ける武器は良い物である方が良いのだ。

ホクホク顔で店を出る。興味があるものを見ていると時間が経つのが早いもので、もうすぐ夕方だった。

3 - 1 <人型3>

買ったばかりの剣を鞆に仕舞い、こっちの方が近いという事なので行きとは別の道を使い宿に帰る事にした。

石畳で出来た広い道と高い壁、その向こうに見えるやたらと大きな邸宅。

高級住宅街。そんな感じの所を歩く。

人通りは露天だらけの表通りと比べ少なく、閑散としていた。殆ど無いと言って良い。

数件通り過ぎ、一際大きな屋敷囲いの前に差し掛かった所で、

オサが親指で指差して心底嫌そうな声で「ここがここいらの領主の家だぜ」と、呟く。

へえ、ここが例の…と、指差された巨大な屋敷囲いの塀へと目を向けた時だった。

轟音と砂煙を上げて屋敷囲いの塀が砕け飛び、目の前の道に大きな人影が躍り出て来た。

人？巨人？いや、良く見ると2人だ。

2 m半はある黒い巨体の人影の方は、胴体部分に巨大な馬上槍らしきものが根元まで突き刺さっている。

そしてその槍の柄を抱き抱えた全身赤い人物が見えた。

飛び出した2つの人影は、そのままの勢いで地面にバウンドし、転がった拍子に槍を持っていた方の赤い人物の腕が離れ、落ちる。

勢い余って地面を転がる赤い人物。その転がる様が酷い。

ポロポロ、いや、あれはもう良くて瀕死の重傷じゃないだろうか？

「逃げる……!!」

血まみれで手足が明後日の方向を向いた赤毛の人物が顔だけを上げこちらに叫ぶ。

女性、聞き覚えがある声。

メリアだった。

「おい、あれ」

オサが何かを言おうとした時にはもう全身の〈強化魔法〉を活性化させメリアに向かって駆け出していた。

「マール、メリアさんを頼む。」

『心得た。アレはモンスターのようじゃな。』

「見れば、分かる」

加速し一足で突っ込む。メリアを抱えて攫おうかと思っただが、重傷過ぎる、動かすのは命に関わると判断。

異形の人影を勢いそのまま飛び蹴りでその場から押し飛ばしながらマールを残す。

「馬鹿、逃げろ！」

『そもいかなのう』

メリアが悪態をつく。

同時にマールが取り付き治癒魔法を使用し始める。

ざっと見ただけで全身血と土にまみれ、手足は全てに貫通創が幾つかと、両足と左腕に酷い骨折が見られる。

顔や腹部には殴打の後、そして先ほどギルドで出会ったときに着ていたハーフプレートの鎧と服の前面部分が剥ぎ取られ、首元から太腿まで大胆に肌が全て丸見えだ。

何が、あった。

痛々しくあられもない姿を隠してあげたいが、今の自分の服は外套が有る訳でもなく、パツとは脱げない作り。

変わりに鞆かららく雪毛鹿の毛皮を取り出し、投げるように手渡す。後はマールがやってくれる。

さらに鞆からさつき買った剣を取り出す。鞘から抜き出し鞘も投げる。この際、邪魔だ。

「ユート？…無茶だ、逃げろ、あれは<人型>、<鎧付き>だ！！
一人ではだめだ！！」

メリアが叫ぶ。話しかけた相手が俺だということに気づいたようだ。蹴りで押し飛ばした<人型>というらしいモンスターがゆらりと起き上がり、肥大化した右腕で柄を掴み腹の槍を引き抜く。

そのまま槍を持って跳躍、こちらに殴りかかって来た。

鈍器を扱うかのように大上段から叩きつけられた槍を相手の横に回りこみつつかわし、もう一度胴体を押すように蹴り、崩れた壁の中へと蹴り飛ばす。

先ほどと違い慎重な蹴りだ。この体格差、助走も無い。本気で蹴ったら足が刺さるか、俺の方が反動で弾かれてしまいかねない。

目論見通りに蹴り飛ばした<人型>を、そのままの勢いで追いかけて、粉碎した屋敷囲いから敷地内に飛び込む。

観察する。

<人型>、森では出会わなかったモンスター。

人と同じで手足が2本一對づつ寸胴な胴体に繋がっている。骨格も直立歩行のものだ。

肌が黒つぶく硬質になっているが、恐らくその呼び方の通り人が変質したモンスター。間違いないだろう。

異様なのは腕、両方とも肥大化しているのだが、特に右腕がシオマネキのように過剰に肥大化している。

さらにその肥大化した両肩の肉に埋もれるように頭が埋もれてしまっている。肩の上はかなりフラットな感じだ。

そして肥大化した右腕に、奇妙な形をした柄を持つ2m半はある馬上槍を握って殴りかかってくる。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ブオンブオンと荒々しい風切り音を立てて振り回され、息つく事無く繰り出される槍の猛攻をかわす。

動きは、早い。

そして、若干ではあるが、間合いが伸びる。

威力もかなりあるようだ。だが、槍もそうとうな強度なのだろう、何度か地面に叩きつけられているが壊れる様子が無い。

かわし、弾き、切り付け、観察を続ける。

槍を持たない左腕が、出し抜けに突き出される。遠い、何故？と考えたら腕ごと鋭く尖った指が伸びた。

メリアの貫通創はこれか！

かわし際に剣で伸びて来た指を横から切りつける。さっきから感じていたが全身が、硬い。

切りつけると言うよりも殴りつけたような感触。〈鎧付き〉とはそういうことか。

それでも比較的細い指は何本か千切れ、へし折れる。

指を折られた為か絶え間の無かった猛攻に隙が出来たので、大きく一歩下がり周囲を確認する。

屋敷の壁沿い、遠巻きに10人ほどの人の壁。

そしてそこから少し近づいた所に数台の馬車と、馬車らしき残骸と下半身むき出しの男。

しかし両足を膝の上から失い這っている。

服ごと足を引き千切られた？そして見たところ止血をしてない。

あのままでは、不味い。間違いなく死ぬ。

助ける、べきか？だが<人型>の猛攻をいなしては対応できない。

セバスさんは、居ない？

少なくとも、見当たらない。

「止血を！！」

叫ぶ、それしか出来ない。

だが、誰も男には近寄らない。自分で止血もしようともしない。遠巻きの人もモンスターに近寄るのは怖いのだろう。仕方ない。マールはメリアの所だ。

<人型>は硬い、と言うより弾力がある。剣の鋭さが足りない。

数センチ程薄く切れるが、これでは剣だが効果は鈍器に近い。

もっと力を込める？いやだめだ、恐らく剣が持たないだろう。

そして高い弾力性のせいで、ダメージはそれほど通っていない。

こつも矢継ぎ早に攻撃されては鞆からナイフを取り出すヒマも無い。

ではこの剣を全力で投げつけて見るか？

…それもだめだ。ナイフや槍でもあるまいし、俺では中途半端な長モノは上手く投げられない。

致命傷にならないだろう。

すぐさま倒して、止血をする事ができない。

どうする？攻撃魔法？そのヒマは無い。ならば、

新しく強化魔法＞を選択、活性化する。

ソフィーに説明した基礎になる常時発動型の1段目、

待機状態から活性化させることで身体能力を爆発的に上げる2段目、

そのさらに上の段階、3段目。

己の肉体だけでなく、身につけた装備を肉体の一部として認識させて強化する。俗に言う＜外部強化＞

剣に魔力を流し、俺の体と循環させる。

聞くのを忘れて居た為伝導率と耐久力は分からない、砕けないでくれ。祈りながら慎重に流す。

ヴウンと剣が低い唸りをあげ淡く発光する。マールの使ったく付与＞の魔法に似た光。

どうやら＜甲盾熊＞戦で＜硬固＞をかけた鉄剣に試した程度の魔力は平気のようだ。

ブオン。と風を切った槍が俺の胴を捕らえ、振りぬかれる。

吹き飛ばす。だが横薙ぎに振るわれた槍の直撃した衝撃で剣は抜けた。

先ほど開いた屋敷囲いの横まで吹き飛ばされ、轟音を上げて激突し、壁がさらに崩れ、降ってくる。

不味い、埋まる。

「ユート！」

すぐ近くで治療を受けていたメリアが悲鳴を上げる。

その声に反応したく人型>がメリアに向かってジャンプをし、飛び込みながら槍を大上段から振り下ろす。

崩れて来る瓦礫が直撃するのを無視し、飛び出す、落ちてくる破片を体で弾き飛ばしながらメリア達と飛び込んでくるく人型>の間に割って入る。

上から叩き付ける軌道で槍が迫る。

弾く？いなす？無理だ。このまま受け止めるしかない。

右手の剣を盾に刃の陰に左腕を沿えて槍の一撃を止める。

<強化魔法>の効果で横っ腹で受けても剣は折れはしない、だろう。
問題は

ガアアアンと金属がぶつかり潰れるような、甲高くて重い音が鳴り響く。

衝撃を受けきつた両足が、脛まで地面に沈む。

「ヒッ」

メリアが引きつった悲鳴を漏らす。

渾身の一撃を受け止められた衝撃で槍の柄が曲がり、折れる。

俺が耐え切ったのが意外だったのだろう。体勢を崩したく人型<が、たたらを踏み半歩、下がる。

さらに持ち難かったのか、曲がった槍を投げ捨て、肥大化した腕を開き、掴みかかろうとしてくる。

そこに、見えた。

…そこが、口だったのか。

肥大化した右腕、その手のひら全面が口だったのだ。

話で聞いたモンスターの行動の基本は食欲。なのに頭が埋まり口が無いのは何故かと思っただらこんな所にあつたとは。

だが、長物を失いただ真つ直ぐ来るだけの腕をかわすのは容易い。

いくら早いと言っても、魔族程でも無い。

再び両手で剣を握る。突き出された腕を剣でいなし、上半身だけがかわし、その腕に這い上がるように体を沿わせ、割り込ませ、剣を振り上げる。

巨大な右腕は二の腕の半ば程で切り離され、落ちた。

剣を振り上げる勢いで足を片方引き抜く。さらに返す刀で<人型>の胴を薙ぐ。

風穴の開いた胴はろくな抵抗も無く切り裂かれ、上半身と下半身が分かれた。そこまだった。

3 - 1 <人型3> (後書き)

今回迷いに迷ったのですが、勢いで書いたままのこの3を先にもって来ました。時系列を守るよりも自然かな?と思いましたので。とりあえず1、2は12時間更新で追って投稿しようと思います。

3 - 2 <人型1>

アルモス卿が戻った。

ギルドを後にし、セバスと共にこの街に居留している草と合流し、ギルドで得た情報と比べても特に目新しい情報も無い報告を受けていた時に、その一報が届いた。

目新しい情報も無いのにこれ以上聞くことも無い。

と早急に切り上げ、急ぎアルモス卿の邸宅へと向かう事にした。

そこで私を待ち受けていたのは、邸宅の敷地へと入る馬車と人の列だった。

「アルモス卿はおられますか？」

セバスが門番らしき兵に話しかけている。

私は馬車を睨みつけて考え事をしていた。

この時期に神殿に向かった、という話だ。何故向かった？そして何をして帰って来た？何かを確認してきたのか？

やはりアルモス卿は怪しい。

「お嬢様、アルモス卿は中に居られるそうぞ、話を聞かれるそうぞです。」

セバスが語りかけてきたので思考を中断する。

後は、本人に聞けばいい。

門をくぐり、敷地内へと進むことにした。

妙に高く厚い屋敷囲いの裏は、庭園ではなくただっ広くならされた地面だった。まるで軍の訓練用地かワイバーンの発着用地だ。

そんな広場の奥に数台の馬車が並べられ、その前で偉そうな格好をした小太りの男が激を飛ばしていた。

あれがアルモス卿だろうか？

とりあえず近づき、話を聞いてみることにする。

大分近くに寄って顔が見えた時に思った。身なりは良いが若い。ふむ。どうやら息子が何かのようだ。

「失礼、私はメリアルーナ・ルグス・アーリントンだ。アルモス卿は何処におられるのだろうか？話があつて来たのだが。」

失礼の無いよう話しかけた。つもりなのだが、ねめつけるような視線を返される。

値踏みするようないやらしい視線。…ちっコイツも同類か、虫唾が走る。

「ようこそメリアルーナ殿。今は俺がアルモス卿だ」

いやらしい視線をした小太りの男がいやらしい笑顔でそう答える。

だが、どういうことだ？

「失礼ですが、アルモス卿は現在40台後半であられた筈なのですが、貴方は若すぎるように見受けられます。ご子息のマルナス様ではございませんか？」

セバスも口を挟む。確かに若すぎる。この男はどう見ても20台半ばといった所だ

「ああ、その通りだ。だが親父は先日崩御した。今は俺がこの家の家長だ、故に問題ない。」

「崩御、ですか？何があられたのですか？神殿に向かわれたと聞き及んで居たのですが？」

「ああ、王女を襲ったと思われるく人型>が発見されてな。それを確認に向かい、殺された。無様なものだろう？」

王女を襲ったらしいく人型>だと？

確かにく人型>なら兵士が持った剣を拾って使う場合もあるだろう、膂力も説明が付く。

そして、魔力の高いソフィーを丸呑みにした…

一度は推測し、それはない。と断定した最悪の想像が脳裏を掠める。

「そ、それは本当の事なのか？王女は？ソフィーは本当にく人型>に！？」

「それは不明だ。それを調べるためにこれから解剖をしようと思っている。」

何を、言っている。

倒したモンスターは一部を残して消失する。解剖など出来るはずが無い。

なによりモンスターを捕獲してきた、とでもいうのか？

「何を言っている！？モンスターを捕獲して来たとも言うのか？」

「ああ、その通りだ。」

「どっちゃって！？」

「一々叫ぶな…五月蠅いヤツだな、それを言う必要があるのか？」

そう言われれば、無い。

黙り込む。何か良い言い分は無いか、何か

「それが本当としまして、解剖すれば判明するのですか？王女様が、食べられてしまったのか否かを」

黙り込んだ私の代わりにセバスが語る。

「わからん。」

「そんな！」

「我々は王女様失踪の痕跡を追ってここまでやってきました。マルナス様、貴方のお父様には王女誘拐、もしくは殺害の嫌疑がかかっています」

セバスが一気に本題を切り込む。当人が居ないとなれば確認した方が早いと踏んだのか？

「はっ！親父のやつはまだ諦めてなかったのかよ！」

「まだ、諦めてない、とは？」

「親父が死んだから教えてやるよ。先代の王を殺したのはな、親父だ。」

「なんだと…？」

コイツは何を言っている？

「親父はな、先代の王妃にホシてたんだよ。だから<意言の首輪>に2つ細工した。」

召喚された王は<意言の首輪>をつけている限り不能になり、

最後は首輪に仕込んであった傀儡子の魔法をかけられて裏切つて死んだんだよ！

親父もいい年したオッサンの癖によ！その当時にはもう俺も生まれてたつてのにだぜ？

だが親父はその後失敗した。傷心の王妃に取り入ろうと企んだが悉く拒絶された。

当たり前だよな、バカじゃねえの？って思ったぜ。

だから今度はその娘にでも手を出そうとしてたんじゃないのか？

流石だぜ親父、最低、最悪だ。ハハハハハハハハハハ

なんて、ことだ。それが事実だとすればあの時の悲劇の全ての辻褄が合ってしまう。

では、この男の父親のせいでは？

叔母は悲しみ、絶望し、病の果てに王家の為、と祖父に抱かれる道を選び。

祖父はこの国を支え、貴族連中からソフィーを守る為に命を削る事になったというのか？

この男の父親のせいだ!!

私の周りに炎が燃え上がる。怒りに、魔法が暴発している。

愛用の片刃の肉厚な剣を抜き、つきつける。

「今の話は、事実か？」

「今更嘘を言っただうする？後当時俺は3歳だ。関係ないぞ？」

「だが、アルモス家を断絶するには十分な理由だ。」

「何言っただがる？当人はもう居ない。俺には関係ないだろ？」

「お前はバカか？それでも十分だ。先代は崩御したらしいが王家による家督の認可は済んで居ない！今はまだ死んだアルモス卿が家長だ！」

「ふざけんな！今の家長は俺だ！勝手に俺の家を潰そうとしてんじやねえ！」

豚が喚く。うるさい馬鹿が、分からないのか、黙れ。

「もう一つ、確認したい事があります。」

「ああ!？」

セバスが口を挟む。その冷静さも今はカンに触る。だが、反応したのはこの豚だ。

…セバスに当る意味は無い。黙って先を促す。

「アルモス卿には王女の護衛を3人拉致し、すりかえた嫌疑がかかっています。それもお父上が？」

「それはっ…」

豚が、どもり、目を泳がせる

一気に炎が燃え上がった。剣を持った手で顔面を殴りつけ、胸倉を掴み、吊り上げる。

「貴様が、貴様がやったのか！ラミレスとティンとマーベリックはどうした…！」

「てつめ…放しやがれ…！」

「答える…！」

「うるせえ、農民上がりの…兵士の3人なんか…知るか。ってんだよ。野犬のエサにでもなつたんじゃねえか。」

「貴様…！！！！」

私の怒りが頂点に達し、豚を殺そうと動きかけたその時

背後で荷馬車が爆発した。

3 - 3 <人型2>

背後で荷馬車が爆発した。

何が？と思い振り向く。同時に豚が私の腹を蹴り、その反動で落としてしまった。

「へ、へ、へ、クソ女め、こっちが下手に出てりゃ調子に乗りやがって、ぶっ殺してやる…！」

豚が悪態を付き、淡く光る右手の腕輪を握り締めている。

魔法、いや、魔道具か？

「お嬢様！」

セバスが緊迫した声を上げる、砕けた荷馬車から現れたのは身の丈2メートル半程のモンスター<人型>だった。

「やっちまえ！バケモノ！男は殺せ、女は手足を砕け！髑っつてやる！！！」

豚がモンスターに命令する。そんなバカな。モンスターを操る、だと？

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

<人型>が雄たけびを上げ飛び掛ってくる。まずい。

慌ててその場を離れる。

しまった、豚と分断されてしまった。

「行け！ぶん殴れ！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「くそっ」

「お嬢様っ」

戦闘が始まる。<人型>相手に私とセバスだけでは厳しい戦いになるのが予想される。

…<人型>について思い出す。

<人型>とは文字通り人が変化したモンスターだ。

基本的にほぼ人の骨格構造を持ち、爪や牙が発達する。ここまでは普通のモンスターと変わらない。

だが、<人型>は普通のモンスターとは違い変則的な力を持つ場合が多い。

例えば武器を用いたり、変化の時に着けていた装備を取り込んだりして、固体ごとに性質を変えてしまうのだ。

さらに最も厄介なのは魔法を使うモノが居るという事。だが見たところ相手は無手の無頭型。<歩兵>と思われる。

肥大化した腕に口を移したタイプで、人と大差ない動きで主に腕力に頼る。それ故に背後から突けばもろい。

もつともオーソドックスで最も弱い<人型>だ。

<歩兵>であれば他と比べて大したことも無いはずだが、それでもその強さはまともに一撃を食らえば致命傷になり得る程に強力だ。

さらにこの巨体。これまで交戦した事のある<人型>と比べて2回りも3回りも大きい、油断はならない。

突き込まれた口腕の一撃をかわし、剣で切り付ける。

手加減はしない。全力で行かないと倒せない。

「^{ブラスト}爆発>！」

発動言語のみの略唱魔法、片刃の剣の背側で限定的な爆発を起こし、幅広な背で爆風を受け止め、強引に押し切込み込む。

「<爆発>！」 「<爆発>！」 「<爆発>！」 「<爆発>！」

間髪入れずに連続発動させ、押し切ろうとする。だが、硬い。殆ど切れない。どうなっている!?

「お嬢様、<鎧付き>です!！」

そう行ってセバスが背後に回り、拳を叩き込む。只の拳ではない。セバスの手持ちの魔道武具、<雷装拳甲>が付けられている。

接触点が一瞬青白く光り、ビクリと<人型>が怯む。魔力を込められた<雷装拳甲>が電撃を放ったのだ。その隙を付いて、大きく一歩はなれる。

なるほど<鎧付き>だったのか、切れない訳だ。

<鎧付き>はその名の通り、変化する際に鎧を取り込んだタイプの
<人型>。

元の鎧の性能にもよるが、得てして恐ろしく防御力が高い。

このままではこちらは千日手、そして疲労し集中力が切れ隙を見せた所を一撃で葬られるだけだ。

対<人型>の基本は役に立たない。最大火力を一気に叩き込んで、勝負するしかない。

「セバス、魔法を使う。抑えてくれ！」

「承りました！！」

セバスが<人型>の正面に立つ、その背後に飛び下がり、詠唱を始める。

「 Buamedn hnflat lat Iossילו .
Tolittut brempetet rl bzepp」

「やらせるかよ！女を狙え！バケモノ！！」

豚の声が響く、<人型>が私の方を見た。比較的小さい側の左腕が

アンダースローで振るわれ、伸びる。

「Woogoulzune tadeem Hrid. A
deo Rnadoat erypet corr Bwffs」

私の傍を鋭い指先が掠めていった。腕をセバスが蹴り上げて逸らしたのだ。

詠唱を続ける。セバスを無視して私に向かおうとした<人型>が足を絡めとられ、転倒する。

「Eraonant Laeha Anhr dlam
Quole」

倒れた<人型>が起き上がろうとするが、体重の乗った部分をセバスが払い、何度もくず折れる。

上手い。

「Famiesvohesohlaeda famrte
poroereyvet」

「畜生！まずその執事をぶつとばせ！その後でいい！」

豚が指示を飛ばす。〈人型〉の狙いが変わる。

くず折れたく人型〉が口腕を振るい、セバスを牽制し、立ち上がる。まずい、私を狙っていたからセバスは優勢に戦えた。完全に狙われて1対1では相手にならない。

気が逸る。

セバスが必死にかわす。かわしきれず燕尾服が裂け、血が舞う。

急げ、急げ、急げ、

「 B b u r c d e y i r e m t X a u i v n t L e z - L
n t
」

詠唱が終わり、魔法が形作られる。

「セバス!!」

後は発動言語を放つだけ、という所でセバスに向かって叫んだ。

セバスが踵を返し、わき目も振らず離脱する。それを視認しながら、全力で魔法を叩き込む。

その事実に関が泡立つ。まだ、倒せていない。

「セバス！！槍を！！」

セバスが鞆から2m半はある私の騎上槍ランスを取り出し、投げて寄越す。

同時に動いた<人型>が、投擲して一瞬無防備になったセバスを横殴りにし、吹き飛ばした。

「セバス！！」

槍を受け取り、吹き飛ばされたセバスを目で追う。

セバスは並んだ馬車の1台の横腹に叩き付けられ、馬車の壁を粉碎し、つき抜け、見えなくなった。

「しまっ」

絶好の隙を作ってしまった事に気づき、その場から離れようとした、その時

<人型>の細い方の腕の指が伸び、その場を飛び去ろうとした私の

両足を貫いた。

「ぐ、あつ……………！」

バランスを崩し、倒れる。

突き込まれた指の痛みを耐え、槍をく人型>に向ける。

だが、遅すぎた。

接近したく人型>が反対の手で槍ごと私の左腕を掴む。

食らいはしてこない、がそのまま上腕の骨を握り折られた。

「
ッ！！」

声にならない悲鳴を上げる。まずい、このままでは

足に刺さった指が引き抜かれ、そのまま折れた腕と槍を纏めて掴んだまま持ち上げられ、地面にたたき付けられる。

衝撃に耐え切れず、腓骨ひこうが碎ける。

さらに持ち上げられ、もう一度叩き付けられる。器用なことに叩き付けるのは足だけだ。

両足の骨が、いくつも、砕ける。

さらに持ち上げられる。また、叩き付けるつもりなのか。

「ち、くしょう……」

「そこまでだ!!」

豚の音が響く、まだ、右腕は動く。

豚が得意げにこちらにくる。

「おっと、暴られたら面倒だ。おいバケモノ、さっきの指で手足を刺して固定しな。」

<人型>の腕が伸び、5本の指が私の手足を貫き、中空に磔にする。

「アアア、ア、ア、ア!!」

身を貫かれる痛みに悲鳴、いや絶叫を上げる、もう動かせる手足が無い。

「いい眺めだなあ、王国最強ちゃんよ？」

豚がまた下卑た目で私を見る。睨み返すしか、できない。

「くそ、…この…豚め…」

「へ、豚か。良いね。豚豚。豚で結構。雌豚さんよ？」

余裕の笑みを浮かべる、クソ、まだまだ、まだ魔法は使える。

「Buameddr…」

「止める」

<人型>の腕が動き、突き刺さったままの手足を抉る。

「ギツ…ア…」

集中、出来ない。詠唱、出来ない。畜生、畜生、畜生、

「そっぴや、さっき護衛3人の話をしてたな。続きを聞かせてやるぜ。」

聞いても居ないのに得意げに豚が話し始める。

「あいつらは親父が薬を飲ませて昏倒させてから、身包み剥いで森に捨てた。

その後はく合わせ鏡の指輪>で入れ替わらせて、王女を拉致させるつもりだったらしいぜ？

成功してたらく召喚されし者>もついでにな。

そんでく召喚されし者>を人質にして王女を手籠めにする気だったんだろうが…ざーんねん。届くのは俺の所。

王女を抱いて王になるのは俺、って寸法だったんだわ。へへへ。」

結局、王女は届かなかったがな。ま、多分コイツの腹の中だろうな。そう言つてく人型>を叩く。

何を…言っている？

そんな事をして王位が得られる、と本気で思っているのか？コイツは…

「…何のつもりだ。…クソッ…冥土の土産とでも…言いたいのか？」

「へ、へ、へ、残念ながらちげえよ…おい、バケモノ、こいつの鎧

をひっぺがせ。」

<人型>の口腕が、私のハーフプレート胸部を掴み、千切る。さらに千切る、千切る、千切る。

喉下、胸、腹、股間まで全てを千切り取られ、露にされる。

「ハツハツハー！いい眺めだな雌豚、

なあに！王女をやり損なつたから代わりにお前でウサを晴らそうと思っただけだ！

ウサ晴らしたよ！ウ・サ・晴・ら・し！！

お前も聞いた方が抵抗する気になるだろ！そんなお前を無理矢理つてのがいいんだよ！！！！

だがよお、なんだ？この胸は？色気が無いにも程があるだろう！！
ハハハハハハ！！！！」

殺意を込めて睨む。そうだ。私の胸はメルよりも、ソフィーよりも、
…というより比べるのも悲しくなる程ささやかだ。

「じりり……さい、糞、が……」

「今度は糞つてか。まあいい。そついやこーんな話を聞いたことが有るぜ。お前、『自分より強い男にしか抱かれる気は無い』とか言ってるらしいな。」

「……………」

「だんまりか、だが、噂で聞いてるぜ？その主張と王国最強、って程の強さのせいで未だに生娘だ、とか？」

…それは事実だ。

「へへへ…今からお前はその『自分より弱い』どころかロクに剣も持てない俺に犯されるんだよ！」

安心しろ。すぐに殺したりしねえ！たつぷり犯して鬨っていたぶり倒して飽きたら殺してやるよ！

その前に俺のガキを産んでるかもしれねえがなハハハハ！！」

最低、だ。こんな、男に犯されると？ふざ、けるな。

「おお？まだ反抗的な目が出るのか？いいねえ、その鼻っ柱。へし折ってメチャクチャにしたいくてたまらなくなるぜ。」

舌なめずりをし、カチャカチャとズボンを下ろす。下半身をむき出

殺傷力を持つほどの無詠唱魔法を発動できるのは王家の血筋以外に存在しないのだ。

豚の股間のものは炭化し燃え尽きた筈だ。ざまあみる。

「私の、純潔を…奪う、前に…不能、に、なって…しまった…よ
うだな…は、は、は、は、」

嘲るように笑う

「て……………め……………え……………」

股間を押さえ豚が私を睨みつける。一矢は報いた。

だが、ここまでか。残念だ。

一息付き、体の力が抜ける。

…諦め、かける。

しかし、心の中で何かがひっきり、思い止まっていた。

そう、これは私の悪い癖。どうにも成らないと思うとつい思考を捨ててしまう。

諦め、投げ出すように。

今までだってそうだ。

ずっと自分の理想に合う男を求めて来た。

だけどそれは詭弁。怖かった。

今までの自分を捨てて、男に侍るような女に変わるという事が、理解できなかった。信じられなかった。

だからその価値がある男でなら、という事でそう言い始めた。

…勿論、それが逃げだと言う事も薄々理解していた。

本当は、とっくにそんな男は居るはずが無いと諦めていた。

居心地よい現状を変えたくなくて、うじうじ言っていただけ。

だが、そう、だがしかした。

思い浮かべたのは私の拳を軽く受け止めて見せたあの男。

こんな状況なのに、とくん。と胸が高鳴る。

可能性は高い。居るのだ、諦めなくてよかった。今ならそう思う。

私はあの男を試してみたい。そして理想通りなら、変わるかもしれない。

いや、きっと変わる。

だから、まだ、終われない。

まだ、私は、生きている。

諦めるには、早い。

もう一度力を込め、ボロボロになった自分の体を見渡す。折られた左腕は、槍をまだ放して居ない。

…なんだ、私の体も諦めて居ないではないか。

豚が立ち上がり汚い言葉を吐きながら私の顔面を、腹部を殴りつける。だが、大したことは無い。

笑みが零れた。本当に非力な豚だ。

「はあ、はあ、もういい！こいつを殺せ！お前のそのデカイ腕を下から突っ込んで内臓を取り出してやれ！だがすぐには殺すな！！取り出した内臓を一つ一つ見せつけながら殺すんだ！！」

無茶を言う。本当にバカだな、この豚は。＜人型＞すら困惑しているではないか。

手足を貫いて居た指が抜かれ、地面に落とされる。口腕では太すぎる、とでも判断したのだろう。

と、思っていたら＜人型＞がそのまま膝をつき、地面に両腕をつき、その場にくず折れる。

…なんだ？何をするつもりだ？

「どうした！バケモノ！早くしろ！！分からないのか！？そいつの股ぐらにお前の腕を突っ込んで純潔を奪い子宮を引きずりだしてやれ！！」

えらく具体的な指示だな…、が、何かおかしい。

人型の左上腕に付けられた腕輪が明滅している。

炎にあぶられたせいか、一部溶けて居るようにも見える。

あれが、この＜人型＞を操っている魔道具か？

分からない、だが、多分そうだ。折れた腕を肩と体で動かし、穂先で狙う。

豚は気づいていない。命令を聞かないく人型>に怒りを露にして怒鳴っている。どこまで下種なんだ、この男は。

「^{ブラスト}爆発>」

石突のあたりでく爆発>を発動する。反動で全身が悲鳴を上げる、だがそれを推力に打ち出された槍は、狙い過つことなく腕輪を貫き、砕いた。

「てめえ！まだそんな余裕が！さっさとしろこのバケモノ！！」

私が魔法を使った事に憤り、豚がく人型>を蹴る。

だが、それが不味かった。くず折れたく人型>が、豚を、見る。

「へ？」

間の、抜けた声だった。直後にどちゃつと音を立て豚が地面に倒れる。

抱き寄せ、乗る、いや、横抱きでは乗っているとは言えないか。

そのまま体に密着させ、狙いをつける。目標は<人型>の胸の中央。

「 J'orunens Mouvor magiss・For
ecポと成せ Ssio・」

短い詠唱。それと共に槍が俄かに光を帯びる。

これは呼び水。後は槍の機構が補ってくれる。さあ、最後の、仕上げだ。

「 Perugh wuit Jeeux <魔槍ヴェルスパイン
r>

発動言語と同時に展開した石突き部分から赤、黄色、青と変色しながら高圧に圧縮された炎が噴出し、

先ほどとは違い今度は私の体ごと引きずり槍が飛ぶ。

さあ、<魔槍ヴェルスパイン>私の魔力を食らって行け。

浮き上がり、突き刺さる。だが、その直前に察知された。<人型>

が体を捻り、穂先を掴み阻もうと腕が動く。

その動作で狙いは逸らされ、狙っていた胸でなく鳩尾の下やや脇腹寄りのあたりを貫いた。

突き立った槍がこれ以上刺さらないようにと、<人型>が両手で槍を握り、抜こうとする。

もっと、もっとだ。少なくともこの槍が貫通しきるぐらいの傷を与えないと<人型>は倒せはしない。

魔力を込める。手も、足も動かないがそれだけは出来る。

私の全魔力を食らえ。そして、刺し貫け！

<人型>が推力に押され、足で地面を削り、浮く。そのまま加速し、屋敷囲いにぶつかり、止まる。

だが推力は落ちない。<一角竜の角>で作られた穂先も折れない。ズブズブとゆっくり深く突き刺さり、貫いて行く。

完全に根元まで貫いた所で、屋敷囲いが圧力に負け粉碎し、私と<人型>は敷地外の道へと飛び出した。

3 - 3 <人型2> (後書き)

切りどころが見つからず長くなってしまいました。不覚。
次回からは長さも更新時間も普段どおりに戻ります。

3 - 4 <人型4 >

「大丈夫ですか!？」

崩れ行く<人型>を尻目にメリアの安否を心配する。

「わ、たしは…」

『案ずるでない、もう命に別状は無い。』

口をばくばくさせ言葉の上手く出ないメリアの代わりにマールが答えた。

『じゃが見た目より体内の傷が深い。処置に時間がかかる。』

「分かった。」

マールとオサにメリアの治療を任せ、さっき這っていた足の千切られた男の下に走る。

相変わらず止血をしていない…そして、出血が止まっていた。

遅すぎたのだ。失血死していた。

「くそっ」

なんの手立ても用いず死体となった死者は最早蘇らない。

悪態をつき、他の犠牲者は？と周りを見回した。

『例の執事が馬車に吹っ飛ばされたそうじゃ』

頭の中にマールの声が響く。遠距離会話も可能なのか。

『妾の本体はおんしの中じゃ。意識すればそちらに意思を戻せる。それより急げ、不味いかもしれん。』

マールの声が急かす、慌てて馬車に向かう。

どれか分からなかったが一目瞭然だった。

横っ腹に大穴を開けられた馬車がある。後ろに回って中を覗く。だが、居ない。

貫通して反対側を転がっていた。

慌てて近づき首で脈を確認する。意識は無いが、生きている。

「Auvies Atddit Per Weinne He
irons Wnddleh Iercifdig

<ヒーリング>」

治癒魔法をかける。外傷は細かいものだが、馬車を突き抜けた時の
衝撃でだろう、骨と内臓をかなりやられている。危険な状態だ。

(マール、セバスさんを見つけた。かなりの重傷だが生きてる。助
かる。)

『了解、じゃ。ところでおんし…また変なフラグを立てたようじゃ
ぞ…』

フラグ？なんだその不安な感じのする響き？また<意乗の言>のせ
いで変な意識が？

今は、忘れよう。治癒魔法を続ける。治癒魔法は得意でない、集中
しなければ。と、そこでふと思いつく。

(<魔晶石>の回収を忘れていた。オサにでもたのんでくれ。)

『…オサも治療中じゃ、それに<魔晶石>は魔族の<魔導心臓>と
違ってそこから再生したりせんぞ？』

(…そうなのか?)

『うむ。安心するがいい』

(…分かった。)

一つ問題が解決した。治療に集中する。

繋ぐまでは行かないが、折れてあちこちに刺さった肋骨の位置だけを戻し、

肺に入った体液と血液を抜きあらかた血管内へと戻し終えた所で、セバスさんがむせた。

「ゴフツゴホツ…ガハツ……………ハ、…………ユ、ユート様?…メリア、様は!？」

同時に意識も取り戻す。

「まだ動いちやダメだ。メリアさんも無事だから。」

「私は…、<人型>は…………?」

「瀕死だったんだ。まだ内蔵がかなりやられている。<人型>はもう倒された。」

倒した、とは言わないほうが良いだろう。一人でやれる相手では無い筈だ。

「そう、ですか…マルナス様…は？」

「マルナス…様？小太りの偉そうな服を着ている？」

「そう…です…」

「残念だが、間に合わなかった。失血死だ。」

「そう…ですか…グッ」

確認したい事は終わったのか自分の体を動かし、無事な腕を胸に当て、詠唱を始める

「 Vinezgle
ppou ronn·de Blessth oaa Curaiifu
「 m i s f f e a l C e u n d
「

「おい、おせ」

「〈治癒回生〉」

治癒魔法が発動する

「私は、大丈夫です。動けるようになれば…戻ります。今は…お嬢様の方を。」

自らに治癒魔法を行使する様を見て首肯する。この人の治癒魔法は我流の俺やマールよりも上等だ。

治癒魔法を止め、メリアの元へ向かうことにした。

3 - 5 <人型3裏>

私のほぼ全てをにかけて発動した<魔槍ヴェルスパイン>を受けても、<人型>に致命傷を与える事は出来なかった。

屋敷囲いを砕き、突きぬけた所で限界を迎えた私の体はボロ雑巾のごとく投げ出された。

転がる私の視界に2人の通行人が写る。

「逃げる…!!!」

逃げて、ギルドでも軍でもいい、この街ならば<人型>ぐらい倒せる人間は居るはずなんだ。

その人達を見つけて来てくれ。被害が広がらない内に早く！

そう思っつて悲鳴を上げる全身を酷使し、必死に叫んだ。

だが、視界に映った人物は何を思ったのかこちらに向かってくる。

馬鹿野郎、私を助けようともいうのか？状況が分かっていない。

だが、私の元へと向かっていたと思われた人物は途中で方向を変える。

その向かう先は、槍の刺さった、<人型>

相手が分かかってない、何を考えている、死ぬぞ、逃げて人を集めるんだ。必死に叫ぶ、逃げろと。

「馬鹿、逃げろ！」

『そもいかなのう』

<人型>に向かった人物とは別の方向から声が聞こえた。

まさか、もう一人もこちらに？視線を戻す。だが、白髪の小柄な人物は動いていない。

と、視線を放した隙に何か大きなものが地面を転がる音がした。

方向は、<人型>とそれに向かった男がぶつかったであろう場所あたり。

再び視線を巡らせる。男が立ってこちらを見ている。<人型>は？

そう思っていると男が自分の鞆から何かの毛皮らしきものを出して投げつけてきた。

動けない私は避ける事も、受け取る事も出来ない。

だが、何かがそれを受け止め、鎧と衣服を千切り取られ柔肌を晒していた私の体を覆い隠す。

目の焦点が合う。この、金髪褐色肌の半獣妖精は…確か。

そこまで思考をめぐらせ、先ほどの男に慌てて焦点を合わせる。まさか、まさか、

男は栗色の髪、中肉中背、そして刃渡り75センチ程度の両刃の剣を両手で握り何かを睨みすえている。

…間違いなく、昼間ギルドで出会った青年、ユートだった。

「ユート？…無茶だ、逃げろ、あれは<人型>、<鎧付き>だ！！一人ではだめだ！！」

叫んだ直後、ユートが居た場所に私の槍が叩きつけられた。と、同時に<人型>が私の空けた穴に飛び込んでいく。

先ほどの一撃をかわしたらしいユートもその後を追っていく。

いつ、かわした？見えなかった。だが、戦ってはダメなんだ。頼む逃げてくれ。頼む、死なないで。

『やれやれ、重傷だのう』

ユートに憑いていた妖精の声が聞こえる。何を、のんきなことを。お前の主人が死にそうなんだぞ。

「お、まえ……」

『少し黙れ。内臓は深刻で無いが手足の損傷が激しい。動かれると上手く治せん。急がねば失血性ショックで死ぬぞ』

そういう妖精を見る。暖かい光を放ち、治癒魔法を行使している。

こんな小柄な妖精なのに治癒魔法を行使できるのか。だが、私やセバスに比べるとかなり拙い。これでは動くな、と言うのも仕方ない。

「おいおいおい今の＜人型＞じゃねえのか！？なんでこんなところにいんだよ！………てか…酷いな、大丈夫か？」

見た目10歳程度の白髪の少女がこちらに向かってくる。そうだ、アレは＜人型＞早く、人を呼んでくれ。

「そうだ、＜人型＞…だ。それも＜鎧付き＞…頼む急いで人を…一人では、一人では……」

懇願する。誰でもいい。早く、誰かを呼んで来てくれ。彼が、ユ-

トが殺される前に。

「マジかよ、クソ、あのエロオヤジとうとうモンスターまで持ち込みやがったのかよ……」

「頼む、早く、ユートが殺される前に……」

『動くでないと引っとうろう！血を上手く戻せん！！』

私はどうでもいいんだ、だから、早く……

「ああ、マズそうだな。オレも手伝うわ。というかお前さん治癒魔法苦手だったのか？」

『妾はどちらかと言うと病とかが専門じゃ！大怪我を治すのは専門外じゃ！』

「そいつは……早く言えっただ。」

「 Vinezgie [m] misfeal Ceund
ppouronde
」

白髪の少女も私に手を向け詠唱を始める。だから、私にかまっていで人を。

「 B l e s s t h o a C u r a i f u l < 治癒回生 > 」

「私はいい！早く…誰かを呼んでくれ！！」

「あー、心配すんな。いらねえよ。」

「何を言っ…！！彼が殺されてもいいのか！！！！」

治癒が少しは進んだのか、声が大分楽に出せるようになっていた。それに合わせて叫ぶ。

「うっわ、体の中出血だらけじゃねえか。手足の骨もバツキバキだし。」

『おんしの方が上手いの。そちらは任せる。妾はこの綺麗な肌の傷を塞ぎ完璧に治すのに集中する。』

「おっけー任しとけ。」

「だから…！！」

苛立つ、なんでこんなに暢気なんだこいつらは、馬鹿か！！

「いらねえって。アイツ<甲盾熊>とタイムン張って勝つんだぜ？」

「は？」

『事実じゃ。』

何を言った？<甲盾熊>？神殿の北の森最悪のモンスターじゃないか？勝つ？何を言ってる？

思考が混乱しかけたところで轟音が聞こえる。

私がブチ抜いた屋敷囲いの横に何かが叩き付けられた。そしてその奥で私の槍を振り切った<人型>が見える。

つまり叩き付けられたのはユート？不味い、今の音からして相当な速度だ。直撃を、受けたと考える。

崩れる壁の下に栗色の髪をした人影が見えた。

「ユート！」

思わず大声を出す。あれでは無事の筈が無い。まさか、死んだ？嫌な予感が脳裏を掠める。

追い討ちをかけるように<人型>が飛ぶ。だが、違う、狙いはこっちだ。

飛び上がったく人型>が大上段から槍を叩き付けようとしている、よけ、られない。

「ッ！」

声にならない悲鳴が漏れた。と、同時に私の目の前に誰かが割り込む。

さっき叩きつけられた筈のユートだ。あそこからここまで一瞬で来たのか？そんな、馬鹿な？

そして足を肩幅に開き剣を盾にするように構える、受け止める気なのか！？無茶だ！！

ガアアアアンと金属をぶつけ合う甲高い音が鳴り響く。

「ヒッ」

潰された、死んだ、と思った。皆纏めて一撃で潰されたと、思った。だが、受け止めていた。<人型>の、<鎧付き>の、私の槍を折曲げる程の渾身の一撃を。

両足が地面にめり込んでいる。だが、受けきった。私の拳を止めるのとは桁が違う一撃を、止めた。

常識が悲鳴を上げる。理解が、追いつかない。

<人型>がくの字に曲がった槍を捨て、足が地面に刺さり動けないユートに口腕で追い討ちをかける。

だがそれを剣でいなし、体を捻じっただけでかわした勢いそのままに、剣で切り落とした。

さらに返す刀で胴を真っ二つに切り払う。

<鎧付き>のはずの体が、あっさりと分断され、地面に落ち、動きを止めた。

倒……………し……………た……………？

目の前の状況が理解できない、何が起こっているんだ。この男は、何だ？誰だ？

「大丈夫ですか!？」

振り返り話しかけてくる。昼間会った青年。ユートだ。うん、見た目は私の好みど真ん中。

…何を考えているんだ私は？

「わ、たしは…」

上手く、声が出ない。心が、現実に戻ってこない。

『案ずるでない、もう命に別状は無い。じゃが見た目より体内の傷が深い。処置に時間がかかる。』

「分かった。」

話が私を置き去りにして進んでいく。

何かを納得したユートが脇目も振らず再び屋敷囲いの中に向かって行った。

「わ、たしは…」

「あー気持ちわかる。混乱するよな。だが、受け入れる。アレはそういう存在なんだ。規格外。考えるだけ、無駄。」

白髪の少女が受け入れる、と言う。

この少女もどう見ても10歳程度の少女なのに治癒魔法を使用して、飄々としている。

現実離れした光景の連続に、さらに混乱が進む。

「これは、夢？私は、死んだ？」

『夢では無い。おんしは生き延びた。運がよかったの。』

「運が？」

「まーな。通りかかったのがオレらで無かったら間違いなく死んでたな。」

「運……」

運が、良かった？そうなのか？混乱した思考がおかしな回路を形作る。

運、そうだ、運命。私は今日彼に出会い、運命的なものを感じた。

そして、死ぬ筈の所を彼に救われた。私は彼に救ってもらった運命だったのか。

ならば、彼こそが私の求めた理想の、運命の相手………！

「運命だ、これは、運命だったんだ……」

「？」

『ところでおんし、執事は？』

意識が桃色になっていた所に冷や水をかけられる。そつだ、セバスは、

「く人型>の一撃をモロに食らつて馬車に突つ込んだ…まずい、あれでは、死んでいるかもしれない…」

「そいつはやべーぞ…」

『ユートに伝える。あちらに任せようぞ。』

「流石、憑いてるだけあるな。遠距離会話も出来るんだな。」

『うらやましいじゃろ？』

「便利そつだとは思つがな…」

「セバス、ごめん、私はお前を忘れた。理想の男を目の前に色に狂つてしまった。許してくれ…」

無事な右腕で顔を覆い隠し、懺悔する。

『…』

「何を言ってるんだコイツ？」

「ああ、だがセバス、止まらないんだ。もうダメなんだ。許して、許して…」

『あー、連絡が来たの。どうやら執事は生きておるようじゃぞ？』

「本当か！良かった、セバス、生きていてくれたか…ならばこれでもう私を苛む物は無い…私は、愛に生きる」

「オイ、なんか、ヤバい気配がする。」

『…間違いなく、フラグが立っておるの』

「なんだよフラグって」

『気にするでない。』

「子供は、沢山欲しいな…女の子しか生まれなだらうけど…」

「ああ…、でも何となく見当が付くのが嫌だ。」

『血の雨が降らねばよいが…』

二人が何かを話しているが私の心は未来の家族計画について思考していた。

3 - 6 <人型5>

セバスさんの傍を離れ、戻る。遠巻きに見ていた人達が混乱していたようだが、説明しなくても状況は分かるだろう。今はほっとしておく。

途中で恐らくメリアの物だろう（ギルドで見た気がする）やたらと肉厚な片刃の剣と、<人型>が投げ捨てた柄が折れ曲がった槍を拾う。

剣は少し腰が伸びているが、無事。槍も柄が折れ曲がったが穂先は傷一つ無い。どちらも修理すれば十分使えるだろう。

そして<人型>を倒した所にあつた<魔晶石>と何かの金属の塊を拾う。

過去全部のモンスター中一番意味の分からない形状のアイテムだ…というか、こんな部位あつたか？あの黒ボクテ。

なんとなく昔見た漫画に似た形をした生物が出てきたのを思い出して命名する。それっぽかったし。凶暴極まり無かったけど。

目ぼしいものを回収し、メリアの元に戻る。

時間はもう夕方を過ぎ、日が暮れる寸前だった。

「お、戻ってきたな」

『どつじやった？』

戻ってきた俺を見止め、マイルとオサが話しかけて来る。

「ああ、セバスさんは無事だ。内臓を大分派手にやられていたが、少し治癒魔法を使ったら意識を取り戻した。今は自分で治癒魔法を使ってる。あの人が上手いみたいで、多分もうじき歩けるようになったらこっちに来ると思う。」

「へえ、すげえな。セバス？セバスチャンなのか？」

『そう言っておったの。』

オサの疑問にマイルが答える

「なるほどな。納得納得。」

「それからマルナスさんはダメだった。見つけた時は生きていたんだが、止血する事が出来なくて、自分でもしてくれなくて、駆けつ

けた時には失血死してた。」

『そうか、残念じゃの』

「オレはちよつと嬉しいがな。あのクソガキには何時も死ねって思ってたし」

不謹慎だぞ、と思う。俺は救えるなら救って置きたかった。

「あの豚は死んでも、仕方ありません」

「豚？」 『豚？』 「豚？」

唐突にかけられたメリアの唾棄するような声に、3人揃って同じ反応をする。

「豚、です。あの男も、あの男の父親も。最低の下種、死んで当然の外道です。」

「そんな…」

『相当、だったようじゃの』

「オレもそう思う…ってかあの男と父親？なんだ？あのクソガキだけじゃ無くエロオヤジも死んだのか？」

「そうなります。」

「あーロクな死に方しねえと思ったが自宅でモンスターに殺されるとはね。ロクでもねーな。」

「死体は、一つだったけど…?」

「食われたのか?見落とした?」

「死んだのは昨日だそうです。あの<人型>を捕獲しに行つて殺された、と言っていました。」

「そうか、…ところで、メリアさん、だよな?」

「はい。そうですか?」

「なんだか、昼間と別人になっているような?」

「そう、やたらと物腰が丁寧になっている。なんだか雰囲気はソフィーみたいな感じだ。」

『……………』

何か言いたげなオサとマールの微妙な視線が俺に刺さる。何これ、どういふこと?

「大丈夫です、私はメリア、メリアルーナ・ルグス・アーリントン。王家直下五大家の一角、アーリントン家の長女にしてこの国最強と謳われたりもしましたが、今は只の女です。貴方の。」

「へ？」

「あーあ……あ？」

『やっぱりの』

「おいおい、アーリントンだと？その髪、この国最強？おめえく狂乱の火炎使いとかよ！？」

「何？有名人なの？それから、今最後に何か変な事言っただけじゃなかった？」

「甚だ遺憾ですが、そのように呼ばれております。ですが、貴方の前では私は只の女。お気になさらないで下さい。」

凄い勢いで脳内に警鐘が鳴り響く。

この感じ、この雰囲気、この熱に浮かされたような瞳。前にも見たような。

「どうぞ我が家にいらして下さい。そして父と母に紹介して下さい。この方こそ私の捜し求めた伴侶だ、と。私の家は五大家の一角。」

家督としては何処に並べても恥ずかしく無い筈です。…それが気に入らない、と言う事でしたら私は家を捨てましょう。貴方についていきます、何処までも。たとえ涅槃までも。」

うつとりと目を細め、右手を胸元に当てて歌うようにメリアが語る。

「え、あ…う…いや…何を」

『これはダメじゃな』

「ああ、ダメだな」

「それもダメですか…？では構いません。情婦のように気が向いた時に私をお抱き下さい。そして捨てて行ってください。貴方の子を宿せれば本望。それで無くともその思い出を胸にこれからを生きます。」

「どっしり」

『妾に聞くでない』

「オレにも聞くな」

「どっしりや良いんだ……………」

熱っぽく見つめてくるメリアに何も言い返すことの出来ないまま、

天を仰ぐ。日が暮れて、夜の帳が降り始めていた。

3 - 7 <人型6 >

メリアがおかしくなっていてしばらくして、セバスさんがやってきた。着ていた燕尾服がパリッと直っている…。のでは無く着替えたのか。

流石敏腕執事、これ以上隙は見せないというのか？

そんなセバスさんも治療中メリアの様子を見て眉を顰める。

「お嬢様、そのお姿は些か問題が御座います。一度、宿に戻り、着替えを致しましょう。」

「嫌、ユート様の元を離れたくありません。」

即答、だった。空気が凍り、冷や汗が流れる。

「では、せめてその毛皮でなくこちらをお使い下さい。」

そう言って自分の鞆からばさりとマントを取り出す。色は真紅。…
派手だ。

「嫌、ユート様がくださった物ですもの。そんな物とは交換したくありません。」

にべも無かった。

セバスさんが、汗を掻く。おお、焦っている。だが、そう思う俺も汗を掻いている。ダラダラと。

「ユート様？これは？」

セバスさんがキリキリキリとこちらを向き質問する。何が、どうなっているのですか？これは誰ですか？

そんな風に顔に書いてあった。

「俺に聞かれても、困ります」

『ユートにホレたんじゃこの娘』

「一発KOで、こうなった。＜狂乱の火炎使い＞とか言われてたのにな……」

セバスさんが納得半分、困惑半分と言った顔でメリアに再び向き直り、口を開きかけたところで、

『肌は完了じゃ』

マールが言った。

「こっちは血管と内出血と神経辺りは粗方繋いだが、筋肉と筋と骨折とその他諸々がまだ途中だ…」

オサが続く。治療は難航しているようだ。

ちなみに俺も手伝っているのだが、やはり一番下手なのでサポートに徹していた。

「では私が骨を請け負いましょう。」

「そりゃ助かる。」

セバスさんが気を取り直して言う。そして分担して治療を始める。

『これからどうするんじゃ?』

「とりあえず宿に戻らないと。もう夜だし、心配してるだろうし…」

「そつだなあ…でも、嬢ちゃんがコレ見たら血の雨が降りそつだぞ…?」

そうなのだ。ソフィーが怖い。

『だが、の。こうなってはどろしよもないじゃろつ。ありのまま見せて、おんしが強気で押し説得すればあやつも折れる。頑張るのじゃ』

「そんな無茶な……」

押しに弱い事に定評が付きそうな俺に、あのソフィーを押し説得しろ、という。

無茶にも程がある。そう思った矢先だった。

「押して…いやいつそ押し倒せばなんとかなるんじゃないか？」

オサがしれつとえらい事を言う。

何を言い出すんだ、この見た目幼女は！？

「私は何時でも押し倒して頂いて構いません…」

頬を朱に染めて、メリアがもじもじと言う。

何を言い出すんだ、この人格崩壊女は！？

『それはまずいの、今の状態で押し倒せばこやつは相手を殺しかねんぞ？』

「え」

「マジか」

「愛する殿方に抱かれながら死ぬのも本望です…」

「お嬢様…」

だめだ、この人、頭がダメだ。だが、何？俺が抱いたら相手を殺す？

「どういうことだ？」

『おんし事の最中に＜強化魔法＞の制御が外れて暴走するでは無いか。普通の間人では死ぬぞ。あれは。妾は魔族じゃから平気じゃったが。』

衝撃の事実だった。では、結局俺にはマールしか居ないという事か。

そつだ、最近急にモテたから浮かれてしまったが、俺にそんな上手い話が有る筈が無いのだ、

ごめんよ、ティーナ。俺、やっぱりダメなままだよ。

そこまで思い至って気づく。

「あれ…？でもティーナは平気だったような…？」

『それはく強化魔法>がしっかりとかかっておったからじゃろう。ま、これからする為にも早くあの娘らにもく強化魔法>をかけてやるんじゃない。』

「ら」って言うなよ…

「お話の内容は良く分かりませんが、ユート様にはやはりもう何人も良い人が居られるのですね…やはり私は愛人か情婦になりましょう。家も捨てます。」

「お嬢様！落ち着いてください！早まらないで下さい！」

「セバスさんの言うとおりだから！頼むから早まらないで、落ち着いて！？」

あっさりと爆弾発言を投下する。

なんだこれ、口調はほんとにソフィーみたいになってるんだが、もつとタチが悪い…！

「分かりました。ユート様がそうおっしゃられるのでしたら従います。」

超、聞き分けが良いんだけど、でもこれ、全然聞いてないよね、話

「どうしたらいいんだ」

「頑張れよ」

『大丈夫じゃよ』

「お願いします。」

オサ、マール、セバスさんに三者三様の事を言われ、天を仰いだ。星が綺麗だ、完全に夜になっていた。

4 - 1 <邂逅>

治療が一段落し、一旦宿へと戻る事にしたのだが、

メリアが俺から離れるのを嫌がって放してくれないので、二手に分かれることになった。

俺とメリアとセバスさんはメリアの泊まっている宿へ、

オサとマールはソフィー達の下へ。マールは連絡用にあちらに向かってくれた。

そして今俺はメリアの泊まっている宿の1階にある食堂のテーブルに付き、着替えを終えるのを待ちつつ連絡をとっていた。

(…そういえばさ、メリアってアーリントン家の長女って言うけど、それってソフィーの親戚って事なのかな？叔母の家族の領地だって言ってたし。アーリントン。)

マールに心の中で話しかける。

『正解、のようじゃな。さっきからお姉様が!?!とパニックっておる。』

やはり、だったか。

(やっぱりまずいよね？何とかきちんと断らないと……………)

『 一夫多妻で良いんじゃないかの。英雄色を好め、じゃ。こういう所までへタレでは元勇者の名が泣くぞ？ 』

(俺の故郷は一夫一妻制だったんだよ。)

『 ここはもうおんしの故郷ではない。郷に入れば郷に従うものじゃぞ？ 次期国王様よ。 』

そういえばそんなのもあった。俺に王とかどうしろってんだよ

(いや、無理だろ王とか。俺、帝王学とか習ってないよ？)

『 なんとでもなるじゃろ。300年も続けてきたそうじゃし。例えばお飾りとかじゃないのかのう？ 』

身も蓋も無いが、無難な気がした。

『 あー、ソフィー嬢がそっちに行く。と 』

(来ちゃうのか)

『飛び出したの…妾らも追つかの…』

(…穩便に済めば良いんだけど)

そんな会話が成されていた頃、メリアの部屋では、メリアが荷物を漁り唸っていた。

「何故、何故私はこのような粗末な衣服しか持ち歩いて来なかったのだ…せめて、見目良い下着と夜着を、どうして持たなかった…」

後悔、そして怨嗟。私のバカ、どうして肝心な時に無いんだ。折角買っていたのに！

「お嬢様、こちらを。」

セバスが自分の鞆から何かを取り出す、それ…は……

「セバス…何故、お前が、それを？」

見間違う筈が無い。私の用意しておいた決戦用衣装だ。夜の、だが。

「予備、で御座います。これまでも幾度か新しいものと交換させて頂いておりましたので。」

「お前は…、本当にパーフェクトだな。いや、怒りたいのだが、今は、褒めよう。良くやったぞ、セバス」

「恐悦にございます。」

予想外の事態だが、兎も角だ。なんという僥倖。これで私は完全装備でこの戦に挑める！

「では、着替える。そうだな、30分後にここにユートを連れてきてくれ。」

「承りました」

そう言ってセバスが部屋を出ていった。

さっと香水を体にふりかけ、セバスから受け取った衣装を身に纏う。

まずはガーター付きの極薄なソックスに下着。色は黒だ。安直かも
しれないがそれでこそ私。

しかしデザインは切れ込みの強い形状で装飾も中々、あちこちが透
けてうっすら肌が見えている。

ちなみにメルとソフィーと三人で選んだ。

私は恥ずかしかったが、あの二人に手伝って貰って正解だった。実
に、扇情的だ。

「フッフ…」

笑いがこみ上げる。まさか、こんなものを着て私が悦に入る日が来
ようとは！

メルディアが常々下着は戦闘服、と言っていたのに納得する。何を
言っているのか、と思ったものだが今なら分かる。

下着によってプロポーションを軽く矯正され、強調された姿は、裸
とは違った感じに官能的に訴える物がある。

胸のコンプレックスも忘れ、鏡の前でニヤける。イケる、イケるぞ
私。

次はネグリジェだ。肩がむき出しでもちろんスケスケ。こちらは私

の髪や瞳と同じ赤。あつさりとしつつきめ細かな飾り刺繍。

半透明の真紅のヴェールで太ももまで体を隠す。もちろんスケスケなので隠しきれて居ないのだが、中途半端な所がもどかしさを演出する。大事な事だ

最後に、やはり赤のナイトガウンを羽織る。こちらは少し明るい色だ。深い赤だと全身血まみれな感じだったので、こちらにした。

止め具はお腹の一箇所のみ。胸の下あたりから肩や首周りがゆったりとしており、かなりはだけるデザイン。

だが、決して大事な場所は見えない。そう、最初から全て晒してはいけない。まずは隠すのだ。そして一枚ごとに新しい興奮を与える。後は薄く化粧を…と鏡の前に座ったところでノックの音が響いた。バカな、まだ10分と経っていない筈だ!?

「お嬢様、急ぎのご報告が御座いました。このままで、お聞き下さいます」

急ぎ？何かあったのか？

「ギルドに潜伏中の草からの緊急報告です。『対象の生存と無事を確認。情報源は人外のネットワークの為、信憑性は極めて高い。』」

以上です。」

生存、無事？信憑性の高い人外のネットワーク？ギルドは妖精の情報網でも得たのか？そして、誰が？

そこまで思い至って、すっかり忘れていた従妹の事を思い出す。

なななな、なんてことだ。また目的を完全に見失っていた！？

手が振るえ、持っていた目を強調するよう描く為の小動物の毛製の小さなブラシを取り落とす。

「わ、分かりました。」

内心の動揺を隠し、返事をする。セバスがドアから離れていく気配を感じる。

私は、何を。完全に舞い上がって目的を忘れていた。いけない、そうだソフィーだ。時間が無いのだ。

改めて自分を見つめる。これは、今必要なことか？

今必要なのは応急手当程度の体を酷使することか？

…今は自重し、体力の温存に勤めるべきだ。

心が、冷静になる。胸の内で燃え盛る炎を御し、隅に追いやる。

だが、火勢は衰えさせない。これは今の私の根幹だ。

化粧を止め、顔を化粧落とし用の魔法水で拭う。さっぱりした。

ガウンを脱ぎ捨て、ネグリジェをベットにふわりと投げる。下着は…このぐらいの未練はいいだろう。そこもまた私らしい。

鞆から旅装を取り出し、さつと着込む。そしてユートに返して貰った愛剣を取り出し、分解する。

腰がすこし伸びたが、微調整すれば十分使える。だが後で修理に出さねばだめか…

そうして一つ一つ砂と血を噛んだ剣のパーツを清掃していたらノックが響いた。

「ユート様をお連れしました。それで、その…」

「入れ」

引き締まった声が出る。いつもの私が帰ってきていた。

4 - 2 <邂逅2>

「入れ」

組み立て前の剣を机に置き、いつものような声を出してユートを招き入れる。

扉が開き、セバスがこちらを見て一瞬驚く。決戦着で無かったのが意外だったのだろう。

だが、驚愕も一瞬。

次の瞬間にはいつものすました顔になり、来客を部屋の中へと促す。栗色の髪の青年が、頭の上に金髪の妖精を乗せて部屋へと入ってくる。

その姿を見止めた瞬間、ドクン、と心臓の鼓動が跳ね上がった。体温が3度は上がった気がする。

だが、抑える。今の私はこの昂ぶりを抑える術がある。

「良く来たな、ユート。」

自分で呼んでおいて、なんて挨拶だ、と思う。だが、上手く言葉が出て来なかったのだ。

この昂ぶりに身を委ね、飛びついてしまいたい欲求に駆られる。だが、我慢する。

そしてどうやら一人では無かったようだ。

もう一人、後ろから誰かが顔を覗かせ、ユートを押しつけ私の前へと飛び出した。

「お姉様！ご無事でしたか！？<人型>に襲われて重傷を負ったと……」

誰だ、この娘は？私を「お姉様」と呼ぶのはソフィーとメルだけだ。

そしてソフィーは黒髪、メルは赤髪、空色の髪の知り合いは、居ない。

思考をめぐらせ、目の前に来て私の手を掴んだ娘をしげしげと見つめる。

空色の瞳と髪、だが、この声と……顔は……

「ソフィー……？」

「はい、そうです！メリアお姉様！ああ、ご無事で良かった……」

ソフィーの目に涙が光る。どういうことだ、何故、ここに？

『混乱させておるぞ』

妖精が言う。その通りだ。私は混乱している。

「とりあえず…コレ、ぱつと治せる？」

『朝飯前じゃ』

そう言って妖精がユートの頭をぽふ。っと叩く。

変化は劇的だった。

夜の薄暗い室内灯だけの明かりでもそれと分かる真っ黒な髪と、瞳。

ぴょん。とユートの頭から飛んだ妖精がソフィーの頭に着地し、同じように叩く。

こちらで一瞬で色が変わる。濡れ烏色のしっとりとした長い黒髪、董色の瞳。見慣れたソフィーの姿。

では、ユートは、<召喚されし者>？

思考が進む、まで、これ以上は考えてはいけない。

頭の中で本能的な警鐘が鳴り響く。だが、考えてしまった。

<召喚されし者>は、王女の、ソフィーの、夫。次期国王。

私には、届かない。

足元が崩れ落ちたような気がした。

目の前に居る筈の二人が遠のいて行くような感覚を覚える。

意識が、一瞬遠のく。

だが、振り絞るように声をだした。姉としての意地で。

「ソフィー、良かった。無事だったんだな。」

「はい！ユート様に助けていただきました…」

「そうか」

ユートが<召喚されし者>と聞いて一気に頭の中のパズルが組みあがる。

残された<意言の首輪>、偽護衛の死因、ソフィーが消えた理由。

<甲盾熊>を倒したとも言っていた。ならば、北の森を抜けたのだ。尋常でない速度で。

<人型>と戦っていた時の彼なら、そのぐらいやってのけるだろう。全てが納得がいった。そして、私の気持ちは、砕けた。

「良かった、ソフィー、皆心配したんだ。それに<召喚魔術>も成功したんだな。おめでとう。」

「はい！ご心配をかけまして申し訳ありませんでした…」

「良いんだ、ソフィーが無事なら、良いんだ。これ以上は無い。」

ソフィーが無事だったのは嬉しいのに、私の心には大穴が開いて寒々しい。

「これからどうするんだ？」

「はい、一度アーリントンに戻りまして叔父様の庇護の下<召喚魔術>成功の一報を出したい、と考えております。」

「そうだな、それが一番だな。お母様も喜ぶ。」

「はい！お話したい事がたくさん、たくさんあります。お姉様にも、メルにも。」

そう言うソフィーは幸せそうだ。

そうだ。彼女の人生を賭けた悲願が達成されたのだ。

嬉しくない筈が無い。

幸せでない、筈が無い。

「ごめん、ソフィー、私はまだ本調子じゃないようだ。今日は安静にしたい。また、明日話さないか？時間はあるだろう？」

「あ、ご、ごめんなさい…つい、…分かりました。ではまた明日にでも来ますね。」

「ああ、ユートも、今日はもう帰ってくれて構わない。色々ありがとう。」

「ああ…」

訝しげな顔をしてユートが頷く。今は、ユートの顔を、声を、感じるのが辛い。

「それではまた明日。お休みなさいお姉様」

「ああ、お休み、ソフィー」

そう言い残し、再度偽装を施したソフィーとユートが出て行く。

セバスも見送りに行かせた。

…一人に、なりたかった。

4・3＜悪魔の囁き＞

「は、は、は、は、」

乾いた笑いが漏れる。

照明を消し、一人、寝台に仰向けに身を投げ出し顔を抑える。

どうしてなんだ。

私はどうしてこうなんだ。

やっと、見つけたと思ったのに。

運命だと思ったのに。

運命なんて無い。

神様なんて居ない。

さっきまで胸の内で燃え上がっていた炎は消え失せ、

焼き焦がした心が傷跡になりすぎずきと痛む。

痛い、痛い、痛い、

「うっく……うっく……」

嗚咽が、もれる。抑えた手から涙が滲み出し、零れる。

一度堰を切った涙は次から次へと溢れ出し、零れ落ちる。

止まらない。

どうして、どうして、どうして、

嫌だ、嫌だ、嫌だ、

あんまりだ、酷い、ふざけるな、なんで、嫌だ、たすけて、ゆるして、お願い、やだ、だれか、だれでもいい、助けて、このままでは、狂ってしまう。

乱れた思考が胸の痛みと同調し悲鳴を上げる。

痛みが、ますます酷さを増す。

たまらずうつ伏せになり、枕に顔を埋める

「嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ！！嫌、だよう………」

そのまま顔を力の限り押し付けて叫ぶ。胸の痛みを吐き出すように。

「助けて、こんなの、ない、私も、私だって、ああああああああああああ！！！」

兎に角大声で叫ぶ。

枕に埋もれたままでは声はこの部屋から漏れはしない。

吐き出したい。この苦しみを。

逃げ出したい。この辛さから。

助かりたい。

幸せになりたい。

彼が愛しい。

彼が欲しい。

でも、

でも、

『諦めるのかや?』

誰も居ない筈の部屋に声が、響いた。

ハツとして起き上がり、涙に濡れた顔を拭いもせず声の聞こえた先を見返す。

『諦められるのかや?』

暗闇の中だというのに、何故かはつきりと見える。

金髪と褐色の肌をした20センチ程の小さな姿。

「おまえ…は…」

ユートの頭の上に居た、妖精。それが無感情な表情を浮かべ、私の前を浮いている。

『本当に、諦めて、良いのかや?』

問いかけてくる。それは……

「だって、彼は、<召喚されし者>で、」

『それは建前に過ぎん。おんしの心に聞いておる。諦めたいのか、と。』

私の、心。

私の、心は、

「諦めたくなんて、無いに決まっている！でも！だけど……！！」

彼は、ソフィーの夫、なのだ。

ずきり、と胸が一層激しく痛む。

そう、ソフィーが、今までずっと切望してきた、相手なのだ。

『ならば、無いのか？おんしの想いを遂げる術は、おんしの想いを正当化する術は、』

「そんな物は……」

『ある、はずじゃぞっ？』

妙に自信に溢れた、確認するかのような言葉。

ある、はず…

思考が巡る。先ほどまでの悲鳴と違い、具体的な救いを求めて。

そして思い至る。

10年前に、貴族達によって無理やり施行された、だが結果として形骸になった法律、施設。

『火が、点つたの』

「そうだ…、ある。だが、それは…」

『何を躊躇う？おんしの想いを満たし、誰にも後ろ指刺されぬ術があるというのに。』

「……………」

『諦めるのは嫌なんじゃろう？どうかや？先ほどのようにその胸の炎を消そうとし、心を引き裂き、踏みにじられるような痛みに苛まれたいのかや？』

その術を行使して、誰が傷つく？誰が悲しむ？誰も、誰もじゃろう？ならば何を躊躇う。何を諦めようとしておる？』

いつきにまくし立てる。全く異議を唱えられない、甘い甘い誘惑。

なんなのだ、この妖精は？まるで御伽噺に出てくる悪魔のような…

……

「その…通りだ。」

『ならば、もう大丈夫じゃな』

「ああ…」

確かに、胸に灯った新しい炎が、無理矢理消されようとしていた炎を救い、再び燃え広がり始めている。

痛みが薄らぐのを感じる。そして理解した。焼け焦がした心が傷跡となつて痛んでいたのではない。

消されかけた炎が、無理矢理殺されかけた恋心が悲鳴を上げていたのだ。死にたくない。と

「お前は、何だ。何が望みだ？悪魔、なのか？」

冷静さを少し取り戻し、問う。

悪魔は願いの見返りに何か大切なものを求めるといふ。

この妖精は最早そういう存在にしか思えなかった。

『悪魔か、あながち遠からず、といった所かの。何度も言っておるう？ 魔族じゃ。』と

「何が、望みだ。」

『別に何も望まぬ、と言いたい所じゃが納得いかぬようじゃな、ふむ。では「妾を楽しませてくれ」これでよかるう。』

「私が、この想いに殉じることが、楽しいと？」

『ふん。我が主が幸せに苦しむ姿が楽しい。と言っておこうかの』

「は、酷い悪魔だ」

言づに事欠いて、幸せに苦しむとは。

『魔族じゃ。』

「そうだったな、酷い魔族だ」

『褒め言葉と受けとっておこうかの。』

「ああ…感謝する。私は、救われた。」

『ならば誓約を果たすんじゃな。ククク、楽しみじゃ。』

「期待を裏切るつもりは無い。全身、全霊で挑ませてもらう。私はもう、迷わない」

『その意気じゃ』

「ああ」

『では、もう良からう。妾はいぬ。』

「ああ、ありがとう」

そう言って小さな魔族は夜の闇に溶け入るように消えていった。

私の涙はいつの間にか止まり、胸の痛みは再び燃え広がった炎に完全に包まれ霧散し、歓喜だけがそこにあった。

5 - 1 < 事情聴取 >

「おはようございます、捜査局の者です。こちらにユート・アオスズさんと長寿族のオサ・ルトス・アルストラさんが宿泊されていると伺ったのですが…」

ソフィーとメリアが邂逅した翌日の朝、宿の1階で食事を取っていた時にその人はやって来た。

ピシツとした詰襟の軍服を着込み、短く切りそろえられ、やや青みのかかった灰色の髪と、水色の瞳。

年のころは40代前半ぐらいだろうか？

…なんと言うか渋い。声も渋い。

渋いのだが…何の冗談か、頭の上に髪と同じ青灰色のネコのような耳がぴよこんと生えていた。

捜査局？と聞いて首を捻っていると、宿屋の主人に促されたネココミダンディがこちらに向かってきた。

「はじめまして、ユートさん、オサさん。私はアンディ・テトラ。捜査局の者です。昨日のアルモス卿邸宅での事件の事をお伺いしたいのですが、ご同行願えますか？」

皆に目配せする。

何この人？どうすればいいの？

「任意同行、か。捜査局がこんな速攻で動くほどの事件だったのか？」

オサが返事をする。

なんだか聞いたままだと警察っぽい。任意同行とか。

「はい、かなりの大事です。メリアルーナ様にも出頭願いました。」

「仕方ねえか。まあでもなんだ。メシ食い終わるまで待つてくねえ？逃げやしないしさ。」

「分かりました。その入り口でお待ちしております。」

「宿の前とは言わないところがなんと…」

「お気になさらず。では。」

そういつてアンディさんが踵を返し入り口付近に戻る。

…見てる。凄いこっちを見てる。

「おい、迂闊な事は喋るなよ。聞かれてる可能性が高いぞ」

「特課兵、ですね。戦闘能力よりも様々な特殊能力を買われて集められた兵です。十分ありえます。」

オサが言い、ソフィーが続く。

「あー、今日は職人街に行って大工連中に話つけようと思ったんだがなあ…お前らだけで大丈夫か？」

ヤスさんとシズクさんが頷く。任せてください。と。

「ちゃんと値切れよ？ボられんなよ？」

「だいじょうぶだ。」「お任せ下さい。」

「で、嬢ちゃんがどうするかだな。」

そう、問題はソフィーだ。行けばバレルのは確実だろう。

「そうですね、特課兵の方々が来ているのでしたらあまり出歩かない方が良さそうですね…宿に残りましょうか」

『ならば妾も残ろう。そうすればユートとも連絡がとれるでな。』

「ありがとうございます、マール。」

『礼には及ばぬ』

「メリアさんの所は終わってからかなあ」

「じゃーねーよ。」

「残念ですが。」

『なに、終わってから合流すればよからうて。』

「そうだね」

方針は決まった。食事を済ませよう。

5 - 2 < 事情聴取 2 >

アンディさんに案内されて着いた先は、アルモス卿の邸宅前だった。

… 取調室とかでないの？

勝手なイメージではあるが、なんだかテーブルが1個だけ置かれた狭い目の個室でライトを当てられて

「さあ吐け！お前がやったのはわかっているんだ！！」のイメージだったのだが。事情聴取。

どうやらそうでもないらしい。

こちらでお待ちください。と言いつつアンディさんが既に待っていた同じ制服を着た人物の元へ向かう。

とりあえず待つか。と思い周りを見回したところで聞き覚えのある声が聞こえた。

「おお、ユート。やはり貴方も呼ばれたか。」

「おはようございます。ユート様、オサ様」

声の聞こえた方に視線を巡らせる。

メリアとセバスさんも先に来ていたようだ。

「よお、あんたらも早いな。」

「おはようございます。メリアさん、セバスさん」

挨拶を交わす。昨日の夜も思ったが、メリアの物腰が最初に出会った頃の感じに戻っている。

若干の寂しさを覚えながらも安堵する、良かった。

「おはよう。それと私の事はメリア、でよい。他人行儀な「さん」
ずけはしないでくれ。」

「そ、そうですか…わかりました。メリア…」

「うむ。」

「…」

そう思ったのもつかの間、いきなり訂正を求められ、答えると満面の笑みを浮かべそのままじっ……と見つめてくる。

…何故だろう。なんとなくおあずけを言われて待っている犬のように見える気がする。

やはり変わったのは口調だけで変わってない？

俺の背中を冷たい汗が流れる。大丈夫なのか？この取調べ？

「で、どーすんだよこれ？どう説明する気なんだ？」

「お、っと、そうだな。とりあえずはありのままを、だな。だが全てをここではだめだ。この事件は色々とまずい事が多い、もっと機密性のある場所でない」と

「あ？マジかよ…オレそんなのに巻き込まれたくねえぞ…」

「大丈夫だ。オサ殿はそういう類のものは何も見ていない。見たままを話してくれば構わない。」

「本当かよ…それなら良いか？…面倒な事にならなけりゃ良いが」

「俺の事は？」

「そちらもあつた事やつた事はありのままで、素性や異常な事はごまかしてくれ。それと、念のためその頭の事も秘密だ。」

「分かった。」

素性に頭、つまり＜召喚されし者＞という事もまだ秘密にするようだ。

「では、もういいな。セバス、＜防音＞解いてくれ。」

「はい。」

パリンと、周囲で見えない何かが割れた感じがした。

どうやらいつの間にか結界系の魔法を使用していたらしい。

「もうよろしいので？」

先ほどまで同じ制服を着た人達と話をし、書類を受け取っていたアンディさんがこちらにやってきて話しかける。

「ああ、打ち合わせは終わった。それと、ここでは全部はだめだ。事は確実に国家機密に関わる」

「…穏やかでは無いですね。では、その件の詳しい事は詰め所の部屋を借りて話しましょう。ここでもく封鎖>とく防音>とく防諜>の結界を張っていますので大丈夫ではありませんが。」

「ああ、分かった。重要な所は触りだけにしておこう。念を押しておくのは悪い事ではない。」

「ありがとうございます。では、まずは何が有ったか、なのですが…」

「最初から話した方が良いか。そうだな、実は私は王女失踪事件を

知っていてもたってもおられずお父様に直談判をしてな…」

「お嬢様、私が説明いたします。流石にそこからは長すぎます。」

「……………任せる。」

メリアが本当に最初っぱい事を言いかけた所で、セバスさんが止める。ナイスフォロー！

…だけどなんだか微妙な空気になってしまった。アンディさんも苦笑いしている。

「昨日の夕方ごろ、我々はアルモス卿の帰参を知ってこちらに出向いたのです。そしてその時アルモス卿はおらず、息子のマルナス様が、その馬車の前におりまして…」

セバスさんの説明が始まる。長い話になりそうだ。

「なあ、おい、おまえメリアの嬢ちゃんトコに行け。」

「なんで？」

「わかんねえのか？来てからずっとチラチラチラチラ見てんぞ？」

「…そうだね」

むしろたまに余所見するだけで基本的にはじー、と凝視されている感なんだが。

「ついでに慰めてやれ。あんなぶすくられてたらいつ火事になるかわかんねえ」

「わかったよ。」

「大丈夫だ。心配すんな、お前の言う事には逆らわないって。」

「…」

…そういう問題じゃないんだがなあ。

とりあえず、メリアの隣に行く事にした。

5・3＜事情聴取3＞

俺がメリアの隣に立つと、腕を取られ、しなだれ掛かられた。

予想はしてたさ…

「メリア？今は事情聴取、ちゃんとしましょうね？」

「勿論だ。だが、このままでも出来るさ」

苦笑い交じりに覗いたメリアの顔は、本当に楽しそうな、幸せそうな笑顔を浮かべていた。

今にも鼻歌でも歌いそうな具合だ。でも、正直ちょっと回りの人の視線が気になる。

遠巻きに何かの作業をしているアンディさんと同じ服を着た人達がチラチラと見てるし。

「で、メリアルーナ様に槍を投げ渡した所で＜人型＞の一撃を受け、その馬車を貫通し、昏倒した、と。」

「その通りです。」

しかし馬車を貫通する程の状態で良く生きて居ましたね？

鍛えておりますので。

そういう会話が聞こえた。…そういう問題なのだろうか。

「分かりました。では続きはメリアルーナ様、槍を受け取った後はどうなったのですか？」

「ああ、受け取ったのだが、つい吹き飛ばすセバスを目で追ってしまつてな。隙を見せた所に不意打ちを受けて、手足を砕かれて鎧を剥ぎ取られ、犯されかけた。まあ、その前にヤツの股間を焼き払つてやったがな。」

「なるほど、マルナス様の遺体の股間が炭化していた辻褃が合いますね。」

ボロボロになつたメリアは見ていたが、そんな事が有つたとは。

ふつふつと怒りがこみ上げる。あいつが死んだのは良かったのかもしない。

「その後怒り狂つたあの豚がメチャクチャな命令を<人型>にして<人型>が混乱しだしてな。その肩にあつた魔道具が明滅して怪しかったので槍を打ち込んで砕いた。そしたら自由になつた<人型>が豚の足を食つた。」

「…モンスターを操った、という魔道具ですね。なるほど、腕輪と腕輪の二つ一組だったのですね。」

「ああ、恐らくな。あれは危険なものだ。この家も含めてアルモス卿の施設は全部洗うべきだ。」

「そう伝えます。話の通りなら拡散されていた場合恐ろしいことになりますしね。」

「よろしく頼む。で、だ。豚を食った隙を使ってボロボロの体を押し、<魔槍ヴェルス>を発動、やつの腹に穴を開けて、そのまま勢い余って屋敷囲いを粉碎して外に飛び出した所で、ユートとオサ殿に出会い、助けてもらったのだ。」

「…なるほど、ここまででは証言と痕跡通りですね…となると、最後は貴方がたですか。ユートさん、オサさん」

「オレは転がり出てきた嬢ちゃんに治癒魔法を使ったただけ。強いて答えるなら、もうちょっと遅かったら死んでたぜ？あんだ。」

「感謝している。そのおかげで今こうしてユートに侍ることができ
る。」

メリアがさらに力を込めてぎゅーっと俺の腕を抱き寄せる。

その顔はとても嬉しそうだ。

「…」

アンディさんがちらり、と視線だけでこちらの顔を見る。

有名人らしいし、アンディさんもメリアの事を知っているのだろう。

視線が、誰これ？何これ？どうなってるの？って言っている…気がする。

「ではユートさん。メリア様が屋敷囲いを粉碎して飛び出した後、何が有ったのか、ご説明下さい。」

「えーっと、メリアを救おうと思ったけど重傷だったから動かせない。と思ってく人型を敷地内に蹴り込んで、倒しました？」

「…その、もう少し具体的にお願ひしてよろしいですか？何処でどういう事が起こったか。動いたか、見たもの、等何でも良いので」

「…そうですね、えっと…」

話しても良いのかな？

5 - 4 <事情聴取4>

「で、<人型>の胴体を切り払って、それがトドメになりました。その後急いで駆けつけたのですが、その、誰でしたっけ？アルモス卿の息子さんは失血死していました。その後セバスさんの下へ駆けつけたら、意識は無かったのですが、まだ脈があったので急いで治愈魔法を使用したら意識が戻りました。」

「…辻褄は合いますね、この足跡も」

「…俄かには、信じられませんね、あの<鎧付き>の<人型>を一人であっさりと、ですか。」

「フッフ、どうだ、話に聞くだけでこの圧倒的な強さ…やはりユートこそ私の夫に相応しいだろ？」

結局ありのままを説明した。<強化魔法>とかは言わなかったが、まあいいだろう。

「失礼ですが、貴方は獣人ですか？獣化しても意識が残せる？」

「残念ながら人間です。」

「例え獣化した獣人でもユートには手も足も出せないさ。あの強さは圧倒的だった。」

メリアが見たのはほんとに一瞬だけだったと思うんだが…

なんだか目つきが昨日と同じになりかけてるし触れないで置こう…

「…そうですか、ああそれと折れたという槍と、その〈人型〉の落としたく魔鉱石とく魔晶石とを見せていただいてよろしいですか？」

「む、そうか…」 「ああ、少し待ってください」

メリアと二人、自分の鞆を漁る。

謎の金属塊と昨日手に入れたく魔晶石とを取り出す。ふふふ、今回はちゃんと分けて置いたのだ。

メリアは槍を取り出す。昨日のままだ。柄が折れている。

「ふむ…こちらも証言通り、ですね。ではもういいです。そちらの品はモンスター討伐での事ですので、提出して頂かなくて構いません。」

「当然だな。」

メリアが答え、仕舞う。ふむ、これはく魔鉱石と云うらしい。

名前からして何かの原石か素材になるのだろう。後で聞いてみよう。

…魔法金属に出来たらいいのだが。

「とりあえず、ここまでですね。しかし確かに重大な案件でしたが国家機密…」と言つにはいささか弱いような」

「そちらはあの豚が暴れる前に自白した内容が主だ。恐らくあの魔道具も関わっている。」

「なるほど、ではそちらの話を詰め所で行いましょうか。」

「セバス、頼めるか？」

「承りました。」

「では、セバスさんは後ほど私と詰め所の方までよろしく願います。」

「お三方はもう結構です。ご協力ありがとうございました。それから、もしかするとまたお呼びするかもしれないので暫く街から出ないでいただけますか？」

「げ、オレ村に帰って指揮しねえといけねえんだが…」

「申し訳ありませんが…」

「マジかよ…」

オサがげんなりする。

「なんなら我々がワイバーンで送ろう。それなら早いだろう。」

「そりゃ助かるぜ！山を迂回しなくて済むし2日あれば帰れる！」

「…ちなみに何日ぐらい拘束する気なんですか？」

「2日、ですね。それ以上はできません。」

できない。つまり法律が何かで決まっているのか。

意外としっかりしてるなこの国の法律…

「それなら予定より早く帰れそうだな。いやー逆に助かつちまったぜ〜」

げんなりしていたオサが早々に復活した。

ともあれ、取調べはもう終わりのようだ。なんだか意外にあっさり
と午前中で済んだ。

これからどうするかな。

6 - 1 < 鍛冶屋 1 >

事情聴取を終え、マールに連絡して昼食はソフィーと合流してとることにした。

だが、まだ少し時間が有るようなので、その前にメリアの槍を修理に出しに行く事になった。

どうせ2日拘束される。その後オサを村まで送れば往復4日の合計6日。

修理に出して置けば良いとの判断だ。

そして今鍛冶屋の受付前に居る。

メリアが槍を渡して色々と交渉中で暇だった。ギミックがあるので色々注文をつけているようだ。

「そういえば、この<人型>から出た鉱石は何かに使えるの?」

ふと、思い立ちすっかり名前を忘れた鉱石を取り出してオサに聞いてみる。

「ん? ああ、<魔鉱石>か。そうだな、あの嬢ちゃんの槍の柄とかそうだな。何か知らんが魔力を良く通すし熱加工すると強度がすげ

え上がる…んだったかな…？うる覚えだ。」

「強度でなく硬度じゃな、他はおおよそその通りだぞい。強いて言えば硬くし過ぎると割れやすくなってしまっただの。硬軟混ぜ合わせて使用する。なかなか加工するのが面白い金属じゃ。」

横から声がして、オサの解説をフォローしてくれた。でも、誰だ？この人。

「ええと、解説ありがとうございます。すみません、どなたですか？」

「何、この工房のマスコットのじいじやよ」

「何がマスコットだよ…こんないかついマスコットがあつてたまるか」

たしかに爺さんはオサ並の小柄だが、サンタみたいな豪快な髭に禿頭、

さらに上半身裸で筋骨隆々である。

赤茶けた肌がさらに筋肉を強調している。

…というか、この人こそドワーフじゃないか？

しげしげとく魔鉱石を眺める爺さんをしげしげと眺める。

…特に耳は長くない。やはりドワーフではないか。あれ？ドワーフ
って耳が長かったっけ？

そうこう考えて居ると爺さんが口を開く。

「なかなかの上質…いやかなりの上質の＜魔鉱石＞じゃな。ごく最
近の＜人型＞からとったか？」

「そうですね。」

「ほう、どつじやるつ？その嬢ちゃんの槍の修理にコイツを使
いたいんじゃが、買い取らせてくれぬか？」

「幾らだ？」

オサの目の色が変わる。金銭の話になるとほんとにこの見た目幼女
は…

「そつじゃな…30、小金貨3枚でどつじや？」

「35。」

「がめついのじ…31」

「35。」

「31。」

「さんじゅっ…」

「ストップ」

「あん？なんで止めるんだよ？」

「30でいい。その代わり色々聞きたい事があるんだ。」

「ほう、感心じゃ。じじいの鍛冶知識はなかなかのもんじゃぞ？何が聞きたい？」

「なんだよー、折角高く売ってやろうと思ったのによーとオサがこねる。」

「だが、ここは聞きたい事がある。それが優先だ。」

「魔法金属ってあるのかな？」

「…聞いた事が無いのう？どついうものじゃ？」

「魔法を使って精錬された金属で、特性は高い魔力伝導率と強度に軽量さつて感じなんだけど…」

「魔法で精錬、と言う物自体聞き覚えが無いの。後半を満たすのもこのく魔鉱石を加工したものの程度か。あまり加工せずそのままの」

素材で使うなら、竜種系の素材の方が優秀じゃ。」

やはり、そもそも無かったか。武器屋でも見当たらなかったしそうではないかと思っただが。

「…確かに魔鉱石は熱加工でしたよね？高温には弱いんですか？」

「ああ、高温に晒すと硬度が上がるんじゃが砕けやすくなってしま
うの。」

だめか。畜生、ミスリルの製造法とか覚えとけば良かった。

「ありがとうございます。残念ですが、俺の欲しいものは無さそ
うです。」

「熱に強く、高い魔力伝導率と強度に軽量さということなら、<赤
鱈竜の鋸歯>辺りが最上級かのう…竜はモンスターと違って1匹あ
たりの手に入る素材は多いんじゃが、討伐される事がそうそうない
での。このじじいですら1、2度しか見た覚えは無いぞ」

「そうですか…ちなみにその鋸歯は何度ぐらいの高温に耐えられま
すか？」

「そうじゃの…試した事はないのじゃが…記録によると3000度
ぐらいだったかの。」

「へえ、すごい火力だな？普通7〜800度、凄いで1000度ぐらいしか出ないって聞いてたんだが？」

「うむ。炉はそうじゃの。だから魔法で熱したらしいの。うん？こいつのを魔法精錬と言うのかの？」

「残念ながら…」

似ているが、多分違う。確か魔力を直接素材に流して居た筈だ。

そして、それではだめだ、5000度ぐらいに耐えてくれないとく多連層水環鋸には耐えられない。」

「残念です。5000度ぐらいに耐える金属が欲しかったのですが。」

「お前はまたそんなムチャクチャな物を…大体何に使ってんだよ」

「攻撃魔法に…？」

「そんな金属このじじいでも聞いた事すらないぞい…」

「いえ、ありがとうございました。工夫してみます。」

「すまんの、折角交渉を打ち切ってまで聞いてくれたのに力になれんで。」

「お気になさらないください。」

「ああその通りだ。コイツのヨタ話に付き合つと頭が痛くなるだけだからな。」

「酷いね」

「ホントの事じゃねーか」

いい加減お前の規格外ネタは飽きたぞ！と怒られた。

交渉を止められたのが相当気に入らないようだった。

6・1<鍛冶屋1>(後書き)

久々のうんちくシリーズ

金属の融点は高いものでもタンゲステンの3380度ぐらいのよう
です。

高融点化合物でも炭化タantalの3880度。

大気圏で燃え尽きた物体が地上に降ってこないのはこの温度を軽く
超えてしまつて何もかもが気化しちゃうからのようです。

と、いう事で夢の金属であるミスリル達にはその限界以上、という
ことで5000度に耐えられることになってもらいました。

うんちくシリーズはざつと検索した結果です。もしかしたら間違
っているかもしれませんが、その場合はご指摘ください。修正し
ますので…

6・2 <鍛冶屋2>

「話は終わったのか？」

そんなこんなで話していると、交渉を終えたのか、いつの間にかメリアがこちらにやって来ていた。

「いや、もう一つ」

「なんじゃないの？」

鞆から剣を取り出す。 <女王嬢の剣>で作られたモノだ。

「この剣の魔法伝導率が知りたいんだ。鉄剣程度の量なら耐えれてたけどどうなんだろ？」

「ふむ。 <女王嬢の剣>か。鉄剣とは軍支給品程度か？」

「その通りです。」

多分、だが。

「ふーむ見たところ質も悪くも無く、さりとて最上でもない中の上

といった所じゃの…む？魔道武具でないのか。これから加工するかの…？ともあれこの質では鉄剣の5倍程度込めたら砕けるかの。まあ、そんな量込められるのはそのの嬢ちゃんぐらいじゃろうが。」
そう言つて当然のように俺の隣に来ているメリアを指差す。

…まさか鍛冶屋の爺さんまで知っているとは。どうやらメリアはかなりの有名人のようだ。

「いえ、ありがとうございます。ちなみに最上級のものでしたらどのぐらい込めれますか？」

「密度も上がるし大きさもあるでな。恐らくこの剣の10倍は耐えるの。」

何の魔術式を込めるか知らんがウチでもやっとするぞ？と爺さんが言う。だが、そうではない。

俺は別に魔道武具を作りたい訳ではないのだ。

とりあえず、これのさらに10倍。つまり鉄剣の50倍。

それなら全力を込めることが出来るかもしれない。

100で掛けて2で割る。うん、暗算でのアバウトな数字上は可能だ。

大きいので以前の剣の用には扱えないだろうが、有って損なもので

もない。

時期的に俺が倒したモンスターは皆最上級らしいし、<女王螂の剣>もそのはず。よし。

「この工房では素材からの武具の製作は請け負ってもらえますか？」

「勿論じゃ。持ち込みは歓迎するぞい。それなりに金は取るがの。」

鞆から2m半程はある<女王螂の剣>を一对取り出す。

「これを素材に剣を作って頂きたいのですが。」

「ほ、またえらいモンを持ち込んだの。」

「…ゾツとする大きさだな、流石にこんなのを持ったのと対峙した事は無いぞ」

メリアも言っつ。

まあ確かにあれは危ない相手だと思った。素材狙いでつい様子を見てしまったら

猛烈にトリツキーな動きをされて焦った。

結局以後は遠間からの投げナイフ一発になってしまったのだが。

「柄の加工用に＜魔鉱石＞がもう少し欲しいのう、手持ちはないかの？」

「いえ、もうありません。」

「そうか…しかしこれだけの物なのに柄が安物では格好がつかんのう…＜轟槌蟹の爪＞とか＜溶鋼獣の塊＞は無いか？」

「基本的に神殿の北の森のモンスター素材しかありませんね…」

「なら＜猛角羊の一本角＞と＜甲冑猪の牙＞と＜時雨鳥の冠＞と＜木人樹の膠＞はあるか？」

「それならあります。」

「なら2本分でその角4本、牙2つ、冠4つ、膠を2つあれば可能じゃ」

鞆から取り出す。ソフィーとオサに教えてもらったので大体のモンスター素材の名前は覚えている。

角4、牙2、冠4、膠2…後剣ももう一つ…と

取り出し、テーブルに並べる。

そして置かれた素材を爺さんがしげしげと見つめ、時には手に取り検品する。

「確かに。まさかこの時期に討伐をこなしてくるとは…どれも最上級じゃ。腕がなるのう。」

ふおっふおっふお、と笑い、検品していた素材を机に置いて再びこちらに向き直る。

「さて、後は手数料じゃの。そうじゃのう。素材は全部持ち込みで済んだし、加工費は…2本で15万Gってところかの」

「じゅっ…」

「ではそれで」

オサの発言をふせぎ答える。

「なんでじゃますんだよー！」と文句を言って来るが、

別に金に困っては居ないのでスルーだ。

代金は完成した後で良いらしい。

5日後には出来るから取りに来い。とのことだった。

取りに来ないまま1年経つとそのまま売るからな？と釘を刺され、

鍛冶屋を後にした。

その後宿へ戻る道中に、

「いいか？基本はボられるんだ。値切らないとダメなんだ。分かれよ。」

とオサに説教された。

そうなのかもしれない。

喉まで出かかっていた「でも出来物の剣より安かったし…」という言葉い訳はしないで、笑って誤魔化して置く事にした。

値切る、と言う行為をした事が無かったのでつい忌避してしまったのは否めないし、もっと機嫌が悪くなられても困る。

それについて、とは言え2回連続でオサの楽しみを妨害してしまった訳だし。

後で何かフォローしないといけないなあ、と思いつつソフィーとマールの待つ宿へと向かった。

ちなみに殆ど会話に参加していなかったメリアは、終始俺の腕に組み付いてご機嫌だった。

7・1<追跡者>

『そのまま、一切動じる事無く聞くのじゃ。』

鍛冶屋を後にし、宿までもう少しという所までたどり着いた頃に、マールの真面目な声が届いた。

(…どうした?)

訝しげに返答する。

『おんしら、尾行けられておる』

(…そうか、どうする?)

『妾が無力化する。おんしは一気に確保じゃ。』

(分かった。距離は?)

『およそ200m後方、振り向かず右側、振り向いた後は左じゃ。妾の術で即効で昏倒させる、倒れたヤツを攫えばよい。』

(…魔力は大丈夫か?)

『足りぬ。おんしのを借りる。』

(分かった。)

『では、やるぞ。』

頭の中で打ち合わせを終える。準備をしないと…

「メリア、ちょっと悪いんだけど手を離してくれないか？」

「何故、だ？」

『3』

「緊急事態。お願い」

「……………わかりました。」

『2』

なんでそんな泣きそうなの！？困るんだけど！？

……………い、いや今はそれどころじゃない、やるぞ。

『1』

体内で疾走するための〈強化魔法〉を活性化する。行ける。

『GO』

ドツつと地面を蹴って走る。気配を確認して通行人の位置は大体掴んでいた。すりぬける。

目的の人物らしき人が痙攣し、地面に吸い込まれる用に体を傾ける。倒れ伏すその前に、攫う！

小脇に抱え、一気に掻っ攫い反転、宿にたどり着いたところで減速。この間約5秒。

何が起こったのか分かっておらず、俺が居なくなっただ戸惑っていた。メリアとオサを追い抜き、入り口の中から手招き。

宿の1階を見渡すと食事時のせいか、人が多い。仕方ないのでそのまま宿泊している部屋に運ぶことにした。

「おかえりなさい、ユートさ…ん？」

部屋にはソフィーとマールがいた。

ソフィーが俺が小脇に抱えた人物を見て困惑する。

『首尾よく捕まえたようじゃの。バックアップ要員らしき連中も混乱してある。おんしを目撃できた者は恐らく皆無じやろう。』

「そっか、ところでマール、お前何を？この人なんだかすごい泡吹いて痙攣してるんだが…」

あと何かすごい笑ってる。目の焦点も合っていないし…有り体に言うて怖い。

『何、ちよいとくバッドトリップ>をしてもらったんじゃよ。』

「…なんだか響きからして後遺症とかが怖い感じなんだが…いいのか？」

『1回や2回やるぶんには効果をきちんと抜いてしまえば問題なからうて。』

…聞けば聞くほどよろしくない薬を使ったような感じに聞こえる。

本当に大丈夫なのだろうかこれ？

「あの、それで、どういうことなのですか？そちらの方は？…特課兵の方のようですが…」

言われて小脇に抱えた人物をきちんと見る。

男、小柄、薄めの茶色の髪。頭の頂点にウサギみたいな耳。…「こ丁寧にズボンからは丸い尾が出ている。」

そしてアンディさんと同じ制服。

「…みたいだね。どうする?」

『しれたことよ。尋問じゃ!』

なんでそんなに楽しそうなの…?」

『まずは逃げられぬよう身包みを剥ぎ、拘束じゃ！』

と、言ってもマールがそれをするのは大変だという事で、やっぱり
と言つか俺がやることになった。

てきはきと服を剥ぎ、パンツ1丁にしたウサミミ特課兵をロープで
椅子に縛り上げる。

見たところ20代前半〜中ごろ。

小柄だったが脱がしてみると中々の肉付きで、アスリートかスプリ
ンターみたいな雰囲気だ。

服を剥いでいる最中にソフィーが「きゃー」と両手で顔を隠しながら
ら指の間から覗く、

と言った何処かで見覚えのある光景があったりしたが、割愛しよう。

椅子も固定して…とりあえず準備は整った。

マールからすごい剣幕で皆に対して『怪我はさせたりせぬから絶対
口出ししないように。』

と釘を打たれた所で、<バッドトリップ>が解除される。

「う、あ？こじは・・・？」

ウサミミ特課兵の意識が戻り、朦朧とした目でキヨロキヨロと周りを見る。

ものの数秒で自分の状況が分かったのか、目を見開きもがく。

「な、何ですか！？どうして私は縛られて…！？服は！？」

『しびらしいのじ』

「なんなんですか、あなた達は！？私を捜査局の者と知ってやってるんですか？」

『当然じゃ。』

「ふざけないで下さい！何を考えてるんですか、こんな事をして、ただで済むと思ってるのですか！？逮捕されますよ！？」

『ふざけておるのはお前じゃ。』

「何を…」

キヨロキヨロと俺達を見回してした視線が、やっとマイルに止まる。

『なぜ、こやつらを尾行しておった？』

「何を言っているのか分かりません。」

『人には気づかれぬ距離のつもりだったんじゃろっ？じゃが見ての通り妾は人ではない。言い逃れできぬよ。』

「何を言っているのか分かりません。」

『しらをきるのかえ？』

「何を言っているのか分かりません。」

『それとも時間稼ぎ、かの？残念じゃがおんしがここに運び込まれたのを目撃できた者はおらぬ。おんしは行方不明よ。』

「……………」

『状況が少しは飲み込めたかや？さつさと喋った方が身のためじゃぞ？最も、妾は喋ってくれないおんしを拷問するほうを期待しているがの。』

「……………」

『たしか、おんしらの常識では妾のような存在は嘘を言わぬのだから？覚悟はいいかや？』

「……………」

『くぶ。良い度胸じゃ。では魔族流拷問を始めようか。』

マールが楽しそうに、本当に楽しそうに笑った。

『じゃーん。「塩」「じゃ」』

何処からとも無く、マールが旅の途中何度もお世話になった塩の入った小瓶を出した。

いや待て、本当に何処から出した？

『ふ、ふ、ふ、何処から？という顔じゃな？これじゃ！』

マールが得意げに自分の腰辺りをパンパンと叩く。

よく見ると、そこにはマールのサイズに合わせてあつらわれた鞆があつた。

…物凄く小さい。人形用サイズだ。

あんなサイズでまで作れるのか、すごいな…

感心する。

『留守番中に頼んで作ってもらったのじゃ。いやあ！これはよいの
』！』

ご機嫌だ。何で留守番に積極的だったかと思っただらこれが目当てだ
ったのか。

『さて、では拷問スタートじゃ。ほれ！』

そう言ってマールが小瓶から取り出した小石程度の塩の塊を、ウサ
ミニ特課兵の口にこすり付ける。

………塩を口にこすり付ける事が拷問なのか？

ちらりと周りを見る。皆首をかしげ頭の上に「？」を浮べている。

『しよっぱいじゃろー？それでは、ほい。』

マールがぼすんとウサミニ頭を叩く。

「…！？」

『どっじゃ、味がしなくなったじゃろ?』

「何を…したんだ…」

『拷問じゃ。まずは味覚を壊した。さ、ら、に、ほい。』

またぼすんとウサミミ頭を叩く。

「今度は何を!?!」

『何、嗅覚を壊しただけじゃ。』

…何かさらりと恐ろしい事を言っているんだが。味覚と、嗅覚を壊した?

「おい、それは本当か」

『黙っておれ』

メリアが口を挟もうとしたのを即座に切って捨てる。

「う、あ…本当に、匂わない…?…しよっぱくも無い…?」

『くくく、さあ五感を2つ壊された気分はどうじゃ？喋りたくなってきたろ？』

「……」

見て取れる程に困惑している。確かに拷問だ…だが、なんて方法だ。

『次は何か良いかの？視覚か？触覚か？それともその大きな耳の聴覚か？』

「……」

困惑し、答えられないウサミミ特課兵

『では、触覚じゃ。』

ぽふ。と叩く。

その直後に確認するようにもがき、驚愕するウサミミ特課兵。

マールの言った通りならば、今彼は縛られた縄が触れている感覚も、椅子に触れている感覚も無くなっているはずだ。

『さて、困ったのう、これ以上やるとおんしは返事が出来にくくな

っってしまう。のう、そろそろ喋る気にはならんのかや？」

「…何を、言っているのか分かりません。」

『ふ、ふ、ふ、ふ、強情じやのう。よし、ではその強情さに免じて長引かせる為に治癒魔法をかけさせようぞ。オサ？やっつけておくれ。』

「お、おお…分かった…」

話を振られてオサが目を白黒させながら返事をする。

「 < 治癒回生 > 」

詠唱が行われ、魔法が発動する。

手が淡く光り、癒しの力がウサミミ特課兵の傷を治す…のだが何か様子がおかしい。

「おい…、どういことだ。こいつの体は治す所がねえぞ…」

オサが焦りを含んだ声を出す。

『くぶ。それは大変じゃ。メリア。おんしも治してやっつけてくれ。』

「あ、ああ……」

慌ててメリアも治癒魔法を行使する。だが、こちらも顔色が優れない。

「本当だ、治せる所が、無い……」

「そんな！？私の五感は無いままなんですよ！？」

『くはははははは、どうじゃ、治せない障害をおった気分は！さあ後2つじゃ！喋る気になったか？』

「し、しらない、しらないんだ、分からないんだ、いや、違う！待て！分かった！頼む！やめろ！やめてくれ！！」

『い、や、じゃ。』

「やめろおおおおおおおおおおおおおおおお」

必死に暴れるが椅子に縛られ身動きの取れないウサミミ特課兵に、
マールがゆっ……くりと近づき、ぽふり。と頭を叩く。

「……………」

さらに激しく暴れる。だが、やはり動けはしない。

そして段々と暴れるのが収まると共に

恐怖していたその顔が、困惑に染まる。どうなった？

「な、なんだ？目も、耳も大丈夫だぞ…？」

『くふ。五感は可愛そうじゃて、今度は足を壊してやったぞい。』

「!?!」

ウサミミ特課兵が慌てて暴れる。だが、明らかに下半身がピクリとも反応していない。

『さて、次は腕じゃ。その次に股間を不能にしよう。それから目をやって、喉をやって、最後が耳じゃ。くくく、何も感じず、何も表現出来ぬ、ただの生きた肉塊になるがいいぞ。』

「やめてくれ！頼む！やめてくれ！話す！！話すから！！」

たまらず、ウサミミ特課兵が降参した…？

『なんじゃ、話してしまうのか…これから本番じゃったのに。』

つまらんのう、ユート。質問は任せるぞい。黙ったり、嘘じゃ、と思っただら続きじゃ。』

そう言っただらマイルがふよふよと俺の頭にもどる。

「確かに、怪我はさせて居ないが…見事なまでの悪魔、いや魔族っぶりだな…」

「治せねえとか…どうすんだよ…」

「……………」

…皆微妙な顔をしている。非道極まりなく感じたのだろう。

だが、一般的な魔族を知る俺の常識としてはマイルの尋問は優しい類だ。

この状態も、恐らく俺とソフィーの髪の時と一緒にマイルには治せるのではないかと思う。

皆に気づかれないよう、ほんの少しだけ、くすりとする。

やっぱりマイルは魔族なのにどこか魔族らしくない。

ともあれ、彼が元のように戻れるかどうかは彼次第だろう。

そう思って質問を開始する事にした。

7・3 < 尋問2 >

マールによる拷問が一旦終わり、質問を開始する。

「あなたは捜査局の特課兵ですか？」

「…そうだ」

「誰を尾行けていたんですか？」

「ユート」アオスズ。あんただ。」

「何故、尾行けていたのですか？」

「命令だ、証言は一致したが、素性不明であまりにも怪しいので情報を得る、とテトラ特隊長に命令された。」

「何故、あなただけが尾行を？他の人はどうしていたのですか？」

「< 狂乱の火炎使い >に懐かれ、長寿族と共に居るから素行に問題は無いだろう、ということ尾行する理由が乏しかった。だから気づかれないであろう距離で声を拾える俺にお鉢が回ってきたんだ…
だけど…なんで、こんな事に…」

『 自業自得じゃ。ま、退役して障害手当でも貰うんじゃない。』

あるか知らんがな。と唾棄するような口調で続ける。

「マール。今は黙ってて。」

『ふん。了解、じゃ。』

「…俺達の会話から、何か、掴めましたか？」

「見たことも聞いたことも無い途方も無い金属を求めていた。最近北の森で討伐を行った。金銭面には疎い。だがお金には困っていないようだった…そして憑いているのは妖精でなく、悪魔だった…このぐらいだ」

「概ね、承知しました。」

「皆は聞いておく事は？」

「ソフィーの行方について、捜査局はどこまで掴んでいる」

まずはメリアが確認する。その件は確かに聞いて損はないだろう。

「貴女と変わらないと思います。ギルドからの情報で生存と無事が確認されたが、所在は不明。と言った所です。」

「そうか…分かった。」

「俺からは特にねえな。」

「…彼はもう治らないのですか？」

ここまでずっと沈黙を保っていたソフィーが口を開く。

素性がばれかねない、と一切話さない事になっていたのに。

『さあ。こやつ次第、と言っておこうか。』

「…お願いです。治してあげてください。彼は特課兵としての任務に従っただけです。この国の為に、働いたのです。決して、敵ではありません。」

『…』

「私からの質問です。貴方は、ユートさんの敵ですか？」

「貴女は…？」

「答えてください。ユートの、私の夫の敵なのですか？」

「貴女は…いや、貴女様は…………はい、いえ、誓って敵ではありません。私は、我々は、王の目であり耳であり手足です。その誓いに嘘偽りや余念を挟む余地などございません。」

「結構です。それではもう一つ、誓ってください。私の事をまだ報告しない事。この街で見つかる訳には行きません。近いうちに必ず戻りますので。」

「承知しました。決して漏らしません。この命に代えても。」

『ふん。あっさり吐いたがの』

「マール。水を差してやるなよ。それに喋ったら呪いでもかかるよ
うにすればいいさ。」

『そうじゃの。』

「そもそも大した任務でも無かったようだしなあ。」

「マール、お願いできますか？彼は味方です。ですから、許してあげてください。」

『…』

「治せるんだろ？やってあげてよ。」

『貸しに…いや、おんしには鞆の借りがあったの。…仕方ないのう』

「ありがとうございます。」

『ふん』

渋々、と言った感じではあったがマールが俺の頭を離れ、ウサミミ
特課兵の元へと向かった。

8 - 1 < 罪と戒め >

「なあ、お前さ、なんであんなに怒ってたんだ？」

ウサミミ特課兵を開放し、結局食堂ではなく部屋で昼食を摂ることにして、

皆で部屋の机を囲んで料理に舌鼓を打っていたのだ、その最中にオサが唐突にマールに質問した。

確かに、気にはなっていた。だが聞くのがどうも躊躇われた。

こういう時ズバつと言えるオサはすごいと思う。

『ふん。事情聴取に妾が呼ばれなんだから、その上妖精妖精妖精と、いい加減ナメられつぱなしでは魔族の沽券に関わる』

「そんな理由だったのかよ…」

「そこまで怒ることだったのですか？」

「私はもうわきまえたがな…」

『あたりまえじゃ。おんしらは似ているから、という理由で蟲呼ばわりされて気分が良いか？種族を間違える、というのはそういうことじゃ。』

それにあの者は完全にナメておった。別に話しても問題無い任務の

癖に、話しかけて居るのが妾と気づいた途端に驕り、とぼけおった。じゃから思い知らせてやったまですよ。

大方妖精は人を害さない。とかそんな感じの都合の言い常識があったんじゃろう？嘘を吐かぬと言うのと同じでの。』

「分からないでもないけど…でもほらこの世界には魔族が居なくて今の見た目は妖精そっくりらしいし？」

『それでも、じゃ。せめて近場から認識を改めさせるのじゃ。』

そこまで言って、コップを両手で持って一気に水を煽り、どん。と置いて一息、さらに言葉を続ける。

『よいか、妾が本気を出せばこんな小国の民ぐらい一晩で全員殺しつくしてくれようぞ。そんな真似が妖精にできると？』

「…できるのか？」

「冗談、ですよね？」

「…」

メリアが疑問を挟み、ソフィーは信じられないと言った態度、そしてオサは深刻な顔で黙り込んだ。

メリアとソフィーの反応は分かるが、オサの反応が意外だった。長寿族として何か否定できない要素を知っているのかもしれない。

それは兎も角、だ。

「マール。出来るんだろっけどさ、本当にはやらないでくれよ…そうなったら俺はお前を消すしか無くなっちゃっ。」

『やりはせぬよ。だが知っておけ、と言いたいのじゃ。おんしだつてこの街ぐらい一瞬で痕跡一つ残さず消せるじゃろっが』

「本当なのか？」

「ユートさん？」

「お前もなのかよ…」

皆の視線が俺に集まる。

「マール、やめてくれ」

『だが、嘘ではあるまい。こんな魔法に対して何の対策もとられておらぬ街、おんしの炎なら簡単じゃろっ。』

「炎？ユートさんの得意魔法は水…では？」

『そうじゃ、水じゃ。じゃがこやつ魔法は水を燃やす。』

「水を、燃やす…？油か何かか？」

『ただの水じゃ』

「意味がわからないのだが…水は燃えないだろう。」

『おんしらに想像がつくとは思わんがな。水は燃えるのじゃ。3万度程度でな』

「さん…」

「想像もつかねえ…」

「どうやってそんなそんな温度が…」

『温度は結果じゃ。水が燃えたら3万度の熱を発するだけじゃ。そしてその高温の中ではおよそ全ての物質が気体を超えてプラズマと化す。つまり消失も同然じゃ。生物も、鉱物も、建造物も、大地も、チリ一つさえ存在を許さぬ、実に惚れ惚れするほど非道の魔法よ。それらを駆使してこやつは魔族を殺しつくした。老若男女、戦闘員、非戦闘員一切問わずな。』

「マール、頼むから…もう止めてくれ。」

『いい加減過去を認めるんじゃない。おんしはそれだけの事をやった。そしてそれはもうどうでもいい事じゃ。これから見据えるならば戒めに過ぎん。』

マールが厳しく語る。

マールだって魔族だ。人を滅ぼした魔王に俺が思ったのと同じく、魔族をほぼ滅ぼしつくした俺に何か思うことは有るのだろうか。

「わかって、いるぞ…」

『ならば、よい』

後は、誰も語らなかった。

そうさ、俺は勇者だったが、同時に魔王だった。今更否定する気はない。

願わくば、これからの生活でその力を行使する機会がない事を祈るだけだ。

8 - 1 < 罪と戒め > (後書き)

ちよつとぶりなのにあたうんちくシリーズ。

マールはああ言いましたが、燃焼・酸化反応という意味では水は燃えません。

確かにプラズマ化まで行くと分子結合が千切れ、高温による再反応が起こりますが、そもそも分子、原子、電子レベルで暴走し超高温になっているのが熱プラズマ。

そこまで行くと水が、というより水素と酸素が反応して燃えてるということになりますので。

前回は書きましたがここでのうんちくはざっくりとした検索から得られた知識での説明なので不足が多いです。鵜呑みにはしないでください。

8・2＜覚悟はあるか＞

「先ほどのお話は、私にも言っていたのですよね。マール。」

皆が押し黙って、食事を終えた頃になってやっと私は口を開く。

先ほどの言葉、ユートさんを責める為ではなく、

むしろ彼とマールを受け入れる私に確認していたように感じていました。

『察しがいいの。その通り、おんしらに聞かせたくもあつた。妾らはそういう存在じゃ。そしてそれを知っても尚、妾らと関わる覚悟は、あるかや?』

覚悟、そんなものは…と思う。でも軽々しく答えて良い問題でもない。

どう、答えましょう…?と思考が上手く纏まらないで言葉に出来ずにいると、

「フ、フ、見くびってもらっては困るぞ魔族よ。既に昨日誓約した通りだ。私は涅槃までだろうとユートの元を離れる気はない。」

代わりに答えたのはお姉様。それはいやに自信満々で…その言い様に、聞き逃せない含みを感じました。

マールへの回答は後回しにし、お姉様に問いただしたくなりました。何か、いやな予感がしたので。

「…お姉様？それは、一体？」

「ん？ああ、ソフィーは知らなかったのか。なに、私はユートに侍るため後宮に入る事にした。それだけだ。」

後宮…？

それは確かお母様が死んで、私の魔力が歴代巫女の2/3程度しかない事を知った貴族たちが

10年前お爺様に無理矢理受け入れさせた法案と施設…

思い出す。

後宮制度、その名目は「王家を血を絶やさぬ為に諸子の子を」ということでした。

ですが、大半の貴族の本音は「王家とのコネと権力」

しかし王家の血が混ざれば3代娘しか生まれなくなってしまいます。

それは必ず婿養子を迎える事になり、家督を譲らねば成らないとい

うこと。

それでも、魅力的な事。

特に家督に関わらない分家の娘や兄弟を持つ娘が次々と送り込まれました。

中には既に結婚し、夫子を持つ女を無理矢理引き裂き送り込んだ家もあつたそうです。

王国最強と謳われるお姉様で分かるように、

王家の血族の娘は一般人とは一線を隔する魔力量を有するので、

ともすればたった一人でもそれなりの規模の軍隊並の力を発揮できる場合もありました。

貴族たちはその力を欲しがりました。

さらにここ数代、王は王妃以外を求めようとしない男ばかりで、少子化も深刻でした。

その結果、既に存在していた王家の血族の者たちの血も薄れ切つてしまい、

ごく少数の妹姫の子孫以外の王家の血族の者が居なくなっていたのです。

そんな折の両親の他界、私の魔力量の低さ。そこを突かれた国王派の貴族も賛成し、王国議会で強引に可決されてしまった事。

ですが、それは遅すぎました。後宮が建設された年すでにお爺様は65歳。

まだ何とかなる、と人身御供に出された娘たちの犠牲は空しく、

結局子は一人も成されず後宮は5年程で自然と閉鎖されてしまって…

その、後宮にお姉様が入る？

「どうして…？」

「愚問、だなソフィー。私の好みは知っているだろう？」

「お姉様の好みの男性…年下で自分より強い…」

…ユートさんはまさに的のど真ん中。

「その通り。故に私がユート以外に侍るなど考えられぬという事だ。」

「ですが！ユートさんは<召喚されし者>で、私の…！」

「それも承知している。だが、後宮はあるのだ。問題はなかるう？」

「でも…」

反論、しきれない。お姉様は頑固者だ。

筋が通らないと、きちんとした理由でないと説き伏せる事は出来ない。

「案ずるな。私もお前とユートの為に精一杯尽くそう。後宮は私に任せろ。貴族派の連中のいいようにはさせん。」

…正直、頼もしい。すっかり忘れていたとは言え、そういうものは既にあつたのだ。

私だけでは貴族派の送り込んだ娘達に翻弄されていたかもしれない。その点でも、お姉様がユートさんに侍るのは良い事なのかもしれない。

納得は、行く。行くのですが…何かすつきりはしません。

「わかり…ました…」

「今はまだ、納得いかないだろう。それも分かる。だが私はもう決めた、譲る気は無い。」

「…私のため、ですか？それとも本気で、ユートさんを？」

「正直に言つと前者はついでだ。私は本気でユートに惚れた。この想いを邪魔するなら、ソフィー、お前とでも戦う気概がある。」

そうか、お姉様は本気なのですね。

「認めるしか、ありませんね…まだ、納得しきれていませんが」

「ああ、すまない。ありがとう。」

ふー、と一息をつく。

「いえ、…そうですね。マール、覚悟、という話でしたね。」

『うむ。』

「覚悟、なんてものはく召喚魔術の前に決めていましたよ？今更、戻る気は有りません。何処までも、この想いのままに突き進むまでです。」

『結構。フフ…これからもこやつをよろしくの。二人とも』

「はい」「ああ」

「…」

「覚悟、か…」

『さて、話も纏まった事じゃしこれからどうするか?』

話はここでお仕舞い。と言わんばかりにマールが話題を変える。

ですが、私は最後にオサが深刻そうに小さく呟いたことが気になっていました。

8・2<覚悟はあるか>(後書き)

8/17誤字修正しました。

9 - 1 <別れ>

「そんじゃまあ、ここで別れだな。」

「すまないな、私が送っても良かったのだが…」

「何、気にすんな。どの道ワイバーンに変わりはねえ。お前らも急ぎたいんだろ？」

ウサミミ特課兵を尋問後、特に呼び出される事も無く2日間の逗留期間を終え、

ついにオサ達が村に戻る時がやってきていた。

メリアは自分とセバスさんのワイバーンで送る気満々だったのだが、セバスさんが「我々もアーリントンに急ぎ帰還すべきです。」と止めていた。

それでは私の面目が…と少し揉めたのだが、既にセバスさんは軍の詰め所で配備されていたワイバーン隊を一時接收して運んでもらうよう交渉済み。

メリアもあれこれと言ったものの、急いだほうが良いのも事実だったので結局セバスさんの案を呑んだ。

俺は軍の割にこんな小間使いを任せられるなんて、フットワークが軽いなあ。

と思わないことも無かったが、都合が良いので口を挟まないことにした。

「色々楽しかったぜ。次に会う時はもうタメ口きけねーな。王様に王妃様よ。」

「そんなことは御座いませぬ。長寿族の貴女なら誰も苦言は言いませんよ。なんでしたら私が言わせませぬ。」

「お世話になったしね。色々片付いたらきつと会いに行くよ。」

「オレの方こそ色々世話になっちまったがな。だが、まあ期待して待つとくよ。お土産忘れんなよ?」

「ははは、流石オサだ。」

「ええ、何か面白い物を用意しますよ。」

期待してるぜー。と笑う。そうだ、別れはこのぐらいの軽い感じがいい。

「さてと、んじゃ後は…マール、こないだ言った質問いいかな?」

『ほづ、じいじでいいのかわ?』

そう思った矢先に、オサの表情が硬くなる。

質問。初めてメリアと出会ったギルド館での会話を思い出す。あの時「後で良い」と言っていた事か。

「俺たちは席を外そうか？」

「いや、かまわねえさ。で、だ。オレの探し物はどうすれば手に入る？」

『その質問に答える前に聞かせて貰う事があると言ったの。』

「ああ、聞いてくれ。答えられる限り答えるさ」

『では問おう。おんしの両親は今何処にいるのじゃ？』

オサの両親？何故そんな事をマールが聞く必要が？

「両親、か…おふくろは生きてはいるだろうな。オレが9歳の時に人間に追われてな…そんな時にオヤジが死んで、出て行ったよ。それきりだ。」

「そんな…」

…ソフィーが呟き、メリアが息を呑む。

人間に追われて…明らかに穏やかではない。

『なるほど、の。そういう事じゃったか。』

「オサの両親に何かあるのか？」

『すまんが事はこやつの家族の内情、今のおんしには聞くべき資格が無い。話せぬ。』

…それもそうか。

「いや、すまない、忘れてくれ。オサもごめん。無神経だった。」

「気にすんな、もう300年も前の事だ。当時の人間は皆死んじまつてるし、オレも親離れしてるしで問題ないからな。」

『で、じゃ。先ほどの質問に答えよう。』

「ああ」

『おんしの探し物を得るには今の方法は無駄じゃ。失せ物自体を見つけるか、同等の物を代用にせぬ事には手に入らぬ。』

「そう…か…」

『難しいじゃろうな。』

「いや、分かった。ありがとうよ。闇雲に探すよりはよっぽど良いさ。」

『精々、がんばるんじゃない』

「ああ」

この話はここでお終い。と言う事らしい。

あまり内容が理解できない話だったが、俺が理解するべき事でもないだろう。

「それじゃ、もう一つだ。おい、ユート。お前は何で何も聞かないんだ？」

もう一つ、と言って今度は俺に話が振られる。だが…

「両親の事か？それは俺が聞いて良い話じゃないんだろ？」

「違う。ギルドでの事だ。」

「ギルドでの…？」

「ああ、オレはあの時聞いてたんだ。受付の姉ちゃんとお前が水晶眼蟲の瞳の値段について話してたのを、な。」

聞いていたのか…なら助けなくても良かったのに。

と「会費千Gの失敗」の件を思い浮かべる。

「聞いた筈だ。アレの売値が幾らになるか。なのに、なんでオレを問い詰めない？正直、あの時からいつお前がオレを糾弾するのか気が気でなかった。なのに今の今になってもお前は何も言わない。分かってる筈だ。アレはそう易々と渡して良い額のモノじゃない…なあ、聞いたんだろ？なのに、なんでお前はオレを責めないんだ？お前が無知なのを良いことに騙し取ったようなものなんだぞ？」

…自分でせがんで受け取っておいて、気にしていたのか。

黙っていれば良かったのに。悪人にはなれないようだ。くすり、と笑いが零れる。

なら、素直に答えよう。

「そうだな…俺には必要ないものだったから、…それにオサは壊された村の復興にお金が必要なんだろ？」

「…本当に、それだけで、なのか？」

「他意は、ないよ。素材だってまだ他にも色々沢山あるし。短い間だったけどオサとは楽しく旅をさせてもらった。その報酬。それでいいかな？」

『ふふふ、目の飛び出る高額報酬じゃ。』

「…ははは、マジかよ。お前はどこまでお人よしなんだよ」

「良いじゃないか。素直に受け取ってくれよ。恩に着ることも無い。」

「本心、なんだな…そうか、いや、うん。そうか…」

『「やつ」の甘ちゃんぶりは妾が保障しよう。本当に他意はないぞ?』

「ははは、そうか、そうか…うん。ありがとう。受け取っておく。無駄にはしない。」

「ああ。」

オサの目じりに光る物が見えた。

…ちょっと良い格好しすぎたかもしれない。

すこし湿っぽくなってしまったが、今度こそ、話はお終い。

そして名残惜しいが、お別れの時が訪れた。

「さて、聞きたいことも聞けたし…行くか。じゃあ、またな!」

「御武運を」

「お達者で」

「またな」

『また、の』

軽く挨拶を交わしたオサは踵を返し、パタパタとヤスさんとシズクさんを待たせている2頭のワイバーンの元へと向かう。

ひよひよいつと軽い足取りでワイバーンに乗った所で、そのままワイバーンが浮上を始める。

ワイバーンの腹で姿は見えないが、手を振り見送った。

「それでは私達も行こうか。」

「そうだね」

「はい」

俺たちもセバスさんの待つワイバーンの方へと向かう。

目指すはアーリントン。ここからワイバーンで3日間の空の旅が始まる。

9 - 1 <別れ> (後書き)

これで第2章は完結となります。ここまでお読み下さりありがとうございます。ございました。

次回からは第三章「クーデター編」になります。

名前は出ていませんでしたが時折話題に出ていた人物や、メリアの一家などかなりの人数が追加登場し、物語は一つの区切りを迎えます。

増えすぎた人達とその掘り下げや掛け合いで構成がー！と苦しむ筆者を尻目に物語は進みます！

0・0<胎動>

王都にある、とある大家の別邸。

その邸宅の最も奥まった所にある、寝室。

厚手の遮光幕が引かれた薄暗い室内には薬香が焚かれ、慣れないものならばむせ返る程の臭気が充満している。

そこに居る人物は3人。

寝台に横たわり眠る女性。

その女性を診察している医師。

そしてその背後で椅子に座り、見守る男。

「…どうなのですか？」

医師の動きが止まった所で男が口を開いた。

「ここまで進行してしまっていては…残念ながら、手の施しようがありません…」

「そう、ですか…」

「治癒魔法で進行を遅らせて来たようですが…」

「はい、もう4年になります」

「初期治療が施されなかったのですね…」

「…その通りです」

沈痛な会話。だがそれも仕方の無い事。

寝台に横たわり眠る女性は、傍目に見ても深刻なまでにやせ細り、顔色も悪い。

ともすれば死んでいるかのように見える。

…それでも、彼女はまだ死んでは居ない。

「……後、どのぐらい持ちますか？」

「このまま治癒魔法を維持しても1年…いえ、半年と持たないと思われます。」

「そう、ですか…」

「残念ですが…」

「いえ、ありがとございました。遠いところを遙々御足労いただきましたまして…」

男が立ち上がり、医師に礼を述べる。

病は、治癒魔法では治らない。

そもそもこの世界の常識として、病とは

「何かしらの原因、元凶となるものが体内にあってそれが体を蝕み続ける」という事なのだが、

それらをなんとか出来ない限り、基本的に蝕まれた体を治癒魔法で癒し続ける程度しか術が無い。

勿論それで治るものも多く、民間にも常識的な治療法なのだが、

当然ながら、モノによってはそれでは完治しないものがある。

運悪くそれを患った場合、癒しても、癒しても、徐々に病による傷は広がり、いずれ限界を迎える。

だからその原因をつきとめ、取り払う為に男は高名な医師を何人も招いた。

病気が如何なるものかは、最初の数名であっさりと判明した。だが、遅すぎた。

進行した病状は、彼らでは既に治療する事ができなくなっていた。そして今日診てくれている医師は、隣国から呼び寄せた医師。だが…今回も駄目だった。

「御代は家令に持たせてあります。後ほどお受け取り下さい。」

「お力になれず申し訳ない…」

医師が幾つかの薬を男に手渡し、部屋から出て行く。

受け取った薬を見つめる。

説明は受けた。気休め程度にしかならないだろう。

寝台に眠る女性に近づく。

その寝顔は痛々しい程に病的だが、安らかでもある。

頬に触れる。

暖かい。

彼女がこうなったのは男のせいでもある。

直接の原因だった相手は、報いを受けさせた。

だが、男の考える報いを受けるべき相手は他にも居る。

だから男は振り向きもせず医師と入れ替わりに入ってきたであろう男に語りかける。

「セバス、居るんだろう。例の件の進捗はどうなっている？」

「はい、魔道具、特殊兵共々予定の数に達しています。調整も済み、一次配備は終えました。それから、何度も申しておりますが私の事は『レキ』とお呼びください。」

若い男の声が返ってくる。憤りは無いが、はつきりとした訂正付きで。

また、間違えてしまったようだ。

この男との付き合いももう5年になるのだが、

自分つきの執事がセバスチャン以外で有った事が無いのでついその名を使ってしまう。

この男もその称号が気に入らないという訳ではないのだが、その名で呼ばれるのは嫌う。

…自らの名に誇りと拘りのある種族なのだろう。

この男意外の同種族の人物に会った事が無いので、

その推測が正しいのかは分からないが、それも致し方ない。

彼は、現在の全人類種族で一番の希少種なのだから。

「…すまない、そうだったな。そうか、では後は私が腰を上げるだけ、か」

気を取り直し、返事をする。

「はい、お嬢様も既に出立の準備を終えています。」

「フィオも、か…」

4年間、彼女がこうなった事を知ってから秘密裏に準備を進めていた。

踏み越えてはならない一線など、とつくに踏み越えた。

そして、彼女の命の火が消える前に、全ての準備は整った。

偶然なのか何かは知らないが、王女が失踪した事で全てが、整ってしまっていた。

…では、始めるか

「五大家会談の結果次第で強行する。私の合図で決行だ。指揮は頼むぞ、レキ」

「承りました。」

結果次第、と言いつつ会議の結果など分かっていた。

私は道理の通らぬ事を提案に行くのだ。

通らない道理を通す為にする事など決まっている。

「行って来るよ、イリア。」

そつと頬を撫でていた手を離し、寝台から離れ、踵を返して歩き始める。

「旦那様、マントを。」

レキがそう言い、背後から私にマントをかける。

さっと止め具で衣服に止め、翻す。

紺地のそれに金色の糸で大きく刺繍された家紋が目を引き。

遠目にも分かる、竜の翼を模した紋章。

王下五大家の一角である証の金竜紋。その一つである金色の竜翼が男の背で翻っていた。

1・0<五大家会談>

「何故ですか、アーリントン卿！」

王城の会議室に憤りを隠さない声が響く。

声を荒げたのは30台前半と、ここにいる面子としては最も若い、くすんだ青髪に知的さを伺わせる眼鏡をかけた男。

バルナム家当主　グレイ＝ミラ＝バルナム

「理由は述べたはずだ。王女はまだ生きているという確かな情報がある、とな。」

静かに、だがはっきりと答えたのは、白髪交じりの赤髪を持った見た目には50台そこそこだろう年齢だと言うのに、逞しい体をした初老の男。

アーリントン家当主　デュラール＝ミラ＝アーリントン

「ギルドから寄せられた妖精のネットワーク、というあの話ですね？しかし、私が調べた限りの妖精では『そのような話は知らない。』と言います。」

「それは聞いた妖精が不味かったのではなからうか？妖精のネットワークは同種に限られると言うのではないか。今回はく褐色の肌に金毛の半獣の姿の妖精からの情報と聞く。…確かに私の方でもまだそう言った妖精は確認できていないが、フェルブルム卿は確認出来たと言うのではないか。それに妖精は嘘は言わぬ筈だ。」

「うむ。我輩の兵が昨日同種の妖精を連れた男に出会い、聴取した。報告書もある。」

アーリントン卿に答えたのは、この会談の面子で最も異彩を放つ男。猫科を思わせる顔立ちと、肉球まである手のひら。

全身を白と黒の縞模様の毛皮で覆って筋骨隆々、威風堂々とした巨漢の獣人。

フェルブルム家当主 レイモンド＝ミラ＝フェルブルム

「ですがもう既に20日も行方を晦ませたままなのですよ！？無責任に過ぎます！政務も法務も滞っているのです！そうですよね！？キヤメル卿」

「あ、ああ…それにルーシア殿ではそろそろ誤魔化しきれそうに無い。一部貴族連中には既にばれておるし民の噂にもなり始めておる。」

話を振られ、まごつきながらも答えたのは恰幅の良い初老の男。

キャメル家当主　ガブリエル「ミラ」キャメル

「だから今全力を挙げて捜索をして居るのではないか。それに捜索にはメリアも加わっている。故にまだその決断を下すのは早い、と言っておるのだ。」

「嬢ちゃんが加わっているのは特に関係ないのではないか？親馬鹿か？」

「茶化すな、フェルブルム卿」

「ふうむ、キャメル卿は何故かソフィーリア様の行動を知って動いていたようだしのう…それにアルモス卿の事もある。お隠れなされるのもいささかながら致し方も無かるうて。」

口を挟んだのは最後の一人、ここに居る面子の中では最年長であろう

老人、と言って良い年齢の禿頭の男。

フォワール家当主　ジェームス「ミラ」フォワール

部屋にある20名は座れるだろう円卓に座るのは僅かにこの5名のみ。

さらには護衛の者すら居ない。

それだけ機密性が高く、それだけお互いを信頼している。

これはそういう場。

王下五大家会談。

定期的に行われていたそれは、

本来重要役職に就いている5大家の当主達と王・王妃による会談で、ある程度の事を決めて置き、その後王国議会を通し、国の方針を決める。というもの。

…勿論いざ決を、という所で議員である各所領の代表者が反対する事はある。

だが五大家の権限は強い。この会談で決まった事が国の方針になるのはほぼ、いや実質確実なのだ。

そして今回も粗方の諸問題を検討し、

今回の主題である「王女失踪とそれに伴う国政の問題をどうするか？」

という議題を議論している最中であった。

「うむ。アルモス卿の件は実に問題だ。捜査局の集めた資料には先王暗殺に王女誘拐計画まで企てておった、という報告がある。キヤメル卿、本当に関わってはおらんのだな？」

アーリントン卿が、念を押すように確認する。

「誓って関わっておらぬ。それはメリアルーナ殿も認めてくれた。ワシはただアルモス卿に＜召喚魔術＞決行の話をかされて兵を派遣したまでだ。」

「ふん、わざわざ完全包囲で、な。」

キヤメル卿が答え、フェルブルム卿が吐き捨てるように補足する。

「それは念を押したに過ぎぬ！過激派が居るやもと聞いてはもしもの時拉致されてしまわぬよう包囲しておく必要があった！」

「だが、そんな中王女は消えた。」

「そうですね、そして＜召喚魔術＞の成否は限りなく失敗だと思われると言っただけではありませんか。」

「然り」

「ですから、限界だと申しているのです。現状の王家の犠牲に頼っ

た体制ではこの国が維持できない、と。」

「それで、『王家の血筋に頼る事の無い<時空の扉>の開放』をす
ると?」

「試案はあります!理論上は成功するのです!バルナムの技術にか
けて成功させて見せます!」

「確かに、今は亡き老王も命じた事じゃが…わざわざ魔力量に優れ
る王家を抜きにする必要はなかるう?」

「もしも、の為です。そもそも王女が帰還されるのかもわかりませ
ん。」

「だから、王家には政から離れてもらう、と?」

「そうです。もう限界なのです。今代のソフィーリア様は歴代の2
/3程度しか魔力が御座いません。そして召喚に失敗した、となれ
ば別な男を伴侶にするしか有りません。それでは王家が乗っ取られ
てしまいます。さらには血が薄まる事ですます魔力が減り<召喚
魔術>が使えなくなつた王家では、内外に対して抑止力足りえませ
ん!」

「一理はある。」

「まあその通りじゃの。じゃが、早急すぎるんじゃ。まだ行方も分
からず成否も不明なんじゃぞ?流石にそんな状態でそれを決定する
訳にはいかぬ。」

「ですがもう既に20日も経っているのですよ!?」

「…議論が堂々巡りしだしたの。そろそろ、一度決をとるかの？」

ため息を吐き、最年長のフォール卿がそう提案する。

細部は違うが、ほぼ同じ対応が既に何度も繰り返されていた。

普段の会談ではここまで紛糾したりはしないのだ。

やはり王か王妃が居ない状態ではどうも上手く纏まらない。

「異論は無い」

「構わない」

「そうだな」

「…」

「バルナム卿？」

「これでは、通らないのが分かりきっているではないか。」

「何故、そう思っんじゃ？」

「貴方達は私の話を聞いてくれない！若造が言うことだ、と言わん

ばかりに頭ごなしに否定するだけではないか！」

「そうは言っておらぬ。時期尚早だと言っているだけだ。」

「うむ。我輩は正直どちらでも良い。どう決まろうと全力で混乱を避けるために尽くすのみだ。」

「ワシは限界だ、と考える。これ以上の政務の滞りは看過しかねる。せめて一時的にでも権限の移譲の許可を頂きたい。」

「十分考慮に値する提案じゃの。」

「それには賛成できる。」

「必要だろうな。」

「まるで話しにならない！！私の話だけ聞く気が無いのではありませんか！！！」

再びバルナム卿が紛糾する。

「だからそうではない、と」

「少し落ち着いて考えるんじゃないよ…皆きちんと聞いておる。だが貴公の案は性急過ぎるのじゃよ。」

「今、決めないと間に合いません！既に情報は国外に漏れていてお

かしくないのですよ!？」

「だから一時的にだな…」

「何故分かってくれないんだ!資料もお渡しした筈だ。『<時空の扉>の開放』は可能だと。」

「それは貴公が独自に進めてもよいのではないだろうか?保険は有った方がよいだろう。」

「…まあ、それに関してはワシの方でも予算を何とか捻出できる様動くのもやぶさかではない。」

「では!」

「じゃが、王家をわざわざ政務や法務より外す必要は見当たらぬの」

「…確かに。」

「然り。」

「その件は一時的に許可しようではないか。王女がお戻りになられたら返せばよかるう。」

「それがいい」

「異存は無い」

「助かる」

「…分かりました。話し合っても無駄のようですね。否決するのは見えています。私の提案は取り下げさせて頂くので、残りの採決と決行をお願いします。」

「では、まずは王家の政務と法務を一時移すと言つ話じゃ、政務はワシが一時引き受けよう。元々ワシの補佐する領分じゃしよいじゃろ。」

「…うん？ああ、いや、構わない。」

「異存は無い」

「お願いしよう」

「賛成します」

「ついで法務じゃが…」

「我輩は避けるべきだな。警務と法務が重なってはまずかるう。」

「そうだな。ならば陸、海軍を受け持つ私と空軍を受け持つバルナム卿もまずかるう。ここはキャメル卿、貴公に頼めぬか？」

「承るう」

「爺も賛成じゃ」

「賛成します」

「異存は無い」

「他に案件はあるかの？」

「私には無い」

「ワシも無い」

「我輩も無い」

「爺もこれといって無いぞい」

「……」

「バルナム卿？」

「時間です」

「何の……」

そうアーリントン卿が問いたださそうとしたのと同時に、

ドンツと会議室の扉が外側から粉碎され鎧を着た兵士がなだれ込んだ。

「これは!?!」

「なんじゃ？」

「何事か!？」

「ひいっ」

「打ち合わせ通りですね、セバス。」

驚き身構える4人と対照的に、バルナム卿が一人だけ冷静になだれ込んだ兵士達の中央に立つ糸目の執事に話しかける。

「当然でございます。それから旦那様？前々から言っておりますが、私の事はレキ、とおよび下さい。」

「…そうでしたね、レキ。」

「バルナム卿！これは何だ、どついう事だ!？」

「貴方方の身柄を確保させて頂きます。」

「何を、言っている?」

「バ…バルナム卿?」

「よもや、クーデターとでも?」

「我輩をたかだか歩兵程度で抑えられるとも思ったのか？」

「ただの歩兵ではありません。新しい特殊兵です。」

そう言うバルナム卿が両手に着けた腕輪に手をかざすと、腕輪が淡い光を放つ。

「魔道具か？」

「貴様、それは、まさか」

「フェルブルム卿？何か心当たりでも？」

「？」

「ご紹介しましょう。我がバルナム家の技術の結晶、〈人工人型〉です。」

なだれ込んだ40程の兵の大半が次々とヘルムを取る。そこに頭が無い。

「〈人工人型〉だと？」

「まさかモンスターを？」

「そんなバカな…操っているのか？」

「やはりアルモス卿の使った魔道具の出所は貴公の所だったか…」

「抵抗は無駄です。分かっているでしょう?」

「<人型>としては最も小さいサイズですが、それでもモンスターです。さらに旦那様を殺めたり、昏倒させてしまえば<人工人型>は自由になり、あたり構わず食い荒らします。はい。」

バルナム卿が諭し、レキが補足する。

「くっ」

「チェック、メイトですよ。」

4人とも理解している。室内は兎も角室外は嚴重な警備体制だったこの部屋になだれ込んだと言うこと。

そしてクーデター、と言うことならば同時に王都、王城の各所も制圧している筈。

例え目の前の30体程の<人口人型>を倒せたとしても、どうにもならない。

…そもそも、倒しきれるものではない。

「ここで無為に死ぬ訳にはいかんの…安全は保障してくれるのかいの？」

「保障しましょう。暫く監禁させて頂きますが。」

「ぐぬぬぬぬぬ」

「フェルブルム卿、短気は起こされるな…あの数ではどうにも出来ぬ。」

「分かって…おるさ…」

「では彼らを捕縛してください。それから客室を用意して軟禁するように。ああ、武装解除は不要です。」

「了解致しました。」

そう言ってレキが合図をすると、ヘルムを取らなかつた兵士達が出て手際良く4人を拘束する。

「これから、どうするつもりなんじゃ…」

「知れたことです。ソフィーリア様が帰ってこなければ私の提案通り、王家無しでの国家体制を作ります。帰ってくるなら交渉し、王家には退いて頂きます」

「何故執拗に王家を失墜させたがる…貴公は王家が憎いのか？」

「先ほど散々説明しました。今更答える必要を感じません」

「な、内乱を知られれば諸国がこぞって攻めて来るぞ！どうする気なんだ！」

「フフフ、それこそ愚問、と言う物ですよ。ただの人の軍隊が<人工人型>の軍に適うとでも？」

「そこまで見越しての強行か…」

「貴方方には是非考えを改め賛同してもらいたい物です。私一人では国政はまま成りませんしね」

「………」

「連行しろ」

兵に連れられ4人が部屋を後にする。

頭は抑えた。<人工人型>と言う脅しもある。他の制圧部隊もさしたる抵抗も無く成し遂げられるだろう。

ここまでは全て計画通り。

さあここからだ。この醜く歪んだ王国は私が正しく作り直してやるぞ、イリア。

ばさりと金色の竜翼が刺繍されたマントを翻しバルナム卿も部屋を後にする。

やるべき事は山積みなのだ。

1・0<五大家会談>(後書き)

おっさんが5人もかしこまって喋ると、区別がつかなくなって大変です…

本編では説明の機会がございませんのでここで補足を。

この世界の王国、諸国の政治体系はおおよそ戦国大名の時代にそれに近いです。(将軍家は有りませんが。)

ですので、これまでも貴族、貴族と言っても爵位等の階級的な話は一切出ませんでした。

そして王家の少子化もあいまって、一族衆からなる「一家中」構成から、譜代の家臣である五大家を登用した「家中」による家臣団が国政を担う、という政治体制に移行した…という所が現在のこのベルム王国の政治形態になります。

1-1 <初めての空>

ワイバーン、それは空の足。

飛べる時間は日中に限られるものの、地形を無視出来、

直線距離でも同じ日数で馬の倍程の距離を移動することが出来る。

欠点と言えば、乗れる人数が非武装状態で大人2人程度、というぐ
らい

…らしい。

当初は街道を行き来する馬車か、馬でも買って行こうと思っていた
アーリントンへの道のり。

それがメリア達と合流した事により、このワイバーンで行けること
になったのだ。

勿論説明は、受けていた。

メリアは笑って「大丈夫、気持ち良いんだ。」と言った。

セバスさんは、「あまり揺れませんか、すぐに慣れますから。」と
言った。

マールは楽しそうに『早く行こう』と言った。

俺もワクワクしていた。なんせ初めての空を飛ぶ体験だったから。

…でもソフィーは、乗る前から憔悴していた。

その時は、「ソフィーはワイバーン、苦手なのかな」と特段疑問に感じていなかった。

それもセバスさんの背後に跨り、固定具でセバスさんの体と自分の体を固定し、ワイバーンが浮上して数分だけだった。

ワイバーンの飛行は独特だった。まず翼を広げ、都合よく風を受け風のように上昇する。

どうやらワイバーン自身が魔法を使って上昇に必要な風を起こせるようなのだ。

だがそれも途中まで。ある程度舞い上がった後は一切羽ばたく事無く翼の角度を調整し風を受け、

段々と、みるみると、どんどんと、高度を上げていく。

TVで飛行機からの眺めを映したものや航空写真とかを見たことはあった。

だが実際生身で高高度に來ると、違う。

もし落ちたら…と思うと緊張で胸がキュツとなる。

思わないように、思わないようにと考えるのだがそれこそが畏。
頭から、落ちた時のことが離れない。

自分は高所恐怖症ではない。そう思っていた。

しかしよく考えたら俺は飛行機に乗ったことが無い。

高層ビルに登ったことも無い。

東京タワーにも登ったことが無い。

標高数千mとかそういう高い山にすら、登った覚えが無い。

……ごめんなさい、正直、舐めてました。

怖いです。何処まで昇るんですかワイバーン。今高度何mなの。

また下を見る。

…もうアルモスの街が手のひらに収まりそうなくらいに小さく見える程離れている。

「……………何m上昇したんだ」

「およそ、6〜7000mですね。」

思わず零した疑問にセバスさんが答えてくれた。ありがとうございます。ます。

いやいやいやいや、そういう問題じゃない、

富士山の2倍強（正確な数字を知らないから多分）は高いとか！

「ど、どこまで昇るんですか？」

「そろそろ終わりますよ。」

「そ、そうなんですか…？」

そっごう話していると、どこまで一切羽ばたかなかったワイバーンが、

バサリと翼を羽ばたかせ、そのままやすばめるようにして畳んだ。

ふーっつと体重が軽くなる錯覚を覚える。

降下を、始めたのだ。

だが相対して速度を計るものはない。

風も魔法で空気の膜を張っているようで、少し強い程度にしか感じ

ない。

近くにあるのは隣に並んで飛んでいるメリアとソフィーの乗ったワイバーンのみ。

『なかなか賢いの。搭乗者の意図をきちんと汲み取って必要な分の一度の上昇で済ます事で、魔力を無駄に使わないのじゃなこやつらは。』

「そうなんだ…」

マールが俺の懐から話し掛けて来る。

昨日ワイバーンに乗るに当たって、「魔法である程度はカバーするが、それでも上空は寒い。」

と言う説明を受け、外套を購入し、着込んでいた。

その外套の懐へと上昇し始めてすぐ『落ちたらたまらぬ』といつも頭の特等席から降りたマールが

潜り込み、手と顔を覗かせてこちらに話し掛けて来ている。

ということはいくからは下降し続け…

と、思った傍から再び翼を広げ上昇し始めるワイバーン。何故ー!?

『加速したらそれを利用して上昇するのは常識じゃろっ…』

呆れ声でマールが語る。

そんな常識ないよ！人の心を読むな！！

『ぶっくく…顔に出ておるよ』

「……………私も見たい」

「マール、ずるいです…」

色々いっぱいいっぱいになっている最中、普通なら聞こえるはずの無い恨めしい声が届く。

視線を声を出した人物達の方へ向ける。およそ100mは離れたやや斜め前方。

そこにこちらを見つめる赤と青の髪の二人が見える。

おおお、声もちゃんと聞こえる！　すごいな魔道具！

感心する。

それなりの距離を開け飛んでいるワイバーン上で声が聞こえるのは、
<拡声の首輪>と言う魔道具の効果。

聞かせたい相手を想定し声を発すれば、その相手に声が届く。とい
う便利なシロモノだ。

とは言えその効果が及ぶ距離は2kmそこそこで、遮蔽物が有ると
届かないらしい。

だがその程度の欠点は便利さに比べたらあっさりと無視できる程。

ワイバーンに乗るなら欠かせない魔道具なのだ。

それをマール以外の4人は着けている。

当然ながらマールはサイズの合う物が無かったのだが、

首輪を暫く弄った後、『大体分かった。』と言ってそのまま問題な
く遠話を始めてしまった。

…便利なものだ。

『…感心するのはよいが、声を出さねばあの2人には届かんぞ?』

そうだった。

だが、何を言えと。

怖いー！ とか言うのは男の沽券に関わる。

「ふむ、どつやらユートは言葉も無いらしいな…」

「…わから無いでも有りません」

「どつでしょう？ ここは一つ慣れて頂く為に例の飛行を試されては。」

「おお、新兵を慣らす為のアレか。いいな、アレは楽しい。」

セバスさんの提案にメリアが嬉々として賛成する。

なんだろう、アレとか言っているだけなのに恐ろしく嫌な予感がする！

「お、お姉様、ちよつとま…」

「続け！ セバス！ クルビット！」

言うが早いか、メリアの乗ったワイバーンがその場で後回りに縦回転して背後へと吹っ飛んだ。

「いやあー……あー……」

何故かドップラー効果を効かせながらソフィーの悲鳴が遠ざかってい…

どん、と衝撃を感じると同時に世界が回転した。

セバスさんも同じく縦回転したのだ。訳が分からない！ 落ちる！
？ 死ぬ！！

「ぎゃあああああーーーーー」

『おおっ』

「口を閉じられる事をお勧めします。舌を噛みますよ？」

冷静なセバスさんの声が聞こえる。

この敏腕執事、何を考えている。いきなり何て事をするんだ！？

「バレルロール」

さらにメリアの声が聞こえる。もうどっちが上なんだ状態だが、声のした方を見る。

空をワイバーンが横回転して転がっていた。

「いーーーーーにゃーーーーーあーーーーー」

ソフィーの叫び声が続く。ああそうか、そういつことね。

ハードな飛行をしてそれに慣れれば大丈夫と、とそういつことですね。分かります。

分かりますが…

「無茶だろおおおおーーーーー」

『わははははははーーーーー』

同じように横回転しだしたワイバーンの上で、聞き入れられる事のない抗議の叫び声を上げた。

1 - 2 < 男風呂 >

あれからおよそ1時間、曲芸のような飛行は続いた。

最初こそパニック状態だったものの悔しいがその効果は抜群で、いつの間にか楽しくなっていた。

人って慣れる生き物なんだね…

最も、ソフィーは早々に失神していたのだが。

それを見越してメリアと密着して身体を固定させていたのだろうか？

自分も同じように固定されたので後部に座るならばこれが普通なのか？と思っていたのだが…

ともあれ人それぞれか…ソフィーに合掌する。

荒療治のかいも有って空からの眺めを楽しむ事に成功しおよそ半日。

まだ夕方にもならない時間帯に中継点の村にたどり着いた。

オサの村と比べても小さい村だが、やはりそれなりの宿がある。

今夜はここで泊まる事になったのだが…部屋割りで揉めたり、風呂で揉めたりした。

結局部屋も風呂も男女別で分ける、俺はセバスさんと一緒。と言う事で説き伏せたが、

マール、ソフィー、メリアの顔はどう見ても納得しておらず、何かを企んでいる気がしてならなかった。

そして今、セバスさんと二人で湯船に浸かっている。

すったもんだあつて、女性陣より先に入る事になったので、遠慮して入ってくれないかな？

とも思つたが流石は空気の読める敏腕執事。

お背中をお流ししましょう。などと余計な気を回す事も無く、

風呂の作法やらの説明をしてくれつつ一緒に入ってくれた。

勿論今回は腰タオルの裸同然ではない。二人とも湯浴衣を纏っている。

腰に巻いて縛るだけとは言え、丈は膝上までである。タオルを巻いたのとは隠ぺい力は比べるまでもない。

「そんなことが有ったのですか…」

「ええ、まさか風呂場にまで乗り込んでくるとは…」

丁度話題も以前オサの村であつた風呂場強襲の話をしていた。

「今日は私も居ますので、お嬢様達が来る事はありませんよ」

「…本当ですか？」

「この国では婚前の娘が自ら異性に肢体を晒すような真似はまずしませんので。意中の相手を籠絡する為、と言つなら別ですが。」

なるほど。ついでにワイバーンで二人が俺と相乗りをしたがらなかつたのは、

ソフィーがセバスさんに抱きつく事になるのを避ける為だったらしい。

…なるほど、やっぱりあの飛行も当初から織り込み済みだった、と言つことが。

まあそれはそれだ、それよりも…

「…オサは面白半分で来てましたよ？」

「彼女は9歳で精神年齢が止まっているらしいですから…長寿族といえど普通はあんな若さで成長が止まりはしないものなのですがね…」

9歳、オサの話によると母親が出て行った年齢だ。やはり何かあったのだろう。

「…300年ほど前に長寿族と人間に何かあったのですか？」

「300年前と言いますと建国の頃ですね。そうですね…少し、長くなりますよ？」

「構いません」

「そうですね、では…」

そう言って、セバスさんが説明を始めた。

「その頃の少し前までは人間も長寿族もその他の亜人種も皆独立し、時には協力し、時には対立して生活していました。

ですが、マナの高濃度化が深刻化し、そのせいで一部危険域にしか居なかったモンスターが爆発的に増殖してあちこちに発生して、危機的状况となって来まして、ついに人類は種族の壁を超え、生き残るための手段を模索する事にしたのです。

最初こそ討伐隊やバリケードなどモンスターに対しての場当たりの対策だったのですが、Mana濃度を下げなくてはどうにも成らないという事が研究により判明しました。

そして研究の末ついに発見されたMana濃度を一気に下げる手段が<異界の扉>を開く事でした。

…ですがそれを実行するには幾つもの難題があったのです。

それでも人類は協力し、幾つもの問題をクリアし、そして最大の難関にぶつかりました。

強大なMana蓄積量を誇る<魔晶石>、<神聖魔晶石>を複数手に入れる必要があったのです。

様々な検証結果、<神聖魔晶石>と言われる程のものを持つのは竜種の王竜種だけだと断定されていました。

ですが、王竜種と言うのは当時この世界の全生物中最強を誇った竜でした。

世界中を探しても僅か10頭にも満たない最強の竜の一族。

その棲み処を襲い、甚大な死傷者を出しつつも7つの<神聖魔晶石>を手に入れ、

<異界の扉>を開くことに成功したのは…生き残った我々の初代国王でした。

熾烈極まる戦いで、魔法適正の高い長寿族は勇敢に矢面に立ち、命の限り戦い、死んで行きました。

…全人類種族中、彼らが最も犠牲を出した種族になりました。

戦死による大量の人口減、さらに元々個の寿命が長いせいか、彼らの生殖能力が低い事も災いし、気づいた時には絶滅寸前になってい

たのです。

ですから、今は王国だけでなく大陸全土の国で彼らは英雄の一族として保護されています。

現在確認されている彼らの居留地は100数人程度の規模の3箇所のみ…

排他的な彼らはあまり外と接触を持ちたがらず、昔ながらの生活を営んでいると聞きます。

一応例外は居るのですが…それでもオサさんは珍しいですね、あの年恰好で一人だけで居留地から出て暮らしている方は初めて見ましたよ。」

「なるほど、そういう事だったんですね…」

聞く限り、長寿族と人間が争う事は無いように感じた。

だが、恐らく300年前の戦いで確実に何か有ったのだろう。そのせいでオサは成長が止まった。

推測ではあるが、子供のままのオサは大人になる手段を求めて放浪し、何かの縁で村を作る事になった。といった所だろう。

「その後、〈異界の扉〉の開放の為の魔術は改良され〈召喚魔術〉となり、今に至ります。」

「そういえば、毎回王を召喚しているのですよね？」

「そうです」

「王に相応しくない人が召喚される事はなかったのですか？」

「勿論最初はどの方も王としては不足です。ですから王家はどちらかと言えば王妃が実務を執り行います。貴族とは逆ですね。名目上は王が家長になっていきますけれど。」

「そうですね。少し、安心しました。」

「…」

「……何か？」

「いえ、ソフィーリア様は少々事情が御座いまして…まだ王家としての教育を修了なされておられません。」

「つまり？」

「ユート様に、お頼りせざるを得ない場合が多々、起こりうるかと存じます。」

「…」

「申し訳御座いません。ですが、是非正しき決断を下されますようお願いいたします。」

「何が正しいかなんて、分からないよ」

「そうかもしれないですね。ですが、心の片隅にでも置いておいて頂ければ幸いです。」

「…分かったよ」

「よろしくお願いします。この国の未来を」

「重い、話だね」

「それだけの物を託す事になりますので。」

「分かってるさ」

「よろしくお願いします」

前途多難。だが、悪い気分でもない。

ただ失ったものの購入に戦い破壊するのではなく、未来を作る為の戦いをする。

それも武器を持ってではない戦いを。

俺一人なら、無理だと思ったかもしれない。

でも、マールやソフィーやメリア。皆が居る。きっと俺を支えてくれる。

だから、何となく出来るんじゃないかな。という気がしていた。

「長話になってしまいましたね。湯当りする前に上がりましょうか」

「そうですね。お話、為になりました。ありがとうございます」

「そう言って頂けると冥利に尽きます」

確かに。何時までも入っている必要も無い。次に女性陣が控えているのだ。

二人で風呂から上がる事にした。

1・3 <女風呂>

「そろそろ魔力が戻った感があります」

ユート達が上がリ、入れ替わりに入ったお風呂の湯船にへたりこみ、顎先までどっぷりとお湯に沈めたソフィーがぼつり、と呟いた。

「？」

『んお？』

髪を解き湯船の外で手入れしていたメリアと、湯船に魔法で浮き輪を作り、それに寝転びぶかぶかと浮かんでくつろいでいたマールがその声に反応して揃ってソフィーの方を見、？と疑問符を浮かべる。

途端に軽く目が合い、ソフィーの思考がずれる。

…どうしてこの二人はこうもケロっとしていられるのでしょうか？

前もって「ユートは初めてらしいしとりあえず試しにやる。」と聞いていたとは言え、あの飛行は私には荷が勝ち過ぎました。

早々に失神し、後々聞いた話では、およそ1時間近くも続けた、という話。

…だというのに、どうしてこの二人には全く疲労感が無いのでしょうか？ 私は目が覚めた後の普通の飛行ですら疲れてしまったのに……どこかこう、理不尽さを覚えます。

…いえ、今はそういう話ではありませんでしたね……

軽く頭を振って、思考を最初の話題へ戻す。

「いえ、以前かけていただいたく魔力強化>から5日ほど経ちますので、減少した魔力が回復した感が……」

「<魔力強化>?」

『おお？ おお！ 言われてみればそうじゃの。おんし魔力の回復が速いのう』

「そうなのですか?」

『妾はまだ1割も戻らんぞい……』

…マールはお姉様の治療やら尋問の時などこの姿のまま結構魔力を使用していました。

ロクに回復できていないのも仕方ないのかもしれない。

「それは…すみません…」

自慢してしまったような気分になってしまい、思わず謝罪をしてしまいました。

『謝らんでも良い。そうじゃの、風呂から上がったらユートに次を掛けて貰うとよかる。メリアもな。』

「私も？ 何をだ？」

「＜強化魔法＞ですよ。」

『存外鈍いのうおんし…』

くすり、と笑いをこぼす。

久方ぶりにお姉様が呆けました。

叔母様達が心配するのはこういう所。戦闘以外になるとよくよく抜けてしまう人なのです。

「おお！ ＜強化魔法＞か！ そういえば言っておったな。ユートと聞かすには必要だと。」

「…そうなのですよ。ですから私もまだユートさんとは唇ぐらいしか」

そっと自分の唇に指で触れ、なぞる。

あの初めての夜から、もう幾度となく交わした感覚を指先で再現しようとして、押さえ、つぶさに思い出す…

「…ほう、唇は済ませてある、と。フッフ、良い事を聞いた。後で私もユートの唇をいただくでしょう」

と、私の言葉と仕草を見て、お姉様が不敵な笑いを浮かべました。

お姉様は「まずはソフィーが。ソフィーが済ましたら私は遠慮せず同じ事を行わせて貰う！」

と妙に真面目に拘ったような事を言って、実際にユートさんには抱きつく程度しかしていませんでした。

お姉様らしい、と言えばそうなのですが…

…なんだかもやもやします。

先ほど感じた理不尽さに対する物とは明らかに違う、それでいた以

前にも度々感じていた感覚。

何か胸元がもやもやしてすっきりしないような……

『ふむ。しかし考えてみればそろそろ問題じゃの』

「問題ですか？」

「問題？ なにがだ？」

もやもやしているとマールが深刻そうな声を出しました。

『うむ。問題も問題、重大な問題じゃ。』

「そんな……」

「一体何が問題なのだ？」

重大。さらにマールの声が低くなり、緊張が走ります。

『妾らがここに召喚されて既に17日が過ぎておるのじゃが……』

「そうですね」

「もうそんなになるんだな」

『その間ユートは一度も又いておらぬ!』

「……………」

「あの……………」

ざばん! と音を立てわざわざ水面に立ち上がり、マールがはつきりとした大声で言いました。

…正直、どう反応したら良いのか分かりません。

『中身はともあれユートの体は健全過ぎるほどの17歳男子! パトスが迸って仕方が無い筈じゃ!』

「そ、そういうものなのですか?」

「情熱が迸る?」

『つまりピーにピーがピーしてるのでピーをピーしてピー……をせてやらねば暴走してしまうお年頃なのじゃ!』

「……………」

余りにも直接的な表現にお姉様と二人揃って耳まで真っ赤に茹で上

がりました。

いずれは、そういう関係にならなくてはいけないのですが…、人に言われると恥ずかしいのです。

『これ、何故そこで押し黙り赤くなっておるか』

「いえ、流石にちょっと…そうはつきり言われますと…」

「ああ、これで私も生娘なのだ…恥ずかしい。」

『このおぼこ娘らめ…！やるのはおんしらなのじゃぞ…？』

「おぼっ…」

「……………」

『そうじゃの、折角の機会じゃ。策を練ろつぞ。おんしらも否とは言うまい？』

「それは、確かに…：そうなのですが、その、私もそういう経験は御座いませんし…：知識も殆ど…：どうしたらよいのか…：」

「私もだ…：皆目見当も…」

『フ、フ、フ、案ずる無かれ。ことに及ぶに至っては妾も参戦する。じゃがこの体じゃ。主に指導に回るつて。おんしら二人がユートに

奉仕するのじゃ
』

「ユートさんに私達の体で」奉仕…」

「お前が言うつと後で痛い目にあう類の甘美な誘惑の罠に聞こえがちなのが不安なのだが…」

『大体合っており。気にするでない。よし、そうと決まれば作戦会議じゃ。』

「よろしくお願いします…！」

「悪魔の囁きに聞こえてきた……………」

『二人とも良い返事じゃ。ではまず…………』

会議の決が出、その場で出来る下準備と軽い練習を済ませたころには、

私とお姉様は完全にのぼせてしまっていました。

1 - 4 < 罫と枷 >

…メリアが失神した。

いや、言い訳をしておこう。別にやましい事のせいではない。

お風呂でのぼせたらしいので、浴衣のような寝間着姿の二人を介抱していたのだが、何か<強化魔法>を二人にかけることになって、復活した二人とマールに女性陣の部屋へと拉致された。

その時は殆ど何も考えず、そういえばそろそろだっけ、なら仕方ないな。…まあいいか。

と思ったので大人しく連行され、まずは<魔力増強>が定着したソフィーに<魔法骨格>をかけることにした。

この魔法は、一つ一つ独立した魔方陣を複数、全身に及ぶ量で描く。そのため一度形作るのに必要とする魔力量がかなり必要で、<魔力増強>で作ったプールが必要不可欠だった。

だが、それをかけて尚彼女の魔力残量には余裕があったので、<対物理皮膜><自動治癒>も追加しておいた。

これでソフィーに施した基礎の<強化魔法>は5つ。折り返しだ。

とまあ、ここまでではよかったのだ。

それが終わって今度はメリアに最初から、という事で<走査>をかけていたのだが…

メリアはくすぐったがりだったらしく、暴れた。

そのため制御を乱した<走査>がさらに刺激を与え、メリアはさらに暴れる。

さらに刺激は増し、さらに暴れ…

そしてついに<走査>の途中で失神してしまったのだ。

まあ失神していても<生命強化>はかけられる。

何か恍惚として、とろけるような顔のメリアの半開きの口に、

そのまま指を差し入れ、魔法水を浸透させて<生命強化>と<魔力増強>を描く。

今回は魔力残量が3人ともかなりあったので、相互に干渉しない<強化魔法>を複数つつがなくかけて終わった。

ふう。と一息をついて失神したメリアを寝台へと運ぼうと思い、お姫様だつこで抱き上げる。

ソフィーとは違ってよりスレンダーに引き締まった体なのだが、それでも柔らかい感触にどきりとする。

あの時以来口調も本来の男勝りな感じになっていたので、然程意識しなかったが、メリアもメリアで女性らしい魅力に満ち溢れている。

…いけないいけない。ちょっと欲しかけていた。自重しなければ。

そのまま近くの寝台に寝転ばせる。

寝転ばせていて思ったのだが、この部屋にはキングサイズのベッドが一つ。

まあマールはあんな状態だし3人揃って一つのベッドでも大丈夫なのだろうが…

男部屋はちゃんと二つ寝台があったのになあ…と考えながら、寝こるばせたメリアの前髪を整えてあげていたら、

どん。と突き飛ばされて俺も寝台の上に転がった。

え？

何が？誰が？何故？

理解が追いつかないままに今度は何かで後ろ手に片手をガチャリと

拘束される。まさか、敵か！？

とりあえず＜強化魔法＞を活性化しこの枷を…！ と思ったときに耳元で声がした。

『枷を解いては成らぬ』と。

優しく諭すように囁かれたマールの声に、つい反射的に＜強化魔法＞の活性化を止める。

代わりに振り向く。突き飛ばした犯人を知るために。

そこには俺を突き飛ばした姿勢のままのソフィーが居た。

…ただし、上下1枚づつの下着しか付けていない状態で、だ。

何時の間に脱いだ！？ そして何故拘束！？？

後その純白の下着、眩しいです。清楚なイメージで、凄く似合ってます。

…混乱しながらも目が離せない。

と、背後で誰かがもぞりと動き、衣擦れの音が聞こえた。

ま、さ、か？

振り向くまでも無く背中に抱きつかれた。間違いない。これは、メリアだ。

心臓が早鐘を打つ。

そのままメリアの手が下がり、いつの間にか解かれていたベルトの緩みから一気に寝間着のシャツが引き抜かれる。

前が、見えない。そう思ったと同時にズボンがソフィーに捕まれ、引きずり下ろされる。

いつの間に、ベルトを？いや、ベルトを解いたのはマールか？そうか、メリアを起こしたのもか！…なんと言う連携。

そして、これは、まずい。

まずい、まずい、まずい。

思考は纏まらないがまずい。とだけは感じる。に、逃げない？

そう思ったと同時に、また耳元で声が出た。

『逃げるでない。楽しもうぞ？』と。

また反射的に体が固まる。

めくり上げられた寝間着の上が頭から外れ、取り払われ、再び前が見えるようになる。

そしてカチリ、と今度は反対側の手に枷がつながる。完全に手は拘束された。

状況はベッドにバンザイの姿勢で寝転んだ状態、背中から頭上には膝枕をするようにメリア。

こちらも下着姿。スレンダーな印象のさらに増す鋭角なデザインの黒い下着。こちらも淒く似合ってる。

…有り体に言って、二人ともエロい。

あ。

不味い。

つい、意識してしまった。

一度意識したら最後。血流がそこに集まり、屹立を始める。

にげ、なきや。この枷を…

『ふふ、枷を外すでないぞ？それは戒め。それが有る限り妾達がこれから存分におんしを満たしてやるうて。』

また、マールの声が俺を止めた。そして、見る。

空色と、赤色の二人の瞳が俺の顔を、瞳を見つめている。真っ直ぐに、お願いします、と。

俺は……

「ユートさん…」

「ユート…」

メリアが俺の頬をなで、より前傾姿勢になり、ソフィーは寝台に登り俺の下半身を跨いで腹部に触れる。

じゃらり、と金属製の枷が音を立てる。

俺は……

「……よろしくおねがいします。」

流される事を選んでいた。

「はい！」

「精一杯、尽くします！」

二人の満面の笑みを見届け、とりあえず目を瞑ると同時に、二人の唇と肌が触れる柔らかな感触がした。

マールの手ほどのきの元行われた女性陣による一方的な情事がひと段落し、泥のように4人で眠った後目が覚めた時には、既に翌日の夕方だった。

俺の左右に寄り添い、抱きついて眠る二人の手をそつと下ろし、胸の上で寝ていたマールも起こさないよう下ろし、起き上がる。

最早、誰も下着を付けていない。あられもない姿の肢体に再び俺の

欲情が喚起される。

だが、止まる。じゃらり、と手に付いたままの枷が音を立てたからだ。

寝台を離れ、枷を外す。眠る3人にシーツを被せ、窓を開き、魔法で軽い風を起こし換気をする。

そして水魔法を用いてざつと皆の体の表面の体液を洗い流す。

部屋にたつぷりと充満した情事の匂いが大分薄まる。

少し、落ち着いた。

脱ぎ散らかされた衣類を拾い、身に纏う。

3人の顔を覗く。皆満足できたのだろう。健やかな寝顔をしている。

そつと手を伸ばし、顔にかかってしまっている乱れた前髪を払う。

……新しく出来た、大切な人達。もう、失いたくない。

そう、思う。

かかく頬に触れ、名残惜しいが寝台を離れる。

少し小腹が空いている。きつと3人も起きたらそうだろう。何か作ってもらおう。

そう思つて扉を開いた。その先には……………

既にパンに野菜を挟んだ軽食と暖かい紅茶を準備したセバスさんが待機していた。

うん。野菜も瑞々しくて水分がしみ出てもない。紅茶も適温。美味しい。

…すごい。

すごいけど…どうなってるの…？

何で、タイミングばっちりで用意できてるの…しかも、一人前。

一応聞いてみたその答えは、「セバスチャンなら当然の事です。」との事だった。

ちょっとセバスさんの事が空恐ろしくなっていた。

2・0<トラと根暗眼鏡>

収監されて2日目。

この日フェルブルム卿の元へやって来たのは、眼鏡をかけた陰気な感じの男だった。

「で、何をしに来た？懐柔か？」

見張りとして部屋に居た6名の兵士と入れ替わりに入ってきた男に話しかける。

武力に訴え恭順を迫るなら即座に<獣化>してやる。

そついう意思を込めて睨みを効かせ「グルルル」と喉をならす。

「そんなに警戒しないで下さいよ、トラ小父さん。」

だが相手は肩を竦めてやれやれといった口調で答えた。

「懐かしい呼び名を使いおって…バルナムの若造…いや、根暗眼鏡が。」

「…否定はしませんが、その呼び名はやめて欲しいですね」

「ふん。先に昔の呼び名を使ったのは貴様だ根暗眼鏡。それで？何の用だ？」

軽く嫌味を言い溜飲を下げた所で先を促す。

大よそ用件に見当が付かないでもないが…

「…まあいいでしょう。それで用件ですが、懐柔に。」

「断る。我輩はいかなる場合でも国内においては公平中立の立場を取らねばならん。」

分かっているはずだ。と言わんばかりに答える。

そう、警察権を持つ捜査局を受け持つ事に成った我輩の家は、代々国内に対して政治的中立を保つ必要があるのだ。

他にも林業等も我が家の受け持ちだが…今は気にする必要も無いだろう。

「そうだろうと思ってましたよ。懐柔というのは言ってみただけです。」

「分かっているなら尚更何をしに来た？」

「そうですね。半懐柔という事です。端的に言つと貴方の捜査局の情報網を利用して頂きたい。」

「我輩を解放すると?」

「そうなります。とは言えこの王城内での自由程度ですが。勿論特課兵の方と連絡を取り合つたり王家派の方々に情報を送られるのも構いません。」

「フン。つまり中立のままで良いから情報はよこせ、と言つ事が。」

「その通りです。貴方の所の情報網が一番早いのは周知の事実ですからね。」

それは事実だ。我輩の捜査局の誇る<竜燕>は一切休む事無く大陸の端から端まで飛べる。

優れた保温性と寝ながらですら飛べる事による夜間飛行により、ワイバーンの2〜3倍は早く手紙を運んでくれるのだ。

そしてその<竜燕>は生息地に原住していた鳥系獣人が苦勞して飼いならした竜族だ。

今はまだ専門のもので無いと扱えない。

主要な街に5匹は配備しているが、まだまだ数が足り無いので一般には普及されられていない。

捜査局だけが使っているのが現状だ。

だが、それをタダで使わせる訳にはいかない。

「他の連中との面会は？」

「構いません。何でしたら懐柔もお願いしたいですね。特にアーリントン卿を」

やはり、奴が最大の壁になってくれたようだ。

内心ほくそえむ。流石だな、と

「内乱となれば奴の陸軍、海軍が最大の敵になるだろうしな。だが、奴はなびかんぞ？」

「…その為の布石は既に配置しましたよ。」

「…そうか、まあ調べれば直ぐに分かる事だろうな。」

「ええ、説得は手遅れにならない内にお願ひしますよ。」

「…えらく自信満々だな。」

「この為に長年準備してきましたからね。抜かりは有りませんよ」

長年。このセリフで確信が持てた。

「長年、長年か。やはり貴様の目的は王家の失脚だったか。」

「それが全て、とは言えませんがご明察ですね。流石は捜査局総務長。私の事情も調査済みですか。」

「言うまでもないのだろうな。だがその復讐はただの八つ当たりでしかないぞ?」

「そうかも知れません。ですがもう止まれないのです。」

「私はこの国を王家が無くても成り立つ国に作り変えます。」

「…300年も続いた王国を滅ぼして只で済むとは思えんがな」

「その300年が長すぎた、今のこの国は腐りきっているんです。平和に溺れ争いを忘れた貴族連中は肥え太る事にしか目を向けず、王国議会は肥えた貴族の腹を満たすための傀儡に成り下がっている。我々五大家が抑えていると言えども、既にキャメル卿とフォワール卿は大勢に飲み込まれて半ば以上に傀儡化。親父だってそうだった。貴方だって懐柔しようと工作された筈だ。」

「…ああ。」

その通りだ。絶対に受け取りはしなかったが、何度も賄賂を贈ってこられた。

支部の者が買収されて、有ったはずの証拠が失われ嫌疑から逃れられた事も何度もある。

「体制を覆すには王家を排除するのが一番手っ取り早い。丁度く召喚魔術も失敗して王女が逃げ出した今が最高の時期なんですよ」

「まだ失敗したとは決まっておらんだろう!？」

「ならば何故王女は出てこないんですか？ ただでさえ魔力不足を言われ、その上我々まで出し抜いて3年も前倒しに決行して失敗したからではないでしょうかね？」

「…それは」

言い返せない、現に王女は、ソフィーリア様は行方不明なのだ…

「話はここまでです。貴方の限定的釈放を認めますよ。状況はもう戻りはしない…せいぜい内乱が即座に収まるよう尽力お願いします。」

「そう言い残し、バルナム卿が部屋を後にする。」

糞ッ…どうするのだ、この状況を。完全にあの根暗眼鏡の筋書き通りではないか。

このままではこの国は内乱になる、そして諸国が解放軍と称して攻めて来るのは明白。

下手をすれば大陸が戦乱に飲まれてしまう。

それだけは避けなくてはならない。だが、我輩にはその名案が浮かばない…

「誰か、我輩はこれから捜査局の支部に向かう、見張りが要るのだろうか？ 付いて来い。」

バルナム卿と入れ替わりに再び室内に入ってきた6名の兵士に語りかける。

…今は現状の確認だ。情報を得なければ成らない。

オヤジよ…老王様アンタの娘は何処に行っちゃったんだよ…

2・0<トリと根暗眼鏡>(後章)

9 / 8 誤字修正しました。

2・1<臨海都市アーリントン>

結局アーリントン上空にたどり着いたのは、アルモスを出立してから5日目の昼もかなり過ぎた頃だった。

3日で着くはずが、村に降りて休む度に2泊してしまったのだ。

…つまり、あの狂乱の夜は2回行われてしまっていた。

…我ながら、よく総受けて我慢できたと思う。

いやいやいや、そんな事よりも今はアーリントンだ。

よこしまな思考を振り切り眼下の街を見下ろす。

アーリントン。メリアの親族の治める街。

見たところアルモスよりも広く、海に面している。臨海都市、というやつだ。

整備された港があり、大型の船も…かなり多い。

それでもざっと見たところ、大小様々な帆船と大量のオールが生えた中型船ばかりだ。

流石にスクリーナー式や蒸気機関のものなどは無い様だ。

魔道具でそういうものがあっても面白いと思ったが…。

そうやって眺めていると軽く2匹のワイバーンが旋回し、降下を始める。

旋回する軌道から降下先を予測しようと視線をめくらせる。

どうやら降下先は最も大きな建物の広い庭…？　むしろ運動場か訓練場。と言った感じの所ようだ。

しかし、その運動場の雰囲気何かおかしい。

かなりの数のワイバーンと、初めて見るワイバーンの2倍近い体躯の大型飛竜。

そして人、人、人。

…これから軍事演習でもあるのだろうか？

そんな事を考えながらもメリアとソフィーの乗ったワイバーンの後を追って、俺とセバスさんの乗ったワイバーンも着陸体勢に入った。

「お母様！？　何をなさっておられるのですか！？」

着地したワイバーンからいち早く飛び降りたメリアが、集まった人々の中に居た小柄な女性に向かって叫んだ。

「メリア、戻ったのですね？　では貴女も来るのです。これより逆賊を討伐に向かいます。」

遠目にも目立つ、鮮やかな赤と白のドレスの上に、ハーフプレートと言つのもどうかという急所を庇う程度に金属板が配置された甲冑を着込んで、羽飾りの生えた飾り気重視の兜を小脇に抱えた黒髪の女性が静かに、厳しく答える。

メリアのお母様。

ということはこの人が話に聞いたアーリントン婦人、エーリカ・アム・アーリントン。

ソフィーの叔母さんということか。

それにしても若い。20台後半から三十路前半そこそこに見える。

「何を言っているのですか！？　お母様、寝ていなくては駄目ではないですか！　お体が！！」

「私は大丈夫です。メリア、聞きなさい。王都でクーデターが起こ

りました。」

「なっ!?!」

「!?!」

メリアに次いでワイバーンから降り、少しヨタつきながらもエーリカさんの元へと駆け寄っていたソフィーも硬直する。

クーデター。つまり内乱? 王都は乗っ取られた?

『あの程度の情報では収まらなんだか…』

懐から頭上の定位置へと戻っていたマールがつぶやく。

俺もワイバーンを降り、メリアとソフィーの元へと向かう。

「主犯格はバルナム卿。つまり空軍と開発局、それに表立って行動は起こしておりませんが貴族連中のおよそ7割が敵方として加担していると思われます。そして王下5大家会談を強襲し、当主4人を捕縛したそうです。」

「そんな…お父様やフェルブルム卿まで捕まった、というのはですか!?!」

「そうです、ですから私が向かいます。あの人を取り戻すために。」

「無茶です！ お母様は病の身なのですよ！？ 戦になんて耐えられませんか！！」

「そうかも知れませんが私にはあの人が捕まったと聞いて黙って寝ているなど出来ないのです。メリア、貴女も手伝ってくださいますよね？」

「私に否はありません、ですが、お母様は…」

「本当なのですか、叔母様、バルナム卿がクーデターを起こした、というのは」

硬直が解け、メリアとエーリカさんの傍まで辿りついたソフィーが口を挟む。

「叔母様？ その声…貴女、ソフィーリア…？」

「はい叔母様。ソフィーリアです。只今戻りました、ご迷惑をおかけしまして申し訳ありませんでした。」

「そう…無事だったのですね…良かった… メリア、セバス、よくぞ成し遂げました。ですが…」

「お話したい事は沢山あります、ですが、今はお聞かせ下さい。私が姿を眩ませている間に何が起こったのですか？」

ソフィーが疑問を述べる。確かに、そこは俺としても気になる。

「そうですね、貴女は聞いて置かなくては成りません。これから行動を起こすためにも。」

「つい5日程前の事です。バルナム卿が兵を率いて王下五大家会談中に会場を強襲、4家の当主を捕縛し、クーデターを起こしました。」

バルナム卿の言い分は

エーリカさん曰く。クーデター直後にバルナム卿は所領の貴族宛てに声明文を送ったらしい。

その内容は、

王女は祖父王の死による政務局の追求に耐えられず期日を無視し、
召喚魔術を強行、そして失敗した。

さらにその上糾弾される事を恐れた王女は、逃げ出し、行方を眩ませた。

次代の巫女はもう生まれない。

王家による〈召喚魔術〉での保障が得られなければ、この国はすぐにでも隣国に攻められるだろう。

この国難に対し、技術局は全ての技術を結集して王家の力無くして〈次元の扉〉を開く術を用意した。

隣国の戦力に対抗するための新兵器も用意した。

だが、王下五大家は今だに逃げた王女を頼ろうとして事の重大性に背を向け、王女の帰還を待つという決断を下した。

故に、私グレイミラバルナムはこの国を救うために立った。

今すぐ王家には退場いただき、新たなる体制を整える必要があるのだ。

〈召喚魔術〉の使えない王家は最早国政に有らずとも良い。

だが廃止しろと言うのではない。これまで300年この国を守り支えてきた実績もある。

何も出来なくなると、ただ国の象徴として存在し、積極的に政務

に関わらないでいて貰えれば良いのだ。

今までは王家を通さなければ十分な政務が出来なかった。そこを正したいのだ。

それに力が無いのに権力を振るうのでは納得が行かない、と言う者は多いだろう。だから退いてもらうしかないのだ。

今だ帰らぬ王女も、必ず理解してくれる事だろう。

そうすれば他の五大家の方々も追従してくれる筈だ。

だがまず諸君に理解してもらいたい。この国を守るために私に手を貸して欲しい。

我々だけではこの国は内乱になってしまう。

だから私の考えに賛同し、皆仲間になってもらいたい。

これは強制ではない。お願いだ。

この国の平和を守るため皆の力を貸してくれ。

この国の明日を作るために皆の力を貸してくれ。

と、言うものだった。

『まあ見事な詭弁じゃな』

頭上のマールがにべもない感想を述べる。まあその通りだろうと俺も感じた。

「貴女は？」

『妾はマール、こやつに憑いておる。魔族じゃ』

「魔族？ 聞いたことが有りませんね…悪魔の一族とでも？」

『ほう、概ね正解じゃ。』

「それにしてもなんだか、声は女性のようにですが、男性のように見えるような…？」

「俺ではなくマールはココです。俺はユート。始めまして」

頭上のマールを指差しエーリカさんに挨拶をする。

「あら、そうだったんですか。済みません良く見えなくて…貴方は？」

「そうだ！ お母様！ ユートだ、ユートこそが今代の＜召喚されし者＞。＜召喚魔術＞は失敗なんてしていない！」

「ですが、見たところ栗色の髪で……魔道具で染色を？」

「マール、頼むよ」

『心得た』

ぽふっとマールが頭を叩き髪と目の色が戻る。

『おんしもな』

ひょいっとソフィーの頭に移り同じように叩く。

「…王女様？」 「ではあの男は……＜召喚されし者＞？」 「……成功していた？」

傍目にも目立つ黒髪が2つ現れ、周囲がにわかにざわつく。

「ソフィー、貴女＜召喚魔術＞を？」

「はい、叔母様。私はやりました……最高の夫を見つけ出しました。」

「
「ああ……ソフィー、おめでとう、お姉様もお父様もきつと喜んで
おられる事でしょう。」

そつと、エーリカさんがソフィーを抱きしめる。

エーリカさんの方がほんの少し小柄なので、少し微妙だが、目頭に
来るもののある光景だ。

『これで、クーデター派の大義名分は崩れたの。』

「ああ！ その通りだとも！ 王女健在の触れを出そう！ 召喚成
功の報も！ それから王都に行って逆賊を制圧すればいい！」

『じゃが、連中にとっては建前じゃろつ。』

「そつでしよつね。」

抱きしめたソフィーを手放し、エーリカさんもマールに同意する。

「どついつことだ？」

『本命は国の乗っ取りという事じゃ』

「…そうなのでしよつね」

悲しそうな声を出し同意したのはソフィー。

「では、名乗り出たなら……?」

『ほぼ間違いなく、暗殺。もしくは偽者の一味の汚名を着せられ討伐隊が派遣される、といった所かの。』

「そんな……」

「ですが、この事実は大きな切り札になります。後は使い所……で……」

そこまで話した所で唐突にエーリカさんがふら付き、その場にくず折れる。

「お母様!?!」「叔母様!?!」「大丈夫ですか!?!」

倒れる前にソフィーとメリアがなんとか支えたエーリカさんを慌てて確認する。

汗が酷い、意識も朦朧としているように見える。…明らかに普通じゃない。

「やはり無茶だったのだ……セバス！ 急ぎお母様を寝台へ！」

「承りました」

セバスさんが素早くエーリカさんを抱え、建物へと向かっていく。

「全軍、一時待機だ！ 別命あるまで出発は見合わせよ！！」

メリアが激を飛ばし、追いかける。

俺たちも追うことにした。

2・2<臨海都市アーリントン2>

『病と言えば妾の出番じゃ』

厚手の遮光幕が引かれ、炊かれたばかりの沈静用の薬香の匂いが立ち込め始めた薄暗いエーリカさんの寝室で、周りの沈痛な空気を一切無視してマールが楽しそうな声を上げた。

『病と言えば妾の出番じゃ』

何故2回言った？ いや、それは兎も角としてだ。

「マール、エーリカさんの病状に何か心当たりが？」

「一応確認してみる。」

「あるのか!？」

「本当ですか!？」

「本当ですよ!？」

同じくエーリカさんを見守っていた女性3人の声が続く。

メリア、ソフィー、そしてメリアの妹のメルディアさん。

エーリカさんに言いくるめられ出撃の準備をしていたらしいのだが、飛んできたらしい。

ソフィーより1つ年下で、メリアそっくりの赤髪を長く伸ばして後頭部で纏めたふわっとしたポニーテール、同じく赤く垂れ目がちの瞳。身長はソフィーと大差なく、ほんの少し低い程度。

男慣れしていないのか人見知りなのか、寝室に飛び込んできてそこに居た俺に気づくなり、いきなり飛び跳ねるように驚き、その後もメリアの影に隠れつつちょっとオドオドしつつも何とか強気に対応しようとする態度を取っていた。

見た目は庇護欲を掻き立てるタイプ、といった感じなのだが………
何処か、違和感を感じる。

『ないの』

マールの返答に3人娘＋セバスさんの空気が揃って沈み、暗くなる。

いけない、メルディアさんの見た目の感想を述べている場合でもない。
い。

『じゃが診てみれば何ぞ分かるう。病が妾に抗しようなど片腹痛い』

わ
『

びょんと俺の頭から寝台に降り、既に意識を失ってうなされている
エーリカさんをマールが診察する。

目を開き、口を開き、肌をつついて確認。ぐるぐる回って触診、耳
を当てて……心拍数でも見てるのか？

『分かった。』

しばらくそうやってあれこれ調べていたマールが、あっさりとその
口にした。

「本当か!？」

「本当ですか!？」

「本当なんですの!？」

さっきと同じように叫び3人娘がマールににじり寄る。

『うむ。重金属中毒の一種じゃな。こんなものにかかるのは相当の
レアケースじゃが。』

「じゅ……じゅ？」

「重……金属中毒？」

「中毒……ですか？」

「聞き覚えの無い病ですね」

今度は3人揃って困惑。さらにはセバスさんまで難しそうな表情を浮かべている。

ふーむ。

重金属中毒。

重かほは兎も角として金属の中毒、と聞いてイタイイタイ病とか水俣病とかが社会の教科書に載っていたのを思い出す。

随分と昔の記憶なので曖昧だが、確か「工場の排水が原因で下流の村が〜」とかそんな話だったような。

けれどもこの国の最大規模の水源であるというウルラス川は、工場廃水なんて縁が無さそうなくらい綺麗だった。どういうことだ？

「工場廃水なんてあるのか？」

とりあえず、聞いてみる。

『ないじゃろ?』

「じゃ、なんでそんな病気に?」

良く考えたらそもそも工場なんて物があるかも怪しい。

「また異世界知識なのか…」

「ですが、今は頼もしい限りです。」

「治療法はあるんですの…?」

『おお、そうじゃ治療じゃったな。』

よつと、とマールがうなされているエーリカさんの顔の前に回る。
そしてそのままぶちゅーっとキスをした。

「……………」

『ん—————よつと。へっ』

暫くそうした後、ガラン、とマールの口いっぱい頬張られていた
金属塊が吐き出される。

…確かに、重金属中毒って言ってたけど、こんな治し方ありか？

そう思っていたらまたマールがキスをして、吐き出す。

ガラン、ガラン、ガラン、合計4つ吐き出した所でマールがキスをやめた。

『ふいー。治療完了じゃ。あちこち痛んでおるから治癒魔法をかけてやれ。後は…そうさな、3日もあれば元気になるじゃろ。』

「本当なのか!？」

「治ったのですか!？」

「では、お母様はもう死なずに済むんですの!？」

さらに物凄い勢いで詰め寄る3人娘。マールがちょっと引いてるぞ。

『何じゃ……? まあこの若さじゃし…80ぐらいまでは普通に生きるんじゃろ? そうそう死にはせんじゃろつて』

「そんな……」

「では……では……」

「呪いは……」

『呪い？ まあこのまま放置すれば後3年と持たんかったのは確かじゃな』

3人娘が驚愕に口を閉ざす。

助かったんだから喜んで良いものだと思うのにはて？

「まあ何にしる助かって良かったよ。ところでこれ……何？」

マールが吐き出した謎の金属。

断面は三角のほぼ正四面体の形状。真っ黒で光沢も無く反射も一切していないように見える。

闇の欠片？ それっぽい命名を思いつくが、とりあえず今まで見た事が無いのは確かだ。

『うむ。これはのく世界の繭>…いやこうなってはむしろく世界の欠片>じゃな。』

「く世界の欠片>？」

『生半可な金属ではないぞ？ 世界と世界を分かち壁を形作るモノが生体に取り込まれて物質化したものじゃ。さらに、妾が凝縮して抽出したせいで結晶化してしもうた。最早これを砕けるものが有る』

ならば神の域じゃな。およそ最高の強度の金属と呼んで差し支えな
いじゃろつ。…まあ加工すらできぬから微妙じゃろつが」

マールにしては珍しい、予想以上の大絶賛。そして最高の強度の金
属、と聞いて考える。

これはく水環鋸ルト・アサダー>やく多連層水環鋸>に耐えるんじゃないか？

「…摂氏1万度とか平気？」

『余裕じゃ。元々世界を分かつ壁。高温程度でどうこう出来るシロ
モノではない。こうなつては恐らく何万、何億、何兆度になつても
形状を変えぬ。』

「それはいいな。攻撃魔法用に貰つてもいいかな？」

そう言つてさつきから黙っている4人に向き直り、確認する。

「マールさんとおっしゃいましたわね!！」

『ぐえ』

ななな何だ？ 何を？

無視された上にマールが物凄い勢いでメルディアさんに捕まった。

もとい、むぎゅっと握りつぶされそうな感じで驚掴みにされている。

「わわわわたくしにも！ わたくしにも治療を施してくださいませ！！」

「メルディア落ち着け！ マールが潰れる！ いや、潰れはしないんだろぅが！ 落ち着け！！」

「メル、落ち着いて！ 大丈夫、話せば分かってくれるから。放して！」

えらく取り乱す3人娘。場の空気に呑まれた俺はセバスさんに救いの目を向けた。

……………セバスさんが泣いてるんですが。

どうすりゃいいんだよ…………

2・3＜臨海都市アーリントン3＞

まさかの漢泣きの後、セバスさんが説明してくれた。

エーリカさんが患っていた病こそ、王家の血筋の女に代々遺伝してきた不治の病である＜召喚の呪い＞。

だいたい40歳前後で発症し、発症すれば最後、5年以内に確実に死に至る。と。

『＜召喚魔術＞の弊害じゃな。あんな強引に対象を掴み取ってくるから、繭も吸収してしまっていたんじゃない。』

3人娘もディープなキスで処置したマイルが補足をしてくれた。なるほど、そういう事だったのか。

4人の過剰な反応にも納得がいった。

結局手に入った＜世界の欠片＞はエーリカさんの4つ、メリアの2つ、メルディアさんの2つ、ソフィーの10個。合計18個になった。

『恐らく40年というのも＜召喚魔術＞で扉が開いたのに反応して活性化したせいじゃと思うの。』

「では、では、王家の血筋の子は3代女しか生まれない、というのもこのせいなので？」

オドオドキャラを捨て去ったメルディアさんがまたマールに肉薄し迫る。

『あーそれは関係ないの。それはく世界の掟>じゃ。異世界人は異分子じゃからの。その世界ごとにいるいろんな方法で排除したがる。』

ちょっと引きつつもマールが返答する。

『ま、恐らく完全に子孫を残せなくするでなく、ひたすら薄れて混じる事で良いとこ取りする事を選んだんじゃる。この世界は。』

なかなかしたたかな世界じゃ。とさらにマールが補足したところで、三人娘はすこし残念そうな顔をした。

以前に聞いた話の通りだと、彼女達も娘しか生むことが出来ない。やはり寂しいものが有るのだろう。

「お父様も感激するだろうな……」

「そうですね…叔父様は必死でしたものね……」

「…救い、出さないといけませんわ。」

「問題はどうか、だね」

「…私の案は大抵却下されるので黙っておこう。殴り込んであの根暗眼鏡を締め上げ丸焼きにすると書いても却下なんだろうし。」

「言ってるじゃないか…でも、却下だろうねそれ」

『明らかに却下じゃろうて。敵本拠地で首魁を失い混乱し大惨事、どさくさに紛れて人質も殺されかねん。』

「…やっぱり却下されるんじゃないか」

まあまあ、とマールに駄目出しされしょんぼりしてしまったメリアを慰める。

効果はてきめん。シユンとしたメリアはすぐに元気を取り戻し、「ありがとうユート」と嬉しそうに微笑んだ。

…のだが、ソフィーが睨んでいる気がするので早めに離れておく。今はモメてる場合じゃないのだ。

「とりあえずは協力者を当って情報収集もすべきかと存じます。敵の新兵器、とやらも何も詳細は分かりませんですし。」

セバスさんが提案する。なるほど、確かにそういう事は必要だろう。
流石セバスさん。実に堅実かつ的確だ。

「と、なりますと居留中の捜査局員に当るのが一番ですわね。情報も有るでしょうし、中立を謳うでしょうがベル達は確実にこちら寄りで動いている筈ですわ。後で呼びつけましょう。もちろんお付も一緒に。うふふ。」

「あの狸娘か：間違いなくフェルブルム卿を救おうと動くだろうな。お爺ちゃん大好きっ子だしなああの娘：」

何か知らない人物の話題がだが、知り合い程度のそれ程重要人物でも無いようだ。

今考えるべきはそんな所ではない。

「問題は俺とソフィーをどう動かすか。」

「そこだな。」

「そうですね。」

『流石におんしが出張って城攻めはまずかるうて』

「：私はそれが一番手っ取り早い気がするのだが」

「誰が敵か味方が分からない、無差別に無力化して鎮圧する訳にも
…上手く無力化できずに死人も出ちゃうだろうし」

「力押しは避けたいです。無用な犠牲を生みますし…できれば会談
等で穏便に済ませられれば」

『ふーむ、しかしそれをするにも状況は向こうが有利。もしもの時
の人質もおるし』

「やはり、何処かでこちらの優位性を確立する必要がある、と存じ
ます。」

「うーん、集団戦だとかかなり犠牲がでちゃうし、やっぱり俺が行く
のが良いのかな…」

「あの、物凄く気になるので口を挟みますけど、普通に一人で制圧
出来るって言ってませんか?」

「できるからな! フフフ…流石我が理想の夫…完全防備の一国の
首都だろうと一人で制圧可能…素晴らしい、素晴らしいです…」

「お姉様、落ち着いてください。」

慌ててソフィーがなだめる。いかん、メリアの目つきが危ない。ま
たあの人格が出掛かっている。

「メ、メリア姉さまの夫…? ソフィー姉さまの夫なのでは?」

「フフフ、私は後宮に入りユートに侍る事にしたのだ。故に私の夫でもある」

「そついうことなんです…」

「はあ、まあメリアお姉様ですし、納得ですわ。それにしましても…それほどまでに強いのですか？ ユート様は？」

失礼ながら、そつは見えませんが…と言ってメルディアさんが訝しげな目でこちらを見る。

前々から時々思っていたのだが、…俺って確か次代の王なんだよね？

どうして皆して結構な、ぞんざいな扱いをなされるのでしょうか。

ソフィーとマールは仕方ないとは言え、オサといい、メリアといい、メルディアさんといい、

…ワイバーンに初めて乗った時のセバスさんといい。

特段威張ったり増長したりする気はないのだが、それでもあまりにもあまりな応対に少し悲しくなる。

不敬罪とかないのだろうか？

いや、あんまり畏まれるのはそれはそれで嫌だけど…

「それは…」

「勿論だ！ 良くぞ聞いてくれた！ さあ今こそ語るうユートの武勇伝を！」

あまりに不躰な視線に悶々としている間に、ソフィーが何かを語るうとした所をメリアが喜色満面な大声で塞ぐ。

いやいや、ちょっと待ってくれ。

「武勇伝とか言われても？」

『…長くなりそうじゃぞ』

「まあ、時間はありますよ…作戦会議は叔母様が起きて来られてからでも良いですし…」

「そうですね。それに武勇伝、ちょっと聞いてみたいですわ。」

「うむ！ まずは最初からだな。召喚されたユートは危険を告げられソフィーと共に塔を脱出しようとしたのだ。ところが既に3人も刺客が卑劣な事に護衛に化けて居てな、不意打ちで襲われてしまったのだ！ だがそれに敏感に反応したユートは、同じく不意の一撃で無残にも討ち取られた私の部下の遺体から剣を拝借すると一刀の元にその賊を鎧ごと切り裂き……」

メリアの話が本当に始まりから始まった。長くなりそうだ…

2・4＜臨海都市アーリントン4＞

「あの、一つ聞いてもよろしいですか？」

「どうぞ、メルディアさん」

メリアの長話が終わった頃にメルディアさんが質問してきた。

話自体は途中でソフィーも加わり、やや…いやかなり美化された俺の赤面ストーリーが展開されたが、割愛したい。

あまり人には話したくない白馬の王子様ストーリーと化していたし。

「メル、でいいですね。それで、貴方は人間なのですか…？」

「残念ながら、人間です」

「人間。と言うのは名ばかりで実は別な存在なのでは…？」

「本当に人間です。これまでの＜召喚されし者＞とも同郷です。」

「一体この20余年で何が…私達の知っている＜召喚されし者＞とかけ離れ過ぎているのですが。＜意言の首輪＞も着けて居らっしゃらないようですか？」

若干定番化している質問だ。ともあれ、説明しないと…と思ってる

とメリアがまた口を開いた。

「メル、納得行かないのは分かる。私もそうだった。だが、ありのままを受け入れるのだ。疑問を持っててもユートの強さは変わらない。」

「この説明も毎回ですしね。ユートさん」

「そうだね。」

『まあ、どう繕っても常識外れじゃからの』

マールも賛同する。確かにどう言い繕ってもその通りだろう。

今までの事を聞く限り、元勇者とか絶対居なかっただろうし。

「そうですね…まあ切り札が増えた、とでも思えば良いのでしょうか。…とんだワイルドカードみたいですが」

「頼もしい限りではないか。」

『実践してやってみてはどうかの、百聞は一見にしかずと言っしの』

そういつてマールがにやあ…っと笑う。

おいおい何を言い出すんだ、そもそも何をしろと。後、何を企んで

いる。

「なるほど、それはいいな。…だが何をする？」

「以前森で私に見せてくれた石投げで良いんでは無いでしょうか？
中庭に丁度良い石ならごろごろしてますよ？」

「それだ。」

本人の与り知らぬ所で話が進んで行っている。

『まあ、余興じゃよ』

「…過激な余興になりそうな気がするのは気のせいかな」

とりあえず中庭に向かう事にした。

結論から言つと、やっぱりやり過ぎだったようだ。

高さ3m程の岩があったのでそれに向かって例によって人の頭大の

石を投げて、投げた石ごと岩の上部を1/3程木っ端微塵に粉碎したわけだが、

かなりの轟音を発した為、何事か！？ と、大量の警備兵を呼び寄せる事になってしまった。

そして何が起こったかを説明するためにもう1投。

残りの岩をさらに粉碎し大音声と共に突き抜けた石が中庭を少し破壊した。

「何度見ても凄まじい威力ですねー」とのほほんと言うソフィー、

「流石だ。うんうん」と賞賛するメリア、

啞然とする警備兵の皆さん。

そして肝心のメルは…腰を抜かして尻餅をついていた。

「その…大丈夫？」

「…大丈夫じゃありませんわ、セバス、ちょっと立てそくにありません。わたくしを起こして下さいまし。」

「…承りました」

セバスさんも若干衝撃を受けているようだ。

そう言えばセバスさんは話に聞くだけで俺が戦っている姿を見たことが無かったか。

「今ですら本気でなく軽い一撃だ、と言う話なんですわよね？」

「その通りだ。」

俺の代わりにメリアが答える。いやいや、結構全力で投げてるんだが？

確かに魔法に比べれば大した威力では無いかも知れないが…

「…貴方とだけは敵になりたくありませんわ」

「そうだね、仲良くしてくれとありがたいよ。」

「…メル？ 貴女もユートさんに…？」

ソフィーの瞳がずっと剣呑な色を灯しメルを見据える。だが、それを受けたメルは軽い感じで返した。

「それは無いですわ。正直言いましたわたくし、ユート様はあまり趣味じゃないですし。」

「メルはもつと年上が好みだもんなあ…」

「その通りですわ。確かに、強さは認めます。ですが滲み出る男の魅力に欠けていてはわたくしは靡きませんことよ？」

ふふん。と…鼻で笑われてしまった。

何かこう残念なような良かったような、複雑な気持ちにさせられたがまあ良いだろう…

ソフィーもそう言えばそうでしたね。と落ち着いたし。

「轟音に目が覚めて来て見れば…何事ですか？　これは？」

そんなこんなで雑談をしていたらエーリカさんも起きて来ていた。

「お母様！　お目覚めに成られたのですね！」

「お早うございます叔母様、お加減はどうですか？」

「ええ、お早うメリア、ソフィー、メル。そういえば随分と楽になったわ。寝ている間に何か治療を？」

『うむ。おんしの病は完治させておいた。感謝するが良いぞ』

「完…治……？　本当に？」

『妾は嘘を付くのかの?』

「私はずくとと思う」

「私もそう思います」

「ええ? 妖精は嘘を付かないのでは有りませんでしたか?」

ソフィーとメリアが即答で答える。うん、俺もメリアとソフィーと同意で、づくと思う。

そしてメルが定番の妖精は嘘を付かないネタを出した。これももう毎度恒例だ。

「確か魔族、と言っていましたね…何を引き換えにしたのですか」

『別に何も? 妾は悪魔という訳でも無いしの。強いて言えばおんしの病の元になつた<世界の欠片>はいただいたの。ユートが』

「ソフィーとメリアとメルの分も有りがたくいただきました。」

「では、私達は…」

『ああ、もう病では死なぬよ。寿命をまっとうするかはこれからの生き方次第じゃがな。』

「…」

絶句し、黙り込む。恐らく信じられないのだろう。

持って3年だったという命、既に覚悟だつて決まっていた筈だ。

「そう、ですか…いえ、ありがとうございます…感謝してもし足りないのですが実感がどうも」

『致し方ないじゃろ。まあおんしの旦那を助け出してから祝おうではないか。』

「そう、ですね…そう、こんな事をしている場合では…！」

「お母様、お母様、お待ち下さい。病み上がりですし少し休憩を取ってください。もう3日もすれば体力も戻るそうですから。」

「そうです。時間が無いとは言え今は作戦を練るべきです。」

「とんだワイルドカードもできたことですし、わたくしも作戦を練るのは必須だと思いますわ。」

「ワイルドカード？ この惨状…と何か関係が？」

やはりそこも説明しなくてはならないか。

なんだか説明ばかりしている気がする…

『お互い何も知らんからの、致し方無い。妾らも事態の説明を受けようではないか』

「そうだね」

『ふふふ、風雲急を告げる事態、じゃ。盛り上がってきたの』

「不謹慎だよ？」

『妾は魔族じゃからの、そーいう所は諦めておくれ。』

「それもそーか」

「では、一先ず応接間に向かう事にしませんこと？　ここは人が多いですわ。」

メルが提案する。

とりあえず「こーではどーか、と言つ事で移動する事になった。

3・0<トラとロリコン>

コート達がアーリントンに到着するその前日。

件の五大家会談強襲に始まったクーデターによって、王都の一室に収監されて3日。

その日アーリントン卿の元へやって来たのは、幼い頃から続く腐れ縁の男だった。

「やはり、お前が来たかトラ。」

「予想済み、か。流石と言わせてもらおうか、ロリコン」

「その呼び名はやめろと言っただろうが!？」

皮肉を込めて言った言葉に返す刀で放たれた痛烈なカウンターに声を荒げる。

「先に昔の呼び名を使ったのは貴様だロリコン。それに婚礼年にも届かぬ自分の半分の歳の娘を嫁に娶っておいて言いわけがましいぞロリコン」

「お前は妻が10人も居るではないか!？ 人の事を言えた義理か!？ それに確か一番若い妻とは俺たちよりも年齢差があつた筈だ

ぞ！！」

「ふん。我輩は獣人だぞ。そのぐらい当然というものだ。それに皆18歳以上。当時ですら婚礼に問題は無い。後、12人、だ。」

「10人でも12人でも同じ事だ。多すぎるわ！ 全くこれだからケダモノだとブツブツ……」

「三十路で14歳の娘を孕ませたおぬしも大概ケダモノだと思うが、な。そんな事よりもだ」

予断になるが、この件が原因で23年前に、

およそ100数年ぶりに婚礼年齢が18歳から15歳に引き下げられた。

親バカで法律を変えた、先代唯一の暴挙だ。

…何故か殆ど裏で示し合わせても居なかった筈なのにほぼ全会一致で可決されていたが。

と、そんな事よりも、か

二人で話すついで昔のようにお互いの痛い所を突き合ってしまう。

だがこんなものはいつもの事。ただのじゃれ合い程度の会話だ。

ついついだらだらと無駄話になりそうになっていたのを止め、話題を戻そうとする。

「ふん。懐柔か？それには断固として乗らんぞ。」

「半分、正解だな。我輩はあくまで中立だ。確かにそう頼まれて来たが、諭す気は然程無い。このあいだの会議で話しそびれた事やらを伝えるに來たに過ぎん。」

「このあいだの会議での話？」

思い出す。王家の権限の移譲の話題か？ いや、それには我々はあまり関わりが無かった。では、何だ？

「応。アルモス卿の邸宅で起こった事件の事だ。当事者にメリアの嬢ちゃんが居てな…っ」と

トラが書類を取り出し、説明を始める。

「メリアが…？ メリアはソフィーリア様の消息を追っていたのだが、何故そんな所に？」

キヤメル卿の政務室に殴り込んだのは聞き及んでいたが、そちらにも？

「うむ。報告書によると、その件を追っていてアルモス卿が何か知っているらしい、と情報を掴み邸宅に乗り込んだ所、あそこのバカ坊に襲われたようだ。」

「あのやたらに態度のでかい性根の腐ったクソガキか…それで？襲われた？ 返り討ちだろうに。」

そいつの一家の事は知っている。

代々受け持った所領の都市が交易の主要都市になったために肥え太り、増長していた者だ。

たしかキャメル卿に資金提供という名の賄賂を送り、色々優遇させて問題になっていたはず…

だが、事件が起こり親子共に死んだと聞いている。

そこに、メリアが関わっていた？

「うむ。実はあのバカボン、今回あの若造が使った魔道具の同系と思われる物を使い<人型>を使役しおつてな。メリアの嬢ちゃんは重傷を負って死にかけた。」

「……………!!」

「ま、て……………い!!」

急に走り出し、脱走しようとしたアーリントン卿をフェルブルム卿
ががちり羽交い絞めにする。

「放せ！！！ 俺は娘を助けに行く！！！！！」

体躯の差があるので足が地面から離れてしまっている。そのままジ
タバタともがきつつ叫ぶ。

「何時の話だと思っている！ それに大丈夫だ、偶然通りかかった
長寿族の娘とその連れに治癒魔法をかけてもらい綺麗に完治してお
る！」

「……………本当か？」

「ああ、翌日の聴取では既に見た目にも傷一つ無いほどの完治っ
りだったそうだ。流石長寿族と言った所だな。」

「…焦らせおってからに」

落ち着いたアーリントン卿を下ろし、話を進める。

「全く。早とちりもいい加減にしろ、という所だ。で、まあなんだ。
ここからが本題なんだかな？」

にやあつといやらしい笑みをフェルブルム卿が浮かべる。

お前がそういう顔をするとか何か食われそうな気がする。やめろ。

そう思うが口には出さない。流石にそれは侮辱に当る。

「なんだ、気持ち悪い顔をして？ もったいぶらずに話せ」

「ああ、さつきも言ったが事件の翌日に事情聴取をしてな？ まあそこに当事者のメリアの嬢ちゃんと、長寿族の娘とその連れの男を呼んだのだから？」

「ふむ。」

「聴取した兵が『本当にメリア様だったのか疑いたくなりました』
と言うほどに別人になっておっいたらしいんだわ。」

…何故わざわざモノマネをする。しかも誰の真似か分からん。

「…どついでのことだ？」

「つまりな？ その連れの男に寄り添ってべろんべろんのでろんで
ろん。腕まで組んで夢見る乙女みたいになっておったそうさ。」

「……」

「ま、てー……い……」

再び走り出し、脱走しようとしたアーリントン卿をまた羽交い絞めにする。

「放せ！！！！ 俺はその男をこの目で見てこの剣を交えぬといかんだ！！！！！！」

「5日も前の事だといっておるうに！」

「それでもだーーーー！！！！！！」

「ええい！ じたばたするでない。虜囚の身で出れるわけもなからうが！？」

ピタリ、とアーリントン卿が止まる。そう、彼は今現在囚われの身。メリアの所になど向かえないのだ。

再びアーリントン卿を開放し、話を進める。

「よーしおちつけおちつけ。貴様も再三『メリアに婿を』と言っておったではないか。喜べばよからう？」

「だがしかし、何処の馬の骨とも付かぬ男では……」

「そう言つと思つてな？ その男の方も調べて来ておる。」

「よし、話せ。さあ話せ。すぐ話せ。さあさあさあ！..」

「首を絞めるでない」

「五月蠅い口々に絞まっておらんくせに」

「気分の問題だ」

「チッ」

舌打ちし、がっちり本気で首を絞めていた両手を離す。

この男相手だと本気でやってやっとな軽く絞まる程度なのだ。

もともと、剛力系の獣人全てに言える事だが。

「全く。で、その男だが…名はユートニアオスズ、人間、17歳。出身不明。素性不明。ギルドには連れの長寿族の娘に紹介されて同日加入したばかり。そしてメリアの嬢ちゃんが倒し損ねたく人型を単身葬った。」

「不明ばかりでないか!？」

この時期の<人型>を単身、という所が気になったが、今はそこはどうでも良い。

役に立たない情報に腹を立てる。

「あと妖精憑きだ。会議で話に出たあの半獣の。」

「なるほど、王女の安否情報の出所か。となればメリアもさらなる情報収集の為…?」

「それは違っただろ？ あのメリアの嬢ちゃんが男に媚を売るような女か？ 知りたければ全力で殴って吐かせるだろ？」

「ぐっ……………」

否定できない。メリアならそうするだろう。キャメル卿にまで手を上げたそうだし…

「とまあここまでが表向きな調査の結果だ。」

「裏もあるのか？」

「ふふふ、我輩の兵はぬかりは無いでな。バッチリ尾行をつけた。その者の報告によると…」

肉球と鋭い爪の生えたネコ科の動物然とした腕でバサバサと書類の束をめくる。

器用なものだ。

「ああ、これだ。尾行するもあつさり発見される。仕方ないので事情を説明し、聴取をした所、幾つかの情報を入手。」

「…わざと言っておるのか？ それでは無能を晒した報告ではないか？」

「いいんだよ、多少失敗しても有用な情報さえ拾えば。で、得た情報だが…長いな。要点だけ言えば、王女の安否の更なる保障、＜召喚魔術＞の成功の可能性が極めて高いと言つ事、王女達はアーリントンに向かっている。というところだ。」

「重要なことではないか！？ 何故あの時黙っていた！？」

その情報があればあの若造の決起は免れた筈だ。特に＜召喚魔術＞の成功は大きい。

「いやあ下つ端からだつたのであの時はまだ報告が上がっておらんでな。はっはっは」

「笑い事ではあるまい！ 早速その報告を持ってバルナムの若造を止めれば！」

「無駄だ」

「何故！」

「薄々気づいておるだろう？ あやつの目的は王家の失脚だ。動き

出した以上、止まらん。」

「やはりか…だが、何故だ。王家を失脚させる意味が何処にある？」

「それも調べさせた。復讐だ。あいつの妻子を知っているだろう？」

「ああ…だがあれは…」

「そうだな。あれはバルナムの失点だ。だがな、あの男は一族を肅清した後も気が済まず、王家のせいだとも考えてしまった。」

「そんな、八つ当たりでクーデターを起こしたというのか？」

「あくまで一因ではあるが、そうだな。」

「ますます止めねばならん！ このままではこの国は内乱、ゆくゆくは諸外国に攻める口実を与える事になる！」

「応。その通りだ。そしてその内乱の決戦はお前の所の陸海軍本隊とバルナムの空軍の対決になるだろう。」

「なん…だと？ 貴族連中の兵は？ 動かぬと？」

「ああ、賛同した者は多いがな。それでもそやつらも今は様子見している。王女健在の情報が効いた。あれのおかげでバルナムへ一気に傾向せずに済んだ。」

各貴族の私兵が動かない、という事は主立って動くのはバルナム本人の手駒となる。

ならば空軍本隊を動かす？ いやまてよ、そうだとしたら…

「では、まさか既に空軍は？」

「察しいいな。既にアーリントンに向かった。先鋒はモンスター化させたワイバーンを伴った部隊でフィオの嬢ちゃんが隊長だ。恐らく明日の夕暮れ前にはぶつかる。」

「制空権の確保が狙いか…そして本隊は爆撃装備で後詰め、降伏勧告といった所か。」

「その通りだ。」

…軍人でも無い自分の養娘を隊長にだと？ そこまでの自信があるのか？

いや、そんな事よりもこれは私に対する降伏勧告でもあるのだろう。

早急に私が折れれば所領も、家族も助かる。ということか。

だが、私が折れると言う事は…

「今、キャメル卿、フォール卿はどっちについている？」

「両方、中立を決め込んだ。事は起こった。今更止めても無駄だ、とな。」

糞ッあの日和見ジジイどもが！　ますます私が折れる訳には行かなくなっただではないか。

「迷ってるんだろ？　それで、さっきの男だ。」

…さっきの男？　メリアの惚れたという男か？

「4日前だ、あの男と、また別の連れの同年代の少女を伴ってメリアの嬢ちゃんがアーリントンに向かった。」

…17歳程度の男女を連れてメリアがアーリントンに？

「その二人の髪の色は？」

「残念ながら、栗色と空色だ。黒ではない。」

「だが、偽装している可能性はあるな？」

「我輩もそう思ったのだが、女は詳しく確認する事が適わず男は＜意言の首輪＞を付けてはおらず、発音もすっかりとしたベルム訛り。異世界人のような態度は見られなかったそうだ。」

「…そうか。では…だが何故その男が？」

「ああ、その男の戦いぶりを目撃した者の証言だ。〈人型〉と互角に渡り合い、その攻撃が直撃しても耐え切り、〈鎧付き〉であるのにあっさり切り殺した。らしい」

「…夢でも見たか？」

どう考えても夢物語だ。〈人型〉の膂力は恐らくこの目の前の男が獣化した状態並。

この時期ならばそれ以上だってありえる。迂闊に食らえば一撃で物言わぬ肉の塊にされるのが必然。

その上〈鎧付き〉。それを剣で？　ますます現実味が無い。

「証言と痕跡は一致した。メリアの嬢ちゃんも証言した。この時期の〈鎧付き〉の〈人型〉を、一人でだぞ？　そしてメリアの嬢ちゃんと共にアーリントンに向かったと言う事は、軍へ勧誘が貴様への挨拶かそんな所だろう。つまり共に迎撃に出る可能性が高い。」

トラは夢想家ではない。こう見えて辻褄が合わない事や空論を嫌う。だから捜査局を任されている訳でもあるが…

そのトラの中で既に事実と決定付けられていると言っのか？　そんな夢物語が？

「本気で言ってるのか？　それが事実で…メリアと、それ以上の男が迎撃すると？」

「ああ、さらに尾行したヤツの報告の続きだ。男は妖精憑きではない、悪魔憑き。その力は街を吹き飛ばす事すら可能だと言っていたそうだ」

「俄かには信じがたいが…それが、本当だとすれば？」

「間違いなく、空軍は返り討ちだ。」

「だが、嘘言だとしても…」

「軍に損害はでるだろうが、貴様の家族は殺さず捕虜にするだろう。貴様を恭順させるためにな。」

…恐らく、そういう狙いで来るだろう事は見当がつく。だが事は空の戦いだ。ほんの些細な事で命を落とすのが空戦なのだ。

そして、エーリカが、メリアルーナが、メルディアがそうだったなら、俺はもう絶対に許しはしない。

「なあ、賭けてみぬか？　メリアの嬢ちゃんと、その男と、アーリントンンに向かっただろう王と王女に。」

…実は我輩の孫娘のマリアベルが事態を知って飛び出してしまったそうだな…今アーリントンの連絡役になっておるんだわ…」

「…………あの暴走狸娘か」

確かメルと親交があったように思う。どういふ仲かは知らんのだが…ともあれその縁でか何度か家に来ているのを見た事がある。

物怖じせず、明るく元気な良い娘のだが、如何せん何事にも暴走気味なようので、最終的にパニックに陥ると所構わず天井に張り付く。

…思い出して少し頭が痛くなった。

「ああ、それが心配で心配で…このまま空軍本隊が攻め込み爆撃を始めるとなるときつとあの娘は巻き込まれてしまう…」

トラが背を丸めしおしおと縮む。この男も孫娘の事となるとまあとたんにこの爺バカっぷりだ。

…羨ましい訳ではないぞ。孫娘が早く欲しいのは事実だが！

と、また思考が逸れてしまった…いかんいかん…

「それで、賭ける、ということとは最後の賭けにしろと言う事だな？初戦に負ければ折れる、意地を張るなど。」

「すまない…」

「いや、良い見極めだ。どの道制空権を取られれば陸軍と海軍が主の俺の兵では応対できぬ。ソフィーリア様も玉砕など求めはしないだろう。」

「では…?」

「ああ、賭けに乗るとしよう。随分と分が悪い賭けだがな…」

致し方ない。相手が悪いのだ。

だが、こちらに勝算が無い訳ではない。メリアが戻っているのならば必ずしも負けるとは限らない。

<狂乱の火炎使い>の本分は空戦でこそ発揮されるのだから。

「すまない…」

「いいさ、だがこうなれば勝ちを拾った場合を考えなくてはな!」

「とりあえずメリアの嬢ちゃんとの婚約は認めざるを得ないだろうな」

「…お前、折角人が前向きに検討したのに何故出鼻をくじこうとする」

「いやそんなつもりは無かったのだが…つい」

「…分かった。それも賭けに入れよう、空軍を返り討ちにしたらメリアも家督もその男にくれてやる!」

「おい、ヤケを起こすな。おちつけ」

「五月蠅い！ 決めた！ もう決めた！！」

「わかった、わかったから、な？ 貴様もいい歳こいて若造のような事を言うな。な？」

「くくく、何処の馬の骨か知らんがメリアを泣かせるような事が有れば、初代王よりアーリントン家へと賜りしこの宝剣<竜王爪フラインメルグ>で血祭りに上げてやる……」

「だめか、もうきいちゃいない……」

「フ、フ、フ、フ、フ、フ」

アーリントン卿が腰に下げた直剣を抜き放ち、その真紅の刀身を舐めるように眺めながら不気味な笑い声を上げていた。

3 - 1 <空戦1>

肌に触れる風が最早隠しもししていない俺の黒髪を優しくたなびかせる。

ちょっと冷た過ぎる気はするが、気持ちいい。

ここは上空およそ2500m、その場でホバリングをするワイバーンの背中の上。

今回も例によってセバスさんの後ろに相乗りさせて貰っている。

その内自分一人で乗れるようになりたいな、と思う。

「来たようだ。」

「ああ、エーリカさんの言った通りだったね。」

良い気分で風を感じていた所で聞こえたメリアの声に返事をして、正面を見つめる。

今回も着けて来た<拡声の首輪>の効果で会話に問題はない。

それにしても鞆と言い、使わなかったけれども<意言の首輪>とい、この世界には予想以上に便利な魔道具が多い。

いつかどういいう仕組みなのか聞いてみたいものだ…

そうこう考えている内に正面の空の小さな点が段々と大きくなる。

あれは、敵だ。

「既にこんなに接近されていたとは。お母様が目覚めるのが遅れていたならどうなっていた事やら…」

メリアの言葉も頷ける。

中庭で派手なデモンストレーションを行った後、いざ作戦会議を。

…という流れだったのだが、目覚めたばかりのエーリカさんから

「王都を発った空軍の先遣隊が到達するまで時間がありません。今すぐ、迎撃に向かわなければ。」

という説明を受け、俺とメリアは迎撃に向かうワイバーン隊と共にやってきたのだ。

そして出発しておよそ2時間弱。僅かそれだけの時間で前方を飛んでいた偵察騎が敵の姿を捉えていた。

ちなみにソフィーとマールとメルは残って治癒魔法によるエーリカさんの治療を、医師団と共に急速に行っている。

メルはメリアとは違い元々戦闘訓練等受けていない生粋の貴族子女らしいので、そちらの方が適任だとメリアが残した。

ソフィーは、「相乗りして戦場に行きましても、足手まといにしかなりませんから……」と、心底悲しそうに語り、自ら残る事にした。

マールは俺に代わつての状況確認と連絡用に残った。しかし、100kmは離れているのに会話が出来るとは。

携帯電話のように電波塔や中継衛星が有る訳でもなく、一つ前の世界のように大結界に便乗させて通信している訳でもない。

どういう方法で可能にしているのだろうか？

これも後で聞いてみよう。電話が無く魔法のあるこの世界、通信手段の改善の参考になるかもしれない。

そうこう考えているうちに、飛来する点が段々と大きくなり渡り鳥の群れのような見た目になる。

だが、勿論鳥ではない。遠目でも分かる、人を乗せたシルエットのそれはワイバーンの群れ。

話の通りなら空軍、その先遣隊。間違い無いだろう。

…およそ50騎弱…といったところか？

対するこちらは俺とメリアの2騎に、アーリントンに駐留中だった陸軍空戦部隊の第2・第3ワイバーン中隊2部隊64騎、さらにメリアの部下11騎の合計77騎。数の上では勝っている。

だが、敵は新兵器を投入して来ているという、数の優位は絶対ではないだろう。

そしてこの部隊を撃墜し、追いついたとしても、第二、第三の部隊がやって来るはず。

ワイバーンの総数は向こうの方が圧倒的に多いのだ。

だが、どの道絶対に負けられない。だから俺も来た。

まだかなり離れた所で敵ワイバーンの群れも停止し、にらみ合いになる。

「…数ではこちらの方が有利、だが…得体の知れないのが居るな…」

メリアが両手の腕輪の位置を調整しながら話す。

あの腕輪は魔道具だ。そしてメリアが着けているのは4つ

威力の高い爆発する炎弾を精製し放つ <剛爆炎の腕輪>
貫通力の高い連射球を放つ <火連弾の腕輪>
ある程度追尾性のある火球を精製し放つ <追炎弾の腕輪>
術者の周りを回り牽制と防御をする火球を産む <護炎球の腕輪>
全てメリアが得意とする炎系の魔法を発動する魔道具。

その位置を、さっきから何度もずらしている。緊張しているのだから。無理も無い。

空戦の基本は近接でのワイバーン自身の攻撃や騎乗者による槍や魔法での攻撃らしい。

火薬はあれど銃砲のまだ無いこの世界では、弓などによる遠、近距離射撃は強風と移動でまず当らず、

当たった所で完全に失速しており然程の痛手になり得ない。

魔法による遠距離攻撃も威力こそあるものの前者に同じだ。そうそう当らない。

さらに常時魔法で温度と空気を維持している為、高威力の魔法や範囲魔法など使おうものなら魔力切れで失神し、落ちて死ぬ。

戦闘機程の速度も無く、ワイバーン自身の探知能力もあいまって奇襲などはまず成立しない。

それゆえの正面衝突とドッグファイト。

それゆえの損耗率の高さ。

空戦はどう争っても双方が甚大な損害を蒙るのだ。

だが、それを避けるための作法も存在する。

停止している敵軍の群れの中から一匹のワイバーンが突出し、飛び出してくる。

「出てきたな…では作戦通り私が行く。ユートは何時でも魔法が使えるよう用意しておいてくれ。」

「分かった。」

「カーニス！槍を！」

メリアが呼びかけると、すっとワイバーンが1匹メリアの乗ったワイバーンに近づく。

その上に乗ったメリアの隊の副隊長、カーニスさんが柄の長いハルバードを取り出し、手渡す。

年齢は25ほど。メリアの部下らしく難しい事は考えないのかサツパリした人で、俺への態度も知人が友人に対するような感じ。けれども決して不快には感じない。そんな人。

迎撃に出る前に軽い自己紹介を受けた時は気づかなかったが、どうやら彼も獣人のようだ。ふさふさの尾が生えている。

「御武運を！」

カーニスさんが再び下がり、後方の隊列へと戻る。

それを確認し、ハルバードを小脇に抱えたメリアを乗せたワイバーンが単機、敵軍へと飛んでいく。

これがその戦闘前の作法。空戦では必ず行われる前交渉。

空戦はどう争っても正面衝突になり双方に甚大な犠牲を生む。

だから戦闘前に交渉するそうだ、自分たちの優位を語り我々に降伏しろと。

けれども、当然ながらそれで収まる場合は余り無い。圧倒的な差でも引けない争いは多々有るからだ。

だからなのか知らないが、まず最も操竜に長けた隊長級の騎兵が交渉に向かい、決裂すれば即最高の騎兵同士での決戦を行う。

ここでどちらかが堕ちれば指揮官級、もしくはエース級を失い意気消沈、敗走か降伏へ、と言う訳だ。

だからこちらはワイバーン隊の隊長達で無くメリアが行く。確実に

勝つ為に。

…ちなみに俺が行けないのは色々分らないので交渉出来ないのと、セバスさんとの相乗りだからだ。

…情けない。もう一度思う。いつか一人で乗れるように成らなければ。

そう考えながら俺も鞆から袋を取り出す。ずしり、と重い袋がジャラジャラと音を立てる。

中身はつい数時間前に手に入れたく世界の欠片>。

まさか早くも使用する事になろうとは。

着いた早々迎撃に向かう事になった事といい、なんとというタイミングの良さか。つい苦笑してしまう。

今回の戦闘での作戦は至って単純。交渉決裂後俺が範囲魔法を撃つて敵を減らし降伏を迫る。全隊は突入せず迎撃に徹する。それだけだ。

「なるべくは殺したく無いので、突入してくる部隊を一撃で落とす、尚且つ継続して使用できるような魔法を使う。巻き込まれないよう敵と出来るだけ距離を取ってくれ。」

と説明してある。

なるべく殺さない、と言うのは俺の意思でもあるが、ソフィーたつてのお願いでもあった。

だから、なるべく守ろうと思う。

二人の隊長達はメリアに説明を受け作戦内容を聞いたとき「空で範囲魔法を？何を言っている？」と渋ったが、俺の髪と目を見て納得してくれた。

「少し前に出ます。後は作戦通りに。よろしく願いします。」

背後の2、3番隊長、それにカーニスさんに話しかけ、セバスさんにワイバーンを前に出してもらおう。

<攻撃魔法>の発動時にあまり近くに居ると巻き込み兼ねない。

相手も何騎かがやや前に出て来ている。構わないだろう。

そうこうしている内に両軍の中央で合流した二騎のワイバーンが円を描くように飛び始める。

交渉が始まったのだ。

内戦の火蓋が切って落されようとしていた。

3 - 2 <空戦2>

2匹のワイバーンが両軍を離れ、その中央で小さな円を描いて飛ぶ。これは空戦の開始前の問答。空で睨み合った軍隊が、戦闘の意思の確認をする様式的な行為。

相手の代表は<空軍の撃墜王>の異名を持つゼネスだと思っていたのだが…

「まさかお前が来るとはな、フィオ。ゼネスのヤツはどうした？」

「……… 謹慎中。義父むしふに賛同さんとしなかったから。」

殆ど顔の見えないうつそうとした濃い紫色の前髪の間隙から見える感情の伺えない片方の瞳。

その下にある小さな唇から放たれた抑揚の無い声でフィオが答える。

…あのバカもこいつも相変わらず、か。

正直コイツが来るのは予想外だった。フィオは開発局の人間だ。空軍での立場は確か名誉小佐の筈。

ワイバーンの騎乗をより一般的にする魔道具を開発した功績で送られた、肩書きだけで実力を伴わない少佐。

あのバカが強情張って来られなかったから代わりに来たということか？

「そうか、まあアイツらしいか。それで？　一応聞いておこうか、何用だ？」

「……降伏勧告」

「断る」

予想通りだった答えに、即答する。

「……なら、実力行使になる」

「確かに、お前の所相手では分が悪いだろうが……引く訳にはいかないな。」

相手は空軍、空の本家だ。さらにこの部隊は制空権を取る為の部隊、かなりの精鋭部隊だろう。

本隊は恐らく足の遅い空爆装備のディノスバーンで後方から追っつけてきているはずだ。

「……命を粗末にするものじゃない」

「そういう訳にもいかない。反乱軍を野放しには出来ないからな。」

「……今はもう、貴女達が反乱軍。」

抑揚の無い声で、聞き捨てならない事を言う。

「ふふん？ 何を持って反乱軍と言う？ 人数か？」

「……私は政府の命令で来た、だから正規軍」

「政府、政府ね。どうせお前の義父の命令ではないか。ならこちらは王と王妃の命令で来た。王国軍だ」

私の言葉に息を呑む。そうだ。ユートとソフィーまでは想定外だろう？

そしてコイツのフルネームはフィオーネ・フィル・バルナム、

夫人の連れ子らしいから血は繋がっていないのだが、末席とは言え件の首謀者バルナム卿に家督相続権まで与えられた戸籍上の子。

そこもまた不思議だ。コイツを最前線に送り込む意図が分からない。

魔道具関連技術の天才ではあるらしいが、騎兵としては並以下の筈だ。

…いや、そんなことは向こうの都合か。気にしても始まらない。

「……………居るの？ 王…も？」

「ああ、居るとも。それも、私の夫に相応しい程の男だ」

「……………メリアの？ では、メリアより強い、と？」

「ああ、それも圧倒的にだ。この時期の<鎧付き>の<人型>を無傷で返り討ちにしたぞ？ それも魔法でなく、剣でな！」

珍しく戸惑いの色が籠った声を出すフィオに自慢する。自重せずに自慢する。

溢れ出す高揚感。顔がにやけて行くのを止められない。私は既に戦闘の空気に酔い出しているようだ。

「……………俄かには、信じられない」

それはそうだろう。当然だ。だが

「王は後ろだ。実力行使したならば分かるさ…分かった頃には全員死んでいるがな」

「……………引き下がる訳には、行かない」

「なら好きにするんだな。王も王妃も勤めて犠牲を求めては居ないが、情けをかける余裕は空には無いぞ」

そう。空で撃墜されると言う事は、たとえ無傷でも高高度から地面にたたき付けられると言う事。まずもって死しかないのだ。

そして勿論それは敵、味方共に。

「……新兵器、使う。そちらの方こそ、降伏するなら早いほうが良い」

「あのでかいワイバーンか」

フィオの後方、敵軍の隊列にディノスバーン程ではないが、人を騎乗させていない無人の一回り大きいワイバーンが居る。数はおよそ…15、か？

「……そう。〈ヴイーヴル〉と名づけた。モンスター化させたワイバーン。速さも、強さも、ケタ違い。」

「そうか…モンスターを操るだけでなく作り出しても居たのかバルナムは」

新兵器の素性は割れた。恐らくあの豚の使った物と同系統のもの。

それを用いてモンスターを兵に、隊にしたのだろう。

モンスターの膂力を持った兵による軍隊。…確かに、強力だ。

それに私には無かった発想だが、操れるならば作ったほうが早いのもその通りだ。

外海に数日連れ出せば良いのだから。

それによってワイバーンのようなマナ異常に敏感で、モンスター化する前に逃げる翼を持ったものまで手駒にできる。

…用途、用兵の可能性も広く、高い汎用性が期待できる。…良く出てきている。見事なものだ。

「……この日の為に。義父さんはもう既に手段を選ぶ気が無い。」

「そしてお前が来たのはアレを操るのが一番上手いから、と言った所か。」

「……御明察」

「なるほどな。では、交渉は」

「……決裂」

「致し方ないな」

「……貴女はバカだ」

溜息が出る。双方相手には分からない鬼札を持っているからの強気での開戦。

同じ国の兵同士で殺し合う事になるなんて。

「バカはどっちだか、な。だがこれだけは礼儀として言うておこう。無駄に死ぬなよ。」

「……貴女も」

「では、やるか」

「……容赦はしない」

円を描くように飛んでいた2匹のワイバーンが翻り、円が崩れる。

一度大きく離れ、方向転換し、速度を上げて正面からすれ違つ。

これは儀式。いや、様式。交渉決裂、戦闘開始を告げる為の最初の狼煙。

だが躊躇いは無い。一撃で墮とすつもりで<剛爆炎の腕輪>に魔力を込め、<爆裂火球>を作り出す。

後は全力で打ち込むだけ、そう開戦の合図となる一撃を

すれ違う刹那、空に大きな爆発が起こった。

3 - 3 <空戦3>

爆炎の中から2匹のワイバーンが飛び出す。どちらも、無傷だ。

「防いだか！　ゼネスの代わりに大将を勤めるだけの事はあったか
！」

メリアが旋回上昇しつつ叫ぶ。

<爆裂火球>も再度作られている。いや、それに留まらない。

全ての腕輪が魔力を送り込まれ4種の魔法が待機状態になる。

「……貴女が来るのは予想できた。この子達には<甲盾熊の盾>を加工した鎧をベースに<対魔法障壁>の盾を張っている。……貴女の魔法では貫けない」

フィオも答える。だが、こちらは上昇するメリアを追わず後退する。

「何故、下がる！」

「……言った筈。新兵器を使う」

そう言つてフィオが両腕に付けた腕輪が発光する。魔道具。間違いなくあの豚が使つた物の同系だ。

「……！」

「……<ヴイーヴル>」

急上昇中のメリアを追つて、隊列から予め突出していたワイバーンより一回り大きな巨体をした<ヴイーヴル>が一頭、爆発的な加速で追撃を開始する。

速い！ 追いついてくる！？

桁違い、と言われていたが、その予想をはるかに上回る速度の<ヴイーヴル>が追いつく前に、

上昇速度が落ち始めたところで旋回し、捻りを加え斜め下に切り返し一気に加速する。

追撃してくる<ヴイーヴル>も旋回し、追ってくる。

旋回中に視認する。こいつも鎧を着けている。恐らく同じ物だろう。

そして降下速度も速い、特に加速はワイバーンの比ではない。操竜を過せば一瞬で追いつかれかねない。

切り替えして正面からぶつかるのを避け、そのまま降下。

さらにどんどんと降下、地面が接近してくる。

見極める、加速と停止距離の限界を……ここ……だ！

まず目晦ましとしての爆裂火球の設置を行う。

後方で派手に弾けさせてから一気に回避機動を始める。

「ぐっ……………！」

翼を開き急停止と共に縦に後回転。クルビットの少し大回りをした版だ。負担は大きいが大きく位置をずらす必要がある。

無茶な機動に全身が軋みを上げる。

縦回転するワイバーンの背を掠めるように<グイーヴル>が通過する。

あの速度では停止できないだろう。地面に叩きつけられてそれまでだ。

さらに回る、天地が逆さ向き、何処を向いているのかわからなくなりそうになる。

だがその視線の端で捉えた。

<ヴイーヴル>は停止が間に合わずかなりの速度のまま地面へと墮ち、砂煙を上げた。

「かはっ……………」

回転機動を終え、無茶な機動で詰まった息をはく。

人の乗らない飛竜を操っていればこの程度だ。

竜自身は普段は無い鎧のせいで降下速度と停止距離を見誤る。

自分が乗らないからその限界を察知できない。結果無茶な機動をさせて墮ちる。

無様なものだ。

姿勢を建て直し下を向いている竜首を一気に上げる。

体に激しいGが押し掛かり、地面が近づく。ギリギリだが問題ない。

そのままUの字を描いて上昇に入る。同時に戦場を見渡す。

まだ、両軍はぶつかっていない。フィオは何処だ？ あいつさえ墮せば…

「そ、こ、かつ……………」

視線を巡らせ、見つける。自分のワイバーンに跨り無感情にこちらを見下ろすその視線を。

落ち着き、動揺していないその、

操竜を誤り、墮した事に、動揺していない？

普段から感情を見せない相手ではあるが、肌が泡立つ。

この感じには覚えがある。〈人型〉を焼き尽くせなかったあの時

咄嗟の判断で上昇中のワイバーンを急旋回、空を横に転がるようにバレルロールさせる。

その後、自分の飛んでいた位置を翼を大きく広げた影が貫いていく。

「かつ…はっ……」

急上昇中の無茶な急旋回に、一瞬意識が遠のく。

墜ちたのでは無かったのだ。あんな速度で着地、さらに再び急上昇して追いついてきたのか？ なんとという性能だ！

そして半ば朦朧とした視界の中、今度ははつきりと姿が見えた。

ワイバーンより一回り大きな翼。それでいて胴体自体は大差がない。翼が、違うのだ。

翼膜でなく長く硬質なブレード状の鱗で、翼が少し大雑把な鳥の羽根のように埋められている。

それはより飛行に洗練された形状。と同時に風切り羽の部分が本当の刃物のような切れ味を発揮するのだらう。

まずい。

急旋回の動作が終わり、減速したせいで意識がはつきりとしてくる。

同時に思考も加速する。

<甲盾熊の盾>製の鎧のせいでこちらの魔法は通らない。さらに圧倒的にあちらの方が空戦性能が高い。

このままではいずれ追いつかれ、やられる。

そして、同様に対人戦を想定した装備の自分達の軍では、こいつを墮とす事は容易いな事ではない。

ともすれば全滅の可能性すらありえる。

…どつする？

修理中の＜魔槍ヴェルスパイン＞の代わりに持ってきたロングハルバードは魔道武器ではない、ただの武器に過ぎない。

対人では兎も角、対モンスターでは役不足。

＜魔槍ヴェルスパイン＞であれば、＜対魔法障壁＞など無視して直接貫けたのに！

「無い物ねだり、だっ！」

上昇した＜ヴィーヴル＞が大きく弧を描いてこちらへと向き直る。

今は撃退方よりもこの窮地を抜ける事が先決だ。

先ほどの急旋回で上昇速度が落ちた今の状態では、普通の敵相手でも格好の的ではない。加速しなくては。

竜首を下降するために回そうとした、その時、

「メリア、俺が仕留める。来い！」

私の名を呼ぶ愛しい男の頼もしい声が聞こえた。

3 - 4 <空戦4>

「第二中隊、総員抜剣！！ 魔兵騎は密集陣形で前へ、牽制用意だ！ 何時でも撃てるようにしろ！！ 槍兵騎は拡散し上昇を開始せよ、ただし上がりすぎるな、敵より高ければ良い！ 復唱は要らん！！ 行け！！」

「第三中隊！ 命令は同じだ、左を埋めろ！ 特殊任務隊の方は援護に回ってくれ！！」

両軍の中央で巨大な爆発が起こった直後、第二、第三番隊隊長の激が飛ぶ。

前方に見える敵の隊列は動きがない、だがこちらは作戦上守りがメインだ。都合が良い。

「了解した！ 野郎ども！！ 聞いたな！ 俺らは本隊の取りこぼしを潰すぞ！！ バディ単位で散開！！」

「オオオオオオオオオオ！！」

カーニスさんが応え、メリアの部下たちも動く。ぶつかる前から戦いは始まっている。

そうこうする間に爆炎の中から飛び出し急上昇中のメリアを追って、ワイバーンより一回り大きな巨体をしたくヴィーヴル>が追撃を開

始する。

その速度が速い。追いつかれかねない。

「セバスさん、俺が行きます。メリアに近づいて下さい。」

「どうするんですか？」

「<攻撃魔法>を使います。任意距離に近づいたものをバラバラに切り裂く範囲魔法です。」

「効果は見込めるのですか？ 見たところあのモンスターもワイバーン同様<甲盾熊の盾>製の鎧を着込んでいます」

「問題ありません。森でその<甲盾熊>を倒した魔法より強力な魔法です。急いでください。あのままではメリアはやられる」

「…承りました!！」

メリアとフィオの着けていた<拡声の首輪>の効果により二人の会話は聞こえていた。

そしてあの会話とあの鎧を着込んだ<ヴィーヴル>の魔法耐性。

対人を想定した装備の今のメリアには間違いなく効果的な手が無い。

メリアに手が無いなら、恐らくここに居る誰もがそうだろう。ならば、甚大な被害は免れない。

事に寄れば全滅だってありえるだろう。だから判断する、俺が行くべきだと。

「全員聞いてくれ！！ これから俺はメリアに合流して広域の＜攻撃魔法＞を使う！！ 巻き込まれたら死ぬぞ！！ 敵からなるべく距離を取っていてくれ！！」

声を張る。＜拡声の首輪＞の効果で大声は出さなくても聞こえるのだろうが、ここは気分だ。

久方ぶりの戦場の空気に俺も酔い始めている。

勇者時代に戻ったような高揚感と、残虐性が鎌首をもたげて来る。

そうこうしている内に＜ヴィーヴル＞を地面に墜落させる事を狙ったメリアが急上昇。

その下から墮ちたと思われた＜ヴィーヴル＞が飛び出し物凄い加速で追撃をする。

メリアは気づいていない。あれは、不味い。

「お嬢様はあのぐらい察知して見せます！」

俺の気配を察したのか、セバスさんが叫ぶ。

「メリアがあれをかわして速度が落ちた所を狙って飛び移ります。」
「承りました！」

その言葉を信じる。メリアを、信じる。

セバスさんの指示を受けワイバーンが翼をたたみ加速して向かう。

メリアが<ヴィーヴル>と交錯するであろう位置はまだ大分高度が下だ。

「下を潜りぬけてください。減速の必要はありません、上手く取り付きます。」

メリアが、真下からの<ヴィーヴル>の強襲を紙一重でかわす。だが、大きく姿勢を崩し減速してしまった。

<ヴィーヴル>はそのままの勢いで上昇し大きく弧を描いての縦旋回…

加速をつけ再度メリアを狙う気か。

メリアが乗ったワイバーンが竜首を下げる。再び加速する気なのだろう。だが、あれでは間違いなく加速しきる前に襲われる。

たとえ回避しても加速することは適わず、後はなぶり殺しになるだけだ。

魔法で迎撃しては間に合わない。鞆に<世界の欠片>を戻し、代わりに剣を取り出す。

「 Cahes [Miehmstsd] 」

詠唱する。最初は<水環鋸ルト・アサクター>と同じ。だが、作られるのは幾重にも巻かれる水のロープ。

輪にはまだならない。その水を加速させずに詠唱を一旦止め、叫ぶ

「メリア、俺が仕留める。来い！」

メリアが反応する。だがそのせいで下降しようとした動作は途中で止まり、中途半端になる。もう、完全に避けられない。

「セバスさん、俺が離れたら一気に離脱を！」

「はい」

一言断り、宙へと舞う。同時に先ほど詠唱途中で止めて縄状にした魔法水をメリアのワイバーンに伸ばし、絡める。

消費魔力が増えるが、こういう融通が利くのが段階製作する類の魔法の強みだ。

このまま直接乗ってはワイバーンへのダメージが見過ごせない程になるだろう。

だから直撃コースを避け、水縄にぶら下がり、メリアのワイバーンを支点にその周りを回る。

あつという間に周囲を2/3回転。

体が天地逆を向いてしまったが、丁度メリアとくヴィーヴルとの間に躍り出る。

激突する寸前に考える。

このまま剣を振り、切りつける。抵抗無く切れたならば、倒す事はできるだろう。

だが、残骸はメリアを直撃してしまう。

では切り裂かず抵抗をもろに受けつつ弾くようにすれば？

それもだめだ。質量差が有り過ぎる。押し切られて結局メリアは巻き込まれる。

なら…

考えたのは一瞬。そのまま順手で持っていた剣を逆手に持ち替え、正面に迫るくヴィーヴルくの頭に突き入れる。

火花を上げてく甲盾熊の盾く製とおぼしき兜と剣がぶつかり、一瞬の抵抗の後、く強化魔法くの込められた剣が競り勝ちその兜を、頭を貫く。

仕留めた。

だが、勢いは衰えてはくれない。そのまま首がへし折れぶらんと回り、俺の体がくヴィーヴルくの背へと周る。

ここまでは、目論見どおり。

ヴィーヴルの背に足を付け、勢いを殺し着地する。さらに剣を手放し、先ほど使った水を軽く絡ませ固定して両方の翼の付け根に腕を伸ばす。

後はこの翼の向きを変えてしまえばメリアには当たらない！

<強化魔法>を活性化させ<膂力強化>を発動。そのまま握り、潰し、引き千切る。

「おおおおおおおおおおお!!!」

ブチブチブチと音を立て、肩の骨から外れた翼が力を失い風に流されるままになった所で確認する。

予測どおり、減速した<ヴィーヴル>の軌道は、ぎりぎりメリアのワイバーンの下を潜り抜けるものへと変わっていた。

「ユート!」

メリアが俺を見つめ、手を伸ばす。すれ違い様、絡めて居た水を解き<ヴィーヴル>の背を蹴って飛ぶ。

俺が蹴った<ヴィーヴル>はさらに軌道を下げ、ワイバーンにまで足蹴にされて、堕ちて行った。

ふわりと宙を舞い、伸ばされた手を掴み、ワイバーンの背へと着地する。

剣を一本手放す事になったが、一先ずは上手く行った。けれども悠長にはしていられない。

「メリア、このまま敵の方へ！ <攻撃魔法>を使う！」

「！」

俺の発言にメリアが息を呑む。<攻撃魔法>と聞いて以前のマールの説明でも思い出したのだろうか？

「安心して、全力では行かない。まずはあの<ヴィーヴル>を全滅させる！」

「……承知した！」

見上げる。

上空、敵は×字鶴翼と言った陣形で10匹程の<ヴィーヴル>がやや上方より真つ直ぐ正面突撃するようだ。

<ヴィーヴル>の機動力、攻撃力からすれば、正面から突き込んで壊乱させるのが一番。と見たのか。

難しい策も何も無い、力任せの蹂躞策。確かに効果的だろう。だが、そんな事をさせる気は無い。

ブン、とさつきから維持し続けていた水縄を振るい、絡まりの無い一本の縄にする。

「 Ochch zuad ovme h Falain ud T
llanz , cirnen Rinceg
」

さらに再び詠唱。

次の段階へ魔法を進ませつつ、靴から18個の<世界の欠片>を取り出し、水縄に吞ませる。

水縄が俺の周りから、ワイバーンの周り数メートルへと半径を広げ幾重にも輪を作る。

そして、ついに水縄の始点と終点がつながる。

「 MrMfied
」

最終段階の詠唱。 加速が始まる。

今回は最初から全開だ。 以前の石片と違い<世界の欠片>に遠慮は
いらぬ。

イイイイイ

あっという間に空気が断熱圧縮でプラズマ化し、多重に連なった輪
が発光する。

その色は以前とは違いほぼ純白。輝度も比べるまでも無い。

速度も以前の<水環鋸>の約5倍、ルト・アサクター30000m/s程に達している。

「ユート、ワイバーンが脅える!!」

「抑えてくれ、内側に当りはしない!」

「くっ…」

激しく発光し、ゆっくりと自分の周りを回転しているように見えて
実は物凄い速度で回る幾重もの輪の光と音にワイバーンが驚き、飛
行が乱れる。

しかし、ここまでくればもう多少の揺れなど問題ない。

狙いを定めてバランスよく全周を巡っていた輪を収束させく発動言
語>を放つ。

「ジオメトリック・アサクター<多連層水環鋸>!!」

純白の光を幾重にも重ねた輪が一部固定を開放され遠心力で一瞬で
広がる。

下方から瞬きする間よりも早く飛来する光の斬線の束に追いつかれ
たくヴィーヴル>達が、瞬く間に千切りになり、砕け散った。

3・5〈空戦5〉

「……あれは、〈召喚されし者〉?」

〈グイーヴル〉を操り、メリアを追わせながら正面を見ると、敵の隊列から1匹のワイバーンが飛び出していた。

二人乗り、その後ろに乗った恐らく男だろう人物の髪が黒い。

「……メリアを助けるつもり、かしら? でも」

そう、正直もう遅い。

メリアのワイバーンにはこのまま速攻で傷を負って墮ちてもらおう。

運が良ければメリアは死なずに済むだろう。重傷は避けえないが。

「……それに、一匹増えた所で変わらない。」

〈グイーヴル〉の空戦性能は折り紙付だ。

さらに今回の為に高価なく甲盾熊の盾〈製のワイバーン用鎧を3つも支給された。

一つは私の乗るワイバーンに着させたが、

残り2つを私が操るくヴィーヴル>5体の内2体に着させている。

だからどんなにメリアや王女、それにく召喚されし者>が強力な魔力を持っていても、どうにもならない。魔法自体が殆ど効かないのだ。

今回の作戦で警戒すべきはメリアの持つく魔槍ヴェルスパイン>ぐらいのものだった。

だがそれもアルモスで起こった彼女とく人型>との争いで壊され、修理中だと調べがついている。

振って湧いた偶然だが、確実な勝利を得るチャンスは、まさに今しかなかった。

「……………敵軍は、動かない？」

陣形を変えてはいるようだが…何を考えている？　すでに火蓋は切って落されている。

なのに動いたのはく召喚されし者>の乗った1匹。

攻めずに守ると言うのか？　何か策があるのか？　いや、気弱になるな。

ワイバーンと違い、翼まで使用して四足着地をする事ができるようになった<グイーヴル>は衝撃吸収が抜群に上手く、着陸をかなりの高速下で行える。

さらにその強靱な四肢で跳ね上がり、そのまま羽ばたく事によって上昇時も一気に加速をするのだ。

堕ちたと思ったのだろう、上昇する<グイーヴル>にメリアは気づいていない。

ほんの一瞬、視線がぶつかり会う。

無様、と思う。自分の常識に拘泥し、敵から目を離すなんて。

「……このまま、ケリをつける」

だが、完全に不意打ちのはずの一撃を回避される。

まさかとは思うが、ただほんの一瞬私と目が合っただけで察知したとでも言うのか？

いや、例えそうではなくとも回避して見せた。

流石メリア、と感心する。

戦闘でのカンの冴えには目を見張る。王国最強の名は伊達ではないようだ。

しかし、バランスを崩したワイバーンは最早失速状態。

このまま二度と加速することなく<ヴィーヴル>に切り刻まれて終わり、だ。

そのまま上昇、旋回させ命じる。「メリアの乗ったワイバーンを傷つけ、不時着させる」

彼女を殺せば、アーリントン家はますます態度を硬化させるだろう。

今はワイバーン隊を墮とし、制空権さえ得られれば良いのだ。

制空権さえ取ってしまうえば後から来る本隊が空爆し放題。

陸軍も海軍も物の数に入らない。そうならば降伏しかない。

あの高度なら、目論見通りに出来る。

視線を正面に戻す。次の敵は、あっちだ。

そう、思った瞬間だった。

ぷつり。と糸が切れたような感を受ける。

「……………何が」

覚えの無い感覚。自分に何が起きたかわからず、思わず体確かめる。異常は無い。

「……………今のは一体？」

分からない。だが、今は気にする事でもない。今は……

そこまで考えた所で前方で純白の光の線が下から上へと物凄い速度で幾本も走り抜けた。

「……………え？」

ばらり、と先行し今にも敵陣へと突入しようとしていた<グイーヴル>が、一瞬でバラバラになり、崩れ散る。

ばかな。迎撃魔法か？ 確かに今飛び込んだ<グイーヴル>達は鎧を着けていない。

高位の魔法使いなら魔法で墮とす事は可能だろう、無警戒過ぎた？

「フィオ隊長！」

周りの兵も動揺する。

持ち込んだ15匹の内の10匹もが、今回の作戦の要である虎の子のくヴィーヴル>の大半が、一瞬で墮ちたのだ。

完全な失策。無理も無い。

そしてこの状況はかなりまずい。残っているくヴィーヴル>は私の操る5匹しかなく、敵は墮とす術を持っている。

まずは今の魔法の術者を墮とさなければ、鎧を着たくヴィーヴル>2匹に腕輪を通し命令を…

しようとした所で気づいた。1匹の反応が、無い。

何故？ 周りを見回す。1、2、3、4私の周りを警護するようにホバリングしているくヴィーヴル>達。全匹居る。

では、居ないのは…

そこまで考えた所で前方を通り過ぎた光の弦弧が先ほどの巻き戻しのように戻っていくのが見えた。

つい、目で追ってしまったその先は、先ほどもう片付いたと思ったメリアの方で、

二人乗りになったメリアのワイバーンが、幾何学的な光の輪を纏ってゆっくりと上昇して来ている所だった。

3・5<空戦5>(後書き)

9/4<グイーヴル>の数の描写を加筆しました。

3 - 6 <空戦6>

メリアと黒髪の男を乗せたワイバーンが上昇して来る。

そして、その周りをゆったりと回り、純白に煌く幾何学的な大量の輪で出来た球状の魔法。

あれが、さつき兵たちの操る<ヴイーヴル>10体を一瞬で墮とした魔法に間違いない。

しかも見たところ<待機型魔法>だ。つまり、魔力が続く限り消えない。

「……総員、下方から迫るワイバーンに魔法による集中攻撃。……弾幕で視界を塞ぎつつ、あの<待機型魔法>を砕いて」

敵軍を包囲するために散り始めていた兵士に新たな指示を出す。

あの魔法は危険過ぎる。

どういう魔法か分からないが人工と言えモンスターである<ヴイーヴル>を一瞬で10匹も倒す程の威力。

こちらに向けられたら<対魔法障壁>を張っていない兵は恐らく全て、落される。

今すぐ、対応しなければ。

兵士達が慌てて方向を変えて魔法を放つ。およそ30人の精鋭兵士による集中攻撃。

命中率は悪いだろうが、的は大きい、これで碎けない訳が無い。

「……………<グイーヴル>」

さらに追い討ちとばかりに、残った4匹の<グイーヴル>で唯一鎧を着た1匹に指示を出す。

<甲盾熊の盾>の<対魔法障壁>ならば、人の操る魔法ではるくに歯が立たない。体当たりで碎く事が出来るはず。

それにあれ程の威力の魔法だ、恐らくあれこそが今回の戦いの切り札。メリアの自信の源。

だが最初から二人乗りで来た、という事は消費が酷く、あの魔法を使っているのは飛行用の魔法も維持する事ができないのだろう。

つまり一度碎けば魔力切れを起こし2度は使えない……………筈。

だから腕輪越しに<グイーヴル>へと命令する。「突入しあの魔法を碎け。」と

そう判断し、それが間違いだと言う事に気づいた時にはもう、遅かった。

ぷつん。と線を切るような感覚が再び脳裏を掠める。

今度こそ分かった。〈グイーヴル〉が死んで、腕輪の信号が途絶えた感覚だったのだ。

〈待機型魔法〉を砕こうと光の輪へと突入した〈グイーヴル〉は、鎧ごと粉みじんになって、文字通り消失した。

予想外、だった。

だが推測することは出来たはずだ。メリアを追った〈グイーヴル〉も鎧を着させて居た。

それも反応が無いのだ。つまり、先に墮とされていたのだ。

だが、私は失念した。〈甲盾熊の盾〉が魔法で打ち抜かれるなど有り得ない、と。

常識に拘泥したのは私だった。

〈グイーヴル〉の突入に先駆け魔法の弾幕を張り、〈待機型魔法〉を砕こうとしていた兵士がざわつく。

打ち出された30人分の魔法はほぼ命中している。

だが光の輪によって打ち消され、見るからに効いていない。

回避行動すら必要ない、と言わんばかりに悠然と上昇して来ている。

その場に押し留める事すら出来ず、徐々に弾幕が薄れ、

何時しか誰もが魔法を打つ事も止め、息を呑み押し黙る。

勿論この程度で魔力が尽きるような連中ではない。

だが何故、とは思わない。私が感じている事を皆感じたのだ。

開戦前にメリアが告げた言葉が脳裏を巡る。

『分かった頃には全員死んでいる』

震えが、起こった。

息が、詰まる。

何だ、これは。

戦場に来たこと自体は初めてだが、死を覚悟して居なかった訳でもなく、むしろ望んでいるぐらいの気位のはずだった。

だというのに、甘かった。勝てると思っていて疑っていなかった。

寡兵とは言え15体もの<ヴイーヴル>を持ち込んだのだ。

アーリントンのワイバーン隊ではなす術もない筈だったのだ。

だが、現実には違った。

これが、王の力。

戦慄する。有り得ない程の、圧倒的過ぎる力。

だめだ。

何も打開策が思いつかない。

怖い。

芽生えた恐怖が抑えられない。

勝てない。

勝てる訳が無い。

殺される。

そう感じ、思考がそう思った事を理解した瞬間。

全身が震えだし、ガチガチと噛み合わない歯が耳障りな音を立てる。

今の今までどんなに辛い目にあっても死を恐れた事など無かった。

違う。殴られようと、剣で貫かれようと、この身は死ぬ事がない、と誤解していたのだ。

今、生まれて初めて私は死を感じたのだ。

<甲盾熊の盾>の<対魔法障壁>を平気で貫き<ヴィーヴル>の巨体を粉みじんにした。

今まで見たことも無い、直視するのも辛い、……まるで太陽のような物凄い輝きの魔法。

目の前にある理解不能なそれは、圧倒的で、絶対的な死。

これが、恐怖。

恐怖は人を停止させる。

誰もが動けない中を、悠然とメリア達を乗せたワイバーンは舞い上がり、

私の前方、数10メートル程の所で上昇を止めホバリングを始める。

「動くな」

声が、聞こえた。冷徹な、断罪するような、淡々とした男の声。

同時に私の周りを護衛するようにホバリングさせていた3匹のくヴィーヴル>が、

真っ二つになって絶命し、墜落しながら崩れ去った。

3・6<空戦6>(後書き)

9/4<ヴイーヴル>の数の描写などを加筆しました。

3 - 7 <空戦7>

「動くな」

そう、告げると同時にジオメトリック・アサルト多連層水環鋸の輪を背後に危険が無いよう調整し、2本固定から解き放つ。

開放された輪は、遠心力によって一瞬で広がり、狙いあまつ事無く残った3匹の<ヴィーヴル>だけを真つ二つにする事に成功した。

そのまま自分を半包囲した状態で自失している敵兵に語りかける。

「全員、聞こえるな。これでお前たちの使役するモンスターは全て墮とした。降伏勧告だ。大人しく武装解除をして投降してもらいたい。」

最終勧告を行う。

…これで下らないなら、もうお終いだ。

返事を待つ。全ての判断は今正面に居るこの少女が下すのだろう。

じわり、と周りの兵士が位置をずらし包囲網を完全にしようとする。

流石は精鋭兵。早くも自失状態から立ち直ってきたようだ。

だが、構いはしない。ジオメトリック・アサルト<多連層水環鋸>は全方位攻撃可能だ。拒むなら、全ては一瞬で片が付く。

「……捕虜の、扱いは保障してもらえるの？」

「……む。」

「勿論だとも。特にお前は良い切り札になってくれそうだしな。」

そもそも捕虜の扱いが分からない俺を察したのか、メリアが口を挟む。

「……一つ、条件を出したい。」

「何だ？」

「……幾人か……いや5人、逃がしてほしい。……後続の部隊や本隊にも作戦失敗を報告する為に。」

思案する。確かに、全員捕虜にするまでも無いだろう。

それに何も知らずにこのまま次々と攻めて来られても殲滅する事になる。

……無駄に死ぬ事も無い、か。

報告を受けた本隊が作戦を立て直してから改めて攻めてくるかもしれないが、その場合も殲滅するだけだ。

造作も無いだろう。嫌になる程に。

対策を思考し終えた所でメリアに目配せをする。俺が答えてもいいのか？ と。

僅かの間も無く頷かれた。だから、口を開く。

「構わない。だが、一つだけ忠告しておく。作戦を立て直し再度攻めようとしても無駄だ。以降来る部隊が攻撃の意志を見せるならば、また返り討ちに遭って貰う。」

「ついでに一部開放するのも、連行した後だ。」

「……わかった。」

メリアも補足する。

「……全騎集合。これより武装解除をし、投降します。……色気は出さない事。」

「了解、しました……」

フィオがあっさりと投降を指示する。

俺とメリアを包囲しようと動いていた部隊が、腕輪や槍等を仕舞いながら彼女の後ろへと回り、整列。

ワイバーンの口元にかけられた手綱を片方外す。

投降の為の行為なのだろう。確かに何となくワイバーンを操り難しくなる気がする。

「聞こえたな！ お前たち！ こちらは包囲だ！ 武装解除を確認次第拘束、連行するぞ！」

背後の隊長達が激を飛ばす。

「メリア、少し上昇しよう。このままじゃ接近し辛いだろうし、まだこれを解く訳には行かない。」

「ああ、そうだな。」

少し離れるように上昇する。触れれば粉々にされるような魔法を張っていては、味方でも近くに寄ってくる事すら恐怖になるだろう。

ある程度離れたところで彼らもフィオ達を包囲するように移動。

黙々と、接近した兵士が手錠のような物を相手に投げて渡していた。

それを全員が腕につけるのを確認して、兵士がこちらに拘束完了の報告してくる。

それを見止めたメリアが口を開いた。

「ユート、もう大丈夫だ。魔法を解除してくれて構わない。」

「分かった。」

ジオメトリック・アサンプター
＜多連層水環鋸＞の速度を落す。回転が緩み、プラズマで出来た層が消え、魔法水と＜世界の欠片＞が確認できたところで＜世界の欠片＞を回収。

手に取った＜世界の欠片＞は全く変形しておらず、高温にも成っていないかった。

…俄かには信じがたい。凄い金属だ。

感心する。だが、今はそれよりも

「決着、だね。帰ろうか。」

「ああ。」

戦闘による高揚が落ち着いていた。

前途は多難だ。だが初戦は終わりを告げた。一度戻り、今後の事を考えなくてはならない。

「カーニス、必要は無いだろつが損害報告！」

「人員、装備共に皆無！ 完勝です隊長！！！」

「当然だな。よし、では撤収するぞ！」

「『『『『『了解！！』『』『』『』『』』』』』」

メリアが撤収を指示する。

マールに頭の中で完勝を報告し、俺たちは帰路に就く事にした。

4・0<トラとガブヤン>

収監されて4日目、この日大量の書類と格闘中のキャメル卿の元を訪れたのは、頭の固い扱いに困る男だった。

「で、トラ公どの。ワシは忙しいんだが？ 何の用だ？」

「貴様までか…いや気にするな、こつちの事だ。あとな、ガブヤン。呼んだのは貴様の方だろうが。」

開口一番にかけられた不躰な言葉に律儀に返す。

それにしてもどいつもこいつも…昔の呼び名を使うのが流行っているのか？

「ああそうだった。王家の法務権限を一時移権されたおかげで貴族どもの脱税が取り締められそうだな。怪しい連中は全て纏めておいた。そいつを貴公に渡すから一斉立ち入り捜査を頼みたい。」

そう言ってこそそそと机の上の書類の山から一塊を選別して取り出し、フェルブルム卿に手渡す。

おとつと…とかなりの厚みの紙の束を受け取り、一番上の1枚の内容に軽く目を通す。

ふむ。それにしても一斉に？ この量だし一人ずつやっている間に逃げられないためか？ しかし…

「…まあ、別に構わぬが…どのぐらいいるのだ？」

バサバサと大雑把に数枚捲りつつ聞いてみる。

どれを見ても、書かれているのは違う人物。…まさか

「…大なり小なりはあるが既に判明している違反者だけでおよそ全体の7割だ。だから毎回言っておつたろうが財政は火の車だ。」

適当に捲くついていた手が止まる。

「な、7割？ そんなばかな？ 何故そんなに居るんだ!？」

まさか、と思つたそのさらに遙か上に行く言葉に驚く。

「分からののか？ 王が許していたのだよ…見返りに賄賂を受け取っていたのだろうな。」

「馬鹿な！ あのオヤジが賄賂だと!? ありえん!！」

「収支によるとそれが一番辻褃が合う。それに晩年の王が商人を集め何か高額なものを私財で買い漁ったのは分かっておる。」

「それは我輩の方でも確認しておる。…だがあれは<魔晶石>ばかりだぞ？ 魔道具や魔導炉に欠かせないし別に不思議はあるまい？」

王は研究好きだった。当時のバルナム卿と隙を見ては自分用に用意した研究室に籠って色々な魔道具を試作し、ついには量産体制を整える為の魔導炉まで完成させたのも王だ。

それに元々材料は気の向いた時に私財で買う人だったし不思議はない。

「きちんとは把握しておらんだか？ ワシの方で王の私財をそれに換算すれば300万では済まぬ数の<魔晶石>を買い漁った事になる」

さ、さんびゃ…く…？

驚愕する。

馬鹿な、並の魔道具を作るのに必要なく魔晶石は程度の低い物でも3〜4個あれば事足りる。それを300万個だと？

「そんな馬鹿な、何をするのにそんな膨大な量が必要になる!？」

「知らんよ。技術開発担当のバルナム卿あたりに聞いてみればよからう？ ワシの領分は財務と畜産、農耕等だしな。」

「だが、良く聞け？ 王が収賄をしていた事実はある。そしてそれを知ってもワシらでは防げなかった。王家に対して不可侵過ぎたのだよ。失脚させるとまでは言わんが体制は変革が必要だった。その点はワシもあの若造を認めるよ。」

「貴様はあちらに乗るのか？」

「あちら、ね。フン。貴公は中立でないといかんのではないか？」

「我輩の心ぐらいいは構わん。フェルブルム家、捜査局としては中立だ。」

「…まあよかろう。貴公はそういう男だ。だがそう心配するな、ワシも中立を保たせてもらう。」

「さっきの話し振りではあの若造寄りに聞こえたか？」

「フン。難しい話ではない。丁度ワシの兵は謹慎中だ。ならば卑怯と謗りを受ける事も有るまい。財務と国内の膿み出しに専念し、最後に勝ち馬に乗らせてもらうまでよ。」

「貴様らしいな。」

「褒め言葉と受け取っておこう。」

ふふん。と恰幅の良い腹を揺らし得意げに答える。

「だが、このままでは内乱だぞ？」

「あの若造もアーリントン卿も馬鹿ではあるまい、全面戦争などせんだろ？ 最悪クーデターが成功して王女は廃位、という事態になるうがアーリントン家が身請けしてなんとでもするだろう、エーリカ殿も居られるし。あそこで抱えるなら神輿にされて王位復権という動きも出せはしまい。」

「…だが、召喚魔術が成功していたならば？」

「…成功していたというのか？」

「我輩の調べによると、その可能性は限りなく高い。」

「馬鹿な…ならば何故王女は逃げた？」

「貴様のせいだろうか…」

既に幾度も貴族どもがソフィーリア様を狙って行動を起こしていたのだ。

どうせ召喚は成功しないと考え、他者を出し抜くために早々に婚約を、と半ば強引に迫る者。

刺客を放ち、甘言を吐き、多種多様な手管を使い取り入ろうとする者。

召喚の事など忘れ、ただ見目良い姫との既成事実を、と迫った大馬

鹿者。

老王が亡くなってその勢いはさらに増していた。

そんな折に強行したく召喚魔術>。それを包囲するように兵を差し向けたのだ。ぬけぬけと何を言うか。

「……そうか…そうだな…すまない」

「まるで自分は被害者とも言うような態度だな。残念だが貴様にはアルモス卿の共犯者として容疑がかかっている。いずれしつかりと取調べさせてもらうからな。」

話は終わりだ、とばかりに書類を閉じ、部下に手渡して踵を返し部屋を後にする。

胸がムカムカする。キャメル卿もだが、貴族連中にもだ。そしてその最たるものこそがアルモス家の父子だった。

既に死亡してはいるが、報告により行われた証拠の洗い出しで前代のく召喚されし者>暗殺の容疑はほぼ確定している。

ソフィーリア様の母、エレハイム様も最期まで信じたように、欲に溺れた貴族は既に王家を手にかけていたのだ。

そして我輩はその証拠を見落とした。

我輩も、消極的な加害者の一人だったのだろう。

いずれ必ず償う。そう胸に誓う。

その為にもまずはこの書類の者を纏めて締め上げなければならない。しかし、それは今すぐではない。

動き出した事態は今更止められはしない。ならば、この機会は最大限に利用させてもらう。

我輩も決めたぞ

我輩は我輩のやり方でこの国の膿を絞り出してやる。

4・0<ト>トガフせん>(後書)

9/8誤字修正しました。

4 - 1 <フイオ・尋問>

アーリントン家の応接間は他の五大家と比べてもかなり広い。

中央に20人は座れるだろう巨大な円形のテーブルを置き、有事の際には作戦会議室として用いられる。

開かれた扉から一歩踏み込んで「…そういえば昔聞いたことがあった」と思い出していた。

時間は昨日の交戦から一晩が経ち、既に昼の少し前頃。

だから室内に据えられた<活性魔晶石>を動力としたいくつもの照明は点灯していない。

けれどもこの量ならばきつと夜になっても、本を読むのや細かい作業をする時の光量としては申し分ないだろう。

…でも、今の私にそれが許される事は無い。

巡らせた視線を戻し、正面を見る。

アーリントン家の面々、陸、海軍の上級仕官、と恐らく捜査局の間。

そしてその真ん中に陣取るように黒髪の男女。次期王と王女が卓について待っていた。

尋問だろう。

席に着け、と私をここに連れてきた兵士が促す。

逆らわない。今更逆らう意味も無い。

大人しく席に着くと、パンに野菜とチーズを挟んだだけの軽い食事とコップに入れられた水が運ばれてきた。

お腹は別に空いていない。喉も同じだ。だから見るだけにする。

「さて、フィオちゃん。久しぶりね？ 元気だった？」

最初に話しかけて来たのはアーリントン婦人、エーリカさん。

その顔色は良く、既にく召喚の呪い>が発症し病床に臥せっている
と聞いていたのだが…とてもそうは見えなかった。

「……はい」

端的に答える。

「お腹が空いていたら食べてちょうだい？ おかわりもあるわ」

食事を進めてくる。然程お腹は空いていない。だが、

「……はい」

再び端的に答え、とりあずパンを手に取り、もくもくと食べる。

逆らって不興を買う必要も無い。

「それでね？ 今回呼んだ事なんだけど、お話して貰えないかしら？ そちらの事情を」

……やはり、尋問で呼ばれたようだ。

「……私から語るような事はございません。捜査局の方の掴んでいる通りだと思います」

チラリ、と捜査局の制服を着た兵を見る。∴ 2人。

頭から羽毛を生やした鳥系獣人と、丸い獣耳をした小柄なほぼ人型の獣人。∴ 何処かで見ることがあるような

いや、気のせいかな。それに今はどうでも良いことだ。

「それでもね、貴女の口から説明して頂きたいの。貴女のお義父様の事ですし」

「……何を、話せというのですか。義父の考えは声明の通りです。

……私から特段補足する必要は感じません」

「では、降伏して下さりますか？ バルナム卿の主張の前提である「召喚魔術の失敗」が間違っていたのですから」

確かにそうだ。けれどそんなものは義父さんにとっては都合の良い言い訳でしかない。

もくもくからちびちびと齧り方を変えていたパンを見つめたまま、顔も上げずに答える

「……私の一存では不可能です。義父に連絡してください」

我ながらにべも無い返事だ。だがこんなものだろう。

エーリカさんがはぁー、と溜息をつく。

「マール。お前が尋問してやってくれないか？ こないだのヤツみたいに関が軽くなるんじゃないか？」

代わりに口を開いたのはメリア。相変わらず口調が男っぽい。

あれでよく後宮に入るとか言い出せたものだ。

『嫌じゃ。こやつは責められ痛めつけられる事を忌避しておらぬ。さらにそれで死ぬるならそれはそれで良い、と考えておる。そんな相手を尋問してもつまらぬ』

響いた返答に、応接間の空気が、凍る。

ちびちび齧っていたパンから目を離し、声を出した相手を探す。

今喋ったのは誰だ？ 何故、そんな事を知っている？ 私の心を読んだとでも言うのか？

「どうして、のですの？ そんな…」

呟いたのはメルディア。違う、先ほどの声の主ではない。

『は、妾から語る事でもないわ。どうせ、じゃ。本人に聞いてみたらどうじゃべ。』

「まただ。今度こそ聞こえた方向を見る。その先は確かユートとかいう次期国王。」

その手前のテーブルの上に胡坐をかいてパンを食べている…妖精？

「あれが、喋ったのか？」

「それもいいか。なあおいフィオ？ 何でお前は死にたがってるんだ？」

「お、お姉様？」 「メリア…」 「その聞き様は流石にどうかと…」

メルディア、王、アーリントン家のセバスチャンと揃ってメリアに駄目出しをする。

…不覚にも言われた私もそう思った。口には出さないが。

「……………メリア。淑女らしくお話なさい」

「は…はい……………」

エーリカさんがこめかみを押さえ、メリアを叱る。

「フィオさん。お話下さい。どういふ事ですか？ それは今回の事

態に関わる事ですか？」

エーリカさんの言葉に消え入るように黙ったメリアの代わりに口を開いたのはソフィーリア王女。

…話してどうなる？ 関係はあるといえばある。逡巡する。

『話せばよかる。おんしの事情を聞かぬ事には進まんぞ』

確信した。あの妖精が喋っている。そして、あの妖精は私の事情を知っている。けど、

「……そんな妖精など聞いたことも無い」

『魔族じゃからの』

耳ざとい。小声で漏らした声まで拾ったか。けれども、魔族？ さらに聞いた事が無い。

「マール、話が逸れるから。ね、フィオさん。話してくれないかな？ 何でもいいから。俺には何も分からないんだよ、誰が正しいのかも、何を正すべきなのかも」

次期王が語る。何も知らない。この国の内情も分かっていない。召喚されし者ゝが。

パンを置き、水を軽く一口含み、飲み込む。

「……………いいでしょう。そこまで言われるのでしたら、ご説明します」

いいだろう。そんなに知りたいなら聞かせてあげよう。

何が原因で義父が決起を決意したか。

何故、母と私は壊れたか。

…どうせ、聞くだけ無駄なのだから。

4 - 1 <フイオ・尋問> (後書き)

9 / 8 指摘いただいた部分を修正しました。

4・2<ファイオの過去>(前書き)

今回の回想話は1章5・1並の鬱話になります。苦手な方はご注意ください。

4 - 2 <ファイオの過去>

そもそもの始まりは義父の奥手な性格からだった。

義父は幼少のころより、2歳年上の従姉であった私の母と親しくしていた。

時には遊び、時には学び、同じ時を過ごし、何時しか義父は母に恋心を抱くようになっていた。

けれどもそれは、親同士の仲が良く、歳が近いから一緒に居る事が多いだけの関係。

内気な義父は、関係を進める事が出来ず、自分の恋心を隠し、打ち明ける事が出来ずにいた。

今年こそは、何か成果を得られたら、自分が結婚できる歳になっただら。

そうやってまごついてる内に母は婚礼可能な歳になり、早々に婚約を交わし、結婚した。

何のことは無い。母の家は没落しだしており、政略結婚に使われてしまったのだ。

相手は金だけはあるロクデナシ貴族。

権力欲しさに5大家の血縁者を後妻に娶ったに過ぎず、その関係は冷めたものだった。

その後、当たる事も無く砕け、恋破れた義父は研究に没頭。外に目を向けず研究室に籠りがちになっていった。

そうこうする内に私が生まれた。

だが、それが最初の悲劇だった。

生まれた私は、人ではなかった。

それはバルナムの先祖が亜人を妻とした事があった為に起こった先祖帰り。

珍しくはあったが、可能性はあった。

だが、耐久力と回復力が高いだけの程度で外見的には人と然程変わらない亜人、小鬼族だったために、最初はそうと気づかれる事無く私は育った。

3歳のころだ。

急にバルナムの本家から訓令が届き、母が出来たばかりの王家の後宮に送られることになった。

本家に近い所に適齡の娘が他に居なかつた為だつた。

父は喜んで送り出した。上手くすれば王家にもツテができると。

私は貴族の家に残された。

そして、庇護者を失つた私に対するイジメが始まつた。

母の嫁いだ貴族の家には先妻の息子が二人居た。

当時11歳と13歳。その二人に、殴られた。

きつかけは些細な事だつた。

だが、止めるものが誰も居なかつた。

そして、当然の如くエスカレートしていった。

何度も何度も殴られた。何度も何度も蹴られた。

それでも、それらの暴行には耐える事が出来た。皮肉にも亜人だつた為に。

5歳になつた頃、

私の額に生え始めていた小鬼族の証である角が、ついに隠せないほどに伸びて、周囲に気づかれてしまった。

普通子供は、両親どちらかの特徴を持って生まれる。

私のような例外はあるが、それこそ数百万人に一人、ともすれば数千万人に一人有るか無いかという確率。

父は、知らなかった。

だから私を自分の娘で無く母の浮気で出来た子、と誤解した。

そして私に対する興味を失った父は、兄達の行為を完全に黙認するようになった。

怒りに任せ私の角を根元から抉り、削ぎ落した彼が残した言葉は

「あれが戻るまでは殺すなよ、面倒だ」そんな程度だった。

それからの私の生活はさらに酷いものになった。

15になり剣と魔法を習いだした兄は練習と称し、面白半分に私を刻み始めた。

普通の人ならば死ぬ程の怪我を何度も何度も負った。

けれども、死ねなかった。勤めて殺される事もなかった。

首を切り落とす、心臓を刺し貫く等の直接的な致命傷を与えるような傷を負わせる度胸は、遊び半分だった彼らには無かったようだ。

もしかしたら、父が釘を刺した効果も有ったのかもしれない。

そして私自信も彼らを刺激するような事が無かった。

ただ漫然と、毎日繰り返される虐待を受け入れていた。

…3歳の頃からずっと、誰にも何も教わる事が無く、何も知らなかった当時の私はそれ以外の常識を知らず、それが当然なのだと思ったりはしなかった。

そしていつしか私は窓も無い牢のような地下の一室に閉じ込められた。人に見られない為に。

…この体は消えない傷だらけだ。

角を父に強引に削ぎ落とされたせいで、前髪に隠れた額には酷い傷跡が残り、左目は失明している。

それでも顔はましな方。全身をくまなく切られたり、刺されたり、焼かれたりしたのだ。

無事な所など、何処にも残っていない。

さらには剣を習ったばかりの兄達に面白半分に腹部を貫かれた際に、運悪く将来機能する筈だった女としての機能も破壊されてしまっていた。

いつしか私は、女でも、人ですらもなくなっていくた。

兄達の所有する玩具の人形。

玩具も人形も知らなかったが、それが当時の私の自分に対する認識だった。

8歳になったころ、母が後宮から戻ってきた。

老いた王は最早子を成せる体では無かったので、後宮に送られた娘達は皆帰ってきていたのだ。

だが、それも運が悪かった。

役目を果たせなかった母は、「何処の馬の骨とも知れぬ亜人に抱かれ子を成した不貞の売女」と父に罵られ、私と同じように地下に監禁され、虐待を受けた。

そしてそれには留まらず、母はまるで安淫売のように扱われ、時には客へのもてなしとして使われた。

…もちろん私もだった。

それから僅か数カ月後、母は病に倒れた。

性病だった。幸いなのか、私はかからなかった。

そして病は母の脳を犯した。

そんなある日。義父が研究の成果を認められ、近い将来にバルナムの家督を譲られる事になり、

10年越しに失恋の痛手をやっと乗り切って母に手紙を出した。

懐かしい初恋のあの人にも祝って欲しい。と願って。

だが、その手紙は届かなかった。父が握りつぶしたのだ。

幾度か手紙を送り、返事が無い事に疑問を持った義父は調べた。

そして知ってしまった。

母と私がボロボロになり監禁されている事を。

10歳のころ、義父は母と私をバルナムへと取り戻した。

強引な手法だった。不正を暴き貶める為だけに物凄い速度で新しい魔道具を開発し、使用した。

さらに義父はそれに満足せず、結局父の家は、消えた。父も兄達も、死んだ。

しかし、全ては手遅れだった。

母は死んでこそ居ないが稀に正気を見せる事のある程度の半ば生き
た屍に過ぎず、私は体も心も壊れていた。

そして、義父は人と接する事が不器用な人だった。

私は癒される事無く壊れたまま一般常識を学んだ。

バルナムの人々は皆、義父を恐れ、私を腫れ物のように扱っただけ。

それでも何も知らなかった私はスポンジが水を吸うかのように物事
を吸収していった。

基礎的な文字を学べば、後は独学で辞書を使い、1年とかがらず問
題なく本も読めるようになった。

だから分かった。自分の異常性が。

褒められても、怒られても、殴られた時と同じ。何も感じない。

美味しいはずの食べ物を与えられても味を理解できない。

たまに義父の学術書以外の伝記や物語を読んでも、事務的に記憶し、
解析し、理解するだけで、実感は全く伴わない。登場人物の心情を
自分に当てはめ、推し量る事が、出来ない。

何もかもが彼岸。だが、感情が無い訳でもない。

物事を覚える事は楽しかった。

そして時折義父の作る魔道具を使ってみたり、解析するのも楽しかった。

不幸な事に、壊れた私は魔道具を誰よりも理解し、使いこなせてしまった。

まるで自らが魔道具の一部になったかのように。

そんな生活が数年続き、ついに母が助からない事が判明した頃、義父は決めた。

「こうなった原因である腐った貴族を一掃する」と。

決めたからには行動を起こす。

義父は捜査局には不可能な強引な手法を用い様々な情報を集め、実態を掴んでいく。

さらに、金の流れを調べる内にそれが王にまで繋がっている事に気づいてしまった。

王家も同罪、そして王家の失脚は最も手っ取り早い改革の手段。

そう目標を設け、計画を練り、その為の魔道具を研究し始める。

<傀儡子の腕輪>の原型は偶然手に入れた。知人から送られたものに混じっていたそうだ。

それが、決め手になった。

義父はレキに命じ秘密裏に隣国から奴隷を買い集め、船に乗せ外海へと送り<人工人型>に変えた。

一度作れば後は簡単。海流を計算し往復させるだけで<人型>は分裂し、兵数は鼠算式に増えた。

さらにモンスターは食事をしなくとも死なない。

<傀儡子の腕輪>で大人しくさせてしまえば普通の兵士よりも管理も維持も簡単だった。

準備は進む、何かに後押しされるかのように着々と。

もう、後戻りは出来なかった。

そんなある日、王女が<召喚魔術>を強行し、消えた。

絶好の機会が訪れた。

私は、14歳になっていた。

4・2<フイオの過去>(後書き)

9/9 誤字修正しました

4 - 3 <方針決定>

「それがこのクーデターの動機、だったのですね」

全てを聞き終え、その凄惨な内容に皆が黙り込んだ中ソフィーが口を開いた。

「……………そうです」

「ある程度知ってはいましたが、それ程だったなんて……………それに……………お父様が賄賂を受け取っていたなんて……………」

エーリカさんも信じられない。と言った口調で呟く。

……………無理も無いだろう、真面目な王だったと言っ話だ。

「……………恐らく、<マナ結晶>の為だったのだと思います。祖父は……………死ぬ直前に7つも<マナ結晶>を託してくれました。「召喚魔術を成功させるのだ」と……………」

「<マナ結晶>を……………7つ？ どうやって手に入れたのだ？ 今はもう産出される物ではないだろう？」

「……………多分、精製した」

「精製…だと？ そんな事が…？」

「……魔導炉を使えば、理論上は、可能。……1つ作るのに50万個はく魔晶石が必要だったろうけど」

「じゅゆ…」

「そんな…」

ソフィーとフィオの補足にメリアとメルが絶句する。

質はバラバラだろうが俺の手持ちの一番小さなく魔晶石>1つで1万2千Gにもなった。それを50万個、さらにその7倍。

どれほどの額になるのか想像するのも怖い。

「……その為の収賄。だけど、それが国をさらに腐らせた」

「ですけど、それでしたらクーデターなど起こさなくとも…」

「そつだ、五大家と王家で協力すれば」

「……無理。キャメルとフォールは既に貴族に飲まれてる」

収賄、腐る貴族、いつかソフィーに聞いた話にさらに肉付けがされる。

「……この国の体制は一度ひっくり返さなければどうにもならない」
「やってみなければ分からないではないか!？」

メリアが憤慨し机を叩く。だが、フィオは怯まない、揺るがない。

「……では、何故このクーデターで所領の貴族達が私兵を動かしていないと? ……戦う事すら拒絶した彼らは勝ち馬に乗って利益だけを吸おうとしている」

「序盤は様子見をし、双方の人員や物資、資金提供だけに徹して、温存した武力を背景に終盤に優勢な側へと参戦し、恩を売る。敗者からは金、勝者からは利権、ですか」

セバスさんも補足する。

それはつまり、どちらが勝っても構わない。最終的に勝つ方に自分が居て利益さえ出ればいい。という事か。

どちらかの陣営の思想に同調する気も、殉じる気も無い。金に眼が眩んだ蝙蝠。

…心底腐っている。

「……」
「明察」

『やっと全貌が見えて来た感じじゃの』

マールも納得する。だが

「俺は理解し切れない…知らない単語が多すぎる…」

おおまかには分かった…気がするのだが、それも疑問点だらけなのだ。

情報量が多すぎるせいもある。

言うならば穴あきの地図。その穴を想像で埋める為の下地となるこの国の情勢、歴史の知識や固有名詞、常識はまだ殆ど無い。

情けない事に俺の頭では、口頭での1回の説明ではとてもじゃないがその穴を補完しての理解ができない。

何をどうすればいいのか、分からない。

…紙とエンピツをくれ。せめて書かないと覚えられるもんか。

「大丈夫です。私は理解しましたから…これで、方針は決まりましたね」

ギルドで登録の時に使った分厚い紙と無骨なペンを思い出し、そんなものはありはしないだろうと自嘲した所で隣のソフィーがフォロ―をするように言う。…情け無い限りだが、頼もしい。

『そうじゃの』

「そうですね」

返事をしたのはマールとエーリカさん。

エーリカさんは兎も角、マールまで理解したらしい。

「文を飛ばして貰いましょう。私とユートさんの健在を知らせて、まずは会談です。全面戦争になるのは避けなければなりません」

「人質の事も伝えますか？」

「勿論です」

『ならばもう一つ付け加えよ。貴様の妻と娘の体を治す術がある、それは貴様次第じゃ。とな』

「…マール？」

疑問を挟む。マールが進んで敵を癒そうとする？

『くつくつく。性病で脳が犯されておるのじゃろっ？ その程度の病なぞ妾には大した物でもないでの。そしてそやつはユート、おんしが治すのじゃよ』

「そついうことが…」

「……何を、言っているの？」

『おんしの義父が折れるならば、おんしの母の病は癒え、おんしの体は元に戻る、ということじゃ。角も、傷跡も、女としても、全てが取り戻せる』

「……ありえない」

『おんしが負けてここにおる事はありえたのかや？』

「……」

マールが畳み掛ける、絶好調だ。フィオも言葉を失って黙ってしまった。

「……それでも、私は今更そんなものは欲しくは無い」

『そつかもものう。じゃが、おんしの義父はどうかのうっ？』

「……」

搾り出されるように放たれた拒絶。

だがそれにも嘲るような口調でさらに畳み掛ける…容赦ない。

『楽しみじゃ。おんしが全てを戻されてしまった時にどうなるのか』

「……私は」

「マール、それ以上追い詰めないであげてください」

「そうだ。お前はすぐそうやって相手をぐうの音が出なくなるまで追い詰めたがる」

ソフィーとメリアが見かねて助け舟を出す。

『くつくつく、性分だな。致し方なかるう？ それにしてもよくよ
くこの国は妾を飽きさせぬ国じゃ…良いのう、良いのう』

マールが笑う。心底楽しそうに、いつもの様に悪意を込めた笑いで
けど、

「…なんだか知らないけど纏まったんなら良いか。マールも満足そ
うだし」

「楽観的ですね…大物、と言って良いものは判断しかねますが」
メルが俺を怪訝な瞳で見る。まあ理解は及んでない訳だし、仕方ないだろう。

とりあえず「全面戦争は避ける」という言質を聞いたのが大きい。

「平和になるなら、それでいいよ。暗い話もこりこりだし」

そう言って周囲に笑いかける。場が和んだ気がする。

「くす。ユートさんらしいですね。頼もしいです」

「ふふ、余裕の表れだな。流石、と言わせて貰おう」

「……」

皆が微笑みを浮かべる中、フィオだけは全く笑わなかった。

4 - 3 <方針決定> (後書き)

9 / 9 誤字修正しました

5 - 1 <逃げています>

「敵襲です！」

その報告は尋問を済ませ、その流れで今後の方針の細部を詰める前に小休止。

という事で軽食を取っていた最中に届けられた。

…来てしまったのか。

陰鬱な気分になる。あれほど忠告をした。だということに…

「敵の規模、状況は？」

ざわつきかけた場を一刀両断するかのように凜とした声でメリアが報告に飛び込んだ兵士に確認をする。

その横顔にドキリとなる。

フィオ達を迎撃に向かった時にも思ったが、戦闘の事となると、とたんに引き締まって凜とした気配を纏う。

そういう時のメリアは本当に格好良い。

…普段ももつとカツコよければ、…いや、あれはアレで良いのか？
さっきの尋問の賄賂だの貴族の動きだののくだりで、ずっと首を傾
げ「?????」と疑問符を上げっぱなしのまま時々知っている単語
に思い出したかのように反応していたのを思い出す。

うん。あれはあれで何か可愛くていいな。

少し和んで居た所でそれを吹き飛ばすように報告が続けられる。

「はい、敵は空軍本隊、分散して3大隊がそれぞれ西、南、北陸軍
基地を、2大隊が南北海軍基地港を、そして2大隊がここアーリン
トンの基地を目指しています。陣容は…中隊規模での分散半包囲型
陣形で向かっている模様。恐らく一番早い部隊は後2、3時間程で
西、南陸軍基地上空に達する、と思われませう」

「…よりもよってそう来たか」

メリアが唸るように言う。

空軍本隊合計7大隊。何人…いや数万人規模だろう。

さらに中隊規模の分散半包囲型陣形ということは、数に物を言わせ
てバラバラに広範囲から攻め込んでの全体同時攻撃。

何処かが迎撃を受け、食い破られようとも最終的に目的を達するつ
もりか。

確かに有効だ。

だが、愚かだ。

「不味い、ですね」

「正気じゃありませんわ！ 陸・海軍を完全に潰すつもりなのか！？」

「そんなことをすれば空軍の損耗も看過し切れない事になる筈です… どうして、どうして止まれなかったのですか…」

エーリカさん、メル、ソフィーと続く。声には不安、怒り、失望、困惑などの色が見て取れる。

フィオ達先遣隊を撃退して一晩、恐らく2次攻撃には多少時間が有るだろうと、＜竜燕＞を放って会談を持ちかけ、全面戦争を避けると決めた所でこれなのだ。

「幾らなんでも動きが早すぎる。フィオ、お前なんと連絡させた？」

言われてみれば確かに、早すぎる。

メリアが先ほどからずっと俯いたままのフィオに向かって追求する。

「……フフ。そうですね。……私が命令したのはケース5「制圧不能」よってプラン7「全隊を使つての損耗を無視した全対象・強行同時爆撃」に変更せよ。……ですよ」

髪の間から覗いていた小さな唇が、左右に裂けるように広がる。

フィオが初めて見せた凄惨な微笑、そして告げられた事実に関員が絶句する。

だが、それと同時に俺の心は冷える。いつかのように。

「くそ、やはりか…そこまでして勝ちたいのか…」

「……言った筈です。手段を選ぶ気が無い、と。……それは私の命もですよ。ですが、無為な死を受け入れるつもりはありません。…
…死ぬとしても、勝ちだけは頂きます」

己は人質足り得ない、と言いたいのだろう。

告げられた言葉に場がざわめく。

対応、対策、迎撃、非難、

小声でもれ出る言葉からして各々が対策を考えているのだろう。

なるほど、と思う。確かにふり構わず勝つには良い手段なのだろう。だが、

「俺も言った筈だ。攻めてくるなら、返り討ちにするしかない。」と静かに、だがはっきりと通る声で伝える。

言葉と共に込めた剣呑な気配に当てられたのか、ざわつきが止まり、シン…と静まり返る。

「……幾ら貴方が強くとも、一人では半径200kmの広範囲からの襲撃は庇い切れない」

「残念だよ……」

「あの、まさか、と思うのですが、対応できるとでもおっしゃられるのですか？ ユートさん？」

俺の言い様に、恐々とメルが口を挟む。だから、ただ肯定し、起こる結果だけを伝える。

「ああ、誰一人生き残れないだろうけどね」

「……嘘」

凄惨な笑みが崩れ、啞然、とフィオが凍りつく。

想像できなかつただろう、それは仕方ない。

だが、もう遅い。

「残念だが、事実だ。フィオ、君は色々詳しくそうだし少しは想像できるんじゃないか？ 俺の使う魔法の一つ、〈水炎〉は水を超振動させておよそ3万度強のプラズマに変える。そして、その瞬間最大発動範囲はおよそ全周30km。さらにそこから放射展開させての水平効果範囲は半径4〜500kmに及ぶ」

そう、いつかソフィーやメリアには聞かれた、全てを素粒子単位に破壊し何一つ残さない、無慈悲な昇華魔法。

森も、山も、建造物も、生き物も、大地も、何もかもを燃料にして燃え上がり、全てを消失させる。

…今まで耐えられたのは障壁の完璧だった魔王城と魔王自身、そして一部の上級魔族だけだ。

全員が、完全に押し黙った。

「塵一つ残しはしない。忠告はした筈だ。本当に残念だ」

立ち上がる。後数時間という事ならもう全部隊が射程圏内だろう。つまりない事はさっさと済ませよう。

「メリア、ワイバーンを出してもらえないかな？ 上空でやったほうがいい」

「あ…ああ…仕方無い、か…」

「待って下さい、何か他に策はないのですか…？」

迎撃に向かおうとする俺をソフィーが止める。だが、

「俺には無いよ、広範囲で攻めてこられたら、これしかない」

にべもなく答え、告げる。

「そんな、ですが…」

「残念だけど、俺は敵に手心を加えられる戦闘をした事は無いんだ。俺の使える魔法は効率よく殲滅する為の物しかない。それに、皆手は無いんだろ？」

「…至急、伝令を行えば避難はさせられるでしょう。ですが、空軍相手では逃げ切れはしないでしょうし、迎撃に出た所で有効打には

ならないでしょう。そして設備や物資は逃げられません。甚大な被害を蒙るのは明らかです」

セバスさんが説明する。まあ、そんなところだろう。

「なら、被害が出る前に敵を全滅させた方が良い」

「彼らも…私達の民なのです…」

弱々しい反論、沈む言葉尻と同じくソフィーの顔も、俯いていく。

「だけど敵になった。そして味方を害するなら、俺は躊躇わない」

「……………だめ、です」

「ソフィー、聞き分けてくれ。時間も無いんだ」

「…いいえ、絶対に、だめです。今はっきりと分かりました」

先ほどまでの弱々しい反論でなく、俯いた顔を上げ、はっきりと告げられる。

「ユートさんは、逃げているんです」

「…何を？」

俺が、逃げている…？

「逃げているんです、目の前の問題から目を背けて、一番正しい選択でなく一番無難な方法を取ろうとしているんです…！」

「そんなことは無いよ、俺は確実な方法を…」

「嘘です！ 頭でそう考えたつもりになっているだけです！ それに彼らを全員殺してその遺族が恨まないでも思うのですか！？ そうなったらその遺族も、縁者も、みんな、みんな、焼き払ってしまえば良いとも言うのですか！？ そんなのはただの暴力による恐怖政治です！！ 私は、お爺様の、お母様の守った国をそんな国にしたく無い！！！」

「だったらどうしたら良いんだよ！ 現に空軍は目の前に来てるんだ。その案も無いのにそう言うのは無責任だ！！！」

一気にまくし立てたソフィーの声を押しつぶすように大声を放つ。

つい、感情的になり声を荒げてしまった。

「……………降伏、します」

「なっ！？」「そんな！」「いけませんわ！」「ソフィーリア様…！」

搾り出すように告げられたソフィーの言葉に一瞬場が騒然とする。

「……先ほどのフィオさんのお話からしますと、バルナム卿の目的は私達の思想と重なる部分も多いはずですよ。降伏して、交渉すれば……」

あるいは、とソフィーが続ける。だが

「命の保障は無いじゃないか……」

そう、ただでさえソフィーは命を狙われているのだ。

降伏して武装解除してしまえば、それはもう炎の中で折角着込んでいた防火服を脱いで油を被るような物だ。

高見の見物を決め込んだ貴族連中もこれ幸いと大金星を取りにくるのが目に見えている。

「ふふ…そうですね……じゃあもしもの時はユートさんに守ってもらいます。…また二人で、逃げましょう？」

そう言って、微笑みかける。

怖いくせに、何もかもが覚悟の上だ。と言わんばかりに。

それに、逃げている、と俺に言っておいて二人で逃げようだなんてそんな、

「…それで、解決するのか？」

「分かりません。ですが、恐らく一番血が流れません」

最悪でも私の命ぐらいのもの、ですよ。そう自嘲交じりに言う。

「…だめだ、やっぱりそんなの間違ってる」

「間違っているかもしれない。けれど、一番皆を守れるのです」

「ソフィーの命が入ってないんじゃないじゃないか」

「それは私が頑張ります。それにユートさんも守ってくださいれば…」

「俺は神様でも無ければ、万能でも無いんだ！！ 誰も、誰も…誰一人救えなかった、守る事が出来なかった！ 只の情けない男なんだ！！」

「…」

ソフィーの顔を見ていられない。顔を背け、背を向けて拳を握り締める。

「頼むよ…俺は…もう失いたく無いんだ……」

「やっぱり、逃げていたんですね」

ああ、そうさ、そうさ！

言い訳して、目を背けて自分をごまかしていたが、いざ言われてみれば何のことは無い、その通りだ。

それを自覚したくなくて、そんな卑怯な自分が嫌で、

人当たりの良い仮面を付けて、無難な方へ、無難な方へと逃げていたんだ！

立ったまま俯き、背中を丸めプルプルと震える。…情けない。

だけど、どうしようもない。臆病な俺はそういう選択しか取れないんだ。

そうやって立ちすくむ事しか出来ずにいると、俺の背中にふわり、と暖かい感触が触れる。

「でしたら信じてください。今は、私を。貴方の強さと優しさを信じている私を」

そっと、背後から包み込むように抱きつき、ソフィーが優しい声を放つ。

「貴方が貴方自身を信じられないなら、私が貴方を信じます。貴方が道を間違えようとするなら、それも正してみせます。」

貴方は、私を守ってくれました。メリア姉様も守ってくれました。オサも、エーリカ叔母様も…フィオさん達だって、殺さないでいてくれました。

それは消極的な選択での結果だったのかもしれませんが、…ですが、事実です。

貴方は貴方の正しさで人を救って来たじゃないですか。ライフワーク、だなんて言い訳までして…

だから、信じてください。貴方は救えます。私一人ぐらい、いいえ、もっと大勢を守れます。私だって、むざむざ死にたくはありません。

私は貴方の妻で、貴方は私の夫なのです。なんでも自分だけで背負おうとしないで下さい。

…本当は私だって、貴方を守りたいんですよ？ でも、私には力で貴方を守る事は出来ません。

だから、貴方を信じる事で守ります。貴方の心が弱気になつてしまわないうちに。貴方の心が道を踏み外さないように。

貴方が貴方自身を信じる心を持てるようになるように」「

「ソフィー……」

「信じて、下さいますか？」

正直、頭で考えてる分では、そんなこと分からない。だけど感じる。

信じたい。ソフィーを信じたい。そう、心から感情として湧き上がってくる。

「信じたい……」

「今は、それでいいです。これから行動で示してみせますから」

そう言って、ソフィーが俺の背中から離れる。

「ありがとう、ソフィー……」

俺の背は、もう丸まっていない。振り向き、ソフィーの顔を見つめお礼を言う。

5 - 1 <逃げています> (後書き)

9 / 10 誤字修正しました。

「妻としては、当然ですから」

『く、く、く、そうじゃの。それも良いの。遅しく育つその過程も、育った後も、どちらも実に楽しみじゃ』

…とたんに不安になる。

全く想像できないのだが、こと俺を弄る事に関しては絶妙の連携を見せるこの二人の中でどんな育成プランが…？

『まあ、それはそれとしての。ちと、待ってもらえんかの。降伏なぞ選ぶのは』

「…何故、ですか？」

『何、妾は今最高に気分が良いでな。イタズラをしたくなった』

「イタズラ？」

「イタズラ…ですか？」

『うむ。イタズラじゃ。要は相手が空軍なのが問題なのじゃろ？』

「ああ、そうだ。空軍の全軍が相手では流石に我々では迎撃する騎兵が足りない。上空からの爆撃を受け負けは確実だ」

答えたのはメリア。

「敵はどうやって飛んで来るのじゃ？ 例によってワイバーンなのかえ？」

「あ、ああ、基本はそうだな。だが爆撃用の編成なら大型飛竜のデイスバーンが主戦力だろう…」

『それはこちらにもおるのかや？』

「ああ、ここの竜舎にも居るぞ」

『他に飛行手段は無い、と？』

「ああ」

例のモンスターは居るかもしれないが、恐らく最初の一戦でこのアーリントン襲撃用はほぼ使い切ってそんなに数は居ないだろう。

そう判断し、メリアは数に入れない。

『ならば、事は簡単じゃ。全ての飛竜を飛べなくすればよい。妾は病を扱う魔族。そうじゃの、飛竜の翼をダメにし、尚且つ墜落では無く不時着せざるを得ぬ程度で即効性の有る病でも撒き散らしてやるうて。それならば、異存はあるまい？』

マールが機嫌良さそうに、今までの会話を全てぶち壊しにするよう

な事を言う。

だが、それは…

『まずはそのディノスバーンの元へ案内せよ。それで飛竜を飛べなくする病を生成する』

「あ、ああ、…分かった」

『それからユート。おんしの体を貸してくれぬか？』

「…どういうことだ？」

『この義体では大規模魔法を使えぬ。かと言って完全顕現する程の魔力はまだ回復しておらぬ。故に、おんしの体を一時的に借り受け施行する。』

むろん、おんしの魔力も借り受ける。何、半径200kmに散布するにはかなりの大規模魔法を行使せざるを得んでな』

「…本当に、出来るのか？」

そう、俺が戦ってきた魔族でもそんな大それた事が出来た奴が居た覚えは無いのだ。

『妾がしくじると、思つかや？』

「……………思わない。分かった、任せよう。」

『うむ。まず妾が働きかける。それを受け入れればよい』

「なるほど」

『では、行くぞ』

その声と同時にマールの体が水晶のような物で包まれ、こてんと転がる。

『案ずるな、魔力が散らぬよう保護しただけじゃ。本番は、ここからじゃっ』

「うあっ」

喉元から頭へとせり上がってきた何かを感じ、これを受け入れるのか？ と遮っていた蓋を開けるよう意識したとたんだった。

全身の感覚が無くなっていく。いや違う。感覚はある。だが動かせなくなっていた。

さらに髪が、瞳が金に染まり、体に濃紺の刺青が浮かび上がる。見えては居ないのだが、分かる。奇妙な感覚だ。

あと、目つきが悪くなった。∴別にそんな事は自覚しなくなかった。

「ふふふ、なかなかこういうのも良いの。」

『俺は何か不思議な気分だ』

特に目が辛い。思った方向に向かず予想外の方向に勝手に向く、酔いそうだな。

「まあ直ぐに終わらせて返すので、安心するのじゃな」

コキコキと体を鳴らし、具合を確認する。

どうせなら派手にいくかのー。とか言い出した。さらに不安だ…

「さて、行くかの」

『そうだな』

「っと、その前に。おんしら全員、これは貸しにするからの？ 特にその根暗娘。おんしは返って来たら即、辱めを受けてもらうからの」

『……………それは俺がやるのか？』

念のため聞いてみる。

「その通りじゃ。くくく、良い反応じゃ。おんしはそうでないとなー!」

やっぱりか。

『はあ、まあ分かったよ。今回は借りになるし…やるぞ』

「うむ。では行くぞ、メリア。案内しておくれ?」

そう言っつてソフィーとは反対側の隣に座っているメリアの方を見る。

『メリア?』

「うん? 何を呆けておる?」

「あつ、いや、その…こつこつというワイルドな雰囲気のコートさまも素敵…と」

『…』

コートさま、さらに声のトーンが違つ。メリアが「夢見る乙女モード」になりかけていた。

「なんじゃ。妾が繰るコートでもよいのか? ならばいずれ体を借

りて愛でてみようかの?」

そう言って、座るメリアに近づき顔を覗き込んで頬をそつとなでる。

『いやいやいやいや、そういう事はやめてくれよ?!』

「い、いや違う、そういう事ではなくて…こつ、普段のユートが、ユートさまが、このぐらいワイルドになって? 迫って来られたら…と想像しまして…はう…」

慌てて手を払い、視線を逸らしたものの赤面し、モジモジしはじめた。

さらにチラチラとこちら見てくる。まずい、今回は結構な重傷か!?

「ふ、ふ、ふ、案ずるでない。こやつとて閨ともなるとこのぐらいの逞しさは見えるでの。期待しておくんじゃない」

「本当ですか! …ああ…待ち遠しいです…ユートさまあ…」

立ち上がり、しなだれかかってくる。

『そ、そんなことより童舎にね? メリア、正気に戻って!』

「あー、今のおんしの声は妾にしか届かぬよ？　だがまあそれもそのじゃの」

『…なんだって？』

「…？　ユートさまが何かおっしゃられているのですか？」

「ああ、おんしにそれ所ではない。急いで竜舎に行かないと。とな」

「それもそうでしたな。急ぎましようか。えいつ」

そう言ってメリアが腕にしがみ付く。

「…歩きづらいのじゃが」

…もう諦めた。たまには俺の苦勞を感じるといいぞ。

「ねえ、セバス？　今のは誰だったのかしら…？　見間違い…？」

啞然、と出て行く二人を見送って少ししてからメルが口を開いた。

「いえ、残念ですがあれもメリアお嬢様です」

「…ソフィーお姉様が一人妄想に耽っている時そっくりでしたわ…
口調といい……」

「…メル、それは本当ですか？」

ソフィーが詰問口調で聞く。聞き捨てならないと。

「ええ、本当に。ソックリだったわ。メリアもああいっ話し方も出るんじゃないですか。うふふ、安心しました」

「叔母様？ 私はあんな風になっていたりしていたのですか？」

「ええ。「ああ…私の旦那様はどんな人なんでしょうか？ きゃー！」とか言って寝台で枕を抱いてゴロゴロとしていた時ソックリでした」

「見て、おられたのですか……」

「うふふふ」「えへへ」

メルも笑う。この似たもの母娘は…

5・3 < 紅い空 >

「大隊長、間もなくクローズ陸軍基地です」

「ああ」

我々の隊はアーリントンの領内を飛んでいた。

「…予定通り、やるのでしょうか」

もう30分も飛べば目的地のアーリントン南部クローズ陸軍基地上空にたどり着く。

880

「ああ、降伏宣言は成されていない」

「…了解、しました」

空軍第3大隊、ワイバーン15騎にディノスバーン250騎。

搭乗者はワイバーンに各1、ディノスバーンには各5。総数1265人。

今回の作戦は、端的に言えば基地上空より空爆を敢行し、壊滅もしくは被害甚大を持って降伏を迫る…そういう事だ。

「迎撃は、あるのでしょうかね」

「ああ、恐らく我々の部隊が最も激しい攻撃を受けるだろう」

どうしてこうなった？

本来ならば先遣隊が制空権を取り、空爆は成される事無く降伏させる、という作戦のはずだったのだ。

しかし、先遣隊は敗北し、制空権は向こうのままでの強行爆撃作戦に変更された。

このままでは陸、海軍に致命的損失を与える事に成功しても、我々も迎撃を受け大損害をこうむるだろう。

爆撃用の装備で足の遅いディノスバーンが主の部隊なのだ。

さらには中隊規模に分散したため護衛騎が満足に配備できず、空戦となれば迎撃に出るだろう陸軍のワイバーン部隊にとっては殆ど止まった的に過ぎない。

正直、死ぬ、と言われたのに近い程の無謀な作戦。

だが、命令は下されたのだ。いまさら引けない。

「勝って、どうなるのでしょう」

「しらんよ。我々は任務を遂行するまでだ。余計な考えは持つな。死ぬぞ」

「ですが、ここで陸・海・空全軍が甚大な被害を受ければ国防等ままならなくなります」

「例の〈人型〉を操った物で守るんだろう、空軍用のワイバーンもどきもだろっな」

「…だからと言って人的損害を無視した作戦など」

「諦める。やらねば抗命罪でこの俺がお前を即決刑にすることになる」

「…」

それは、遠まわしに死刑にする。ということだ。

「お前とも、もう6年だ。今更そんな事はしたくない」

「はい」

「この国はどうなってしまうのだろうか…」

「分かりません…」

今までは本当に平和な国だった。

何時から狂いだしたのだろうか？ …分かりはしない。

しかし考えたところで自分は只の大隊長。今更どうしようもない。

今は、任務をこなそう。その後の事は生きて帰ってからだ。

『こちら第1偵察騎！ 大隊長！ 副長！ 聞こえますか！？』

大隊長との会話を一旦区切り、暫くたった頃だった。

唐突に、2 km程前方で哨戒中継をしていた第一偵察騎から慌てた声が届いた。

「どっした」

大隊長が確認をする。

『第5偵察騎から報告、「前方から赤黒い霧のようなものが向かってきます」との事です』

「なんだそれは？」

『分かりません。ですがかなりの速度と範囲です。もう、目の前に避けられません！！ うわああああ！！』

「偵察騎！？ おい、偵察騎！ 返事をしろ！！」

「大隊長、正面、見えます。なんですか…あれは？」

そこには前方の空一面を埋め尽くすように広がる赤黒い霧のようなものが見えていた。

あれが、1〜5番騎を瞬く間に飲み込んだのか？

5番偵察騎と1番の距離は10kmはあった筈なのにあっという間だった。

「分からん、見たことも無い。偵察騎！ 聞こえるか！ あの霧は何だ！？」

『こ、こちら第1偵察騎。現在霧に飲まれています。視界が悪いです、それだけのようです。他の偵察騎からも別に何もありません。只の霧…いえ、霧よりも軽いです』

「…色的なイメージでは有りますが毒、という事もないようですね」

「…驚かせおつて」

「…そもそも常識的に考えて、魔法を使おうが何をしようが空一面を覆う程の毒が撒ける筈もないのだ。」

つまりこれは只の自然現象。只の霧。

何故赤いのかは分からないが、避けようも無いし問題が無ければ突っ切るだけか。

「左右の中隊、聞こえるか。前方の赤黒い霧は只の霧だ。だが回避出来る規模でも無い。突っ切るぞ。視界が悪くなる事に注意しろ！
以上」

大隊長の判断も変わらない。

瞬く間に霧が近づく。こちらも向かっているし、こちらに向かって来ても居るようだ。

飲まれる。

『だ、大隊長！ 副長！ 聞こえますか！？』

「聞こえる、どうした？」

『こちら第1偵察騎。第4偵察騎のワイバーンが翼痙攣を起こしました。不時着させます。との事です』

翼痙攣、だと？ それは無理をさせ過ぎた飛竜等が稀に起こす症状だ。

これが起こると飛竜は上手く風を掴めず酷い時には飛べなくなる。

勿論空に居れば墜落しかねない危険な症状。

…今回の偵察騎は8騎。ローテーションはきちんとしていた。

それ程疲労が溜まっている筈はないのだが？

「許可する。落ち着いたら追ってくる様に。おい！ 第6偵察騎！
代わりだ。行け！」

『き、聞こえますか！？ 第5、第3、第2偵察騎、共に翼痙攣を起こし、不時着体制に入りました…った！？』

「どうした？」

『こ、こちら第1偵察騎、私の、ワイバーンも翼痙攣を、ふ、不時着します！』

『隊長！』『ディノスバーンが…！』『墜ちる…墜ちる…！！？』

『翼痙攣です！』『不時着を！』『不時着します！！』『ワイバーンが！』

『高度、維持出来ません！』『翼痙攣を起こしています！』

第一偵察騎がその報告を伝えた途端だった。悲痛な声が一気に届く。何が、起こった？

と、同時に自らの騎乗したワイバーンもがくり、と動きを止めて墮ち始める。

「こ、これは？ 翼痙攣を起こしたのか！？」

座った鞍の下から、小刻みな振動を感じる。間違い、無い。

隣を見ると、大隊長のワイバーンも高度を下げている。何だ？ どういうことだ？

『だめです、墮ちます、不時着します！』『不時着します！』『すみません、不時着します！』

声が途切れない。振り返り見れば、後続のディノスバーン10騎。ほぼ全てが高度を落している。

馬鹿な、全ての飛竜が翼痙攣を起こしているのか？ そんなことが有りえるのか？

だがこれはなんだ？　これが魔族の魔法なのか？

先ほどからマールが叫んでいるのは明らかに詠唱とも発動言語とも違う。

俺の体を、俺の魔力を駆使しているから分かる。

この魔法は、俺が良く知っている「魔力を燃料にして擬似的自然現象を起こす」といった類のモノではない。

魔力をあたかも苗床であるかのように使い、目に見えない程の微小な生命を生み出す。

その生命に何かを食わせる事で、赤く霧状に見えるほどの恐ろしい量の病原菌を吐き出させている。

俺の使う魔法はある意味で電気やガソリンを使うようなもの。魔力を何かに変換する。

そして俺が知る限りではそこから外れた例外的な魔法は無い。

若干違うものもあるが、概ね魔力を使い何かを作り出すと言う点に変わりはない。

しかし、これはその常識を飛び越えている。作るのではなく、産む。いや、創るのか？

まさに魔法だ。とても真似できるとは思えない。魔法生物というの

は伊達ではない。

さらに…この風だ。

先ほどから大量に生産された病原菌を撒き散らしているこの強風に、マールは魔力を全く使用していない。

魔力の流れをどう感知しようとしても、同じ結論に至る。

つまり…普通に俺の常識で考えるならばこれは自然現象のはずなのだ。

だが、これだけ明らかに人為的で不自然な風が自然現象の訳が無い。信じられない。

最早己の意のままに、世界を思うように改変し、まるで無から有を成している…ような、そんな不気味な気配を感じる。

どういう事なんだ？

かつての記憶を思い出してみるが、俺が戦って来た魔族も魔王も魔法の扱いに関しては、俺の知る基本のそれと比べて、見た目には…然程変わらないものだった。

あれも、これと同じで、理解不能な技術だったのか？

それとも、マールはただの魔族ではない？

…そういえば魔王に食われた、とは言っていたが魔王の眷属とは言

つていなかった。

さらには<意乗の言>も働いている筈なのにマールの口から放たれる呪文の一部が聞き取れない。

『マール、お前は一体…?』

つい、質問してしまっていた。

「残念じゃがその質問が出るようではまだ答えられぬな。おんしではそれを知るには足りぬ」

『…そうか』

一瞬あせり、その返答に安堵する。

マールに迂闊な質問をすると、対価を奪われかねないからだ。

基本的に大抵の質問には気軽に答えてくれるのだが、

ごくたまに、俺に利益が出る質問や、俺が知らなかった重要な知識が答えになる場合に、奪われる。

1回目の時はプール外の自由に出来る魔力の大半を擬体用に、と根

こそぎ持っていかれた。

2回目の時は、…搾り取られた。体力とか、色々。

3回目は……割愛しよう。2回目以降は似たり寄ったりだ。

そして、幾度目かの時にこう言った。「案ずるでない。こうやって対価を貰うのは、後にも先にもおんしだけ。光栄に思うのじゃない」と。

……いや、そんな思考をしている場合ではない。

色々まずい思考を振り払い、元に戻す。

ええと、そうだ。今回の答えは「答えられない」…なら、無理なのだろう。

…いつかは聞かせて貰えるのだろうか？

「もういいじゃろ。ん？ どうかしたかえ？」

「…いや、派手にするとは聞いていたが、まさかここまでとは」

ワイバーンの背中に立ったマールの前方に座っているメリアが振り返り、呆れたような声を上げる。

その呟きも頷ける。

何故ならアーリントンの空は今も見渡す限り全てが禍々しいまでの真紅の霧に包まれており、さらには光を遮られたせいで薄暗くなっ
てしまい、不気味さがより一層増している。

何処の魔界だ？ といった趣だ。

「ふっふっふ。とりあえずこれで空軍は全て落ちたじゃろ。後はお
んしらがどうするか決めよ。妾は戻る」

『ああ、ありがとう』

「そうだな。戻って早急に作戦会議だ！」

「うむ。それとあの根暗娘の治療もじゃな」

『そうだね』

「それもあつたのか…しかしどうするんだ？ 治療魔法をかけても
自然に完治した傷跡などには効果は無いだろう？」

「ああ、何、やるのは治療魔法ではないのじゃ」

「ほほう。となるとまた何か異世界魔法を見せてもらえるのか？」

「うん？ おんしも知っておるモノを使うだけじゃぞ？」

「…？ 私も知っている？ ならもったいぶらないで教えてくれな
いか？」

「ふふふ、折角じゃしユートに聞くんじゃない。妾は先に戻らせて貰おうかの」

「…そうか？ いやまあ分かった。ありがとう」

「礼には及ばぬ。では」

そう言った瞬間俺の体に自由が戻る。髪が、目が、刺青が、全て元に戻る。

頭を振って、全身の感覚を確認する。

「おお、お帰りユート。で、どうやって治すんだ？」

「ただいま、えと、それは」

聞かれたままに答えるとメリアは微妙な顔をした。

マールのやつ、間違いなく分かっていて俺に言わせたな……

5 - 4 < 治療 >

「……………これが、治療……………ですか」

アーリントン家のとある一室の寝台の上に、仰向けになって力なく寝転んだフィオが、その片方の瞳で自分を正面から見下ろしている俺を見つめ、淡々と言う。

収監された際に着替えさせられた簡素な衣装は脱がされ、着けているのは肌着だけ。それも下半身の大事な部分を秘匿する1枚のみ。

…さらにはそれも着崩れてしまい、かなり、際どい。

正直、眼ぶ…いや、目に毒な格好。肌も桜色に染まり、息も絶え絶え、と言った体になっている。

…べつに卑猥な行為の結果、という訳ではない。

ソフィー、メリアと同じく、<走査><記録><生命強化>と施した、その感想の第一声だ。

彼女の過去と、<走査>で確認した彼女の全身の状態を考えると、その感覚に嫌悪感を抱いても仕方ないだろう。

まだ何も分からない生まれただかりの少女でもなく、自ら進んで求めたソフィーたちとも違う。

此方の意思で、一方的に行ったのだ。

さらには事の最中に『背德的じゃな』などと言われ、改めて見つめ直したその状況に動揺し、かなりの回数 of 乱れを産んだ為に、俺にもかなりの余計な感触が残っている。

ソフィーにも劣らないサイズであって、より張りのある胸部とか、痛々しい状態だがその実メリアよりも、ソフィーよりも柔らかい体だとか。他にも…

……いやまで、落ち着け、そつちの方向への回想はいけない。

邪な感じの思考を必死に追い出し、再びフィオの経過を見つめる。

「……私を、辱めて、……満足……ですか……？」

「……」

そんなつもりは無いのだが。

俺の危惧しているのはここからだ。多分然程時間はかからない。もうすぐ…

<走査>で確認した彼女の体の状態と魔法脈からすると、まず間違いない…

「……何か、言った、ら……？ ……っ！？ がっ……あ……！！？
う、ひ…、あ、ああアアガ、ア
！！！！

「!!!」

…やはり、始まった。

「 <ヒーリング>」

さっと詠唱を終え、治癒魔法を施す。最も、これは気休めに過ぎない。

「 !!!?」

!!!!!!

!!!!!!

「!!!」

全身を強張らせ、白目を剥き、フィオが痙攣する。

限界まで開かれた口は何かしら叫んでいるようだが、最早声になっていない。

「何が、起こっているのですか?」

ソフィーがフィオの状態に驚きを隠せない声で聞く。

「彼女の魔法脈は<自動治癒>の原種のようなものを維持する事に

その殆ど全てを費やしてたんだ。

…そこに「生命強化」を割り込ませるようにして施した。

だから今本来ゆっくり時間をかけて定着…いや、矯正されるべき魔法脈や体が物凄い速度で再最適化されている。

…有り体に言えば、「自動治癒」と「生命強化」のせいで、不具合のある患部が急速に砕けて、再生してる」

一瞬で最適な状態になるなら良いのだ。だが、どうしても「自動治癒」が勝る。

そして「自動治癒」が治した部分の大半は再び「生命強化」に異常と判断され矯正と言う破壊が行われる。

本来なら、ほんの少しだけ破壊、適正な状態に再生、それが済んでからまたほんの少しだけ破壊、とじつくりと時間をかけて行うので、本人が苦痛を感じることは無い。

それが同時に二つが作用する事によって爆発的に反応し、全身を許容量を遥かに超えた激痛が苛む。

「「生命強化」は子供が健康に、健やかに育つためのもの、ということではなかったか？」

今度はメリアだ。また振り向かず治癒魔法を続けながら答える。

「その通り。健やかに育てるように」体の異常を一度全て最適化す

る』んだ。だから一旦奇形も、持病も、障害も、傷跡も、全て矯正して健康体にする……」

激しく全身を痙攣させ、目を、口を、限界まで開き、涙を流し、よだれも垂らし、異常なまでの発汗、さらに自ら引つかいた事による出血、爪の破損、…そして失禁、

目を、背けなくなる。

たとえ激痛に耐え切れず失神しても、即座に反応したく自動治癒に嫌でも意識を戻される。

脱水症状も、ショック状態も起こる事事態が許されない。

脳内物質が過剰分泌される事すら阻害され、慣れる事も出来ず、痛みから逃れる事が…許されない。

いわばどんなに行き過ぎても開放されることの無い拷問。

…覚えがある。これはまだ若干軽度ではあるが、あの時の自分と同じ。

だから、治癒魔法をかける。これは鎮痛になる。

あの日俺が、俺の心が砕けきらなかったのは、こうして治癒魔法を施してくれたティーナのおかげだ。

だから、俺も施す。俺のときのように救いになってくれれば良い。

「この状態は、どのぐらい続くのですか…?」

「多分、今から24時間がピークでその後は痛みも耐えられる程になつて定着を始める…と思う」

これはく走査くから予測した時間。

俺の時のピークは一週間以上で、定着するのに1月を費やした。

だがあの時とはかけている魔法の数も、質も違う。そんなものだろう。

「では、私も交代でく治癒魔法くを施しましょう。ユートさんが24時間つきつきり、という訳にもいきませんですし」

「それは…」

「なら私にも任せて貰おうかな。これで治癒魔法は得意なんだ。セバスよりも上手い自身がある」

ソフィーに続きメリアも申し出る。…ありがたい。

『…何故あの時自分で治癒魔法を使わなんだんじゃ…?』

「あ、あの時は！ ……その、気が動転して……………」

『頭が桃色に茹で上がって、の間違いじゃろつに』

恨めしそうに呟いて、マールが混ぜっ返す。

ちなみに今は俺の頭の上でなくメリアの頭の上に居る。

「お姉様……………いえ、お姉様らしい、と言えはその通りですわね。ともあれ、わたくしも施しますわ。〈治癒魔法〉。王家の血筋の娘が3人も居れば〈治癒魔法〉を24時間かけ続けるなど造作もない事ですわ」

「皆……………ありがとう」

水晶状態から開放されたマールはまた魔力切れだろう、だがメルも手伝うと言ってくれる。

…本当にありがたい。この状態の時の〈治癒魔法〉は唯一人間らしい思考が戻る時でもあるのだ。

「……………ぎ、がぐ……………い……………ぐ……………わ……………た……………た……………し……………は……………」

そうこう話していると、限界まで開いていた口をギリギリと閉じ、フィオが声を作る。

まさか、と思い覗き込んだその瞳に、明確な感情が宿っている。

「もう、話せるのか……でも喋らない方が良い。喋るだけで痛むだろ？」

「……わ……たしは……そ……い、……ギ……ア、な、……
……い」

「そう言わないでくれよ。それにこれは俺の自己満足だよ」

「……な……ぜ……」

「俺も同じ体験をしたから、かな。その時の〈治癒魔法〉は俺の救いだった」

「……す……く……い……？」

分からない。そんな瞳だ。

無理も無いだろう。でも理屈じゃない。

ただ自分の時の事を思い出し、なんとなく救ってあげたい。と感じただのだ。

「失礼します。皆さんここでしたか……………これは？」

「フィオの治療中、ですわ。セバス」

「そうでしたか…いえ、それよりも報告を」

「いいぞ」

メリアが促す。

「はい。陸・海軍は予定通り『演習中に事故が起こり不時着した空軍』を保護に向かいました。それから、飛竜の準備が整っておりま
す」

「そうか、では、出るか」

「そうだね」「そうですね」「そうじゃの」「そうですね」

みなまでも無い。最大の攻撃であつたらう空軍の侵攻を止めたのだ。
ここからはこちらのターンだ。

電光石火で進撃し、この争いで貴族連中が介入を始める前にバルナ
ム卿との会談を設け、事態を治めるのだ。

治癒魔法を維持したまま、水魔法を行使し、ざっとフィオの全身を洗い流す。

さらにそのまま抱き上げ、踵を返し、部屋を後にする。

反撃作戦が始まる。

6・0<トラと師匠>

収監されて5日目。

この日フォール卿の元へやって来たのは、かつて師弟として過ごした事もある男だった。

「よお、師匠」

「なんじゃ？ 藪から棒に？ しかし又シにその呼び方をされたのは何年ぶりかの…」

先ほどから続けていた書類仕事を止め、ふーむと天井を見上げつつ考える。

あれは腰を悪くする前じゃから、もうかれこれ30年以上にもなるかのう…などと昔を懐かしむ。

「そうだな。いやなに、なんだか流行っているみたいだったので我輩も乗ってみたのだ」

「ふむ？ まあたまにはよいかもの。それで？ トラ坊。このおいはれに何の用じゃ？」

折角なので自分も乗ってみる。少し若返ったような気分になった。

悪くない。

ともあれ用件を聞いてみる。

「ああ、じつは師匠に折り入って相談したい事があってな」

「ふむ？」

「あたしは席を外そうか？」

そこで初めてフォワール卿の隣に立ってお茶を汲んでいた少女が口を開く。

そう、この部屋には兵士を除いて2人だけでなくもう一人、貴族の女性としては珍しいショートカットをした少女が居る。

フォワール卿のひ孫にして、分家の生まれだが本家の養子となった才女。

最も彼女の家督継承権は21番。女性でもあるし、家督には殆ど関係がない。

それでも彼女が本家の養子となり、フォワール卿ともこれほどまでに親しいのはたった一つの理由。

彼女の名はルーシア＝セントルグス＝フォワール。

彼女は王女ソフィーリア様の影武者として生きてきたのだ。

そして魔道具では不思議とどうやっても再現できない色艶の黒髪をカツラで補うため、彼女の髪は短かった。

「いや、別に構わんじやろ？ ふむ。ともあれ断っておくがフォワールは中立を保たさせて貰うでの。どちらの陣営にもなびく気はないぞい？」

フォワール卿が構わない、と言えば彼女に否を唱える事など出来ない。

苦笑し、代わりに一歩引く。彼女は彼女で自分の立場はわきまえている。

「わかってるって。フェルブルムだって中立の立場さ、まあ我輩自身のは王家を支持するがな」

「ワシだってそうじゃ！ なんせソフィーリア様の教師役を務めて来たのはワシぢやからのー！」

「…まあ、そうだな」

「幼い頃からずっと…じい、じい、と懐いて来てくれてそれはそれは可愛らしく………」

そう言って、遠くを見つめるような視線で虚空を見つめ始める。

「おい、帰って来い師匠。ししよーう」

フェルブルム卿がフォワール卿の顔の前で巨大な肉級のある腕をブンブンと振る。

「大きく美しくなられた今でも……じいや、じいや、と……うつつ……」

目じりから涙までこぼし始めた。

「だめだこのジジィ暫く帰ってこないぞ……」

嘆息する。

「ごめん、トラ小父さん……姫様が居なくなっしてからこっち、多いんだ……」

「そうなのか、苦労するな……ルーシア殿……」

同情する。どうやら彼女がここに居るのは打ち合わせや避難という訳でもなく、彼の介護に近いようだ。

師匠も、いい加減家督を譲ったほうが良いのではなからうか。

「まあ。今回来た訳なんだが……………」

気をとりなおして、持ってきていた書類を手渡し、かいつまんだ説明をする。

内容は今回クーデターが起こってからこつち集まった情報を元に組み上げた、貴族達への新たな対策法案。その草案。

必死に頭を捻り、問題点や穴を塞ぎ、上手く型に嵌めてしまえるよう纏めてみた…つもりなのだが、

如何せん彼自身、こういう事は本業ではないので疎い。

だから政務補佐と運輸・建設を担うフォール卿の意見を聞きに来たのだ。

「ふむ、なるほどの。…とりあえず、草案としてはこれでも良いのじゃが、法案とするには全体的に表現がまずいの、特にここの所の「費用を過剰に使わせる」と言う所なぞ、裏の目的まで正直に書いてどうするんじゃ。修正の余地あり、じゃ。…じゃが、内容自体は

良く考えられておる。…後はそうじゃな。又シの利益が見えぬのが問題じゃな。」

「我輩の？　なんでだ？」

「法案を出す、という事は、往々にして出した本人の利益が絡む内容なのが自然なのじゃ。」

「ふむ」

「じゃがこれには又シの直接的な利益が見あたらぬ。そうになると、皆何か裏がある。と考える訳じゃ。」

「真の狙いを看破され、通らないと言つ事が。」

「その通りじゃ。」

確かに、見直してみると自分はこの案件に殆ど関係が無い。

基本的におためごかしであり、さらには貴族連中に確実な利益がある事が見えている分、怪しい。

…まだ、改善の余地があるようだ。

「そうじゃのう、例えば…いや、やはりもう少し又シが考えた方が
良いの。これだけ練れたのじゃ。後はわざわざ口を挟まなくとも良
かるう。」

「師匠にだって手伝ってもらいたいんだが……」

「いや、ワシの考えはもう古い、と思ったのじゃ。老兵は死なず、ただ去り行くのみ。と言つての。そろそろ次代に託すべきなのかも
のう」

「師匠のところなら人材にはこまらないだろう？」

実際師匠は子沢山なのだ。妻が多い我輩には及ばないが。

「ふふふ、優秀な子が多すぎての、逆に誰にするか迷いどころなの
じゃよ。いつそルーシア、お前に任せてみようかの？」

「お、大爺ちゃん！？ ……冗談はよしてよ。あたしはソフィー様の
影なんだから、無理だよ！？」

「ふおっふおっふおっ、言ってみただけじゃよ。」

そう言つてルーシアをからかう。

その時の目が本気だった気がするの……きっと気のせいだろう。
ともあれ贅沢な悩みだことで。

「じゃが、それもこれもこの騒動が治まらねば……のう」

「そうだな…だがそれも恐らく明日には概ねの白黒が付く」

そう聞いてルーシアがゴクリ。と喉を鳴らす。

「ほう、では、空軍と陸海軍の初戦の決着が届くのじゃな」

「ああ、その通りだ」

「…又シはどう見る？」

「10中8、9空軍だと思った。だが、アーリントンは鬼札を得ている」

「ふむ、ソフィーリア様を匿ったか？」

「そこは不明だ、だが、メリア嬢に春が来た」

「なんと！ ついにあの洗濯板に！？」

フオワール卿、そして驚きの声こそ上げなかったがルーシアも目を見張る。そこまで意外だったか。

しかし洗濯板とは。酷い言われようだ。

「興味深い。あの娘が見初めたと言う事は、どうなのじゃ？ 宣言どおりの男か？」

「ああ、この時期の<鎧付き>の<人型>と一人正面から剣で互角に渡り合い、切り伏せた。尋常でないクラスだ」

「名は？」

「ユートIIアオスズ、人族。素性不明だが、素行は問題なし。交友関係に長寿族の娘も居る」

「聞き覚えが無いの。しかしそれ程の猛者がまだ無名のままこの国におったか…」

言われてみれば疑問だ。それ程の男なら幾らでも噂になっている筈。

それが、我輩の所のデータベースにも無い……？

「まあそれは兎も角、だ。部下の追加報告も有って制空権を取りに行ったフィオ嬢の先遣隊ぐらいは落とすそつな期待は持っている」

「ふむ。じゃがそもそも100騎やそこいらを集めぬ事にはメリア嬢すら抑えられまい？」

「そつなのだが、<魔槍ヴェルスパイン>は件の<人型>に壊されて修理中だ」

「むう、ますます読めぬか…」

「うむ、エーリカ殿の<鳳凰>もメリア嬢では扱えぬだろうしな」

「やはり全ては、明日か」

「うむ」

どちらが勝つかは分からない。

だが、願わくばアーリントン側に勝って貰いたい。

そして何よりも、無為な血が流されて居ない事を…

彼らには、祈る事しか出来なかった。

6・0<トヲと師匠>(後書き)

9 / 15 誤字修正しました。

6 - 1 <会談>

どうして、こうなったんだろう？

私は考える。

今の私は初戦で敗退する前に着ていたものと同じ、指先まで隠す事のできる愛用のだぼだぼの服を着込んでいる。

枷は、付けられていない。

そしてワイバーンの手綱を握り、腰には短剣まで着けている。

少なくとも、虜囚に対する扱いではないし、やっていい扱いでもない。

私達は王女を、王家を裏切りクーデターを起こした。

その一味であり、さらに首謀者の娘。

国家反逆罪でその場で処刑にされてもおかしくない立場。

なのに、その当の本人である王女に短剣を与えられ、あまつさえワイバーンを飛ばしている。

「見えたね」

「……はい」

さらに問題はこの声の主。私の後ろに相乗りし、腕を腰に回している人物。

黒目・黒髪の中肉中背の男性。言わずと知れた今代のく召喚されし者だ。

「懐かしいな。あそこがこの世界での始まりだった」

『そうじゃのう』

「……」

良く話しかけてくる人。この6日間の旅で思った。

だけど、今日も私はどう返して良いのか分からず口ごもる。

……これもいつもの事になっている。

「感慨深いです」

口ごもった私に代わり今度は女性の声が響く。

近くを飛んでいるワイバーンからく拡声の首輪くに乗せられて届い

た声。

同じく長く伸ばされた黒髪を、邪魔にならないようにと後頭部でまとめにした王女、ソフィーリア様。

後は、その前に座り手綱を握るアーリントン家のセバスチャン。

これだけだ。

2頭のワイバーンと4人。いや、魔族、という彼女も含めて5人なのか。

3日前からたったのこれだけの人数で旅をしている。

そうこう考えている間にワイバーンは目的地上空へとたどり着き、旋回を始める。

下方に見えるのは北側に巨大な森を有する堅牢な囲いで覆われた神殿。

<召喚の塔>のある、バルディカ神殿だ。

既に義父は到着しているのだろう。ワイバーンの発着地には複数のワイバーンに<グイーヴル>。鎧姿の兵に<人工人型>が見える。

そこに、降り立つのだ。このたった5人で。

なんて、作戦だ。

数日前の事を思い出す。

<竜燕>で文を送り出したと同時に、彼らは激痛で何の抵抗も出来ない私を連れてアーリントンを出立した。

ワイバーンの頭数の問題で厳選に厳選を重ね選りすぐられたメンバーは、陸軍の精鋭兵と特殊任務隊の兵とアーリントン家の面々、そして捜査局のマリアベル。

どこかで見覚えがあったと思ったらフェルブルム卿の孫娘だったらしい。

「おじいちゃんを助けたいのです！」と言って同じく捜査局の制服を着た護衛の兵と共について来ていた。

とは言え<竜燕>の扱いの問題で、連れてこざるを得なかった側面もあるし、それはどうでもいい事か。

……ともあれ全部で80騎150人程の編隊でまずはアルモスに飛んだ。

私達が使ったワイバーンは疲労が酷く、再度の強行作戦には持ち込めなかった。

元々戦闘はヴァイヴルで事足りると考えていた為、乗り潰すぐらい

の速度で飛ばせたのでは、仕方の無い事だった。

そしてアルモスで義父からの返事を受け取った。

内用は、要点だけを纏めると「会談に応じる。王と王妃、それから娘を同行させるよう求める。場所も日程も異存は無い。」だった。

そして、作戦が練られた結果がこうなったのだ。

<召喚されし者>と王女が来るというのだ、普通に考えるならばその護衛は集められる最大数だと考える。

だが、その護衛にするだろう、という兵士全てを用いて王都を、人質を奪還する。

相手が確実に最大戦力は会談場に来ると予測し、かなりの兵を割いて来る事を見込んだ上での用兵。

陸軍の空戦隊は寡兵だから、少しでも敵を減らし味方を多くつぎ込みたいのは分かる。

高みの見物を決め込んだ貴族連中を出し抜く為にも速度が重要だと言うのも納得が行く。

だが、正気の沙汰ではないだろう。

奇策にも程がある。

それでも、それを決行し、成功させる程の力が私の後ろの男にはある。

彼が説得のために行った異常なデモンストレーションが、皆を納得させたのだ。

何があっても王と王女を殺すことは出来ない、と。

背後を意識する。

……私に恐怖を植え付け、限界を超えた激痛に喘ぐ私を癒し、優しい声をかけ続けた男。

その後もずっと、彼は優しい言葉を投げかけてくる。

彼に声をかけられるたびに、落ち着かなくなつて、ついに耐え切れなくなつた私は、ある夜の野営中に「……どうしてそんなに優しくするのですか」と確認してしまった。

……本当にどうかしている。

ちなみにその答えは端的で、「性分だから」という事だった。

……訳が分からない。

再度追求すると、

今度は「娘と名前が似てたから……かな」と曖昧な言い方で答えられ

た。

「……娘、ですか？ 意味が分かりません。……それに名前だけで私とでは似ても似つかないでしょう」

自分が一般人とどれだけ違うのかはそれなりに理解している。

だから、何故か、と再度問うと、

「そうだね、そうなんだけどね…俺は娘に会った事が、ほんとに少ししかなくてね……」

彼が、つらつらと話し始める。

そして、彼の過去を聞いた。

結局理由は理解できなかった。だが、一つの結論が出た。

彼は、彼らは危険過ぎる。

復讐の為に老若男女を問わず、手当たり次第に魔族という他種族の人を殺戮しつくした彼自身の思想だけでない。

彼の口から語られた常軌を逸したく攻撃魔法>、魔族の娘の行った飛竜の無力化。

さらには手の施しようが無い筈の私の体を治療して見せたく強化魔法>なるものもだ。

…同じようにかけて貰ったと言うメリアも王女も気にしていないようだったが、魔道具開発に携わった事がある私だから分かる。

このく強化魔法>と言う物は人体に対して、魔道具を作成するように術式回路を書き込む行為に酷似している。

その意味は、技師や識者ならば当然知っているような常識。

かつて幾人かの無謀な技術者が挑み、変わらない一つの結果しか産み出せなかった。

遅い早いのはあれども、いずれ歪みが限界を超え暴走、全身を侵食し、…爆死する。…それだけだ。

その点だけを見ても、一切の歪みが生まれないこの技術は並大抵の物ではない。

一体どれだけの時間を費やして動物実験と人体実験での犠牲を生めばこれほどの技術が完成するのか？

千や万では足りないだろう。それを平然と使って見せた。

今までもく召喚されし者>は目新しい技術を持ち込んだ。けれども、それは発展を軽く進める程度。劇薬とまでは行かなかった。

だが彼は違う。100年単位、いや最早1000年単位の未来の技術。

そしてそれですら基礎だ、と言うのだ。

さらには王女に与えられたこの持っているだけで簡易型のく治癒魔法>が発動する短剣。

見た目は普通なのだが、これも彼らの手による未知の技術で魔法が込められている。

ざっと見たところでは、く魔晶石>を使い術式回路を編みこんで作り上げた普通の魔道具に見えなくも無い。

だが、術式回路そのもののマナ吸収性質を利用して、恒久的に特定の魔法を発動するタイプではく治癒魔法>のような複雑で出力の高い魔法は込められない。

そういう魔法に関しては込められても補助的なものや、詠唱を代行するための回路ぐらいのもの。

しかし、この短剣は明らかにそれを成功させている。

緻密で芸術的で、たとえ道具があつたとしても解析しきれないだろうこれは、最早殆ど一つの生命体の体組織に近い。

どれか一つだけとっても劇薬、なんて言うのも生易しい。最早未知の猛毒。

だというのに…確実にまだ底を見せてはいない。

とてもでは無いが、計り知れない。

彼らを、どう扱うか。それはこの国に留まらず、この大陸全てを巻き込みかねない問題になりえる。

そんな気がする。

「フィオ？ 降下しないの？」

物思いに耽っていると、その彼の声が聞こえ心臓が跳ね上がる。しまった、私が先に降下する。という話だったのだ。

慌てて降下を開始する。

…時折私に向けられる彼の声は優しい。私は敵なのに。彼はそう扱わない。

その声は何故か安心してしまい調子が狂う。

さっきだって、一言声をかけられただけで自分でも信じられない程

驚いてしまった。

だというのに、今はもう完全に落ち着き、普段より集中力も増している気がする。

それにここの所気がつければ彼の事ばかり考えている。

私はどうしたというのだろうか？　今までこんなに混乱した事は無かったのに。

体が治ったせいなのだろうか？

目だけを動かし視線を上へと上げる。そこには額から伸びた真っ白な1本の角の先端が見えた。

鬼系亜人の証、幼い頃に根元からえぐり落とされたそれ。

年齢の割りには少し短いが、今はもう完全な形で生えている。

その角によって髪は分けられ、失明していた左目はもう隠れていない。

…無論、その左目も今は見えるようになっていた。

度重なる骨折でいびつな形になっていた手指も、いまはほっそりとしたしなやかな女性の手になっている。

それだけではない。全身の火傷や裂傷の跡も消え、身長はやや縮み、胸は2回り、お尻は一回りほど膨らんだ。

数日前と比べ女性的、と言っか…兎も角見た目の印象がかなり変わってしまっている。

愛用のだぼつとした服を着ていても、隠しきれない程に、だ。

……正直、困る。

嬉しい、と感じる気持ちらしきものはある。でも、それが本当にそうなのか分からない。

だが、今までと比べて何か体が凄く軽い。纏わり付いた泥が洗い流されたような感覚がする。

体が治ったから軽くなった分では無い、別の何かが体を軽くしているのを私は確かに感じていた。

地面が迫る。周りを兵に囲まれたままでのランディング。

減速し、着地する。その直ぐ隣に王女を乗せたワイバーンも着陸する。

流石にセバスチャン。手馴れたものだ。

「ようこそいらっしやいました。ですが、4名…なのですか？」

代表らしき人物が一人前に出て、話しかけてくる。その声には聞き覚えがある。

「ああ、指定どおりだろ？」

答えたのはく召喚されし者、ユート。

「はあ、ですが、あの、状況はご理解成されておられますよね？」

「勿論です。さあ、バルナム卿のもとへご案内下さい。いえ、まずは婦人の方に行きましょうか？ 連れて来て下さっていますよね？」

「…え、ええ。そういうご要望でしたので。はい」

「どうする？ マール？」

「ふーむ？ うん？ ああ、聞いた所深刻な病状らしいし、ここは先手を打った方がよいかの？ まずはその婦人で良いのではないか？」

「はあ、では…」

そう言つて魔族の少女、マールが促す。

彼女も危険人物だから、慎重に観察を続けていた。そして分かった事がある。

彼女は病氣、と聞くと妙に興奮するタチのようだ。

今だつて嬉々とした声を上げていた。気のせいではない。

…かなり、役に立たない情報だが。

とりあえず、背後のユートがマールと共にワイバーンを降り、それから私も降りる。

「あ、申し遅れました。私、バルナム家の家令長を務めさせて頂いております、セバスチャン。レキ＝ベルム＝シュトラウスと申します。どうぞ、レキ、と気安くおよび下さい。」

お見知りおきを。そう続ける。

優雅に腰を折つた燕尾服を着た糸目の金髪、そして特徴的な三角の耳をした男性。見た目は20代そこそこ。

私はバルナムに引き取られてからの付き合いだが、時々誰もが理解不能な類の妙な事に拘る今ひとつ良く分からない男。

……やはり、彼だつたようだ。

「これは、レキ様とは…お会いできて光栄です。私はアーリントン家のお嬢様付き執事を務めますセバスチャン、フランク・レンフィールドでございます。そしてこちらは王女ソフィーリア様と今代の〈召喚されし者〉ユート様になられます」

「おお、〈召喚魔術〉は本当に成功なされておられたのですね…おめでとございます。ソフィーリア様」

「ありがとうございます。レキさん。ややこしくなりますし、それでいいんですよね？」

「はい。では、案内します。まずは奥方様の元ですね」

「ああ、よろしく」

そう言って踵を返し、ワイバーンの発着場を後にする。

私はこれから義父を説得し、懐柔し、……助命を嘆願しなくてはならない。

……裏切り者、と謗られるかもしれない。此方が示せる手札も、殆ど無い。でも、やるしかない。

この状況ですら、義父に勝ち目は存在しないのだから。

そう考えると、複雑な心境になった。

6 - 1 <会談> (後書き)

9 / 17 誤字修正しました。

6 - 2 < 会談 2 >

「ねえ、フィオ、あの人さ、もしかして長寿族？」

「……はい、そうです」

神殿のただっぴろい廊下を歩きながらフィオにこそつと質問する。

ワイバーンを降りて最初に近づいてきた案内役の人。

その人の耳がオサと同じ形だったので、もしかしたら……と思ったのだが、正鵠を射ていたようだ。

「やっぱり？ いやあオサと同じ耳だったから？ 意外と居るんだね長寿族」

「…オサ、ですか？」

フィオにこそつそりと耳打ちしていたのに、意外にも反応したのは先導して前を歩いて居たレキさん。

あれ？ 知ってるのかな？

「知ってる人？ オサ…ルトス…アルストラって言うんだけど？」

「……………知っています。ですが、彼は…」

「…彼？」

「ええ、300年前の戦いで功労者です。ですが生きているとは思いませんでした」

「…当時9歳だつて言つてたのに功労者？ それに彼？ 何か食い違つているような気がする。」

「えつと俺の知っているオサつてのは白髪で、見た目10歳ぐらいの少女なんですけど？」

「……………では彼の娘か孫かもしれません。親の死と共に名を継ぐ事は多々ございますので。…それにしても、どちらでお会いに？」

「神殿の北の森を抜けた先の小さな村です。「オサの村」つて言う」「……………」

あまりにもそのままな村名に言葉を失い額を押さえるレキさん。

「…その気持ちは分かる。愛称のネーミングセンスといい、オサのそういう所はかなり変だ。」

「申し訳御座いません…ですがそのような近辺に同族の方がおられ

るとは…」

「私もびっくりしました…ですが何か理由が有るようです。家出娘だ。と言っておられましたし」

ソフィーも補足する。

「家出…そうなのですか…いえ、ですが朗報です。機会が有れば一度会いに行つて見ようかと思ひます」

同族同士、何か積もる話でも有るのかもしれない。

「そういえば長寿族の方つてどのぐらい居るのですか？」

まだ目的地には着かないようだしついでに聞いてみる。

黙っているとこれから有る会談の事とかを考えてしまひなんだかわそわするのだ。

それに希少種らしいのに早くも2人目に出会つてるし。

実は結構居るんじゃないか？

「そうですね…ここベルム王国には…居留地に全98人が生活しています」

「え…」

「ふふ、少ない、と思われたでしょう?」

「は、はい。予想以上に…」

いやでもそういえば以前ソフィーから聞いていたような…いかん。記憶があいまいだ。

「他にも氷雪の国シルベリア王国、熱砂の国ローレシア王国にもそれぞれ一つずつ居留地がございまして、その3つを合わせても総人口は僅か332人しかございません」

「…」

「ふふ、これでも300年前から比べると30人増えているのですよ? それから居留地を出ている者ですが…今は私を含めて3人しか居ない筈です。オサさんは、初めてのケースですね。きっと居留地外で生まれたのでしょうか…興味深いです」

「なるほど…ち、ちなみにレキさんはどうして外に?」

「ふふ、お恥ずかしい事ながら、セバスチャンに憧れましてね」

「…そう、なのですか?」

なんとなくセバスさんを振り返り見る。

うん。人によっては憧れてしまいそうなナイスミドルではある。

「ええ！ 主の意を汲み、如才なく動き、時には家令として、時には警護として、また時には盟友として、師として、その才能を遺憾なく発揮し究極にたどり着いた完・璧なる執事……。素晴らしいではありませんか！ その存在を知った時、まさにこれしか無い、私の才は辺鄙な居留地生活では生かせはしない。私はセバスチャンになる為に生まれて来たに違いない！！ と、気づきましてね。お恥ずかしながら、養成学校の所在を知った時にはもう自分が長寿族である事など忘れ、思わず門を叩いていました」

予想以上に饒舌にレキさんが語る。

ちょっといきなり過ぎて引いた。

「先輩は歴代最高成績を残して卒業した伝説の男とまで呼ばれたセバスチャンですから。」

セバスさんが尊敬の眼差しでレキさんを見る。

「歴代最高……」

…俺の成績表は中の中でした。エリートさんですね。すごいですね。
……………ひがんでどつするよ。

「当然です。人が至れる究極に我々長寿族が至れぬ、とならばそれこそ先祖に顔向け出来ません。」

自信満々に胸を張り、レキさんが応える。

……………謙遜すらしなかったよ、この人。

「先輩が減点されたのは只一つ、自身の名前を別の呼び名で呼ばれる事を一切認めなかったことぐらいですから。」

「それはまた…なんでそんなことで？」

「ええ、我々長寿族にとって名とは往々にして先祖代々守り通してきたものですから。私の名も曾祖父から受け継いだ由緒正しき名前なのです。それを他の呼称で呼ばれ、はい。と返事をするなどと…先祖に誓っても許される話ではございません」

「先祖に…そういえばオサも良く言っていました「先祖に誓って」と」

「ええ、なにせ我々長寿族には原始の次代を終わらせた後の神話の代から2万年に及ぶ誇り高い歴史がございますので。その歴史を育

み絶やす事無く現代に伝えた祖先達を敬う事は自らが道を過たぬ為の戒めでもあるのです」

「なるほど。」

2万年とかスケールでけー……

そういえば長寿族って何年位生きるんだろっ？ オサにも聞き忘れてたし、よし、次はそれを聞いてみようか…

などと話題を考えていたらレキさんの足が扉の前で止まった。

「こちらです。少々お待ちを」

そう言ってノックをする。

「入れ」

聞こえたのは男性の声。

扉が開かれまずはレキさんが中に入り、その後レキさんに「どうぞ」と促されて室内へと進む。

中に入ると薬香の匂いが鼻をついた。

「お久しぶりですね、ソフィーリア様」

最初に話しかけて来たのは寝台の奥に立つ眼鏡の男性。

部屋には、寝台に眠る女性と彼以外に誰も居ない。

そして彼も医者には見えない。

「ええ、そうですね、お久しぶりです。バルナム卿」

呼ばれたソフィーが答える。バルナム卿。

…この人が、今回のクーデターの首謀者。そしてフィオの義父。

これから会談をし、懐柔すべき相手。そう考えると緊張する。

「こちらに居られる、とは聞いていませんでした」

「…医師団を早々に人払いせざるを得ませんでしたので、妻の元を離れたくありませんでした。…今は、薬で眠っています」

そう言って寝台に横たわる女性を見つめる。その瞳は暗く、だが、優しい。

「…マール、お願いできますか？」

『心得た』

ぴよん。とマールが俺の頭から離れ寝台で眠るイリアさんを診察し始める。

目を開き、口を開き、触診。概ねエーリカさんにした事と変わらな
いような事を済ませた後に口を開いた。

『んーヘルペス脳炎の亜種…といった所かのう？ ありふれたもの
じゃ。つまらぬ』

「…治るのですか？」

ソフィーが問う。

『んー確か発症して4年で、昏睡に程近い意識障害まで出ておつた
んじやったか？ 脳が大分やられておる。良くぞ今日まで生き抜い
たものよ』

「…治るの、ですか？」

同じ言葉で、バルナム卿が問う。

『ふふん。愚問。と言わせてもらおう。このような単純な病などのこと』

そう言っつて両手で頭を掴み爪を立てる。

『んー抜いても良いのじゃが、ここは直接殺したほうがよいかの。えい、っと』

マールが頭にかけた腕が淡い光を放ち、そのまま広がってイリアさんを包んでいく。

「殺す？」

『ああ、ヘルペスウイルスを、じゃ。案ずるでない……』

俺とマール以外の全員が、首を傾げる。

ウイルスなるもの自体が分からない。といった雰囲気だったが、あえて誰も質問をしようとはしなかった。

皆、息を呑んで治療を行っているマールを見つめている。

『……………つむ。完了じゃ。』

そのままおよそ10数分経ち、光が収まった所で治療は完了した。

「終わったのですね？」

『つむ。後は治癒魔法で十分じゃ。ちょっと重症じゃったから脳を強引に弄ったんでの。意識を取り戻すのに1週間はいるやもしれぬが…もう大丈夫じゃ』

「では…」

『まあ多少は記憶障害が出るじやろうが、その他は概ね戻しておいた。目覚めた後生活するのに支障は出ぬよ』

「ご苦労様です。マール。」

『ふふん。これは貸しにするからの？ その眼鏡とその娘の根暗親子に、な』

指差す。その先にはこの寝室に入ってからずっと押し黙っていたフィオ。

その指先につられ、バルナム卿が視線をフィオの方へと向け、しげしげと見つめる。

「…フィオ？」

「……はい、義父さん」

「お前、角が…」

「……はい、不本意ながら、……治療されてしまいました」

「そうか…いや、すまない。本当にフィオ、なんだな？」

「……はい」

べつやら、印象が変わり過ぎていた為に気づいていなかったようだ。

「では、イリアの方も、信じて良いのですか？」

『妾のような存在は嘘をつかぬ、のじゃろ？』

「そう、なのですが…」

『では信じよ。まあ案ずる事は無い、数日で答えは出るしの』

「…はい…そうですね」

「では僭越ながら治癒魔法は私が行わせて頂きます。先輩。よろしいですね？」

セバスさんが一步前に出て、レキさんに確認する。

「ええ、貴方の実力は聞き及んでおります。お任せしますよ。私達は席を外し、本題に参りましょう」

「そうですね。私達は会談に来たのですから」

『ふふふ、今回の貸しは会談では使わずともよかろうな』

「…」

マールの言葉どおり、当初予測されていた剣呑な空気は最早無い。

先手を打ったのは正解だったようだ。

フィオが既に治療済みだった事で、説得力も増した。

後は本題。

「では、参りましょうか」

そついったレキさんを先頭に応接室へと向かう事にした。

6 - 2 < 会談 2 > (後書き)

9 / 1 7 誤字修正しました

「単刀直入に言いますね。私は今回の事態を無かった事にしたいのです」

最初に口火を切ったのはソフィーだった。

この応接室に居るのは5人。

俺とソフィーとマール、そしてバルナム卿とフィオ。

レキさんは部屋の外で待機している。

非公式の、会合。その最初の一声。

だが、それは。

「ですが、既に事態は起こっているのです。どちらかが降伏して、決着を見ないことには…」

当然、受け入れられない。

「確かに事態は起こりました。ですが人的被害はそれ程深刻ではありません。加速度的に起こった事態を把握できず諸侯貴族の動いていない今こそ穏便に事態を収める絶好の機会なのです」

「しかし、それでは私も納得ができません。王家の存続は…<召喚魔術>が成功しておりますので認めますが、我々も覚悟を持って動き、犠牲を出しているのです。おいそれと止まれません」

「では、幾分かは貴方の要求も呑みましよう。それは五大家会談で纏めればよいのでここでは省きますが、それで手を引いて頂けませんか？」

「私を信じてついて来たものに示しがつきません」

「ですが、既に空軍は落ち、実質捕虜になりました。それも怪我人程度で犠牲は皆無です。もう、貴方に勝ちは無いのです」

「…今、この場で貴女と彼を抑えてしまえば、という可能性を考えなかったのですか？」

「それは不可能です。ですよね？ フィオさん」

「………はい、義父さん、……彼を抑える事、は、不可能、です」

「…ここには兵50名、<人工人型>200体、ワイバーン50匹、ヴィーヴル30匹が居るのですよ？ それに比べ貴方は3人、いや4人だ。…他のものは王都に人質解放に向かったのでしょうか？ どうすればこの状態で強気に出られるのですか？」

『ふむ？』

「……義父さん、聞いてください。数をどれ程集めようと無駄なのです、王と王妃にはもう、私たちでは傷一つ負わせる事すら出来な

「いのです。」

「……本気で言っているのか？」

「……はい。」

「<召喚されし者>がもたらす、新しい技術ということか？」

「……はい。実際に多くの人と共に確認しました。……王が、王妃を剣で切りつけ、建物の壁を突き破る程の威力で叩き付けましたが……全くの無傷でした。……その後、メリアがどんなに攻撃を加えても彼にも傷一つ、つけられませんでした。」

「本当、なのか？ トリックではないのか？」

「話で聞くだけじゃなんだし、今やってみようか？ なんならあんたがやっても良いよ？」

「……」

そう言っ手て手を机に置く。

「フィオ、刺して。」

「……」

「やっ。お願い。」

「…………はい」

王女に貸し与えられた、腰の短剣を抜く。

…………やる、しかない。

逡巡し、決意し、振り下ろす。だが、手元が振るえ、机を刺してしまった。

「もう一回」

「…………はい。」

机に1/4程突き刺さった刃を引き抜き、再び構える。

今度こそ、当てないといけない。

手の振るえを抑えるためにさつきより力を込め、振り上げ、振り下ろした。

今度は外さなかった。けれども、ガキン！ と岩を殴りつけたような感触がして、私は短剣を取りこぼしてしまった。

「……………」

「見ての通りです。そして、これはソフィーにも使用しています。」

…劣化版で、魔法には効かないんだけどね。

思うが、黙っておく。十分なはずだ。

「魔法も試してみる？　メリアの〈渦炎陣風結界〉でも服しか燃やせなかったけどね。」

「……………」

…全力でやってくれ、とは言ったがまさかマップにされるとは思わなかったけどね。

これも、黙っておく。どう考えても蛇足だ…

「……………本当です…私もこの目で確認しました。それに、これは防御用。……………攻撃用は、別にあります」

「……………」

「殲滅、されるだけです。」

『それだけならば妾でもできるぞ？』

「そんなのでしょうね…でも、やめておいて下さいね。マール」

貴女派手好きだから、と笑って止める。

でも、俺にも分かる。そう言うソフィーの顔が引きつってしまっている。

本気でやめて、と言っている。

「まあ、そういう事ですよ。だからこういう作戦になったんです。はったりと思うなら、やればいい。全滅させますよ」

「…ユートさん。いけません」

「……」

調子に乗った。

「ふう、とりあえずもう一度、こちらの要求を述べます。降伏し、このクーデターを無かった事にしてください。それはこちらからも手助けします。そして、今回の事件での損失はバルナム家にある程度保障をして頂きます。まあ、このあたりは5大家会談で詰めましょう。後は私とユートさんの事ですが、知っての通り、国政にはまだまだ未熟者なのです。ですのである程度の政務の移譲も認めますし、5大家には監督をお願いします。悪い条件では、無いでしょう？」

「そう、ですね。そうですが…」

「何か、あるのですか？」

「…私は、この国の腐った体制を正したいのです。そのためのクーデターでした。王家も賄賂を受け取っていた、同罪です。だから、おいそれと納得できない」

「…祖父が金銭を受け取ったのは事実です。ですが、それは私に＜マナ結晶＞を用意するためでした」

「そうかも知れませんが、ですが良くない前例を作られた。何時また同じような事が起こるか分かったものでない」

「なら、体制も変えちゃえばいいんじゃない？」

「…」「…」「…」

なんとなく言ってみたら皆黙ってしまった。き、気まずい。

『おんしもなかなかムチャを言うのう』

「なんでさ？ 政務を移譲とかとそう変わらないんじゃないの？ 権力者を蹴落として奪う訳でも、殺して奪うって訳でもないし？」

「それは、そうかも知れませんが、その…」

「良く分からないけどそういう所もその五大家会談で詰めれば良いんじゃない？ どの道俺は国政とかサツパリだし」

『それもそうじゃのう』

「……」「……」「……」

苦笑いをされる。困った人だと思われているのだろう。

でも、まあ言いたい事は言っておこう。折角俺も会談に参加しているのだから。

「俺としてはこの無意味な争いを終わらせて欲しい。そもそも何で争ってるの？ 聞いている限りやりたい事、目指す所は一緒じゃないか？ 俺もそんな悪徳貴族はこらしめたいって思うし」

「ユート様、動き出してしまった事はそう簡単には収まらないものなのですよ。理解して頂けませんか？」

「いや、分からないね。事的首謀者と、国のトップと、ここには居ないけど5大家？ だっけかの国の偉い人は皆こちら側の立場で居る。何とでも出来るんじゃないの？ 腐った貴族？ 絞め上げればいいじゃない？」

「ですから、そう簡単な事ではないのです……」

「何で出来ない？ 誰が納得しない？ こんなに平和なのに。今日の命を脅かされる程追い詰められてもいないのに」

なんなら、俺がやろうか？　まるで魔王みたいだが。そんな考えが浮かび、喉元まで出かける。

だが、これは口にしない。間違っているのが明確だからだ。

「何が内戦だよ。何がクーデターだよ。おままごとじゃないか。本気で殺し合っても無いのに何言ってるの？　って気分だよ」

「…」

『ふふふ、魔族との戦争で人類が滅亡させられ、さらにその魔族を滅ぼした最後の人間の言う言葉じゃ。こやつほど情け容赦の存在し無い殺し合いを知っておる者はおらぬぞ？』

マールも続く。そのとおり。あの戦争には降伏も捕虜も極力殺さないという思考も何も無かった。

ただ、徹底的に敵を殺し、滅ぼす。それが生き残る為の手段。それだけがあの戦争での事実。

「我々は、真剣に…」

「なら殺せよ、敵を。選ぶ必要は無い。誰一人残さずに。お前らがやってる戦いなんてのは人を駒扱いしたルールのあるゲームなんだよ、ふざけんな」

「ユートさん、纏まらなくなります…」

「そうか、そうだね。うん。ちょっとヒートアップしすぎた。ゴメン。でも忘れないでくれ。俺は、世界を一つ滅ぼした男だ」

すこし過剰気味に表現し、脅しをかける。

それはここでも同じ事が可能なんだぞ、ということだ。

「……義父さん。彼の言葉は本当、だと思います。この身を治療した魔法も百年、ともすれば千年単位の未来の技術です。……そして空軍は一度消されかけました。彼に。……ソフィーリア様の、殺さないで下さいという嘆願を受けて、代わりにその魔族が飛竜を全て落として降伏させたのです」

フィオも説得をする。

「…滅茶苦茶だ。そんな事…いや、違う、そんな理屈は、私は守りたいんだ。救いたいんだ。殺すだけの戦争で済むならそんなに楽な物は無い！」

「なら、どうするんだ？ 逆にここであんたを抑えてしまえば、って事も出来るんだぞ？」

勿論それは簡単なことだろう。

さらには俺たちがここに戦力を集めてくると思った筈だ。

だからここに居る兵は恐らく主戦力。つまり王都は手薄になっている。

そこに寡兵といえメリアを先頭に解放軍が向かっている。

今更向かった所でもう遅い。王都もほぼ間違いなく取り戻せる。手詰まりのはずだ。

「それは…」

バルナム卿が息を呑み、返答に詰まる。

「あなたの理屈は分かったよ、でももうあなたは手詰まりだ。単にあんたが認めてないだけじゃないか」

「…」

「いい加減、負けを受け入れろよ。良い大人なんだし。ソフィーも無かった事にしたい。って言ってるじゃないか。後で立て直せば良いだろ？」

そう、チャンスはある。国家反逆罪で死刑という訳でもない、と言っているのだ。

これ程の事を、しでかしておいてなのに。

甘いといわれればそうだろう。だが、彼の思想は、目指す先は、俺たちと然程変わりが無いもの。

だから、俺にはその甘さが正しいと思えた。

だから、この作戦に乗ったのだ。

「失敗するのは悪ではない、それを隠蔽し、誤魔化し、取り返しの付かない傷へと広げる事こそ悪であり、挽回して見せたならば、失敗は成功の礎となる。ですか」

「そうそう、そんな感じ。何だ、良い言葉があるんじゃないか」

「…言葉、だけですがね。ふふ。仕方ありませんか：確かに空軍が落ち私の戦力は殆ど無力化され、敗戦となるのは確かなようですから」

「では、降伏を？」

自嘲交じりにバルナム卿が答えたのに反応し、ソフィーが確認をする。

「仕方ない、ですから…ですが、タダで…とは行きません。王都での会談ではしっかり私の意見も通して貰いますよ」

「まあ、納得できる内容ならね」

「約束ですよ」

「いいよ。ソフイーも、それでいいよね？」

「ええ…、納得の行く内容でしたら仕方ないですし…」

ちよつとヒートアップしたり、脅したりもしてしまつたが、何となく纏まつた。

和やかな空気になつた所で話が進められる。

「では、降伏宣言の文面をお願いします。後ほどサインしますので」

「ええ、王都に戻ってから。それにこれは非公式な宣言になります。貴方の心になれば大丈夫ですよ」

「まあ、はじめという奴ですよ。それに口約束は往々にして反故にされるものです。きちんと書面にする事を忘れてはいけないのです」

「そうですね。では、気をつけませんと。ふふ、覚える事が沢山ありますね」

「はい。……………最も、はじめをつける事になるのは私でしょうがね。」

「？ 今、何かいいましたか？」

「いえ、特には。はい。では、向かいますか、王都へ」

「ええ」

「そうだね」

「……はい」

『そうも行かんようじゃぞ?』

マールが一人、否を言う。

え? と思い、その視線の先を追って、応接室の扉へとたどり着いた瞬間、

扉が外側から勢い良く開かれた。

6・3＜会談3＞（後書き）

9/17 誤字修正しました。

6 - 4 <ホル・コースト>

「おや？ 会談は終わられたので？ 思ったより早かったですね？」

開かれた扉から鎧姿の兵士が10数名なだれ込む。その中央に立つレキさんが俺たちに話しかけた。

「セバス？ 何を？」

「何度言ったら分かるのですか旦那様。私のことはレキとおよび下さい、と。そうでしたね。ええ、クーデター？ ですよ。」

「レキさん、これはどういう事ですか？」

「分かりませんか？ ソフィーリア様。簡単なことですよ。このベルム王国には滅んで頂きたいのです。」

「何を…」

「はて？ しかしクーデターなのに国を滅ぼす、とは何か変ですね？ ですがこんな国欲しいとも思いませんし、どうなのでしょう？ この場合はなんとさえいいたいのでしょうか？」

『ジェノサイド 大虐殺で十分じゃろ。』

マールが律儀に答える。

「…その表現はなにかこう、美的さに欠けますので避けたいですね。つづむ…」

『ならば民族浄化、^{ホル・コースト}なぜどうじゃ？』

さらに答える。何を話してるんだこの二人は。

「ああ、それはいいですね。ピッタリです。なかなか博識ですね妖精さん。ありがとうございます。で、そうですね。^{ホル・コースト}民族浄化ですよ。この国に対する、ね。」

「何を…言っ、貴方もベルムの民でしょう？」

「いいえ違いますよ。私の本当の名はレキ＝ルトス＝シュトラウス。ベルムの民ではございません。」

「何を言っている？ 確かルトスの民は300年前の戦いで全滅し、国は解体されたのでは無かったか？」

「ええ、そうですね。オサの裏切りでルトスは滅びました。ですが、生き残りも居るのですよ。そして我々は人を許しはしない。」

レキさんが静かに、しかし確かな怒りを込めて言う。だが、どういう事だ？ オサが裏切った？ ルトス？

確かオサの名前もオサ「ルトス」アルストラだ。300年前に何が
あつたんだ？

何も、分からない。そんなことばかりだ。いい加減にしてくれ！！

「機会を狙っていたのです。ちょうど旦那様が暴走しそうでしたの
でセバスチャンとして紛れ込ませて貰いました。ですが、どうもこ
のクーデターは失敗に終わりそうですから。」

「……」

「見たところ、会談はつつがなく終了。どうせ命の保障までされて
あつさりと降伏を受け入れたのでしょうか？ そんな都合の良い話が
有るわけが無いというのに。あれだけお膳たてをして、計画を練り
上げたというのに。王と王女が居たとなるとこのざま。残念ですよ。
やはり旦那様は今でも寝言しか言わない引きこもりの坊やでしかな
かったのですね。」

「……………それで、どういふつもりなのだ？」

「ええ、何。簡単です。気づかなかつたのですね。ここに兵なども
うおりません。居るのは<人工人型>だけですよ。」

『ふむ。人の気配が一切せぬはその為じゃったか。』

そう言えば時々不思議そうに疑問符を浮かべていた、どうやらマー
ルは気づいてたようだ。

言って欲しかった。

「彼らを用いて貴方を始末します。そうすれば、この国は、この世界はお終いでしょう?」

「そんな事はさせる訳には行かない。」

そう言つてバルナム卿が両手に付けた腕輪を掴む。<人工人型>を操る気なのだろう。

魔力を受け、発光した腕輪が、パリン。と音を立て碎け散る。

「おやおや、やはり気づかなかつたのですか? その<傀儡子の腕輪>は自壊術式が刻まれているのですよ。そして今、その自壊術式を起動しました。今頃王都でも自由になつた<人工人型>が暴れだしているでしょう。」

「何て事を…それではお前も!」

「私は大丈夫ですよ。当然じゃないですか。この<擬態の腕輪>で同族に成りすましていますので。ちよつと<人型>の声が五月蠅いですが、襲われはしません。」

「<人型>の声…だと?」

「ええ、彼らこれで意外と意識はあるのですよ? 苦しい、助けて、

死なせて、そんなのばかりですがね。で、意識があるなら声が出せて聞こえる訳で。」

「さあ、もう我慢の必要はございません！ 彼らを食べましょう！」

「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」」」」

その言葉を受けた途端兵士の鎧の右腕が肥大化し、その手甲が、胸甲がはじけ飛ぶ。

中から現れたのがグロテスクな肉色の口腕。 <人型><歩兵>の証。

「では私はこれで。もう会うことは無いでしょう。さようなら。」

「レキ！！ 貴様！！」

「下がってください！ 危険です！」

鞆から剣を取り出し、鞘を抜き捨てる。叫びながら前に飛び出しバルナム卿を襲おうとした3匹を切る。

袈裟切り、胴払い、胴払い、一太刀1匹で3匹を仕留める。

「皆、下がって。巻き込んじゃう。」

言いながら飛び掛る<人型>を切る。鎧を着込んでいるのだが、やわい。

こないだのとは比べても形状は同じだが大きさは人並み。硬さも人並みだ。

スパSPA切れる。これなら！

身体強化の<強化魔法>を活性化させ、加速する。

室内に突入してきた10数体は瞬く間に<魔鉱石>と<魔晶石>になつた。

そのままの流れでバン！と扉を蹴破り廊下に飛び出す。

視線を巡らせ、悠々と歩いて角を曲がるうとしていたレキさんを視界に捉える。こちらを振り向き驚愕している。

だが、それも一瞬。即座に角を曲がり走り去る。追うか？ いや、彼を構っている場合ではない。

「ソフィー、フィオ、バルナム卿。ついて来て下さい。マール、3人の護衛に付けてくれ。セバスさんとイリアさんを保護に向かいます！」

「はい。」『心得た』

答えたのはソフィーとマールだけ、だが、このさい仕方が無い。逃げ出したレキさんとは反対の方向へ走る。時間が無い。

気配を探る。自由になったばかりのせいか、<人型>と思われる反応はバラバラだが、およそ30体がひっかかる。

セバスさんの居る部屋付近までは感知できないが、今感知出来る全部の固体がそこそこに向かっている。

しかもこれは全速力でだろう。数秒で、囲まれる。急がなければ。

ナイフを取り出す。とりあえず6本。それをベルトに挟む。

「フィオ！ これを！」

「……はい」

「マール、私達はどうしましょう？」

『以前対ユートに訓練したのがあるじゃろ。アレを使えばよい。』

「なるほど。そうですね！」

走りながら背後の会話を聞く。バルナム卿が幾つか魔道具らしき腕輪をフィオに手渡しているのは良い。

だが、マールとソフィーの会話に「おい」と思う。

ほんとに彼女達はいつの間にか何か企んでいる。主に俺をオモチャにするために。

『ユート、妾らはなんともなる。セバスを救いにゆけ、あやつ一人では荷が勝ち過ぎる』

…いやそんな事を考えている場合でもない。マールの言葉に気を取り直す。

「分かった、頼んだぞ！」

「お任せください。」

ソフィーが自身満々に答える。マールも認めていた。ならば、大丈夫なのだろう。身体強化の<強化魔法>を再度活性化する。

やたらと広い神殿だがセバスさん達の居る部屋までの距離は1500m程。20秒で行く！

「…先ほどのお話は、事実なのですね。」

あつと言つ間に加速しく人型と壁を粉碎しながら消えたユートを
見送り、その後を追っていたバルナム卿が口を開いた。

「はい。ご覧の通りです。」

「……あの人は、危険。」

「ええ、ですから、私達が支え導かなくてはいけないのです。」

『地獄を見た、と言つても子供じゃからな。』

「……監視が、必要。」

「そうだな、だが、今は。」

『うむ、来るぞ』

「 M T o f n n e d e S s i o . M S p p o e n A r r
l e s r y i x <魂縛時槍>! 」

短い詠唱が終わり、3本の槍がソフィーの周りに現れ、その内の一
本が壁をぶち抜いて姿を見せた<人工人型>を貫き、停止させる。

これはあの夜ユートが枷を解いて逃げようとした際に使われる予定
だった魔法。

＜時鎖緊縛＞から余計な所を省き、物理的に縛るのでなく物理干渉を一切させずに貫き、

アストラル体という肉体とは別のものを停止させる事で身体の一部をその場に縫い止める魔法。

マールに教わり改良したのだ。彼女の知識を生かしたこの魔法は、ソフィー達にとっては今まで考えもしなかった視点での魔法。

さらに効率化が成され詠唱、消費、威力共により実戦向きに生まれ変わった。

その効果時間はレジストされない限り1本につきおよそ100秒。だが、ほぼ即効で停止させるので効果としては申し分ない。

『練習しておいてよかったのう。何時何が助けになるか分からぬものよ』

「ええ。」

『倒そうなどと色気を見せるでないぞ、足止めし、ユートを追っつじや。』

「……了解」

「承知した。」

そう、返事を聞くと同時に背後から迫る二体の<人工人型>に残りの<魂縛時槍>が突き立った。

6・4<ホル・コースト>(後書き)

そのまま書いたら危険な単語の気がしましたので、造語になっています

>ホ コースト ホル・コースト

7・0<トヲと・・・>

「で、なんで皆ここに来たのだ？」

アーリントン卿の軟禁される部屋に、その日訪れたのは3人の男達。

「知らんのだ。」

「ワシは忙しいのだが…」

答えたのはフォール卿とキャメル卿。

「我輩が呼んだのだ。」

「ああ、それは分かっている。」

最後の一人は勿論この男、フェルブルム卿。

「何の用があつて呼んだのか、だ。いや、そうか決着が着いたのか？」

以前聞いた空軍と初戦が行われる、という日から既に数日。結果の

報告が届いてもおかしくない。

「おお。それもある。まあまずは説明させてもらえんかな」

「うむ。聞かせてもらうかの。」

「…そういうことなら、仕方ないな。」

「どうなった？ 勝ったのか？」

とりあえず急かす。

しかしフェルブルム卿はそれにはとりあわず、器用に指を1本立て順番に話し始める。

「ではまず今だが、あの根暗眼鏡は出かけておる。」

「ほづ」

「ふむ。」

「みただいな。」

それは知っている。

この部屋に居てもそのぐらいの情報は得られる。

「そして何のために出かけたのかだが、表向きはあやつのを診る
医者が見つかったから訪ねている、という事になっている。」

「ほづ」

「らしいのう」

そう聞いて複雑な心境になる。聞いた所によると奴の妻の病状は深
刻で最早治療不能な状態の筈。

己も病身の妻を持つ身。必死になる気持ちは、分からなくもない。

「ワシもそう聞いたが、表？」

キヤメル卿が問う。確かに、そこは気になった。表向き、というこ
とは裏もあるのか？

「おう。裏が本命だ。実は神殿で王と王妃と会談をしに行った。」

「何だと!？」

「王妃に王、じゃと？」

「ほ、本当なのか!？」

放たれた言葉に皆揃って騒然とする。

事実だとすれば、召喚魔術の成功は確定した、という事になる。

そうならば様々な問題が、一気に解決する。無理も無い。

「おう。喜べロリコン。先遣隊は見事に返り討ちにされて捕虜になり、本隊で強行策に出た空軍は良く分かんが対飛竜用の毒かなにかで落とされるも人的損害は0で完全降伏。そしてアーリントンから来た文は、その旨とあやつの子の妻子の治療をエサに会談と降伏を求めるものだった。」

「……」

「ほ、ほ、ほ、まさか、そんな展開になるとは、の」

「信じられん……」

聞いた限りでは、完勝。それもこれ以上無いほどの。

そんな事が、ありえて良いのか？

「我輩も信じられんかった。だが、報告の通りなのだ。嘘を言っても仕方あるまい？」

「……」

「そうじゃのう。」

「確かにそうなのだが……」

「そうだ、そして完勝ならば賭けには勝った事になる。つまり……」

「おい、何故剣を抜く」

「どうしたのじゃ」

「ひ……」

「……いや、濟まん落ち着こつ。」

メリアの夫候補と雌雄を決する事を考えつい抜いてしまっていた。

「何故、剣をしまわぬ……」

「プルプルしておるの」

「……や、やめて欲しいのだが」

「ひるむこ、察してくれ……」

「まあ賭けに勝って嬉しく、だが娘婿を認めねばならず…と複雑な
んだろうが…」

「ふうむ。娘婿？ ああ、そういえば言っておったのメリア嬢に春
が来た、と。」

「……………」

「ああ、そうだ。いや、そんな事より何故我々を集めた？ その報
告だけではないのだろう？」

気を取り直し、やっと剣を仕舞い聞いてみる。

「おお、そうだ。今朝方出たので今この王都は手薄なんぞな。どう
する？ と。何かするなら今だろ？」

「中立じゃしろう」

「ワシも中立だ。」

「降伏は見えて居るではないか。わざわざ暴れるまでもなからう？」

「それもそうなんだよな。」

「ならば何故集めた？ 報告だけ、なのか？」

「はっはっは」

「だけ、のようじゃな」

「忙しいというのに…」

どうやらトラもあまりの朗報についやってしまったようだ。

気持ちは分からなくも無い。俺も祝杯を上げてても良いような気分だ。

「ふむ。まあ折角じゃし、あやつが降伏した後の事でも打ち合わせしておくかいの？」

「おお、それはいい」

「む。確かに」

「…それなら実りが有りそうだな」

「とりあえずはソフィーリア様の事じゃし…ここまで人的被害が無ければクーデター事態を「無かった事」にとか言っただろうじゃの」

「ああ、我輩もそんな気はするな。」

「あれは優しい娘だから…」

「フン。王家の統治を維持するならば、5大家を崩したくはないだろう。さらに今は一人でも味方が欲しいだろうしな。」

「そういう側面もあるか。ならばさらに有り得る、か」

「十中八九、じゃな」

恐らく、間違いないだろう。

「では、まずはそれを前提に詰めるか？」

「そうだな。ワシに異存は無い」

「わしもじゃ」

「私もだ。」

「ふむ。では……」

「とりあえず、落し所としてはそんな所か……仕方あるまい」

「ああ、必要な事だ。」

小一時間程語り、おおよその決が出る。

状況は難しいが、落しどころの一つが確定している為に意見は割れる事も無く、その周辺を整理するだけで済んだ。

バルナム卿もあれで、この国を思う中々見所のある男だった。

降伏しか無いとなると、恐らく我々の下した決断と同じ答えにたどり着き、己の役割をきっちりと理解した上で、潔く行動してくれるだろう。

「…しかし、何か、騒がしいな？」

語り終え、ひと段落した所でふと、気に成った。

「ふむ？ 確かに。戦闘でも行っているかのような…」

「我輩達以外で、この隙に決起したものが？」

「きゅ、救出部隊かも知れんぞ？」

確かに、その可能性は有るかもしれない。

「会談の裏を突いて、か。」

「ふむ……」

「情報が漏れて居るとは思えんのだが……少し確認して来てみる。」

人払いをしていた為この部屋には兵が入室して来ていない。

扉を開き、トラが状況を確認しようと叫ぶ。

「誰か！ 何事か！？」

えらく、遠くを確認するような声を出したな？

扉前の警備兵も居なくなっていた？

不思議に思う。

だがそれ程の間もなく、扉の前で警備をしていた兵がやってきたようだ。

「何が起こっている？」

「は、はい、それが、バルナム卿の持ち込んでいた人工人型の

制御用魔道具が突然砕けまして、只今城内で戦闘が行われています。

「

なんと」

「なんだと!？」

「そそそそそんな!？」

自暴自棄になった? いや、そういう男でもない。では何だ?

いや、そんな事を考えている場合ではない。

モンスターが王宮内を徘徊している、だと?

即座に駆け寄り、トラに並ぶ。

「おい、トラ、どうする。」

「知れたこと。我輩がやらずして誰に任せる」

聞くまでも無かったか。

「ならば俺も行こう。」

「ほ、ほ、ほ、では老人はひっこんでおるかの」

「わわわわワシも駄目だ！戦闘なぞ！！」

二人の反応は予想できた。

「期待しておらんよ。兎に角、警備兵。我々は往く。構わんな？」

「は、はい！よろしくお願いします！！」

警備兵に断り、本当に久しぶりに、俺は部屋から飛び出した。

7・1<それぞれの戦い、空>

「…様子が変ですわね？」

王都上空に差し掛かろうと言う所でメルが呟く。

「交戦中のようだな、あれは。だが、何処のものか？」

見たところ、<グイーヴル>とワイバーンに乗った騎兵が争っている。

優勢なのは<グイーヴル>。数の差は……おおよそ3倍と言ったところ。

必死に抗っているようだが、あのままでは全滅は時間の問題か。

私達の動きに乗じた反乱兵？ それともこの機会を狙った気骨ある貴族の私兵？

…分からない。

ともあれ<グイーヴル>が敵なのは間違いない。

人が乗ったワイバーンは兎も角アレは全て落としても問題ないだろう。

ならば、

「お母様。先行します。」

「ええ、では一番槍は任せます。存分に、焼き尽くして差し上げなさい。〈狂乱の火炎使い〉」

「はい！」

鞆から魔道具の腕輪を取り出し、付ける。種類は2種、4つ。

〈剛爆炎の腕輪〉と〈護炎球の腕輪〉。それぞれ二つずつ。

私の手持ちで〈ヴイーヴル〉を落すのに有効な魔道具。

…ちなみにフィオのやつが選んだ。

深刻な状態が治まり、角も生えたあいつはこちらの言う事を奇妙なほど素直に聞くようになった。

特にユートの言う事を。

…何かイラっとした。

マールのヤツは『鳥の刷り込みじゃな。』と断定したが、私は納得していない。

多分あいつの胸が育ったのも気に入らないだろう。

元々ソフィー並に有った癖に。さらに2回りは大きくなった。

…私の胸はく生命強化くをかけてもらっても育たなかったのに、だ。

…ムカムカしてきた。

腕輪の準備が出来たところで気を取り直す。今は敵を討つ時だ。

「カーニス！ 槍を！」

「了解です！ メリア隊長！」

アルモスで受け取ってきた修理したばかりのく魔槍ヴェルスパインくを、私のやや背後を飛んでいるカーニス副長から受け取る。

例によって槍のヴァンププレート部分の裏側にあるトリガーを起動し、柄を変形させる。

フォアグリップが出、石突が展開、変形する。さらに展開したフットレストに専用のブーツを履いた片足をかけ、固定する。

「誰かワイバーンを頼む。私は行く。」

「はい！ご存分に！！」

先ほど私に槍を渡した副長と2人乗りをしていた部下が答え、接近してきた所で手綱を預ける。

それを見届けたところで立ち上がり、空へと身を投げる。

落ちる

「 < 魔槍ヴェルスパイン > 」

詠唱、発動言語と続けて変形した石突から赤、黄色、青と変色しながら炎が上がり推進力となる。

魔力の通りが前よりはつきりと分かるほどいい。流石希少な最上級ランクの < 魔鉱石 > で修理されただけはある。

体を軽く捻り、落下を、曲げる。

槍を調整し、いつしか水平になり、さらには上昇し、敵を目指し、飛ぶ。その加速はワイバーンの比ではない。

あっという間にトップスピードになった所でさらに < 護炎球の腕輪

一番槍を突いたお姉様が暴れているのだ。

遠目にも分かる。時に貫き、轢き、すれ違い様に<爆裂火球>を叩き込み、戦域を離脱し大きく弧を描いて再び突入するの繰り返し。

相変わらずメチャクチャだ。そもそも幾ら速い方が強いからと言っても、飛竜から飛び降りて槍で飛んでいく、という発想自体が狂っている。

「あんなだから狂乱の火炎使い>なんて呼ばれるのですわ。それにわざわざ全対象で大声を上げて笑わなくても良いと思いますの。わたくし。」

「ふふ、でも今は頼もしいわよ？ あの調子ですと追いつく頃には粗方済んで居そうですね。」

「…お、お母様？ いつもは淑女らしくなさい。としつこい位うるさいですの…。」

「普段は淑女らしくあるものです。ですが、戦場では時に荒々しく、時に猛々しく振舞うのも作法ですわ。」

その声にどきり、として隣を飛んでいるお母様を振り返り見る。

そこにあったのは、普段の楚々として微笑むのとは違う、嬉々とした雰囲気の良い笑顔。

有り体に言って…怖い。鳥肌が立つ。

でも、私の話し方はこのお母様の姿に魅せられ、真似て始めたもの。幼少の頃の私の目には、こうなったお母様が誰よりも眩しく、美しく写ったのだ。

ゾクゾクする。たった数度しか、それも戦場でもない所でしか見たことの無い筈なのに、

はっきりと想像できる現役時代のお母様の姿がその顔にダブリ、脳裏に鮮明に蘇る。

さらに、これからその真の姿をまぶたに焼き付けられるのだ。たまらない。

「…そういえばお母様も確か現役時代に物騒な二つ名を持っていたわね」

近頃はお姉様の名が広がりあまり語られることは無いが、あまりにも有名なその名。

由来はお母様の初陣、戦地の名を取って「ルイン平原の戦い」と名づけられた、今から23年前にあった戦い。

当時お母様は僅か14歳。その時も、隣国同士の戦争に同盟国として参戦するも罾に嵌り、窮地に陥ったお父様を助けるためだけに単身乗り込んだ。

その時の争いでの一騎当千と言って差し支えない戦功を称え、または畏怖し呼ばれるようになった二つ名。

当然知っている。だが、あえて言わない。

言えば、きっとお母様はスイッチが入ってしまう。…それはまだ、早い。

「ええ。久方ぶりにその名に恥じぬ振る舞いが出来そうですわ。」

そう言って、満面の笑みでお母様が笑う。

全身に歓喜を伴う寒気がする。こんなに楽しそうで恐ろしいお母様を見たのは何時振りだろう？

…なんだか敵がかわいそうになってきましたわ。

「では、行きますよメル。」

「はい。お母様。」

お母様が先導し、ワイバーンを戦場へと向けて飛ばす。

私は気づいて居なかった。これから命がけの戦場に向かう、と言っ
のに。

このとき既に私の顔もお母様と同じように笑顔を浮かべていた事を。

7・2<それぞれの戦い、神殿・空2>

廊下を駆け、前を走る<人型>を追い抜き様に切り倒し進む。

セバスさんとイリアさんの居る部屋は目の前。だが索敵範囲に入った直後に最も近い所に居た数匹は既に突入している筈。

今回はセバスさんも護身用で無く戦闘用の魔道武具を用意したと言っていたが、それでも相手はモンスター！。

危険だ。急がなくては！

奥から向かって来る<人型>にナイフを投擲、そのまま急停止をかけて扉の粉碎された部屋へとなだれ込む。

「セバスさん！ 無事ですか！？」

薄暗い室内へと飛び込んだ直後、目に映ったのは<人型>の背中、良く見ると、両腕が無い。

その背中が、胴から斜めにずれて落ち、その奥には無傷らしいセバスさんが居た。

「ユート様。私は大丈夫です。ソフィーリア様達は？」

そう返事を返すセバスさんの両腕には、短刀よりも短い極太の刃、いや、杭と言ってもいいものの生えた手甲が装備されている。

…あれで、切った？

足元には2、3の<魔晶石>が転がっている。部屋に他の<人型>の姿は無い。

疑問はあるが、全て迎撃し、倒していたようだ。流石だ。

「こちらに向かっている。途中目に映った<人型>は始末しておいた。だけど、急いで合流した方がいい。」

「そうですね。では、私がイリア様を…」

「いや、俺が担ぐよ。その方が早い」

「承知しました。では、僭越ながら護衛を勤めさせて頂きます」

「ああ、よろしく頼むよ」

一人でも卒なく倒していたようだし、任せても構わないだろう。

素早くイリアさんを簀巻きにして肩に担ぐ。

粉碎し開け放たれた扉からセバスさんを先導に飛び出し、再度気配を探る。

ソフィー達は…まだ辛うじて索敵範囲にひっかかる程度の距離だ。
急いで。

そのままセバスさんの速度に合わせ廊下を駆ていると、目の前の壁が豪快に吹き飛び、新たなく人型>が進入してきた。

慌てて破片からイリアさんを庇って離れる。と、そこにセバスさんが飛び込んだ。

観察する。敵は変わらずく人型>。だが、おかしい。なんだあの右腕は？

まるでそこにもう一人分の人間が詰め込まれたような異様なバランスで肥大化している。

その腕が、勢い良く振り上げられ、

ブン、とセバスさんの真上に肉の塊が振り下ろされる。

「く槌持ち>…です、かつ！」

ドゴン！ と轟音を上げ足下の石畳が碎け、数10センチ程の深さまで抉れる。

かなりの衝撃、直撃すればひとたまりも無いだろう。

しかし、あまりにも動作の大きすぎたその攻撃は、セバスさんには通用せずあっさりとかわされる。

鋭く横合いに回りこんだセバスさんの、両腕に装着された手甲から生えた60センチ程の幅広の剣が一闪され、その巨大な右腕を二の腕の位置で切り離す。

…幅広の剣？

勢いそのままさらに回り込み、返す刀で再度振られた反対側の剣が反対側の腕も切り落とす。

そこで、目を見張る事が起こった。

「 参式機構変化 < 模倣千剣・剪刀 > 」

ギチギチギチと耳障りな音を立て手甲から生えた剣が伸び、ジグザグに湾曲する。

さらに両腕の剣が組み合わさり、新たな武器を形作る。

それは<人型>の胴をすっぽりと挟みこむ程の巨大なハサミ。

じよぎん。と、腕を失った<人型>が胴を真っ二つにされた。

「凄い…」

思わず声が漏れ出る。完全に刀身が変形した。可変式の武器だなんて！

こんな時なのにわくわくさせられる。

本当にこの世界の魔道具は千差万別で物凄く興味を引いてくる！

「私は齧った程度ですので4形態しか使いませんが、ね」

そう言つて崩れる<槌持ち>の<人型>をそのままに再び走り出す。

「<千剣>の本来の使い手の方はそれこそ千種類の刀身を駆使すると聞き及びますよ」

「それはまた、一度は見てみたいな。」

「王都にたどり着きましたら、お会いできますよ」

「楽しみだ」

「ええ、ですのでその為にも」

「ああ。この場を切り抜けよう！」

廊下を駆け、曲がる。その先にはソフィー達の姿が見えていた。

「遅い！ 遅い！！ 遅い！！！」

<魔槍ヴェルスパイン>で戦場を縦横無尽に貫く。

狙ったのか流れ弾なのかは知らないがこちらに向けられる魔法は<護炎球の腕輪>の過剰発動で作り出した炎の壁が弾き、すれ違い様に打ち出した<爆裂火球>が敵を包み、それで落ちなかった鎧を着たものは直接貫き砕く。

誰も、止められない。

いつもより調子が良いどころの話ではない。

槍の性能が上がったこともあるが、それよりも私自身の体のGに対する耐性と魔力量が圧倒的に違う。

すごい、すごい、すごい！

今までは出せなかった速度が出る。

如く墮ちる。

まさに鎧袖一触とはこのこと。

ユートがここに居ないのは寂しいが、

今この空の戦場を支配しているのは私。

後で、伝えよう。

良くやったね。と褒めてくれるだろうか？

楽しみだ。

ああ、楽しみだ！！

粗方のヴィーヴルを墮とし、ワイバーンの数と比べても互角以下に減った所で手近なワイバーンに取り付く。

<護炎球の腕輪>は停止させたが他はそのままだ。何時でも飛び出せる。

「おい、お前、空軍の兵だな？ どうなっている？ 何故お前たち

がヴイーヴルと戦っている？」

「ひつ、は、はい！ 自分は、空軍105小隊、セ、セルダン准尉であります！ セ、戦闘理由は、モンスターを制御していた腕輪が突然砕け、自由になったモンスターが襲い掛かってきたので、緊急措置として迎撃しておりました！」

「自由に、なった？ それはく人型もか？」

「はい、地上では城門を閉ざし陸兵が交戦し、全ての人を玉座の間に避難させております！」

城門を閉ざした？

緊急時の判断としては、間違っていないのだろう。

だが、城門はかなり特殊な構造で一度閉ざすと再び開くまでにかかなりの手間がかかる。

となれば、ワイバーンでも使わない限り援軍が中に入れるのはどんなに見積もっても閉ざした5時間以上後になる。

…空は、殆どヴイーヴルが占拠していた。

では内部は居合わせた兵達のみでの迎撃をしている…？

「…私が誰だか分かるな？ お父様達は？」

「はい、同じく避難誘導が行われている筈です」

やはり、中か。

「そつか、こここの指揮官は誰だ？」

「隊長も副長も落とされました。今はあそこのミレイ中尉が臨時指揮を取っています。」

指し示された方向を確認する。低速でヴィーヴルと1対1の混戦飛行を行っている兵が見える。あれか。

「よし、ありがとう。おい、聞こえるかミレイ中尉。陸軍特殊任務隊隊長、メリアルーナ・ルグス・アーリントン中佐だ。状況は聞いた。ここからは私と私の隊が引き受ける。お前たちは一旦下がり、編成し直せ。その後、手伝うつもりが有るならば私の指揮に従え。以上だ。…いや、もう一つ付け足そう。無駄に死ぬな。以上だ。」

「……っ、了解、しました。」

その言葉を受け待機状態だったく剛爆炎の腕輪を発動させる。

一息で作り上げ、放った爆裂火球がミレイ中尉とヴィーヴルに向かって襲い掛かる。

だが速度は然程出さなかった。

危なげなく双方が分かれるようにかわしたところで爆発。その隙を突いて彼女も離脱に成功する。

「聞こえたな。お前も下がれ。こんなバラバラな編成では落とされるだけだ。分かるだろう。」

「は、はい！」

「よし、では、私は行く。」

「…御武運を！」

再び空へと身を投げ、飛ぶ。お母様達が来るまでは…まだ距離がある。

彼らを守れるのは、今はまだ私だけだ。

「お母様、聞こえますか…」

全力でく護炎球の腕輪>とく剛爆炎の腕輪>に魔力を流しつつ、円周軌道をお母様達に近づくよう調整し、報告を始める。

7・2<それぞれの戦い、神殿・空2>(後書き)

9/21 誤字修正しました。

7・3<それぞれの戦い、玉座の間防衛戦0>

今年に入って王宮警護兵に配置された時、俺は家族と小躍りして喜んだ。

何故ならそこは、誰もが羨む職場だったから。

まず給料面。一般の兵士よりもやや色がついていて、高額。

さらに毎日のように課せられる過酷な訓練は無く、友好国の戦に借り出される事も無く、国内の荒事を治める事も無ければ、モンスタ討伐に借り出される事も無い。

つまり、荒事とは縁が無く基本的にはぼんやり立っているだけで、高級が得られる職場として兵の中では有名だったのだ。

それが、何故、こつなつたのか。

只の一兵卒である自分が、平和な筈の王都でこんな凄惨な戦いを強いられる事になるなどと誰が予測できただろうか？

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、はあ、」

息を切らせ、槍を突き込んだく人型>が崩れるのを見送り、周りを確認する。

また、減った。

最初から寡兵だったのは確かだ。

クーデター当初に、この王宮警護兵の隊長級や反抗した者たちは、
<人工人型>に手ひどく痛めつけられ、治療後は王都警護へと回された。

王都は3重構成になっている。一番中央に王城・王宮、その次に貴族街、その周りに市民街があり、3つの城壁でそれぞれが隔たれている。

今までは、王城・王宮が一番兵士が多かった。

だが、今は違う。早々に王城を制圧したバルナム卿率いる空軍は、少数で指揮系統を維持する為に、王城から大半の兵士を追い出した。代わりに配備されたのが<人工人型>だった。空軍の仕官は一人頭2、3体の<人工人型>を操り、我々一般兵に命令した。

それが、幸いだったのか、不幸だったのかは今何処にいるかによる。

自分は間違いなく、不幸だろう。

<人工人型>が暴走した直後、元からの王都警備兵だった門番は早急に城壁を閉め、隔離した。

マニュアル通りの対応。普通なら彼らを責められるものは居ないだろう。

だが、今回はそれが逆の効果を及ぼした。

貴族街、市民街に配備された人工人型は少ない。問題なく倒されるだろう、だが、自分達はどうか？

見渡す、立っているものはもう、20人も居ない。

王宮に居た兵士は約100人。普段のそれと比べると1/3以下だ。

その上半分近くの人数を割いて、孤立しているだろう人の為の救助部隊を複数組派遣していた。

だからこの場で防衛戦を繰り広げた兵士はおよそ50強。だが既にその2/3近くが負傷し、後方の非戦闘員である王宮労働者達に、治療を受けている。

死者は、何の奇跡かまだ10人に届いていない。

運用されていた人工人型が少なかったのと、避難が迅速に行われたおかげだろう。

だが、避難した玉座の間でバリケードを作り、乗り越えて来ようとする人工人型を矢で、槍で落としていたその矢は尽き、

乗り越えた人工人型と戦い次々に兵士は負傷していく。

「くそ……」

悪態を付く。

「はあ、はあ、おい、槍は、無いか？」

近くに居た兵士が歩み寄ってきて、語りかけてくる。

見ると、そいつの槍はへし折れ使い物にならなくなっている。

「そのへんに、負傷兵が置いていったのが、あるだろ、」

「そうか、…そうだな！」

そう言って後ろに走っていく。

「な、んで、…俺たちは、こんな目に、あってんだろな…」

また別の兵が息を切らせつつぼそり、と、だがしっかりと聞こえる声で言った。

「知るかよ、急に『傀儡子の腕輪』が壊れた』とか言っつとととと殴り倒されたクーデター派様のおかげだろ。」

俺に言った訳ではないだろうと弦きに律儀に答える。吐き捨てるようにだが。

「畜生、死にたくねえなあ」

「折角楽な部署に就けたって喜んでたのに……」

次々と、他の兵士も泣き言を言い始める。

限界を、感じているのだろう。

恐らくこのままでは、もう後1時間すら持たせられない。

「くっそう……」

玉座の間の入り口は、崩すと内側は階段状、外側はおよそ3m強の壁になるよう設計されていた。

初めて使ったその機能は見事に用を成し、今までの俺たちの命を繋いでくれている。

そのバリケードに8分程登り、よじ登って来ていた<人型>に、槍を振り下ろす。

刺すのではない。殴りつけ、落す。

少しでも突破されるのを防がないと、身が持たない。

「うわあ!!!」

悲鳴が上がる。見ると、数メートル離れた所でまた別の兵士が叩き付けた槍を握られ、へし折られている。

「くそっ」

慌ててフォローに走り、乗り越えようとした<人型>を槍で突き落とす。だが、それが不味かった。

俺が居なくなつた隙について、一体の<人型>が背後からよじ登り、乗り越え、俺を背後から押し倒した。

「がつ、あ!!」

右肩に焼けた火箸を押し付けられたような痛みが走る。

背後から、肘から先が尖り剣のようになった腕で、鎧の上から貫かれていた。

< 剣持ち > だ。

< 剣持ち > とはその名の通り、剣状の武器を持ったまま < 人型 > になったものだ。

特徴は片腕が大小様々だが大剣のようになっており、< 無頭型 > でないこと。

< 歩兵 > と比べ口が小さいせい、剣で切り裂き、切り落とした部分を貪り食らう。

「コノ野郎!!」

先ほど槍を折られた兵士が俺の肩を貫いている人型に剣で切りかかる。

振り下ろされた剣は人型を捕らえたが、肩を20センチ程度切り裂いただけ。致命傷には至らない。

俺の肩から大剣を抜き、正面の男を横なぎに殴りつける

「ひっ」

ボグ、と鈍い音が鳴り、俺を助けようとした兵士がバリケード上から内側に吹き飛び、転がり落ちる。

…奴は運が良い。逆なら100%死んでいる。

俺も隙を突いてく剣持ち>の元を離れ、転がり落ちる。貫かれた肩は痛い、腕自体は動く、それ程重傷ではない。

転がり落ちながら、俺の肩を貫いたく剣持ち>の動向を確認する。

「畜生、ここまでかよ…」

絶望的な気分になる。

視界の端には、く剣持ち>を含めさらに複数体のく人工人型>がバリケードを越えて来ているのが見えていた。

後ろの味方がコイツらに対応するまで、俺は生きていられるのか？

それでも、戦うしかない。俺たちが抜かれれば、後は非戦闘員しかない。

「死にたくねえ、死にたくねえよお…」

泣き言を述べ、貫かれた肩を抑えてなんとか敵に向き直る。

最前線には剣持ち。その背後に上がって来たのは…3体。

戦うしかない。逃げる場所は、無いんだ。

「ちきしょおおおおおおおおおお！！」

絶叫し、槍を出鱈目に振り回して牽制する。

時間を、味方が登ってくる時間を、少しでも稼ぐんだ。

だがそんな必死の槍も、無造作に振るわれた腕剣に弾かれる。

膂力が違う。1対1で戦える訳が無い。俺は、ここで死ぬのか。

槍を弾いた剣が、横合いから俺を狙う。

「嫌だーっ」

咄嗟に弾かれた槍をそのままの勢いで立て、剣を柄で受け止める。

だが、受け止め切れなどしない。

槍と鎧のおかげで切り殺されはしなかったものの、無様に吹き飛び、転がされる。

「げほっ」

ああ、だめだ。後続の3体にまで抜かれてしまった。

皆あの3体の対応に追われるだろう。

もう、俺に援軍は望めない。

俺は見殺しにされる。

手ひどく一撃を食らったおかげで膝が笑い、体も上手く動こうとしてくれない。

このまま、コイツに切り殺されて終わりだ。

そう思った直後、バリケードを乗り越え、<人型>よりもさらに巨大な影が戦場に踊りこんだ。

7・4<それぞれの戦い、玉座の間防衛戦1>

「城門の閉鎖と城外に出ていた<人型>は駆逐したのだな？」

「はい！ 完了しております！」

軟禁された部屋から飛び出し、廊下を集まって来た8名の兵士に確認する。

3名は元々部屋の前に居た警備兵。

残り5名は息を乱し、鎧の所々に傷も見受けられる。

逃げ遅れた人々を、我々を避難誘導する為に城内をかけずり回っていたのだろう。

「ふむ、では後は城内の<人型>か。」

同じく飛び出したトラもこたえる。

「非戦闘員や怪我人の避難状況は？」

「既にほぼ全員が玉座の間に避難しております。」

「成る程。確かにあそこならば防衛にも向いておるし避難する広さ

もあるな。」

「ああ、マニュアル通り、だな。」

トラの補足に答える。

玉座の間には4つの出入り口がある。

前の出入り口は大きく開かれた1つなのだが、後ろの3つの出入り口は小さく、やや入り組んでいる。

もしもの時にそこから脱出し、追っ手を振り切るため即座に道を崩せるように。そういう構造なのだ。

無論、崩した後も瓦礫を取り除き再び組めば再利用できる。

この事態だ。恐らく2つは崩しもっとも入り組んだ1本を残しているのだろう。

そして自分が収監されていたここは最上階。避難誘導が最後になっても不思議は無い。

「ならばやつらも玉座の間に集まるうとするだろう、そこを駆逐するか。」

提案する。より近距離の、そして多人数の集団に引かれるのはモンスター習性だ。

それに知性もあまり高くない。入り組んだ後ろの道を使えるとは思えない。

今の〈人工人型〉なら間違いなくそうだろう。

となれば前門でバリケードに行く手を防がれ、そこに集まっている等。

「うむ。では飛ばしていくか。おい、ロリコン。背を貸してやる。」

「いい加減、それは止めないかトラ。緊張感が失せる。」

「むう、そうだな、では行くかデュラン」

そう言って上着を脱ぎ捨てたフェルブルム卿が毛を逆立たせ、全身を一回り肥大化させる。

「〈獣化〉」

その言葉と同時にフェルブルム卿の体躯が変化する。獣人よりもさらに獣らしく。

足が伸び、首が伸び、ゴキゴキと音を立てどんと骨格が四足歩行のそれとなる。

…ぶるり、と身を振るわせ変化が終わる。

そこに居たのは4m強は軽くあろう威風堂々とした白虎。

『来い』

「応」

呼びかけに応じその背に飛び乗る。

「槍はあるか？」

「はい、私のものでよろしければ…」

「構わん、貸してくれ。」

「はい、どうぞー！」

支給品の鉄槍を借り受ける。ただの歩兵用の槍では騎乗したまま使うのには長さが心もとないが、この際だ。剣よりはマシだろう。

「お前たちはキャメル卿とフォール卿を護衛しつつ退避路から玉座の間に入れ。あちらならく人型も来ていないだろう？」

「はい、今のところあちらの道は平気です。く人型は正面口に結

集まっているようで、現在バリケードを建築し徹底抗戦中です。」

『では、行けるな。我輩達は正面から食い破る。』

「…御武運を！！」

槍を脇に挟み固定し、身を低くかがめ、背中 of 毛を掴む。

それを確認し、ひと吼えしたトラが疾走を始める。

「ふふふ、こつして駆けるのは何時振りだ？」

トラの背で風を楽しみながら、軽く語りかけた。

『さあな、最早忘れた。だが乗せるならば女がよいわ』

「贅沢言つな。さて、どうやら既に随分な状態のようだ。」

視線の先の廊下に、大きく開かれた玉座の間の入り口辺りだった所が見える。

そこには既に見ただけでは数え切れない程の<人型>が集まっていた。

入り口の上部を崩し即席だろう、バリケードが作られている。

高さは十分あり、人型が人型を数匹足場にしないと乗り越えられそうに無い。

だが不味い事に、見たところ、乗り越えようとしている<人型>がそれなりに居る。

『上を越えて前に出るぞ。落ちるなよ!』

「応!」

トラの巨躯が跳ね、<人型>の群れの真上に着地する。と同時に人型を2体踏み砕く。

着地したトラに向かって即座に突き込まれた槍状の物体を脇に抱えた槍を使って弾く。

その隙を逃さない。

トラの牙が腕が変化した槍を弾かれ無防備になった<人型>の胴体に噛み付き、振り回し、周りの<人型>をなぎ払って食い千切る。

「< 槍持ち > か、やはり歩兵だけでは済まないようだな！」

『< 剣持ち > も居るぞ、< 魔法使い > もおるやもしれん、気を抜くな！』

「分かって…いる！」

答えつつ、また踊りかかって来た< 歩兵 > を石突きで突き飛ばす。取り付かれる訳には行かない。

トラがさらに跳躍し、バリケードを越えようとしていた< 人型 > を踏み越え、バリケードの内側へと飛び込んだ。

『ちい、やはり越えられておったか』

予想通り、防護は完全ではなかったようで、防壁の内側では乗り越えた数体の< 人型 > と兵たちが乱戦の様相を呈している。

トラから飛び降り槍を剣に持ち替え、倒れた兵士の足に食らいついていた人型を袈裟切りに切り捨てる。

大丈夫だ、傷は深いが致命傷ではない。

「衛生兵！！ コイツを頼む！！」

声をあげる。そうこうしている内にトラも一体を殴り倒し、兵たちがどめを刺している。

さらに数名の兵士が残る1体を槍で貫いて、倒したようだ。

見たところ後…1体。だが…

なっていない。こいつらには<人型>との戦闘経験が無いのか？

「<人型>に正面から近づくな！ 必ず3人以上で当り、背後から突くのだ！」

目の前の<剣持ち>と一人で相対していた肩から血を流している兵士の間割り込み切りかかりつつ、

基本的な事を叫ぶ。1対1の所が2つもあつた。つまりそれすら行われていないのだ。

「目の前の<人型>にだけ気をとられるな！ <魔法使い>を警戒しろ！ 遠隔攻撃をして来るぞ！！」

< 剣持ち > と剣を交えながら叫ぶ。膂力は向こうの方が圧倒的に上。上手くないなさなければ圧殺される。

気が抜けない。だが、力任せに振るわれる剣ごときに後れを取るわけも無く、そのまま剣を交えつつ位置を入れ替えていく。

「今だ！ 突け！！」

「は、はい！！」

< 剣持ち > が俺に気を取られたため、背後を取った形になった肩を負傷した兵士に叫ぶ。

はっとした兵達が槍で背中から < 剣持ち > を貫く。

槍に縫いとめられ、動きが鈍った < 剣持ち > の両腕を切り落とし、後は任せる。

これでいい、本来 < 人型 > はモンスター中もっとも貧弱な類。

攻撃を引きつける役が耐えている時以外、それ程危険な相手ではないのだ。

これでバリケード内部の < 人型 > は始末できた。

「よし、そこのお前、指揮官か？ 戦える兵は何人居る？」

肩を負傷した兵士を衛生兵に預け、手近な所に居た若干小奇麗な格好の兵士に確認する。

「い、いえ、隊長達は負傷してしまい、後ろです。指揮官は、おりません。それで、無傷なものは…およそ、12人です。後は負傷兵で治療後再び戦えそうな者が軽度重度合わせて20人余りになります。」

見回す。どいつもこいつも若い。数が少ないのは<人工人型>をアテにして配備を減らしたのだろう。

…ベテランは何処に行った？ いやそれよりも、だ。

既に十分とは言えない兵数になっている。

「聞こえるな！ 陸軍総帥デュラール＝ミラ＝アーリントンだ、これより貴様達には私の指揮下で戦闘を行ってもらおう！ まず負傷兵と衛生兵は下がれ！ だが治療が済み次第戦えるものは順次戦線に復帰しろ！ 分かったな！！」

了解です、と声が続く。よし、反発するものも居ない。

「いいか、隊列を組む必要は無い、私とフェルブルム卿に2人ずつ付け。残りは4人一組だ。<人型>に対しては必ず1体ずつ対応しろ！ 包囲し背後から攻めるのだ。動きが鈍ったら両腕を切り落と

せ！ その後とどめを確実に刺せばいい！ 攻撃魔法は使わない、この程度の＜人型＞相手には無用だ！！ 次が来るぞ！ 総員戦闘用意！！」

「りよ、了解しました！！」

返事を聞き終えたと同時に＜人型＞が1体バリケードを越え、踊りかかってくる。

そこへ指示した通りに兵士が4人一組で対応をする。

『流石だな陸軍総帥。烏合の衆になっておったようだがあつという間に兵士の顔に戻りおったわ。』

「ああ、いや、この寡兵で守り抜いたのだ。士気こそ下がってはいたが彼らは十分な精鋭だ。烏合の衆では無い。それに…まだここからだ。」

『ふ、そうだな、おい、＜人型＞がどのぐらい配備されていたか分かるものは居るか？』

「は、はい！ およそ300体が待機中でした。ですが、200体程は檻の中の待機の筈でしたので、徘徊しているのはおよそ100体だと思われます。」

『300、と見たほうが良さそうだな。』

「ああ、そうだな。」

どんな檻かはしらないが、相手はモンスター。檻程度では抑えられない、と見たほうが良いだろう。

「<人型>の種類は？ <魔法使い>は居るのか？」

「はい、その、<歩兵><剣持ち><双刃><槍持ち><槌持ち><鎧付き><魔法使い>…とりあえず確認されているほぼ全種が居た筈です。」

『<魔法使い>に<槌持ち>も、だと？』

「不味いな、このバリケードではいずれ破壊されかねん。補強する資材は？」

高さや質量はあるが、所詮は石。破壊力の高い<魔法使い>や<槌持ち>ならば問題なく砕くだろう。

「うざいません…」

『やれるだけ、やるしかないのか、おい、我輩に付くものは我輩の後ろだ。我輩が一撃を入れたものにトドメを刺すだけでいい。』

「私に付くものも同じだ。私が前で抑えるので左右から突け。いいな」

「「「「了解しました」「」」」」

「よし、ではやるぞ！」

さらに乗り越えて来た数匹に対峙する。

バリケードを越える前に見た群れは、数え切れなかった。

長い、戦いになるのを覚悟しなくてはならない。

7・4<それぞれの戦い、玉座の間防衛戦1>(後書き)

9/23 誤字修正しました

7・5〈それぞれの戦い、玉座の間〉

「…そうですね、空は、メリアに暫く任せても良さそうですね」

あと少しでお姉様が暴れる空域にたどり着く、と言ったところでお姉様から現状の報告が届いた。

「ええ、そのようですわね。お父様が心配です。急ぎ、降下しましょう」

お母様の提案に賛同する。

聞いた限り、状況は不味い。

城門を閉ざしたのはマニュアル通りなのだろうが、そのせいで城内はかなりの長時間援軍の見込めない戦闘を強いられる。

さらに詳しい数は不明だが、推測するに指揮監督と空軍以外の兵達への抑圧の問題から王宮内の兵数は、〈人型〉の方が高い可能性が高い。

モンスターのなかでもかなり弱い部類の〈人型〉だが、それでもモンスター。

急ぎ、向かわねば間に合わないかもしれない。

「では、ここからは貴女が指揮をなさい。次期アーリントン家当主となるのは貴女になるのですから」

そうやって分析と推測をしていると、お母様が口を開いた。

……………え？

「え、えええ！？　で、ですがわたくしは軍人ではありません！　お姉様と違って階級だってもっていませんわ！」

真面目に戦況を分析していた所に、唐突にお母様から放たれた爆弾発言に声を上げて困惑する。

「今は緊急事態です。それに次期アーリントン当主となれば既に少将クラスの階級が約束されてますわ」

確かに、当主になるとなれば自動的にそうなるのも、その通り。その通りなのだが、

そもそも私はお姉様と違って、ただの貴族の子女としての教育しか受けていない。なので当然軍には所属したことが無い。

お姉様はもっと小さなころに自ら志願し、武功を立てて破竹の勢いで階級を上げていった。

言わば実戦でのたたき上げ。

戦歴に伴う信頼がある。

お母様だって14歳で初陣を飾り、その後も幾度と無く華々しい大戦果を上げていた。

私は何も無い。お母様と、お父様と、お姉様と…比べるまでも無い。

何故、そんな私にこんな場面での指揮をなんて？

誰か、他に、と思い慌てて後ろを振り返る。

後ろに居るのはおよそ150程の兵士と、ワイバーンを拝借し無理矢理ついて来たベル。

…今回の作戦の人員は、陸軍でも選りすぐりの兵士数10名と、お姉様の率いる特殊任務隊の隊員。

陸軍が誇る、最高の練度の兵士たち。

なのだが、あまりにも実戦部隊のみを連れてきていたので小隊長級こそ居るものの佐官等上級仕官の兵士が、指揮官級が一人も居ない。そもそもその役目はお母様と、お姉様が担う事になっていた。

「それに知っておりますのよ？ 貴女が趣味で、などと言うのもお

「こがましい程に勉強をしている事も」

「……」

さらに、お母様が言葉を続ける。

「まあ、わたくしが指揮官などという面倒な役回りをやりたくないという側面もありますけどね。ふふふ」

「お母様………」

だってそういう役回りはある人やメリアの領分ですもの。と言ってわざわざしなを作って笑う。

こんな時に、なんて事を……いや、元々こういう人だったか？ 記憶を探る。…思い当たらない。

どうやら私の知らないお母様はまだまだ多いらしい……

「で・す・が、愛しの彼を捕まえるのに、アーリントンの家督はこの上ない武器になるでしょう？ そしてその為には家督に恥じない娘である事を示す必要がある筈です」

さらに続けられたその発言にどきり。とする。

「…お、お母様？　もしかして知っているのですか？」

「バレバレですわ。…メリアに遠慮していたのでしょうか？」

…気づかれていた。趣味の事もだが、既に目をつけた人が居た事までも。

そんな素振りを見せていないつもりでしたのに…

「…その、お、お姉様や、お父様は…」

「気づいて居ない、でしょうね。わたくしだから分かったのですよ？」

貴女の好みなどお見通しですわ。とお母様が笑う。

「…」

「覚悟を決めなさい。今日から貴女がメルディア＝ルグス＝アールントンです」

「…はい」

そつだ。お姉様が「後宮に入る」と言い出したからにはこうなる事

は分かっていたはずだ。

今日からは私がルグス（第一継承者）になる。

無理は承知で、それでも憧れていた地位。

「全軍、聞こえますかね？ エーリカ・アム・アーリントンですわ。これより指揮をメルディア・ルグス・アーリントンに任せます」

にわかにはわめき立つ。仕方ない。この大事な局面で指揮官を軍人でも無いこんな小娘に託す、というのだから。

ですが、

そっと自分の口元に触れる。ああ、やはり。

緊張感はある。プレッシャーも物凄い。なのに、なのに、

笑みが抑えられない。

喜んでいる。楽しんでいる。

やはり私もアーリントンの、お母様の娘だったようだ。ならば、もういいだろう。

ここからは私も遠慮はしない。自らの全身全霊、全てをかけて、自

これが衝角方陣。防御を固めた特殊な強行突破用突撃陣形。

当然先頭の私の障壁の負担は他に比べて圧倒的に大きい。

だが私は王家の血筋の娘。たとえ次女と言えどもその魔力は一般人とは一線を隔する量がある！

突入する。

目的地は王城の中庭。

視認する限り敵の数は極小。

その正面からでなく、何処からとも無く何か障壁に飛来し衝突する。

「くっ」

何かが斜め後ろから障壁に激突し、爆発した衝撃で、少し揺れる。

やはり。

当たったのはく魔法矢く、く魔法使いくが居る。

勿論それは想定内。衝撃に耐えつつ降下地点に辿りつき、ワイバーンを減速させ無理矢理に超極小旋回。

着陸体制に入りつつ、同時に複合障壁を分離、対魔法障壁のみを全周20数メートル程に広げる。

…わたくしには、強行着陸を行う程の技量がございません。だから、ここで暫く盾になります！

直後お母様の乗ったワイバーンが私の直下をすり抜け、お母様が身を投げ出し、飛び降りる。

その手には小柄なお母様にはおよそそぐわない、身の丈の倍以上、ともすれば3倍近くも有る大戦斧。

あれも、〈魔道武具〉。魔力を込める事で持ち手に対しての重量が軽減されるので、お母様のような華奢な体でも振るえる。

3つある刃の内中央の槍状の部分を地面に突き立て、石畳を粉碎しながら減速。

少し減速した所で垂直に突き立てていた斧を倒し、引き抜き、ステツプ、

お姉様のように編まれ纏められた髪とアーマードレスの裾を翻し、全身を使って勢いそのままに横薙ぎに一閃する。

その場に居た1体の〈人型〉が、ぼろきれのように千切れとんだ。

…とても病み上がりだとは思えない。

その音を聞きつけ周囲の〈人型〉が反応する。

しかしごく近くに居たのは僅かに2体。そんなものではお母様は止められない。

体全体を回転させ大戦斧が再び振られる。あっさりとさらに1体を葬り、遠心力を利用しステップ。その場から大きく離れる。

そこに後続の部隊がなだれ込んだ。

槍が、剣が、斧が、我先にと飛び降りた速度を乗せて最後の一体に襲い掛かる。

一瞬で人と刃の津波に飲まれ、最後の〈人型〉は切り刻まれ、果てた。

着陸する。私は最後だが、ゆっくりはしてられない。

すぐに次の〈人型〉が寄ってくるだろう。囲まれる前に進まなければならぬ。

ワイバーンから降り、飛ばす。ワイバーンは賢い動物だ。呼ぶまでは付近で安全な所を見つけ避難するだろう。

全員を見渡す。私を中心に極近くにベル。

そしてその周りで円陣を組むように周囲を警戒するお姉様の部下の

特務兵と、お母様。

「カーニス副隊長。こちらへ。申し訳ありませんが、貴方にはわたくしとベルの足になってもらいますわ」

「おう、まかせとけ！」

わたくしとベルはここから先戦闘では足手まといですから……

と思つて声をかけたのだが、

…あなた、確か、お姉様には偉く丁寧な敬語を使つていませんでしたか？

…それに一応今はわたくしが上司…の筈ですわよね？

歸つて来た品性の欠片も無い返事に当惑する。

言葉にこそ出さないが、疑問が頭の中で吹き荒れる。

こうして面と向かつて話した事などございませんでしたが…

ちらりと他の兵士を見るが、こちらは何処か兵士然とした気配が感じられない。

…なんというか、己の手持ちの武器を見つめたりしてにやにやして

いる。狂戦士の類といった方がしっくりくる。

陸軍が誇るエリート兵…なんですわよね？

少なくとも私が知識として知っている兵士とは、何かが違う。

現実には、文献や口伝の知識などでは計りきれない、と言う事だろうか？

それにしても…一体お姉様は部下にどういった教育をして来たのでしょうか…

「やるぜ……<獣化>」

軽い眩暈を覚えていた所で彼が呟き、物凄い勢いで身体が変化を始める。

ほぼ人だった顔立ちが、口が裂け、鼻が突き出し狼のそれに変貌して行く。

「お、おおお！ す、凄いです！ ほぼ人型の獣人 エイドスなのに、<獣化>だなんて！」

ベルが歓声を上げる。それもそうだろう。彼はフェルブルム卿のよ獣寄りの獣人うなゼロスではない。

ベルと同じでエイドスと呼ばれる人寄り、つまり外見的にはほんの一部だけ獣の特徴を有する獣人。

そういつた獣人で<獣化>出来る者などそれこそ極少だ。

フェルブルム卿の配下ですら片手で数える程しか居ない筈。

そして彼が意識を残した完全なく獣化>できることを知っているのは彼と私達アーリントンの人間と一部の部下しかいない。

何故なら彼が<獣化>できるようになった経緯が特殊過ぎた為、公開するのは問題になると思われたからだ。

誰かに再現に挑まれても困る。お姉様が殴り殺しかけたせいですし。

…それは兎も角として、その秘密を、公然と明かす。

全身の骨格がゴキゴキと嫌な音を立てて変質していく。

全てが収まったその時そこに居たのは、手足と尾の先端と顔の一部だけ白い、茶褐色の体毛をした4m弱程もある巨狼だった。

『さあ、乗りな。』

「ええ。さ、ベルも…」

「は、はいです！」

気になる事は振り切り、短い会話だけこなし、2人でその背に跨る。

「おおー、も、もふもふ…す、凄いです。あああ、あ、あの、後でお話し…いえ、お茶をしませんか？ 色々聞きたい事が、有るです」

『かまわねえぜ。可愛いお嬢ちゃんとしてんなら幾らでも。なんなら夜通し、朝まで耳元で囁いてやってもいいんだぜ？』

「やたー！」

・・・何かベルが逆ナンをしていた。

いや、＜獣化＞の秘訣を聞きたいのか。獣人の憧れですものね。

でもカーニスさんの発言はどこかのテラスで優雅にお茶を頂きながらのお話ではなく、寝台でと言っているように聞こえるような…

まだ13歳のメルに…犯罪ですわよ…と、考えていたら、お母様が戦斧の刃を一つ外し、私に寄越した。

「お母様？ これは…」

「3本、です。それなら貴女にも使いこなせますわ」

笑顔で答えられ、手に取った戦斧の刃の一つを見る。

…これはお母様本来の魔道武器。その通り名の由縁となったものの、片割れ。

それをこの大事な局面でわたくしに貸して下さるといふ事は…

私は戦闘要員として数えられてはいなかった。だから、武器を持っていない。

指揮権を預けられたこの場で出来る事は、せいぜい指揮と魔法による防御用の障壁、治癒程度だと思っていた。

だが、これを渡されたと言ふことは…私にも戦えと言ふのだろう。

「円陣を方円にします！ お母様を先頭に、玉座の間まで一気に駆けますわよ！！」

声を張る。方円への変化は移動しながら行える。その中央が私とべル。

手元の刃、銀地に鮮やかな真紅の模様が描かれたそれに視線を落とす。

私ではお母様のように舞えないだろう。だが、十分だ。

進軍開始と同時に魔力を込める。

戦斧の刃としての擬態である肉厚の刃がみるみる内に解け、薄く広がり、その真の姿、巨大な金属製の扇<十重刃扇・鳳>が私の手の中に現れた。

7・6<それぞれの戦い、玉座の間防衛戦2>

「はあ、はあ…トラ、どうだ？」

『不味い、な』

アーリントン卿とフェルブルム卿が防衛戦に参加して既に1時間が経とうとしていた。

その間にも負傷兵が回復し、避難誘導を行っていた兵士も数名加わり、負傷した兵士は下がり、今は約20数人が防衛戦を行っていた。人数の上では当初より楽になっている。

バリケードも今のところ損害はそれ程でもない。

乗り越えたものに対峙する回数も人数の増加で減り、休憩が取れている。

だが、問題が起こっていた。

『貴様の剣程の業物であれば、こつはならなかっただろうが…』

「…支給品に改善の余地あり、だな」

砕けた槍と護身用短剣を結び、強引に武器を作成している兵士を横

目に眺めつつ、息を整えながら話す。

…連戦に続く連戦、そして時折混ざる<歩兵>と区別のつかない<鎧付き>

そのため兵士達の支給品である鉄製の武器は磨耗し、砕かれ、半数近い兵士が護身用の短剣を除けば武器無しの状態になっていた。

<人型>を相手にそんな状態で戦うなど危険極まりない。<獣化>したトラでさえ、専用の爪をつけている。

俺の方も当初受け取った槍は当の昔に砕かれ、宝剣<竜王爪フランメルグ>で戦っている。

300年前の戦いで討伐された竜王の一頭、その豪腕の肘部分から生えた最も長く硬い爪から作られたというこの宝剣は、刃こぼれもせず、当初の切れ味のままで。

『我輩の爪は<灼剛虎>のもの、今しばらく耐えられるだろうが…』

「そついえばお前はもう<竜王双牙アーヴァー>を譲ったのだったか」

『応。なんせあれは我輩では持てぬからな。仕方なかろう』

確かに。手持ちの双剣である<竜王双牙アーヴァー>はトラが<獣化>した姿では扱う事が不可能だ。

…むう、しかしこうなれば誰かを武器庫へ向かわせ補給をしなくてはだめか。

しかしその派遣部隊の装備すらままたらいのでは難しい。

もう少し早く手を打つべきだったか？

とりあえず、今は手ぶらの者は休息だ。

避難誘導組で出ている、という残り20名程が戻り次第、派兵しよう。

そう思った所で、バリケードの向こうからドゴン！ という轟音が響いた。

『今の音は…』

「また来たか、< 槌持ち > だな」

『どうする、何とかせねばバリケードが碎かれるぞ』

「…まともな槍はもう無い、かと言って降りて戦うは玉碎必死。…
今度も魔法しか無かるぞ」

そうこう話して居る間にもドゴン！ドゴン！ドゴン！と壁に巨大な塊を叩き付けるような音が断続的に響く。

『糞、仕方ないか』

「魔法兵はいるか！ 上から<槌持ち>を狙い、潰す必要がある」

呼びかける。だが、名乗り出た兵士は僅か3名だった。

それも致し方ない。治癒魔法だけでもかなりの人数が既に限界まで魔力を振り絞り魔力切れを起こし、昏倒している。

…それでも足りない事は無い。行こう。

「よし、行くぞ」

「「「はい！」「」」

急ぎバリケードの上へと姿勢を低くして進む。

既にバリケードの中央部は何回も来ていた<槌持ち>に掘り進められ、先端はくの字に削れている。

その端から、中央の<槌持ち>を狙い、詠唱を開始する。

フリーズ・ニードル

「<氷柱飛針>」

ウォーター・カッター

「<水流飛刃>」

「
　　＜氷雪嵐風＞」

打ち出された＜氷柱飛針＞に＜水流飛刃＞がまわり付き、＜氷雪嵐風＞によってより強大な氷の槍を作り上げる。

合体魔法、＜大氷槍＞威力を追求したタイプの＜氷柱飛針＞の上位互換だ。

一人でも使える魔法だが、3人がかりで作成する事によってより魔力の消耗を少なくする。

3人が打ち合わせ通り魔法を組み合わせ、狙いを過つ事無く＜槌持ち＞の上半身を貫く。

よし、＜槌持ち＞は片付いた。

兵が念のため、と身を乗り出して確認する

「！ 伏せる！！」

一瞬、視界に入った光に慌てて声を上げる。

だが＜槌持ち＞の最期を確認しようとしていた為兵たちの反応は遅れた。

ドガン！ と突然眼前に起きた爆発で正面に居た魔法兵3人共々吹

き飛ばされ、転がる。

迂闊だった。油断した。

だが3人の背後に居た為に己の傷は浅い。体制を立て直す。

「衛生兵!!」

間髪入れる事無く衛生兵を呼ぶ、まずい、直撃を受けただろう一人は明らかに重傷、残り二人もかなりの傷だ。

ここで魔法兵を失う訳には行かない。

さらにガッガッ！ ガッ！！ と今度は何かで突き刺すような音が鳴り響く

これは、

『<魔法使い>だな。くそ、見えないうちは大人しくしていたのか。バリエードの上から貴様達が見えた途端に<魔法矢>を撃ち出しおったか』

トラが俺たちを庇うように前へ陣取り、語りかけてくる。

「面倒な…どうする。」

『どうするもこうするもない。相手が遠すぎる、バリケード頼りだ』

その通りか。くそ、打つ手が無さ過ぎる。

さっきバリケードの端で確認したがバリケードの向こうの敵はまだどう見繕っても100体以上居る。

<槌持ち>も1体ではないだろう。

<魔法使い>を強引に倒す手段よりもバリケードを崩すそつちが問題だ。

衛生兵に治療を受けている3人の魔法兵を確認する。

一人は…だめだ。命は取り留めたようだがこれでは最早戦えない。

咄嗟に防御したのだろう。左腕は中指から小指が、右腕は肘から先が千切れて無くなっていた。

千切れ潰れた手指を魔法で繋ごうとしているようだが…現状では十分な治療は望めない。この戦いでこのいつはもう、再起不能だ。

目を離し後の二人を確認する。…外傷はあるが、軽微。こちらは大丈夫なようだ。

「よし、お前、お前はもう良い。後方に下がり治療を受ける」

重傷の一人を下がらせようと、指示する。

「だ、大丈夫です…自分は、まだ…戦えます。それに自分は空軍の兵士…総帥にはご迷惑を、おかけしました。その償いの為にも、戦線を離れる訳には…」

「…その腕では不可能だろう、全てが終われば俺が<再生魔法>に長けた医師を紹介してやる。下がれ」

「いえ、まだです、自分はまだ…戦えます…」

そう言って、腰の鞆から拳より3回り程大きく、大人の頭部よりはやや小さい球体の物質を取り出す。

「……いざと言うときは、この<炸裂弾>で敵を1体でも多く巻き込んで、果てて見せる所存です。ですから、戦わせてください」

「…」

二本しか無い指で大切そうに<炸裂弾>を抱え、真剣な、熱に浮かされたような、狂気に彩られた瞳でこちらを見つめてくる。

<炸裂弾>。空軍の爆撃用兵器だ。外見は丸い紙の塊。中身は薄い切れ目だらけの鉄板で火薬を包んだもの。

上空から落とし、地面に激突した衝撃を利用し発火装置が起動、爆発する。破壊力もかなりある。

だが、落したり投げた程度の衝撃では爆発しない。

つまりこいつがこの<炸裂弾>を爆破させるためには、高度が必要。

今ここで得られる最大の高度はバリケード。その上から飛び降り、自らの体で<炸裂弾>を地面と挟み、圧迫。

その衝撃で自爆するつもりなのだろう。

成功率は…1割もあるとは思えない。

頭を抱える。責任感を感じるのには良い。だが償い方を勘違いしている。やる気のあるバカだこいつは。

「…いいか、よく聞け？ ……」

「<オオオアアアアアアアアアアアアアアアア>」

『おい！ デュランー！！』

バカを諭そうとした時、トラが叫び俺を頭で突き飛ばす。

ゴツガツと地面が抉れ、くぐもった音が響く。

この攻撃は…！

「ベルム王国万歳！！」

相手を確認する為、目を離れた僅かな間に腕の接統治療中のバカが起き上がり走り出した。

「なっ」

慌てて走る。向かう先はバリケードの上部。

登ってきた敵<人型>は腕部が左右共に然程肥大しておらず、有頭。つまり、<魔法使い>

その<魔法使い>に向かって走るバカを背後から剣で殴りつけ、倒す。

「<オオオアアアアアアアアアアアアアアア>」

バカの頭上を<魔法矢>が走る。

そのまま魔法使いに走り寄り、袈裟切りに切りつけ、さらに蹴り落とす。

恐らく先程バリケード上で、槌持ちを倒した時に撃って来た奴だ。俺たちを視認した為に一気に前線まで来たのだろう。

切りつけた傷は深い。落ちてもみくちゃんにされればくたばる筈だ。よし、後は…

息を整えつつ、さっき殴り倒したバカの元に戻る。

足元に転がっていたく炸裂弾を拾いバリケードの向こうに投げ捨てる。

あわよくば、槌持ちあたりが踏みつけて爆発するだろう。バリケードの内側で爆発されたらそれこそ大惨事だ。

「ああ…」

悲しそうな声をバカが上げる

「バカか、お前は。何を考えている？」

「わ、私は、フェルブルム卿や総帥を守ること…」

「それで玉砕しようとした、とでも言いたいのか」

「はい…！ 私の命など！ 貴方様達を守る為ならば…！」

ガツン！ とバカの顔面をフック気味の拳で殴る。

「な、何故…」

ガツン！ とさらにバカを殴る。

「分からんかこの、馬鹿者が…何を、勘違いしておるのだ！」

あまりのバカさ加減に腹が立つ。

「俺たちの為に死のう、だと？ いいか？ そんなものは、そんな考えはいらぬ！ 死ぬ為の言い訳など捨てる！ 持つなら、思うならば生き残る為の言い訳…生き残る為の理由を探せ…！」

…良い機会だ。バカはこのバカだけでないだろう。ならば言っ
て聞かせよう。

「聞け！ 貴様達…！」

残った兵、治療中の兵、全ての兵に向き直り、叫ぶ。

「いいか、俺には病身の妻が居る！ 未だに婿を連れてこない不肖の娘も2人居る！ その娘達が結婚し、生まれてくる孫娘を元氣になつた妻と二人で抱くまでは俺は何が有っても死ねん！ 死なん！
！ それが、俺が生き残る為の理由だ！！！」

叫ぶ間に、背後に数体の<人型>が登ってくる。再び踵を返し、敵に向き直り、続ける。

「貴様らにも有るだろう、愛する女の為？ 富や名声の為？ 何でも良い！ 言つて見る！！！」

「帰つて一杯のみてえ……」「俺はかーちゃんに会いてえ……」「総帥の……が欲しい……」

「俺、生きて帰つたら絶対告白して結婚する」「息子に会いたい……まだ、2歳なんだ……」

「まだ死にたくねえ……」「生きて帰りてえ……」「俺が死んだら、誰が……の世話するんだよ……」

兵が口々に呟く。そつだ、口に出せ、頭で考えているだけでは駄目なのだ。

「そうだ、そうだ！！ 自分の中で生きる為の理由を見定める！
いいか、死を恐れないものなど要らぬ！ 死は恐ろしいものだ！
恐れるものだ！！ だがその恐れを越えろ！ 己の見定めた生きる
為の理由を持って勇ましく戦い、乗り越えて見せよ！！」

トラが叫ぶ俺にのっしと並び立ち、にやりと獰猛に笑う。

前方には、誰の背も存在しない。どの兵よりも敵に近い最戦前。や
はり我々にはこの場こそが一番似合う。

そう考えつつ、さらに続ける。

「絶対に、一瞬たりとも死んでも構わないなどと考えるな！！ そ
んなものは死んだ後に考えろ！！ いいか！！」

「「「オ、…オオ、オオオ「「「

兵士がまばらに、鬨の声を上げる。だが、これでは足りない。もう
一押し、する。

「返事はどうした！！！！」

「「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」「」「」「」

今度こそ兵たちが猛り、鬨の声を上げる。

装備も兵数もままならないが士気は十分だ。まだまだ戦える！

「よし！ ならば全員抜刀！ 凌ぐぞ！！！」

そう叫び、バリケードを乗り越えたく人型へ、我先にと踊りかかった。

「フン。なかなか見事なものだな。総帥殿」

「…キヤメル卿？」

バカを殴り倒してから数分後。

乗り越えた数匹をつつがなく仕留めた後に前衛を譲り、バリケードから下がって後方へと戻った所、およそこの場に相応しいとは思えない男、キヤメル卿がそこに居た。

「着いた早々でこの騒ぎじゃ。なかなか苦戦しておるようじゃの」

「おお、フォワール卿…も…？」

どうやら2人も無事たどり着いたらしい。しかし何故前線へ？

視察、激励のつもりか？ 優雅な物だ。

少し苛立ちを感じかける。

だが、そんな事よりもふと目に付いたものに視線が釘付けになる。

「…貴公ら、それは、まさか」

「ふん。貴公らが体を張っておるのに何もせぬなどならば、ワシ
らも五大家の当主としての沽券にかかわるからな」

「うむ、この老骨、歳甲斐も無く老体に鞭打ってきたぞい」

そう言った二人が持っているのは、俺の宝剣と並ぶこのベルム王国
の至宝。

「<竜王殻・千刀>、 第壹拾貳式機構変化 じゃ。 <螺旋錐>」

フォワール卿の両腕に付けられた小型のシールドから2本の刃が螺
旋を成して伸び、

20m以上向こうで新たに登ってきていた<人型>の胸部を貫き、そのまま上下に展開、千切る。

だが、フォール卿は悠然とその場に立ち、よろめきもしていない。
…凄まじいまでの技のキレ。

流石は師匠…なのだが…

「い、き式機構回帰。ぬおお…や、やはり無理じゃ。見栄を張るものではないの…」

急速に刃が縮み、シールドだけに戻った所でフォール卿が腰を抑えくず折れる。

ああ、やっぱりか…。

フォール卿は俺やトラの剣技・武技の師匠だった。

一時期こそ王国最強の剣士を名乗る程の武勇を誇ったものだが、30余年程前に腰を痛め引退していた。

…寄る年波には勝てなかったのだ。

「無茶をするな、全く。ここまでの道中ワシらを守って孤軍奮闘、戦って来てくれただろうが。もう十分だ、後はワシが引き継ぐ。起動しろ<竜王玉ロウススフィア>」

今度はキャメル卿が手に持った杖の先端の宝玉に手を添えてその力を解放する。

杖から広がる金色の波動が瞬く間に床を、壁を、天井を、バリケードを覆い尽くしていく。

「ぐ、う……やはりワシには厳しいな。この障壁結界が砕かれたとしても、恐らくもう1度張れたら良いところだ。」

「……いや十分だ、済まない。」

莫大な量の術式回路を書き込め、膨大な量のマナ含有量を誇るキャメル家に賜られた至宝<竜王玉ロウスファイア>によって張られた<儀式魔法>クラスの強力な障壁結界。

これさえあれば今ここに居る最低レベルの<人型>ごときでは結界が消えない限りバリケードを砕く事は不可能な筈だ。

「フン。ワシもベルムの民。この危難において黙って守られて居るだけでおられるものか」

「ふおっふお……こやつ「ワシも何かせねば気が済まぬ」と突然叫び出している、そのまま避難を急遽取り止めさせ、政務室まで回収に向かったかいたったのう……」

『見直したぞキャメル卿！ 金算用だけが貴公の能では無かったのだな！』

「……………フン。兎も角、ついでに武器庫も周って幾つか武器を見繕ってきた。どうせ損耗して不足しておるのだろう」

「おお、その通りだ。そう言えば武器も無くなりかけていたのだからありがたい」

「そんな事だろうと思ったわ、戦の時分ですら貴公らは補給が疎だからなら」

「面目ない……」

『すまん……』

「にやにやしながら謝られたところで、謝罪されている気には成らんのだがな……」

「ふおっふおっふおっふお」

そのぐらいは大目に見て欲しい。我々は嬉しいのだ。

300年前の戦いで物資の調達と補給を担い、やり遂げた事を誉れとするキャメル家、その当主ならではの気遣い。

この男も今までは金算用ばかりしている腑抜けかとも思っていたが、なかなかの気骨を持っていた。

それが、嬉しいのだ。

「兎も角、ワシの役目は果たした。後は任せるぞ総帥どの、トラ公どの。…守り抜いてくれよ」

「『応!』」

頼もしい援軍の激励に勇ましく答える。

まだ、我々は戦える。

7・7<それぞれの戦い、玉座の間へ2>

ここまでの戦いで観察し、<人型>について幾つか新たに分かった事がある。

まず一つ。明らかに<人型>は目で見ていない。

足下に出来ていた些細な段差に躓くもの、柱に激突するもの、壁をずっと叩いているもの。

どれも同じ行動原理。彼らの探知能力がどういうものかは分からないが、

兎に角障害物が有っても気づかずに、ひたすら真っ直ぐ得物を狙っている。

そして、もう一つ。

近づかない限り、こちらに攻撃を仕掛けてこない。

玉座の間に向かう道中の敵の反応は、目的地に近づけば近づく程鈍くなった。

最も近い得物を狙うのは知っている。

だが、遮蔽物の無い方向に敵が居るのに、そちらには見向きもせず遮蔽物の向こうの敵を追うとは知らなかった。

ただ、こちらに來ないなら遠くから倒してしまおう、と一度攻撃を加えてみて判明したのだが、ひとたび攻撃を受けると狙う得物を変更し、攻撃を受けた方向へと襲い掛かる。その際には周囲に居たものも同調する。

どれも実に単純な行動だ。

地上に降下して数10分。

道中はおおよそ10匹程度の<人型>と遭遇する程度で、私達はあっさりと玉座の間の数100m手前にたどり着いていた。

玉座の間の入り口にはバリケードが築かれ、物凄い数の<人型>が集まっている。

…少なくとも見積もっても、150は下らないだろう。

だが今はこちらに見向きもしない。

バリケードの向こうの方が人数が多く、此方の方が距離がある為だ。

…さて、どうする？

攻撃すれば、どれほどの人型が向かって来るか分からない。

全てが同時に向かって来れば、流石におしまいだ。

遠距離から特大威力の魔法で吹き飛ばす…のはお姉様の得意分野。

障壁や治癒専門の私や、そもそも魔法の詠唱、制御が苦手で魔道具に頼るお母様では効果が見込めない。

兵に撃たせるにしても、数が多い。

<十重刃扇・鳳>をお母様に返し、その最大威力を持って削ってもらう…？

難しいか。この魔道具は一度に複数の敵を倒す事が可能だが、その数には限りがあり、1回倒すのにもタイムラグを生じる。

だから二つを持って補うのだが…それでも足りない。

かつてその穴を塞ぐ重要な役割をこなした2人の人物は、バリケードの向こうで奮闘中だろう。

相手が本能で動いているので対策は立てやすいのだが、如何せん個々の身体能力の高さが不味い。

一撃で戦闘不能にされかねない相手に雪崩のように襲われてはひとたまりもない。

逡巡する。いつまでも考えて居ては居られない。

と、状況を観察していた視界に何か人の頭大のモノが捉えられる。

あれは…そうか。

何故あんな所に転がっているのかは知らないが、都合が良い。利用しよう。

作戦を決定する。

「…ベル。＜風槌の腕輪＞はありますか？」

「ありますよ？」

「お貸しく下さいまし。」

「いいですよ？ でも、これ、殺傷力が無いですよ？」

「問題ありませんわ。」

「そうですか？ …はい。どうぞ。」

ベルから＜風槌の腕輪＞を受け取る。

これは魔力を込める事で風の塊を作り、遠距離で殴りつけるように使うことが出来る＜風槌＞を発生させる魔道具だ。
ウィンド・ハンマー

だが基本は牽制、制圧用の非殺傷武器。捜査局の兵はほぼ全員が持っているが、それ以外の兵はまず持たない代物。

…だからこそ都合が良い。

「…中央はわたくし達とお母様。その左右で2組の3列横隊、さらに斜め横隊、その後方向転換、中央を臨むように30度。鶴翼と似ていますが微妙に違います。注意を。」

指示を受け、兵達が素早く方円を3列横隊に変更する。

僅か4、5秒で組みあがる一系乱れぬ横列…見事な物だ。言葉使いこそおかしいが、錬度は本物。

流石はお姉様の率いる精鋭か。

「全体、5歩、外側へ。さらに間隔をもう一步ずつ開いてください。そして2列目、外側に向かってさらに一步。1列目の真後ろでなく、前の二人の間に入ってください。」

指示を続け、およそ70人の兵士が陣形を組み上げたところで、お母様を伴って前に出る。

真上から見るとやや開けた「逆八」の字。だが中央の私達3人とお

母様は独立し、突出している。

すうつと息を吸い、長い説明を始める。

「まず、中央からわたくしが一撃を加えます。そして、あの集団を吹き飛ばし、一旦分散をさせます。

あわよくば、いくらか始末も出来るでしょう。

その隙を突いて、陣形を崩す事無く進軍。敵が此方に向かって来たところで、停止。

その後横並びになった1列目の方が、わたくしの号令に合わせて魔法を平行射撃なさってください。

1発で構いませんわ。それと狙わないでください。外れはしません。

1列目が撃ち終わりましたら即座に2列目と入れ替わって、3列目の方の後ろへ下がって再び射撃の準備をしてくださいまし。

さらに号令をしますので、それに合わせて2列目の方が一撃を。

その後、1列目の方の後ろへ。

3列目の方も同じ手順です。状況次第でそのままローテーションします。

いいですか？ 要になるのは決して狙わず左右の隊で十字に射撃が重なるよう真っ直ぐ前を撃つ事です。

わたくしとお母様が狙われても、援護は必要ありません。」

皆が、声を上げず力強く頷く。その顔にはこの作戦の効果の程を理解した、という色が宿っている。

…過剰に詳しく説明するまでもなかったか。

「なかなか、面白い陣形ですわね。」

お母様がそう評価する。

「…<召喚されし者>の母国で「ジユウベエ」とおっしゃられる方が運用なされた、と言う中距離での殲滅用の陣形ですわ。射線の重なる部分に入ったが最後、生きては出られません。…最も、魔法ではなく銃を使ったそうですが。」

「銃、ですか？ …あんな欠陥品を？」

そう、欠陥品。天候に左右され、メンテナンスに異常な程手間がかかり、その癖威力も射程も命中率も連射性能もどうしようもない。

しかもモンスターには殆ど効果をなさない完全に対人用の武器。なのに派手な音が出てしまい、暗殺にも適さない。

さらには指定通り鉄で作るとよく暴発事故を起こすので、より硬い<魔鉱石>で代用したため製作コストもかなり高い。

歴代の<召喚されし者>の数名がやたらと拘り、作らせたものの、対物理障壁1枚で無効化されると知りお払い箱になった。

魔法や魔道具を使ったほうが良いのだからどうしようもない。

最近「魔力を使わず威力のある中距離攻撃ができる」という事で

空軍が何とか欠点を改善できないか研究しているらしいが…

…日の目を見るのはまだまだ先でしょうね。

思考を振り払い、お母様に説明の続きをする。

「ええ、彼らは高い魔力量を持っていますが、魔法が一切使えない世界の出身…魔道具も無ければ攻撃魔法も無い。苦肉の策だったのでしょう。ですが…それ故に練られています。」

「成る程。…貴女の兵の運用はあの人やメリアとは大分違いますわね…なんといいですか…：…えげつない？」

「……………」

酷い評価だった。

「ま、まあ兎も角、わたくしはどうすれば？ 見たところ、エサの
ような気がするのですが？」

気のせいですわよね？ と言う。

ははは。残念ですが、お察しの通りですわ。

「その通り、ですわ。」

「.....」

「ごめんなさい。」

「で、ですが最低限突破してくるものを討つ程度ですので。わたくしも援護しますし、だいじょうぶですわ。」

「.....まあ、いいですわ。やってやりますとも。」

「それでは総員、魔法による射撃の準備を。得意なモノで構いませんが、できれば貫通力の高いものが好ましいですわ。」

「.....了解です!!」「.....」

良い返事ですわ。と思いつつ次はベルに話しかける。

「ベル、対魔法障壁を私達の前面に。恐らく間違いなく魔法使用も居ます。兵の魔法を障壁の内側で受けられないよう、サイズは注意してください。」

「.....了解です。頑張ります.....苦手ですけど.....」

.....それでも、やって貰うしかない。

「お母様、初撃の余波で味方に被害が出ぬよう、対物理障壁を水平広範囲に。皆の身長程度のものでかまいません。」

「…」

渋い顔をされた。

「初撃の余波を防いだらとっばらって頂いて構いませんわ。どの道なだれ込まれますし。」

「…了解、ですわ。」

このぐらいの範囲ならばお母様の制御力でも強引に張れる筈だ。

「カーニスさん。貴方にはこの作戦が上手く行けば重要な仕事があります。万全の状態で行けるよう、待機を。」

「応。まかせとけ」

相変らずの返事。

…もう慣れましたわ。だから何も…思いませんことよ…？

「では、始めます。」

そう言つて<風槌の腕輪>に魔力を込め、詠唱省略をし、ウイン・ド・ハンマー<風槌>を何時でも打ち出せるようにする。

今回は普通に魔法を打ち出すのではなく、発動言語を放ち、操作しなくてはならない。その為の下準備。そして、

…ここからが、腕の見せ所。ですわ。

「 I Rasther et Amot spmos Gron
lez-vondm
」

詠唱する。

「 Hrid Leour bill, sndwhirl dn
p oand mrex ttoura avend
」

大破壊は産めないが、ピンポイントでならわたくしでもそれなりの威力が出せる。

「 Be tuis Je swist firrmer l m
enly shpet suis trant
」

狙いは、あそこに転がっている、あれ。

「Eraonant Alen Perugh pop
loup」

人の頭程のサイズの、空軍の空爆用兵器、炸裂弾。

「Crzries oubtshndmash Je
enrt efer a Gahutte」

詠唱を終える。一番難しい段階はここだ。一息に、完璧に、こなし
てみせる。

「ウィンド・ハンマー＜風槌＞!!! バタリング・ラム＜破城槌＞!!!」

ダブル・スベル二重魔法。使えるものは使えるが、それなりに上級の技術。

先手を打って唱えられたくウィンド・ハンマー＜風槌＞が地面を這い、決りこむように曲
がり、炸裂弾を弾く。

弾かれ、浮き上がり放物線を描くその位置は、敵集団の、背後の、
ど真ん中ややこちらより。

狙い通り。

さらにそこで敵の頭上で形作られていた巨大な風の塊がねじれ、先端が尖り杭のような形状になる。

バタリング・ラム
＜破城槌＞本来水平に向けて発動させるものだが、今回は垂直に落ちる。

ガン、ガ、ガン、と音を立てて炸裂弾が転がり、狙った位置へと到達する。

「お食らいなさい！！」

叫ぶと同時にバタリング・ラム＜破城槌＞が真上から突き刺さり、炸裂弾が＜人型＞の群れの直背で大爆発を起こす。

流石の威力。もうもうと砂煙を上げ、一瞬で塊だつた＜人型＞が飛び散り、バリエードに、壁に、天井に叩き付けられ、散り散りになる。

何体かは確実に戦闘不能に持ち込んだはずだ。

「いきますわよ！ 駆け足、前進！！」

炸裂弾の余波を対物理障壁が受け止め、消滅したのと同時に進軍す

る。

これで<人型>はこちらに反応する。こちらに向かってきたところ
で…

「全体、停止！ 射撃用意！」

突出した私とお母様に向かつて爆発によって散った<人型>の内、
こちら側に吹き飛び、比較的軽傷で済んだ連中が向かって来る。

引き付け、最大限の効果を成すべき、所で………今だ！

「撃ちなさい！！」

アイス・スパイク アイス・ジャベリン ウォーター・カッター
「<大地棘>」 「<氷槍>」 「<水流飛刃>」
スパイク・ランス ウィンド・サーベル アイス・ジャベリン
「<雷槍>」 「<疾風断刃>」 「<氷槍>」

発動言語を受け、魔法が打ち出され、突入してきた<人型>の第一
陣、およそ10体が倒れる。

流石精鋭、分かっている。全員が発動言語を放った事に感心する。

魔道具を使用すると魔力消費がやや多くなる。この作戦の肝が1発
でも多く打ち続ける事と看破したのか。

素早く陣形が入れ替わる、間髪居れずに敵は迫る、だが、まだ少ない。多く巻き込みたい。

だから、多少突破される事になろうともタイミングをずらす。

「撃ちなさい!!」

「ウィンド・サーベル疾風断刃>」
「フリーズ・ニードル氷柱飛針>」
「ファイア・ランス炎槍>」
「ランド・ストック尖土柱>」
「アイス・ジャベリン氷槍>」
「ウォーター・カッター水流飛刃>」

2列目から魔法が放たれる。狙い過たず敵集団を補足。2匹突破されたがその分10匹以上を確実に潰した。

よし、良いですわ。

良くぞ、前の2匹に釣られて射撃方向を変えたりせずに撃った。

釣られていれば10匹も倒せていなかっただろう。残ったに2匹は危なげなくお母様が縛り、切り裂く。

さらに隊列が入れ替わり、3発目を、撃とうとした所で異変が起こった。

「ル、ウ、オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

砂煙でうつすらとしか見えないが、バリケードの極近くで特大の咆哮を上げた一匹が立ち上がり、こちらに向かわず、廊下にあった柱を掴んでいる。

「撃ちなさい!!」

第3射、今度も10数匹を始末した。

だが、奥のあれが気になる。炸裂弾の余波を受けて敵は全て私を襲ってきておかしくない筈なのに、あいつは何を、している？

隊列が入れ替わり再び1列目が先頭に来る。詠唱は、終わっている。引き付ける。だが、全体を見渡すのを忘れない。

「射撃体勢を維持しつつ、微速後退!!」

予想以上に圧力が高い。

<魔晶石>、<魔鉱石>には躓くのだが、崩れる前の死体を、倒れたく人型>をかわしてくる。

敵の突撃に合わせて後退する。

「撃ちなさい!!」

しまった、遅れましたわ！

不意に起こった状況に驚き、一瞬遅れる。突破したのは、5体。

まだお母様だけで、始末はつけられるだろう。だが、

問題は向こうだ。起き上がるく人型>が進行方向を2つに分けてしまっている。

…下がりすぎた。さらには先ほどの一撃でバリケードの上部が大きく倒壊、柱の破片による道が出来上がっている。

中に、入られる。

「撃ちなさい！！」

しとめたのはわずか5体。

「撃ちなさい！！」

隊列の入れ替わりを見届け、間髪入れずに次の一撃を撃たせる。

圧力が、高すぎる。

後退を、止められない。

「撃ちなさい!!」

そうこうするうちに<人型>がバリケードを越えて進入していく。

このままでは、お父様達が。

…やはり、やるしかない。

「カーニス！ 出番ですわ！ お母様をバリケードの中へ！ 貴方の俊足なら出来るはずです!!」

ベルを抱え、その背から飛び降り、指示を、下す。

返事をするのもどかしい、と言わんばかりに巨狼と化していたカーニスが突撃し、最前線のお母様が背後から迫ったカーニスの、その首根っこをとらえ、乗る。

「撃ちなさい!!」

…これで直接の守りは無くなった。もう、わたくし自身が、戦つかない。

兵達も既に9度、一人当たり3度の魔法行使。

彼らが対モンスター用の威力を持った魔法の撃てる数は、およそ10前後と事前に聞いている。

失神させる訳には行かないから、ここまでには障壁等で使った分を差し引いて、予測される限界は6、7。半分使い切った。

そして最大の戦力は、送り込んだ。∴ 正念場、ですわ。

カーニスが敵の真っ只中をつつきり、バリケード前で飛び上がり、その背を蹴ってお母様が単身バリケード内へと突入したのを見届け、

私は正面に迫る弾幕を突破したく人型>1体に向け、展開したく十重刃扇・鳳>を振るった。

7・8<それぞれの戦い、玉座の間防衛戦3>

戦い続けること、さらに2時間程。

ひたすらバリケードを乗り越えてきた<人型>をしとめる事を繰り返していた最中に、爆発音が響いた。

バリン！ と音を立て、今までの長時間を耐え続けた<竜王玉口ウ
スファイア>の障壁結界が、ついに限界を向かえ砕かれる。

「今の音は」

『聞き覚えがあるな』

「……………炸裂弾だ」

それも恐らく、さっき捨てたもの。それが、爆発した。

まさか本当にあれが爆発するとは…

<槌持ち>が、狙って殴ったら爆発するかも知れない。そんな程度に思っていた。

それが、爆発した。

失策だったか…？ いや、バリケードの向こうで爆発したのだ。かなりの数を巻き込んで手傷を負わせただろう。

障壁1枚と引き換えなら、安い。もう一度キャメル卿に張ってもらおう。

「誰か、キャメル…」

たったの5人しか残って居ない兵に指示しようとする。早急に障壁を張りなおしてもらおう必要がある。

『お、おい』

「なんだ？」

トラの慌てた声に反応し、見る。ほとほと。と数体の人型が、振ってきた。

既に事切れ崩れだしている物もいるが、ゆらり、と立ち上がるものも居る。

「爆風に乗って、乗り越えられたのか」

『そつとしか見えんぞ』

落ちた塊は幾つもあるが、立ち上がったのは3体。

見たところ、五体満足なのは居ない。

危なげなく始末できるだろう。

「…多少は仕方あるまい。何、俺の番だ。始末してくるさ」

『応』

ローテーションを変わり、前へと出る。

終わりはまだ、見えない。

鋭く突き出された口腕をなんとかかわし、<竜王爪フランメルグ>を振るい、目の前の<人型>の口腕を切り取る。

当たたら最後の攻撃を幾度もかわすのは実に集中力を必要とする。

「今だ!!」

合図をする。

「いつの…!」「死ね!!」「はあ、はあ、はっ!」

3人の兵士が答える。最早槍はない。皆剣で切りかかり、<人型>の胴体を串刺しにして最後の一体をしとめた。

疲労も溜まっている。

負傷をし、治癒魔法で命をとりとめるも戦闘不能に成ったもの。

魔力を使い果たし昏倒したもの。

初期に魔力を使い果たしたものは復帰を始めたが、それでも徐々に兵力は減り、最早俺とトラを含めて7人しか残っていない。

完全な消耗戦。

このバリケードの向こうには、後何体居るのだろうか。

弱気に成りそうな心を叱咤し、再びバリケードの後方へと戻る。

時間は全然経っていないが、対応した数のせいで疲労がまずい。

それに指示の途中だった事をすっかり忘れて迎撃に出たせいで、まだ障壁結界が張られていない。

その対応もしなくてはいけない。

…トラと入れ替わろう。

小隊と呼ぶのもおこがましい2部隊でのローテーション。

それでも、休めるだけまし。

『おう、交代だ。休めデュラン。しかし貴様も歳だろつによくぞこの長時間を戦えるものよ』

トラがのっしのっしと近づいて来て軽口を叩く。

「はっ、鍛え方が違うわ。妻と娘に王国最強を名乗られて、父の威厳を保つのは大変なのだぞ？ はっはっは！」

俺も軽口で答える。

『それもそうか、確かに貴様の所の女供は皆勇ましいからな』

「メルはそうでもないがな！」

『……我輩の目にはメルディア嬢も怪しく映っておるがな……』

トラがすれ違い際にぼそり、と呟く。

「おい待て、それはどういうことだ、貴様、何を知っている？」

聞き捨てならない。太く長い尾っぽを握り、止める。

トラの全身の毛が逆立ち、ビクン！ と反応する。

『いや、気にするな。単に目つきが母親そっくりになる時があるだけだ。あと尾っぽを掴むのはやめろ。敏感なのだ』

そう言ってブンブンと尻尾を振り、俺の手を振り切る。

…ちょっと面白いと思ってしまった。……疲れているな。

「メルは髪の色こそ俺の色だが顔立ちも身長もエーリカ似だ。不思議か？」

『あのときの、エーリカ殿。いや、エーリカ姫の目だ。想像が付く

「だろっ?」

「……………」

エーリカ「姫」あの時。つまり一番ご機嫌な時だろっ。想像してみ
る。

「いやいやいやまで、あの目は色々やばい。メリアもたまにするが
戦闘狂の類の目だぞ?」

『応。その通りだ』

「そんな目をメルが?」

『していた』

「ほんとうに、か?」

『我輩の目は節穴ではない』

「……………」

そんな馬鹿な…メルはずっと荒事とは縁の無い生活をしていたはず
だ。

王都の貴族学園の幼年学級を卒業し、高等学級に就学している。

まだ卒業こそしていないが、既に何処に嫁に出しても恥ずかしくない淑女に育ったはずだ。

だが、だが、

一抹の不安が捨て切れない。

脳裏によぎるのは「血は争えない」「カエルの子はカエル」

などと言った言葉。

『ま、貴様の娘だしな』

「おいまで、俺の影響だというのか？」

『当然、両方だ。フッフッフ』

「全く……」

やれやれと思って手をヒラヒラさせて追い払おうとした、その時だった。

今まで一番大きな轟音を立てて、バリケードが打ち抜かれ、がらがらと崩れる。

何が、起こった？ 慌てて視線をめぐらせる。

もうもうと巻き上がった砂煙の中、中央部を盛大に崩されて高さ
当初の半分ほどの小山となったバリケード上、

そこに居たのは、身の丈3m程はあろう巨大な異形の<人型>

しかし何処がおかしい。普通の形ではない。

思い当たる。あれは…トラとは違うタイプだが、獣人が<獣化>し
た姿そっくりだ！

「馬鹿な、ではあれは<人型>が<獣化>したのか？」

呆然と、呟く。

そんな話は聞いたことも無い。獣人と言えど<人型>に成ってしま
えば皆同じだったのに

『糞っ！ 今更なんてものが出てくる！ おいデュラン！！ ぼっ
うとするな！ アレは我輩が抑える！ お前の剣でやれ！！』

「できるのか!?!」

『やるしか、なかるうが!?!』

「そつだな!?!」

『貴様らはこの隙に侵入するかもしれぬ普通の<人型>に対応しろ
！！』

叫ぶと同時にトラが猛然と駆け、<異形の人型>へと肉薄し、襲い掛かる。

だが、<人型>も器用にそれをかわし、バリケードの残骸から柱の残骸らしき巨大な岩の塊を持ち上げ、投げつける。

『器用な…！ <猿人型獣人>が変化したか！』

あの調子で柱を使い、大質量を持って砕いたのだろう。もしかしたらバリケードの向こうに破片で階段が出来てしまっているかもしれない。

…しかし、そんなものは動かない壁だから当てられただけに過ぎない。

巨体を翻し、ひらり、ひらり、とトラが一撃必殺の一撃をかわす。

そして一瞬の隙を突いて飛び上がり、その太い前足と爪で覆いかぶさる。

うまい。首尾よく押し倒し、両腕の根元をがちりと押さつけえた。

『今だ!』

言われなくとも、その隙を逃しはしない。<竜王爪フランメルグ>が押さえ込まれた腕を肘の辺りで殆ど抵抗無く切り離す。

反対側の腕も、切り離す。後はとどめ、だ!

「トラ! とどめを刺せ!」

『ゴブツ』

<異形の人型>を押さえつけていたトラが

血を、吐いた。

…何が、起こった?

トラの体が縮む。

獣化が、解けていく。

そこで初めて、気づいた。

トラの喉に、首を長く伸ばした<異形の人型>の顎ががちりと噛

み付いている。

<無頭型>では、無かったのだ、

「う、おおおおおおおおおおあああああああ……!!」

絶叫し、そのまま横合いから飛び掛かり、頭に剣を突き立て全身で体当たりをしながら、捻じる。

その衝撃で起き上がろうとしていた<異形の人型>はトラから口を離し倒れる。

「トラ！　トラ!!」

慌てて解き放たれたトラを見る。

まずい、意識が無い。

それにこの出血速度、頸動脈を切られた。

治癒魔法が、今すぐ要る。

傷口を両手で圧迫し、集中力を限界まで研ぎ澄まし、詠唱。

「<治癒回生>!!」

なけなしの魔力で治癒魔法を発動する。

急げ、急げ、急げ、急げ！

血を戻す事など後回しに、これ以上の出血を防ぐ為切られた頸動脈を繋ぐ。

時間は、ほんの数十秒。トラの瞳に意思が、宿る。

気管に流れ込んだ血を抜き、傷口を応急だが塞いでいく。

…間に、合った。

こんなに高速で魔法が発動できた事があつたらうか？

驚きと共に、気が抜け、どすんとその場に座り込む。

「ははは、…貴様、俺より先に死ねるなどと…思つなよ！」

「ゴフツ、ゲボツ！ …馬…鹿…野郎がっ…！」

感極まっていた俺をトラが裏拳気味に思いつきり殴り飛ばす。

「がつ…」

何を？ と、思った瞬間、先ほど両腕を切り落とし頭を貫き倒したはずの<異形の人型>の顎が、

ガブリ、と一瞬前まで俺がへたり込んでいた、その頭部があった所に裏拳気味割り込んだトラの左腕に食らい付いていた。

「気を…抜くな！！ 早く、こいつにとどめを刺せ！！！」

「応！！！」

<異形の人型>の頭に突き立ったままの剣の柄を掴み引き抜き、そのまま首を刈り取る。

ズ…ンと再び巨体が倒れ伏し、今度こそ、崩れはじめた。

「すまん、トラ、助かった」

「ぐ…何、我輩もあまりに上手く押さえつけられたものでつい気を抜いてしまったわ」

「ふふ、ならばお互い様という訳か」

「遺憾だが、な」

ふらり、とトラが立ち上がる。<異形の人型>に噛み付かれた左腕はだらりと垂れ下がっている…折れたようだ。

「トラ、下がれ。治療を受ける」

「そうは行かしてくれそうにない」

トラが見つめる先を見る。

そこには、今まさに悠々と進入してこようとしている…<人型>。

数は………6体。

「ふ、なんともはや」

「応。正念場だ」

兵たちにはもう剣しか武器は無く、魔力も尽き、今立っているのは我々7人。

だが、まだまだ。俺は諦める訳には行かないのだ。

剣を構え、すうっと息を吸い、吐き出すと共に声に変える。

「来い！ 化物ども！ この俺の命ある限り、ここから先には一匹たりとも通しはせん！！」

「応とも、我輩の命もだ！！」

トラも続く。

「ベルム王国陸軍総帥、アーリントン家第16代当主、デュラール
「ミラ「アーリントン……」

「ベルム王国捜査局総監、フェルブルム家第18代当主、レイモン
ド「ミラ「フェルブルム……」

「「推して参る！！！！」」

名乗りをあげ、啖呵を切り、駆ける。待ちなどしない。

そつだ、何時だって、攻めて、攻めて、攻めて、活路を切り開く。

俺たちは、そうやって戦場で生き抜いて来た。

「おおおおおおおおおおおおお！！」

「がああああああああああああ！！」

バリケードの残骸を乗り越え、6体の<人型>がバラバラに飛びかかってくる。

丁寧に無力化してとどめを刺すような戦いはもうやめだ。一撃で、仕留める。

その一体を、真正面からすれ違い様に口腕をかいくぐり、懐へと潜り込むようにして胴を真つ二つに切り裂いた、その時だった。

ふわり、と場にそぐわぬ甘い匂いのする風が吹いた。

その直後バラリ、と真つ二つに切り裂いた<人型>が胴だけでなく、全身をブツ切りにされて砕ける。

トラが殴りかかったものも、砕けている。

さらにバラリ、バラリ、バラリ、バラリ、と残りの<人型>もバラバラになる

何が、起こった？ いや、この切り口は…

「ふふふ、ああ、久しぶりに聞きましたわね。あなたの勇ましい言葉。たまりませんわ」

馬鹿な、この声、は…

聞き覚えの有る、艶の籠った、熱に浮かされたような甘い声。

そんなことはありえない。

だが、その有り得ない筈の人物がバリケードの残骸を軽々と飛び越え、こちらにやって来る。

「間に合いましたわね。あなた。ご無事でしたこと？」

「馬、鹿…な…エーリカ？ 何故、ここに…？」

「あらあらご挨拶ですこと。わたくしがあなたの危難に駆けつけな
いでいられるものですか」

「……………」

そんな馬鹿な。エーリカの病状は深刻で、最早戦えるような状況ではなかった筈だ。

ここに来られる筈が無い。

『アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア』

二人して呆けて居る内にエーリカの背後から<人型>が新たに乗り込み、襲い掛かって来ていた。

飛び掛ってくる<人型>に剣を握り直し、迎撃しようとする。が、それをエーリカに槍で防がれた。

「無粋ですわね」

ぶん。と槍を持たない腕が振るわれ風が起こる。

と、同時に<人型>がその場で急停止、さらにばらりと切り刻まれ、砕ける。

その手に握られているのは、銀地に鮮やかな蒼色で模様が描かれたごく一般的なサイズの扇。

だがそれはエーリカの魔道武具<十重刃扇・凰>。それも完全展開されている状態のサイズ。

10本の多刀刃が1枚に付き数本の竜髭で繋がれた、伸縮自在で操作自在の中距離斬撃用<魔道武具>

両手に<凰>と<凰>を持ち、戦場で舞い踊るかのように敵を切り刻み、風を纏って血風を巻き起こす。

それが、全盛期の、前代の王国最強の名を欲しいがままにした戦場

の舞姫の戦闘スタイル。

これを完全展開で扱えるものなど、他に存在しない。

「あらあら、トラちゃん、重傷ではありませんか…」

そつこつ考えている内に、エーリカが折られたトラの腕を見止め、
治癒魔法を発動する。

見る見るうちにトラの腕や体の傷が癒えていく。

「ほら、あなたも」

「あ、ああ」

今度は俺が治療される。

傷が癒えていく。夢ではない。

「く、くく、く、く、…まさか、まさかこの局面で<血風纏う舞姫
>が助けに来る、とはな!」

「あらあら、トラちゃん。今はもうわたくしは人妻ですよ? <
舞姫>だなんて、おこがましいですわ。例えるならそつですわね、
舞…婦とかかしら?」

…うーんでもちよつと微妙ですわね？ と首を傾げる。

「どちらでも良い！ おまえ、＜召喚の呪い＞は…」

「完治しましたわ。ええ、それこそどうでも良いことですわ。わたくしはここに居て、戦えます。あなたも今はやるべき事が有るのでしよう？」

「そんなまさか…いや、そうだな、その通りだ」

そつだ、驚いてばかりなど、居られない。

そんな俺をエーリカは望まない。

気を引き締める。

「うむ、話など全て片付けた後で構わん。ふふ、何という日だ。血が滾って仕方ない！ …さあ、20余年ぶりに背を貸すぞ、おてんばな妹姫よ…＜獣化＞！」

再びトラが＜獣化＞する。

「あらあらまあまあ、妹姫だなんて。それはまた、娘時代を思い出

しますわ。でしたらあなたも、あの頃のようにお願いできますわね
「？」

「無論だとも」

そう言つてく獸化くを済ませたトラの背に跨り、エーリカに手を差し伸べる。

差し出された俺の腕にそつと手を乗せ、エーリカもひょいっと飛び上がる。

「では、お背中をお借りしますわ。それと、はい。これはあなたの槍ですわ」

腕の中に横抱きにすっぽりと納まったエーリカから槍を手渡される。

二人の結婚祝いに「いつまでも二人で揃って戦い抜けますように」と誓いを込め、

わざわざ改造し大戦斧にできるようにしていたエーリカの扇と俺の槍。

亡き父からく竜王爪フランメルグくを家督と共に受け継いでからは二人の寝室に飾っている時の方が長くなってしまっていたこれを。

持って来てくれたのか…小柄なエーリカにはこの槍は扱い辛かったろうに。

それでも俺のために。

ジン、とこみ上げるものがある。

だがそれは飲み込み、槍を握り、脇に挟む。

兵に借りた槍とは違う。圧倒的なまでの安心感。

「うふふ、まるであの初めての戦場のようですわ……」

『応、まさにあの時の、ルイン平原の戦いの焼き写しよ』

「ならばこの戦、勝ったも同然だな」

「ええ、さああなた。往きましよう、メリアも、メルも待っていますわ」

胸に抱いたエーリカが指差し促す。未だ砂煙の舞う崩れたバリケードの向こう。

聞こえる。兵士の戦う声。

エーリカが連れてきた兵がこの残骸の向こうで戦っているのだ。

…援軍は来た。気力は満ちている。この腕に大切なものがある。

ならば100人力、いや、我ら3人が揃えば万人の敵だろうと退けられる。万人力だ。

「ああ、往くぞ！トラ！」

『応！』

トラが高らかに吼え、俺たちはバリケードを乗り越えた。

7・9 <それぞれの戦い、玉座の間前の決戦>

<十重刃扇・鳳>を振るう。弾幕を突破した<人型>2体それぞれの片足に刃が巻きつき、強く引くことで切り落す。

自分に出来る最低限で最大の効果。お母様のように完全にバラバラにすることは狙わない。そして、

「撃ち、なさい!!」

間髪入れずに指示する。向かっていた敵のおよそ5体が撃ち抜かれ、倒れる。

最初の頃より、射撃間隔が短くなっているので、数を倒せて居ない。

だが仕方がない。私では3体以上を相手にできないのだ。

そして今のが、18発目。限度だ。これ以上は危険。

だがまだ正面には30体以上の<人型>がいる。もう一巡撃てば、粗方の始末が付く。

撃つ、べきだ。

引き付けて…

「ごめん、なさい。限、界でス」

……え？

背後から消え入るような声が響いた。

同時に正面で〈魔法矢〉を防いでいた対魔法障壁が消える。

ベルが、力尽きた。

ガ、ガガ、と魔法矢が飛来するのを咄嗟に〈十重刃扇・鳳〉を盾に受け止めるが、体ごと弾き飛ばされる。

撃たれた、しまった、迂闊だった。後一步と思い、ベルの事を失念していた。

背後に吹き飛びながら思考する。

完全展開できていなかったが為に〈十重刃扇・鳳〉は上半身をすっぽりと覆い隠す盾となってくれた。

だが、〈魔法矢〉を防いだ結果、私の手から弾かれ、離れてしまった。

武器を、失った。

けれども

「撃ちなさい!!」

吹き飛びながら、地面に転がる直前に叫ぶ。一瞬を逃しては駄目なのだ。

「がっ」

地面に落ち、派手に転がる。最初に感じたのは、衝撃、そして熱。

その直後に熱が痛みへと変換される。痛い。痛い、痛い、痛い!

強かに打ちつけ全身の肌がすり切れる痛みで思考が一瞬真っ白になる。

こんな痛みは、味わった事が無い。これが、戦場か。これが、これが。

痛い、痛い、痛い、けど!!

四肢に気合を込め、転がる体を停止しようとし、誰かにぶつかる。

「だ、…大丈夫で、スか…?」

転がる私を受け止めたのは、ベル。どうやらまだ意識はあったらし

い。でも見るからに顔色が良くない。限界だ。

痛みを無視して思考する。こんな痛みに負けるようでは、私は資格が無い。そんな事は、理解している。

そんな事よりも、**囿**役の私達が今の一撃で大きく後ろに飛ばされてしまった事が問題。

痛みで滲む視界を無理矢理正面に向ける。

予想どおり、**<人型>**が散った。もう、今の陣形は用を成さない。

即座に、対応しなくて、は、でも、どうする？

密集陣形？ 囲まれる。

人数では勝る。さらに拡散包围？ そんな広さは無い。

突撃？ 自殺行為だ。

後退・撤退？ 出来るのか？

どうする、どうする、どうする、出来る、事は…

思考が答えにたどり着かない、まずい。

さらに不味い事に、**<魔法矢>**が飛来していた。

しま……

『いってえー!!』

障壁を張ることも、回避も不可能なタイミングだった。

だが巨大な影が私達の前に立ち塞がり、<魔法矢>をその身で受け止め、敵を見えなくしていた。

「カ、カ、カーニスさんでスうー！」

『応よ！ 俺にだって対魔法障壁ぐらい…張れんだよ!!』

ガア！！ と一吼えし、障壁を展開する。<魔法矢>の追撃が、止まる。

さらに、ざざつと足音がして、一気に左右の隊列が解け、私達の前に横列の壁を作り上げる。

私は、何も指示して居ないのに。

そして理解する。これは私を守る、その為だけの陣形だ、と。

『よっし、てめえら！ ナイスフォローだ!』

「当然つすよ！！ 俺らメリア様親衛隊、妹様を傷物にさせるもんかよー！！」

『いいぞ！ ならついでに言っつてやれ！ この嬢ちゃんに俺らメリア様親衛隊のモットーを！！』

…何を、言い出したんですの？

理解不能な流れに困惑する。目の前には今にも踊りかかりそうなお体…いや40体を超えるく人型>が迫っているというのに。

何を言い出したのだ。彼らは。

「「「「「一つ！ 俺らの目の前では絶対隊長を傷物になんてさせねえー！！」「」「」

『そつだ！』

「「「「「二つ！ 俺らが死んでも隊長だけは守り抜く！！」「」「」

『そつだ！』

「「「「「三つ！ 隊長が嫁に行くまでは絶対守り抜く！！」「」「」

『その通りだー！！』

啞然、とする。なんだこの集団は。これが、本当の、戦場の兵士なのか？

今まで見たどの文献でもこんな集団は出てこない。私の常識には、無い。

それにお姉様の部下だけなら兎も角、ただの陸軍兵まで混じっている。

『それでどうだ！ 今の隊長は、この嬢ちゃんは、俺ら親衛隊が命を張る価値の有る女だったか！？』

「「「「「勿論だ！」「」「」「」

『なら問題はねえ！ 全員構えろ！！ ここからは総力戦だ！！』

「「「「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」「」「」「」

兵が、吼える。

正常な思考が帰ってくる。

ああそうか、そういうことか。

肩が震える。

くっくっく、と笑いを漏らす。

「メル…皆、カッコイイで……ス……!？」

ベルが涙声で私に話しかけ、振り向き、私を見て硬直する。ああ、そうだろう。

彼らは今バカな言葉を吐き、私を命をかけて守ると言っていた。

バカにするな。

バカにするな、バカにするな！ バカにするな！！

私は、私がこの戦場の指揮官だ。私がこの戦場を操るのだ。

それを、一撃食らい、弾かれ、転がりかすり傷を負った。その程度で、もう過保護に守ろう、だと？

ふざけるな。

怒りが、こみ上げていた。

彼らが、私を侮っていたことに。

もう、私にはこの戦場が担えない、と見くびられたことに。

ふざけるな！！

「 U o u c h i e l d e r d a H l a y s i c s
」

吐き捨てるように詠唱する。普通は発動言語だけで最低限の用が成せる為、詠唱する必要の無い類の魔法なのに。

「 U o u c h i e l d e r d a M a g i s s
」

怒りを込める。彼らの口調が、態度がああだったのは私を頭でっかちの実戦知らずの女、となめていたからだ。と確信し。

「 J m l i s r l m i n s e m d
」

この戦場は、私のものだ、それを邪魔するのならば、お仕置きが、必要だ。

「 O v d u i s - w i o u s t m a y L a p s y e r s p
l u s e a e u N i v u s r s
」

だから組み上げる。複雑に、強固に。

けたのだ。当然だろう。

「そんなに、貴方は、使い潰されたいのですか！　そうですか！
でしたら…使い潰して差し上げますわ…！」

「ひい」

低く剣呑な響きで、笑いまで含んだ声に、ベルが小さく悲鳴を上げる。

「総員！！　3列横隊！！」

「……………りよ、了解！！……………」

呆気にとられていた兵達が、慌てて私の左側へと集まり、横隊を形成する。

「カーニス！　貴方は一番端へお行きなさい！」

『りよ、了解』

「では、第一列、わたくしが中心です。横列を崩さず、円を描くように、全力疾走！！　お行きなさい！！」

「……………りよ、了解！！……………」

「2列目！ お行きなさい！！」

「「「「「りよ…了解！」「」「」」

「3列目！！ お行きなさい！！」

「「「「「了解いい！」「」「」」

3本の横列が走り、渦を巻く。まるで私を軸にした馬車の車輪のよう

に
車輪掛り。その最小版を再現する。さらに魔法で追い風を起こし、
加速させる。

使い潰してやる。限度はどれくらいだ？ 精鋭ならば30分は全力
疾走してみせる。

それだけあればあんなく人型>など全て轢き潰せる。

「ベル！ 立てますわね、わたくしの傍を離れてはいけませんわよ
！」

「は、はははは、はいです！」

「では、これより、敵を殲滅します。絶対に止まる事、減速する事
は許しませんわ。<人型>よりも速く駆け続けて見せなさい！！」

平原などで、敵陣を無理矢理食い破って穴を開ける程度にしかならない。

孤立しがちで半分玉砕特攻に近いような強行突破陣形。

だが、敵は馬鹿の代名詞のようなく人型>

この陣形ならば、確実に嵌る。

崩した障壁から、まばらにく人型>が迫り、前を通過した列に釣られ、追い下がる。

『はっ！　そういう事かよ！！』

カーニスは気づいたようだ。この陣形の意味を、効果を。

目の前で目標を最接近した後列へと変え、方向転換中のく人型>の腕を、ぞんざいに咬み、千切り、駆ける。

兵達も続く。2列目を追ったく人型>は、3列目に、3列目を追ったく人型>は1列目に、削られる。

大半を、即死させられていない。だが、それでいい。

車輪のように回ってきた第二、第三波が襲い掛かり、削り取り、い

ずれとどめを刺す。

けれども微調整は必要だ。あまり過剰に敵集団にぶつかると車輪が引っ掛かってしまう。

じり、と左斜め前方へ中心を移動をする。

本来ならそういう調整は中央から矢でも撃って敵を足止めする事をするのだろう。

しかし、今の私は障壁で手一杯だ。

調整は移動で補うしかない。

徐々に、敵が削り下ろされていく。

いける。このまま磨り潰してしまえば…

「見事な用兵だ、メル！！」

声が、響いたと同時に、これから突っ込んでくると思われた敵の集団が巨大な火炎球に吹き飛ばされた。

この、声、そしてこの炎は。

「お姉様！！」

「待たせたな!!」

「…っ!」

振り返れない私の代わりに後ろを見たベルが、ぎよっとした顔で、硬直する。

…何を、見た？ 気になる。

一瞬なら…

振り返ろう、としたその時。

私の頭上を、お姉様が槍で飛び越え、<人型>の群れへと突っ込んだ。

啞然、とする。

まさかこの飛ぶにはどう考えても狭い室内の廊下を<魔槍ヴェルス
パイン>でここまで飛んできた、とでも言っのだからか。

…言っのだから。

常識はずれにも限度がある。

ああ、そうか。納得した。

彼らは私をなめていた、という訳ではなかったのか。

お姉様があだから、この兵達はこうなのだ。

もちろん少しはそっちもあつただろう。でも本当の理由はこっちだ。

そうか、そうか。

納得が行くのは実にいい事だ。うん。

…ついでにお姉様もひき潰してしまえ。邪魔。

<人型>の圧力が下がったので隊列を一気に進める。バリケード側に行った連中も倒さないといけないのだ。

「ちょ、メル、何を!？」

巻き込まれそうになったお姉様が私に問う。やれやれ

「そんな所に立ち止まられると邪魔ですわ。なんならお姉様もカ―ニスのようにお走りになって下さいまし。」

「…なるほど！　そうか！　任せろ！！」

どういう陣形か理解したのか、お姉様も最外周を走り始める。

…心なしか、全体の回転速度が増した。

さらに兵全てが楽しそうな気配を放っている。

…ああ、やっぱりお姉様が原因なのですね。彼らの態度は。

呆れる。心底呆れる。

だがまあ、頼もしい援軍だ。このまま進んで磨り潰そう。

全ての向かってきたく人型を磨り潰しながら、歩を進め、再びバ
リケードに近づく。

と

そこにはフェルブルム卿の背に跨り、年甲斐も無くイチャつく両親
が居た。

「ふふふふふ」

エーリカが笑い、9〜10体の<人型>が一気に縛り上げられ、切り刻まれる。

「よっと」

槍を振るい、<魔法矢>や、<槍持ち>の一撃を弾く。

この槍の穂先は常に対魔法障壁を纏っている、だから、魔法矢を受け止めるのは容易い。

『ふん!』

<十重刃扇・凰>を、俺の槍をかいくぐった<人型>に囲まれないよう移動しつつ、追いつがったものをトラが爪で弾き飛ばす。

そして再びエーリカが縛り、刻む。

俺も槍で貫く。

トラは倒す事を考えず弾き飛ばす。

他愛も無い。

エーリカが居るだけでこの始末。

追ってきた兵達も最早仕事が無い。と言わんばかりの状態だ。

ちらり、と奥を見る。

メルが指揮を取っている、と言う一団が、そこには見える。

先ほど強力な障壁で敵を一旦止めたと思ったら面白い陣形を取り、
<人型>を猛烈な勢いで磨り潰し始めた。

「…見事な用兵だが、何処であんな陣形を学んだのだ？」

そもそも自分にすらあんな陣形を用いた用兵は記憶に無い。

「うふふふ、乙女は秘密が多いもの、ですわ」

エーリカが残った最後の<魔法使い>達を纏めて刻みつつ答える。

正直その直前まで見せていた用兵にも啞然とした。あれだけの<人型>を相手にして、一切の損害を蒙らずに殲滅していた。

さらにそれは途中で陣形を切り替えた今も、だ。

…もしかしたらメリアよりもメルの方が、当主に、総帥に向いて居るのでは無いだろうか？

だが、年功序列というものは有る。

メルは嫁に出さずにいつそ婿養子を取って参謀役でも担わせるべきか？

今まで知らなかった娘の才能について援軍に向かう事も忘れ、思考する。

最も、あの様子では援軍は必要無さそうだが…

『…勢い勇んで飛び出したが、あの様子では手出しはせずともよさそうだな』

トラも同じ感想のようだ。

「そうだな…」

「ええ、流石私達の娘、でしょう？」

「そうだな…」

心底嬉しそうにエーリカが語りかけてるが、気もそぞろだ。

遠めに見えるメルが目が、完全に戦闘狂の類の色を点しているのが分かる。

「そつだな…」

トラの、言うとおり。メルもまた私達の血を引いて居たようだ。

「あら、メリアも来たようですわ」

奥からメリアらしき飛行する人物が見える。

…メリアもメリアで室内を<魔槍ヴェルスパイン>で飛んでくる、などと。

常識はずれだ。

『…どうやら、これでこの<人型>は片付きそつだな』

メリアが一撃し、残った<人型>を吹き飛ばす。

見た所、後残っているのはメル周囲の傷付いてとどめを刺されていないだけの<人型>

あれだけ居たく人型>がついに殲滅されていた。

「…後は、残党狩りだな」

『そうだな』

「ふふ、もう、急ぐ事も無いでしょう？」

「そうだな」

最大の脅威は去った。

後は残党を狩り、メルとメリア達に負傷兵を治療させれば問題は無い。

そして、これで王都はクーデター軍から開放される。

我々の勝利だ。クーデターは終わる。

だが、心の中では勝利の味を噛み締めるよりも、これからの王国の問題を考えるよりも、

この妻と娘達相手に家長の威厳を保つ事の困難さを噛み締めていた。

7・9<それぞれの戦い、玉座の間前の決戦>（後書き）

かなり長くなってしまいましたが、これにて玉座の間防衛戦、決着。次回からは主人公サイドに進みます。

8 - 1 <それぞれの戦い、召喚の塔>

ソフィー達と合流を果たした後も、俺たちは走っていた。

目的地は、<召喚の塔>。

流石にこの人数を庇い続けるのは不可能だと思われたので、避難する所は無いか聞いた所そこへ向かう事になった。

ソフィーの説明によると<召喚の塔>には300年前に施された強力な結界があり、

中に入るためには認証を受けた王家の娘が必要になっている。

故に確実に内部に敵はおらず、入り口以外から侵入される危険も無い。ということらしい。

召喚された日は既に解除しきっていた為、俺は全く気づかなかったのだが。

結界関係はあまり気にしないで良いせいで鈍感なんだよなあ…と自分の欠点を思い浮かべる。

…それは兎も角、一旦そこに避難して、迎撃を行おうと言う事になったのだ。

先頭は俺。その後ろにフィオとバルナム卿とその腕に大事に抱き抱

えられ眠るイリアさん。

その後ろにソフィーとマール。殿はセバスさん。

前衛の俺のやる事は変わらない。先導し向かって来る敵をなぎ倒して進路を確保する。

そして後方の殿の戦いは、まずセバスさんが追いついた<人型>の注意を引き、

そこにソフィーが魔法の槍、<魂縛時槍>を撃ち、停止させる。

最後にマールがその両手に纏った魔法で出来た紐付き刃を投擲し、一撃必殺で貫き砕く。

三位一体。実に見事なチームワークで危なげなく<人型>を倒している。

しかし…

マールのあれ、喰ってるだろう？ <人型>を。

薄々感じていたのだが、倒し方を見て思う。

投げつけた刃は貫いた後爆発四散する訳でもなく、刃を中心に半径5〜60センチがゴリっと削り取られる。

その後残った刃の紐が縮まり、再びマールの手回收される。

そしてすごくほくほくした顔のマール。…絶対喰ってる。

なんとという悪食…いや、元々人も喰うのが魔族だし…普通なのか？
ううむ…複雑な心境だ。

こんな状況なのに悶々としつつ進む。

…道行は順調だった。

そうこうしている間に塔の入り口へたどり着き、殿を交代する。

「門よ、私はソフィーリア⇨シルヴァ⇨シュトルーゼ⇨ベルム。今
代の巫女、扉を開けて下さい」

ソフィーが門に語りかける。

「パターンカクニン、シヨウゴウ、ガッチリツ、キュウジユウ
ナナパーセント。ホンニントカクニン。コウシンシマス」

門が、声を出した。

以前通った時は何も言わなかった。……閉めるときはオーロトツクなのだろうか？

とりあえず女性の声だが抑揚も何も無い。フィオより酷い。強いて言えば機械音声に近い。

「カンリヨウシマシタ。ヨウコソ、スズナシノマツエイ、ソフイーリア。オハイリクダサイ」

ぎいぎいぎいと音を立て、門の奥の扉が開かれ、門の結界が消滅する。

「よし、皆中に入ってくれ。俺は残りを掃討する！」

背後を警戒しつつ、語りかける。だが、

「ユートさんも一度中に入ってくださいませ。結界を閉じてしましますので」

ソフィーがそう言う。

「わかった！」

まあ、かまわないだろう。

踵を返し、フィオ、バルナム卿、イリアさん、セバスさんの後に続き門をくぐる…直前で立ち止まる。

「ソフィー！ 早く入って！」

何故かソフィーが立ち止まって居た。

慌ててソフィーの腕を掴もうとする。と、どんと突き飛ばされ、たたらを踏んでそのまま門を潜り抜けてしまった。

「閉じなさい」

「 ショウニン、カンリョウシマシタ」

機械音声が響き、結界が…閉じた。

「ソフィー！？」

「ソフィーリア様！？ 何を！？」

「いやあ、待ってみるものですねえ。まさか始末するだけで無く鍵まで頂けるとは」

ソフィーが、ソフィーの声で、ソフィーではない言葉を、放つ。

「ソ、ソフィー…?」

「…まさか、レキか!」

「」明察」

そう言つて、何処からとも無くソフィーの真横にマントを羽織つたレキさんが現れる。

馬鹿な、気配を一切感じなかった。何処から?

「不思議そうな顔ですねえ? 良いでしょう。お答えしましょう。全てはこれ。<竜王翼ヘルマー・霞>でしたか。旦那様がお改造なさられた姿隠しの宝具でございます」

「レキ! 貴様宝具の使用制限まで!」

「ええ、はい。いやあ、元々素晴らしい物でしたが、なかなか面白い付加効果をお付けくださりありがとうございます。この宝具に王都に有るであろう残りの宝具もきちんと持つべきお方に返還させて

頂きます。ありがとうございます」

にこやかに笑い、大仰に一礼する。

「ソフィーに何をした!!」

「何を、とはまた。見たら分かるでしょう？ <傀儡子の腕輪>を
ちよいと付けさせて頂いたのですよ」

そう言つてレキが指差すと、ソフィーが自分の右袖をめくり、そこ
に着けられた腕輪を見せる。

魔道具の効果は魔法のそれに近い。

そのせいで、まだ己を害する魔法に抗する為の<強化魔法>を受け
ていないソフィーに効いてしまっていた。

「ほんとうに、もう驚きましたよ。始末し終わつたと思つたら飛び
出して来られましたので。ですのでどうせなら逃げずに隠れて待っ
ていればここに来られるのではないかな? と思ひましてね」

大当たりでしたね。と笑う。それが、その余裕ぶつた態度が癪に障
る。

「その結界に閉じ込められましたらもう最後。このソフィーリア様にしか開錠は出来ませんからね。そのまま餓死なさってくださいませ」

ガン！ と剣の柄で結界を殴る。びくともしない。

「無駄ですよ。300年前にかの勇者によって作られた忌々しい結界です。…我々の技術を持ってしても開錠出来なかったのですから」

ガン！ ガン！ とさらに力を込めて殴る。五月蠅い、何を言っている。

そうこうしている内に、ばさっばさっとかヴィーヴルくが降下してくる。

「ユートさん、もう無理ですよ。諦めてください。ほら、あなたの妖精もこの通りです」

またソフィーが、ソフィーではないソフィーの声で言う、

同時にレキから剣を受け取り、その抜き身の刃こちらに向ける。

そこには、

背中から貫かれ、

胸から刃を生やし、

血に塗れ、

ぐったりとして動かないマールが

モズのはやにえのようになって刺さっていた。

殴っていた腕が止まる。

思考が、停止する。

言葉が、出ない。

「カンの良い妖精です。腕輪を付けようと私がこの<竜王翼ヘルマ
ー・霞>から手を出したとたんに感付きましたね。早急に始末させ
ていただきました」

「そういうことなのです。見ての通りこの妖精も死んじやいました」

声に出し、叫ぶ。けれども帰ってくる答えは沈黙。

「？ ですが残念です。私ももうそろそろ王都へ向かわなければなりません。後始末がごきますので」

「ごめんなさい。ユートさん。私レキさんと行きますね？ 貴方とは、婚約破棄させていただきます。なんて、言ってみちゃいました。あはははははははははは」

涙まで散らしながらソフィーが笑う。ソフィーの声で、ソフィーと違う言葉で。

…その腹話術を、やめろ！ ヤメロ！！

心が染まっていく。真っ黒に。かつての勇者の憎しみの色に。

「では皆さん。お先に失礼致します。良い最期を」

そう言ってレキが踵を返しくヴィーヴル>に跨る。

フザケルナ、ニガス、モノカ。

剣を握る拳をさらに強く握り締め、魔力を込める。

バンツ！ と音を立てく女王嬢の剣>で出来た剣が砕け散る。

コレジャ、ダメダ。

鞆を開き、ずるり、と新しい剣を取り出す。

刃渡り2m強。柄まで加えると2m半以上のバケモノ大剣。

アルモスの鍛冶屋で受け取った、2本の最高品質のく女王嬢の剣>から作られた大剣。

その剣と俺の放つ異様さに背後のフィオたちが気おされ、萎縮する。

そうこうしている間にソフィーも乗り、くヴィーヴル>がゆっくりと浮上し始める。

ニガサ、ナイ

魔力を込める。許さない。見せてやる。俺の、最高の、復讐の刃を。

魔王を仕留めてみせた、一つの世界の人類の、その命すらも犠牲に磨き上げた、技術のハイエンドを。

「……ユートさん……？」

フィオが誰よりも早く立ち直り、心配そうに声をかける。

だが、聞いちゃ居ない。もう、何も聞こえない。

有るのはヤツに対する憎しみと殺意。他は何も要らない。

魔王との戦いの後、只の一度も使われなかったその魔法の為の魔力プールは、とつくに満ちている。

後は、発動言語を放ち、俺の最高最悪の魔法を解き放つただけだ。

息を吸い、口を開く。

「…降臨しろ、<勇者の剣>」

発動言語を受け、溢れ出す膨大な魔力が剣を突き抜け纏わり付き、元の刀身の周りに新たに淡く輝く水晶のような刀身を作り上げ、伸びる。

その剣が伸びきりもしない内に振りかぶり、「目障りな物を全て叩き切れ」と念じながら前方の俺の行く手を塞ぐ結界に叩き付ける。

不完全なく勇者の剣の、たった一太刀の元に、300年塔を守っていた結界が、門ごと、その向こうの建物ごと、

およそ数100mに渡って何の抵抗も無く、切り裂かれ、砕け散った。

8・1<それぞれの戦い、召喚の塔>(後書き)

プロローグからあちこちにごっそりとヒントを撒くだけで、ずっ
つとひた隠しにしてきた主人公最強設定が120話目にしてやっと
一部お目見えを。ここまで本当に長かったです。

9/29 誤字修正しました

8 - 2 <それぞれの戦い、召喚の塔2>

「ああああああああああああああああ!!!!!!」

結界を切り裂き、返す刀に全力を込め、水平になぎ払う。

厚みにしておよそ30センチ。幅は1m。長さにして3km近くにまで巨大化した<勇者の剣>が、

建造物を、<人型>を、着陸していた<ヴィーヴル>を、全てを一切の抵抗無く切り裂く。

さらに上空に浮上するレキの乗った<ヴィーヴル>に視線を向ける。

目視した限り距離は2kmを少し超えた程度。まだ、届く。

「墮ちろおおおおおおおおお!!!!!!」

水平に振り抜いたことで出来たタメをそのまま利用し、縦に振り抜く。

だが、あまりにも距離があった為にかわされ、掠めただけ。

それでも、翼の先端を少し失ったヴィーヴルがヨタ付く。

「うおおおおおおおおあああああああ……！！！！！！」

さらにもう一刀。今度はもう少し捉えられた。翼を一枚、半ばで断たれ、<ヴイーヴル>が墜落する。

その落下位置に向け、走る。

ニガサナイ！ ニガサナイ！ ニガサナイ！！

コロシテヤル！！ コロシテヤル！！ コロシテヤル！！！！

冷静さなんて無い。いらぬ。奴を、奴だけを殺す。それだけあればいい。

そうすればこの剣は答えてくれる。俺の望みを叶えてくれる。

全力で落下点に向かって駆け出した。

レキは見てしまった。

300年、〈召喚の塔〉を、〈神の心臓〉を守り続けた忌々しい結界が、その門ごと長大な刃に切り裂かれ粉碎し、

さらには返す刀で神殿の敷地の地上部分が全て切り払われた瞬間を。

上空から見ていたから分かる。大半の…もしかしたら全ての〈人型〉が今の一太刀で消えた。

「嘘、でしょう。ソフィーリア様、貴女は何を召喚したのですか…」

「彼は勇者。ですが以前の世界を滅ぼしました。」

聞きたい事が多々あったので、問答モードへと移行させて操り人形に成り下がったソフィーが淡々と語る。

「勇者…だって…?」

忌々しいその名に反応する。では何か、奴もあの神殺しのバケモノの類なのか。

「…ちいっ!」

そうこう考えていたら長大な刃が此方をも狙ってきたのでかわす。

何を考えている？ ここには王女も居るのだぞ？

…まさか、暴走している？ あの妖精はそんなに彼にとって大事な
ものだったのか？

「…考えている場合では、ありませんかっ」

2 太刀目、今度は避けきれずさつき削られた翼をさらに半ばにまで
切り込まれてしまった。

片翼を半分失い飛行を続ける事が出来なくなったくヴィーヴル>が
墜落する。

「やれやれですね…全く。このままではソフィーリア様も落ちて柵
になるというのに。何を考えているのやら。」

「恐らくそれは大丈夫です。まだ<魔法骨格>と<対物理皮膜>で
耐えられる高度、と見たのでしよう」

何を言っているのか分からない。だが、こいつには生き残る算段が
あるのか。

「ならば、私も出し惜しみせずに行きましょうかね。」

纏っていたく竜王翼ヘルマー・霞>に魔力を流し確認する。大丈夫。本来の機能は生きている。

ふふ、何を不安になっているのか。私は。

あんな下等生物どもがどう加工しようと我らが神のく聖骸>がどうこうされる筈も無いというのに。

ふふつと自嘲し、息を吸って、一気に魔力を流し込み発動言語を放つ。

「く竜化>」

メキメキメキと音を立て、く竜王翼>の圧縮術式が砕け、本来の大きさを取り戻す。

さらにそのままレキの体へと突き立ち、取り込み、姿を変える。

『ギ…………グ…………ア…アア…アアアアアアア！』

空中で変化が終わる。腕が変化した翼で落下中のソフィーを掴み、くヴィーヴル>は放置し、羽ばたく。

その姿は、蛇のような胴体に左右で対になる翼を12対24枚も持

つた足も腕も無い、ただ飛ぶ事にだけ心血を注いだ竜の姿。

最早その姿を知るものは片手に数えるほどしか存在しない。

かつて王竜と呼ばれた竜の一匹<大空の竜王>

『おっと…なかなか…これは…ハリボテとは言え…飛ぶという事は難しいですね…』

ヨタ付きながらも繰り返し振るわれる剣を避ける。自分の意思で避けられるのは便利だ。

『グイーヴル、彼の足止めを』

空を舞い、逃げるワイバーンを追いかけていた為に生き残った複数
の<グイーヴル>に迎撃を命じる。

『全く。あんなバケモノを召喚していたとは。これは早急に帰還して王に報告する必要があるそうですね…』

そう言って翼を翻し逃げる。

『…速度は上手く出せませんが…仕方ないですか。念のため王都も

諦めて一旦このまま帰還しますかね…』

手土産はある。それにどうせこの王女を抑えれば相手は動けやしないのだから。

そう思つて飛ぶ。くヴィーヴルく妨害を指示し足止めしたため、剣はもう、届きはしない距離になっていた。

落下地点に向かっていたユートは見る。空でレキの体が巨大な竜へと変貌するのを。

「それが、どうしたっ…！」

変身する生き物など飽きるほど見てきた。今更驚きはしない。

走りながら剣を振るう。だが、当らない。距離が有る為に的があまりにも小さ過ぎるのもある。

だがそれよりも、怒りとイラ立ちがただでさえ素人のユートの剣筋をさらにぞんざいなものに変えていた。

くそ、当れ！ 当れ！！

闇雲に振るう、と、突然ドスン、と横合いから何かに衝突れ、吹き飛ばす。

何だ！ 誰だ邪魔をしたのは！！

100m程吹き飛ばされ、地面を転がって停止した所で確認する。

俺を轢いて行ったのはくヴィーヴル>悠々と旋回し、再び舞い降りて来る。

「ふ、ざ、け、る、なあああああああ！！！」

真っ向から縦にく勇者の剣>を振るい、真っ二つにしよう、としたところで再び今度は背後から轢かれ、押し倒されて数10メートル地面を引きずられる。

手に持ったく勇者の剣>を乱暴に背後に回し、切る。切った相手はこれまたくヴィーヴル>。

くヴィーヴル>が邪魔をしている。また、ヤツか。また、妨害しようと言うのか。

「な、め、る、なあああああああ！！！」

一瞬で索敵する。範囲は1km程だが、その範囲内で俺を狙って飛んでいる全ての<ヴィーヴル>を補足。他にも最初の一太刀を生き残った<人型>も居るが、何でも良い。近いものから順に切る。

「墮ちろおおおおおおおおおおお!!!」

袈裟切り、横薙ぎ、切り上げ、唐竹割り、切って切って切って切って切りまくる。

索敵範囲に捉えた敵の全てを、その斬線上にあった神殿の建造物ごと、徹底的に切り倒す。

見る見る内に敵の数が減り、神殿が、原型を失う。

全て完全に叩き落した所でレキが飛び去った方向を見る。

随分と逃げられてしまった。しかし、まだその姿は見える。

歯噛みし、駆ける。逃がして成るものか。

幸いあいつは飛ぶのがそれ程早くは無い。ワイバーン程度のようだ。

ならば、走ってもヤツに振り切られることは無い。

走る事のみ心血を注げば今の魔力量なら7日7晩だって走り続けられる。

飛び疲れた所でも、目的地に着いた所でも、何でも良い。

降りたところを

殺す。

<勇者の剣>を縮め、本来の剣のサイズにする。その刃を肩に担ぎ、ユートは全力で走り始めた。

「何が、起こったのですか……」

ユートによる<勇者の剣>での蹂躪とレキによる<竜化>が行われた直後、

その場で動く事の出来なかったバルナム卿が呆然と、呟いた。

「……分かりませんが、彼は小声で『人類の技術、その究極を見せてやる』と言いました」

「ではあの剣は……」

アーリントン家のセバスチャンも口を挟む。

ここからは推測だが、答えよう。

「……<勇者の剣>と。……きっとあの剣こそが彼の最高の魔法です。……威力は……見ての通りです。……恐らく『何でも切る剣』だと思えます」

召喚の塔の、恐ろしく強固な筈の結界を一切抵抗を感じさせず切り裂き、振りぬいた。

その後建物も抵抗無く切り刻み、目の前に有るのは最早神殿ではなく、完全にバラバラに切り刻まれた瓦礫の山でしかない。

さらにあれだけの長大さになったのに取り回しも問題無さそうだった。

つまりそういう魔法。そして問題は……

「あの剣は何処まで切れるのか。が問題か。」

義父が私の考えを代弁する。

「……およそ1000kmに渡って何もかもを消失させるような魔法をただの「攻撃魔法」と呼び、あの剣を「究極の魔法」と言いました。……想像するだけ無駄だと思います」

「そうか……」

私が予想する範囲でさえ、あの剣はこの世界を壊しかねない。

そしてそんな想像では収まり切れる代物でないのは明白。

危険、過ぎる。

「追いましょう。ここに居ても仕方ありません。幸いく人型は今の一太刀で殆ど駆除されたようです」

「そうですね、ワイバーンが生きていれば良いのですが……」

セバスチャンが提案し義父が母を抱き上げる。私達も攫われたソフィーリア様を救うために動かねばならない。移動しよう。

そう思った時だった。

先ほどユートが翼を切ったくヴィーヴル>が目の前に、どすんと不時着した。

ワイバーンでは恐らく追いつけない。

人が乗るには適さないグイーヴルだが、その速度はワイバーンよりも速い。

きっと、グイーヴルなら追いつける。

「無茶な！　どうするといふのだ！」

「……く傀儡子の腕輪>を作ります。術式回路は記憶しています」

「なるほど、承知しました……！」

そう言って駆け出す。流石はセバスチャン。理解が早くて助かる。

……彼が上手く抑えられるかは分からない。だが、今はく傀儡子の腕輪>を急いで作るほうが先決だ。

愛用の指先まで隠れる長袖の服の袖をまくり、肘から先を露出させる。

もう何の傷跡も無い、美しい肌がさらされる。

ふと、自覚せずにその肌に触れ、なでていた。

……やはり私は傷が癒えた事が嬉しいらしい。

そう、自覚する。

先ほどのまでの〈人型〉との戦闘の折に回収しておいた〈魔晶石〉を取り出し、置く。

そして今まで使っていた防御用の腕輪を外す。

軽く息を整え、〈魔晶石〉に手を、乗せる。

「フィオ、私も押さえるのを手伝ってくる。頼んだぞ」

義父さんがそう言って母さんを私の傍に寝させ、セバスチャンの後を追う。

…猶予は、無い。

指先から魔力を〈魔晶石〉に流し込む。

ほんの数秒で、〈魔晶石〉が輝き、マナが溢れ始める。

〈活性魔晶石〉に変化したのだ。

これは熟練の魔道具技師にしか出来ない芸当。

〈魔晶石〉の癖を読み取り、適量の魔力を適切に流し込むことで鉦

石化したマナを流動させる。

<魔導炉>が完成する前は技師が行わなければ<活性魔晶石>を作り出すことが出来なかった。

そしてこの<活性魔晶石>こそが、燃料にも、回路にもなる全ての魔道具に欠かせない材料。

手を、離す。5本の指先に糸の様に<活性魔晶石>からマナが繋がり、伸びる。

それを、腕輪に乗せて、今度は腕輪の金属の癖を調べつつ回路を上書きし始める。

慣れたものだ。

すらすらと書く。技師によってはこの工程に半日を費やす、慎重さと精密さと正確さを問われる工程なのに。

だが、問題ない。私の腕は精密機械のように正確に記憶にあるその術式回路をなぞり、ものの数分で1組の<傀儡子の腕輪>を完成させた。

……動作確認をしている暇は無い。義父さんとセバスチャンは？

見る、ヴィーヴルは仰向けに転がり、じたばたとしているが、その翼の付け根を2本のハサミが縫い止め、さらにロープが張り巡らさ

れてる。

完全に拘束している。見事な手際。流石はセバスチャン。

よし、後はこの腕輪を…と思った所でパキン。と腕輪が割れる。

さらに崩れ、原型を失う。

「……………」

……………<自壊術式>だ。

ソフィーリア様に着けていたから解除したのかと思っただが、解除はされていなかったのか…

いや、そもそも解除など出来ないものなのかもしれない。

よくよく考えてみれば王都のものまでここから遠隔操作などできる訳が無い。

恐らく、本来発動している筈の自壊術式を広域で阻害する何かしらの魔道具を用意していたのだろう。

それを停止させる事により、一斉に自壊させる事を成功させた…そんな所か。

どうする…

対応策を思考する。

術式を解析し、不要部分を洗い出し書き直している暇はさすがに無い。

では試しに幾つか術式を削って実験するか？

だめだ。失敗する可能性は高く、材料も足りない。

では…壊れない物に＜自壊術式＞こと書き込む？ 例えば、まずは腕輪に自己修復機能をつけて…

だめか。術式が多すぎる。出来たとしてもかなりの大きさの物になるし、出力不足が懸念される。

そして、そんな大きな物を作るための素材は、ここには流石に無い。思考する。

なにか抜け道は、ないか。

壊れない、もの。

モノ。

…

……

……ある、じゃないか。

閃く。私に知りうるモノで、この15年間壊されても壊されても壊されきれなかったモノがある事を。

再び<魔晶石>を置き、<活性魔晶石>に変える。

そして右手に纏わりついたマナの糸を、

私は自分の左腕に押し付け、術式回路を書き込んだ。

「……………あつ……………」

炎で熱した剣で切りつけられた時と同じ痛みを感じる。

痛い。だが、知っている。こんなものは、私には効かない。

己の体を、筋肉を、骨を、神経を、魔法脈を、術式回路が貫き侵して行くのが分かる。だが、いける。このまま書き切れる。

左手にく傀儡子の腕輪>の送信側の術式回路を書き終える。

さあ、どうだ。私の体内には<自動治癒>なるものが根付いて居ると言っていた。<自壊術式>と、どちらが強い？

もしか<自壊術式>が競り勝つならば、術式回路の侵食が体に及ぶ前に即座にこの腕を切り落とせばいい。

だが、私の目算では……

腕に、激痛が走る。自壊が始まっているのだらう。だが……崩れない。予想通り、<自動治癒>は競り勝ったのだ。

「……やった」

成功した。

そのまま今度は左腕で<活性魔晶石>を作り、右腕に受信側の術式回路を書く。

つつがなく、完成する。

後は、あのヴィーヴルに乗るだけだ。

立ち上がり、近づく。

「フィオ、お前……」

「フィオ様…それは…」

手際よくヴィーヴルを抑えた二人が、術式回路を書き込まれ淡く発光する私の腕を見て言葉を失う。

…理由は理解できる。

生身に術式回路を書き込んだ者の末路は、技術者、識者ならば誰もが知っている。

「……私が制御に成功したら、ヴィーヴルに<魔晶石>を与えてください。……この傷なら、3つもあれば再生します」

「ああ」

「……それから、速度を優先するのと騎乗の問題で、私が一人で行きます」

「……ユート様を途中で乗せるのですね？」

「……その通り」

「お願いします。ソフィーリア様を、…ユート様を、お救い下さい」

「……言われるまでも無い事。彼らには、返せない程の借りがある」

「フィオ……」

「……義父さん、母さんをお願いします。必ず、生きて会いましょ
う」

「…分かった」

「……では」

そう言って、仰向けで暴れるヴィーヴルの翼に両腕を当てる。

ピタリ。と暴れていたのが、止まる。

腕に書き込まれた術式は、完全にその効果を発揮した。

「……いけます」

義父がロープを、セバスチャンがハサミを取り払う。

ヴィーヴルが転がり、その背に乗り込む。

セバスチャンが<魔晶石>を取り出し、地面に並べたのをヴィーヴルに指示し、食べさせる。

クーデター前に検証した事の実践だ。元々モンスターの負傷は時間がたてば再生する。

しかし<魔晶石>を食べさせ魔力を一気に補給すれば…

効果は劇的。先ほど開けられたばかりの翼の穴は塞がり、あっという間に翼が元の長さに再生を始める。

「……いきます」

十分に再生した所で義父とセバスチャンに断る。

二人が数歩、離れる。

ヴィーヴルが四肢に力を込める。

「……いつて、きます」

2人と、その後ろに眠る母に向けてそう言つと同時に、

強靱な四肢から解放された力で、ヴィーヴルは一気に上昇を開始した。

「くそっ」

ユートは神殿の北の森を走っていた。

神殿を脱出したレキは、西北西に向かって飛んでいる。

ときおりく勇者の剣>で森を切り裂き、空を確認しながら追っているのだが、やはり、気のせいではない。

徐々にだが、引き離されている。

地形のせいで走り難いのもあるが、相手も徐々に加速している。

このままでは、いずれ振り切られる。

どうする？

立ち止まり、攻撃魔法を用いるか？

いや、攻撃魔法ではソフィーごと消し飛ばしてしまう。

く勇者の剣>は「切りたくない」と思った対象は切らない。やはり、落すならばこの剣だ。

再び森を切り、走る。

また、離された。

何か、手を打つ必要がある。

いっそ、この森をヤツの進む方向へと全て吹き飛ばし、まっ平らな

地面にしてしまうか？

それなら走りやすい。

こんな自然なんて知ったものか。

この先に何かあった所で、かまうもんか。

やっつけてしまえ。

俺の中の勇者が囁く。そうだな、やるか

「……………ユートさん」

そう考えた所で背後から俺を呼ぶ声が届き、思いとどまらせた。

「フィオ…か？」

走りながら声に出す、だが、しまった。＜拡声の首輪＞を着けていない。

此方の声は届かない。

「……ユートさん、聞こえますか？ ……私は、ヴイーヴルに乗っています。……これから貴方の背後に降下します。……タイミングを合わせて、飛び乗ってください」

そんな事は1000も承知なのだろう。一方的に説明を受ける。

それに、ヴイーヴルに乗っている？ だとすれば、

…ヴイーヴルの速さならば、追いつける！

「……いきます。」

カウントが始まる。走りながら、気配を探る。

「……2」

かなり近い。速度も速い。だが…減速している。合わせて来ている。

「1」

まだまだ、あと少し。

「0」

ゼロを聞いた瞬間、ジャンプする。背後は一度も見えていない。だが距離、速度全て完璧の筈だ。

狙いあまつ事無く俺の真下をフィオが乗ったヴィーヴルが潜り、その背に着地する。

「……流石ですね」

「フィオこそ、完璧なタイミングだったよ」

「……ありがとうございます。……では、追います」

「ああ、頼む！」

ヴィーヴルが力強く羽ばたき、一気に加速する。

なるほど。この加減速と羽ばたきでは一般人は乗れはしないだろう。だからずっと無人だったのか。納得がいった。

だがフィオは人よりは頑丈で、俺は言わずもがなだ。ヴィーヴルの性能をフルに発揮しても問題ない。

見る見る内にレキの変化した竜へと追いつがる。

いいぞ、とつとつとヤツを殺してソフィーを救おう。

ヴィーヴルの背に立ち、<勇者の剣>を構え、縮めておいたその刀身を再び開放した。

8 - 4 <それぞれの戦い、追う者たち>

『……………凄まじい執念ですね』

レキが呟く。

足止めを行わせた<ヴィーヴル>を神殿ごと滅茶苦茶に切り伏せ、走って追いつがられた時も啞然としたが、徐々に飛行に慣れ、今度こそ振り切れると思ったのだ。

それが今度は…

背後を確認する。

そこに見えるのは、<ヴィーヴル>に乗ってグングンと接近してくるフィオとユート。

『そこまでして私を殺したいのですかね？ それとも貴女が目当てでしょうか？』

「わかりません。ですが、私は後者で有って欲しい」

操り人形に成り下がったソフィーが答える。

『ふふ…まあ、どちらでもいいですか。ソフィーリア様。迎撃をお

願いますよ。貴女も使えるのでしょうか？ <神殺しの刃>を』

「可能です」

レキがソフィーを包み運んでいた翼を器用に動かし、翼の上にソフィーを乗せる。

『では、お願いします。貴女の祖が使った<神殺しの刃>を見せてあげなさい』

「はい。」

I t s n b e e a b t a n e r M e t t e n c o t
o m p y
i n a g e S s e n t i m e d u c i l l e n t t e l
J d o n o t a u t o l l o r i J a p o s i t m a
i s r l v o w e l y
T h i l d i s c v e n n y a r g n A r c e e k
l l v o s s s i n e d
M n d a e e t t
<時空裂断> 「

詠唱が終わり、魔法が発動した瞬間。ソフィーの前方の空が、ずれた。

「フィオ！ あれが何か分かるか!？」

目の前に無数に見える空のズレを指し、確認する。

「……初めて見ます、けれど……<時空裂断>だと思えます。……か
つて初代女王が王竜を倒すために駆使したと言われる魔法です。…
…ソフィーリア様なら、使える筈です。」

<時空裂断>。名前を聞いただけでどうい魔法が見当が付く。つ
まり、あの空のズレは空間がずれて見えていると言う事か。

そして、またソフィーを操り、利用したという事に怒りがこみ上げ
る。

「……どう、しますか？ ……あれは対魔法障壁でも防御不能の魔
法です」

「突っ切ってくれ。俺が砕く」

「……承知、しました」

手綱も鞍も無い、不安定極まりない<ヴイーヴル>の背に立ち、一番手っ取り早い手段で砕こうと<勇者の剣>を振りかぶる。

この程度の魔法は魔族でも使う。対策が無い訳が無いだろう!!

苛立ち混じりに振るう。進行方向上の邪魔な魔法を切り裂け、と命じながら。

パキパキパキパキと高い音を立て、薄氷を割るかのように空に幾つもの線を作り出していた<時空裂断>が砕け、散る。

砕かれた<時空裂断>が細かな光の破片となって舞い落ちる只中を、そのまま<ヴイーヴル>が最短距離でつきり、レキの斜め下方向から急接近する。

「なめるなああああああああああ!!」

すれ違い様に切り付ける。

…意識したつもりは無かった。

だがレキを狙って振るったその剣は、ソフィーに直撃するのを避ける軌道で走り、鋭さを失っていた。

それでも、片側のソフィーが乗った翼を含む7枚が纏めて切り裂かれ、ソフィーが宙に舞う。

くそ、外した！！ もう、いち、どっ…！！？

振り切った剣を、再び振るおうとする。

けれども不安定な足場にバランスを崩してしまい、返す刀での一太刀を繰り出すタイミングを損なう。

ああ、くそ、あっちは後回しだ。

致命傷では確実に無いだろうが、それなりの手傷を負わせた。

それにくヴィーヴルの方が速い以上ヤツはもう逃げ切れやしない。

…今はそれよりも

「フィオ！ 追ってくれ！！」

何を、とは言わない。

俺の意図を過たず理解し、フィオがヴィーヴルを急旋回させ墜落中

のソフィーを追う。

羽ばたかせ、加速し、一気に追いつき…手を伸ばせば届く距離にまで近づく。

抱きとめる為に、<勇者の剣>を解除する。

と、同時に<女王嬢の剣>で出来た刀身は砂塵となって散った。

刃の維持にこそ成功していたものの、解除してみれば流し込んだ魔力に耐え切れていなかったようだ。

…外周に纏った<勇者の剣>が殻になり、散る事を防いだが為に維持できていただけ、か

役目を終えた剣の柄を手放し、今度こそ手を伸ばし、捕まえ、抱きとめる。

…やった。取り戻した。

安堵が、胸を包む。

「……………ユートさん！腕輪を！」

フィオが叫ぶ。そうだ、＜傀儡子の腕輪＞を取らなければ…

目ざとく確認し、掴み、そのまま握りつぶし、引き千切る。

一瞬ビクンツと痙攣し、後は完全にぐったりとする。気絶、しているのか。

ともあれこれで、ソフィーは自由になった。

後は、レキだ……

フィオと合流し、ソフィーを取り戻し、いつの間にか鈍り薄れてしまっていた意識を再び黒に染め上げる。

剣を失ったが新しい剣を取り出すのも面倒くさい。

人質が居ない今、遠慮はいらない。

吹き飛ばして…いや、まずは氷結呪文で体内から切り刻んでやる。マールの1/100でも苦しみを味わって、死ね。

「 Cahes terrst mipalch Nd……」

詠唱を始める。眼前に人の頭大の水球が作り出される。

この水球が砕け、飛び散り、動物に当たると水滴が口腔等の穴という

「……魔道具が、砕かれました。ヴィーヴルの制御が、できません」
そう言った、フィオの腕が、肘から先が、無い。

だばだばだった袖は吹き飛び、ぼたぼたと、血を流している。

腕輪が、爆発した、のか？

「……腕に直接術式を書いて操っていた事に気づいて、こちらに割り込みで命令をして来ました……抗ったのですが……耐えきれませんでした……」

「止血を……」

しようとした。その瞬間だった。

ヴィーヴルが、下降を止め横回転しながら水平飛行へと以降し、天地が、入れ替わった。

騎乗用の補助具など、一切付いていない。

ソフィーは失神している。

フィオには、腕が無い。

皆、振り放され、落ちる。

「……」
「……」
「……」

フィオの懺悔の音が、空に消え入るように呟かれた。

声はする。だが、姿が見えない。

『誰でも良かるう。っとそれ所ではないか、幸いここに落ちかけの翼が数枚ある。これを拝借するかの』

『何を』

『<竜化>』

唐突に、レキが接続しようとして浮かべていた切り離された翼が7枚とも集まり、一つの塊となる。

そして、塊になった翼が変形を始める。

その姿は、人並みの大きさではあるが、24枚の翼を持った、<大空の竜王>の姿。

『馬鹿な、それは』

『術は見た。現物にも触れた。ならば貴様ごとき下等生物の魔法を模倣するなど容易い。だが、ふむ。見てくれは良くないな。アレンジを加えようかの』

『お前は、お前はなんだ!』

『くだい。人にも劣るトカゲの眷属風情の貴様にそれを知る権利は無い。知りたくば精々自分の主にでも泣き付いてみるのだな。』

<魔人化>』

再び塊となった小さなく大空の竜王>が、今度は人の姿を取る。

腰まであるウェーブのかかった豪快な金髪に、黄金色の眼、褐色の肌に白いラインが引かれ、頭部には2本の濃い真紅の歪曲した角。

髪と同じく金色の毛皮で下半身の大半を覆い、ふさふさの先の膨らんだ尾っぽが揺れる。

12歳程の少女に成長したマールが、現れる。

そしてその腰部には新しく、一对の真紅の翼が生えていた。

『馬鹿な、お前は、あの時確かに殺して』

『あの程度で殺せる、などと思える時点で貴様は下等なのじゃ。見逃してやる。とっとと帰るんじゃないな、貴様の信ずる神…いや、<神に愛されし者>の元にでも、な』

『!?!? お前は、何を知って…!!』

『何でも。じゃが貴様と問答する気は無い。妾の主の女達がピンチじゃからの』

そう言って、翼を羽ばたかせマールが降下を始める。

『なんなのだ、一体。あの女は、何を召喚したのだ…』

起こった出来事、言われた言葉に理解が及ばず、呆然と飛び去る少女の背中を見送る。

『王に、報告しなくては……』

単身であれだけの絶望的戦力差を覆し、神の姿と力まで借りた自分を追い詰め、

かつてその神すら殺めた魔法まで煩わしい、とばかりにぞんざいに砕いて見せた、圧倒的過ぎる力を持った勇者。

バラバラに切り裂いても死なず、あまつさえ我々の秘術をあつさり使いこなし、何もかもを見透かしたように語った、妖精では無かった謎の女。

………得体の知れないバケモノに付き合っているのは、危険だ。

今は、急ぎこの事を王に伝え、判断を仰がねば。

奴らは、これからの計画の障害になりかねない。

そう考え、踵を返し、全力で、逃げるように飛び去った。

堕ちる。

このままでは、皆地面に叩きつけられる。時間はそれ程無い。手を伸ばし、まずは目の前のソフィーを捕まえる。

「フィオ！ 手を、伸ばしてー!!」

少し離れた所で落下するフィオに手を伸ばす。しかし届かない。

「…………無理です」

そう言っつて首を振り、腕をこちらに向ける。

フィオの腕は、いつの間にか二の腕の半ばまで失われていた。

「…………自壊術式が進行しました。術式回路の侵食も既に全身に及ん

でいます。……このまま私は他の＜傀儡子の腕輪＞同様、砕けます。
……もう、助かり、ません」

「そんな……」

＜拡声の首輪＞の効果のせいで、それ程大きくも無い声で酷く淡々と語られるフィオの言葉が一言一句余さず俺に届く。

「……だから、堕ちて死んでも同じ事です。……何か助かる術があるのですしたら、お二人だけで、お使いください」

「だめだ!!」

腕を、伸ばす。

届け、と。必死に。

「……もう、良いのです。……幸いソフィーリア様を取り戻す事は成功しました。きっと、義父も、母も喜びます。バルナムも……二人の新しい子がきつと立派に継いでくれます。……私は、居ないほう……良い」

「……………」

かける言葉が、見つからない。

「……ありがとうございます。私の体を治して下さい。……今なら、分かります。これが、この体の中から湧き出し広がる暖かな感覚が、嬉しい、幸せだな。って感じているという事なのですね。……貴方の、貴方達のおかげで、私は人間には戻れた気がします。……だから、もう十分です」

そう言って、フィオが儂く微笑む。

いつかの凄惨な笑みでなく、柔らかく、切ない、フィオ自身も初めて浮かべる、心からの笑顔。

けれども、そのまま徐々に距離を開けていく。

「……さようなら。私の……」

そこで口ごもり、言葉は続かなかった。

目じりから光るものを散らし、儂い笑顔を隠すように背を向け、フィオが離れて行く。

「畜生……」

これで、いいのか？ どうせ死ぬからと言われて、救わなくても、

良いのか？

「それでも、俺は……」

ソフィーは言ってくれた。

言い訳をしてまで人を救ってきたと。

俺には、救えると。そうだ、

決意を固める。

そうだ、今の俺は。

もうあの時の俺とは違うんだ。

「救いたいものは、救ってみせる……！」

怒りに身を任せ思考を放棄し、作業的に殺戮に明け暮れたあの頃の俺とは違う。

目標を失い、ただ漫然と流されるままに時を過ごした、今日までの俺とも違う。

自分が頼るべき信念は、俺の芯となるものは、最初からあった。

認めてしまえば良いだけだったんだ。

だから声に出して叫ぶ。俺の、これからの新しい行動理由を。

『よくぞ、吼えた！ ソフィー嬢はまかせい！』

「マール!?!」

死んだ、と思つたマールの声が頭に響いた。

「お前… てつきり死んだのかと…!」

『感動の対面は後じゃ、今すぐソフィー嬢を手放せ！ 後は妾がおんしをあやつの所まで送り届けてやるわ!!』

「…………… 分かつた!」

ソフィーを、手放す。と、同時に何か俺の腹に横合いから思いつきりぶつかり、俺を弾き飛ばした。

『行って来い！ 色男!!』

視線をめぐるさせる。

一瞬だけだったが、翼の生えた子供サイズになったマールが、ドロップキックをしました。といったポーズでそこに居たのが見えた。

8 - 6 <治療>

「ファイオー！！」

マールに弾かれたおかげで、一気に距離を詰める事が出来た。もう少しで、届く。

「捕まれ！！ いや、捕まえる！！ 手を、伸ばせ！！」

落ちるファイオに向かって叫ぶ。

「……………どうして、放っておいてくれないの……」

振り向いたファイオのその顔は…笑顔では無く、泣いていた。

「五月蠅い！ 俺は、救いたいものは、救って決めたんだ！！」

「……………」

「手を、伸ばせ！！」

「……………」

おずおずとだが、フィオの手が伸ばされる。もう肩口付近まで無くなってしまった腕が。

だがそれで、十分だった。

こちらに向かう意思が、少しだけ落下する角度と速度を変化させ、俺たちを近づける。

はためく袖の残骸を掴み、引き寄せ、抱き締める。

小柄だが、ふくよかな体がすっぱりと俺の胸に収まる。

「……折角…諦めた、のに。」

フィオが胸の中で小さく丸まり、ぽつりと呟く。

地上までは、もう数100mしかない。

落ち着いて、鞆を開き、もう一本の巨大なく女王螂の剣>製の剣を取り出し、魔力を込める。

タメは一瞬。

「降臨しろ！ <勇者の剣>！」「

フィオも、無事だ。

マールも、ソフィーをぶら下げたままバサバサと翼を羽ばたかせ降りてくる。

剣を、縮める。地面まで後数メートルになった所で解除、飛び降りる。

…今回は剣が崩れなかった。一瞬の発動になら、耐えられるようだ。

そうこうしていると、ぼて。とぞんざいにソフィーが地面に落とされた。

『流石にこの体では重いのじゃ……』

…まあ、そうなのだろう。

哀れな感じに打ち捨てられたソフィーは、意識を取り戻していたように、起き上がろうとしている。

助け起こしてあげたいが、今はそれよりも…

「 <ヒーリング> 」

急いでフィオに治癒魔法を施す。こちらの方が、不味い。

既に崩壊は肩に及んでいる。これ以上進行すると…死ぬ。

傷を塞ぐように急速に魔力を巡らせる…のだが、効かない。止められない…

「……………ソフィー、ごめん、俺だけじゃ無理だ、手伝って！」

よろよると、こちらに向かって歩いて来ていたソフィーに手助けを求めろ。

俺の下手糞な治癒魔法では無理でも…ソフィーなら。

「…わ、わかりました <治癒回生>……………あ、れ？
<治癒回生>！ ど、どうして…？」

ソフィーが治癒魔法を行使する。だが、その手からは治癒魔法独特の光は出ず、全く効果が表れない。

手元も、目線も震えている。

「おちついて、深呼吸して。混乱してるんだと思う。だけど今はそれは忘れて。フィオが危ないんだ。」

ゆっくりと、丁寧に言い聞かせるようにして、言う。

ソフィーの瞳が冷静さを取り戻し、すーはーと深呼吸を行う。

「
< 治癒回生 >」

数回深く呼吸をし、今度こそソフィーの両手から治癒魔法が発動する。

だが、崩壊が止まらない。

「……無理です。私が書いた……だから、分かる。……もう私は助け
りませ」

「黙ってる!!」

ふざけるな、こんな結末は嫌だ。

治癒魔法を行使しつつ叫ぶ。それでも進行を遅れさせる事は、出来
ているのだ。

『……………』

「何か、何か手立ては、無いのか…」

歯噛みする。二人掛りの治癒魔法によって出血は抑えられるのに、パラパラと腕が灰の様になって崩れて行くのが止められない。

「……………フィオさんを、…救う手立ては無いのですか？……………
マール」

ソフィーが震える声でだが、端的にマールに聞いた。

『無くは無いが…の』

「知ってるのか？ いや、知れるんだったか？ なら…」

『ならば、どうするのじゃ？ おんしに問えるのか？』

俺に、問えるのか？

マールに問うという事は、貸しを作るといふ事。

狭間の世界で俺は散々な目に合わされ、それからマールに確認するのは軽い疑問程度だけにして極力問わない事になっていた。

…特に、大事な事は。

そしてここ最近に垣間見た得体の知れない様々な言動。

マールに大きな貸しを、作っていいのか？

逡巡する。だが、それも一瞬。

「教えてくれ！ 何か、何かあるんだろ！？」

俺は問う、フィオの命に比べれば、そんなものは安い。

『…ふふ、ついに問うたか。じゃが問われたならば、答えよう。切れ』

「…切れ？」

『おんしの剣で、人の英知の剣で。そやつの体の術式回路と一体化してしまつた全てを、魔法脈を、全て魔導心臓より切り離し術式を維持出来ぬほど切り刻め』

「そんな、事が？」

『できる。おんし次第じゃ』

出来る、のか？ <勇者の剣>にそんな使い道が？

だが魔法脈を全て切るということは…

『むろん、成功しても全身不随じゃ。…治療は再び<生命強化>から始めるしか無いの』

魔法脈は働きこそ血管に近いものだが、その性質はむしろ神経に近く、かなりの部分が癒着している。

全て切り刻めば…ただでは済まない。

そして俺が制御を過てば、<勇者の剣>は、フィオを消し飛ばす。

でも…

「…やるさ。俺の、責任だ」

俺が救うと決めた。だから、俺の責任で、やる。

ソフィーに治療魔法を任せ、再び剣を持ち出す。

この剣で2度目の<勇者の剣>。発動せず爆散しても、おかしくは無い。

頼む……

「降臨しろ<勇者の剣>」

再び魔力を込められ、剣がく勇者の剣を纏う。できた。応えて、くれた。

後はこの剣で、切る。

『余計な物を切るでないぞ』

マールが俺にプレッシャーをかける。

「大丈夫です。ユートさんならきつと、できます」

ソフィーが俺を励ます。

「行くぞ、フィオ」

「……………信じて、居ます」

返事を聞き、俺は全身を覆える程の厚みの刃に変化させたく勇者の剣をフィオに向けて振りぬいた。

強引な手術は、成功した。

崩壊は止まり、即座に生命維持の為に魔法脈の代わりに、応急で魔法陣を書き込んだ。

血流や呼吸などの必要不可欠な部分を補い一命は取り留めたが、フィオはもう、瞬き一つすることは無い。

<生命強化>は施したが、恐らく最低でも1月はこのまま。その後元のように動けるようになるのに何時までかかるかは、分からない。さらに完全に失われた両腕を治療し終えるのは、もっと先になってしまうだろう。

…俺とソフィーの為に、フィオはこうなった。

治るまでの面倒は、俺たちが見よう。

そう考え、フィオを抱き抱える。

治療を施している間にレキは飛び去ってしまっていた。

<グイーヴル>ももういない。追う事は、不可能だ。

帰ろう、神殿へ。そして、王都へ。

「行こうか、ソフィー、マール」

「ええ、そうですね。」

『……………』

声をかけると、マールが複雑な表情を浮かべ俺の顔を凝視していた。

8 - 7 <ハイ・エンド>

「…？　どうかしたのか？」

何か思い悩むような、複雑な表情を浮かべ俺を見つめるマイルに確認する。

『いや、大きくなったのは良いのじゃが…これではおんしの頭に乗れぬ。せいぜい肩車しか、じゃと思うての…』

…不満はそこなのかよ。

でも結局無理によじ登ってきて、肩車をさせられる。

フィオを横抱きにして抱き抱えてるのに。

『よーし。出発進行じゃー！』

「……………」

まあいいか。じゃ、行くこうか、と声をかけようと振り返り見ると、今度はソフィーが俺を複雑な表情で見ている。

いや、これは俺じゃなくてマールをか？

視線がかみ合わなかったので思い直す。

「ソフィー？」

「！いえ、別に、その……えと、そう、…後で、私にも、おねがいします。」

声をかけると、ビクン！ と過剰に反応し、何か取り繕うようにそう言った。

「…何を？」

「…その、それを。マールが……していることを？」

「……肩車を？」

「……はい」

恥ずかしいのか目を逸らし、消え入るように小声でそう言う。

…最近のお姫様はこの歳になっても肩車をご所望のようです。

そんな馬鹿な。

ああ、いや、まてよ？

ティーナにも出会った当初はそのぐらいの事は平気でやらされてたし、普通なのか？ 姫様基準では。

…そうなのかもしれない。

「まあ、構わないけど、人目につかない所で、ね？」

「……………そうでは、ないのですが」

「え？」

「いえ、何でもありません。そうですね。誰かに見られたくは無いです」

「そつだよね」

「……………はい」

『ふふーん？ まあ、それもいいじゃろ。じゃが、子供に嫉妬とは、感心せぬぞ？』

「……………貴女が子供なものですか」

今度は恨めしそうにマールを睨み告げる。

その意見には同意だ。

「そ、そんな事より行こう？ 王都も心配だし…それにここからじや神殿まで徒歩で1日ぐらいかかりそうだし…」

「そうですね。でも…きっと王都は大丈夫です。皆が何とかしてくれていますよ。それに私達も、ほら。」

ソフィーが指差す。その先にはセバスさんとバルナム卿の乗ったワイバーンが此方に向かってるのが小さくだけ見えていた。

「どうやら帰りは徒歩では無く済みそうだね」

「はい」

やっと和やかに、二人で笑いあう。

今度こそ全ては終わった。レキにこそ逃げられたが、バルナム卿との会談は上手く言ったし、もうこれでクーデターは終わる。

…その時の俺は気づかなかった。

セバスさん達を指差した後に慌てて隠された彼女の指が、小刻みに震えて居たことを。

とりあえず狼煙を上げておいてから、フィオの着けていたく拡声の首輪を着け、効果範囲にセバスさんたちが近づくのを待つ。

念のためマールに索敵を頼んだが、どうやらモンスターの生息していた森は横に向かつて抜けていて、既に普通の森になっていたらしく、危険はなかった。

「なあ、マール。何であの時すぐ返事してくれなかったんだ？ 生きてたなら何か言ってくれても良いじゃないか…ほんとに心配したんだぞ？」

そういえば、と思い出して聞いてみる。

本当に、本当に心配したのだから。

『擬体と言えど妾はおんしと違って痛みを感じる余地があるのじゃぞ？ あそこまで派手に惨殺されれば失神ぐらいしてもおかしくは無かるって…』

「「……………」」

…失神していたのか。そりゃ返事も無い筈だ。

『いやはや、だがまあなんじゃ。おんしもく勇者の剣をもち出す程怒ってくれるとは。冥利に尽きるものよ。』

「……………」

そういわれると、少し恥ずかしい。

完全に我を失って神殿バラバラにしちゃったし。

「……………今『ユートさんは痛みを感じない』と言いませんでしたか？」

ソフィーがマールの言葉に反応する。

『ん？ ああ、その通りじゃ。頬をつねる程度の事ならば通るが、こやつには攻撃をしてもダメージを与えるのがおよそ不可能じゃからな。』

「…それもく強化魔法ですか」

『こやつ専用のモノじゃがな。く勇者の剣くく勇者の心臓くく勇者の鎧くと称する3つのハイエンドがこやつには書き込まれておる。』

「そうなのですか…それは、他の人には？」

「使えないよ。」

主に消費魔力の問題で。

『うむ。こやつは魔力総量の99%以上がこの3つで埋まっておるからの。』

「……ユートさんの、99%？」

『うむ。』

「たまに、攻撃魔法等を使っていましたけど…あれは残った1%未満で使っていたのですか？」

「そうだよ？」

その辺りの説明は大まかだがティーナから受けている。

俺の体は勇者召喚の時生贄になった17人の術者と10体の魔族、そしてティーナの総魔力の9割を取り込む事で、常識では有り得ない量の魔力を宿した。

そしてその為に、初めて理論上だけの存在だったく勇者の剣く勇者の心臓く勇者の鎧くの3つの魔法が人書き込まれたのだ。

ちなみに当初の名称は別の物だったらしい。勇者召喚にちなんで、
そう名前を変換したそうだ。

きつと元の名前の方がカッコよかったんじゃないかなあと思うこと
がある。ちよつとファンタジー過ぎる気がするし。

「……………ユートさんの魔力総量はどれ程あるのですか？」

「さあ、測った事ないからなあ……」

そつこう考えていたらソフィーに聞かれた。

そつえば、分からない。

『教えてやろうかえ？ 聞かなかったほうが良かった。と後悔する
ぞっ。』

「…聞いてみたいです」

『ならば答えよう。ソフィー嬢。おんしの100億倍程じゃ。』

「……………冗談、ではないのですか？」

『大真面目じゃ』

「ですが、どうすれば、そんな……」

『ポイントは<勇者の心臓>じゃ。これが魔族を殺めた時に魔力を食らい、己の器に変換してしまう。』

「……そうだったのか」

…倒せば倒すほど魔力が上がったのは確かで、

<勇者の剣>もどんどん大きくなっていったし経験値を稼いでし
VUP。と言う認識だったのだが…

まさかもつと生々しい事が起こっていたとは。

『…おんしも知らなんだのか…まあ、なんじゃ。ともあれこやつは魔族をほぼ、滅ぼし尽くした。そしてその魔族はその前に人を滅ぼしておつた。魔族は人を食らい魔力を己のものにする。つまり、あの世界の、保有魔力を限界まで増強された人間の、さらにそれを食つた強力な魔族の、全ての魔力はこやつに集まった。あの世界の人
が持つ魔力のほぼ全てがこやつ一人に集結したのじゃ。ちなみに今の妾はこやつ
の0.00001%にも満たぬぞ』

「…なあ、マール。なんか俺自分が怖くなったんだが」

『ほら、の？ 聞かなかつた方が良かったじゃろ？』

「…いえ、知っておいて損は無かったです。それに、他の誰かに聞
かれなかつたのは幸いです」

『くく、4人だけの秘密、じゃな』

「…4人？」

ソフィーと俺とマール。もう一人は…

『フィオ嬢も反応こそ出来ぬがバツチリ聞いておる』

「「……………」」

俺の腕の中に居た。

『くくく、救う、と決めたからにはもう手放す事は出来ぬな？ さらに重大な秘密まで知られてしまった。これは大変じゃ。こやつも困わねばならぬ』

「……………何が、言いたいんだ？」

「…いえ、分かります。彼女も、後宮に入れる。と言っているのですね？」

『その通り』

「……………マール？」

『くくく、後宮の女王はメリアなどには勤まらぬ。妾こそが相応

しい』

「はあ、どうせそんな事だろうと思いましたよ」

「…」

『なんなら、ユートに張り付いていても良いのじゃぞ?』

「いえ、それには及びません。後宮の仕切り、お任せしますよ…ですが、お手柔らかにお願いします。どのような方々が集まるのかわかりませんし」

『承った。なあと妾の目に敵う娘でなければ、早々に退散して貰うまでよ』

ソフィーが溜息をつき、マールがけらけらと笑う。

…なんだか俺よりマールの方がよっぽど国王に向いているような気がする。

やれやれ、と思いき空を仰いだ所で、セバスさんたちの声が届いた。

9 - 1 <新しい一歩を>

窮屈な襟元を弄る。苦しくは無いのだが、どうにも正装や制服と言
う物は昔から苦手だ。

早いもので、あの騒動から1月が経った。

緊張感を解そうと思い、目を閉じて思い出す。

バルナム卿とセバスさん達と共に、ワイバーンで王都にたどり着い
た直後、俺たちは兵に囲まれた。

そしてアーリントン卿に「貴様がメリアの男か!!」と剣を突き付
けられた。

…事前にマールが何故か俺の髪と目を偽装したので、何のためかと
思ったが、このためだったようだ。

そして皆が止める間もなく振るわれた剣を、白羽取りしたまでは良
かった。

「なかなかやるではないか…」と獰猛に笑う貫禄のあり過ぎるオッ
サンに冷や汗を流していると、マールがその剣に食いついた。

『これ、欲しい』と。

そして俺の偽装は解かれ、後は謝罪の嵐。さらにマールが妻子の病の治療をしたと聞いて号泣。感謝の嵐。

しかし『代金はその剣がいい。』と言われて彼の顔は引きつった。

何故ならそれは初代王より賜った国宝級の大事な大事な宝剣。竜の爪をかたどったアーリントン家の紋章の元ともなった家宝なのだ。

だが、マールはにべもなかった。『爪？ 何を言っておるのじゃ？ それは角じゃろ？』と。

アーリントン家の面々は困惑した。爪だと信じたものが角だった、と言われたのだ。しかも相手はマール。

メリアもメルもエーリカさんも、嘘だ。とは言えず、さらには『病を戻すぞー』と脅され、

結局その場では駄目だが、後ほどの譲渡を約束させられていた。

ソフィーが肩を落すアーリントン卿に「何か代わりの物を見繕いますから…」と慰めていたのが印象的だった。

くすりと笑いが漏れる。この時の会話はなんだか楽しかった。

でも、この直後に俺たちは笑えなくなった。

ワイバーンを降り、フィオとイリアさんを預けたバルナム卿が即座に拘束されたからだ。

罪状は「国家反逆罪容疑」巨体の虎獣人、フェルブルム卿に連れられ、彼は連れて行かれた。

ソフィーが、俺が、その場で何を言っても聞き入れてはもらえなかった。

バルナム卿も「これは仕方の無い事なのです」と言っただけで俺たちを止めなかった。

そして即座に五大家会談が行われた。

バルナム卿も「必要がある」と言われ拘束されたまま参加したが、俺は参加できなかった。

「まだ戴冠式前ですし、国政に関わるのはご遠慮ください」との事だった。

…とてもではないが、納得できる物では無かった。

だがその代わりに、俺には毎日の座学が待っていた。

大まかな地理と歴史、そして法律ばかりを、叩き込まれた。特に、歴代王の成した事、治世を仔細に渡って学んだ。

…確かに、これを学ばなければ会談に出ても場を混乱させるだけで意味は無い。

納得し、寝る間も惜しみこれまでの人生で恐らく一番必死に勉強した。

その間にも色々な物事は進んだ。

今回の事件の後押しをし、最後の引き金を引いたレキ。

ヤツの逃げ去った方角に調査隊が向かったが、竜の姿のまばらな目撃情報のみで、結局何一つ有益な情報が得られる事はなかった。

ならばオサにも色々聞こうと思い、招待状を持たせて人を送って貰ったのだが、何かを探しに国外へ旅に出たらしく、こちらもまだ連絡はついていない。

そして、レキの情報を、過去の情報を得ようと使者を派遣した長寿族の集落は、もう何十年も前から人が使っていない様な有様になっていた。

慌ててシルベリア・ローレシアの居留地はどうなっているのか質問状を送った所、どちらも今まで黙っていたが、どうやら数十年以上も前から誰も居なくなっていたようだった。

不気味な雰囲気だった。長寿族を中心に、誰にも知られる事無く確実に何かが起こっていた。

そうこうしている間に、会談は進み、毎日出会うたび、ソフィーはやつれていった。

気丈に振舞ってはいたが、会談が思うとおりには進んでくれないようだった。

そして一週間程経ったある夜。ソフィーが俺の寝室にやってきて、泣いた。

「ごめんなさい。私には救えませんでした。」と

ぼろぼろと涙を流し、嗚咽を漏らすソフィーをなだめ、話を聞いた。

簡潔に述べると、会談の結果バルナム卿の今回の騒動における刑罰が、死刑以外に選べない。という事だった。

ソフィーがひたすら擁護し、彼らを説き伏せようとしたが、出来た事は共に王都へと帰ってきた事実を背景に、かなり強引に国家反逆罪容疑を撤回させた事と、これからの国政の為にバルナム家はまだ必要だ。と多額の賠償金・保証金と引き換えに存続させる事を認めさせたぐらい。

逃げ去った共犯者のレキを教唆犯とする事で、他の数点の罪と共に、何とかそこまではできた。

だがそれを差し引いても彼の罪状は多く、重過ぎた。

俺が最近習ったばかりの事でも、奴隸法、扇動禁止法、軍律、軍法、いくらでもひっかかっていそうだった。

そしてソフィー自身も全ての臣下を欺きく召喚魔術>を決行していた為に、責められ、会談での発言力を損なっていた。

会談は4人の当主達の主導で進み、さらにはバルナム卿自身が

「私を死刑になさってください、それがあの時約束させて頂いた私からの要望です」とソフィーに嘆願した。

どうにも、できなかった。

「私が、彼を殺さなくては、成りません。彼は、彼の思想は間違っていないのよ。」

ソフィーは泣いた。

俺は、どうにかしてあげたい、と思うと同時にいつかセバスさんとお風呂で話したことを思い出していた。

「ソフィーが王家としての教育を修了していない、俺に頼るかもしれない、正しき選択を」そう、言っていた事を。

…最近の勉強のおかげもあって、俺はついにその意味を理解した。

ソフィーは、優しい。でも、優しすぎた。

罪を罪と認め、罰を与えなければ成らない相手でも、共感できるものがあれば彼女は守りたがる。それも、必死になって。

それが、自分の信じる理想だから。

辛い過去がそうさせたのかもしれない。でも、彼女は乗り越えなくてはならない。

感情のままに罪を見逃さず、法に従い、時には感情を殺し、罪を裁く事を。この国の、為政者の義務として。

武器を持ち戦って居なくとも、為政者である限り誰も殺さずには居られない。

ソフィーは、その手を汚さなければならぬ。それが、ソフィーの修了していない事の一つだったのだ。

だから俺は、言葉で彼女を慰める事は出来なかった。

説明して、説き伏せたなら理解はしてくれるだろう。

だけどそれではきつと、心の何処かで納得する事ができない。

こればかりは、自分で気づいて、決めて、乗り越えなくてはならぬ

い。他人に言われてやるのでは、駄目なのだ。

だから俺には彼女を胸に抱いて、「何も言えない…ごめん」と謝りながら、眠りに就くまで優しく頭を撫で続ける事しか出来なかった。

翌朝、ソフィーは会談の詰めに向かい、決断し、認証印を押した。

俺が何も言えなかった訳を察し、理解していた。

ソフィーは、バルナム卿を自らの命令で殺すことを、受け入れた。

…だが、刑の執行の日程はおよそ1年後になった。

バルナム卿自身が刑に対して肯定的で、協力的であった上に、今回の騒動で彼が新しく生み出し用いた魔道具や技術は素晴らしく、それらの凶面や仕様を残し、引継ぎを終えるまでは待つ、という事で皆同意したのだ。

今回の騒動で傍観に徹した為に出遅れた貴族連中も、自らの失態を罪に問われるのを恐れ、誰も何も言おうとしなかったが、いざ自分たちにも利益が得られるとなるとあれこれ様々な問題に目を瞑り満場一致で賛成、同意した。

くす、とまた笑いが漏れる。何が同意だ、と。

会談が終わった後の話だ。

様々な事後処理と1月も王都を空けた事によるたまった政務の山にソフィーが忙殺されている最中、順番に4人の男が俺の勉強を見にやってきた。

アーリントン卿、フェルブルム卿、フォワール卿、キャメル卿。

皆揃って同じ事を俺に教えて帰った。

4代目のく召喚されし者ゝが堅物で、捜査局を作り、取締りを恐ろしく強化した事と、

5代目のく召喚されし者ゝが、戴冠式で「お前はやりすぎなんだよ」と言っただけの事だ。

4代目が捜査局を立ち上げた事ばかりが書かれ、5代目も他の偉業が沢山あった為、ほんの数行で、ぞんざいに纏められていた内容。

たとえ学んでいたとしても、しっかり気にかけて記憶していなければ、思い出すことは無い。

ふふ、っと笑いが漏れる。せめて示し合わせて一人が来れば良いだろう。

彼らは皆同じ考えで会談の場を誘導し、あの決断を下させたのだ。

「ユート様、そろそろ…」

ショートカットの少女が、玉座の間の近くの部屋で待機していた俺の元を訪れる。

彼女の出で立ちは、正装です。と言わんばかりのドレス。だが、飾り気は少ない。パーティーではなく、式典用。

玉座の間はこの一月で<召喚の塔>の結界門共々修理が急ピッチで行われ、結界等は修復されていないものの、既に見た目だけなら事件以前の状態に戻っている。

「もうそんな時間なのか…呼びに来てくれてありがとうルーシア。それじゃ、行こうか」

「はい」

閉じていた目を開き、立ち上がる。

ルーシアがすつと足音も立てず俺の背後に回る。

歩き始める。

玉座の間へと。

今日は事後処理の為に延びに延びた俺の戴冠式。

俺は今日、王になる。

そして5代目のく召喚された者>が作った前例を利用する。

それは、「赦律」と呼ばれる特別な慶事の際のみ行える恩赦法。

4代目のく召喚された者>が小さな罪まで徹底的に取り締まり、捕まえに捕まえた大量の収監者を減らし、救済するために作られた特異な法。

勿論この「赦律」の恩恵に預かれない犯罪者は存在する。

だが、今のバルナム卿は国家反逆罪等の恩赦の適用外の罪に、実に上手い事に一つも問われていない。

つまり、やや重めであるが、普通の罪の範疇で、彼は死刑になった。だからこそ、この「赦律」が抜け道となる。

俺がこの誰もが認める慶事である戴冠式で言い出してしまえば、彼の刑は減刑されざるを得ない。

勿論無罪放免と言う訳ではない。数十年の懲役、労役が課せられるのは避け得ない。

だが、少なくとも死刑では無くなる。

全く。

本当にあの4人の老人は上手い事若い二人を騙し、誘導した物だ。

国政を担ってきたのも伊達ではない。頼もしい限り。

…つまり彼らは分かっているソフィーを追い詰めた。

そして一度決断を下したソフィーは、もう同じ様な事が有っても大丈夫。

一度自らの意思で乗り越えた精神的ハードルは、2回目以降は大した物ではないのだ。

だから、もう、救っても問題ない。

玉座の間に踏み込む。厳かな空気と集まった要人の量に、気圧される。

歩みを止め、見回す。

この一月で、少し痩せてしまったが、幾分か凛々しくなったソフィー

ーが純白のドレスを纏い、満面の笑顔をこちらに向けている。

視線を巡らせる。やや露出の高いタイトなデザインの漆黒のドレスを纏い、角と尾と毛皮を隠し、人に化けたマール。その隣に……フイオ。

少し離れて真紅のドレスを纏ったメリアとエーリカさん達。

バルナム卿の父を再度含めた五大家の当主たち。

主だった貴族連中、諸外国の要人。

皆、俺達を祝福してくれる。

再び歩み始める。

…さあ、行くっ。

…救いたいものが、また、救えるのだから。

9・1<新しい一歩を>(後書き)

これにて3章は完結となります。ここまでお読み下さりありがとうございます。ございました。

次回からは4章「閑話」に…なる予定だったのですが、前々から報告していた通り、仕事が忙しくここ最近全く新しく話を書いておりません…。ですので暫くの間書き溜め休載に入ろうと思います。再開予定日を設ける事はしませんが、なるべく早く再開できるようにしたいと思います。ご容赦ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1603u/>

2つ目の異世界

2011年10月10日00時58分発行